高畑遺跡2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一一五〇集

2012

福岡市教育委員会

たかはたけいせき

高畑遺跡2

－高畑遺跡第20次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1150集

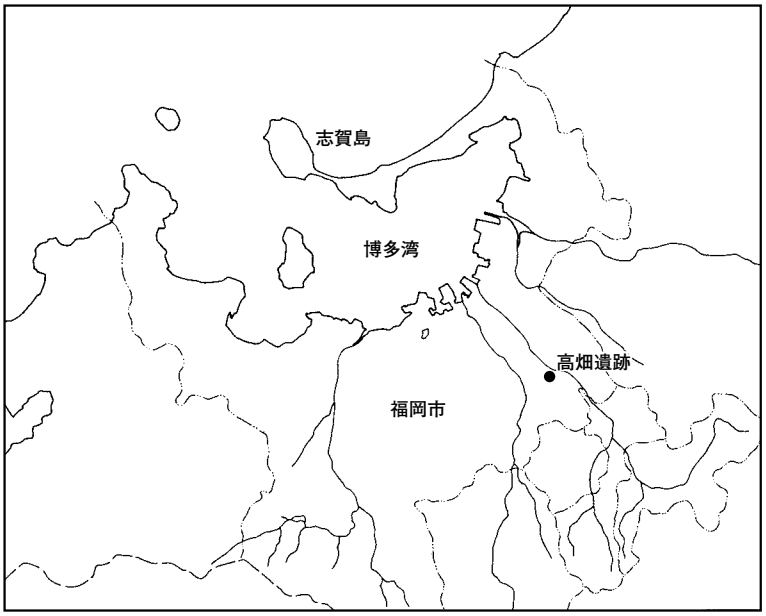
2012

福岡市教育委員会

高畑遺跡 2

－高畑遺跡第２０次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第１１５０集



調査番号　０８３３
遺跡記号　TKB-20

２０１２

福岡市教育委員会

題字は、福岡市博多区在住の書家　濱フミ子氏の揮毫による

（1）4 号井戸断面（西から）

（2）99 号井戸断面（西から）

（1）10 号河川全景（南から）

（2）10 号河川東半部遺物出土状況（南から）

（1）10 号河川西半部遺物出土状況（南から）

（2）10 号河川建築材出土状況（北から）

(1) 9 号井戸全景(北から)

(2) 9 号井戸　井戸枠断面(東から)

(1) 9 号井戸底桶断面(東から)

(2) 9 号井戸　井戸枠・桶(縮尺不同)

（1）100 号道路遺構全景（西から）

（2）100 号道路遺構（北から）

（1）9 号井戸出土鬼瓦（縮尺不同）

（2）軒丸瓦・軒平瓦（縮尺不同）

(1) 丸瓦・平瓦(縮尺不同)

(2) 塼(縮尺不同)

序

いにしえの昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市には、豊かな歴史を語る数多くの遺跡が残されています。なかでも御笠川左岸の台地上に立地する板付遺跡は、我が国で最初に稲作文化を受け入れた地として著名な遺跡であります。これらの歴史的遺産を後世に伝えていくことが現代人の重要な責務であります。

しかしながら、開発によってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査を行っています。

本書は、九州管区警察学校研修寮の建設に先立って実施した、高畑遺跡第20次調査の発掘調査報告書です。高畑遺跡は、日本における稲作文化発祥の地「板付遺跡」の南縁に連なる弥生時代初めから古代の遺跡です。今回報告する高畑遺跡第20次調査では、弥生時代中期から古墳時代を経て古代へと続く遺構群が発見されました。殊に古代の国道である官道と古代寺院跡「高畑廃寺」を示唆する鬼瓦等の検出はきわめて貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、国土交通省九州地方整備局および九州管区警察学校の関係諸氏をはじめ多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会

教育長　酒井　龍彦

---------- れ い げ ん ----------

1．本書は、福岡市教育委員会が福岡市博多区板付６丁目１番１号に所在する九州管区警察学校研修寮の建設に先立って、平成 20（2008）年 8 月 18 日～平成 21（2009）年 8 月 2 日までに緊急発掘調査した高畑遺跡第 20 次調査の発掘調査報告書である。

2．本書に使用した方位はすべて磁北方位である。

3．遺構は、竪穴住居を SC、掘立柱建物を SB、土壙を SK、木棺墓を SR、道路遺構を SF、溝および旧河川を SD、ピットを SP と記号化して呼称し、その後にすべての遺構を 01 から通番して No を付した。

4．本書に掲載した遺構は小林義彦が実測した。また、遺物は小林と谷直子が実測したが、一部は山口譲治（元福岡市埋蔵文化財課長）と今村ひろ子が実測した。挿図は小林、谷と今村が浄書したが、一部は林由紀子と柴田志乃に浄書を依頼した

5．本書に掲載した遺構の写真は小林が撮影したが、遺物写真は文化財写真工房の岡紀久夫氏に、また全景写真撮影と古代官道の図化は埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

6．本書の執筆は、Ⅱ－２－７）とⅡ－３－２)･Ⅱ－４－１)･３)･４）の遺物を谷が、その他は小林が担当した。編集は小林と谷が行った。また、９号井戸や河川から出土した木器の樹種同定とプラントオパール、寄生虫の分析は古環境研究所に委託し、その分析レポートを巻末に掲載した。

7．本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：0833	遺跡略号：TKB － 20	分布地図番号：24 － 0095
調査地籍：福岡市博多区板付６丁目１番１号		
工事面積：3,850㎡	調査対象面積：3,850㎡	調査実施面積：5,067㎡
調査期間：平成 20（2008）年 8 月 18 日～平成 21（2009）年 8 月 2 日		

本　文　目　次

序
Ⅰ．はじめに…… 1
1. 発掘調査にいたるまで …… 1
2. 発掘調査の組織 …… 1
3. 立地と歴史的環境 …… 4
4. これまでの調査 …… 7
Ⅱ．調査の記録…… 10
1. 調査の概要 …… 10
2. 弥生時代の調査 …… 12
1）竪穴住居 …… 12
2）掘立柱建物 …… 17
3）井　戸 …… 20
4）貯蔵穴 …… 23
5）木棺墓 …… 23
6）土　壙 …… 24
7）井堰状杭列・河川 …… 24
3. 古墳時代の調査 …… 48
1）土　壙 …… 48
2）河　川 …… 50
4. 古代の調査 …… 123
1）井　戸 …… 124
2）道路遺構 …… 167
3）溝遺構 …… 167
4）土　壙 …… 183
5. 中近世の調査 …… 185
1）溝遺構 …… 185
Ⅲ．おわりに…… 189

挿　図　目　次

Fig. 1　周辺遺跡分布図(1/25,000) …… 2
Fig. 2　高畑遺跡周辺旧地形図(1/25,000) …… 3
Fig. 3　高畑遺跡調査区位置図(1/5,000) …… 5
Fig. 4　高畑遺跡第 20 次調査区周辺旧地形図(1/4,000) …… 6
Fig. 5　高畑遺跡第 20 次調査区周辺現況図(1/2,000) …… 8
Fig. 6　高畑遺跡第 20 次調査区位置図(1/1,000) …… 9
Fig. 7　遺構配置図(1/300) …… 折込

Fig. 8　弥生時代の遺構配置図(1/500) …… 11
Fig. 9　2 号住居実測図(1/40) …… 13
Fig. 10　2 号住居出土遺物実測図(1/4) …… 14
Fig. 11　5 号住居実測図(1/40) …… 15
Fig. 12　6 号住居実測図(1/40) …… 16
Fig. 13　5・6 号住居出土遺物実測図(1/4・1/8) …… 17
Fig. 14　126 ～ 129 号建物実測図(1/80) …… 18
Fig. 15　130 ～ 132 号建物実測図(1/80) …… 19
Fig. 16　4 号井戸実測図(1/30) …… 20
Fig. 17　4 号井戸出土遺物実測図(1/4) …… 21
Fig. 18　99 号井戸実測図(1/30) …… 22
Fig. 19　99 号井戸出土遺物実測図(1/3・1/4) …… 22
Fig. 20　135 号貯蔵穴実測図(1/30) …… 23
Fig. 21　8 号木棺墓実測図(1/30) …… 23
Fig. 22　8 号木棺墓出土遺物実測図(1/1) …… 23
Fig. 23　86 号土壙実測図(1/30) …… 24
Fig. 24　138 号井堰状杭列実測図(1/60) …… 24・25
Fig. 25　137 号河川出土遺物実測図 1 (1/4・1/8) …… 26
Fig. 26　137 号河川出土遺物実測図 2 (1/2・1/3・1/4) …… 27
Fig. 27　137 号河川出土遺物実測図 3 (1/3・1/6) …… 28
Fig. 28　137 号河川出土遺物実測図 4 (1/4) …… 35
Fig. 29　137 号河川出土遺物実測図 5 (1/4・1/8) …… 36
Fig. 30　137 号河川出土遺物実測図 6 (1/4) …… 37
Fig. 31　137 号河川出土遺物実測図 7 (1/4) …… 38
Fig. 32　137 号河川出土遺物実測図 8 (1/8) …… 39
Fig. 33　古墳時代の遺構配置図(1/500) …… 48
Fig. 34　12 号土壙実測図(1/30) …… 49
Fig. 35　12 号土壙出土遺物実測図(1/4) …… 49
Fig. 36　85 号土壙実測図(1/30) …… 49
Fig. 37　85 号土壙出土遺物実測図(1/4) …… 49
Fig. 38　10 号河川遺物(土器)出土状況図 1(1/150) …… 折込
Fig. 39　10 号河川遺物(木製品)出土状況図 2(1/150) …… 折込
Fig. 40　10 号河川出土遺物実測図 1 (1/4) …… 51
Fig. 41　10 号河川出土遺物実測図 2 (1/4) …… 52
Fig. 42　10 号河川出土遺物実測図 3 (1/4) …… 53
Fig. 43　10 号河川出土遺物実測図 4 (1/4) …… 54
Fig. 44　10 号河川出土遺物実測図 5 (1/4) …… 55
Fig. 45　10 号河川出土遺物実測図 6 (1/4) …… 56
Fig. 46　10 号河川出土遺物実測図 7 (1/4) …… 57
Fig. 47　10 号河川出土遺物実測図 8 (1/4) …… 58
Fig. 48　10 号河川出土遺物実測図 9 (1/4) …… 59

Fig. 49　10 号河川出土遺物実測図 10 (1/4) …… 60
Fig. 50　10 号河川出土遺物実測図 11 (1/4) …… 61
Fig. 51　10 号河川出土遺物実測図 12 (1/4) …… 62
Fig. 52　10 号河川出土遺物実測図 13 (1/4) …… 63
Fig. 53　10 号河川出土遺物実測図 14 (1/4) …… 64
Fig. 54　10 号河川出土遺物実測図 15 (1/4) …… 65
Fig. 55　10 号河川出土遺物実測図 16 (1/4) …… 66
Fig. 56　10 号河川出土遺物実測図 17 (1/3) …… 67
Fig. 57　10 号河川出土遺物実測図 18 (1/4) …… 67
Fig. 58　10 号河川出土遺物実測図 19 (1/2) …… 68
Fig. 59　10 号河川出土遺物実測図 20 (1/4) …… 95
Fig. 60　10 号河川出土遺物実測図 21 (1/4) …… 96
Fig. 61　10 号河川出土遺物実測図 22 (1/4) …… 97
Fig. 62　10 号河川出土遺物実測図 23 (1/4・1/8) …… 98
Fig. 63　10 号河川出土遺物実測図 24 (1/4) …… 99
Fig. 64　10 号河川出土遺物実測図 25 (1/4) …… 100
Fig. 65　10 号河川出土遺物実測図 26 (1/4) …… 101
Fig. 66　10 号河川出土遺物実測図 27 (1/4) …… 102
Fig. 67　10 号河川出土遺物実測図 28 (1/2・1/4) …… 103
Fig. 68　10 号河川出土遺物実測図 29 (1/16) …… 104
Fig. 69　10 号河川出土遺物実測図 30 (1/8) …… 105
Fig. 70　10 号河川出土遺物実測図 31 (1/8) …… 106
Fig. 71　10 号河川出土遺物実測図 32 (1/8) …… 107
Fig. 72　10 号河川出土遺物実測図 33 (1/1・1/2・1/3) …… 122
Fig. 73　古代の遺構配置図(1/500) …… 123
Fig. 74　9 号井戸実測図(1/30) …… 折込
Fig. 75　9 号井戸出土遺物実測図 1 (1/10) …… 125
Fig. 76　9 号井戸出土遺物実測図 2 (1/10) …… 126
Fig. 77　9 号井戸出土遺物実測図 3 (1/10) …… 127
Fig. 78　9 号井戸出土遺物実測図 4 (1/10) …… 128
Fig. 79　9 号井戸出土遺物実測図 5 (1/4) …… 129
Fig. 80　9 号井戸出土遺物実測図 6 (1/4) …… 130
Fig. 81　9 号井戸出土遺物実測図 7 (1/4) …… 131
Fig. 82　9 号井戸出土遺物実測図 8 (1/4) …… 132
Fig. 83　9 号井戸出土遺物実測図 9 (1/4) …… 133
Fig. 84　9 号井戸出土遺物実測図 10 (1/4) …… 134
Fig. 85　9 号井戸出土遺物実測図 11 (1/4) …… 135
Fig. 86　9 号井戸出土遺物実測図 12 (1/4) …… 136
Fig. 87　9 号井戸出土遺物実測図 13 (1/4) …… 137
Fig. 88　9 号井戸出土遺物実測図 14 (1/4) …… 138
Fig. 89　9 号井戸出土遺物実測図 15 (1/4) …… 139

Fig. 90　9 号井戸出土遺物実測図 16（1/4）…… 140
Fig. 91　9 号井戸出土遺物実測図 17（1/4）…… 141
Fig. 92　9 号井戸出土遺物実測図 18（1/4）…… 142
Fig. 93　9 号井戸出土遺物実測図 19（1/4）…… 143
Fig. 94　9 号井戸出土遺物実測図 20（1/4）…… 144
Fig. 95　9 号井戸出土遺物実測図 21（1/4）…… 145
Fig. 96　9 号井戸出土遺物実測図 22（1/4）…… 146
Fig. 97　9 号井戸出土遺物実測図 23（1/4）…… 147
Fig. 98　9 号井戸出土遺物実測図 24（1/4）…… 148
Fig. 99　9 号井戸出土遺物実測図 25（1/4）…… 149
Fig.100　9 号井戸出土遺物実測図 26（1/4）…… 150
Fig.101　9 号井戸出土遺物実測図 27（1/4）…… 151
Fig.102　9 号井戸出土遺物実測図 28（1/4）…… 152
Fig.103　9 号井戸出土遺物実測図 29（1/4）…… 153
Fig.104　9 号井戸出土遺物実測図 30（1/4）…… 154
Fig.105　9 号井戸出土遺物実測図 31（1/1・1/3）…… 155
Fig.106　9 号井戸出土遺物実測図 32（1/2・1/4）…… 155
Fig.107　133・134 号井戸実測図（1/30）…… 166
Fig.108　133・134 号井戸出土遺物実測図（1/4）…… 166
Fig.109　100 号道路遺構実測図（1/200）…… 折込
Fig.110　100 号道路遺構土層断面実測図（1/50）…… 折込
Fig.111　100 号道路遺構出土遺物実測図（1/4）…… 167
Fig.112　1・3 号溝実測図（1/40・1/150）…… 168
Fig.113　1 号溝出土遺物実測図（1/1・1/3・1/4）…… 169
Fig.114　136 号溝遺物出土状況実測図（1/150）…… 171
Fig.115　136 号溝出土遺物実測図 1（1/4）…… 172
Fig.116　136 号溝出土遺物実測図 2（1/4）…… 173
Fig.117　136 号溝出土遺物実測図 3（1/2・1/4）…… 174
Fig.118　136 号溝出土遺物実測図 4（1/4）…… 175
Fig.119　136 号溝出土遺物実測図 5（1/4）…… 176
Fig.120　136 号溝出土遺物実測図 6（1/2・1/3）…… 178
Fig.121　103・104・112 ～ 114 号土壙実測図（1/30）…… 184
Fig.122　105・112・114 号土壙・116 号ピット出土遺物実測図（1/4）…… 185
Fig.123　101・102 号溝断面図（1/100）…… 186
Fig.124　101 号溝出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 187
Fig.125　102 号溝出土遺物実測図（1/4・1/8）…… 188
Fig.126　高畑遺跡主要遺構推定図（1/4,000）…… 190
Fig.127　水城東門・西門ルート復原推定図（1/50,000）…… 197

図　版　目　次

巻頭PL. 1 (1) 4号井戸断面（西から） (2) 99号井戸断面（西から）
巻頭PL. 2 (1) 10号河川全景（南から） (2) 10号河川東半部遺物出土状況（南から）
巻頭PL. 3 (1) 10号河川西半部遺物出土状況（南から） (2) 10号河川建築材出土状況（北から）
巻頭PL. 4 (1) 9号井戸全景（北から） (2) 9号井戸 井戸枠断面（東から）
巻頭PL. 5 (1) 9号井戸底桶断面（東から） (2) 9号井戸 井戸枠・桶（縮尺不同）
巻頭PL. 6 (1) 100号道路遺構全景（西から） (2) 100号道路遺構（北から）
巻頭PL. 7 (1) 9号井戸出土鬼瓦（縮尺不同） (2) 軒丸瓦・軒平瓦（縮尺不同）
巻頭PL. 8 (1) 丸瓦・平瓦（縮尺不同） (2) 塼（縮尺不同）
PL. 1 調査区全景（西から）
PL. 2 (1) 調査区東南部全景（西から） (2) 2号住居全景（西から）
PL. 3 (1) 2号住居全景（東から） (2) 2号住居遺物出土状況（南から）
PL. 4 (1) 5・6号住居全景（北東から） (2) 5号住居全景（北東から）
PL. 5 (1) 6号住居全景（北から） (2) 6号住居遺物出土状況（東から）
PL. 6 (1) 126～132号掘立柱建物（西から） (2) 126～132号掘立柱建物（南から）
PL. 7 (1) 4号井戸全景（西から） (2) 4号井戸上層遺物出土状況（西から）
PL. 8 (1) 4号井戸下層遺物出土状況（東から） (2) 4号井戸全景（西から）
PL. 9 (1) 99号井戸全景（南から） (2) 99号井戸断面（南から）
PL. 10 (1) 135号貯蔵穴全景（東から） (2) 8号木棺墓全景（南から）
PL. 11 (1) 138号杭列全景（北から） (2) 138号杭列（東から）
PL. 12 (1) 138号杭列東側（北から） (2) 138号杭列断面（東から）
PL. 13 (1) 138号杭列タモ網出土状況（西から） (2) 138号杭列鉄斧柄出土状況（北から）
PL. 14 (1) 138号杭列エブリ出土状況（北から） (2) 137号河川Ⅲ・Ⅳ区全景（南から）
PL. 15 (1) 12号土壙全景（東から） (2) 10号河川全景（南から）
PL. 16 (1) 10号河川Ⅰ区全景（東から） (2) 10号河川Ⅱ区全景（西から）
PL. 17 (1) 10号河川船形模造品出土状況（西から） (2) 10号河川紡織具出土状況（南西から）
PL. 18 (1) 10号河川Ⅰ区遺物出土状況（南から） (2) 10号河川Ⅰ区遺物出土状況（東から）
PL. 19 (1) 10号河川Ⅰ区遺物出土状況（東から） (2) 10号河川建築材出土状況（東から）
PL. 20 (1) 10号河川鍬・砧出土状況（西から） (2) 10号河川Ⅰ区大足出土状況（北から）
PL. 21 (1) 10号河川自在カギ出土状況（南から） (2) 10号河川Ⅱ区編錘出土状況（北から）
PL. 22 (1) 10号河川容器出土状況（西から） (2) 10号河川Ⅱ区鍬出土状況（東から）
PL. 23 (1) 9号井戸上面遺物出土状況（南から） (2) 9号井戸上面鬼瓦出土状況（西から）
PL. 24 (1) 9号井戸全景（東から） (2) 9号井戸枠検出状況（西から）
PL. 25 (1) 9号井戸神功開寶出土状況（南から） (2) 9号井戸東側井戸枠裏込板検出状況（東から）
PL. 26 (1) 9号井戸東側井戸枠裏込板（東から） (2) 9号井戸井戸枠検出状況（東から）

PL. 27 ⑴ 9 号井戸井戸底桶検出状況（南から） ⑵ 9 号井戸井戸枠断面（東から）
PL. 28 ⑴ 9 号井戸井戸底桶検出状況（東から） ⑵ 9 号井戸井戸底桶（東から）
PL. 29 ⑴ 9 号井戸遺物出土状況（東から） ⑵ 9 号井戸底桶内遺物出土状況（北から）
PL. 30 ⑴ 133・134 号井戸（南から） ⑵ 133 号井戸遺物出土状況（南から）
PL. 31 ⑴ 100 号道路遺構南半部（南から） ⑵ 100 号道路遺構南端部（南から）
PL. 32 ⑴ 100 号道路遺構北半部（南から） ⑵ 100 号道路遺構北端部（北から）
PL. 33 ⑴ 1 号溝（西から） ⑵ 1 号溝南半部（南から）
PL. 34 ⑴ 136 号溝南半部（南から） ⑵ 136 号溝中央部遺物出土状況（南から）
PL. 35 ⑴ 136 号溝北半部遺物出土状況（南から） ⑵ 136 号溝鬼瓦出土状況（西から）
PL. 36 ⑴ 101・102 号溝（南から） ⑵ 101 号溝遺物出土状況（南から）
PL. 37 出土遺物 1（縮尺不同）
PL. 38 出土遺物 2（縮尺不同）
PL. 39 出土遺物 3（縮尺不同）
PL. 40 出土遺物 4（縮尺不同）
PL. 41 出土遺物 5（縮尺不同）
PL. 42 出土遺物 6（縮尺不同）
PL. 43 出土遺物 7（縮尺不同）
PL. 44 出土遺物 8（縮尺不同）
PL. 45 出土遺物 9（縮尺不同）
PL. 46 出土遺物 10（縮尺不同）
PL. 47 出土遺物 11（縮尺不同）
PL. 48 出土遺物 12（縮尺不同）
PL. 49 出土遺物 13（縮尺不同）
PL. 50 出土遺物 14（縮尺不同）
PL. 51 出土遺物 15（縮尺不同）
PL. 52 出土遺物 16（縮尺不同）
PL. 53 出土遺物 17（縮尺不同）
PL. 54 出土遺物 18（縮尺不同）
PL. 55 出土遺物 19（縮尺不同）
PL. 56 9 号井戸 井戸枠 1（縮尺不同）
PL. 57 9 号井戸 井戸枠 2（縮尺不同）
PL. 58 9 号井戸出土遺物（縮尺不同）
PL. 59 136 号溝出土遺物（縮尺不同）
PL. 60 1・136 号溝出土遺物（縮尺不同）
PL. 61 ⑴ 9 号井戸 井戸枠・桶（縮尺不同） ⑵ 鬼瓦（縮尺不同）

表　目　次

Tab. 1　高畑遺跡調査一覧表 …… 10
Tab. 2　出土遺物(土器)一覧表 1 …… 29
Tab. 3　出土遺物(土器)一覧表 2 …… 30
Tab. 4　出土遺物(土器)一覧表 3 …… 31
Tab. 5　出土遺物(土器)一覧表 4 …… 32
Tab. 6　出土遺物(土器)一覧表 5 …… 33
Tab. 7　出土遺物(土器)一覧表 6 …… 34
Tab. 8　出土遺物(木製品)一覧表 7 …… 40
Tab. 9　出土遺物(木製品)一覧表 8 …… 41
Tab. 10　出土遺物(木製品)一覧表 9 …… 42
Tab. 11　出土遺物(木製品)一覧表 10 …… 43
Tab. 12　出土遺物(木製品)一覧表 11 …… 44
Tab. 13　出土遺物(木製品)一覧表 12 …… 45
Tab. 14　出土遺物(木製品)一覧表 13 …… 46
Tab. 15　出土遺物(木製品)一覧表 14 …… 47
Tab. 16　出土遺物(土器)一覧表 15 …… 69
Tab. 17　出土遺物(土器)一覧表 16 …… 70
Tab. 18　出土遺物(土器)一覧表 17 …… 71
Tab. 19　出土遺物(土器)一覧表 18 …… 72
Tab. 20　出土遺物(土器)一覧表 19 …… 73
Tab. 21　出土遺物(土器)一覧表 20 …… 74
Tab. 22　出土遺物(土器)一覧表 21 …… 75
Tab. 23　出土遺物(土器)一覧表 22 …… 76
Tab. 24　出土遺物(土器)一覧表 23 …… 77
Tab. 25　出土遺物(土器)一覧表 24 …… 78
Tab. 26　出土遺物(土器)一覧表 25 …… 79
Tab. 27　出土遺物(土器)一覧表 26 …… 80
Tab. 28　出土遺物(土器)一覧表 27 …… 81
Tab. 29　出土遺物(土器)一覧表 28 …… 82
Tab. 30　出土遺物(土器)一覧表 29 …… 83
Tab. 31　出土遺物(土器)一覧表 30 …… 84
Tab. 32　出土遺物(土器)一覧表 31 …… 85
Tab. 33　出土遺物(土器)一覧表 32 …… 86
Tab. 34　出土遺物(土器)一覧表 33 …… 87
Tab. 35　出土遺物(土器)一覧表 34 …… 88
Tab. 36　出土遺物(土器)一覧表 35 …… 89

Tab. 37　出土遺物(土器)一覧表 36 …… 90
Tab. 38　出土遺物(土器)一覧表 37 …… 91
Tab. 39　出土遺物(土器)一覧表 38 …… 92
Tab. 40　出土遺物(土器)一覧表 39 …… 93
Tab. 41　出土遺物(土器)一覧表 40 …… 94
Tab. 42　出土遺物(木製品)一覧表 41 …… 108
Tab. 43　出土遺物(木製品)一覧表 42 …… 109
Tab. 44　出土遺物(木製品)一覧表 43 …… 110
Tab. 45　出土遺物(木製品)一覧表 44 …… 111
Tab. 46　出土遺物(木製品)一覧表 45 …… 112
Tab. 47　出土遺物(木製品)一覧表 46 …… 113
Tab. 48　出土遺物(木製品)一覧表 47 …… 114
Tab. 49　出土遺物(木製品)一覧表 48 …… 115
Tab. 50　出土遺物(木製品)一覧表 49 …… 116
Tab. 51　出土遺物(木製品)一覧表 50 …… 117
Tab. 52　出土遺物(木製品)一覧表 51 …… 118
Tab. 53　出土遺物(木製品)一覧表 52 …… 119
Tab. 54　出土遺物(木製品)一覧表 53 …… 120
Tab. 55　出土遺物(木製品)一覧表 54 …… 121
Tab. 56　出土遺物(木製品)一覧表 55 …… 156
Tab. 57　出土遺物(木製品)一覧表 56 …… 157
Tab. 58　出土遺物(木製品)一覧表 57 …… 158
Tab. 59　出土遺物(木製品)一覧表 58 …… 159
Tab. 60　出土遺物(木製品)一覧表 59 …… 160
Tab. 61　出土遺物(木製品)一覧表 60 …… 161
Tab. 62　出土遺物一覧表 61 …… 162
Tab. 63　出土遺物一覧表 62 …… 163
Tab. 64　出土遺物一覧表 63 …… 164
Tab. 65　出土遺物一覧表 64 …… 165
Tab. 66　出土遺物(土器)一覧表 65 …… 170
Tab. 67　出土遺物(土器)一覧表 66 …… 179
Tab. 68　出土遺物(土器)一覧表 67 …… 180
Tab. 69　出土遺物(土器)一覧表 68 …… 181
Tab. 70　出土遺物(土器)一覧表 69 …… 182
Tab. 71　古代官道(道路状遺構)一覧表 70 …… 198
Tab. 72　古代官道(道路状遺構)一覧表 71 …… 199
Tab. 73　古代官道(道路状遺構)一覧表 72 …… 200

Ⅰ．はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

高畑遺跡は、福岡市南東部の御笠川中流域の左岸に連なる洪積丘陵上にあり、丘陵の東には御笠川分流の那珂古川が、西には諸岡川が北流している。昭和初期の地形図によれば、丘陵は東西が300m、南北が500m、標高が15m余の小高い丘陵で、10～15m幅の切通が丘陵を二分するように南北に延び、水田として可耕されていた。昭和15（1940）年頃、この丘陵は軍需工場建設によって大きく開削されて丘陵は失われてしまった。しかし、敗戦後まもなく九州管区警察学校がこの地に建設されて今に至っている。逆説的に云えば、九州管区警察学校によって遺跡は開発から守られたと云える。

開校から50年を経た九州管区警察学校では、施設の老朽化に伴って研修寮の建て替えが旧自動車教習場跡地に計画された。高畑丘陵の北東部に位置する建設用地は、周辺部の調査データから律令時代の官道や丘陵縁には弥生時代から古墳時代の集落域が拡がっていると予測されたために平成11（1999）年より数回にわたって試掘調査が実施された。試掘調査では、推定される明確な官道は検出されなかったが、丘陵の東縁部には弥生時代から古代の遺構が存在することが明らかになった。この結果を受けて申請地全域を発掘調査して記録保存を図ることとなった。

発掘調査は、平成20（2008）年8月18日にパワーショベルを導入して表土層を除去することから始め、竪穴住居や掘立柱建物、井戸、木棺墓のほか大溝や旧河道などを検出して平成21（2009）年8月2日に無事終了した。猛暑の中で始まり、厳寒の冬を越して猛暑の中で終わる一年間にわたる長い発掘調査であった。建設工事の着手が迫る平成21(2009)年7月には二度も記録的な豪雨に見舞われた。なかでも7月24日の豪雨は、1時間に110mmを超す観測史上記録的なもので、間近な福岡空港が冠水し、九州自動車道の法面が崩壊する被害をもたらした。発掘調査区も難を逃れられず、貴重な遺物や遺構は泥土に埋没した。このような困難を乗り越えて調査を終えることが出来たのは、発掘調査に従事された人々と関係者諸氏の御協力と御指導のお陰である。改めて深く感謝いたします。

2. 発掘調査の組織

調査委託	国土交通省九州地方整備局	
	九州管区警察学校	
調査主体	福岡市教育委員会	
調査総括	文化財部埋蔵文化財第1・2課	
	埋蔵文化財第1課長	濱石哲也　山口譲治
	埋蔵文化財第2課長	田中寿夫
	埋蔵文化財第2課調査係長	米倉秀紀
調査庶務	文化財管理課	古賀とも子　井上幸江　垣替美香
調査担当	埋蔵文化財第2課	小林義彦
技能員	谷直子（田尻直子）	境聡子

発掘調査や報告書の作成にあたっては、大塚初重（明治大学名誉教授）小田富士雄（福岡大学名誉教授）山田昌久（首都大学東京）氏をはじめ、山崎純男（元文化財部長）、山口譲治（元埋蔵文化財第1課長）、長家伸、榎本義嗣、常松幹雄、池崎譲二（福岡市埋蔵文化財センター所長）氏など文化財部の先輩方から貴重な指導と助言を頂いた。また、国土交通省九州地方整備局および九州管区警察学校の関係者諸氏には多大のご協力とご配慮をいただいた。改めて深く感謝申し上げます。

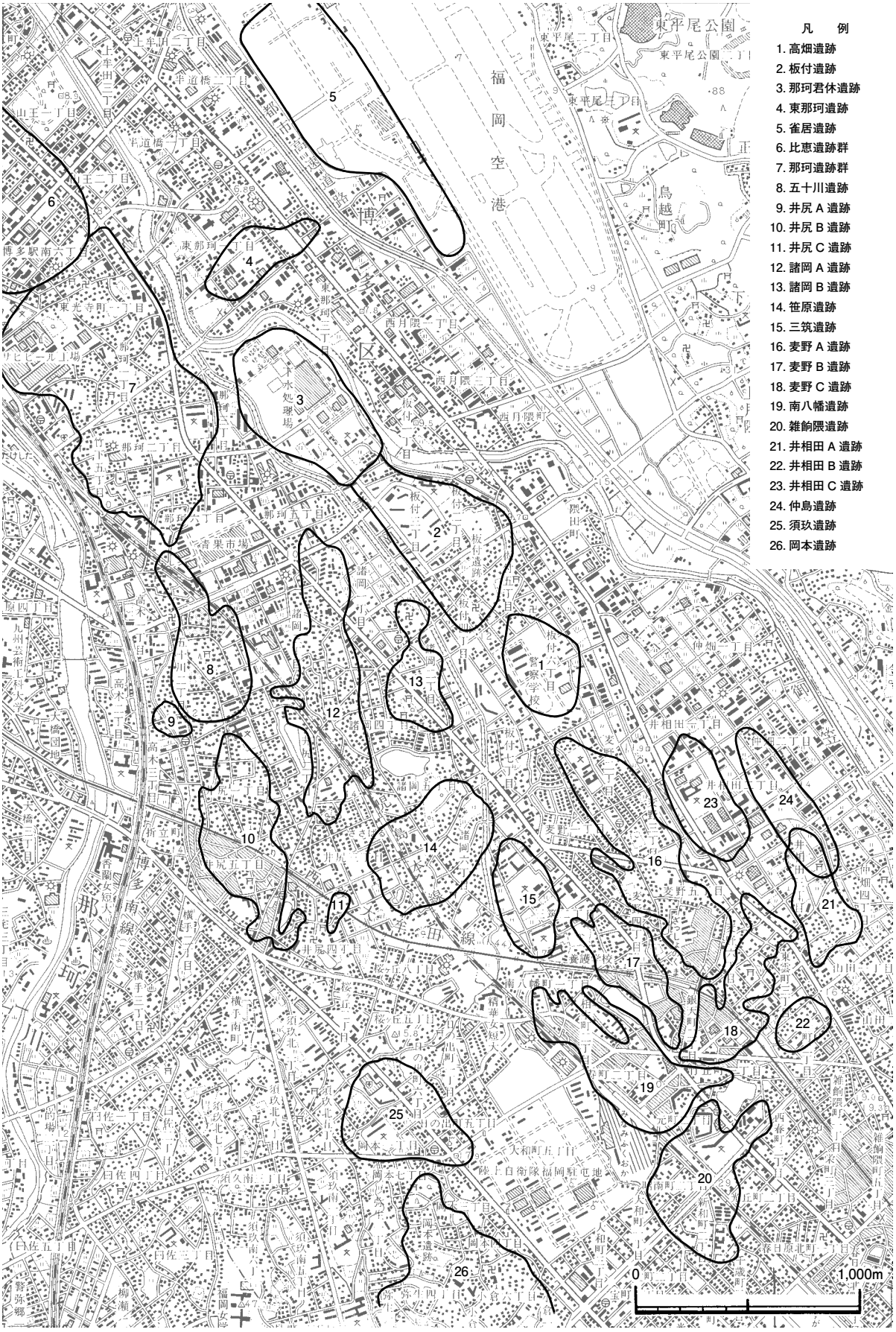


Fig.1　周辺遺跡分布図(1/25,000)

Fig.2　高畑遺跡周辺旧地形図(1/25,000)

3. 立地と歴史的環境 （Fig. 1 ～ 3）

博多湾にむかって開口する福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれた沖積平野である。この福岡平野には、東縁の月隈丘陵に沿って流れる御笠川と西縁の油山丘陵に沿って北流する那珂川の二大河川が博多湾に注ぎ込み、流域には肥沃な沖積地を形成している。この両川に挟まれた沖積地には、観音山から派生した洪積台地が須玖岡本や雑餉隈を経て開析谷を形成しながら断続的に長くのびている。春日丘陵と総称されるこの洪積台地は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層には阿蘇山の火砕流による八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積している。

高畑遺跡は、福岡平野の東を北流する御笠川の中流域左岸に拡がる洪積台地上に立地する。この洪積台地は、河川の開析によって幾つにも寸断され、低平な沖積地の中に点々と飛び石状に拡がっている。これらの開析された丘陵上には弥生時代から古墳時代、古代の集落域や墳墓域が連綿と営まれている。高畑遺跡もそのうちのひとつで、沖積地の鞍部を挟んで北には、最初に稲作耕作が始まった国史跡の板付遺跡があり、南には麦野遺跡や雑餉隈遺跡が拡がる麦野丘陵が対峙している。

高畑遺跡の周辺に目を転じると、弥生時代の集落域としては、すぐ北には二重環壕の周囲に水田域を形成した板付遺跡があり、板付田端遺跡の甕棺墓には細形銅剣や銅矛が副葬されていた。また、後期の竪穴住居跡からは小銅鐸が出土している。この板付遺跡の北西には比恵から那珂・井尻・須玖岡本へと洪積台地が断続的に続き、その台地上にも集落域と墳墓域が濃密に拡がっている。那珂遺跡では、縄文時代晩期の二重環壕集落や弥生時代の環濠集落・甕棺墓群があり、比恵遺跡の甕棺墓には絹布の巻かれた細形銅剣が副葬されていた。同時に奴国王墓域とされる須玖岡本遺跡を取り巻く須玖永田遺跡や須玖五反田遺跡を中心にして比恵や那珂・井尻遺跡からは銅剣や銅戈・方製鏡の鋳型が出土しており、青銅器生産拠点的集落域が広く展開していたと考えられる。また、諸岡川を挟んだ独立丘陵上にある諸岡 B 遺跡からはゴホウラ貝輪を装着した甕棺墓のほか朝鮮式無文土器や旧石器時代のナイフ型石器が出土している。一方、御笠川を隔てて北へ 5km の距離にある雀居遺跡では、大型建物群が検出されている。雀居遺跡の東にあって福岡平野と糟屋平野を画す月隈から金隈丘陵の裾野には国史跡の金隈遺跡をはじめ上月隈遺跡や宝満尾遺跡などに甕棺墓や土壙墓からなる墳墓群が拡がっており、中広形銅剣や内行花文鏡などが副葬されていた。

古墳時代も同様で、比恵から那珂・井尻・須玖岡本と続く台地上には一層濃密に集落域が拡がり、その中に那珂八幡古墳や東光寺剣塚古墳・日拝塚古墳・下白水大塚古墳などの前方後円墳が築かれる。那珂八幡古墳は、福岡平野最古の前方後円墳で第 2 主体部からは三角縁神獣鏡が、日拝塚古墳からは金製耳飾りなどが出土している。後期の前方後円墳である東光寺剣塚古墳には阿蘇凝灰岩製の石屋形が安置されている。これらの前方後円墳群は、福岡平野の首長墓の系譜を構成するものである。また、比恵遺跡では、古墳時代後期の柵列に囲暁された大型の建物群が発見されている。日本書記の宣化天皇元年（536）条に記された「那津官家」の地と推定されている。

一方、高畑遺跡の南西部にある井相田 C 遺跡や仲島遺跡は、弥生時代から古代・中世の集落遺跡群であり、王莽銭の貨布や後漢鏡片・青銅製鋤先・銅矛鋳型・滑石製模造品・人面墨書土器・新羅土器・石権などが出土している。更に、井相田 C 遺跡の西に対峙し、高畑遺跡南の開析谷を挟んで連なる麦野丘陵上の麦野遺跡や雑餉隈遺跡・南八幡遺跡では弥生時代に増して集落域が拡がっている。雑餉隈遺跡では 7 世紀末から 8 世紀初めの官衛的施設と考えられる方形に配された大型建物群が報告されている。また、御笠川を隔てた月隈丘陵の裾野でもこの期の掘立柱建物群が拡がっている。

このように高畑遺跡のある御笠川と那珂川に挟まれた丘陵地帯は、福岡平野でも有数の遺跡密集地であると同時に水城東門から博多へ延びた官道が通る重要な地域である。

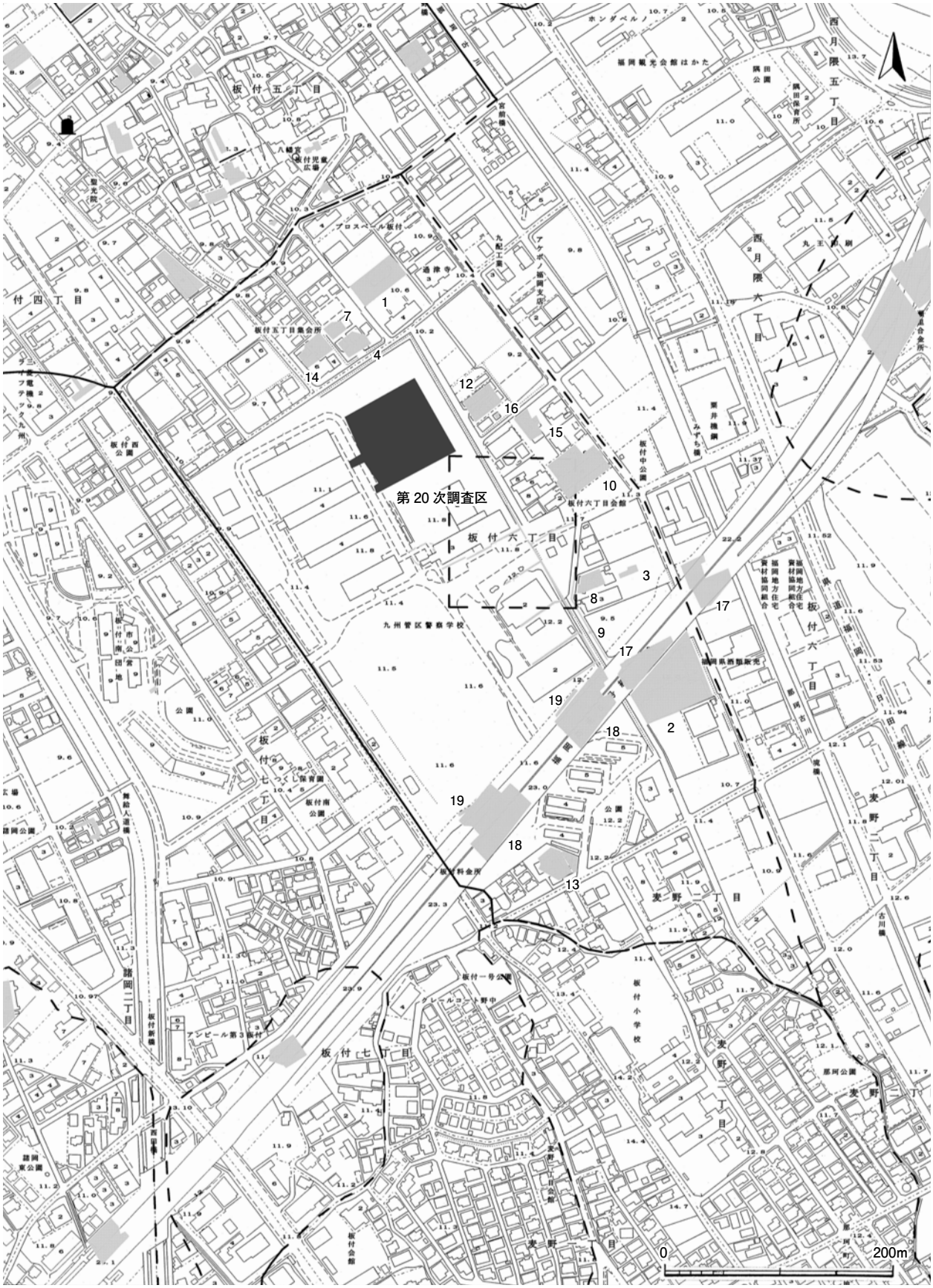


Fig.3　高畑遺跡調査区位置図(1/5,000)

Fig.4　高畑遺跡第 20 次調査区周辺旧地形図(1/4,000)

4. これまでの調査

高畑遺跡の発掘調査は、これまでに19次にわたって実施されており、本調査で20次目を数える。高畑遺跡の調査は古く、昭和48（1973）年の板付周辺遺跡緊急調査に始まる。これは昭和49（1974）年の板付遺跡の国史跡指定を受けて、板付台地とその周辺における板付遺跡の全容把握を目的として行われ、開発に際して継続的に調査が進められた。この調査にあたっては、福岡市地図「板付」を100mの方眼に区切って東から西へA・B・C‥‥、北から南へ1・2・3‥‥とし、調査地点をこの方眼の組合せ番号で呼称した。これに従って云えば高畑遺跡第1次調査区は、板付D－9・10地点になる。昭和59（1984）年の第10次調査まではこの地点名で呼称されたが、九州管区警察学校内の下水道工事に伴う調査で初めて「高畑遺跡」として周知の遺跡に登録された。これによって板付周辺遺跡の10地点の調査区に第1次から10次調査の呼称が付与され、旧地点名と併用されることとなった。

本調査区（第20次調査）は、旧地形からすると高畑丘陵の最高所に位置している。遺構は、この丘陵頂を中心として丘陵上とその縁辺部の沖積地に拡がっており、調査区の立地に因って検出される遺構の性格も大きく異なっている。本調査区の北、丘陵の北縁では第1・4・7・14次調査区がある。このうち第4・7次調査区では、古墳時代の大溝から古式土師器や木製品が大量に出土した。また、古代の溝が第14次調査区まで延びている。

次に、丘陵東側の縁辺部には、第2・3・8・9・10・12・15・16・17次調査区があり、調査区が集中している。北側には、丘陵の裾野に沿う第10・12・15・16次調査区では南東から北西方向にむかって古墳時代の大溝が延びており、大量の古式土師器や木製品が出土している。この大溝は、北縁の第4・7次調査区の大溝に繋がる溝である。この大溝から出土する大量の木製品の中には漆を塗った鍬の柄や小型模造船など儀器と考えられるものも出土している。また、南側の第2・8・9・10・17次調査区では、古代の大溝が検出されている。この大溝は、第2次調査区から丘陵の縁辺を北流し、第10次調査区で東へ大きく流れを変えている。この古代の大溝からは、瓦や塼、墨書土器、人面土器、木簡、人形、斎串などが出土している。

さらに、丘陵の南縁部には第13次調査区があり、弥生時代後期から古墳時代前期の井戸や土壙が検出されている。土壙からは碧玉製管玉のほかガラス小玉や滑石製臼玉が出土している。また、丘陵の西縁部では第5・6次調査区があるが、八女粘土層まで削平されて遺構は検出されていない。それ故か調査番号は付与されず、発掘調査報告書にはなんら記されておらず、正確な位置は不明である。

一方、丘陵上には、第11・18次調査区がある。第11次調査区は、警察学校内の下水道工事に際して実施された調査で、調査区幅が1m、総延長が550mのおよぶトレンチ調査で、丘陵の縁辺部からは弥生時代初めから古墳時代の竪穴住居や貯蔵穴、井戸などが検出された。また、丘陵上を初めて面的に調査した第18次調査区では、竪穴住居や掘立柱建物、井戸、土壙、溝など弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落域が検出されている。このうち古墳時代中期の竪穴住居は滑石製臼玉の製作工房跡で、滑石製臼玉やその未成品、原石が大量に出土している。また、調査区の東端で切通しを伴う道路状遺構いわゆる「官道」が検出されている。

このように高畑遺跡は、丘陵の北から東縁部に偏って調査されている。検出された集落域や大溝などの遺構や瓦塼、墨書土器、木製品などの出土遺物に加えて昭和初期の丘陵開削時に礎石らしき大石群が動かされたとする古談から方1町余の古代寺院跡「高畑廃寺」とする説がある。その反面、舟形や鳥形、斎串、陽物形木製品などの祭祀遺物や人面墨書土器などが出土していることから郡衙的施設跡とする説があるが、現状では特定し得る確定的な根拠は見出されていない。

Fig.5　高畑遺跡第 20 次調査区周辺現状図(1/2,000)

Fig.6　高畑遺跡第 20 次調査区位置図(1/1,000)

Ⅱ．調査の記録

1　調査の概要（Fig. 4 ～ 6　ph. 1）

高畑遺跡第 20 次調査は、九州管区警察学校研修寮の建設に先立って平成 20（2008）年 8 月 18 日から平成 21（2009）年 8 月 2 日に実施した。昭和初期の旧地形図を参照すると、高畑丘陵の中央部には標高が 15m ほどの高まりがあり、そのやや東よりに一筋の切通が南北に延びている。この切通は、10m ほどの幅で東端には水路が流れ、その西側の狭地は水田として使われていた。本調査区は、高畑丘陵の北東部、切通東側の緩斜面上に位置するが、昭和 15 年頃に大きく開削されて旧状はまったく留めていない。

本調査区は、高畑丘陵のほとんどを占める九州管区警察学校敷地内にある。警察学校では、老朽化した研修寮の建て替えが旧自動車教習場跡地に計画された。ここは高畑丘陵を貫通する切通北東部の緩斜面上に位置することから律令時代の官道や丘陵縁には弥生時代から古墳時代の集落域が拡がっていると予測された。平成 11（1999）年より数回にわたって試掘調査を実施した。試掘調査では、推定される明確な官道は検出されなかったが、丘陵の東縁部には弥生時代から古代の遺構が存在することが明らかになった。この結果を受けて申請地全域を発掘調査して記録保存を図ることとなった。

発掘調査は、平成 20（2008）年 8 月 18 日にパワーショベルを導入して表土層を除去することから始まった。研修棟は、南北に東西棟を 2 棟、その西に接して南北棟 1 棟を建設する配置で、平成 21（2009）年 4 月には南側の東西棟の建設に着手する計画案が示された。この案では、平成 21（2009）年 3 月末までには南半部の調査を終えて、埋め戻しを完了しておくことが必須であった。そのための遺構の検出で生じた排土は、調査区の北部に仮置きして南半部の調査終了を待って埋め戻し、北半部の表土

Tab.1　高畑遺跡調査一覧表

次数	調査番号	地点	所在地	調査期間	調査面積（㎡）	報告書	時代	概要	備考
1	7312	板 D-9･10	板付 5 丁目 9-6	197310･･ ～ 197310･･	48.0	29	弥生	旧河川氾濫原	弥生土器
2	7313	板 A･B-13	板付 6 丁目 11-2	197305･･ ～ 197309･･	72.0	29		遺構ナシ	弥生土器、土師器、須恵器、瓦
3	7509	板 B12a	板付 6 丁目 10-3	19750422 ～ 19750508	400.0	36	弥生～古代	土壙、杭列	弥生土器、土師器、須恵器、瓦
4	7933	板 D10a	板付 5 丁目 8-3	19790816 ～ 19791011	370.0	57	5c、8c～9c	土壙、杭列	
5								遺構ナシ	
6	0080							遺構ナシ	
7	8138	板 D10b	板付 5 丁目 8-10	19810914 ～ 19811015	180.0	83	5c、8c～9c	溝	土師器、須恵器、木製品
8	8220	板 B12b	板付 6 丁目 10-6	19820416 ～ 19820602	330.0	98	8c～9c、中世	土壙、井戸、水田	土師器、須恵器、木製品、木簡、瓦
9	8221	板 B12c	板付 6 丁目	19820604 ～ 19820723	94.0	98	8c～9c	土壙、溝、杭列	土師器、須恵器、木製品、瓦
10	8436	板 B11a	板付 6 丁目	19840505 ～ 19840714	1,560.0	115	5c、8c～9c、13c～14c	溝、土壙	土師器、須恵器、木製品
11	8441		板付 6 丁目 1-1	19841210 ～ 19850125	550.0	115	弥生、5c、奈良	竪穴住居、貯蔵穴、井戸	弥生土器
12	8649		板付 6 丁目 2-9、10	19861117 ～ 19870208	600.0	154・210	弥生後期～古墳初頭	溝	弥生土器、土師器、須恵器、木製品
13	8702		板付 6 丁目 1-37、56	19870428 ～ 19870605	480.0		弥生後期、古墳	井戸、土壙	土師器、須恵器、玉類、瓦
14	9368		板付 5 丁目 8-4	19940314 ～ 19940331	566.0	458	8c～9c	溝、旧河川	弥生土器、瓦
15	9753		板付 6 丁目 9-13・10	19971118 ～ 19980110	254.5	2112	弥生後期、古墳前～中期	溝、旧河川	弥生土器、瓦
16	9774		板付 6 丁目 2-23	19980309 ～ 19980331	70.0	934	4c後半	溝	弥生土器、土師器、木製品
17	9833		板付 6 丁目地内	19980901 ～ 19990326	2,063.0	676	縄文、弥生、8c前半～10c、11c後半	溝、土壙、水田、旧河川	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石器、木製品
18	9936		板付 6 丁目地内	19990901 ～ 2000229	4,750.0	699	弥生前～後期、古墳前～後期、8c～9c、11c後半～12c前半	竪穴住居、貯蔵穴、掘立柱建物、井戸、土壙、溝、古代官道	弥生土器、土師器、須恵器、陶質土器、瓦、塼、玉類
19	0261		板付 6 丁目 1-48 他	20030121 ～ 20030228	204.0	799	弥生末、5c、中世	竪穴住居、井戸、土壙、溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石器
20	0833		板付 6 丁目 1-1	20080818 ～ 20090802	5,067.0	**本報告書**	弥生中期、5c、8c～9c、中～近世	竪穴住居、掘立柱建物、井戸、貯蔵穴、土壙、溝、古代官道、旧河川	弥生土器、土師器、須恵器、陶質土器、瓦、塼、玉類、石製品、木製品、皇朝十二銭

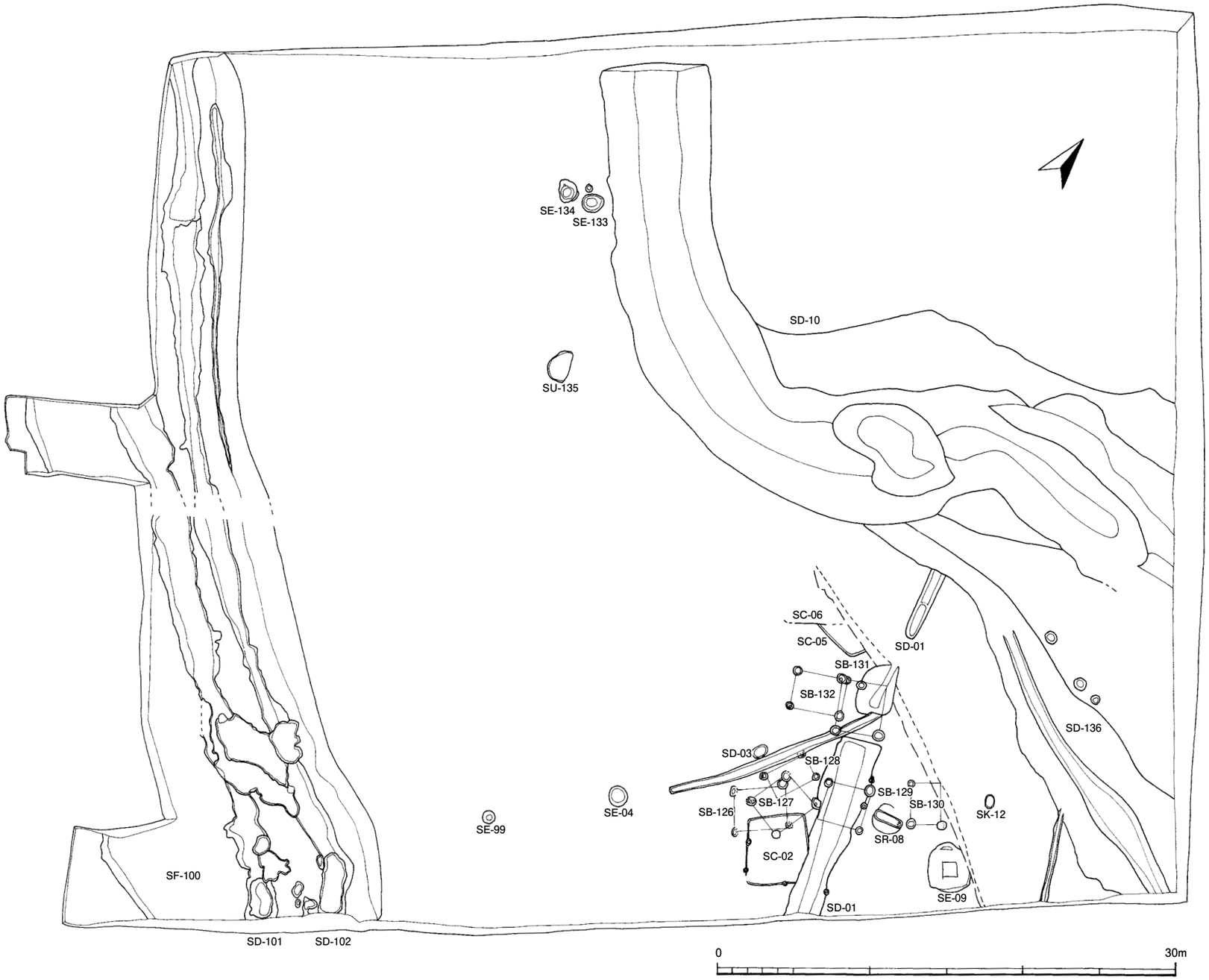


Fig.7　遺構配置図(1/300)

層を除去しておくことが必要であった。ところが、年度末に至って建設方針が変更され、調査終了後に一括して建設に着手する案が示され、これに要した時間と労力がまったく無に帰した。

発掘調査は、調査区を便宜的に4区分し、南東部をⅠ区、南西部をⅡ区、北東部をⅢ区、そして北西部をⅣ区とし、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区の順で発掘調査した。

発掘調査では、弥生時代中期から古墳時代、古代の遺構を中心に近世までの遺構を検出した。主な遺構は、弥生時代中期の竪穴住居、掘立柱建物、井戸、貯蔵穴、木棺墓のほか古墳時代の河川（大溝）や古代の井戸、官道などを検出した。このうち、古墳時代の河川からは大量の土師器や木製品が、また古代の井戸や官道からは瓦塼が出土し、その検出や実測、取り上げに多大の時間と労力を要した。加えてこの年の梅雨は雨が多く、7月には二度の豪雨で多大の被害を被った。殊に、調査終了を一週間後に控えた7月24日は観測史上記録的な豪雨で、1時間に110mmを超す雨が降り、調査区はアッと云う間に冠水し、雨水は調査事務所にまで溢れ出して床上浸水の危機に瀕した。遺構内に残された遺物は流失を免れたものの泥土に埋没し、その排水と復旧に3日余りを要した。そのために古墳時代の河川の北端部の10m余りは、遺物の出土地点とレヴェルの測定しか出来ず、甚だ不本意な結末になってしまったが、8月2日に発掘調査は無事終了した。これは1年と云う長きにわたって猛暑や厳寒にも関わらず発掘調査に従事された人々の協力と労苦のお陰である。殊に豪雨後の作業は、泥土に塗れたものであり、加えて時間的余裕がない中で日没まで発掘作業にあたって頂いた。改めてその労苦に深く感謝いたします。

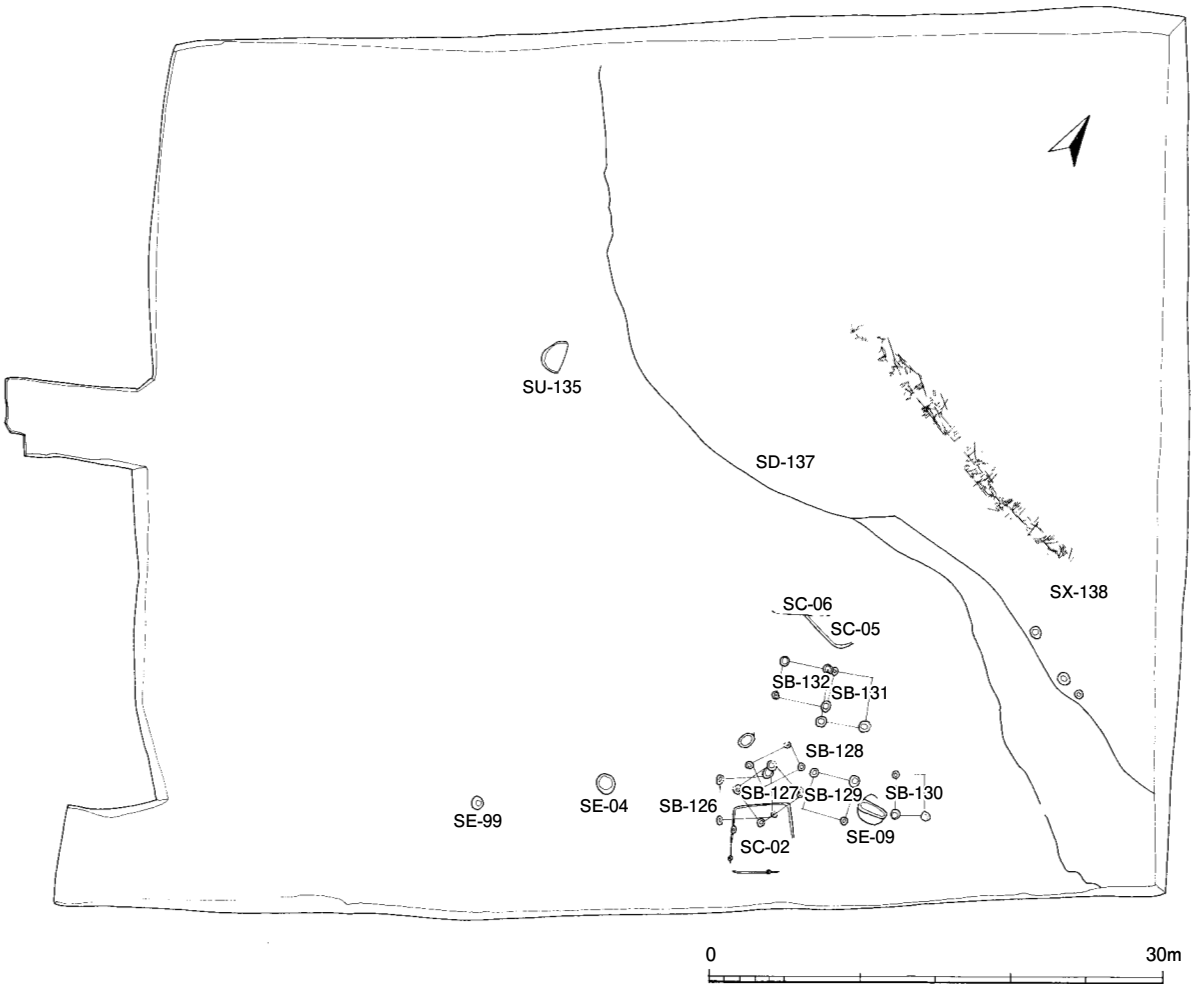


Fig.8　弥生時代の遺構配置図(1/500)

2　弥生時代の調査

弥生時代の遺構としては、竪穴住居３棟と掘立柱建物７棟、井戸２基、貯蔵穴１基、木棺墓１基、土壙４基＋αのほかに柱穴多数を検出した。これらの遺構群は、貯蔵穴（SU － 135）と井戸（SE － 04・99）を除いて調査区南東部のきわめて狭小な区域に重複して濃密に拡がっている。これは 99 号井戸や 135 号貯蔵穴の遺存状況が物語るように昭和 15（1940）年頃の丘陵開削と丘陵端の可耕地化に伴う削平に起因するもので、本来的には丘陵全域に拡がっていたことが容易に想起される。また、この丘陵端の可耕地化は、丘陵の東縁を巡る標高 12 ～ 10m のラインに沿っている。このラインに沿って弥生時代の河道が流れている。堆積土は薄いシルト質土を挟みながらほとんどが砂層で、河岸から 20m 余を経た調査区の北端に至っても河道東岸の立ち上がりは確認できず、那珂古川の氾濫原と考えられる。また、この河道の西岸に沿って古墳時代の河川が第 10・12・15・16 次調査区から蛇行しながら延び、大きく孤を描いて北の第４・７次調査区へと北流している。

1）竪 穴 住 居（SC）

竪穴住居は、調査区の南東部で３棟を検出したが、北部の２棟は丘陵の開削による消失が著しく、本来的には削平された北西部や南西部に拡がっていた可能性が想起される。立地的には、丘陵が東側を北流する旧河川にむかって緩やかに傾斜していく裾野に占地している。

２号住居　SC － 02（Fig. 9　PL. 2・3）

２号住居は、調査区の南東隅に位置する竪穴住居で、東南隅は１号溝に削平されている。126・127 号建物と重複し、それよりも新しい。平面プランは、東西長が 415cm、南北長が 455cm の方形を呈する。壁面は、垂直に立ち上がり、壁高は 18 ～ 25cm である。壁下には、幅が８～ 10cm、深さが 5cm の周溝が北東隅部を除いて巡っている。北東隅の床面レヴェルは、四周に比べて３～ 10cm ほど低く、周溝の深さを勘案すると本来的には全周していたものと考えられる。床面は、堀方に黄褐色粘土ブロックを８～ 15cm ほどの厚さに固く敷き詰めて貼床としており、南から北へ向かって 5cm ほどの比高差で緩やかに傾斜している。この床面の中央よりやや西に寄って炉を切っている。炉は、直径が 55cm、深さが 10cm の円形プランで、断面形は凹レンズ状をなしている。炉内は焼土粒の混入した炭灰層で、炉壁は良く焼けていた。主柱穴は、炉を囲むようにした４本柱である。柱間は、東西長が北側（P1 － P4）で 180cm、南側（P2 － P3）が 230cm。南北長は東側（P1 － P2）が 230cm、西側（P3 － P4）が 200cm で南西柱が炉側に寄った四辺形を呈している。遺物は炉から東に寄った床面上に壷や甕、鉢片がまとまって散乱していた。

出土遺物（Fig. 10）

１～３は壷である。１は、口径が 18.8cm で頸部は如意状に緩やかに外反し、胴部との境には小さな三角突帯が１条巡っている。調整は、ヨコナデで外面は暗文状にナデ付けている。胎土は微細～中砂粒と雲母微細、赤褐色粒を含む。暗茶灰色。２は、底径が 7.8cm。外面はタテハケ目、内面はナデ後に粗いハケ目。胎土には微細～小砂粒を多く含み、明赤褐色。３は、胴部が大きく膨らむ壷で、底径は 7.2cm。内外面とも押圧ナデ調整。胎土は微細～小砂粒と雲母微細を含む。内面は黒灰色、外面は、淡黄橙色。

４～ 13 は甕である。４・５は円盤貼付の底部から胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は小さく内傾する小型甕である。外面は粗いタテハケ目、内面は押圧ナデ調整。４は、口径が 11.1cm、底径が 7.2cm、器高は 13.1cm。５は、底径が 6.7cm。６は、口径が 15.3cm。口縁部は小さく「く」字状に外反し、偏球形の胴部は肩の張りが小さい。外面は粗いタテハケ目、内面は指頭押圧ナデ調整。胎土は微細～粗砂粒を多く含む。淡明赤褐色。７は、口径が 18cm で、肥厚した口縁部は端部を平坦に整える。胴部

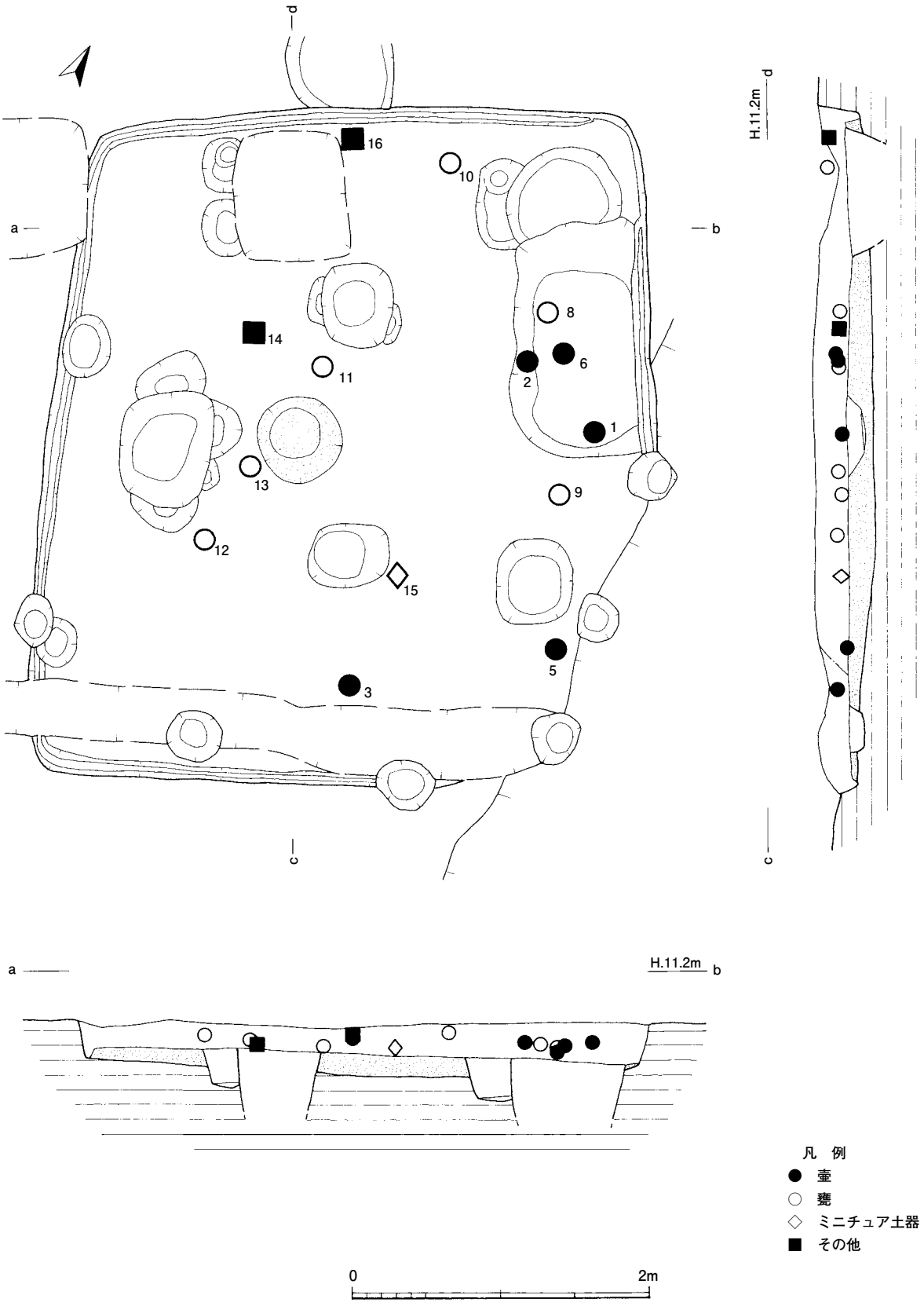


Fig.9　2号住居実測図(1/40)

は倒卵形をなす。胴部外面は粗いハケ目後にナデ、内面は押圧ナデ調整。胎土には微細～中砂粒を多く含み、色調は明赤橙色。8 は、口径が 21.5cm で器高は 25.5cm になろうか。口縁部は倒卵形の胴部から緩やかに屈曲して短く外反する。内外面とも調整は、ヨコナデ～粗いハケ目。胎土は良質で多くの微細～中砂粒と少量の雲母微細を含む。内面は淡黄褐色、外面は淡黄褐色～黒灰色。9 は、口径が 21.8cm で、口縁部は強く外反する。胴部は倒卵形をなそう。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は外面がハケ目、内面はナデ。胎土は微細～小砂粒と雲母微細を含む。内面は明赤褐色、外面は淡明赤褐色～黄橙色。10 ～ 13 は、底部片で胴部は倒卵形をなす。10 は、底径が 9.8cm。胎土はやや粗く、微細～小砂粒と雲母微細を多く含む。色調は内面がくすんだ淡黄灰色､外面はくすんだ淡黄橙色～淡茶色。

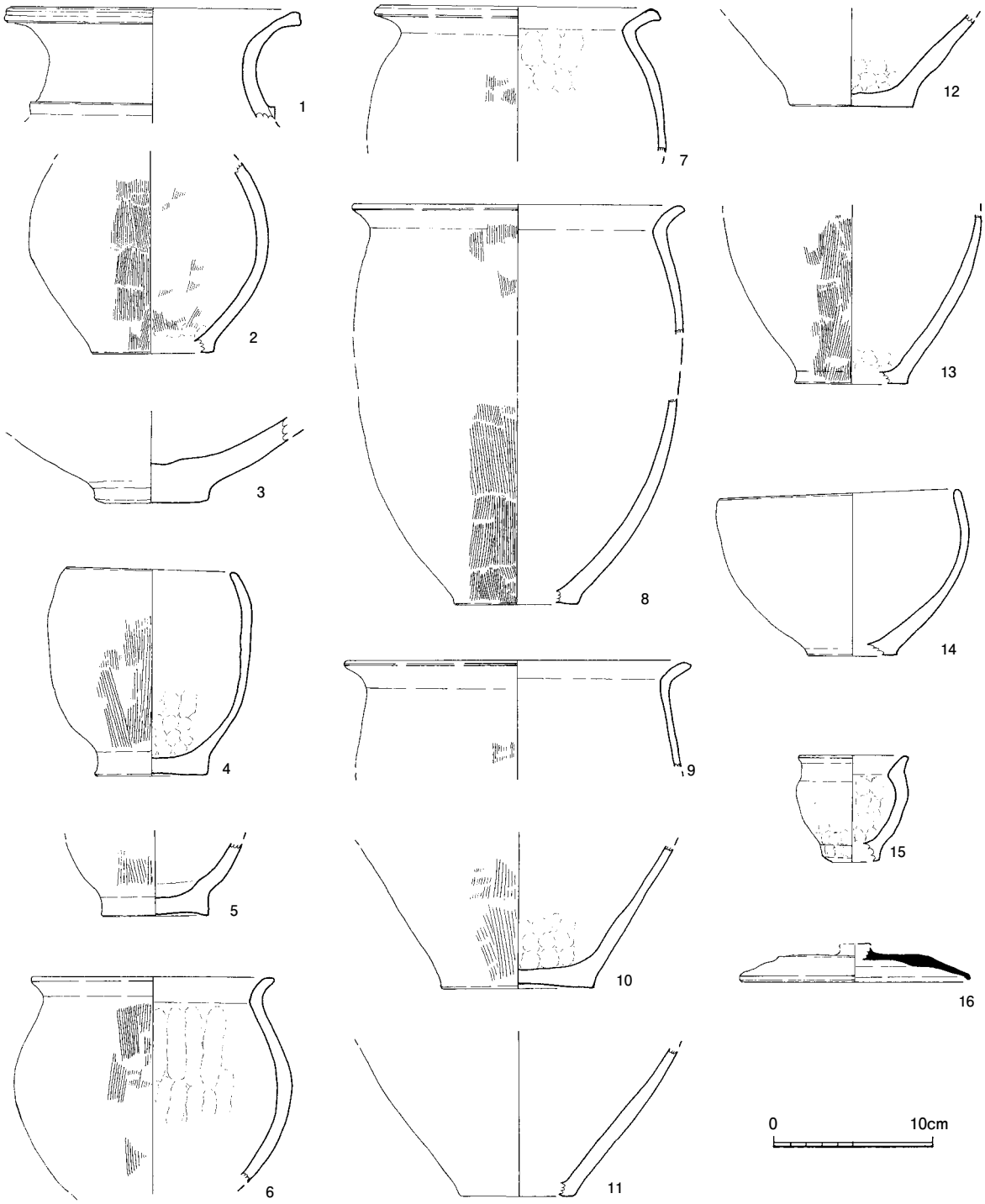


Fig.10　2 号住居出土遺物実測図(1/4)

11 は、底径が 7.2cm。外面はナデ、内面は押圧ナデ調整。胎土には雲母微細と赤褐色粒を含み、色調は淡黄橙色。12 は、底径が 7.9cm。調整は外面がナデ、内面は押圧ナデ～指頭押圧ナデ。胎土には比較的多くの微細～中砂粒と少量の雲母微細、赤褐色粒を含む。外面は明赤橙色～淡赤橙色、内面は鈍い赤灰色。13 は、底径が 7.2cm。調整は外面がハケ目、内面は押圧ナデ。胎土は良質で、微細～小砂粒と雲母微細を含む。外面は淡明橙色、内面は淡黄橙色。

14 は、口径が 15.3cm、底径が 5.8cm、器高が 10.5cm の鉢である。口縁部は偏球形の胴部から小さく屈曲して内傾する。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は内面が指頭押圧ナデで、外面は粗い掻上げナデ～押圧ナデで一部にハケ目が残る。胎土はやや粗く多くの微細～小砂粒と比較的少量の雲母微細を含む。

15 は、口径が 7cm、底径が 3.6cm、器高が 6.7cm の手捏のミニチュア鉢である。口縁部は短く外反する。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は外面が押圧ナデ、内面は指頭押圧ナデ。胎土はやや粗く小～粗砂粒を多く含み、色調は赤橙色。

16 は、口径が 14.6cm。口縁部はヨコナデ、天井部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整。胎土は精良で、少量の微細～小砂粒を含む。色調は灰色。

5 号住居　SC － 05（Fig. 11　PL. 4）

5 号住居は、調査区の中央部東縁に位置し、東側は中世以降の水田開削によって大きく削平されている。また、北壁は 6 号住居と重複し、6 号住居の南壁に切られている。平面形は、大半が開削によって消失しているが、西壁が現長 280cm、南壁が現長 85cm で南壁は西壁に対して鈍角的に開いている。壁高は 18cm で垂直に立ち上がり、壁下には幅が 8cm、深さが約 5cm の周溝が巡っている。床面は黄褐色粘土ブロックを 10 ～ 14cm ほど厚く敷き固めて貼床としている。柱穴は、南西隅壁側にあり、4 本柱と考えられる。遺物は弥生土器小片と須恵器片がわずかに出土しているが、須恵器片は混入物と考えられる。

出土遺物（Fig. 13）

17 は、口径が 11.8cm、底径が 8cm、器高が 3.3cm の須恵器坏である。口縁部はストレートに外反する。調整は、体部がヨコナデ、内底面がナデ、外底面はヘラケズリ。胎土は良質で、焼成は良好。色調は灰色。

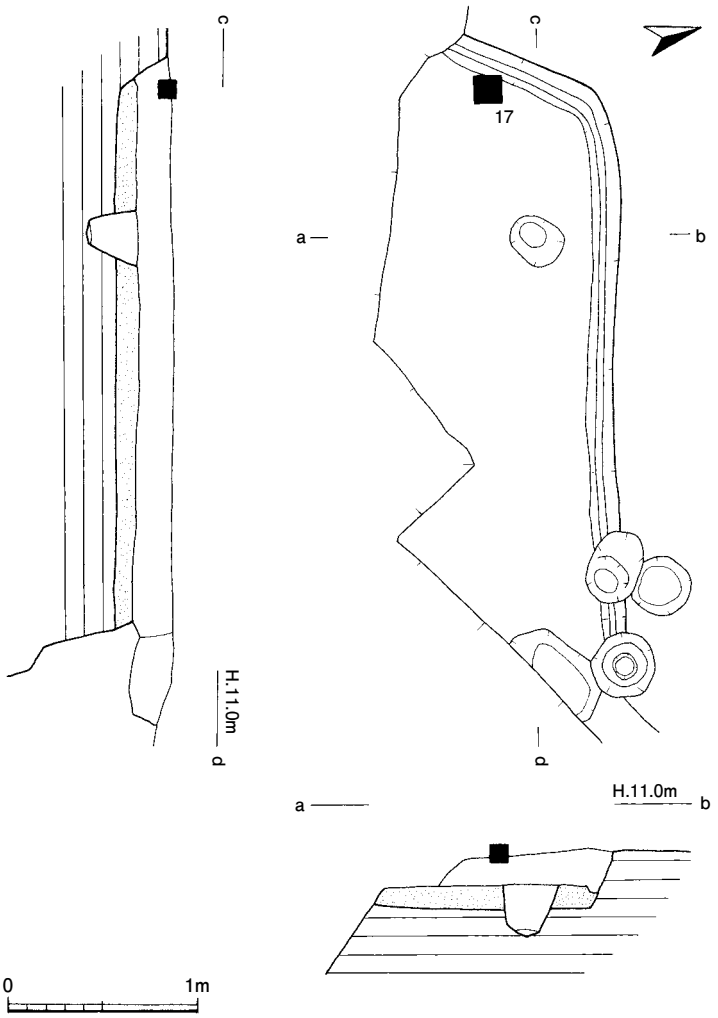


Fig.11　5 号住居実測図（1/40）

6 号住居　SC － 06（Fig. 12　PL. 4・5）

6 号住居は、調査区の中央部東縁に位置し、南壁を除いて大きく削平されている。南壁は、5 号住居の西壁と重複し、これよりも新しい。南壁の現長は 190cm で、平面形は方形プランになろう。壁高は 15cm で、壁下に周溝は巡っていない。床面は黄褐色粘土ブロックを 5 ～ 8cm 敷き詰めて貼床としている。わずかに残る床面上には柱穴が想起されるピットがあるが、主柱穴は特定できなかった。遺物は、無頸壷とその蓋、瓢形壷、甕のほか石包丁片が住居中央部の床面上にまとまって出土した。このうち無頸壷は、5 号住居から出土した小片と接合した。

出土遺物（Fig. 13）

18 は、口径が 15cm、器高が 3.1cm の無頸壷の蓋である。天井部はやや丸く、口縁部には 2 孔一対の円孔を穿っている。胎土は良質で、微細～中砂粒と雲母微細を比較的多く含み、焼成は良好。淡明黄橙色。19 は、口径が 12.8cm、器高が 10.6cm の無頸壷である。口縁部は、偏球形の胴部から頸部が大きく屈曲して外方に摘み出す。胎土は精良で、赤褐色粒をわずかに含む。淡赤橙～淡黄橙色。20 は、瓢形の壷である。接点はないが床面上から一括して出土しており、同一個体であろう。胎土は精良で、微細～石英砂と雲母を含む。内面は淡明黄褐色、外面は淡明黄橙色。21 ～ 23 は甕である。21 は、口径が 38cm、復原器高が 49.8cm。23 は、口径が 36.6cm で「く」字状の口縁部は内彎気味に立ち上がる。22 は、底径が 10.4cm。いずれも胎土には微細～中砂粒と雲母微細を比較的多く含む。24 は、高坏の脚部で、胎土には微細～小砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。色調は淡明黄橙色。

25 は、凝灰岩質の石包丁である。

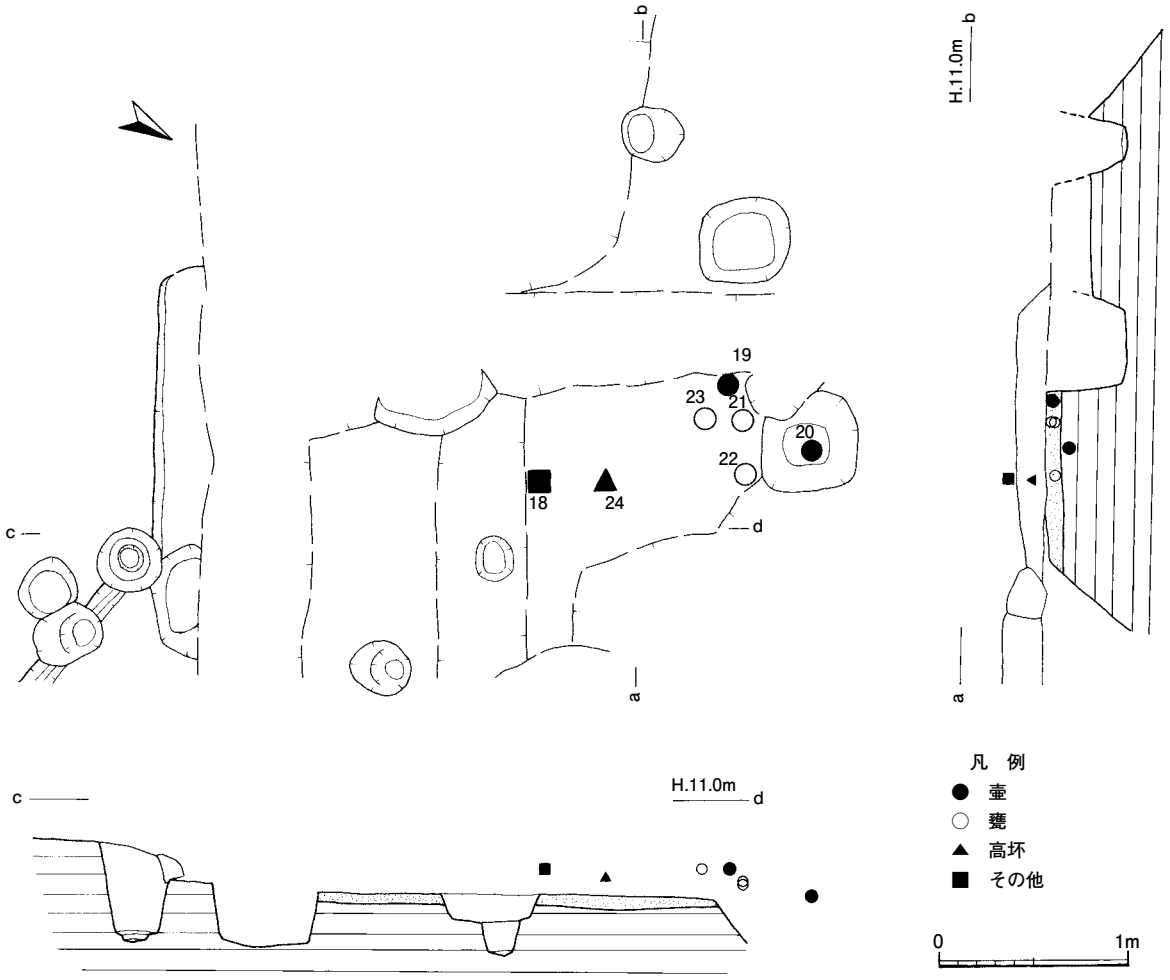


Fig.12　6 号住居実測図（1/40）

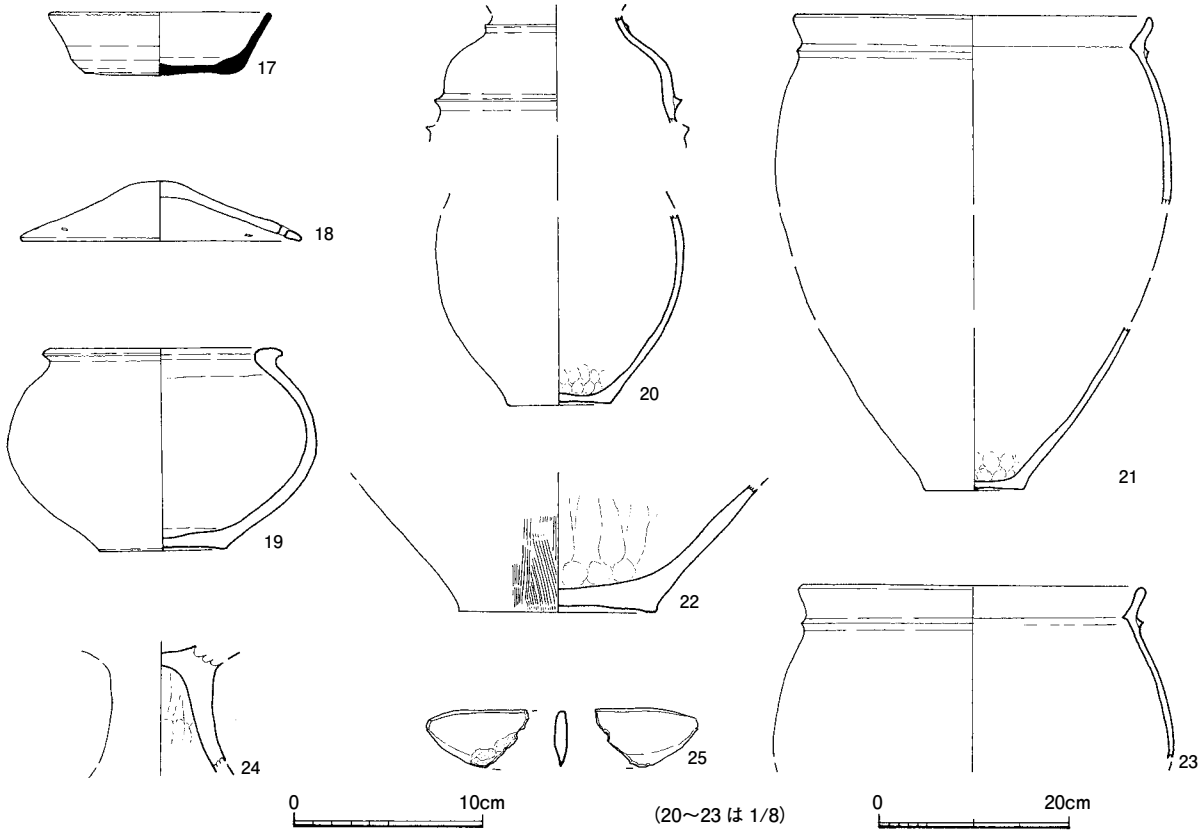


Fig.13　5・6 号住居出土遺物実測図(1/4・1/8)

2）掘立柱建物（SB）

掘立柱建物は、7 棟を検出した。しかし、柱穴内に柱痕跡を残しながらも建物として把握できなかったものがあり、本来的には更に数棟の建物があったと考えられる。分布的には削平された西方や調査区外の南方にあることが考えられる。規模的にはいずれも 1 間× 1 間の最小の単位で、これを超えるものは検出できなかった。また、その重複関係から少なくとも 3 期に亘る建て替えがあったことが想起される。

126 号建物　SB ― 126（Fig. 14　PL. 6）

126 号建物は、南西部に拡がる遺構群のやや西寄りに位置し、2 号住居や 127･128 号建物と重複し、2 号住居と 127 号建物より後出するが、128 号建物との新旧は明らかでない。1 間× 1 間の東西棟の掘立柱建物で、梁行長は 270cm、桁行長は 350cm である。柱穴は、40 ～ 50cm × 65 ～ 70cm の楕円形プランを呈し、深さは 40 ～ 60cm を測る。床面積は 9.45㎡。

127 号建物　SB ― 127（Fig. 14　PL. 6）

127 号建物は、1 間× 1 間の東西棟の掘立柱建物である。2 号住居および 126･128 号建物と重複し、2 号住居よりも古く、126 号建物よりも新しい。また、東隅柱は 1 号溝に切られている。建物の梁行長は 270cm、桁行長は 300cm であるが、北隅柱はやや南に寄り、西桁行長は東桁行に比べて 20cm 短い 280cm になる。柱穴は、短辺が 45 ～ 55cm、長辺が 85cm の楕円形プランを呈し、東側梁柱には直径が 20cm の柱痕跡が残っている。床面積は 8.1㎡。

128 号建物　SB ― 128（Fig. 14　PL. 6）

128 号建物は、調査区南東部に拡がる建物群中の西寄りにある掘立柱建物で、126・127 号建物と重複し、北隅柱は 3 号溝に切られている。梁行長が 180cm、桁行長が 300cm の 1 間× 1 間の東西棟で

ある。柱穴は、短辺が 40 ～ 55cm、長辺が 50 ～ 70cm の長方形プランを呈し、深さは 35 ～ 60cm である。柱穴内には 15cm 径の柱痕跡が残っていた。床面積は 5.4㎡。

129 号建物　SB － 129（Fig. 14　PL. 6）

129 号建物は、建物群中のほぼ中央にある 1 間 × 1 間の東西棟の掘立柱建物で、1 号溝よりも古い。梁行長は 270cm、桁行長は 280cm でほぼ正方形プランをなし、床面積は 7.56㎡。柱穴は、40 ～ 60cm の円形プランをなし、深さは 20~60cm と深浅差があり、丘陵の開削に因るものであろう。

130 号建物　SB － 130（Fig. 15　PL. 6）

130 号建物は、建物群中の最も南東端に位置し、西には 8 号木棺墓、南には 9 号井戸が隣接している。

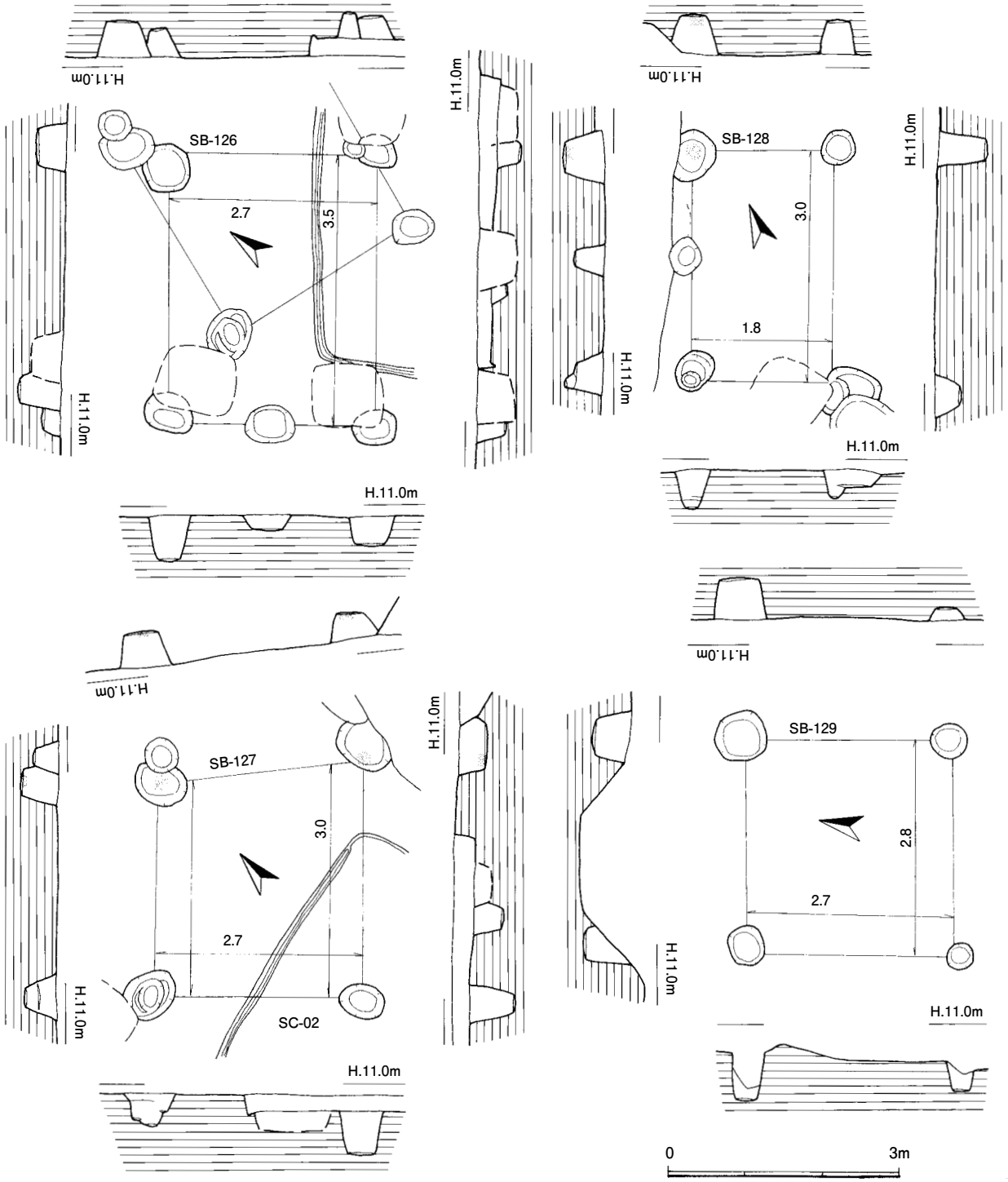


Fig.14　126 ～ 129 号建物実測図(1/80)

建物は１間×１間の南北棟の掘立柱建物で、梁行長は 200cm、桁行長は 270cm である。床面積は 5.4㎡。柱穴は、45 ～ 60cm 径の楕円～方形プランを呈し、深さは 40 ～ 60cm である。北東隅柱は、水田開削によって消失している。

131 号建物　SB － 131（Fig. 15　PL. 6）

131 号建物は、建物群中の北部に位置する１間×１間の南北棟の掘立柱建物で、132 号建物よりも古く、北東隅柱は１号溝に切られて消失している。建物は、梁行長が 300cm、桁行長が 320cm で床

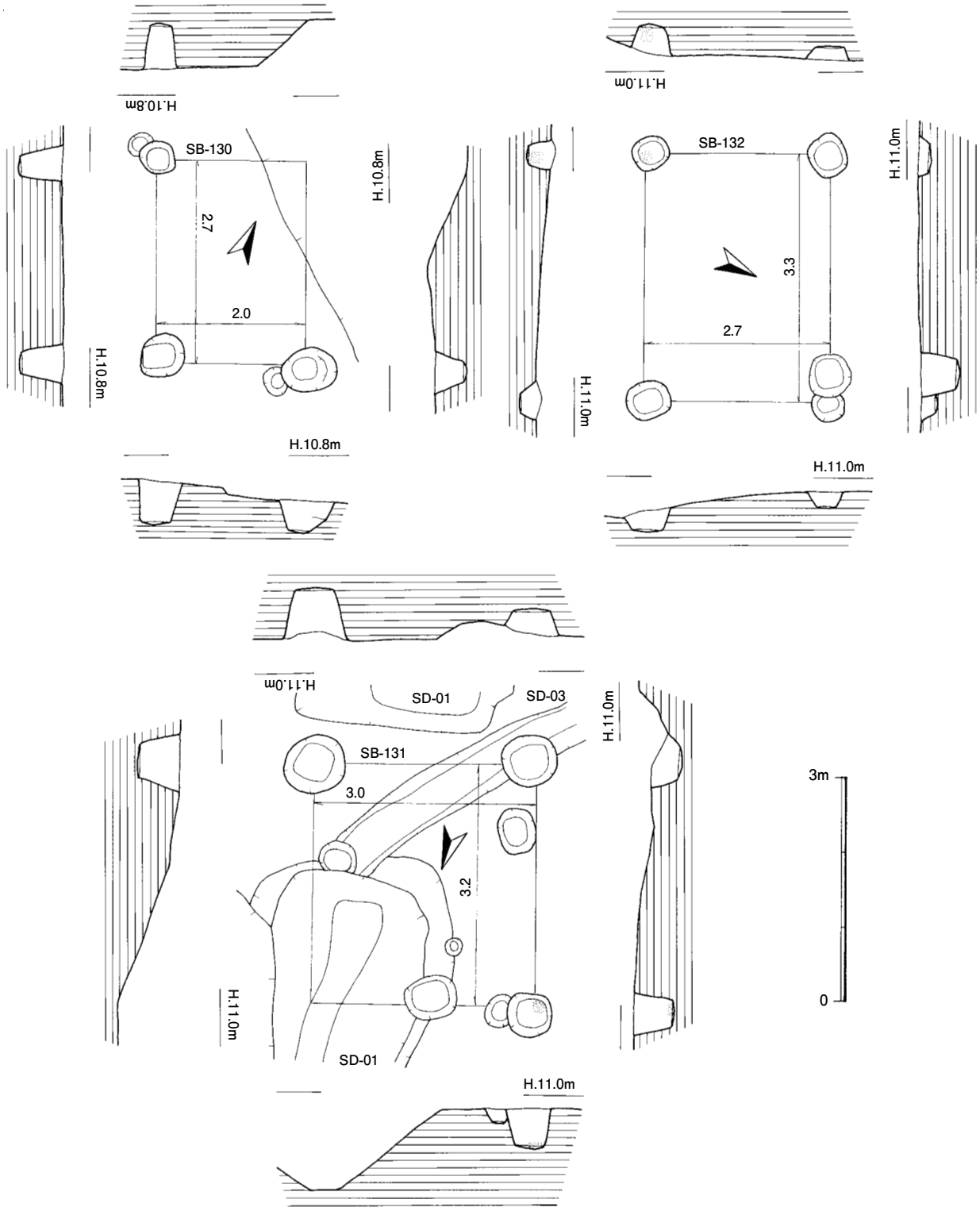


Fig.15　130 ～ 132 号建物実測図(1/80)

面積は9.6㎡である。柱穴は、60 ～ 85cm 径の円形プランを呈し、深さは 55 ～ 60cm である。

132 号建物　SB － 132（Fig. 15　PL. 6）

132 号建物は、建物群中の最北西端に位置する 1 間× 1 間の東西棟の掘立柱建物で 131 号建物よりも新しい。梁行長は 270cm、桁行長は 330cm、床面積は 8.91㎡である。柱穴は、短辺が 45 ～ 55cm、長辺が 55 ～ 60cm の方～長方形プランを呈し、深さは 15 ～ 50cm と深浅差がある。

3）井　戸（SE）

井戸は､2 基を検出した。いずれも素掘りで､井戸底までの深さは､1.75 ～ 3.2m と大きく差があるが､最深部はいずれも八女粘土層まで達している。位置的には調査区南縁のほぼ中央部にあたり、丘陵を開削して北西方向へ延びる官道と旧河川とのほぼ中間点にあたる。4 号井戸は、調査区の南東部に拡がる遺構群の西縁にあたり、この井戸を西限として官道との間には 99 号井戸を除いて遺構は全く存在しない。本来的には丘陵から旧河川にむかって住居や掘立柱建物群が拡がっていたものと推考される。

4 号井戸 SE － 04

（Fig. 16　巻頭 PL. 1　PL. 7・8）

4 号井戸は、調査区の南東部に拡がる遺構群の最西縁に位置する素掘りの井戸で、7m 東には 2 号住居、7.5m 西には 99 号井戸がある。平面形は、南北が 140cm、東西が 135cm の円形プランを呈する。深さは 3.15m とやや深く、標高は 7.72m。壁面は、40cm × 47cm の楕円形の井戸底にむかって直線的に窄まる。井戸底には 10 点余りの壷や器台がまとまって投棄されていた。一方で上層からは、壷や甕・器台・ミニチュア土器が出土している。上層と井戸底の間の中間層には遺物が少なく、出土状況に二極化が見られ、廃絶に際して一気に上層まで埋め戻されたと考えるのが合理的である。検出面より － 1m、標高 9.7m 付近に鳥栖ローム層と八女粘土層の境界があり、ここに湧水点がある。

出土遺物（Fig. 17　PL. 37）

26 ～ 32 は、上層出土。26・27 は、手捏のミニチュア鉢。26 は、口径が 5.2cm、器高は 3.5cm。体部は短くストレートに外反し、口縁部は小さく摘み上げている。27 は、口径が 4.7cm、器高は 3.8cm。口縁端部は小さく直口する。28 は、口径が 9.6cm、底径が 3.6cm、器高が 5.8cm の小型鉢。体部は内彎気味に立ち上がる。胎土は比較的多くの微細～小砂粒と少量の雲母微細、赤褐色粒を含む。29･30 は、甕の底部。底径は、29 が 8.6cm、30 が 7.4cm。31・32 は器台。31 は、底径が 12.4cm。32 は底径が 12.6cm。短く開く脚裾部は端部を内方に摘み出し、受部は屈曲して短く

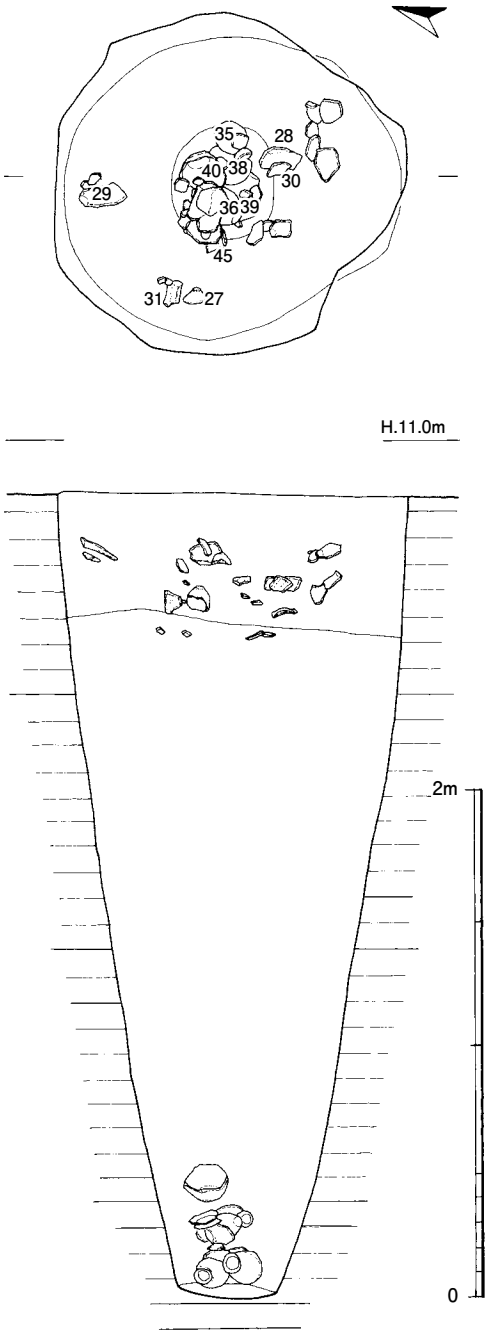


Fig.16　4 号井戸実測図（1/30）

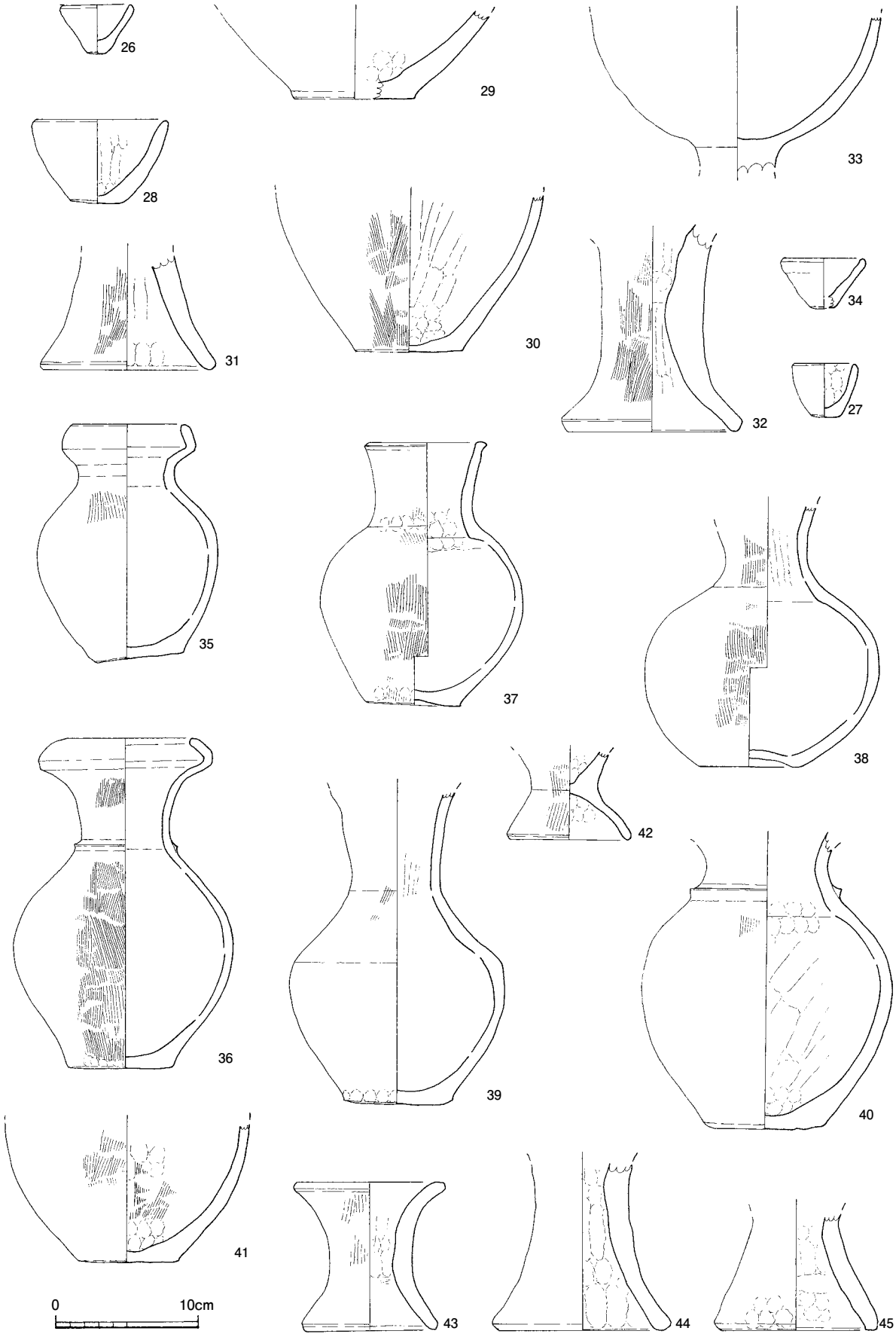


Fig.17　4 号井戸出土遺物実測図(1/4)

外反する。33・34 は、中層出土。33 は、体部が半球形をなす高坏。胎土はやや粗く多くの小～祖砂粒と雲母微細を含む。34 は、口径が 6cm、器高が 3.5cm の手捏のミニチュア鉢。体部はストレートに外反し、口縁部は小さく摘み上げる。35 ～ 45 は、井戸底から出土した。35 ～ 41 は壷。35 は、口径が 9.5cm、底径が 6.6cm、器高は 16.3cm。口縁部は、短い頸部から緩やかに外反した後に厚く直線的に内傾する。胴部はやや肩の張った卵形をなす。36 は、口径が 9cm、底径が 7.4cm、器高が 23.2cm の袋状口縁壷。口縁部は、直線的な頸部から緩やかに外反した後に膨らみ気味に鋭く内傾する。屈曲面は指頭による強い押圧ナデで膨らみを付けている。頸部との境には三角突帯が巡る。37 は、口径が 8.6cm、底径が 7.4cm、器高が 18.5cm の長頸壷。口縁部はストレートに外反し、平坦な端部は外唇を小さく摘み出す。胴部は肩の張った球形。38 は、上げ底の底部に玉葱状の偏球形の胴部が付く。底径は 6.8cm。内面は押圧ナデ調整で頸部には絞り痕がある。胎土は良質で、多くの微細～粗砂粒と若干の赤褐色粒を含む。39 は、肩が鋭く張った偏球形の胴部にやや長い頸部が付く壷で、底径は 7.4cm。外面はナデ後にハケ目、内面は押圧ナデ調整で頸部には絞り痕が残る。胎土には多くの微細～中砂粒のほか雲母微細と赤褐色粒を含む。40 は、底径が 8.6cm。胴部は、やや肩の張った球形で頸部は短く内傾した後に外反する。胴部と頸部との境には 1 条の鋭い三角突帯が巡る。胎土には多くの小～粗砂粒のほか雲母微細と赤褐色粒を含む。淡灰白色。41 は、底径が 7.2cm で胴部は球形をなす。42 は、脚径が 8.6cm の台付甕。脚は短く内彎気味に開く。胎土は良質で、微細～小砂粒のほか少量の赤褐色粒を含む。43 ～ 45 は、器台。43 は、受部径が 10.6cm、底径が 9.6cm、器高は 10.4cm。受部は短く直口する筒部から緩やかに外反し、脚裾部はストレートに開く。44 は、底経が 12.6cm。脚部はやや長く、裾部は短く開く。45 は、底径が 11.6cm。脚裾部はストレートに外反し、端部は平坦に整える。

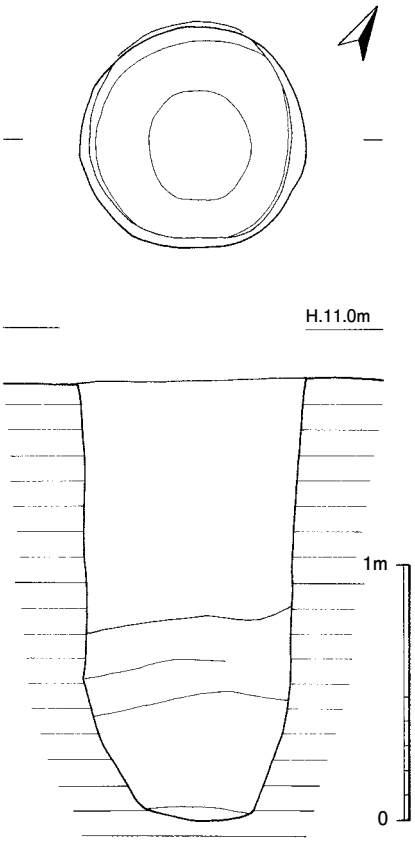


Fig.18　99 号井戸実測図(1/30)

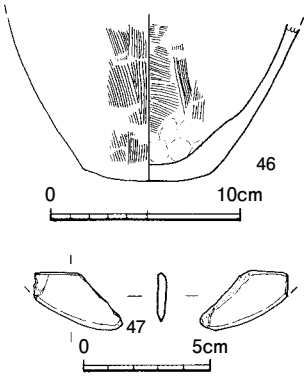


Fig.19　99 号井戸出土遺物実測図(1/3・1/4)

99 号井戸　SE － 99（Fig. 18　巻頭 PL. 1　PL. 9）

99 号井戸は、調査区南東部にある素掘りの井戸で、4 号井戸と調査区の西縁に開削された官道の中間地点に位置している。平面形プランは、直径が 85 ～ 88cm の正円形を呈する。深さは 175cm で、4 号井戸に比べて浅く、標高は 9.06m。壁面は、検出面より － 1m ほど垂直に掘り込み、そこから小さく袋状に抉れて 40 ～ 43cm の円形の井戸底にむかって緩やかに窄まる。この小さく窄まった標高が 9.6m 地点に鳥栖ローム層と八女粘土層の境界があり、ここから水が湧き出している。4 号井戸との間に深浅の差はあるものの粘土層の境と湧水点の位置はほぼ一致している。遺物は甕片がわずかに出土した。

出土遺物（Fig. 19）

46 は、底径が 6.8cm の甕。底部は凸レンズ状にやや丸く、胴部は倒卵形をなす。外面が粗いハケ目、内面は押圧ナデ～ハケ目。胎土は微細～石英小砂粒と雲母微細を含む。47 は、片岩質の石包丁片。

4）貯蔵穴（SU）

貯蔵穴は､1基を検出した。位置的には、調査区北東部の丘陵が旧河川へ落ちていく東縁にあたる。付近一帯にこの期の遺構群が拡がっていたものと考えられる。

135号貯蔵穴　SU－135

（Fig. 20　PL. 10）

135号貯蔵穴は、調査区北東部の台地縁に位置し、9m北西に133号井戸がある。壁面は､床面から34cmほどが残り、西壁は袋状に内彎している。平面形は、長辺が202cm、短辺が165cmの楕円形になろう。本来は、床面から4～50cmの高さから大きくドーム状に内湾して窄まり入口部へ至るものでその高さは1.5mほどになろうか。

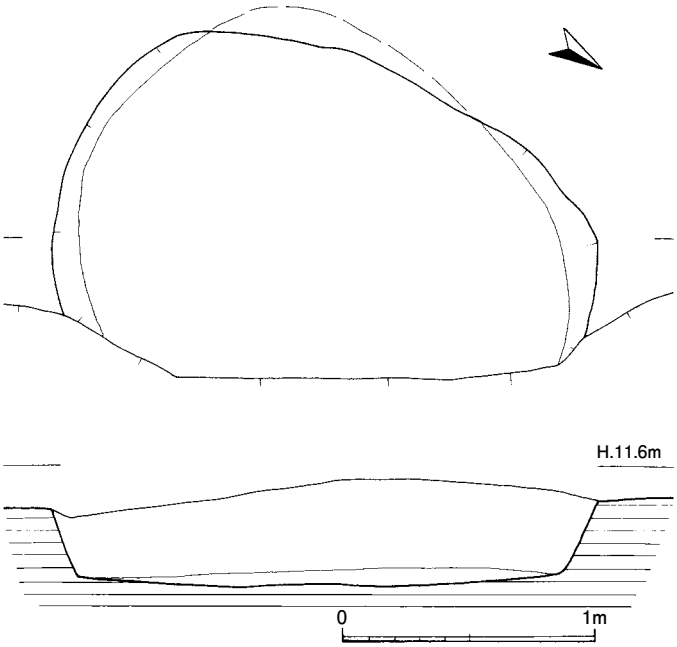


Fig.20　135号貯蔵穴実測図(1/30)

5）木棺墓（SR）

木棺墓は、1基を検出した。墳墓はこの木棺墓だけであるが、台地縁や旧河川からは大型甕片が出土しており、削平された丘陵を中心に甕棺墓域が拡がっていたと考えられる。

8号木棺墓 SR－08

（Fig. 21　PL. 10）

8号木棺墓は、調査区南東部の台地縁にあり、東には9号井戸が隣接している。平面形は長辺が203cm、短辺が62～69cmの長方形である。木棺墓は、墓壙底に黄褐色粘土ブロックを6～8cm敷き詰めてその四周に棺材を埋め込む4～8cm幅の小溝を掘り込んでいる。棺材をその小溝内に立て、裏面に黄褐色粘土を詰め込んで棺材の安定を図っている。墓壙の両側壁に蝶の羽のような半楕円形の浅い掘り込みがあり、この段に蓋材を横架したと考えられる。この浅い掘り込みが削平された1次墓壙で、本来的には2段掘

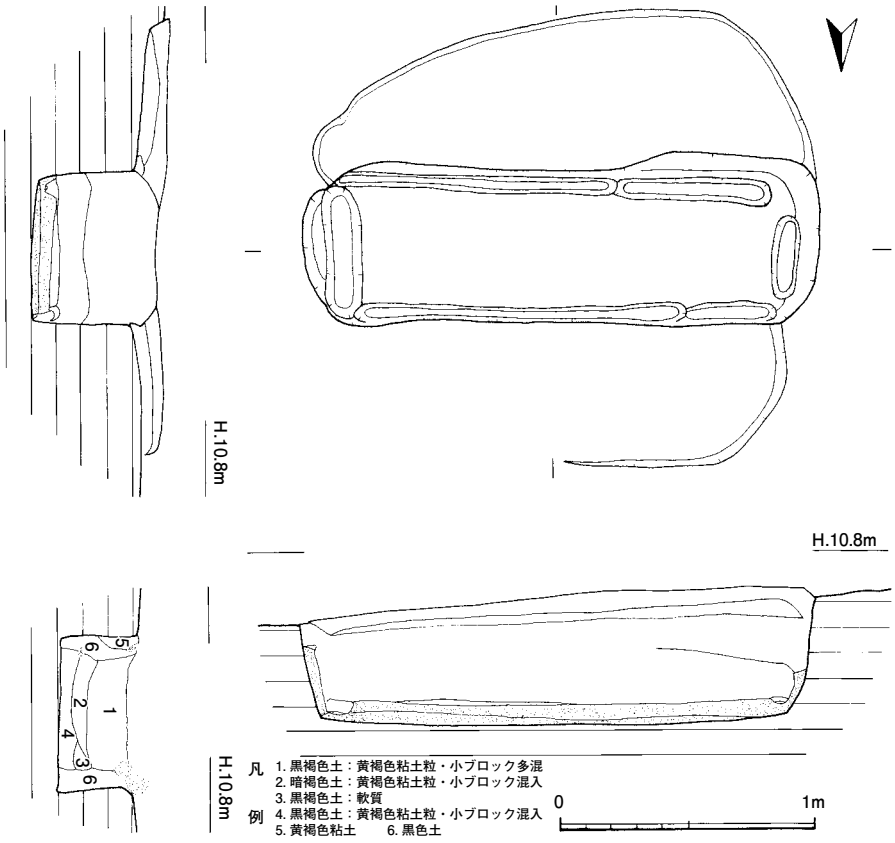


Fig.21　8号木棺墓実測図(1/30)

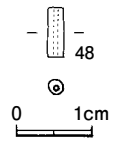


Fig.22 8号木棺墓出土遺物実測図(1/1)

りの木棺墓である。棺床までの深さは33cm。覆土は黒褐色～暗褐色土で、灰白色粘土ブロックが多く混入し、墓壙上縁に貼付いた粘土ブロックがあり、蓋材は灰白色粘土で目貼りされていたと考えられる。遺物は、覆土中から管玉が1点出土した。

出土遺物（Fig. 22　PL. 37）

48は、長さが6.5mm、直径が2mmの碧玉製管玉である。1mm弱の円孔は両側から穿孔している。

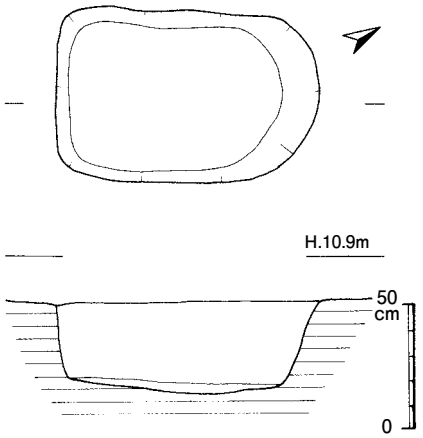


Fig.23　86号土壙実測図(1/30)

6）土　壙（SK）

土壙は4基検出したが、調査区の削平が大きく本来的にどのような分布を示していたかは明らかでない。出土遺物も少なく時期は決し難いが、覆土は竪穴住居と大差がない。また、137号河川の河岸に沿って3基の円形土壙を検出したが、冠水によって壁面が崩落し、図示できなかった。プラン的には径が80～100cm、深さが70cmほどの円形で、黒灰褐色の粘質土が堆積し、壙底からはドングリ等の種子が出土した。

86号土壙　SK－86（Fig. 23）

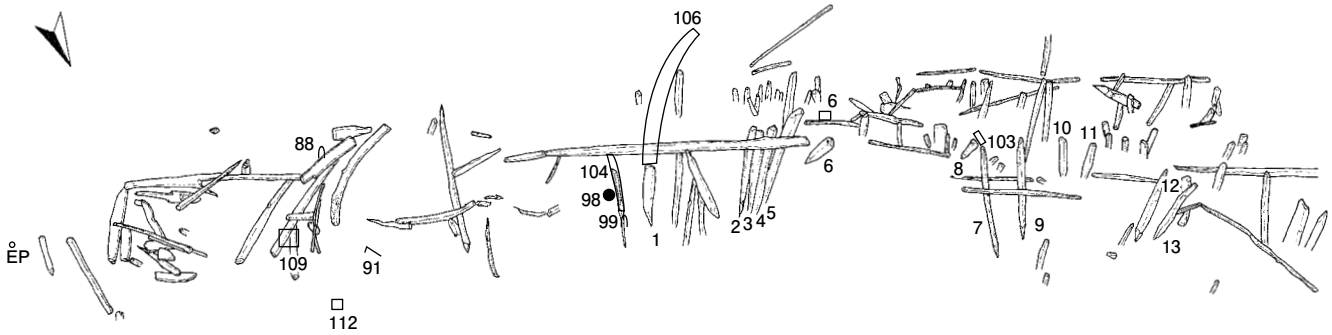
86号土壙は、調査区南東部の遺構群の北西部に位置する南北軸の小土壙で、南西隅壁は3号溝と接している。平面形は、短辺が68cm、長辺が104cmの隅丸長方形プランで主軸方位をN－32°－Eにとる。壁面は北小口壁が緩やかなほかは急峻に立ち上がる。壁高は36cm。床面は北小口壁へむかって緩やかに傾斜し、断面形は浅い凹レンズ状をなす。覆土は、淡黒褐色土の単一層である。

7）井堰状杭列・河川（SD）

調査区の東部で1条の河川とその岸際に打ち込まれた杭列を検出した。隅から西へむかって延びる砂の厚い堆積層を検出した。砂層は、岸側の深さが1m余で、北端部へむかって緩やかにさがる。

137号河川　SD－137（Fig. 7　PL. 14）

137号河川は、調査区の南東隅から西へ緩やかにカーブを描きながら北流し、中央部で緩やかに流れを変えて北西方に延びていく。堆積土は、薄いシルト質土を互層的に挟んだ砂層の単一層で上層は細～小砂、下層は粗砂層である。西岸から北端までは35m余あり、東岸は確認できていない。深さは、西岸際が1m余で、北へむかって緩やかに傾斜し、比高差は1m余を超える。便宜的に河川としたが、低位段丘上の那珂古川の氾濫原の可能性も考えられる。



出土遺物（Fig. 25 ～ 32　PL. 25 ～ 27）

49 は丹塗の無頸壷。口縁部は短く鋭角的に外反し、上唇部に円孔を焼成前に穿つ。胴部は偏球形をなす。52 ～ 56 は二重口縁壷。52 は、口縁部がのびやかに外反した後に鋭く内傾し、外唇を小さく摘み出す。この外唇と突帯状の屈曲部にヘラ工具による刻み目が巡る。偏球形の胴部下半と頸部との境に 1 条の三角突帯を貼り巡らし、下半部の突帯には刻み目がある。53 の口縁部は外反した後に鋭く直線的に内傾し、端部は上方に短く摘み上げている。倒卵形の胴部と頸部の境にはシャープな 1 条の三角突帯が巡る。55 は、口縁部が外反した後にストレートに内傾し、屈曲面と頸部の境に巡る 1 条の三角突帯にはヘラ工具による刻み目を施文している。56 は、器高が 77.2cm の大型壷。口縁部は、緩やかに外反した後に鋭角的に屈曲して直線的に内傾する。倒卵形の胴部と頸部の境に 1 条、下半部に 2 条のコ字突帯が巡る。59 ～ 62 はく字状口縁の甕で胴部は倒卵形をなす。62 は、口縁部が直口気味に小さく外反し、胴部は丸みを帯びた卵形をなす 63 ～ 67 は高坏。63 は坏部が半球形をなす丹塗高坏。口縁部は水平に屈曲して外反する。64 は丹塗の高坏で脚部はラッパ状に開く。65 は脚部が朝顔状に大きく開く。68 ～ 72 は器台。68 は器壁が厚く、受部は短く外反する。ストレートに開く脚裾部は内唇を内方に小さく摘み出す。69 は筒部が直線的で細く、受部と脚裾部は短く外反して上下端は水平に整えている。72 は器高が 23.8cm の大型器台。受部は緩やかに外反し、脚裾部は筒部からストレートに開く。73 ～ 76 は上層の混入である。73 は口径が 8.8cm の小型丸底壷。口縁部は、偏球形の胴部からストレートに外反する。74 は口径が 13.5cm の土師器坏。口縁部は、扁平な半球形の体部から小さく屈曲して垂直に摘み上げている。75 は口径が 13.4cm の須恵器坏。口縁部は緩やかに外反し、畳付は外方に開く。76 は、手捏のミニチュア鉢。口縁部は直口して立ち上がり、盃状をなす。77 は直径が 5cm、厚さが 1.3cm の土製紡錘車で、6.2 ～ 7mm の円孔を穿つ。79 は、長さが 4.5cm、厚さが 0.9cm の頁岩製石錘。幅が 1.2mm の結節溝は、横から縦の順で彫り込んでいる。80 は、安山岩製の石弾。81 は凝灰岩製の石包丁。82 は、砂岩質の砥石である。83 は安山岩質の凹石。84 は、玄武岩の敲打石。85 は、長さが 17.1cm、幅が 12.5cm、厚さが 3.7cm の石錘で、両側縁に紐掛の打ち欠きがある。

138 号井堰状杭列　SX － 138（Fig. 24　PL. 11 ～ 14）

138 号井堰状杭列は、調査区の東部を北流する 137 号河川が流れを北西方に変えるあたりに河川と直交する突き出た杭列で総延長は 16m である。検出時は 10 号河川下層の流木類と考えたが、黒色粘質土層下の砂層深くまで打ち込まれており、河川に伴うものであった。杭は外にむかって左右から打ち込まれている。この杭の交差部に 2 ～ 4m の丸材を横架し、その間に横木或いは縦木を絡めていた。杭材は、直径が 6 ～ 9cm で長さは短いものが 50 ～ 110cm、長いものは 200cm あり、垂木や横架材を転用したものが多い。また、杭間からエブリやタモ網などが検出された。（小林義彦）

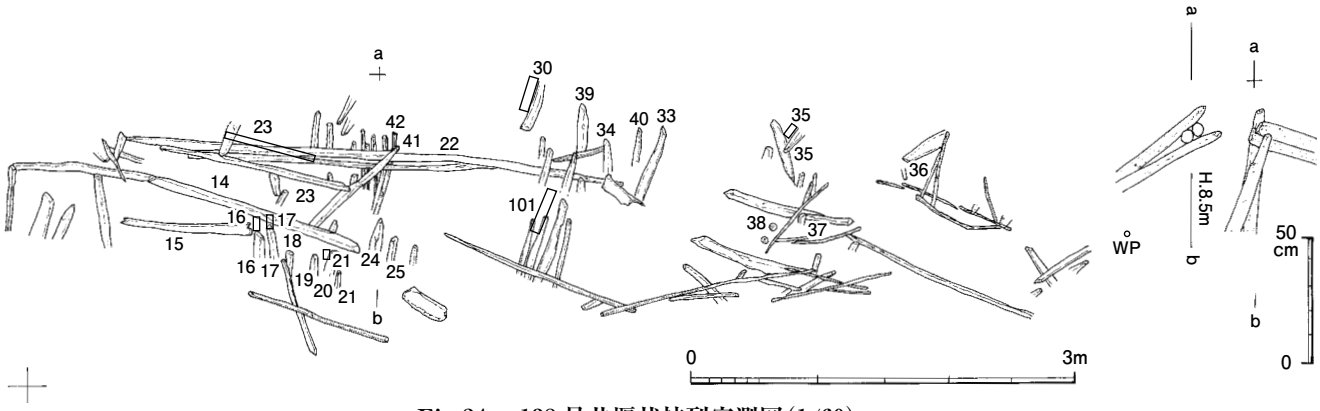


Fig.24　138 号井堰状杭列実測図（1/60）

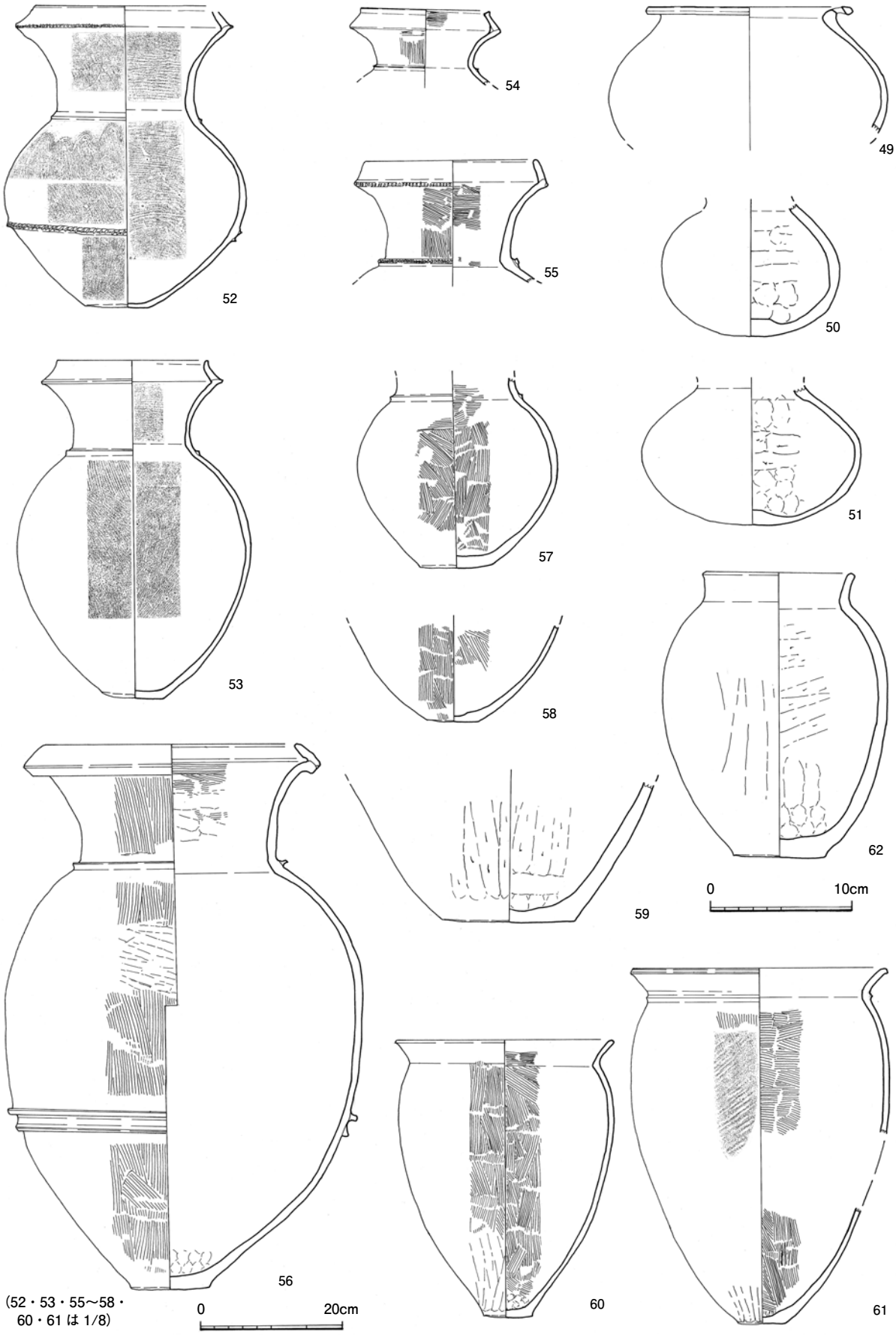


Fig.25　137 号河川出土遺物実測図 1 (1/4・1/8)

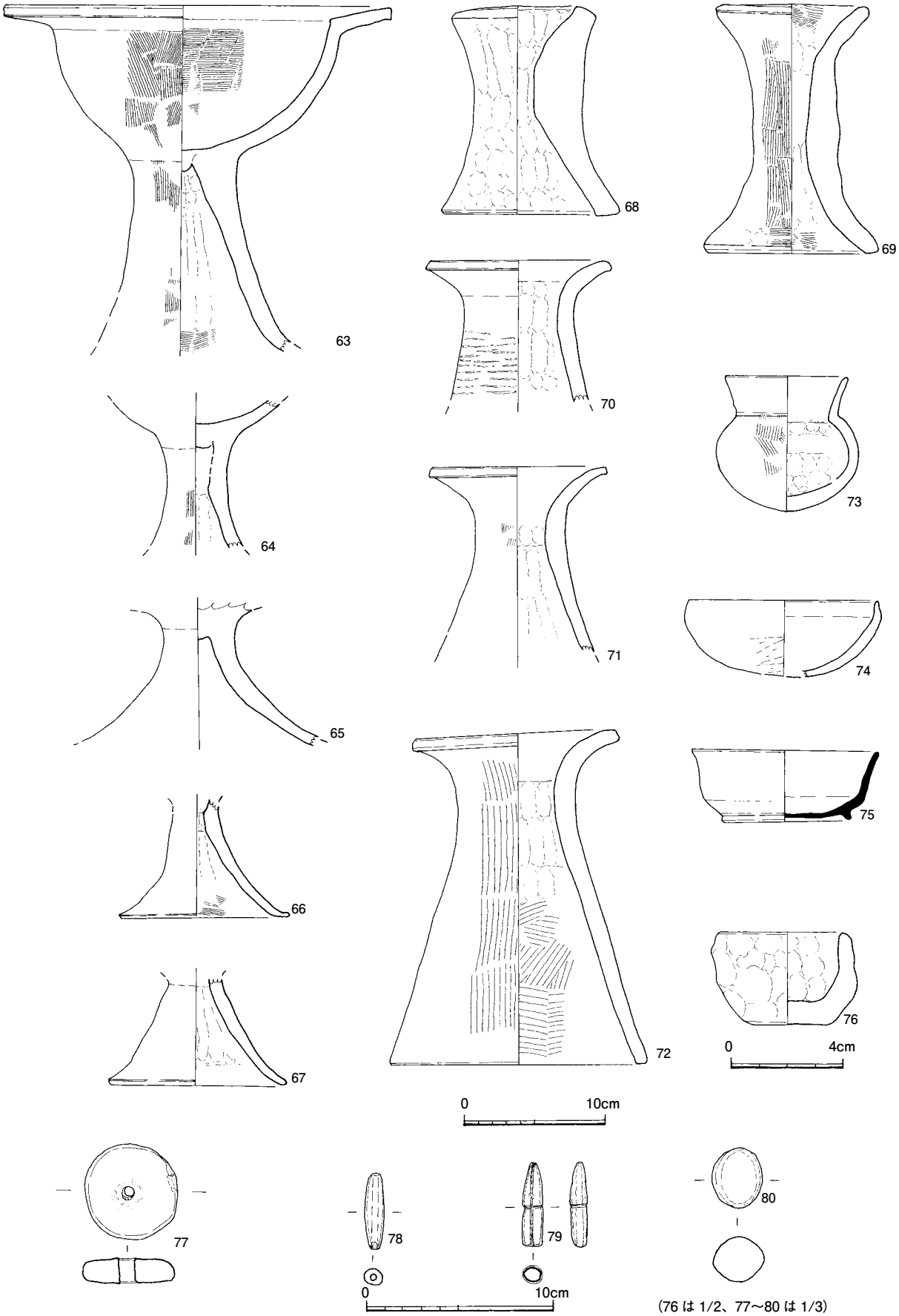


Fig.26　137 号河川出土遺物実測図 2 (1/2・1/3・1/4)

Fig.27　137 号河川出土遺物実測図 3 (1/3・1/6)

Tab.2　出土遺物(土器)一覧表 1

Fig	No.	時代	器種	遺構	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig10	1	弥生	壷	SC－02	6.8+ α	良質.微細～中砂粒を比較的多く含む.雲母微細、赤褐色粒を少量含む	良好	暗茶灰色	ヨコナデ	ナデ	
					18.8						
									ナデ後暗文状のナデ		
Fig10	2	弥生	壷	SC－02	12.0+ α	良質.微細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を少量含む	良好	明赤橙色	タテハケ目	ナデ後やや粗いハケ目	黒斑
					7.8				指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig10	3	弥生	壷	SC－02	5.2+ α	良質.微細～石英小砂粒と雲母微細を含む	良好	(内)黒灰色	粗いナデ	押圧ナデ	
								(外)淡黄橙色			
					7.2						
Fig10	4	弥生	甕	SC－02	12.8～13.1	良質.微細～石英中砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	(内)淡橙茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面に黒斑
					10.8～11.1			(外)淡明赤橙色	粗いハケ目	押圧ナデ	
					7.1～7.2				押圧後ヘラ状工具によるナデ	指頭押圧ナデ	
Fig10	5	弥生	甕	SC－02	4.7+ α	微細～石英小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	(内)灰黒色	粗いタテハケ目	押圧ナデ	
								(外)灰橙色～灰黒色	ヘラ状工具によるナデ	指頭押圧ナデ	
					6.7						
Fig10	6	弥生	甕	SC－02	17.5+ α	やや粗い.微細粗砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	淡明赤橙色	粗いタテハケ目	指頭押圧ナデ	
					15.3						
Fig10	7	弥生	甕	SC－02	9.0+ α	微細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	明赤橙色	ヨコナデ	押圧ナデ	
					18				やや粗いハケ目後ナデ		
Fig10	8	弥生	甕	SC－02	25.1～25.5	良質.微細～石英中砂粒多く含む.雲母微細を少量含む	良好	(内)淡黄褐色	ヨコナデ	やや粗いヨコハケ目	外面全体に黒斑
					20.8～21.5			(外)淡黄褐色.淡黒～黒灰色	粗いハケ目		
					7.8～8.0						
Fig10	9	弥生	甕	SC－02	6.8+ α	微細～小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を含む	良好	(内)明赤褐色	ハケ目	ナデ	
					21.8			(外)淡明赤褐色～黄橙色			
Fig10	10	弥生	甕	SC－02	9.0+ α	やや粗い.微細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を多く含む	良好	(内)くすんだ淡黄灰色	粗いタテハケ目	指頭押圧ナデ	
								(外)くすんだ淡黄橙色～淡茶色	粗いナデ		
					9.8						
Fig10	11	弥生	甕	SC－02	10.4+ α	雲母微細と赤褐色粒含む	良好	淡黄橙色	ナデ	押圧ナデ	
					7.2						
Fig10	12	弥生	甕	SC－02	6.0+ α	微細～石英中砂粒を比較的多く含む.雲母微細と赤褐色粒少量含む	良好	(内)鈍い赤灰色	ナデ	押圧ナデ	
								(外)明赤橙色～淡赤橙色		強い指頭押圧ナデ	
					7.9						
Fig10	13	弥生	甕	SC－02	10.8+ α	良質.微細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	(内)淡黄橙色			
								(外)淡明橙色			
					7.2				ハケ目	押圧ナデ	

Tab.3　出土遺物（土器）一覧表 2

Fig	No.	時代	器種	遺構	サイズ（器高・口径・底径）	胎土	焼成	色調	調整（外）	調整（内）	その他
Fig10	14	弥生	鉢	SC－02	9.8 ～ 10.5	やや粗い．微細～石英小砂粒を多く含む．雲母微細を含む	良好	（内）明赤橙色～暗赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
					15.3			（外）明赤橙色	押圧ナデ、一部細かいハケ目	指頭押圧ナデ	
					5.8				粗い掻き上げ		
Fig10	15	弥生	ミニチュア鉢	SC－02	6.7	やや粗い．微細～石英小～粗砂粒を多く含む	良好	赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部に黒斑
					7				押圧ナデ	指上半による押圧ナデ	
					3.6					指頭押圧ナデ	
Fig10	16		坏蓋	SC－02	1.9+ α	精良．微細～小砂粒を少量含む	堅緻	灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	
					14.6				ヘラケズリ	ナデ	
Fig13	17		坏	SC－05	3.3	精良．微細砂、雲母微細を多く含む	堅緻	灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	
					11.8				ヘラケズリ	ナデ	
					8						
Fig13	18	弥生	壷蓋	SC－06	3.1	良質．微細～中砂粒．雲母微細を比較的多く含む	良好	淡明黄橙色	ナデ	ナデ	一対の円孔
					15						
Fig13	19	弥生	無頸壷	SC－06	10.6	精良．微細～細砂粒と雲母微細を含む．僅少の赤褐色粒を含む	良好	（内）淡赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	外底面に淡黒斑
					12.8			（外）淡黄橙色		押圧ナデ	
					6.8				ナデ	ナデ	
Fig13	20	弥生	瓢形壷	SC－06	40.5	精良．微細～石英砂を比較的多く含む．雲母微細を含む	良好	（内）淡明黄褐色			
								（外）淡明黄橙色			
									ナデ	押圧ナデ	
Fig13	21	弥生	中型甕	SC－06	49.8	良質．微細～小砂粒を比較的多く含む．雲母微細を含む	良好	（内）淡明橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	外底面に2次被熱による赤変
					38			（外）明橙色		押圧ナデ	
										指頭押圧ナデ	
Fig13	22	弥生	甕	SC－06	6.8+ α	良質．微細～中砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	（内）淡明黄灰色	粗いタテハケ目	指頭押圧ナデ	
								（外）くすんだ淡赤橙色	ナデ		
					10.4						
Fig13	23	弥生	中型甕	SC－06	18.2+ α	微細～石英中砂粒と雲母微細を比較的多く含む．赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡橙色	ヨコナデ	押圧ナデ	
					36.6			（内面）やや黄橙色ぎみ			
Fig13	24	弥生	高坏	SC－06	6.0+ α	良質．微細～小砂粒、雲母微細を含む	良好	淡明黄橙色	ナデ？	押圧ナデ	
Fig17	26		ミニチュア鉢	SE－04	3.5	精良．微細～小砂粒と雲母微細を含む	良好	淡灰黄色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	胴部外面に黒斑
					5.2						
					1.6						
Fig17	27		ミニチュア鉢	SE－04	3.8	やや粗い．細～石英中砂粒を多く含む	良好	淡明黄褐色	ナデ	指頭押圧ナデ	
					4.7						
					2						

Tab.4　出土遺物(土器)一覧表 3

Fig	No.	時代	器種	遺構	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig17	28	弥生	小型鉢	SE－04	5.8	良質.微細～小砂粒を比較的多く含む.雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ	ヘラ状工具によるナデ	
					9.6				ナデ	指頭押圧ナデ	
					3.6						
Fig17	29	弥生	甕	SE－04	6.3+ α	良質.微細、石英小～中砂粒を比較的多く含む.雲母微細を含む	良好	(内)淡黄白色	ヘラ状工具によるナデ	押圧ナデ	
								(外)淡黄橙色			
					8.6						
Fig17	30	弥生	甕	SE－04	11.2+ α	良質.微細～小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を含む	良好	淡黄白色	粗いタテハケ目	押圧後ヘラ状工具による粗いナデ	胴部内面に籾圧痕
					7.4					指頭押圧ナデ	
Fig17	31	弥生	器台	SE－04	8.0+ α	良質.微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を含む	良好	(内)淡黄橙色	粗いタテハケ目	絞痕	
								(外)淡黄橙～赤橙色		指頭押圧ナデ	
					12.4						
Fig17	32	弥生	器台	SE－04	14.6+ α	良質.微細～小砂粒を含む.雲母微細を含む	良好	(内)淡灰褐色	粗いタテハケ目	押圧ナデ	
								(外)くすんだ暗灰黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	
					12.6						
Fig17	33	弥生	高坏	SE－04	12+ α	やや粗い.小～粗砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	淡黄灰褐色	ナデ	押圧ナデ	2次被熱による変色
										指頭押圧ナデ	
Fig17	34		ミニチュア鉢	SE－04	3.5	精良.微細～小砂粒少量を含む.雲母微細を含む	良好	淡黄橙色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	外部胴部に淡黒斑
					6						
					1.8						
Fig17	35	弥生	袋状口縁壷	SE－04下層	16～16.3	良質.微細、石英小～中砂粒を比較的多く含む.雲母微細を含む	堅緻	淡灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部外面に淡黒斑
					9.5				押圧ナデ	押圧ナデ	
					6.2～6.6				ナデ		
Fig17	36	弥生	袋状口縁壷	SE－04下層	23.2	良質.小～石英中砂粒を比較的多く含む.赤褐色粒を若干量含む	良好	灰黄褐色	ヨコナデ		胴部外面に淡黒斑
					8.8～9.0				粗いタテハケ目		
					7.4				指頭押圧ナデ		
Fig17	37	弥生	長頸壷	SE－04下層	18.1～18.5	良質.微細砂、石英小～中砂粒を多く含む.	堅緻	くすんだ灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部外面に淡黒斑
					8.6				ハケ目後ヨコナデ	指頭押圧ナデ	
					7.4				押圧ナデ後ハケ目		
Fig17	38	弥生	長頸壷	SE－04下層	18.3+ α	良質.微細、石英小～粗砂粒を多く含む.赤褐色粒を若干量含む	堅緻	くすんだ灰白色	ハケ目後ヨコナデ	ヨコナデ、絞り痕	底部外面に淡黒斑
									粗いタテハケ目	押圧ナデ	
					6.8				指頭押圧ナデ		
Fig17	39	弥生	袋状口縁壷	SE－04下層	22.0+ α	良質.微細、石英小～中砂粒を多く含む.雲母微細、赤褐色粒を含む	堅緻		押圧後ナデ	絞り痕	
									粗いハケ目		
					7.4				ナデ		
Fig17	40	弥生	壷	SE－04下層	21.0+ α	やや粗い.石英小～粗砂粒を多く含む.雲母微細、赤褐色粒を含む	堅緻	淡灰白色	ヨコナデ	指頭押圧ナデ	
									タテハケ目、ナデ	ヘラナデ	
					8.6				ナデ	指頭押圧ナデ	

Tab.5　出土遺物（土器）一覧表 4

Fig	No.	時代	器種	遺構	サイズ（器高・口径・底径）	胎土	焼成	色調	調整（外）	調整（内）	その他
Fig17	41	弥生	壷	SE－04下層	9.7+ α	良質．微細砂粒、石英小～中砂粒を比較的多く含む．雲母微細を含む	良好	（内）鈍い灰褐色	粗いハケ目	指頭押圧ナデ後ヘラ状工具によるナデ	
								（外）淡灰黄色	ナデ		
					7.2						
Fig17	42	弥生	台付甕	SE－04下層	6.2+ α	良質．微細～小砂粒を含む．雲母微細、赤褐色粒を少量含む	良好	（甕内）濃灰黒色	粗いタテハケ目	指頭押圧ナデ	底部外面に淡黒斑
								（台内～外面）淡黄灰色		ナデ	
					8.6						
Fig17	43	弥生	器台	SE－04下層	10.4	やや粗い．微細、石英小～中砂粒をやや多く含む．雲母微細を含む	良好	（内）くすんだ淡黄褐色	粗いタテハケ目	ナデ	
					10.6			（外）淡黄褐色	押圧ナデ	絞り痕	
					9.6					タテの指頭押圧	
Fig17	44	弥生	器台	SE－04下層	11.6+ α	やや粗い．中～粗砂粒を多く含む．雲母微細を含む	堅緻	（内）鈍い橙灰色	ナデ	指頭押圧ナデ	
								（外）くすんだ淡赤橙色			
					12.6						
Fig17	45	弥生	器台	SE－04下層	8.2+ α	やや粗い．微細、石英小～中砂粒を多く含む．雲母微細を少量含む	堅緻	ややくすんだ淡灰黄色	押圧ナデ	ヨコ方向の指頭押圧ナデ	外面に炭化物
									指頭押圧ナデ		
					11.6						
Fig19	46	弥生	甕	SE－99	8.6+ α	微細～石英小砂粒を比較的多く含む．雲母微細を含む	良好	（内）淡灰褐色	やや粗いハケ目	押圧ナデ	外面に炭化物様黒色物
								（外）淡灰～灰褐色	ナデ		
					6.8						
Fig25	49	弥生	丹塗無頸壷	SD－137	9.0+ α	良質．微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	（内）くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	丹塗り
					14.6			（外）暗赤褐色	ナデ後研磨？	押圧ナデ	
Fig25	50	弥生	小型壷	SD－137	9.3+ α	精良．微細～粗砂粒を少量含む．雲母微細を僅かに含む	良好	（内）淡黄白色	ナデ	指頭押圧ナデ	
								（外）淡明黄橙色			
Fig25	51	弥生	長頸壷	SD－137	9.8+ α	石英細～小砂粒を多く含む．雲母微細を含む	良好	（内）黄灰褐色	ナデ	指頭押圧ナデ	内面に粘土紐痕
								（外）淡黄褐色～暗灰茶色	ヨコナデ		
Fig25	52	弥生	二重口縁壷	SD－137	41.8	細～石英中砂粒を多く含む．雲母微細を含む	良好	（内）暗黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	波状文刻目突帯
					25.2			（外）淡黄褐色	タテ方向のタタキ後ナデ	タタキの当て具痕	
					9.7					指頭押圧ナデ	
Fig25	53	弥生	二重口縁壷	SD－137	47	良質．微細～小砂粒を比較的多く含む	良好	淡明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面にスス付着
					21				ハケメ状のタタキ	タタキの当て具痕	
					9.2					指頭押圧ナデ	
Fig25	54	弥生	二重口縁壷	SD－137	10.4+ α	微細～石英小砂粒と雲母微細粒を比較的多く含む	良好	明赤橙色	ヨコナデ	ハケ目	口縁部内外面に炭化物様黒色物
					18.3				押圧後やや細かいハケ目		
										押圧後ナデ	
Fig25	55	弥生	二重口縁壷	SD－137	17.0+ α	微細～小砂粒を比較的多く含む．雲母微細を少量含む	良好	淡黄灰色	やや粗いハケ目	ヨコナデ	
					23.6				ヨコナデ	ナデ後やや粗いハケ目	
										指頭押圧ナデ	

Tab.6　出土遺物(土器)一覧表 5

Fig	No.	時代	器 種	遺構	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig25	56	弥生	二重口縁壷	SD－137	76.4 ～ 77.2	粗い.細～石英粗砂粒を多く含む.雲母粒を比較的多く含む	堅緻	淡明赤橙色	やや粗いタテハケ目	やや粗いヨコハケ目	外面にマンガン付着
					35.2				タタキ	板状当て具痕	
					11				やや粗いタテハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig25	57	弥生	壷	SD－137	26.7+ α	微細～小砂粒と雲母粒を多く含む	良好	(内)淡黄灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
								(外)淡黄褐色	ハケ目		
					10.4				ケズリ状の掻き上げナデ	押圧後粗いハケ目.ナデ	
Fig25	58	弥生	壷	SD－137	6 + α	良質.細～小砂粒を多く含む.雲母微細を僅かに含む	良好	暗黄橙色	やや細かいタテハケ目	やや粗いハケ目	
										指頭押圧ナデ	
Fig25	59	弥生	甕	SD－137	10.2+ α	細～石英中砂粒を比較的多く含む.雲母微細と赤褐色粒を少量含む	堅緻	(内)淡明赤橙色	掻き上げ状のナデ上げ	掻き上げ状のナデ上げ	
								(外)暗黄橙色	ナデ	指頭押圧ナデ	
					9.2 ～ 9.6						
Fig25	60	弥生	甕	SD－137	39	微細～小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を含む	良好	(内)淡黄褐色	ヨコナデ		外面に炭化物様黒色物
					31			(外)黄褐色	やや細かいハケ目	ヨコナデ	
					7. ～ 7.5				ヘラケズリ	ハケ目	
Fig25	61	弥生	甕	SD－137	50	細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	淡黄白褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
					36.4				やや粗いハケ目	ハケ目	
					6.6				ナナメ方向のタタキ	指頭押圧ナデ	
Fig25	62	弥生	甕	SD－137	20.1	粗い.微細～石英粗砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面にスス状黒色物
					10.8				ヘラ状工具による粗いナデ	指頭押圧ナデ	
					6.2 ～ 7.2						
Fig26	63	弥生	丹塗高坏	SD－137	24.5+ α	粗い.細～石英粗砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面に丹塗内面に炭化物様黒色物
					27.8			(外)明赤橙色	ナデ～ハケ目	ナデ	
									絞り痕押圧ナデ		
Fig26	64	弥生	丹塗高坏	SD－137	10.8+ α	精良.細砂粒と雲母微細を含む	良好	明赤色	ナデ	ナデ	内外面に丹塗
								(脚内)淡黄橙色	ハケ目		
									指頭押圧ナデ		
Fig26	65	弥生	高坏	SD－137	10.5+ α	微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡明黄褐色	ナデ		
									押圧ナデ		
Fig26	66		高坏	SD－137	8.4+ α	微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	(内)淡黄橙色		ヘラケズリ	粘土紐
								(外)淡明黄橙色		ナデ後ハケ目	
					12.2						
Fig26	67		高坏	SD－137	7.6+ α	微細～石英小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	淡明赤橙色	ナデ	指全体による押圧ナデ	
					12.8				ヨコナデ	ヨコナデ	
Fig26	68	弥生	器台	SD－137	15	粗い.微細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	淡明褐色	ヘラ状工具によるナデ	指頭押圧ナデ	受部に黒色物 外面にマンガン
					10.4						
					12.7						

Tab.7　出土遺物(土器)一覧表 6

Fig	No.	時代	器種	遺構	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig26	69	弥生	器台	SD－137	17.7	やや粗い.微細～石英中砂粒を比較的多く含む.雲母微細を僅かに含む	良好	淡黄褐色	押圧ナデ	押圧ナデ後ハケ目	受部内面～外面全体炭化物様黒色物
					11				やや粗いタテハケ目		
					12.5				押圧ナデ		
Fig26	70	弥生	器台	SD－137	10.2+ α	石英細～小砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	(内)淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
					13.2			(外)淡黄灰色	タタキ痕	指頭押圧ナデ	
Fig26	71	弥生	器台	SD－137	13.2+ α	細～石英小砂粒と雲母微細を含む	良好	(内)淡赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
					13.7			(外)淡灰黒色	ハケ目	タテ方向押圧ナデ	
Fig26	72	弥生	器台	SD－137	23.8	粗い.細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
					14.7				やや粗いタテハケ目	指頭押圧ナデ	
					18.4					やや粗いタテハケ目	
Fig26	73		小型丸底壺	SD－137	9.6	良質.微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	2次被熱によるスス付着黒変
					8.8				やや粗いハケ目	指頭押圧ナデ	
									ナデ		
Fig26	74		坏	SD－137	5.5	良質.細～小砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	(内)明赤橙色	ヨコナデ	押圧ナデ	
					13.5			(外)淡黄白色	ヘラケズリ		
Fig26	75		坏	SD－137	5.2	精良.微細～細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	淡灰紫色	ヨコナデ	ヨコナデ	
					13.4						
					9.2				ナデ	ナデ	
Fig26	76		ミニチュア鉢	SD－137	3.3	微細～細砂粒を比較的多く含む.石英小砂粒と雲母微細を僅かに含む	良好	淡灰茶色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
					4.7				ナデ		
					3.1						

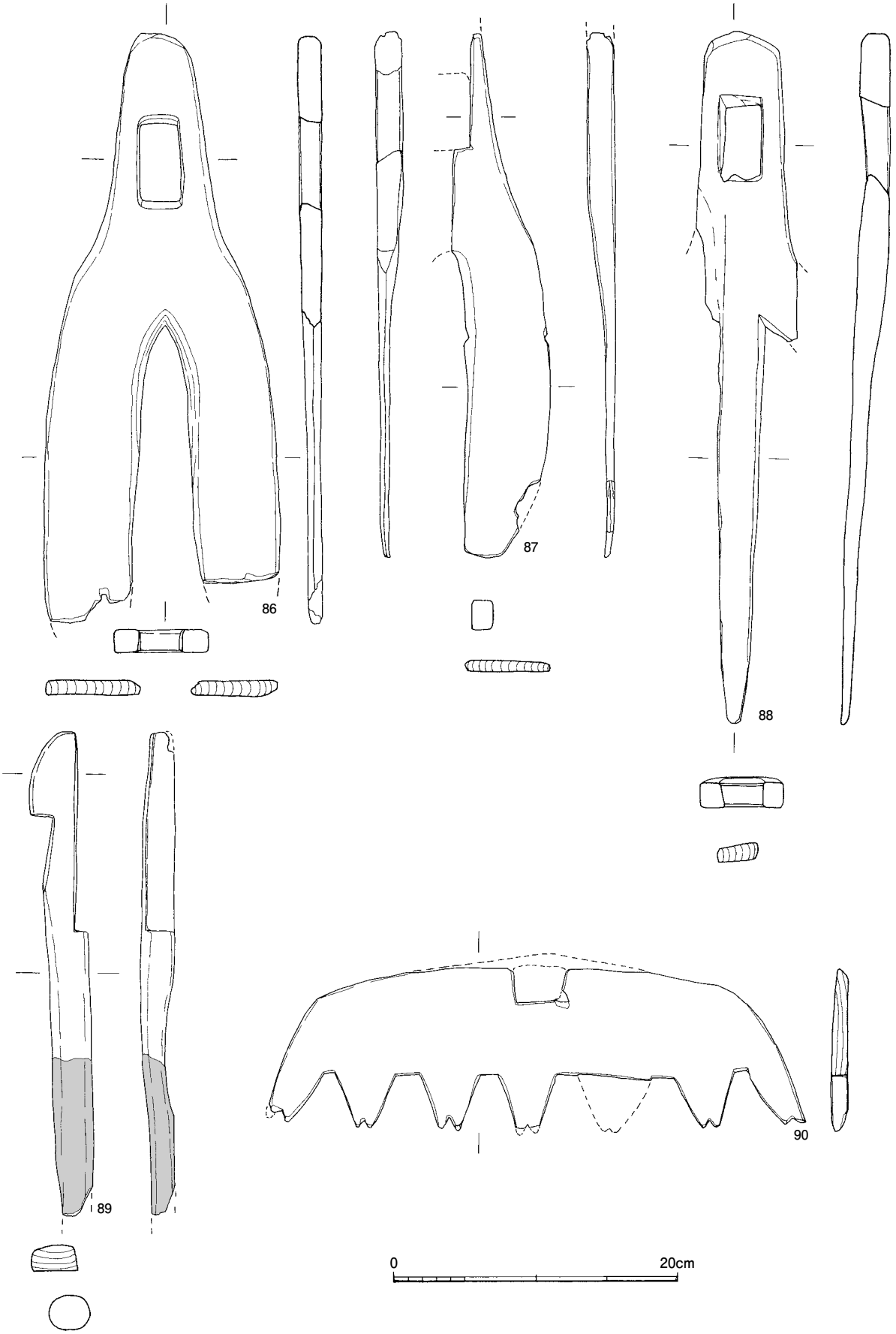


Fig.28　137 号河川出土遺物実測図 4 (1/4)

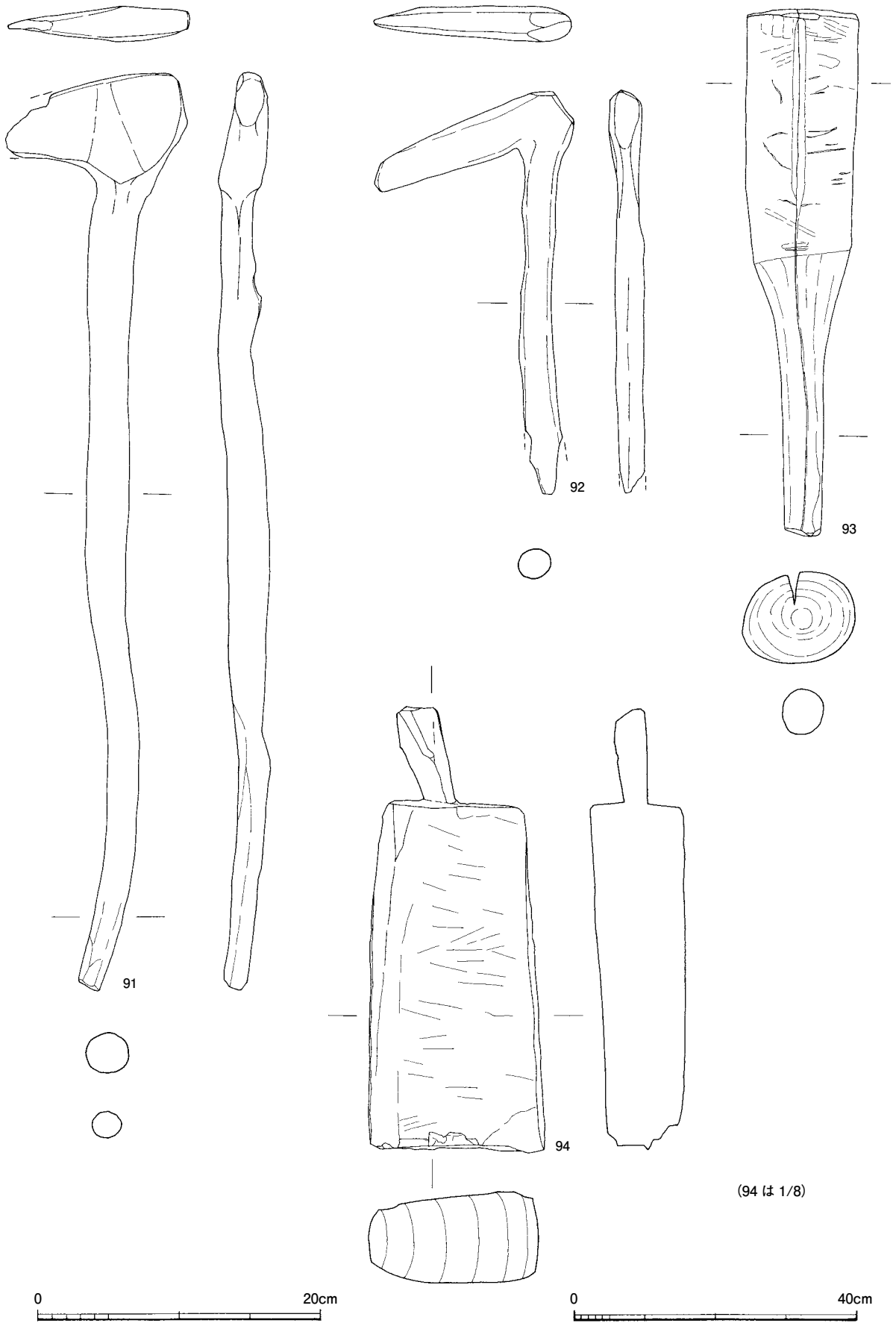


Fig.29　137 号河川出土遺物実測図 5 (1/4・1/8)

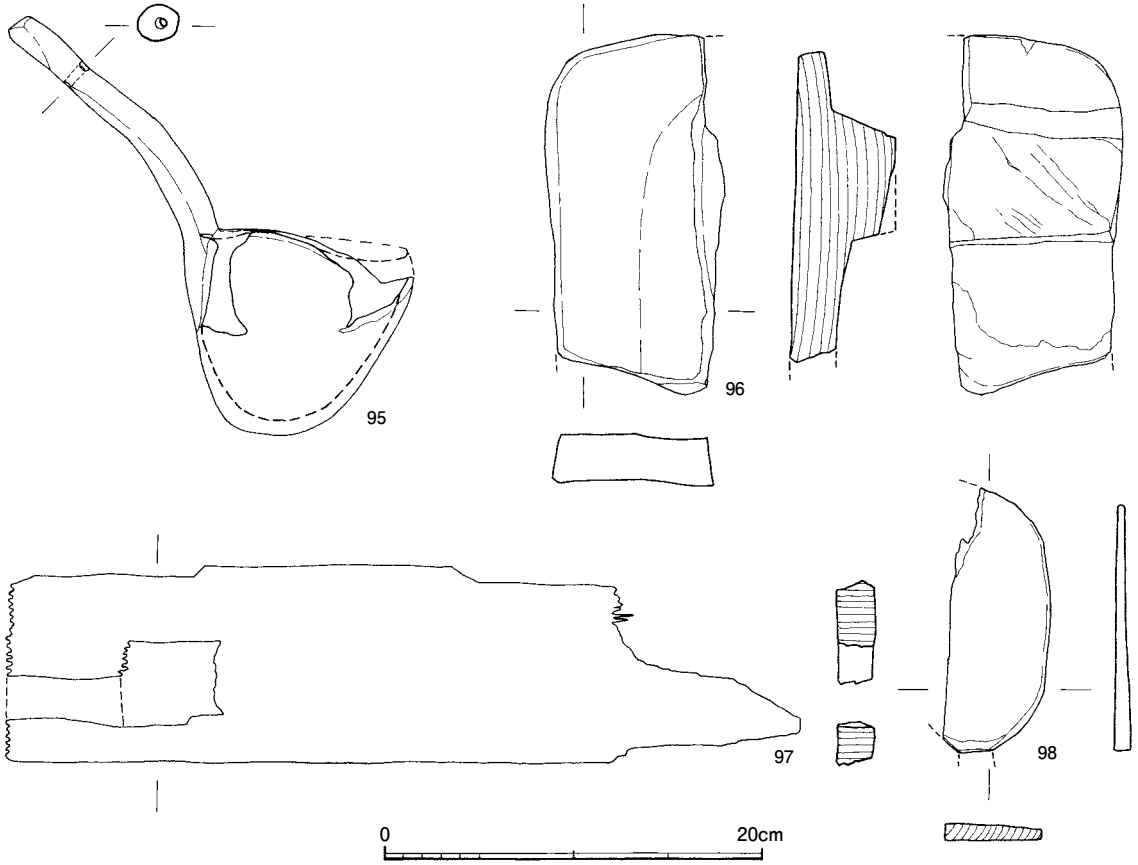


Fig.30　137 号河川出土遺物実測図 6（1/4）

出土遺物（Fig. 28　PL. 11 ～ 14）

86 から 90 は農具で、すべてカシ材である。86・87 は方形孔の二又鍬で、いずれも柾目材である。86 は歯の先端を欠損する。孔のつくりから柄との角度は鈍い。87 は全体の左半分を欠損するが、孔の観察から柄との角度は 86 よりも急である。88 は方形孔の三又鍬で柾目材を用いる。左右の歯を欠損する。柄との角度は 87 と同様である。全体に丁寧な面取りが施される。89 は鍬の柄である。柄の端部は焼けており、本来の長さは不明。先端部の加工は丁寧である。90 はエブリで柾目材を用いる。7 本歯で、歯の先端に切れ込みがある。全体に丁寧なつくりで、柄を装着する孔の部分と歯の一部を欠損する。91・92 は鉄斧の柄である。いずれもサカキを使用しており、鉄斧を装着する側が幹、柄の部分が枝部分である。91 は鋳造鉄斧の柄である。柄の端部と鉄斧の装着部分は丁寧に面取りされている。92 は袋状鉄斧の柄である。鉄斧の装着部分は丁寧に加工されている。先端部のみ残存。93 は横槌である。ヤブツバキの芯持材を用いる。表面は敲打痕がみられ、使用のため断面は楕円に変形している。柄の端部は面取りが明瞭である。搗部は未使用である。94 は把手付きの作業台である。カシ材の柾目材を用いる。表面に金属の刃物の痕跡が多数見られる。柄と反対側の端部は切断した痕跡が良く残る。95 は杓子である。クスノキの瘤を利用しており、内面を幅 5mm 位の彫刻刀の丸刀状の工具でヨコ方向に削り出して、身の部分を作り出す。柄には穿孔がある。96 は椅子か連歯下駄の一部と考えられるが、中央部にすり減ったような浅い凹みがあり、椅子である可能性が高い。接地面にはナナメ方向のキズが多数見られる。97 は机の天板である。スギの柾目材を用いており、板状の脚がつく机と思われるが、蟻じゃくりのミゾなどの加工は見られない。方形の孔は意図的なものではなく、欠損したものかもしれない。98 は団扇である。ガマズミ属の追柾目材を、長楕円形に丁寧に

加工し、表面を黒色に塗る。柄が付いていた痕跡がある。99 はタモ網の枠である。マキ属の枝材に網を付けるための小孔を多数設けている。枝の幹側に四角い孔をつくり、先端側を孔に差し込んで輪にして使用するが、先端側は欠損している。100 から 105 は杭材である。100・101 は横架材を転用している。100 は断面を横長六角形に面取りした芯持材で両端が尖るが、一方には横架材として使用した際に加重で曲がったと思われる凹みがある。もう一方は明瞭な加工痕が残り、こちらは杭用に再加工された可能性がある。101 も 100 と同様であるが、断面は四角形に面取りしている。両端とも尖り、加工上の差は見られないことから、横架材として使用時には、すでに両端とも尖る加工が施されていたと考えられる。102・104 は垂木を転用しており、芯持材を使用している。102 は他の建築材と組み合わせるために V 字状の切り込みが施される。104 は先端部が加重により変形している。103 はサスを転用した杭で樹皮が残る芯持材である。垂木の可能性もあるが、直径が 9cm 前後と太く、サスとした。先端部の杭の加工痕とは別に、他の建築材と組み合わせる為の加工がある。105 は樹皮の残る自然木の芯持材を杭に加工したもので、杭の加工痕が明瞭である。反対の端部は欠損している。今回図化したもののほかにも、138 号井堰状杭列を中心に、多量の杭、柱材などの建築部材、槽や農具などの破片が出土したが、多量で残存状態も良くないため、計測値を中心に表に示した。（谷　直子）

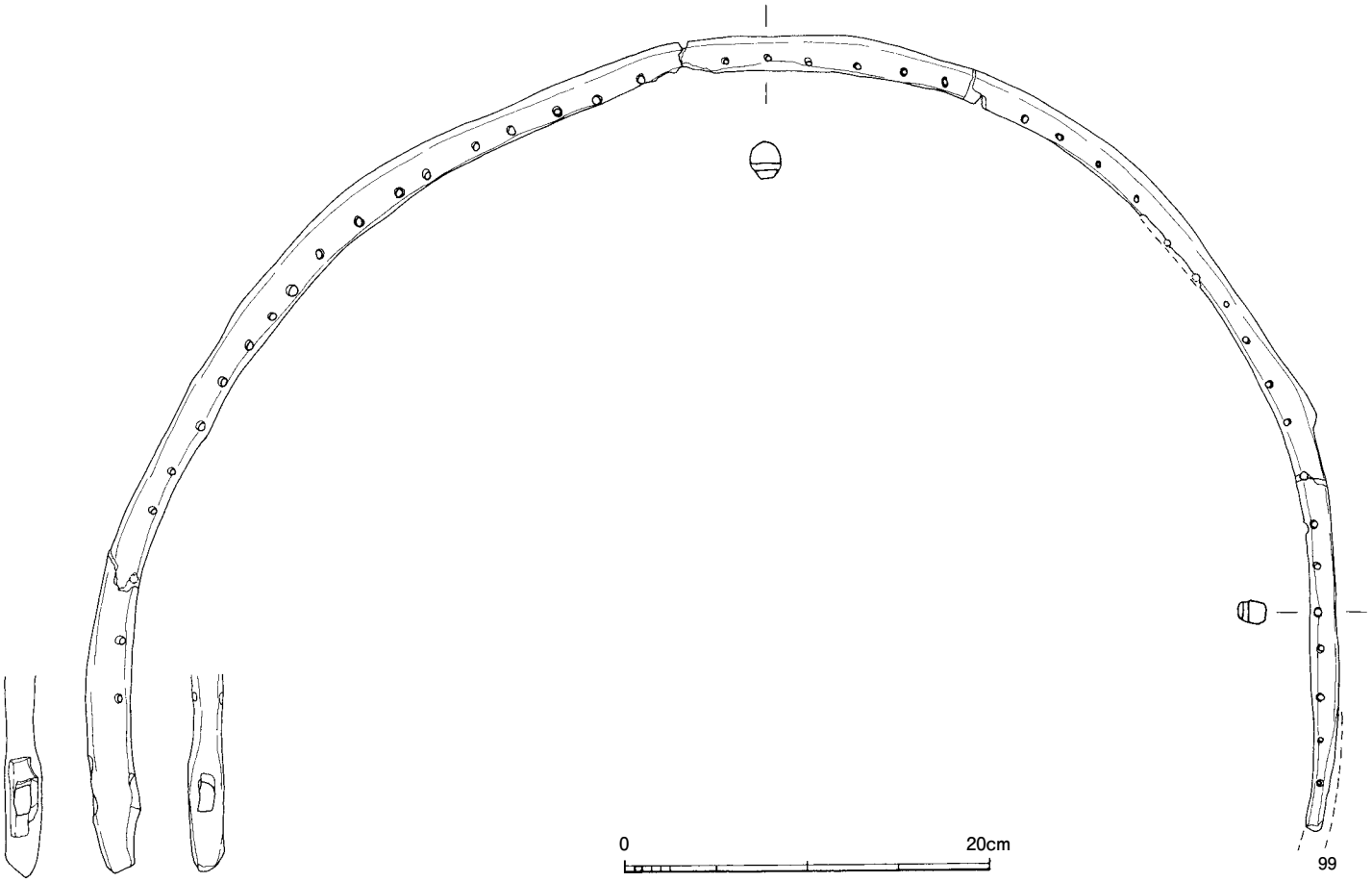


Fig.31　137 号河川出土遺物実測図 7（1/4）

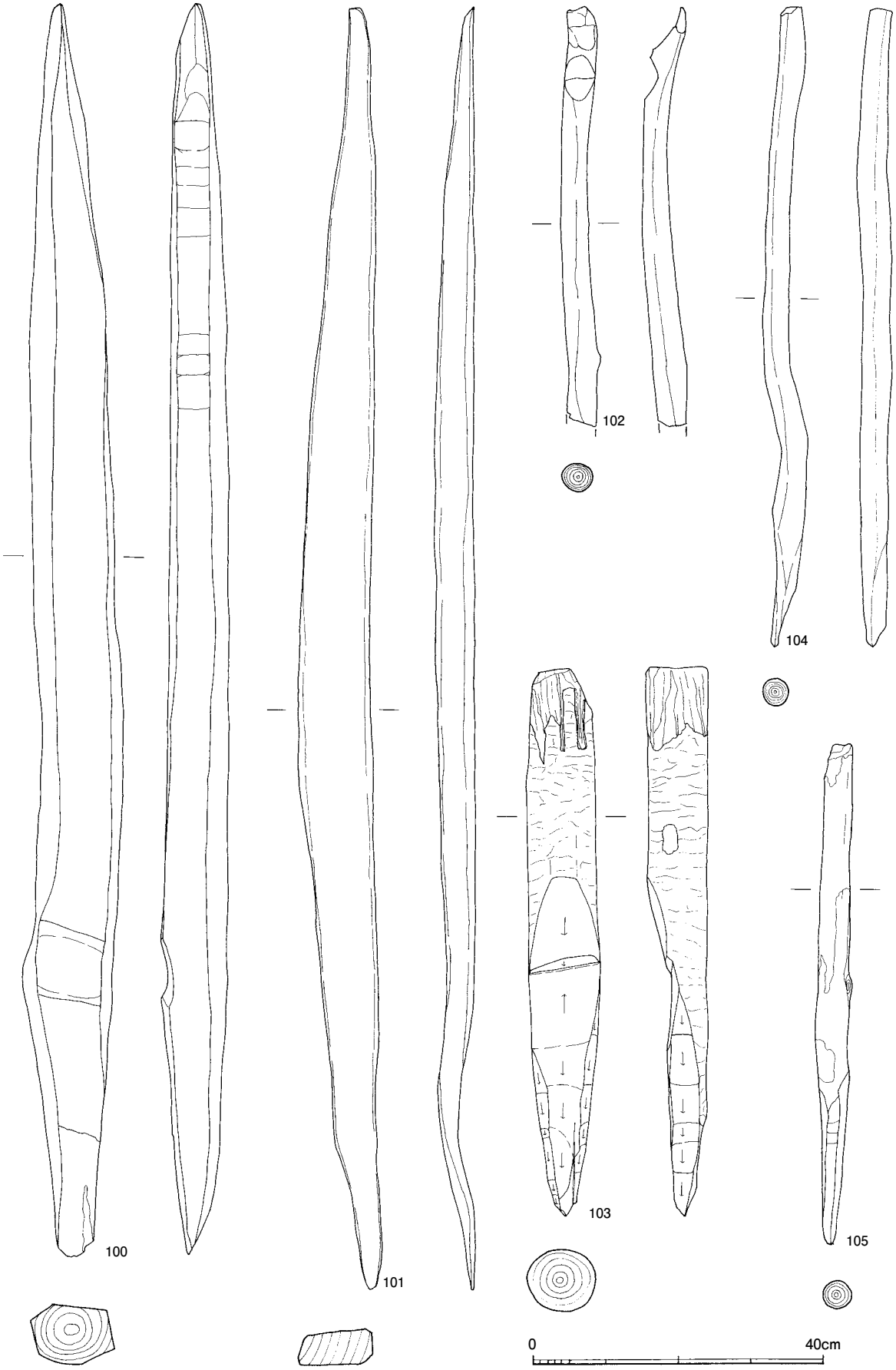
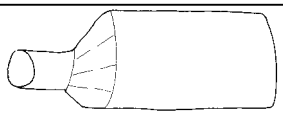
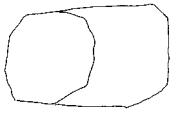
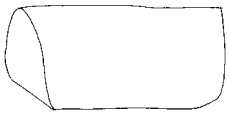
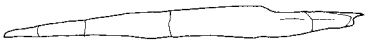
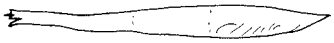


Fig.32　137 号河川出土遺物実測図 8 (1/8)

Tab.8　出土遺物（木製品）一覧表 7

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
Fig28－86		方形孔の二又鍬	コナラ属アカガシ亜属	柾目	41.7 16 1.6	4c ～ 5c 孔のつくりは比較的真直ぐで 柄の角度は鈍い
Fig28－87		方形孔の二又鍬	カシ	柾目	37 5.8 1.8	孔の部が欠損していて 柄の角度は不明
Fig28－88		方形孔の三又鍬	カシ	柾目	48.7 6.5 2.2	4c ～ 5c のものか 全体に丁寧な加工が施される
Fig28－89		柄	広葉樹	板目	34 3.5 2.3	柄の下端部分が火を受けている
Fig28－90		エブリ？	コナラ属アカガシ亜属	柾目	11.5 37.7 1	全体に丁寧な加工が施される
Fig29－91		鋳造鉄斧の柄	サカキ	枝部分	65 13 3	柄が枝部分 鉄斧の装着部分が幹側である
Fig29－92		袋状鉄斧の柄	サカキ	枝部分	28.5 14 2.5	柄が枝部分 鉄斧の装着部分が幹側である
Fig29－93		横槌	ヤブツバキ	芯持材	37.2 8 6.4	表面に敲打痕が残り、断面形は つぶれて楕円形を呈する
Fig29－94		作業台	コナラ属アカガシ亜属	柾目	61 ～ 61.7 23 ～ 25 12.4 ～ 13.5	表面に金属器による 刃物痕が残る
Fig30－95		杓子	クスノキ		26.6 12 9	木のこぶを利用し、こぶの内側を 横方向にケズリ出して杓子部分を つくり出す。把手に穿孔する
Fig30－96		連歯げたの断欠品か椅子	広葉樹	板目	13.8 9.3 5.2	中央部にすりへりがみられる 下駄の歯状の部分には ナナメ方向のキズが多数
Fig30－97		机の天板板状の脚がつく	スギ	柾目	41.8 10.4 2	板状の脚が付く机の天板と 思われるが蟻ミゾの加工は 見られない
Fig30－98		団扇儀器	ガマズミ属	柾目	13.8 5.3 0.8	表面は黒塗りされている
Fig31－99		タモ枠	マキ属		69.5 2.8 2	端部同士を差込あわせて 輪にして使用
Fig32－100		横架材を転用した杭	広葉樹	芯持材	176 11.5 8	断面六角形に加工した横架材を 杭に転用。加重で変形してない方 の端部を杭に再加工
Fig32－101		横架材を転用した杭	広葉樹	柾目	126.8 10 5	両端を尖らせ断面四角形に 加工している杭に転用している が、杭の為の再加工はない
Fig32－102		垂木を転用した杭	広葉樹	芯持材	88 4.5 4	先端をＶ字状に加工した垂木を 杭に再加工している
Fig32－103		サスを転用した杭	広葉樹	芯持材	75.3 ～ 77 8 ～ 9 8 ～ 9.5	樹皮付き自然木にサスとして 使用する為の加工後 杭材に再加工して転用している
Fig32－104		垂木を転用した杭	広葉樹	芯持材	58 4.5 4	垂木を転用したと思われる 杭用に先端を加工している
Fig32－105		杭	広葉樹	芯持材	68 4.3 3.9	樹皮付き自然木を 杭として先端加工

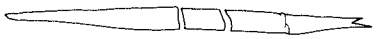
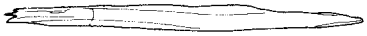
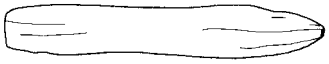
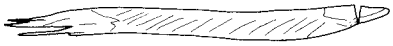
Tab.9　出土遺物(木製品)一覧表 8

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
SD－137 砂層		杵状	広葉樹			柱の上端部の受け
SD－137 下層		板材破片				ホゾ孔
SD－137 下層		柱材 農具素材か	アカガシ	ミカン 割り材		直径 20cm 位 長上 40cm+ α
SD－137 下層		構造部材			35 12 12	
SD－137 下層		横架材片		柾目	20 15 5	一部炭化 くさび割りにして製材
SD－137 2996		板材 大型槽の 断欠品	針葉樹		54 15 5	
SD－137 2997		板材 鍬				方形孔
SX－138 杭列3		杭		芯持材	69 6	樹皮付きの自然木の 一方の先端を杭に加工
SX－138 杭列4		杭		半割材	95 12.5 6.5	一方の先端を杭に加工
SX－138 杭列5		杭		芯持材	88.5 6 3.5	樹皮付きの自然木の 一方の先端を杭に加工
SX－138 杭列6		サス木を 転用した 杭	広葉樹	芯持材	52.5 8 ～ 9 8 ～ 9	サスとして使用した時の 切り込み加工有 その後杭に再加工
SX－138 杭列7		杭		芯持材	92.5 7 4	一方の先端に杭用の加工有
SX－138 杭列9		杭		芯持材	96.5 9 3.5 ～ 5.5	樹皮付きの自然木の 一方の先端に杭用加工有
SX－138 杭列10		杭		芯持材	82 7	樹皮付きの自然木の 一方の先端に杭用加工有
SX－138 杭列11		杭		芯持材	74 8.5	樹皮付きの自然木の 一方の先端に杭用加工有

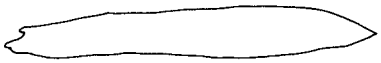
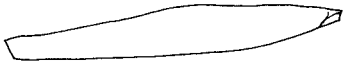
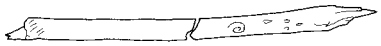
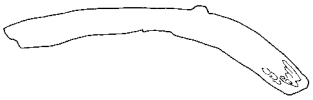
Tab.10　出土遺物（木製品）一覧表 9

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
SX－138 杭列12		杭		芯持材	79 8.5	樹皮付きの自然木の 一方の先端に杭用加工有
SX－138 杭列13		杭		芯持材	70.5 7.5	樹皮付きの自然木の 一方の先端に杭用加工有
SX－138 杭列14		杭	広葉樹	芯持材	60.5 6.5 ～ 9 6.5 ～ 9	加工痕は不明 両端を欠損
SX－138 杭列15		板材 長ホゾ柱を 転用した杭		柾目	117 9 4.5	側面に 5cm × 2.5cm × 8mm 位の ホゾ孔有
SX－138 杭列16		垂木を 転用した杭		芯持材	117 70	自然木に他の木材と 組み合わせる為の加工をしている 一方の先端を杭に再加工
SX－138 杭列17		横架材を 転用した杭		芯持材	90 6.5 5.5	加圧により幅 15cm 程のくぼみが 有
SX－138 杭列18		杭		芯持材	104 7.5 7.5	樹皮付きの自然木の 一方の先端に杭用の丁寧な加工
SX－138 杭列19		建築材を 転用した杭		芯持材	97 5.5 5.5	樹皮付き自然木の両端を加工 枝はとってある
SX－138 杭列20		杭		芯持材	101 8	樹皮付きの自然木の 一方の先端面を杭用加工
SX－138 杭列21		垂木を 転用した杭		芯持材	68 7 6	元々の曲がりに加工して 垂木の仕口にしている その後杭に再加工
SX－138 杭列22		杭？		芯持材	253 9.5 7.5 ～ 9.0	磨滅が激しいが 先端は杭用にとがる
SX－138 杭列23		柱か横架材 を転用した 杭		芯持材	130.5 7 ～ 8 7 ～ 8	全体に方形になるよう面取加工後 杭用に一方を再加工
SX－138 杭列24		杭		芯持材	111.5 8	樹皮付き自然木の 一方の先端を杭用に加工
SX－138 杭列25		杭		芯持材	107 6.5 6.5	自然木の両端を加工している 一方は丁寧な面取り加工
SX－138 杭列26		柱か横架材 を転用した 杭		半割材	175 4.3 5.3	両端とも加工が有 . 側面も面取り しているので横架材として使用時 に既に両端を加工したと考えられ る

Tab.11　出土遺物（木製品）一覧表 10

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
SX－138 杭列28		杭		半割材	172 12 5.5	一方の先端を杭用に加工 もう一方は欠損
SX－138 杭列29		板材		板目	50 9 2.5	目立つ加工はない
SX－138 杭列30		柱か横架材を転用した杭		ミカン割材	178 7.5 ～ 9 6	先端を杭用に加工
SX－138 杭列31－①		不明		半割材	50 5 3	半割材で加工は不明
SX－138 杭列31－②		杭		芯持材	55 8 8	一方の先端を杭用に加工
SX－138 杭列32		杭		芯持材	128.5 9 5.5	先端を一部加工か
SX－138 杭列32－①		杭		半割材	134 7.5 6.5	面取加工有 先端も杭用の加工有 後に欠損
SX－138 杭列32－②		杭？		芯持材	64.5 5.8 6	目立つ加工はない
SX－138 杭列34		杭？		芯持材	78 9 7	目立つ加工はない
SX－138 杭列35		柱か 横架材を 転用した杭	ツブラジイ	半割材	189.5 10 5.5	横架材として使用時の加圧による へこみと仕口としての加工 杭として使用するための加工有
SX－138 杭列36		杭？		芯持材	176 11.5 8	
SX－138 杭列37－①		杭		半割材	29 5 ～ 8.5 5 ～ 8.5	元は柱かもしれないが痕跡無
SX－138 杭列37－②		杭		半割材	100 6 ～ 9.6 6 ～ 9.6	樹皮付きの半割材の 一方の先端を杭用に加工
SX－138 杭列38		杭		芯持材	151 10 10	一方の先端を杭用に加工
SX－138 杭列39		杭		芯持材	158 8.5 9	樹皮付き自然木の 一方の端部を加工 洞がある

Tab.12　出土遺物（木製品）一覧表 11

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
SX－138 杭列40		杭		芯持材	145 6 ～ 7 6 ～ 7	樹皮付き自然木の 一方の先端を杭用に加工
SX－138 杭列41		垂木を 転用した杭		半割材	130.5 10 5.5	垂木用に浅い刻りこみが有 その後杭に再加工
SX－138 杭列42		杭？		芯持材	124 6.5 	目立つ加工はない
SX－138 杭列43		柱材		芯持材	116 13.5 9.5	こげ（ふし穴で加工ではない） 焼けた痕のある柱材
SX－138 杭列44		柱材？		芯持材	93.5 11 ～ 12.5 11 ～ 12.5	横架材をのせるための 仕口加工有
SX－138 杭列102		板材	針葉樹	柾目	56 8 1.5	
SX－138 杭列104－①		杭		芯持材	124.5 7 6	焼けている 杭用の加工有
SX－138 杭列104－②		又柱を転用 した杭		芯持材	79 13.5 8	紐かけ痕有
SX－138 杭列106		不明		半割材	86 7.5 3.5	自然木 火災にあっている
SX－138 杭列109		底板			26 9 0.7	5mm の穿孔
SX－138 杭列110		棒状材			53 4 5	焼け痕有
SX－138 杭列112		曲物の底？			36 6 1.5	
SX－138 杭列114		板材			41 5 0.8	
SX－138 201		垂木を 転用した杭		芯持材	116 5.0 ～ 6.5 5.0 ～ 6.5	樹皮付きで杭用の加工有
SX－138 202		垂木を 転用した杭			103 7 7	自然木の曲りを利用して 垂木として使用後杭に利用 巾 5mm の紐かけ痕有

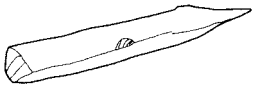
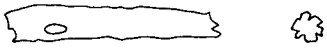
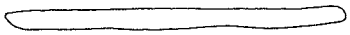
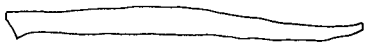
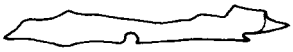
Tab.13　出土遺物（木製品）一覧表 12

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
SX－138 203		杭		芯持材	102 7.0 ～ 9.0 7.0 ～ 9.0	先端を杭用に加工
SX－138 204		垂木を 転用した杭		芯持材	86 7 	垂木として使用する為の えぐり加工有 杭用の再加工有
SX－138 501				芯持材	75.5 3 ～ 4 3 ～ 4	樹皮付き自然木 加工痕なし
SX－138 502		不明		芯持材	65 3 ～ 3.5 3 ～ 3.5	樹皮付き自然木 加工痕なし
SX－138 503		杭		芯持材	54.5 6 6	樹皮付き自然木 一方の先端に杭用の加工
SX－138 504		杭		芯持材	50 4.5 ～ 5.5 4.5 ～ 5.5	樹皮付き自然木 一方の先端に杭用の加工
SX－138 505		加工棒材を 杭用に転用		芯持材	48 4 4	一方の端部は四角形に加工 もう一方の端部を杭用に加工
SX－138 506		横架材の 一部		板目	48 10 4	面取加工 両端は欠損
SX－138 507		横架材の 一部		板目	39 9.5 2.5	面取加工 両端は欠損
SX－138 508		棒状材	広葉樹	板目	65.5 8.5 5	四角に面取加工
SX－138 509		杭		芯持材	72 4.5 4.5	樹皮付き自然木の 一方の先端を杭用に加工
SX－138 510		杭		芯持材	71 7 7	樹皮付き自然木の 一方の先端を杭用に加工
SX－138 511		建築材		芯持材	57 9 8	自然木 柱などか？ 加工痕不明
SX－138 512		杭 横架材を 杭用に転用		ミカン 割材	92.2 9 4.5	面取加工後に 一方の先端を杭用に加工
SX－138 513		杭？		芯持材	132.5 4.5 3.5	樹皮付き自然木 一方の先端に杭用加工

Tab.14　出土遺物(木製品)一覧表 13

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
SX－138 514		杭		芯持材	60.5 5.3 5	樹皮付き自然木 一方の先端に杭用加工
SX－138 515		杭			88.5 5 4.5	樹皮付き自然木 一方の先端に杭用加工
SX－138 516		不明		芯持材	199 6.5 6	樹皮付き自然木 磨耗が激しい
SX－138 517		横架材の 転用した杭		芯持材	28 9 6.5	仕口の為の加工有 仕口と反対の端部が焼けている
SX－138 518		不明		芯持材	42 6 5	樹皮付き自然木 加工不明 両端が切り落とされている
SX－138 519		不明		芯持材	62 7.5 5	樹皮付き自然木 両端が折れている
SX－138 520		建築材	針葉樹	半割材	72 12 5	くさびを入れたり半割りする時に 出来たキズがある
SX－138 521		柱材		芯持材	203 8.5 ～ 14 8.5 ～ 14	樹皮付き 長ホゾ柱の可能性有
SX－138 522		角材		板目	166 12 3.5	柱材か 表面に手斧痕が残る
SX－138 523		柱材		芯持材	71 8 ～ 10.5 8 ～ 10.5	一方の端部にホゾ孔の加工痕有
SX－138 524		サスか 垂木を 転用した杭		芯持材	130 8.5 	樹皮付き自然木に垂木かサスとし て使用するための仕口有 その先端を杭に再加工
SX－138 525		柱材を 転用した杭		芯持材	58 5.5 ～ 7 5.5 ～ 7	樹皮付き ホゾ孔の加工有 先端は杭用に丁寧な加工
SX－138 526		杭		芯持材	41 4.5 ～ 6 4.5 ～ 6	樹皮付き自然木の 一方の先端を杭用に加工
SX－138 527		不明		芯持材	58 10 6.5	樹皮付き自然木 加工不明
SX－138 528		板材か 壁材		板目	45 13 4	薄い板目板だが磨耗が激しい

Tab.15　出土遺物（木製品）一覧表 14

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
SX－138 529		杭		芯持材	53 6 4.8	一方の端部を杭に加工 もう一方の端部は焼けている
SX－138 901		杭？		芯持材	82 6.5 ～ 9 6.5 ～ 9	磨滅が激しく加工痕不明
SX－138 902		杭		半割材	70 12 6.5	杭用に先端をやや粗く加工
SX－138 904		棒状材	針葉樹	芯持材	84.5 2 1.8	加工痕不明
SX－138 905		杭		芯持材	105 9 6	杭用に先端を加工
SX－138 906		杭？		芯持材	95 8.5 7	自然木の枝分かれした部分 焼けている
SX－138 907		板材		半割材	78.3 9.3 2.8	一方の端部に加工有
SX－138 908		板材	広葉樹	板目	63 11 1.5	磨滅が激しい
SX－138 908		板材		板目	47 6.5 2	磨滅が激しい
SX－138 909		柱材		芯持材	78 12 12.5	樹皮付き 目立つ加工痕なし

3　古墳時代の調査

古墳時代の遺構としては、土壙２基と旧河川１条を検出したのみで数的にはきわめて少ない。唯一検出した２基の土壙は、丘陵の南東部に隣接しており、立地的には丘陵が西の丘陵頂から東の沖積地にむかって緩やかに傾斜してゆく丘陵端に占地している。昭和初期までは、小高い丘陵があったが、開削によって丘陵全体が大きく削平されて一帯は耕地化している。そのため調査区の大半は、南東部の遺構群を除いて丘陵とともに消失しているが、これを加味しても弥生時代の遺構群に比べて密度的にはきわめて稀薄であり過ぎる。このことは､集落域自体が拡がっていないことを示していると云え、これが本調査区周辺に限ってのことなのか、あるいは丘陵全域にわたってのことかは即断できない。一方、調査区東辺から西へ延びた後に緩やかに流れを変えて北西流する旧河川は、丘陵の東部を 10 次調査区から 12 次調査区へ続く流路で、両調査区と同様に多種多様な遺物が多量に出土した。

1）土　壙（SK）

土壙は、調査区の南東部で２基を検出したが、丘陵の開削に因る消失が著しい。殊に、丘陵の東縁に位置する 12 号土壙は、近世以降の水田化に伴って 1m ほど更に削平されている。この河段面にある土壙の壙底からは湧水が観察された。本来的には河床にむかって緩やかに傾斜してゆく丘陵縁に占地していることと河床に近いことを勘案すると、井戸の可能性をまったく否定することは出来ない。

12 号土壙　SK － 12（Fig. 34　PL. 15）

12 号土壙は、調査区の南東部に拡がる遺構群の中でもっとも東に位置する小型の土壙である。立

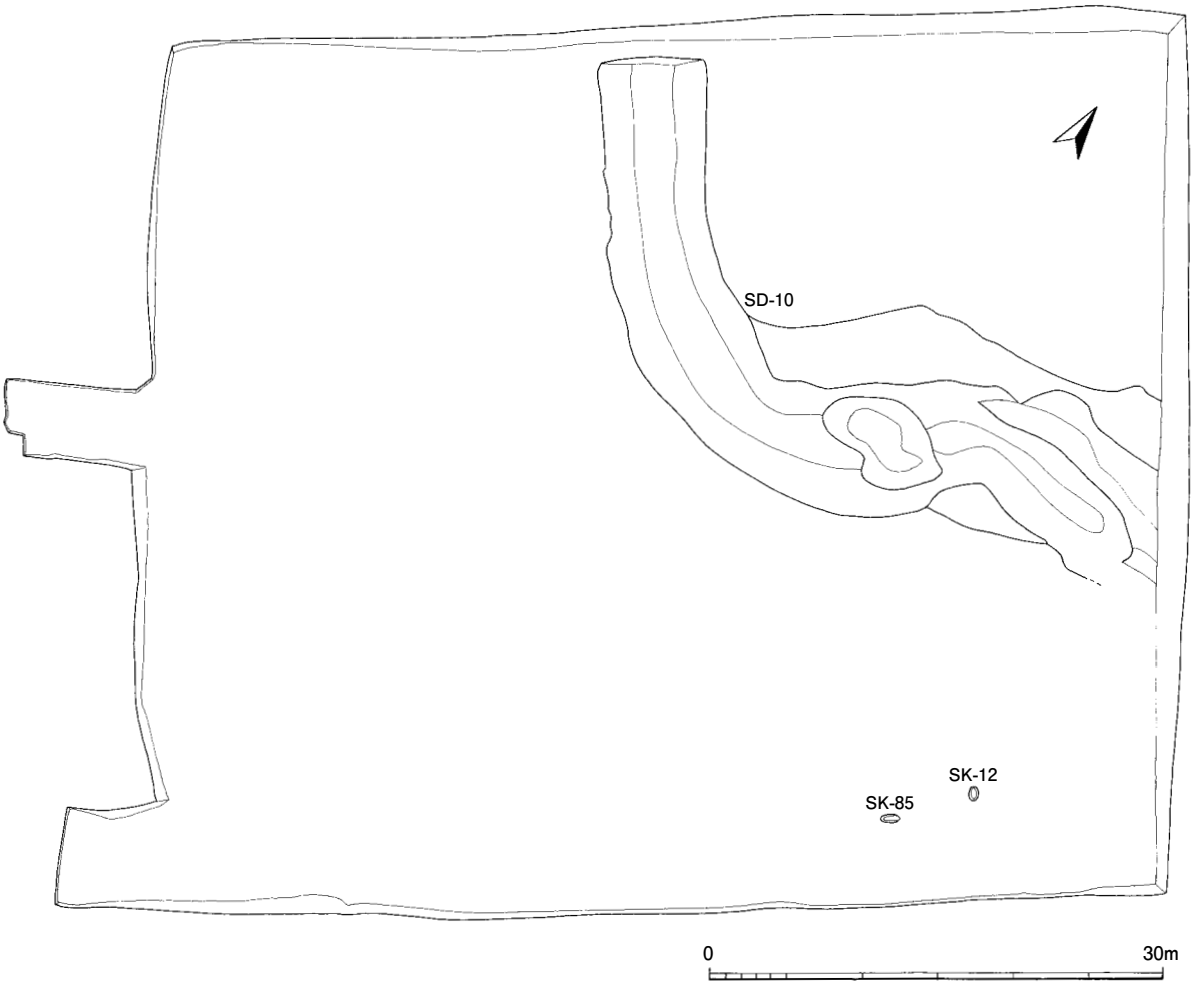


Fig.33　古墳時代の遺構配置図（1/500）

地的には、水田化による開削で1段低くなった段丘上に占地しており、南へ3mの距離には9号井戸がある。平面形は、短辺が66cm、長辺が85cmの隅丸方形プランを呈する。壁面は急峻に立ち上がる。壁高は85cmで、断面形は浅い舟底状を呈する。覆土は、茶褐色土の単一層で、壙底は灰白色粘土粒を含んだ暗茶褐色土層が堆積していた。遺物は、小型丸底壷や土師器甕が比較的まとまった状態で出土した。壙底より30cmほど上層に鳥栖ローム層と八女粘土層の境があり、若干の湧水が観られた。検出面が水田化の開削によって大きく削平されていること等を勘案すると、井戸の可能性もなくはない。

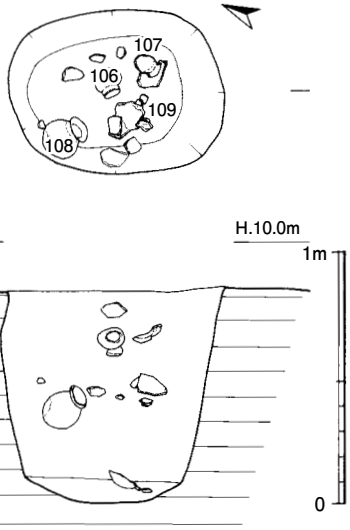


Fig.34　12号土壙実測図(1/30)

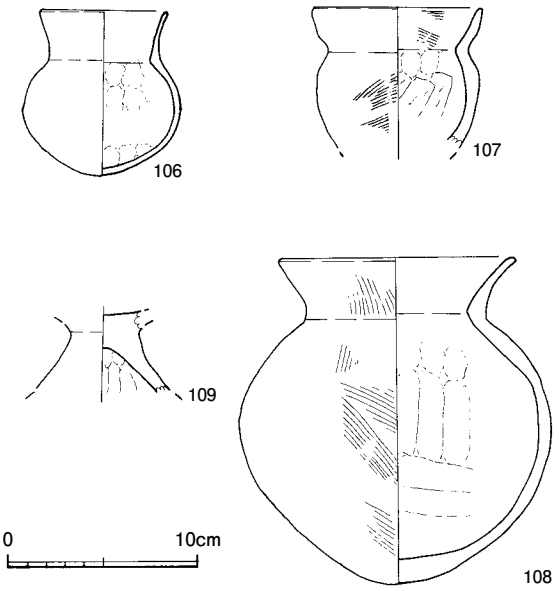


Fig.35　12号土壙出土遺物実測図(1/4)

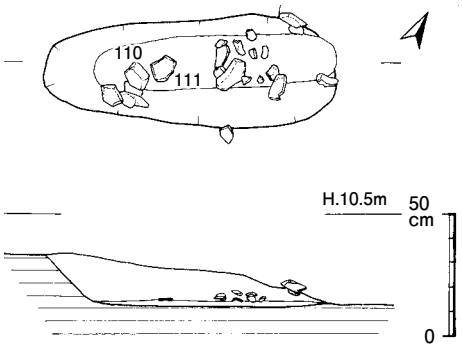


Fig.36　85号土壙実測図(1/30)

出土遺物（Fig. 35）

106・107は小型丸底壷である。106は口径が6.8cm、器高は8.8cm。口縁部は偏球形の胴部から緩やかに屈曲してストレートに外反する。胎土には比較的多くの微細～小砂粒、雲母微細と少量の赤褐色粒を含む。赤橙～くすんだ黄橙色。107は口径が9cm。口縁部は内彎気味に立ち上がる。淡灰黒色。108は口径が12.6cm、器高が17.2cmの小型甕である。「く」字状の口縁部は鋭く外反し、短い倒卵形をなす胴部外面にはタタキ痕が残る。外面は明橙色、内面は淡明橙色～灰褐色。109は土師器高坏の脚部。脚部は朝顔状に大きく外反する。胎土は精良で、微細～小砂粒と雲母微細を含み、色調は淡黄橙色。

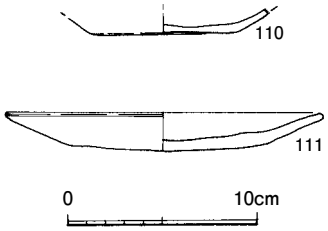


Fig.37
85号土壙出土遺物実測図(1/4)

85号土壙　SK－85（Fig. 36）

85号土壙は、調査区の南東部に拡がる遺構群の南東部に位置し、すぐ南には9号井戸が、西には8号木棺墓がある。平面形は、東小口壁が消失しているが、短辺が45cmの長方形プランをなし、長辺は140cmほどになろうか。壁面は、北側壁がやや急峻なほかは緩やかに立ち上がる。壁高は25cmである。壙底は、中央にむかって緩やかに傾斜し、断面形は浅い舟底状をなす。覆土は淡茶褐色土の単一層で、壙底から土師器坏や皿片が出土した。

出土遺物（Fig. 37）

110は底径が7.8cmの土師器坏。111は口径が16.6cm、器高は2.1cm。体部は短くストレートに外反し、端部は小さく上方に摘み上げている。体部はヨコナデ、内底面はナデ、外底面はヘラ調整。

2）河　川（SD）

調査区の東部で１条の溝とは云い難い大きな流路を検出した。この流路は、東に接する第 12 次調査区から延びて北西に接する第４次調査区へと続く一筋のもので、大溝として報告されている。本調査区では、その幅や深さなど規模的、構造的に人為的な構造物とするには懐疑的な面が看取されることから敢えて河川とした。この河川は、弥生時代の河道（氾濫原）の厚い埋没土である砂層上をその河岸に沿って抉るように流れている。この河川の流路は、第 10 次調査区から発して北西方の第 15 次調査区へ流れ、その後さらに第 12 次調査区へむかって緩やかに左へ弧を描くように西に流れを変えて本調査区へ繋がっている。西へむかって流れる河川は、本調査区で再び北西に流路を変えて第４次・7 次調査区へと北流している。

10 号河川　SD － 10（Fig. 38・39　巻頭 PL. 2・3　PL. 15 ～ 22）

10 号河川は、調査区の東にある第 12 次調査区から北西の第４次調査区へと繋がる大溝と呼称された流路である。第 12 次調査区から延びた河川は、調査区東側壁の中央部から出現する。東側壁から延びた流路は、一旦緩やかに左へ弧を描くようにして 25m ほど西へむかって延びる。その後、調査区の中央部近くで大きくＬ字状に流れを北西へ変えて 25m ほど北流し、調査区を越えて第４次調査区の大溝へと繋がる。川幅は、東壁際が 10 ～ 15m、流れを変える屈曲地点が７～ 8m、第４次調査区へ繋がる北壁側が 7m で下流にむかって若干狭くなり、屈曲地点より東は北側に緩やかな傾斜段を有する。深さは東端が 75 ～ 80cm、屈曲地点が 60cm、北西端が 80cm で流れを変える屈曲点がもっとも高く、その両側は深くなっている。なかでも東側は河床が階段状に低くなり、屈曲点の手前には 5m × 8m の楕円形の大きな窪みがある。河床からの深さは 60 ～ 70cm である。東の上流から流れてきた水は、この窪みに落ちて渦を巻くようにして下流に流れる。そのため流れ着いた軽い木製品は、この周辺に澱み、流れにくい大きな建築材ほどまとまって堆積している。この河川からは土師器のほかに石製品や木製品等多種多量の遺物が出土した。なかでも木製品は、建築材や農具のほか容器、儀器、形代などが流れに沿うようにして出土している。また、土器は小型丸底壷のほか高坏、甕、器台、ミニチュア土器が折重なった木製品や流木類の上面や隙間に潜り込むようにして出土したものと木製品下の黒色粘土層下から出土したものがある。しかし、この 10 号河川の北半部は 137 号河川の西岸に沿って北流し、その上層には 136 号溝が西岸を重ねて流れている。そのため 10 号河川の黒色粘質土層と 136 号河川の暗黒褐色土層の区分が曖昧で遺物の取り上げに混乱が生じている。

出土遺物（Fig. 40 ～ 72　PL. 39 ～ 55）

112 は弥生中期の丹塗無頸壷である。大きく外反した口縁部の上縁には２孔１対の円孔を穿っている。口径は 13.3cm。113 ～ 120 は二重口縁壷。113 は口縁部が鋭く内傾し、胴部との境に１条の三角突帯が巡る。胴部は倒卵形で平底の底部が付く。114・115 は頸部がわずかに内傾し、短く内傾する口縁部は鋭く屈曲して直口ぎみに立ち上がる。116 ～ 118 は緩やかに外反した口縁部が鋭く屈曲して三角突帯状の段を作り、一旦直口ぎみに立ち上がった後に緩やかに外反する。調整はいずれも外面がナデ～ハケ目、内面は頸部下と底部が指頭押圧ナデ、胴部はヘラケズリ。121 ～ 140 は甕である。121 は頸部が短く内傾し、口縁部は直口ぎみに立ち上がった後に緩やかに外反する。内唇は短く水平に摘み出す。122 ～ 126 と 131 ～ 138 は口縁部が「く」字状に外反する甕。122・123 は口縁部がやや長くのびやかに、126 はやや短く外反する。124・125・127 の口縁部は直線的に外反する。131 ～ 133 の口縁部は鋭角的に外反する。129・130 は直行して立ち上がり、口縁端部は小さく外方に摘み出す。胴部はいずれも球形をなす。136 の口縁部は大きく外反し、倒卵形の胴部には小さな底部が付く。137・138 は胴部が長胴形をなす。調整は外面がナデ～ハケ目、内面は頸部下と底部が指頭押圧ナデで胴部はヘラケズリ。127・128・136 の外面にはタタキ目痕が残る。（小林義彦）

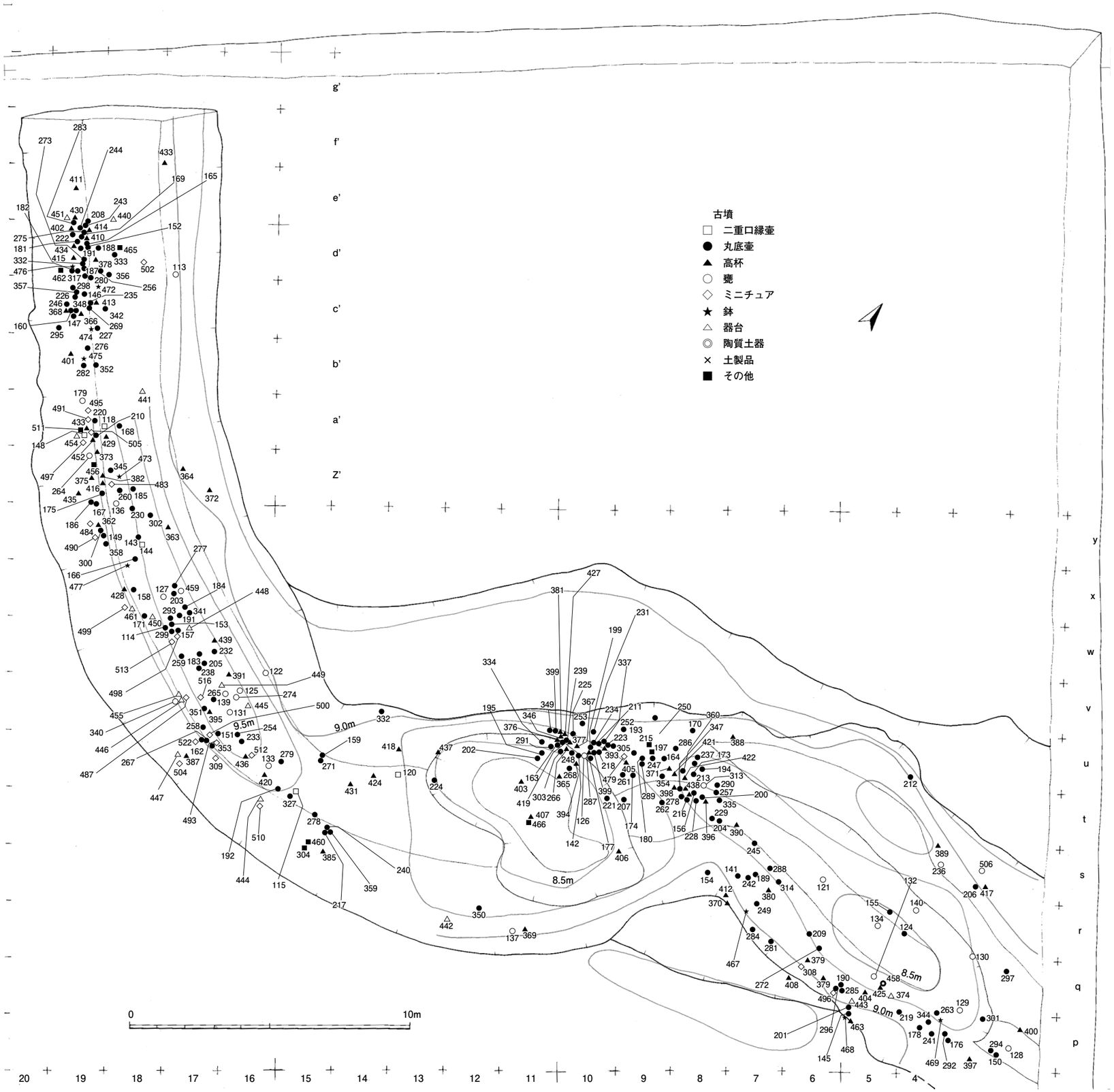


Fig.38　10 号河川遺物（土器）出土状況図（1/150）

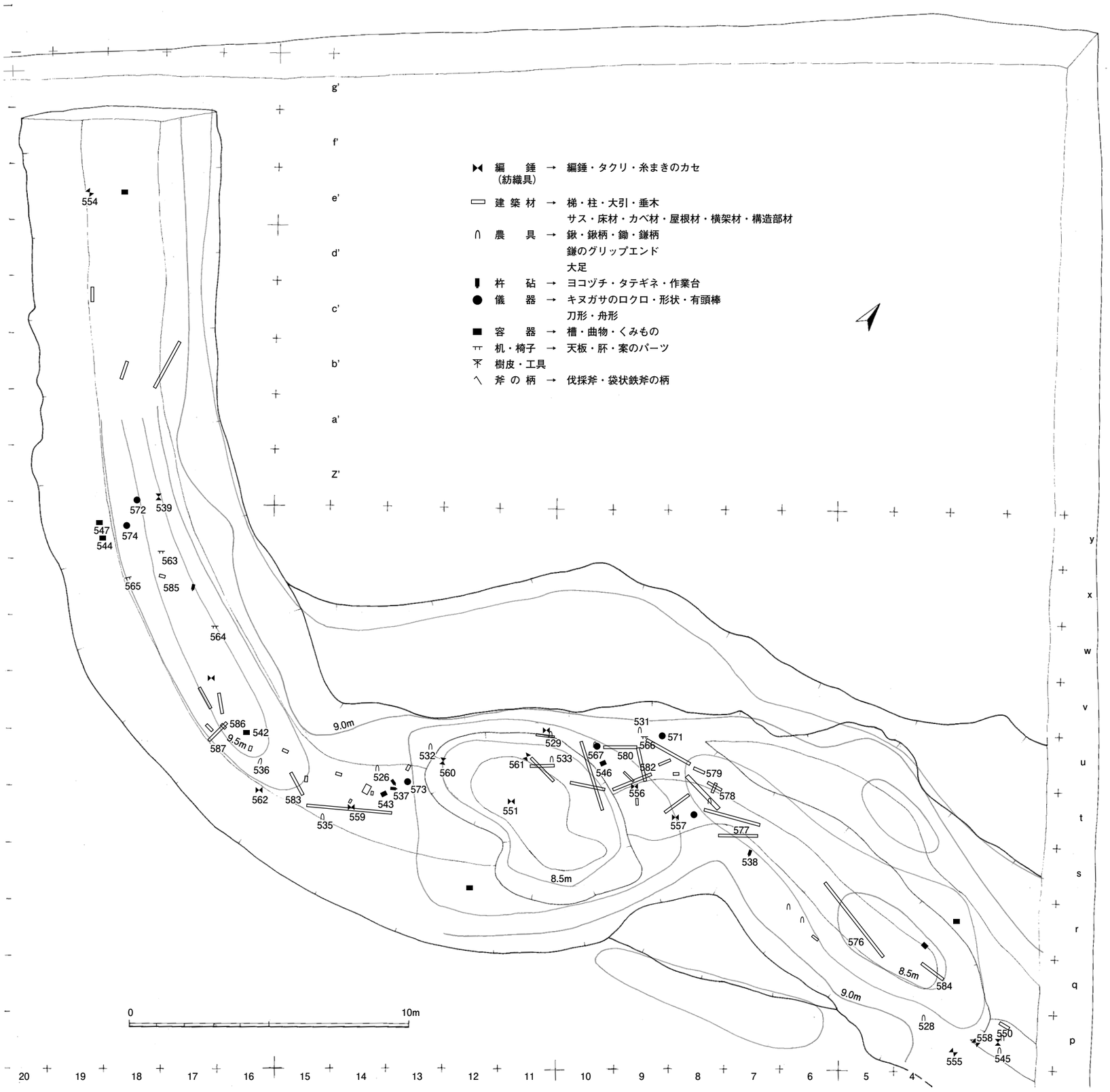


Fig.39　10号河川遺物（木器）出土状況図（1/150）

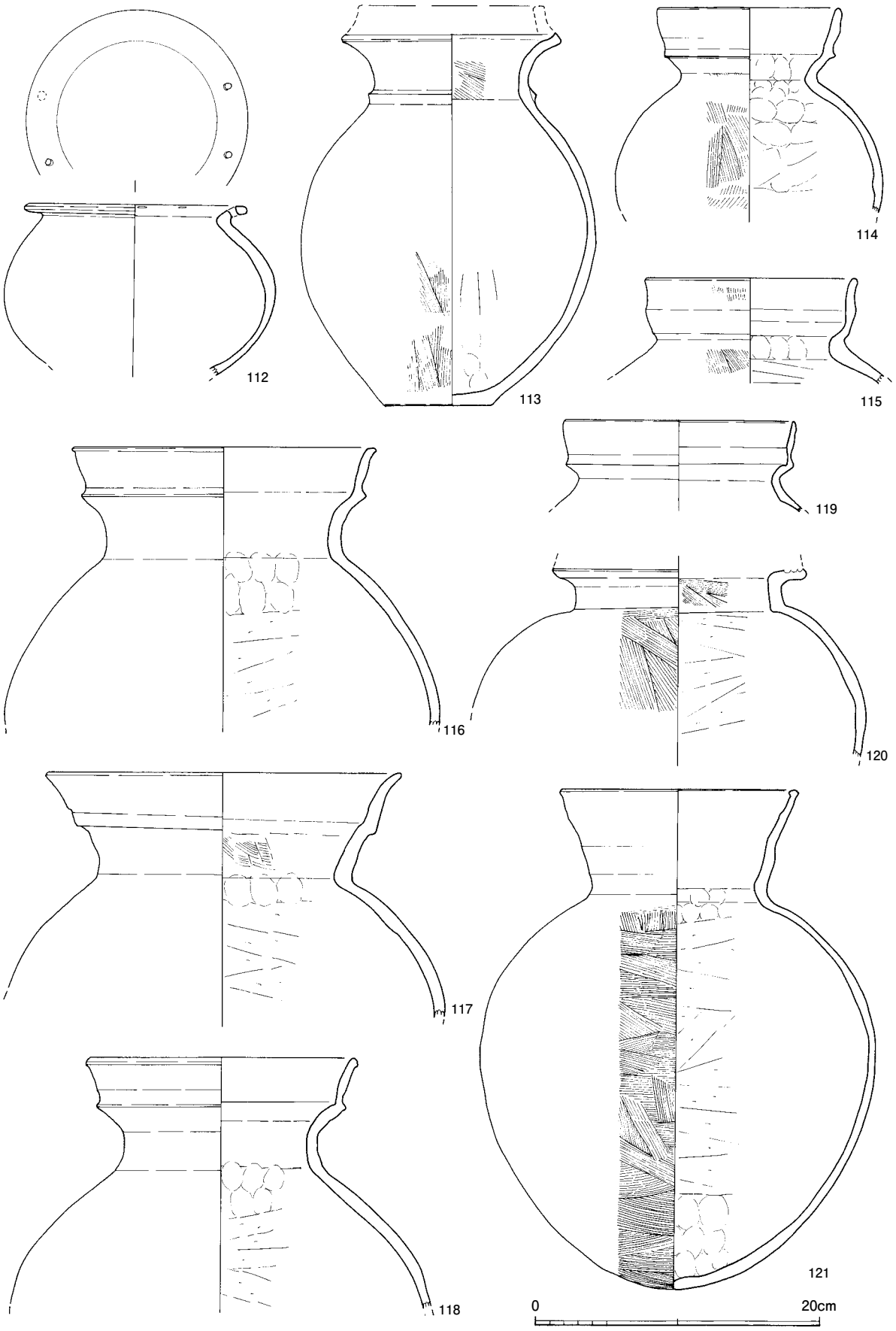


Fig.40　10 号河川出土遺物実測図 1 (1/4)

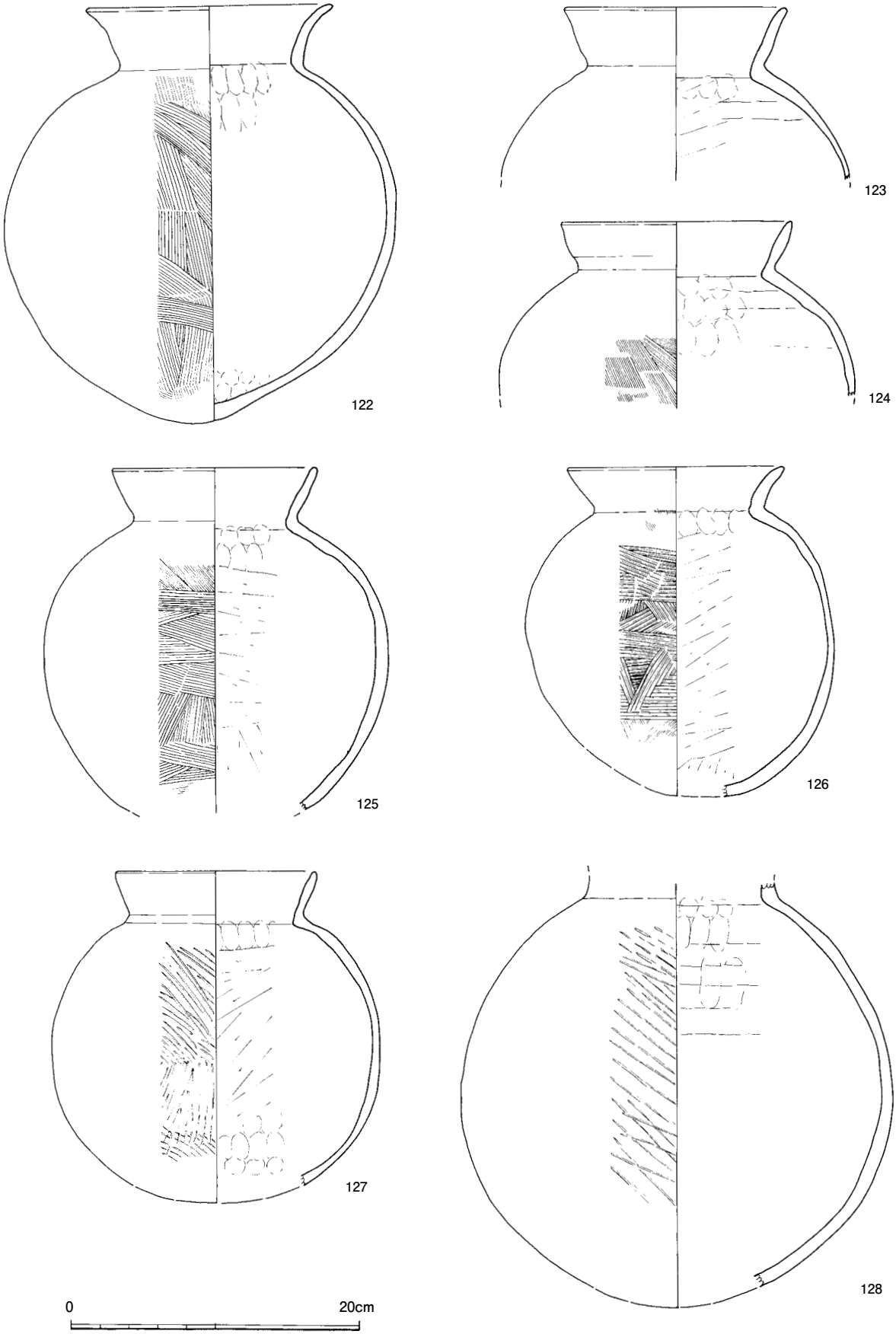


Fig.41　10 号河川出土遺物実測図 2 (1/4)

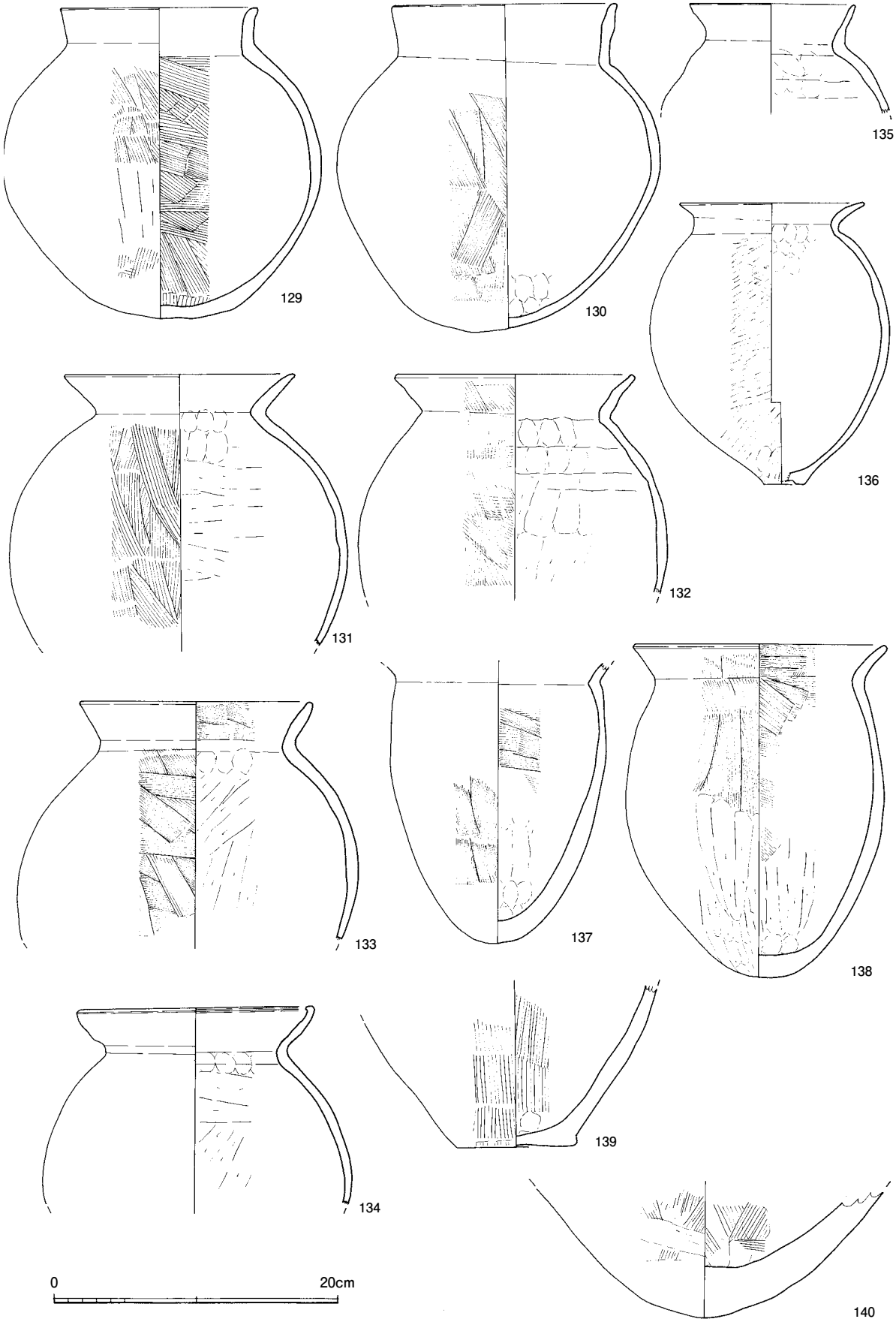


Fig.42　10 号河川出土遺物実測図 3 (1/4)

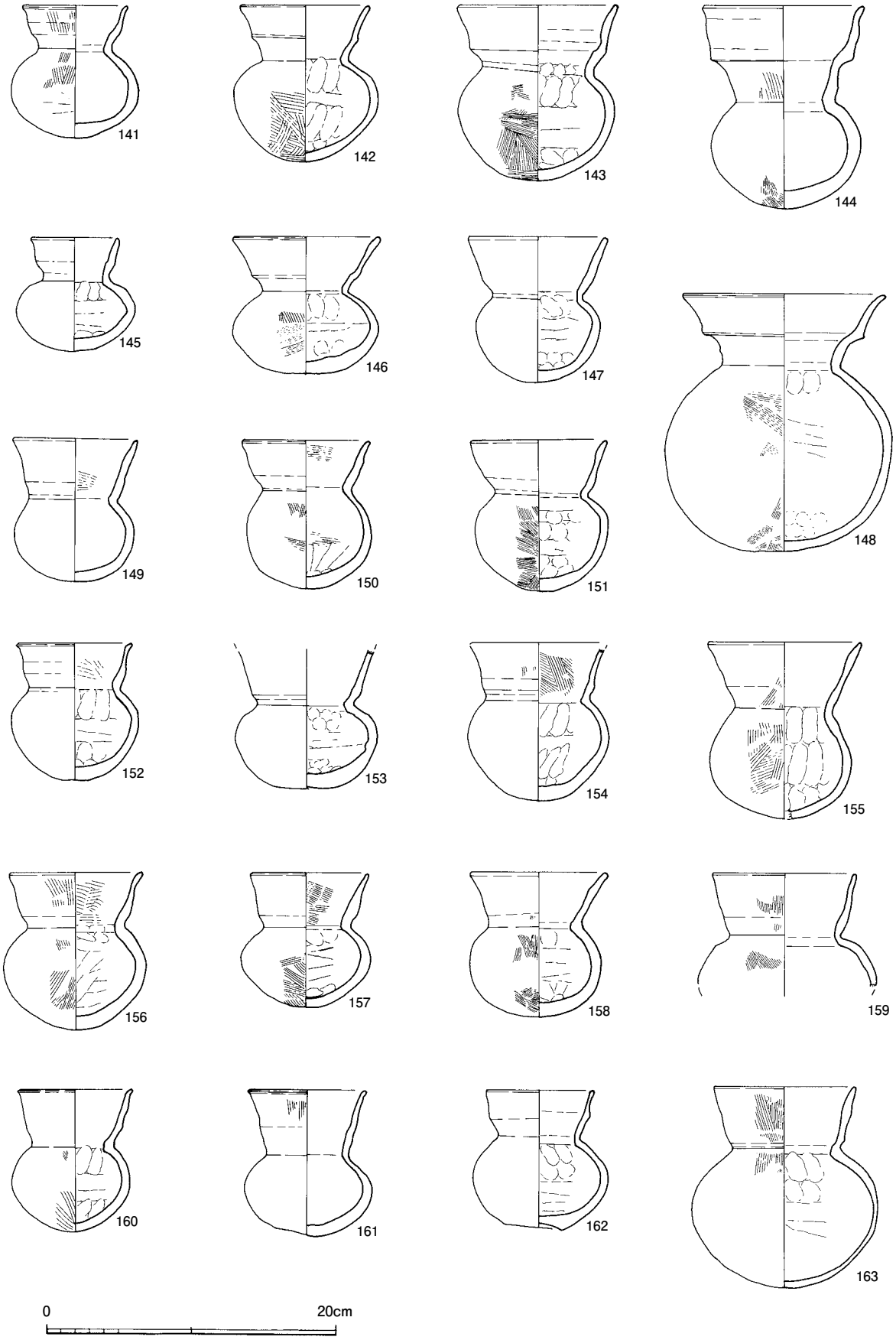


Fig.43　10 号河川出土遺物実測図 4 (1/4)

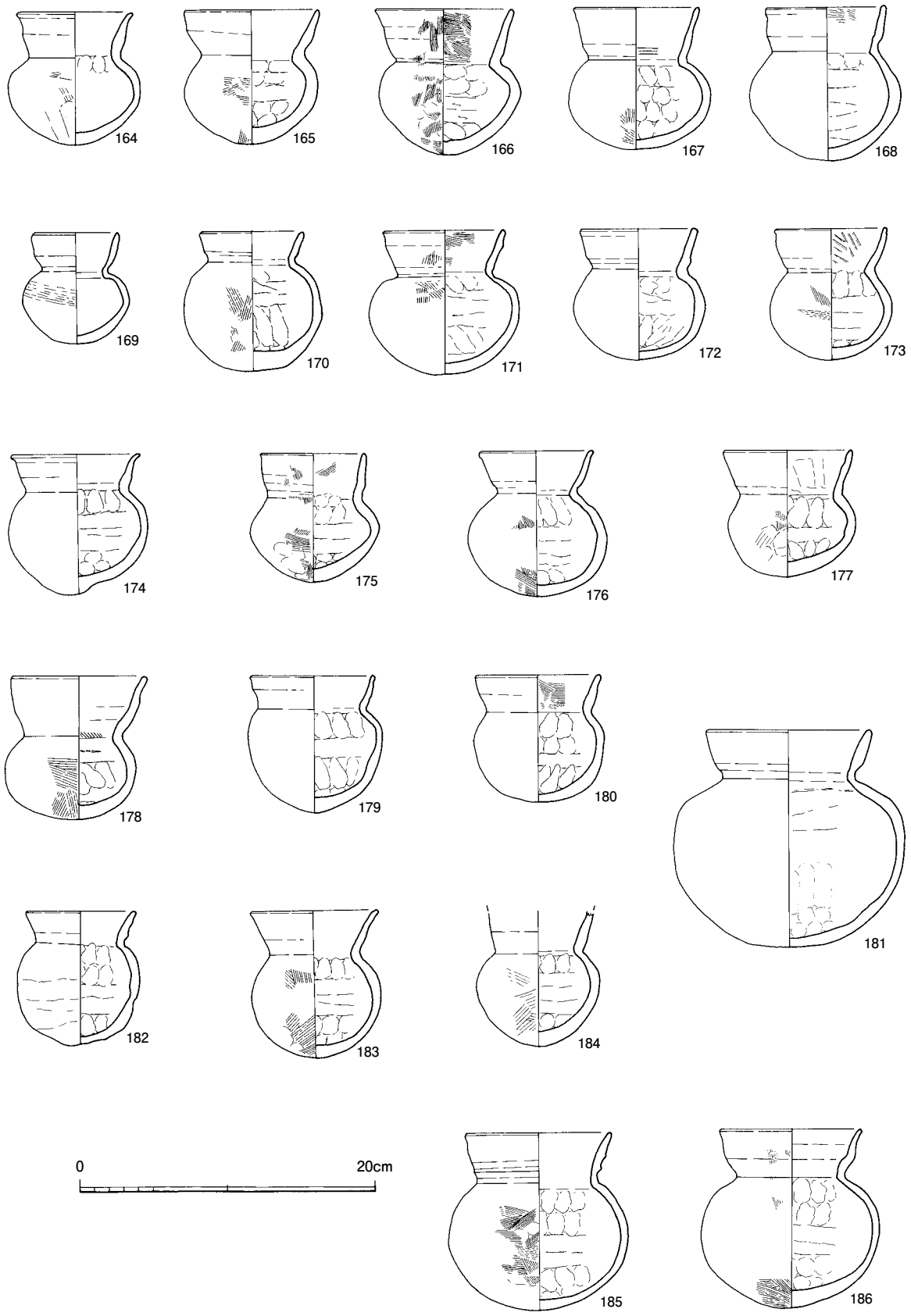


Fig.44　10 号河川出土遺物実測図 5 (1/4)

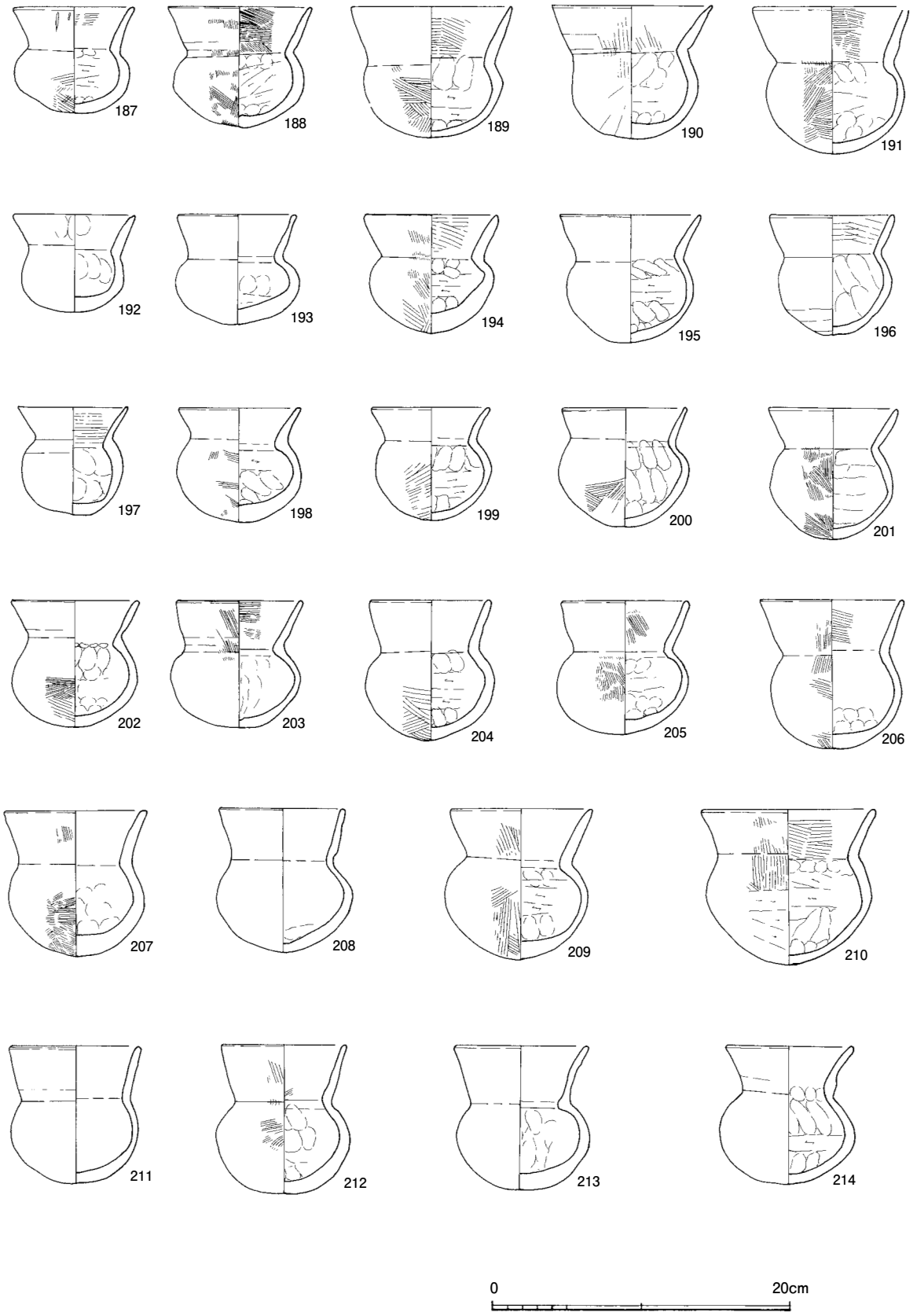


Fig.45　10 号河川出土遺物実測図 6 (1/4)

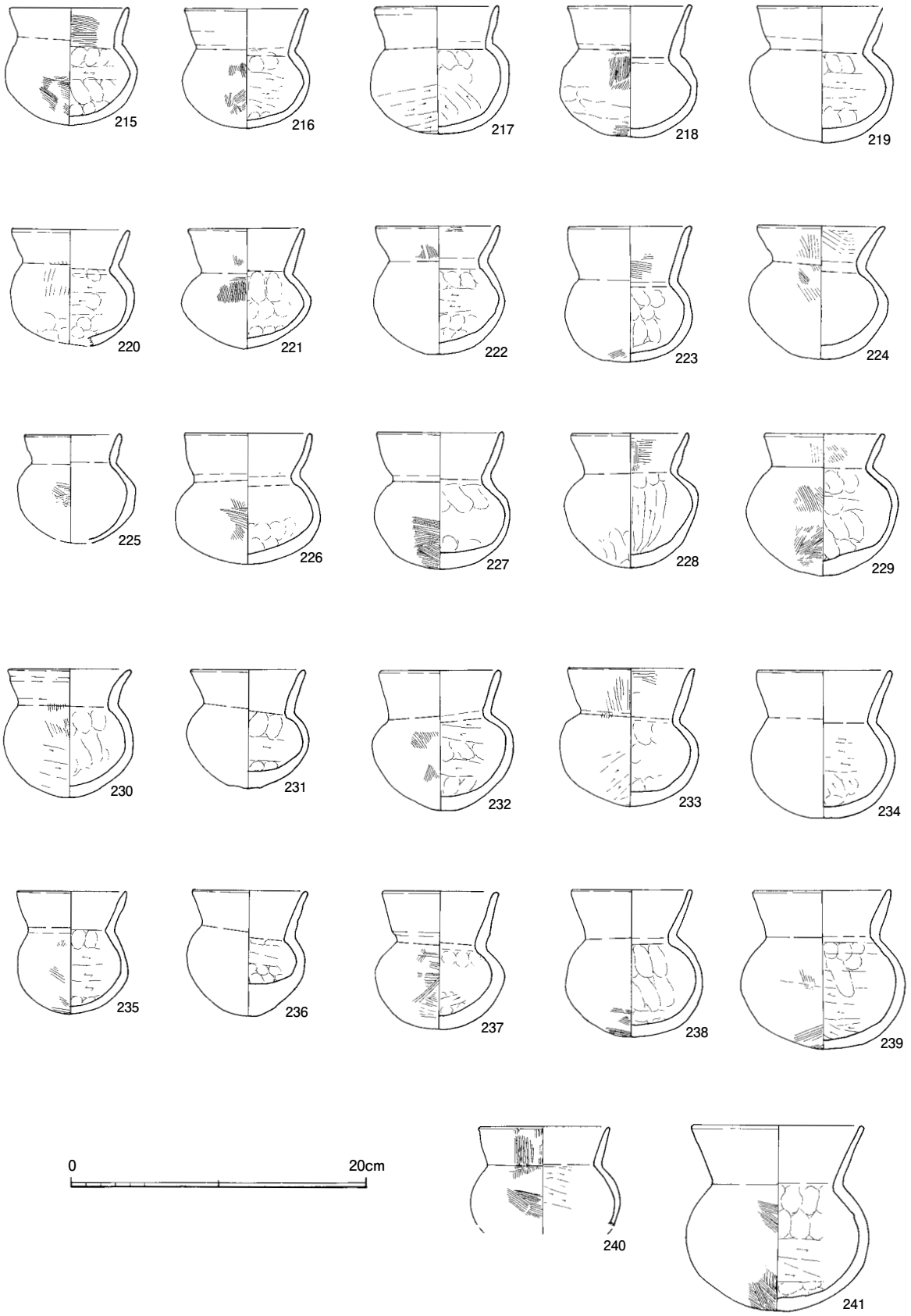


Fig.46　10 号河川出土遺物実測図 7 (1/4)

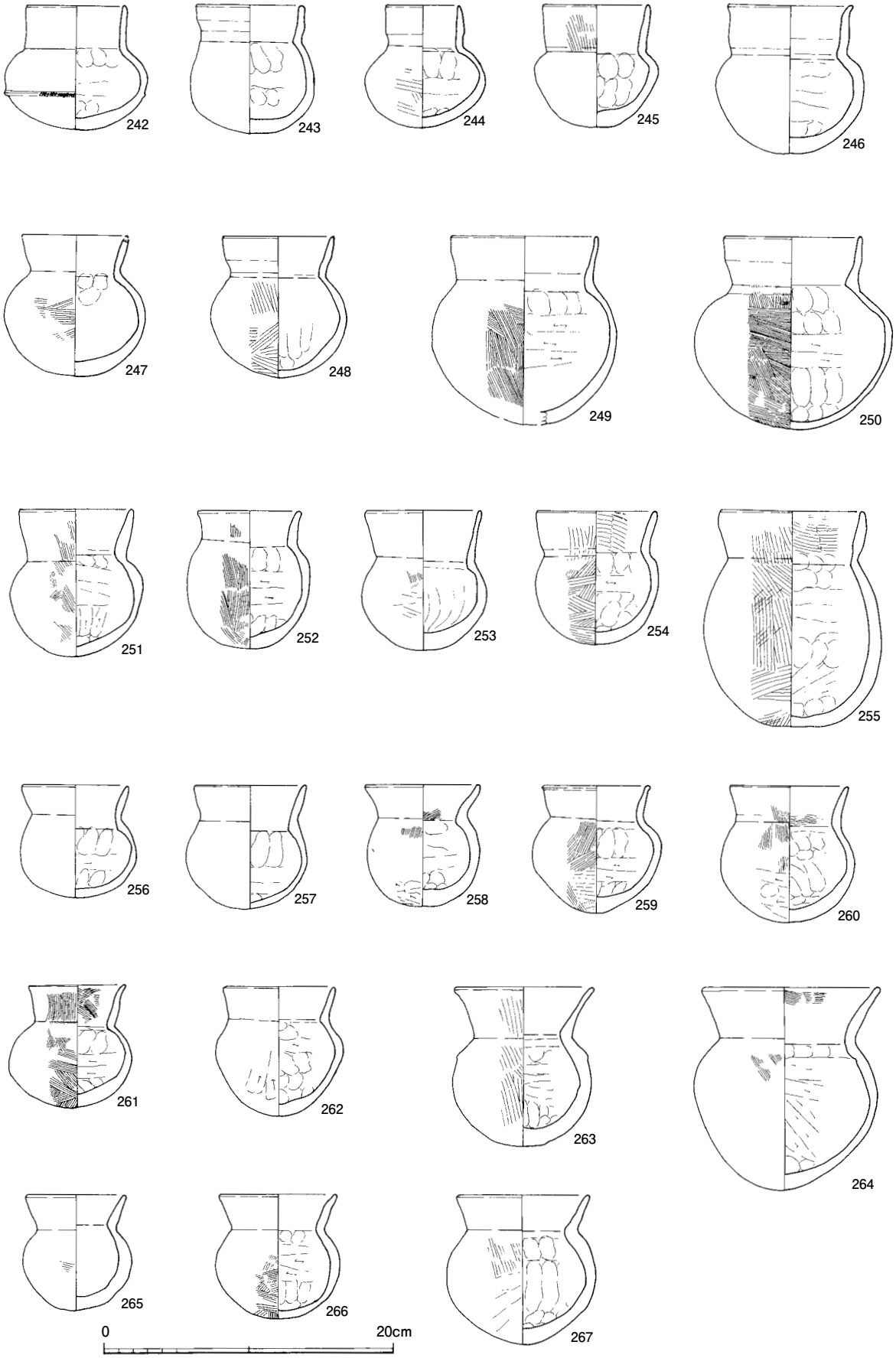


Fig.47　10 号河川出土遺物実測図 8 (1/4)

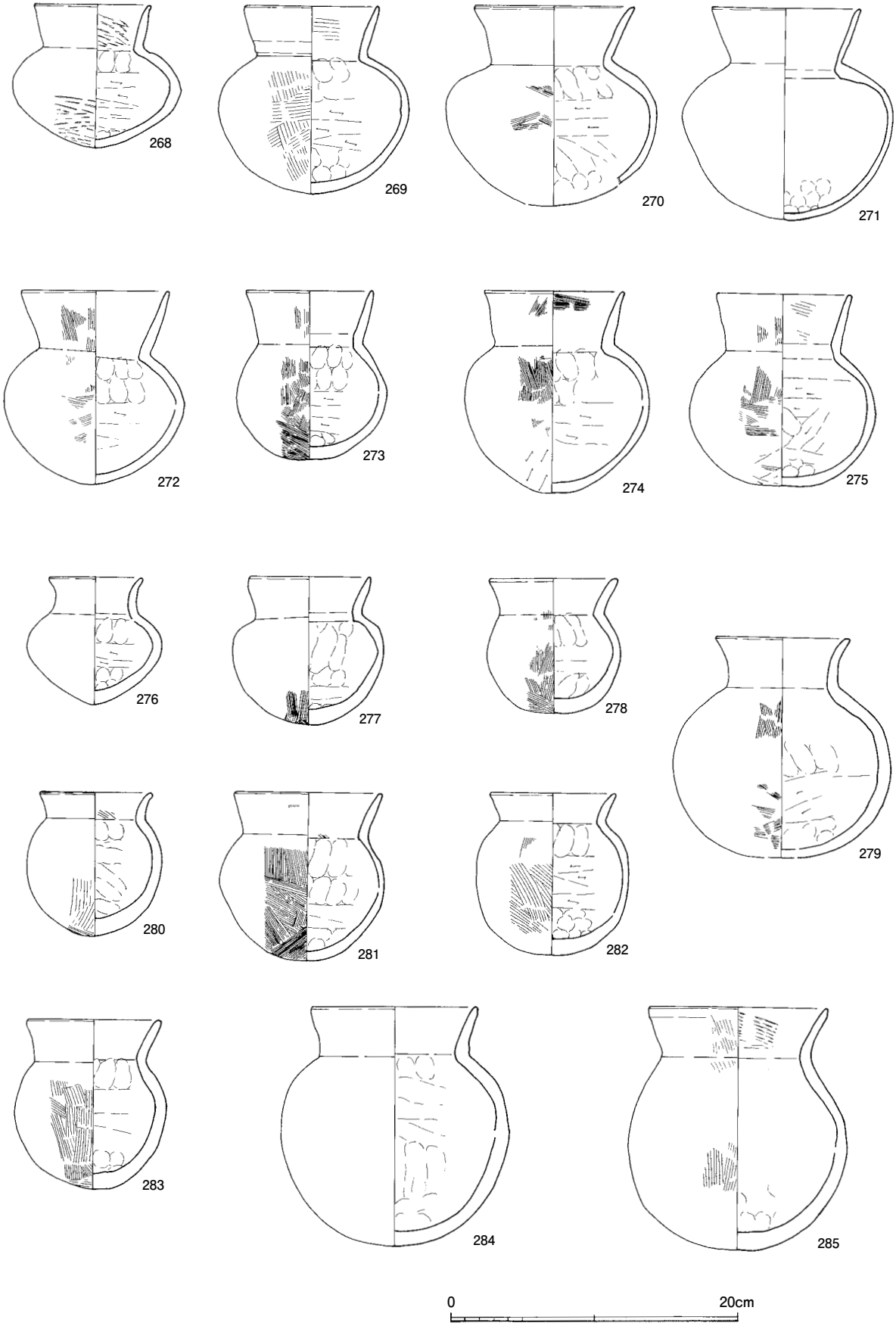


Fig.48　10 号河川出土遺物実測図 9 (1/4)

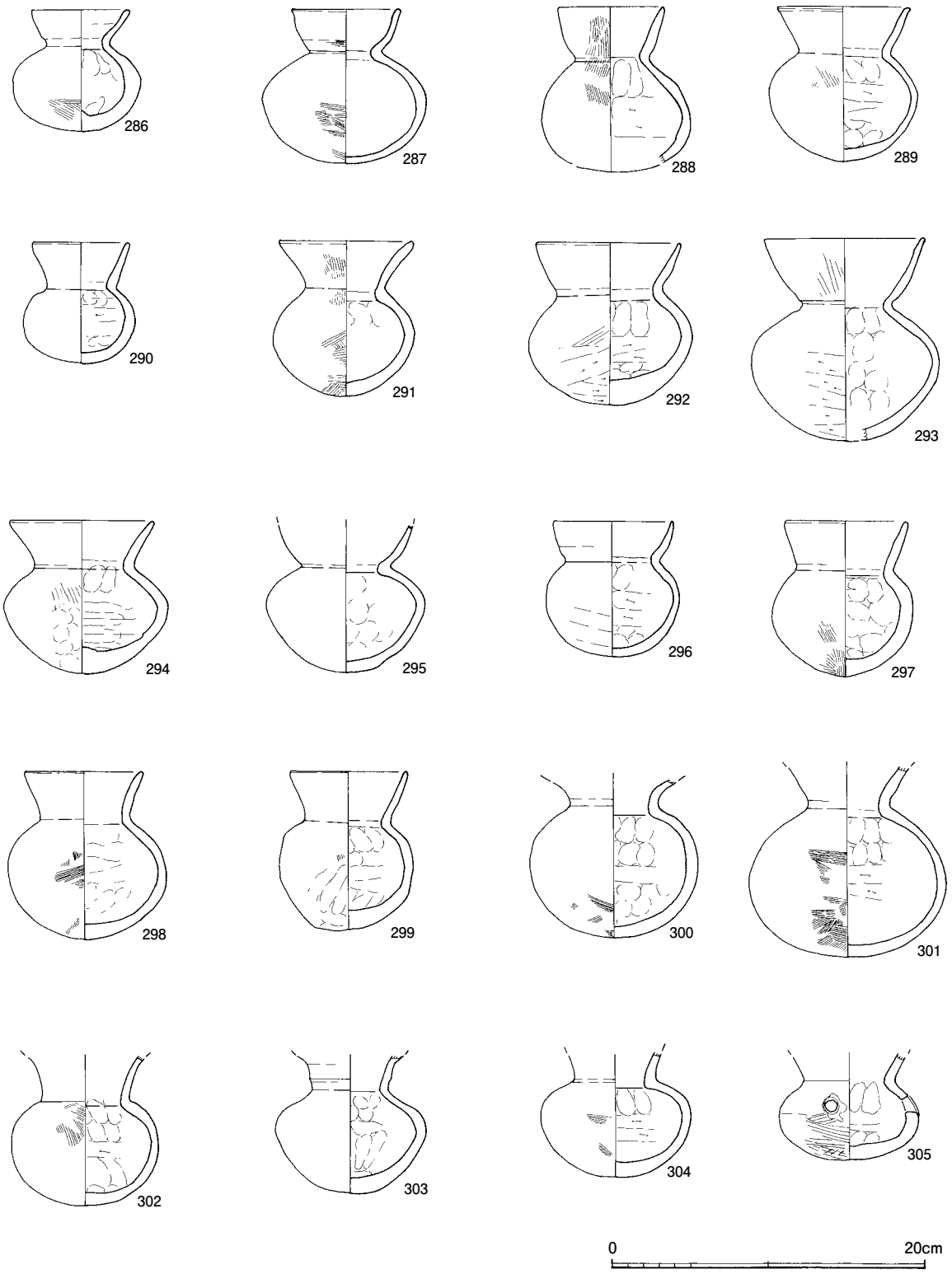


Fig.49　10 号河川出土遺物実測図 10 (1/4)

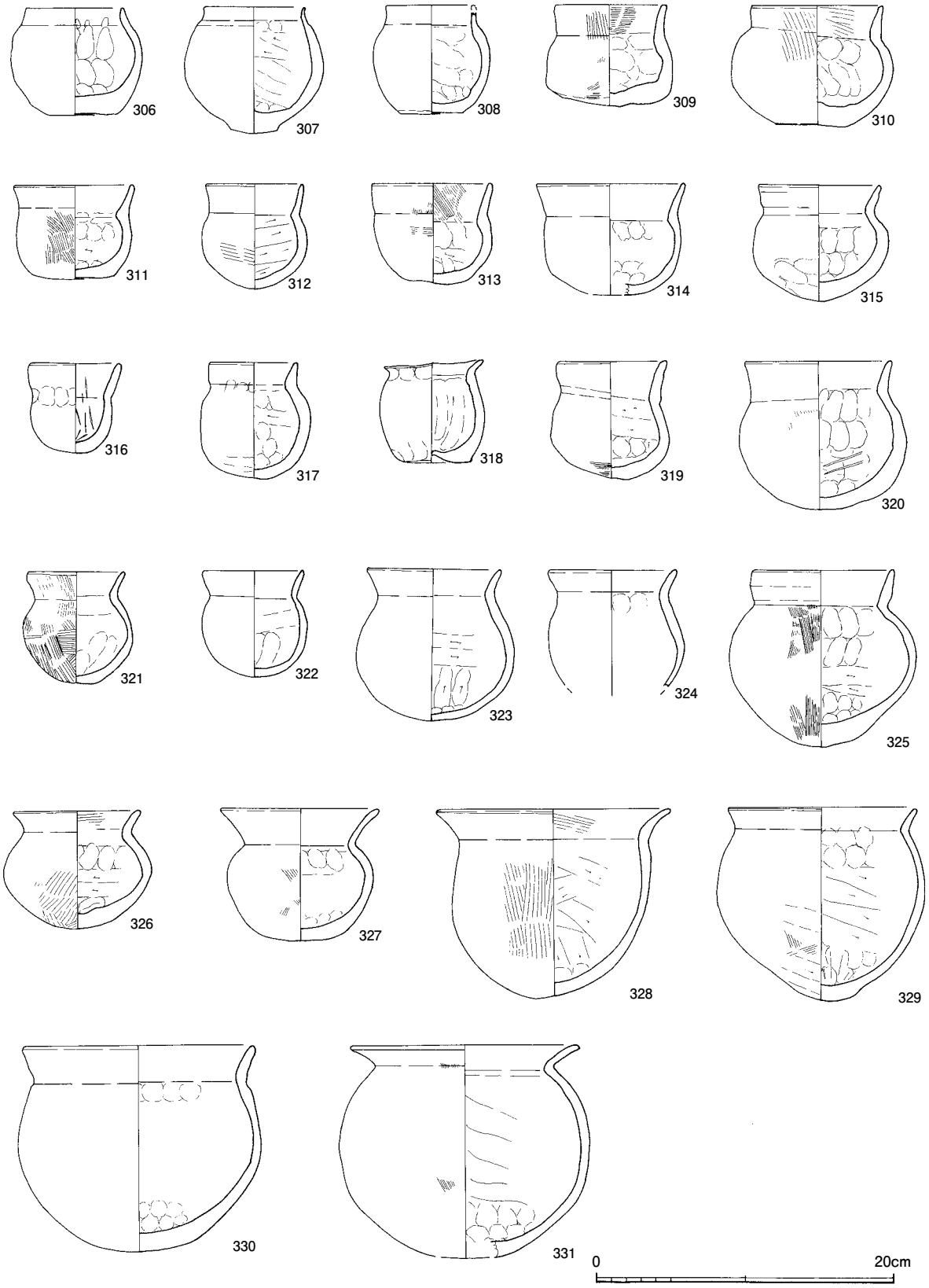


Fig.50　10 号河川出土遺物実測図 11 (1/4)

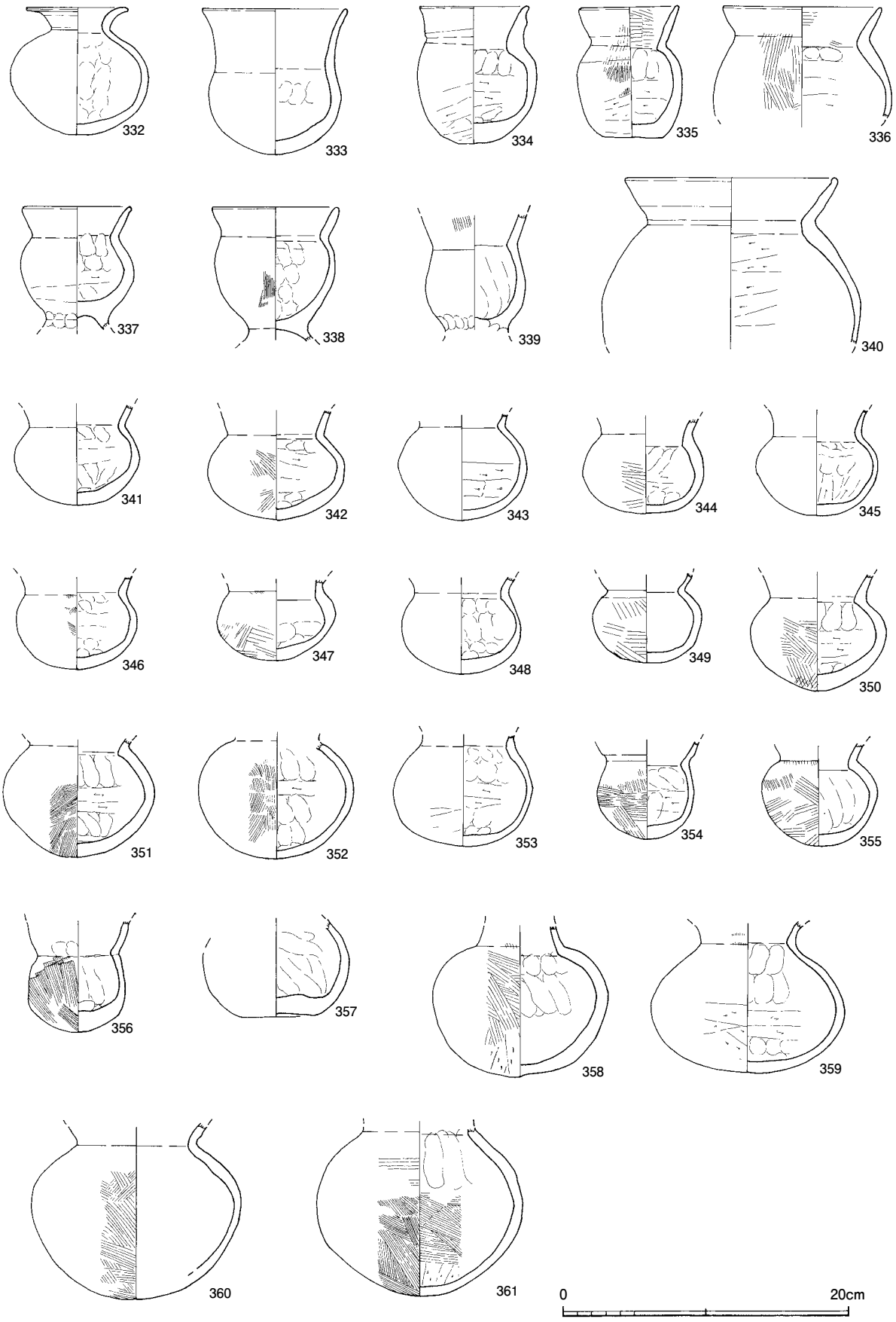


Fig.51　10 号河川出土遺物実測図 12 (1/4)

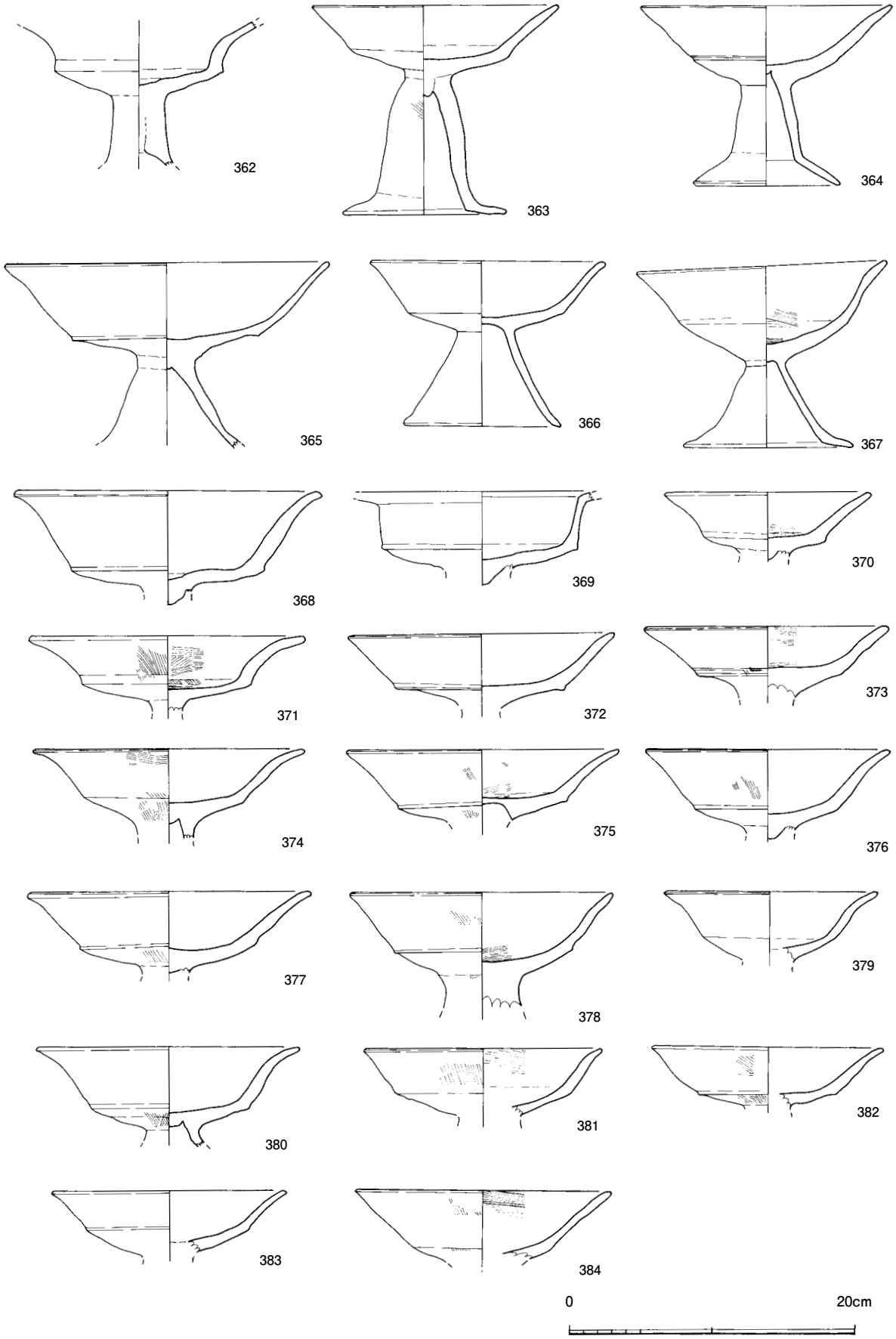


Fig.52　10 号河川出土遺物実測図 13 (1/4)

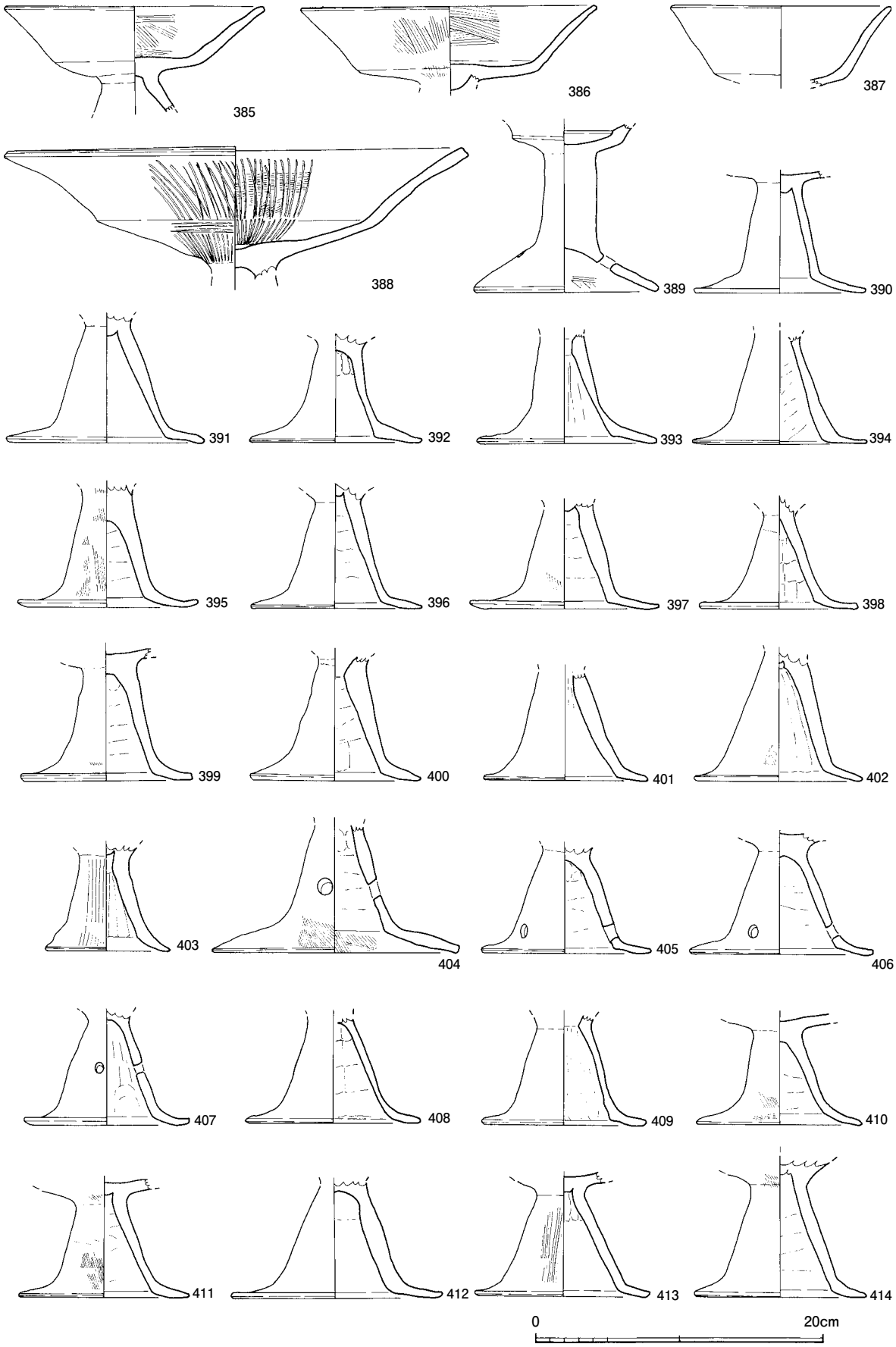


Fig.53　10 号河川出土遺物実測図 14 (1/4)

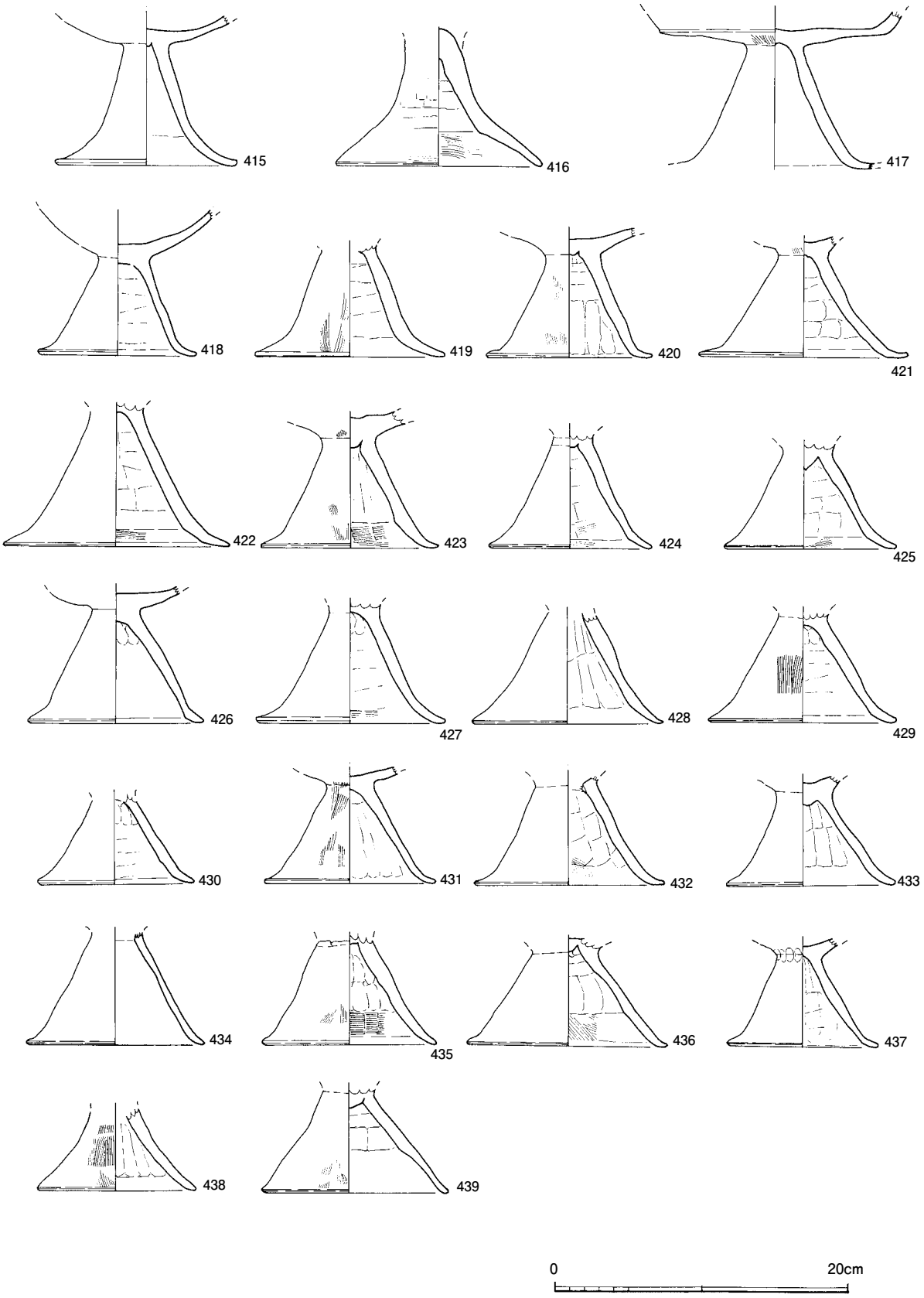


Fig.54　10 号河川出土遺物実測図 15 (1/4)

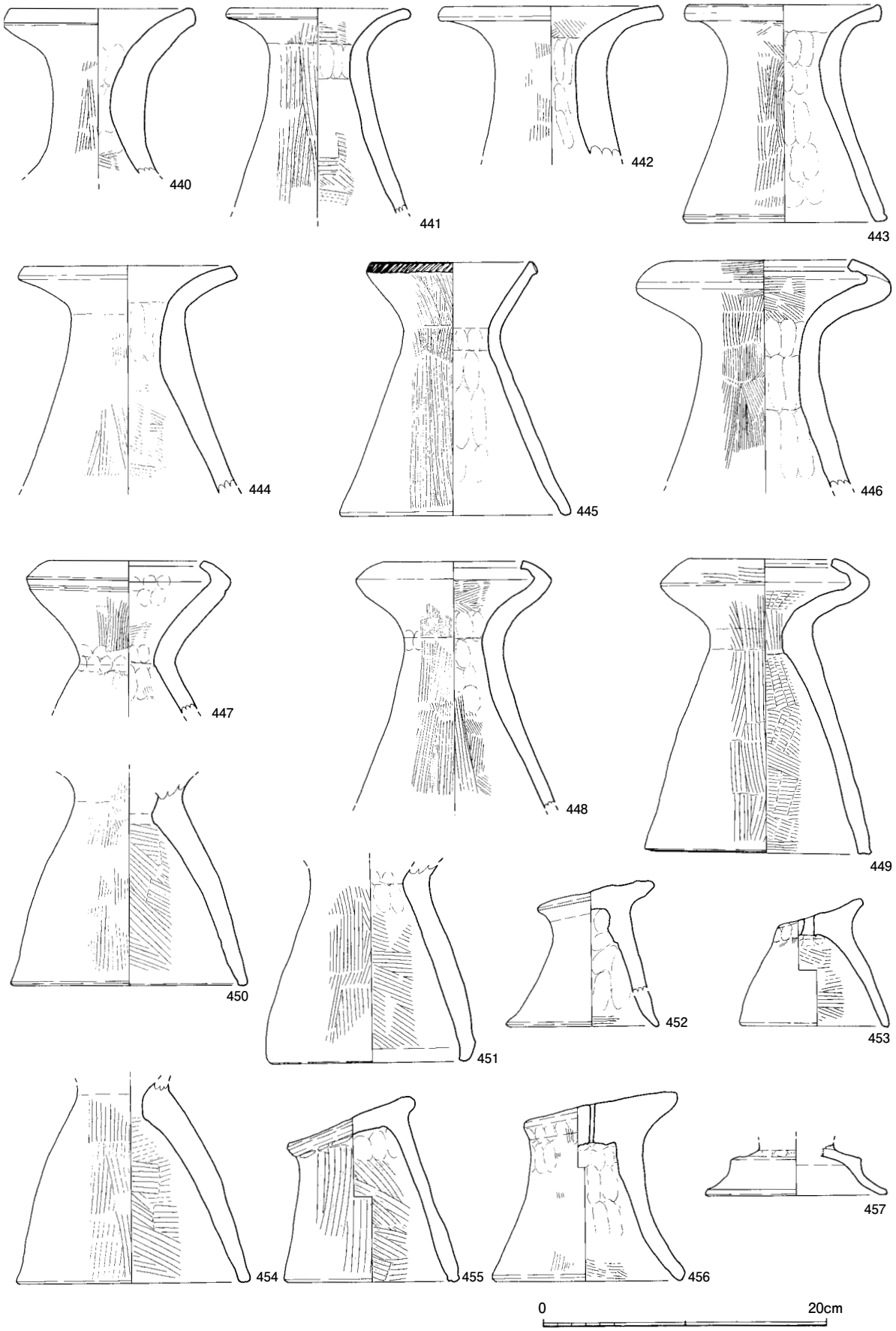


Fig.55　10 号河川出土遺物実測図 16 (1/4)

141 ～ 327・330・332 ～ 361 は小型丸底壷である。141 ～ 186 は二重口縁の丸底壷である。口縁部が明らかな二重口縁（141 ～ 144・148）のものと疑似二重口縁（145 ～ 147・149 ～ 186）のものに大別される。187 ～ 304 は口縁部が「く」字状に外反する丸底壷で「く」字状にのびやかに外反するもの（187 ～ 241・256 ～ 285）とスレートに直口する（242 ～ 250・253・255）ものがある。287・292・293・295 は内彎ぎみに外反する。305 は偏球形の胴部に穿孔があるハソウである。332 締まった頸部に大きく外反する口縁部が付く。362 ～ 439 は高坏である。坏体部が直口して立ち上がり、口縁部が緩やかに外反するもの（362・369）、内彎ぎみに立ち上がった後に口縁部が小さく外反するもの（367）とのびやかに外反するもの（363 ～ 366・368・370 ～ 388）がある。440 ～ 451 は器台、452 ～ 456 は支脚である。458 は陶質土器の甕である。口縁部は短く外反し、胴部は肩の張りが弱い。外面は斜格子目タタキ。459・460 は台付甕、461 ～ 466 は台付鉢である。467 ～ 477 は鉢で、467・468・473 ～ 475 は浅鉢。470 は外底に葉脈状の線刻がある。478 ～ 525 はミニチュア土器で、丸底壷（478 ～ 493）や鉢（494 ～ 510）、台付鉢（511 ～ 513）、器台（517 ～ 525）状のものがあり、多様性に富んでいる。

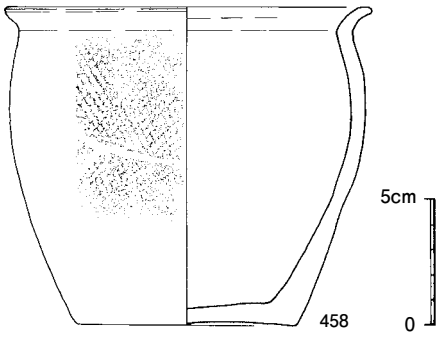


Fig.56
10 号河川出土遺物実測図 17（1/3）

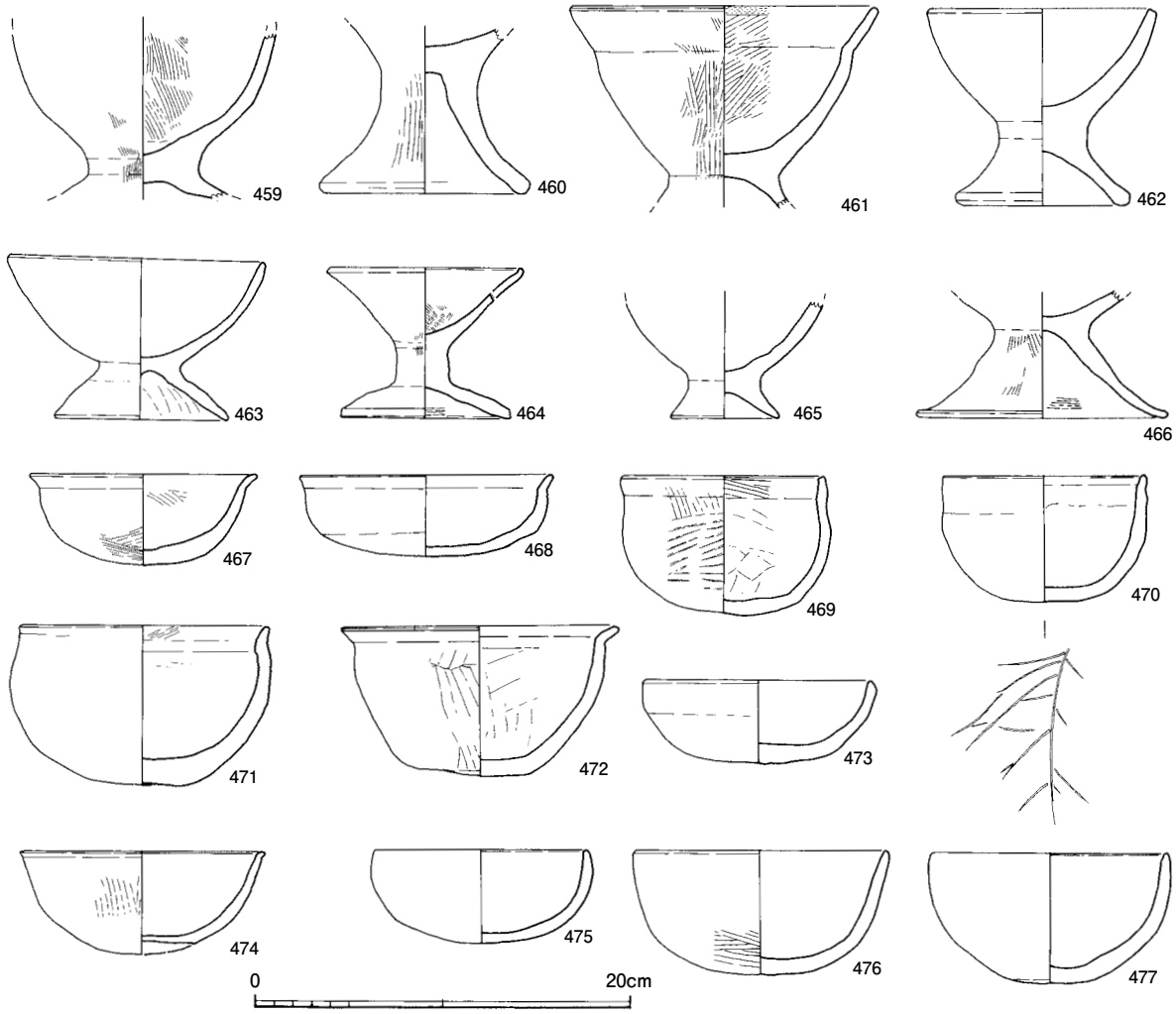


Fig.57　10 号河川出土遺物実測図 18（1/4）

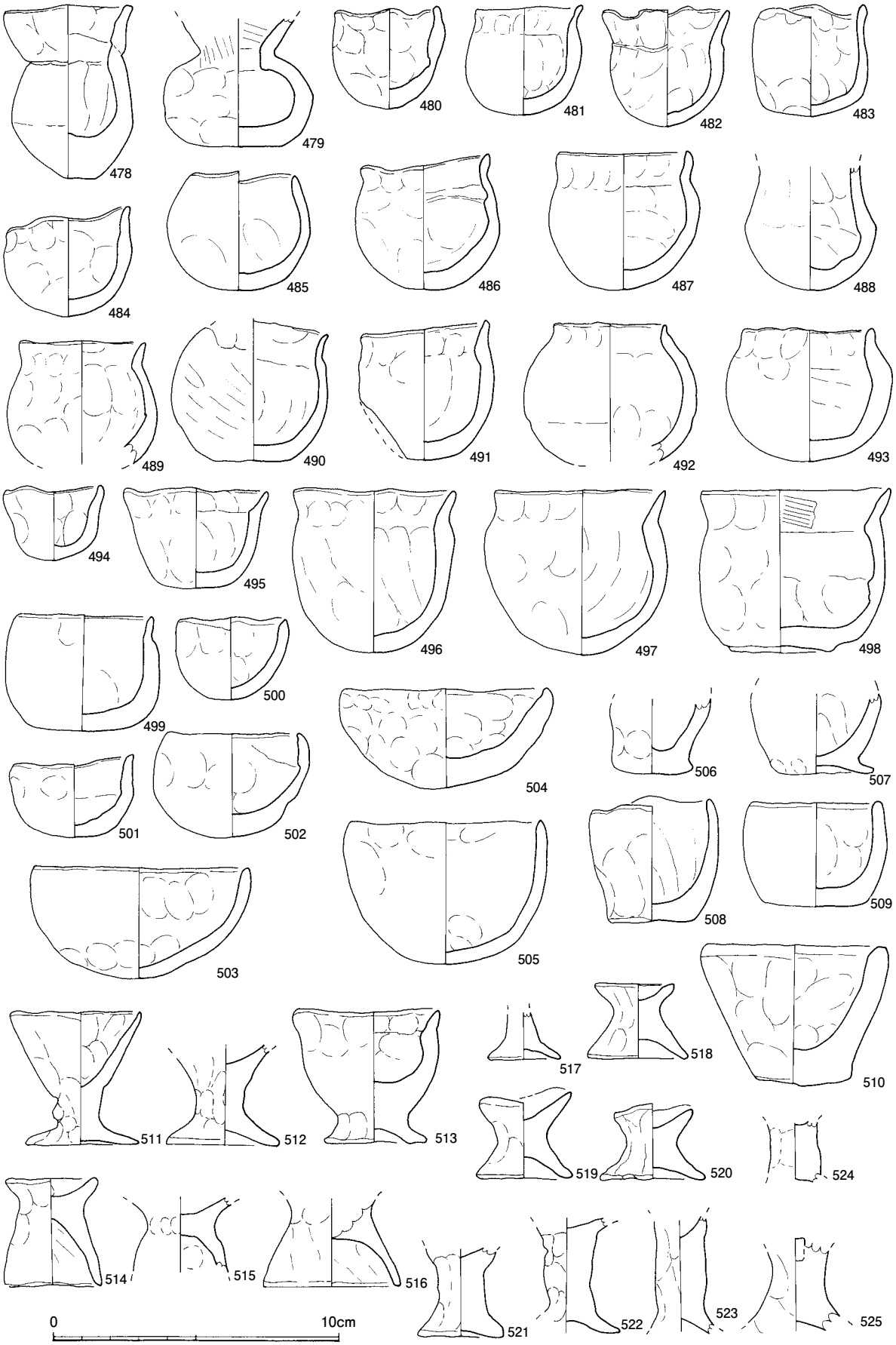


Fig.58　10 号河川出土遺物実測図 19 (1/2)

Tab.16　出土遺物(土器)一覧表 15

Fig	No.	土器	器種	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig40	112	弥生	丹塗無頸壷	11.9+ α 13.3	精良.微細砂と雲母微細を多く含む	堅緻	淡黄灰色	ヨコナデ ナデ後ケズリ	ヨコナデ 押圧ナデ	丹塗痕 口唇部に2孔一対の円孔有
Fig40	113	土師器	二重口縁壷	26.1 15.4 7.6	細～石英中砂粒と雲母微細を多く含む	良好	淡明黄橙色	ナデ 掻上げ状ナデ粗いハケ目 ナデ	ヨコナデ 押圧後ナデ 指頭押圧ナデ	
Fig40	114	土師器	二重口縁壷	14.2+ α 口縁壷	良質.微細～石英小砂粒と雲母微細を含む	良好	淡明橙色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig40	115	土師器	二重口縁壷	7.4+ α 15.0	微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量.赤褐色粒を僅少含む	良好	淡黄橙色	ヘラ状工具によるヨコナデ ハケ目	ヨコナデ	
Fig40	116	土師器	二重口縁壷	19.5+ α 21.4	細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を少量含む	良好	ややくすんだ淡黄灰褐色	ヨコナデ 押圧後ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面淡い黒斑.口縁部内面に2次被熱による淡い黒斑
Fig40	117	土師器	二重口縁壷	17.0+ α 25	細～小砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	淡黄灰色	ヨコナデ ナデ後暗紋状の粗い研磨	ヨコナデ	口縁部内外面黒斑
Fig40	118	弥生	二重口縁壷	17.5+ α 19	微細～石英粗砂粒を比較的多く含む雲母微細を含む	良好	淡灰黄褐色	ヨコナデ ヘラ状工具による粗いヨコナデ	ヨコナデ 押圧後ヨコナデ	口縁部外面指先による幅広い凹線.口縁部内面炭化物様の黒色物
Fig40	119	土師器	二重口縁壷	6.3+ α 16.4	やや良質.小砂粒と雲母微細を含む	良好	茶褐色～黒色	ヨコナデ ナデ	ナデ ケズリ	胴部にコゲ付着
Fig40	120	土師器	二重口縁壷	13.1+ α	微細～石英粗砂粒を多く含む 赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ 細かいハケ目	ヨコナデ 押圧後細かいハケ目	接合時の刻み目有
Fig40	121	土師器	甕	35.2 16.7	細～石英中.粗砂粒を多く含む.雲母微細を少量含む	良好	(外)くすんだ黄褐色 (内)淡黄褐色	ヨコナデ ナデ後ハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	内面黒斑
Fig41	122	土師器	甕	29.0 17.2	細～石英粗砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	(外)明黄褐色 (内)明赤橙色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面スス付着.被熱による赤変有
Fig41	123	土師器	甕	11.7+ α 15.4	細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	淡明黄橙色	ナデ	押圧後ヘラケズリ	胴部内面粘土紐の継目痕
Fig41	124	土師器	甕	12.0+ α 16.0	微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細と赤褐色粒を含む	良好	明赤橙色	ヨコナデ 細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面スス
Fig41	125	土師器	甕	23.7+ α 14.4	微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	(外)淡黄橙色 (内)淡黄褐色	ヨコナデ やや細かいハケ目 粗いハケ目	ヨコナデ 押圧ナデ ヘラケズリ	胴部外面スス付着.底部内面炭化物様の黒色物
Fig41	126	土師器	甕	22.8 19	細～石英中砂粒を比較的多く含む.雲母微細、粒を含む	良好	淡黄灰色	ヨコナデ 細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ 横方向ヘラケズリ	
Fig41	127	土師器	甕	23.0+ α 14 ～ 14.2	微細～小砂粒を多く含む.雲母微細を少量含む	良好	(外)黒色 (内淡黄橙色	平行タタキ	指頭押圧ナデ ヘラケズリ	外面全体スス様の黒色物.胴部内面炭化物様の黒色物

Tab.17　出土遺物(土器)一覧表 16

Fig	No.	土器	器種	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig41	128	土師器	甕	28.0 31.0	細～小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を含む	良好	(外)淡黄橙色 (内)淡黄灰色	押圧後タタキ ナデ	指頭押圧ナデ	内面に粘土継ぎ目痕
Fig42	129	土師器	甕	21.9 13.9	良質.細～石英中砂粒を比較的多く含む.雲母微細含む	良好	(外)淡黄橙色 (内)淡黄褐色	ヨコナデ やや粗い掻き上げ 粗いハケ目	ヨコナデ 押圧後ハケ目 指頭押圧ナデ	底部外面黒斑
Fig42	130	土師器	甕	19.1+ α 16.1	微細～小砂粒と雲母微細.赤褐色を僅かに含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ ヘラケズリ	胴部外面黒色物
Fig42	131	土師器	甕	26 15.8	微細～石英中砂粒を比較的多く含む.雲母微細と赤褐色粒を僅かに含む	良好		ヨコナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面被熱によるスス付着
Fig42	132	土師器	甕	15.4+ α 16.9	微細～小砂粒を比較的多く含む.雲母微細と赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡黄褐色	粗いハケ目	ヘラ状工具によるヨコナデ 指頭押圧ナデ 掻き上げ状ヘラケズリ	
Fig42	133	土師器	甕	16.9+ α 16.4	微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	(外)淡黄橙色 (内)淡黄褐色	ヨコナデ やや粗いハケ目	ハケ目 指頭押圧ナデ ヘラケズリ	胴部外面スス様黒色物
Fig42	134	土師器	甕	13.9+ α 16.6	良質.微細～石英小砂粒を比較的多く含む雲母微細と赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ ヘラケズリ	内面淡い黒斑
Fig42	135	土師器	甕	7.6+ α 11.7	微細～石英中砂粒を比較的多く含む.雲母微細、粒を少量含む	良好	(外)くすんだ淡黄褐色 (内)淡黄茶褐色	ナデ	ヨコナデ 押圧ナデ	胴部外面2次被熱による赤変.胴部内面粘土継目痕
Fig42	136	土師器	甕	19.7 12.9 3	細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細少量を含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ ナナメのタタキ痕 指頭押圧後タタキ	ヨコナデ 指頭押圧後粗いナデ 押圧後ナデ上げ	胴部外面スス付着.胴部内面粘土紐継目痕.底部内面炭化物様黒色物
Fig42	137	弥生	甕	19.4+ α 2.8	良質.細～石英中砂粒を比較的多く含む.雲母赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡黄橙色	ハケメ	やや粗いハケ目 指頭押圧ナデ	胴部外面スス付着.底部内面炭化物付着
Fig42	138	弥生	甕	23.4 17.9	細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細含む.赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ後ハケ目 タテハケメ ケズリ状掻上げ	ヨコナデ後ハケ目 押圧ナデ後ハケ目 指頭押圧ナデ	胴底部外面黒色物
Fig42	139	弥生	甕	11.3+ α 8.4	粗い.細～石英粗砂粒を多く含む.雲母微細を少量含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	タテハケ目 ナデ	タテハケ目 指頭押圧ナデ	
Fig42	140	弥生	甕	9.0+ α	微細～石英中砂粒を比較的多く含む.雲母微細、粒を含む	良好	くすんだ淡黄灰色	押圧後に粗いハケ目	指頭押圧後粗いハケ目	
Fig43	141	土師器	小型丸底壷	9.2 7.3	微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細と赤褐色粒を僅かに含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig43	142	土師器	小型丸底壷	10.8 8.8～9.0	微細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡橙茶褐色	ヨコナデ ナデ 粗いハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig43	143	土師器	小型丸底壷	12.1 11.2	細～小砂粒を比較的多く含む.雲母微細.粒を含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ やや粗いハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	

Tab.18　出土遺物（土器）一覧表 17

Fig	No.	土器	器種	サイズ（器高・口径・底径）	胎土	焼成	色調	調整（外）	調整（内）	その他
Fig43	144	土師器	小型丸底壷	14.0 11.2	精良．微細．赤褐色粒．雲母微細を僅かに含む	良好	淡明橙色	ヨコナデ やや粗いタテハケ目 細かいハケ目	ヨコナデ	
Fig43	145	土師器	小型丸底壷	7.9 6.1	良質．微細～小砂粒を比較的多く含む．雲母微細を僅かに含む	良好	淡橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig43	146	土師器	小型丸底壷	9.5 10.3	精良．微細～石英小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	淡黄橙～淡明赤橙色	ヨコナデ ハケ目後板状工具によるナデアゲ	ヨコナデ 押圧ナデ 指頭押圧痕	胴部外面２次比熱によるスス状黒色物付着
Fig54	147	土師器	小型丸底壷	10.0 9.6	良質．細～小砂粒を比較的多く含む．雲母微細を含む．赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡明橙色	摩滅著しく不祥	押圧ナデ	
Fig43	148	土師器	小型丸底壷	17.7 13.9	精良．微細～細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	(外)淡黄灰色 (内)淡明黄橙色	ヨコナデ やや細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面化粧土塗布
Fig43	149	土師器	小型丸底壷	9.9 8.5	精良．微細砂と雲母微細を含む．赤褐色粒含む	良好	淡明黄橙色	ヨコナデ、粗いハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面に淡い黒斑
Fig43	150	土師器	小型丸底壷	10.2 8.6～8.8	良質．微細～石英小砂粒と雲母微細．粒を多く含む	良好	くすんだ淡黄褐色	ナデ	ヨコナデ後ハケ目 押圧ナデ 板状工具によるナデアゲ	
Fig43	151	土師器	小型丸底壷	10.4 9.4	良質．微細～小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	淡明赤橙色	ヨコナデ 細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig43	152	土師器	小型丸底壷	9.5 8.0	良質．微細～小砂粒と雲母微細を少量含む．赤褐色粒を僅かに含む	良好	(外)淡黄褐色～淡明橙色 (内)淡灰白色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	底部外面黒斑
Fig43	153	土師器	小型丸底壷	9.6 + α 6.6	精良．微細砂と雲母微細を含む	良好	(外)淡明黄橙色 (内)淡明黄橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	胴部外面黒斑
Fig43	154	土師器	小型丸底壷	11.6 9.4	雲母微細を僅かに含む	良好	淡黄灰褐色	ヨコナデ ナデ	ハケ目 指頭押圧ナデ	
Fig43	155	土師器	小型丸底壷	12.2 10.7	微細～石英小砂粒を多く含む．雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ 粗いハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig43	156	土師器	小型丸底壷	9.9 9.2～9.8	精良．微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	ややくすんだ淡黄灰色	押圧ナデ後粗いハケ目 ハケ目後ナデ	押圧ナデ後粗いハケ目 横～斜め方向の指頭押圧ナデ	
Fig43	157	土師器	小型丸底壷	9.3 8.7	精良．微細～石英小砂粒を含む．雲母微細含む	良好	(外)淡灰黒色 (内)淡明橙色	ヨコナデ 粗いハケ目～ヨコハケ目	ヨコハケ目 指頭押圧ナデ	
Fig43	158	土師器	小型丸底壷	10.0 9.6	良質．微細～石英小砂粒を比較的多く含む．雲母微細を少量含む	良好	(外)淡明黄灰褐色 (内)淡黄橙色	ヨコナデ 細かいハケ目後ナデ ナデ	押圧後ナデ 指頭押圧ナデ	底部外面黒斑
Fig43	159	土師器	小型丸底壷	7.8+ α 10	精良．細～小砂粒を含む．雲母微細を僅かに含む	良好	淡明黄橙色	ナデ後ハケ目		被熱によるスス様黒色物付着

Tab.19　出土遺物(土器)一覧表 18

Fig	No.	土器	器 種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig43	160	土師器	小型丸底壷	8.8 8.0	良質.微細～細砂粒雲母微細を含む	良好	(外)淡黄灰色 (内)淡黄褐色	ヨコナデ 押圧後ナデ 粗いハケ目	ヨコナデ ヘラ状工具によるナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑
Fig43	161	土師器	小型丸底壷	10.0 8.2	微細～細砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡明黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	内外面に2次被熱
Fig43	162	土師器	小型丸底壷	9.6 7.7 4.2	良質.細砂～石英小砂粒を多く含む.粗砂若干含む.赤褐色粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	明赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	上底で歪み著しい
Fig43	163	土師器	小型丸底壷	13.9 9.9	細～小砂粒多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ.やや粗いハケ目 ケズリ状のやや粗いナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面大きな黒斑
Fig44	164	土師器	小型丸底壷	9.0 7.8	微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を僅かに含む	良好	くすんだ暗黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig44	165	土師器	小型丸底壷	9.1 9.7	良質.微細～細砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡明橙色	ヨコナデ やや粗いハケ目 ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	底部外面黒斑
Fig44	166	土師器	小型丸底壷	9.8 9.4	微細～細砂粒少量含む.雲母微細を僅かに含む	良好	淡黄～淡黄白色	ヨコナデ後ハケ目 ナデ後細かいハケ目	細かいハケ目 指頭押圧ナデ	底部外面黒斑
Fig44	167	土師器	小型丸底壷	9.6 8.5	良質.微細～石英小砂粒比較的多く含む.雲母微細粒を少量含む	良好	淡黄橙色	やや粗いハケ目	細かいヨコハケ目 指頭押圧ナデ	
Fig44	168	土師器	小型丸底壷	10.4 8.1 ～ 8.3	精良.微細砂と雲母微細を比較的多く含む	良好	(外)淡明白色～淡明黄橙色 (内)淡明黄橙色	ヨコナデ 指頭によるヨコナデ ナデ	ハケ目後ヨコナデ ヨコ方向の押圧ナデ	内面押圧痕明瞭
Fig44	169	土師器	小型丸底壷	7.5 6.0	やや粗く粗砂粒を多く含む	良好	橙色	ナデ ヨコハケ目 ナデ	ナデ ナデ	
Fig44	170	土師器	小型丸底壷	9.4 6.7 ～ 7.0	微細～石英小砂粒含む	良好	(外)淡明黄橙色 (内)くすんだ明黄褐色	ヨコナデ ナデ ハケ目後ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部に黒斑
Fig44	171	土師器	小型丸底壷	8.2 9.7	精良.微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	淡明黄橙色	ハケ目後ヨコナデ ハケ目後ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭による押圧ナデ,明瞭な押圧痕	
Fig44	172	土師器	小型丸底壷	8.8 7.4 ～ 7.8	良質.微細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡明黄橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig44	173	土師器	小型丸底壷	8.9 7.8	良質.微細～小砂粒と雲母微細を含む.赤褐色粒を僅かに含む	良好	(内外面上半).淡明赤橙色 (下半)淡黄褐色	ハケ目 ハケ目 ナデ	ハケ目 指頭押圧ナデ後粗いハケ目	外面黒斑
Fig44	174	土師器	小型丸底壷	9.5 8.7	良質.微細～細砂粒と雲母微細を含む石英小砂粒と赤褐色粒を少量含む	良好	淡明黄褐色	ナデ	指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑.底部籾圧痕
Fig44	175	土師器	小型丸底壷	8.7 7.2	良質.微細～細砂粒と雲母微細少量を含む	良好	淡明黄橙色	ヨコナデ ナデ ナデ後ハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	

Tab.20　出土遺物(土器)一覧表 19

Fig	No.	土器	器 種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig44	176	土師器	小型丸底壷	9.8 7.6 ～ 7.9	良質.微細～細砂粒と雲母微細含む	良好	くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ ナデ 細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig44	177	土師器	小型丸底壷	8.6 8.7	微細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細含む	良好	(外)くすんだ黄灰褐色 (内)灰黄褐色	ヨコナデ 押圧ナデ.一部ハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig44	178	土師器	小型丸底壷	9.8 9.0	微細～小砂粒と雲母微細を含む	良好	くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ 粗いタテハケ目	ヨコナデ 押圧ナデ	
Fig44	179	土師器	小型丸底壷	9.3 9.5	微細～細砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面に黒斑
Fig44	180	土師器	小型丸底壷	8.6 8.5	良質.微細～細砂粒を含む.雲母微細を少量含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ヨコナデ 押圧ナデ	ヨコナデ 細かいハケ目 指頭押圧ナデ	
Fig44	181	土師器	鉢	8.5 13.3 4.2	良質.微細砂と雲母微細を比較的多く含む	良好	(外)明赤橙色 (内)くすんだ灰黄褐色	ヨコナデ ナデ 2.4~2.7cmの楕円形のスタンプ状の凹有	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面に炭化物付着 底部被熱による赤変
Fig44	182	土師器	小型丸底壷	9.1 7.9	良質.微細～細砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡明黄白色	ヨコナデ ナデ 押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	頸部内面粘土継目
Fig44	183	土師器	小型丸底壷	10.0 8.7	良質.微細砂と雲母微細を少量含む	良好	くすんだ淡黄橙色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig44	184	土師器	小型丸底壷	9.0+ α	良質.微細砂と雲母微細を少量含む.赤褐色粒を僅かに含む	良好	くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig44	185	土師器	小型丸底壷	9.9	微細～小砂粒を少量含む。雲母微細を少量含む	良好	淡黄橙色	押圧後ヨコナデ ナデ	押圧後ヨコナデ 指頭押圧ナデ	頸部内面籾圧痕.底部炭化物様の付着物
Fig44	186	土師器	小型丸底壷	12.1 9.8	良質.微細～細砂粒を含む.雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ 粗いナデ 粗いヨコハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	口縁部外面被熱による赤変.胴部黒斑.底部内面炭化物付着
Fig45	187	土師器	小型丸底壷	7.1 8.2	良質.微細～細砂粒と雲母微細を多く含む	良好	(外)淡黄橙～淡黄褐色 (内)淡橙～淡灰黒色	ヨコナデ タテ方向のナデ 粗いハケ目	ヨコナデ、一部にヨコハケ目 指頭押圧ナデ	外面にスス状黒色物付着.3箇所楕円状の剥離
Fig45	188	土師器	小型丸底壷	8.1 9.7	やや粗い.細～石英小砂粒を多く含む.石英中砂粒を僅かに含む.雲母微細.粒を少量含む	良好	ややくすんだ淡黄橙色	ハケ目後ヨコナデ 押圧ナデ後細かいハケ目	ハケ目 ケズリ状ナデアゲ	
Fig45	189	土師器	小型丸底壷	8.8 10.9	微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	暗灰茶褐色	ヨコナデ 粗いハケ目	ヨコナデ後ハケ目 指頭押圧ナデ	
Fig45	190	土師器	小型丸底壷	9.0 10.8	微細～細砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む石英中～粗砂粒を僅かに含む	良好		ヨコナデ ナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	底部外面黒斑
Fig45	191	土師器	小型丸底壷	9.9 10.5	良質.微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	(外)淡灰黄色～くすんだ灰茶色 (内)淡黒灰色	ヨコナデ 粗いハケ目	やや粗いヨコハケ目 指頭押圧ナデ	外面に炭化物様の黒色付着物

Tab.21　出土遺物(土器)一覧表 20

Fig	No.	土器	器 種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig45	192	土師器	小型丸底壷	6.5 8.2	良質.小～中砂粒を含む	良好	灰褐色	ナデ ナデ	工具ナデ 指頭押圧ナデ	
Fig45	193	土師器	小型丸底壷	7.4 7.7 ～ 8.0	良質.微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を含む	良好	ややくすんだ淡灰黄褐色	ヨコナデ ナデ 板状工具による横方向のケズリ状の粗いナデ	ヨコナデ	胴部外面に黒斑
Fig45	194	土師器	小型丸底壷	8 9	良質.微細～細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ハケ目後ヨコナデ ナデ後粗いハケ目	粗いハケ目 指頭押圧ナデ	底部内面淡い黒斑
Fig45	195	土師器	小型丸底壷	8.6 9.7	微細～小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡黄橙～淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面スス状付着物内面全体黒斑
Fig45	196	土師器	小型丸底壷	8.0 8.4	小～粗砂粒を含む	良好	灰黄褐色	ヨコナデ ナデ	ハケメ 指頭押圧ナデ	
Fig45	197	土師器	小型丸底壷	7.2 7.4	小～中砂粒を少量含む	良好	灰褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ハケ目	
Fig45	198	土師器	小型丸底壷	7.6 8.6	良質.微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細と赤褐色粒を僅かに含む	良好	(外)淡黄白褐色 (内)淡明橙色	ヨコナデ 押圧ナデ後ハケ目 ヘラ状工具によるナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig45	199	土師器	小型丸底壷	7.6 8.1	微細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を比較的多く含む	良好	淡黄灰褐色	ヨコナデ ナデ 押圧後叩き痕状の粗いハケ目	ヘラ状工具によるヨコナデ	胴部外面黒斑
Fig45	200	土師器	小型丸底壷	8.0 8.4	微細～細砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡黄灰色～淡灰黒色	ヨコナデ ナデ 粗いハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig45	201	土師器	小型丸底壷	8.9 8.5 ～ 8.8	微細～細砂粒を含む.雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ やや細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴底部外面淡い黒斑
Fig45	202	土師器	小型丸底壷	8.5 8.2	良質.細～小砂粒と雲母微細.粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ 細かいハケ目 ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	口縁部内外面.胴部外面黒斑
Fig45	203	土師器	小型丸底壷	8.6 8.5 ～ 8.7	良質.微細砂と雲母微細を含む	良好	淡灰黄褐色	ナデ後ハケ目 ナデ	粗いヨコハケ目 指頭押圧ナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑.胴内面に明瞭な指頭押圧痕
Fig45	204	土師器	小型丸底壷	9.5 8.2	細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	淡明黄橙色	ヨコナデ 粗いハケ目	ヘラ状工具による左回転のヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig45	205	土師器	小型丸底壷	9.0 8.6	良質.微細～小砂粒を比較的多く含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ヨコナデ やや粗いハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig45	206	土師器	小型丸底壷	10.0 9.8	微細～小砂粒と雲母微細を含む赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡黄褐色 ややくすんだ淡黄褐色	ハケ目後ヨコナデ ナデ	粗いハケ目後ヨコナデ 押圧ナデ	口縁部黒斑有
Fig45	207	土師器	小型丸底壷	9.8 9.6	良質.微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を含む	良好	淡黄褐色	細かいハケ目後ヨコナデ ナデ ハケ目	ヘラ状工具によるやや粗いヨコナデ 指頭押圧後掻き上げ状のナデ	頸部に明瞭な粘土継目痕

Tab.22　出土遺物（土器）一覧表 21

Fig	No.	土器	器 種	サイズ（器高・口径・底径）	胎土	焼成	色調	調整（外）	調整（内）	その他
Fig45	208	土師器	小型丸底壷	9.7 7.7 ～ 8.5	良質．微細砂雲母微細を多く含む	良好	淡明橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 押圧ナデ 指頭による突刺状の粗いナデ	
Fig45	209	土師器	小型丸底壷	10.1 9.6	微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	粗いハケ目後ヨコナデ ナデ 粗いハケ目	ヨコナデ 粘土継目オーバーハング 指頭押圧ナデ	２次被熱によるスス付着
Fig45	210	土師器	小型丸底壷	10.5 11.8	微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む．石英砂粒を含む	良好	淡黄褐色	ハケメ後ヨコナデ ハケメ ヘラケズリ	ハケメ 指頭押圧ナデ	
Fig45	211	土師器	小型丸底壷	9.2 8.8	良質．微細～石英小砂粒を比較的多く含む．赤褐色粒を少量含む	良好	(外)淡黄白褐色 (内)淡明黄橙色	ヨコナデ ナデ 板状工具によるヨコ方向の粗いナデ	ヨコナデ 押圧ナデ	
Fig45	212	土師器	小型丸底壷	10.0 8.4	微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	(外)淡黄褐色～灰黄褐色 (内)淡灰黄褐色	ハケ目後ヨコナデ ナデ	指頭押圧ナデ	黒色物付着
Fig45	213	土師器	小型丸底壷	9.7 9.8	微細～石英小砂粒を多く含む．雲母微細含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面全体に２次被熱による黒色スス付着
Fig45	214	土師器	小型丸底壷	9.3 8.7	微細～細砂粒を多く含む．雲母微細含む	良好	(外)くすんだ黄茶色 (内)くすんだ黄灰色	押圧後ヨコナデ ナデ	押圧後ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面に黒斑
Fig46	215	土師器	小型丸底壷	8.0 8.1	良質．微細～細砂粒を含む．石英小砂粒を僅かに含む	良好	淡黄～黄褐色	ヨコナデ ナデ ナデ後ヘラ	ハケ目 指頭押圧ナデ	胴部外面スス付着
Fig46	216	土師器	小型丸底壷	8.1 8.4 ～ 8.6	良質．微細砂～石英小砂粒を比較的多く含む．雲母微細を少量含む	良好	(外)淡黄橙色 (内)ややくすんだ淡黄橙色 上半一部と内面淡明橙色	ヨコナデ 細かいハケ目 ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ 横方向の押圧ナデ	
Fig46	217	土師器	小型丸底壷	8.6 8.4 ～ 8.6	良質．細～石英中砂粒を比較的多く含む．雲母微細含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ ナデ ヘラケズリ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig46	218	土師器	小型丸底壷	8.9 8.5	良質．微細～小砂粒を多く含む．雲母微細含む	良好	ややくすんだ淡黄灰色	板状工具によるヨコナデ 細かいタテハケ目 ヨコ方向の指頭押圧ナデ	板状工具によるヨコナデ 指頭押圧ナデ	口縁部に２次被熱によるスス状の黒色物
Fig46	219	土師器	小型丸底壷	9.2 8.9	細砂～石英小砂粒を多く含む．雲母微細を少量含む	良好	くすんだ暗橙色 (外底部)黄褐色	ヨコナデ ヘラ状工具によるナデ	ヨコナデ、指頭押圧ナデ 頸部内面粘土継目痕	炊きこぼれ状の黒色物付着
Fig46	220	土師器	小型丸底壷	7.9 8.0	良質．微細～石英小砂粒を比較的多く含む．石英粗砂粒と赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡灰黒色	ヨコナデ 粗いハケ目後ナデ ナデ	ヨコナデ 押圧ナデ	
Fig46	221	土師器	小型丸底壷	8.1 7.9	良質．微細～細砂粒と雲母微細を多く含む	良好	若干くすんだ淡黄灰褐色	ヨコナデ 細かいタテハケ目 押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	内面底部炭化物付着
Fig46	222	土師器	小型丸底壷	8.6 8.4	微細～石英小砂粒を比較的多く含む．雲母微細を含む	良好	淡黄橙色、外面は鉄分付着により赤茶色	ハケ目後ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig46	223	土師器	小型丸底壷	9.2 8.4	良質．微細～小砂粒を含む．雲母微細を少量含む	良好	ややくすんだ淡灰黒色	ヨコナデ ナデ ヘラ状ヨコナデ	ハケ目後ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面に淡い黒斑

Tab.23　出土遺物(土器)一覧表 22

Fig	No.	土器	器 種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig46	224	土師器	小型丸底壷	9.0 8.2 ～ 8.6	良質.微細と小砂粒と雲母微細を比較的少量含む	良好	くすんだ淡黄褐色	粗いハケ目後ヨコナデ ナデ	粗いハケ目後ナデ	
Fig46	225	土師器	小型丸底壷	7.4 7.1	精良.微細～小砂粒を含む.雲母微細を僅かに含む	良好	灰白～淡茶色	ヨコナデ やや粗いハケ目 ナデ	ヨコナデ	
Fig46	226	土師器	小型丸底壷	8.8 8.5	微細砂と雲母微細を比較的多く含む.石英小～中砂粒を少量含む	良好	ややくすんだ淡黄橙色	ヨコナデ ナデ、やや細かいナデ	ヨコナデ 押圧ナデ	
Fig46	227	土師器	小型丸底壷	9.3 8.6	細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を少量含む	良好	(外)赤橙色 (内)淡黒色	ヨコ～タテ方向の細かいハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig46	228	土師器	小型丸底壷	9.1 8.0	良質.微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	くすんだ灰色を帯びた淡黄褐色	ナデ 押圧ナデ上げ	ヨコナデ 放射状の指頭押圧ナデ上げ	
Fig46	229	土師器	小型丸底壷	9.6 8.2	良質.微細～石英小砂粒と雲母微細を多く含む.赤褐色粒を比較的多く含む	良好	(外)淡明黄橙色 (内)淡黄桃色～赤褐色	ハケ目後ヨコナデ ナデ	ハケ目後ヨコナデ 指頭押圧ナデ	頸部に粘土継目痕
Fig46	230	土師器	小型丸底壷	8.7 8.4 ～ 8.6	やや粗い.石英～中砂粒を多く含む.雲母微細含む	良好	(外)淡黄灰褐色 (内)淡黄橙色	ヨコナデ ハケ目後ナデ ケズリ状のナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig41	231	土師器	小型丸底壷	8.1 7.8 ～ 8.4	良質.細～石英中砂粒と雲母微細を含む	良好	(外)淡灰黄褐色 (内)暗灰褐色	ヨコナデ 押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面黒斑.口縁内面と外面炭化物様黒色物
Fig46	232	土師器	小型丸底壷	9.5 8.3 ～ 8.5	良質.微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ 押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	頸部に粘土継目痕
Fig46	233	土師器	小型丸底壷	9.3 8.6	良質.微細～小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	粗いハケ目後ヨコナデ ヘラケズリ	ハケ目後ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig46	234	土師器	小型丸底壷	10.0 9.2	良質.微細～小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig46	235	土師器	小型丸底壷	8.3 7.5	微細～小砂粒を多く含む.赤褐色粒を僅かに含む.雲母微細を含む	良好	淡黄褐色	押圧後やや粗いハケメ	指頭押圧ナデ	
Fig46	236	土師器	小型丸底壷	8.5 7.8	精良.微細砂と雲母微細含む	良好	(外)淡黄灰褐色～灰白色 (内)淡黄灰褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	底部が異様に厚い
Fig46	237	土師器	小型丸底壷	9.3 7.9	良質.微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	ややくすんだ黄灰褐色	ヨコナデ 粗いハケ目	ヨコナデ 押圧ナデ	底部外面黒斑
Fig46	238	土師器	小型丸底壷	9.9 8.2	良質.微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	ややくすんだ淡黄橙色	ヨコナデ 比較的丁寧なナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面全体に黒斑
Fig46	239	土師器	小型丸底壷	10.8 9.4	やや粗い.細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)淡黄茶色	ヨコナデ ハケ目後ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	粘土継目有 外面スス状黒色物付着 底部外面黒斑

Tab.24　出土遺物(土器)一覧表 23

Fig	No.	土器	器種	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig46	240	土師器	小型丸底壷	6.8+ α 8.9	良質.微細～細砂粒と雲母微細を含む.赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡黄橙色	ハケ目	ヨコナデ ケズリ状のナデアゲ	
Fig46	241	土師器	小型丸底壷	12.5 11.8	良質.微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	黄灰～暗灰茶褐色	ヨコナデ ナデ.ハケ目 細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面黒色物
Fig47	242	土師器	小型丸底壷	8.6 7.9	精良.微細砂と雲母微細を含む	良好	ややくすんだ淡黄灰色	ヨコナデ ナデ、ヘラ状工具による刻目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	刻目突帯1条
Fig47	243	土師器	小型丸底壷	8.9 7.5	細～石英小砂粒を多く含む.赤褐色小粒を僅かに含む	良好	淡明赤橙色	摩滅著しく調整不祥	指頭押圧痕	
Fig47	244	土師器	小型丸底壷	8.5 6.2	良質.微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	赤橙色	ヨコナデ ナデ ナデ後一部粗いハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig47	245	土師器	小型丸底壷	8.5 7.4	微細～細砂粒を比較的多く含む.雲母微細を僅かに含む	良好	淡黄褐色	ハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig47	246	土師器	小型丸底壷	10.2 8.7	精良.微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む.赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡明黄橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面全体に黒斑
Fig47	247	土師器	小型丸底壷	9.8 7.2	微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を僅かに含む	良好	くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑.底部籾圧痕.内面頸部粘土継目痕
Fig47	248	土師器	小型丸底壷	9.7 7.8	微細砂～石英小砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	(外)赤橙～淡黄橙色 (内)淡灰黒色	ヨコナデ 粗いハケ目	ヨコナデ 押圧ナデ 指頭によるナデアゲ	外面一部に黒斑あり
Fig47	249	土師器	小型丸底壷	13.0 10.3	良質.微細～細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ 細かいハケ目	ヨコナデ 押圧後ヘラ状工具によるナデ	外面2次被熱によるスス付着.内面炭化物付着
Fig47	250	土師器	小型丸底壷	13.3 9.7 ～ 9.9	微細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡黄茶褐色	ヨコナデ やや細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面全体被熱によるスス付着
Fig47	251	土師器	小型丸底壷	7.9 10.1	良質.微細～小砂粒を比較的多く含む.赤褐色粒を僅かに含む	良好	ややくすんだ淡黄橙色	ハケ目後ヨコナデ ハケ目後ナデ ヘラ状工具によるナデアゲ	ヨコナデ 指頭押圧によるヨコナデ	
Fig47	252	土師器	小型丸底壷	9.5 7.2	微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細.赤褐色粒を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ 粗いタテハケ目 ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑
Fig47	253	土師器	小型丸底壷	9.6 8.0 ～ 8.2	良質.微細砂.雲母微細を含む	良好	ややくすんだ淡灰黄褐色	ヨコナデ ハケ目 横方向のナデ	ヨコナデ 指頭によるナデ	
Fig47	254	土師器	小型丸底壷	9.3 8.4	細～石英小砂粒を比較的多く含む	良好	(外)明白灰色 (内)淡明黄褐色	ヨコナデ 粗いハケ目 粗いヨコ～ナナメのハケ目	粗いハケ目 指頭押圧ナデ	外面黒斑
Fig47	255	土師器	甕	14.9 10.1 ～ 10.4	良質.微細～細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ	指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑

Tab.25　出土遺物（土器）一覧表 24

Fig	No.	土器	器種	サイズ（器高・口径・底径）	胎土	焼成	色調	調整（外）	調整（内）	その他
Fig47	256	土師器	小型丸底壷	7.8 7.4	石英細～小砂粒を多く含む．雲母微細と赤褐色粒を含む	良好	くすんだ淡黄橙色	ヨコナデ 押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig47	257	土師器	小型丸底壷	8.6 7.8 ～ 8	微細～細砂粒を多く含む．雲母微細を含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)暗黄茶褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	口縁～胴部外面黒斑
Fig47	258	土師器	小型丸底壷	8.5 8.0	良質．微細～石英小砂粒を多く含む．雲母微細含む	良好	(口縁部～胴上半)暗赤橙色 (胴下半)赤茶～茶灰褐色	ヨコナデ ハケ目、ナデ ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケ目	
Fig47	259	土師器	小型丸底壷	8.8 7.5	微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む．石英小砂粒を僅かに含む．	良好	くすんだ淡黄橙色	ヨコナデ ハケ目 粗いハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面黒斑
Fig47	260	土師器	小型丸底壷	9.4 8.3	良質．微細～小砂粒を少量含む。雲母微細を少量含む	良好	(外)淡明橙色～淡黄褐色 (内)くすんだ淡黄～淡橙色	ハケ目後ヨコナデ やや細かいハケ目 ヘラ状工具によるヨコ方向のナデ	ハケ目後ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig47	261	土師器	小型丸底壷	8.5 6.8	微細～細砂粒を比較的多く含む．雲母微細を僅かに含む	良好	ややくすんだ淡黄橙色	ヨコナデ後ハケ目 やや細かいハケ目	ヨコナデ後ハケ目 指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑
Fig47	262	土師器	小型丸底壷	9.0 7.8	良質．微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	(外)くすんだ淡黄褐色 (内)くすんだ黄灰色	ヨコナデ ヘラ状工具による粗いナデ上げ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig47	263	土師器	小型丸底壷	11.0 9.6	細～石英中砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	淡黄灰色	暗文状の粗いハケ目 粗いハケ目	ヨコナデ ヘラ状工具による粗い押圧ナデ	内外面に黒斑状の淡黒～黒茶色部有
Fig47	264	土師器	小型丸底壷	14 12.4	細～石英小砂粒を多く含む．雲母微細を含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ ナデ後ハケ目	ヘラ状工具によるヨコナデ ヘラケズリ	頸部外面被熱による赤変．胴部黒斑．頸部内面粘土継目
Fig47	265	土師器	小型丸底壷	8.0 6.9 ～ 7.1	良質．微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	淡橙色 (外)胴下半、淡黄灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部外面に黒斑．スス状の黒色物
Fig47	266	土師器	小型丸底壷	8.6 8.2	やや粗い．微細～石英中砂粒を多く含む．雲母微細を僅かに含む	良好	ややくすんだ淡明黄橙色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ 押圧ナデ	胴部内面に淡い黒斑
Fig47	267	土師器	小型丸底壷	10.3 9.3	良質．微細～石英小砂粒と雲母微細を含む	良好	淡明橙色	ヨコナデ ナデ後ハケ目 ケズリ状の粗いナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig48	268	土師器	小型丸底壷	10 8.2	良質．細～小砂粒と雲母微細粒を比較的多く含む．石英粗砂粒を比較的多く含む	良好	(外)淡黄灰褐色 (内)淡灰褐色	ヨコナデ ナデ タタキ後ナデ	ヨコナデ タタキ痕 指頭押圧ナデ	外面淡い黒斑
Fig48	269	土師器	小型丸底壷	13.1 9.4	微細～石英小砂粒を比較的含む．雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ 粗いハケ目 ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	口縁～胴部外面2次被熱による赤変．胴部一部に小さな黒斑
Fig48	270	土師器	小型丸底壷	13.9 11.2	細～小砂粒を比較的多く含む	良好	淡明黄褐色	ヨコナデ 細かいハケ目 ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面黒斑
Fig48	271	土師器	小型丸底壷	14.7 10.4	良質．微細～小砂粒を多く含む．雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	(外)淡明赤橙色 (内)淡明赤橙色～淡黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部に黒斑 底部にスス状付着物 内面に炭化物付着

Tab.26　出土遺物(土器)一覧表 25

Fig	No.	土器	器 種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig48	272	土師器	小型丸底壷	13.5 10.4	良質.微細～石英小砂粒を比較的多く含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ ハケ目後ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑.底部粘土を凸状に貼付
Fig48	273	土師器	小型丸底壷	11.8 8.9	良質.微細砂と雲母微細を含む	良好	淡黄白～黄橙色	ハケ目後ヨコナデ 細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	黒斑
Fig48	274	土師器	小型丸底壷	14.1 9.9	良質.微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ヨコナデ 細かいタテハケメ目 押圧後ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	底部外面淡いスジ状黒斑
Fig48	275	土師器	小型丸底壷	13.5 9.5	微細～石英小砂粒と雲母微細を比較的多く含む.赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ やや細かいハケ目後ケズリ状ナデ	ヨコナデ ヘラ状工具によるケズリ状ナデ 指頭押圧ナデ	
Fig48	276	土師器	小型丸底壷	8.9 6.5	微細～細砂粒と雲母を含む	良好	くすんだ黄橙色	ヨコナデ 押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	底部外面黒斑
Fig48	277	土師器	小型丸底壷	10.3 8.5	微細～小砂粒を含む	良好	淡黄茶褐色	ヨコナデ ナデ やや粗いハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig48	278	土師器	小型丸底壷	9.5 9.0	良質.微細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	くすんだ灰黄色 全体に黒色 ～淡灰色	ヨコナデ、タテハケ目 やや粗いハケ目 平底状	ヘラ状工具によるヨコナデ	
Fig48	279	土師器	小型丸底壷	15.3 9.4	良質.微細～細砂粒を含む.雲母微細を含む	良好	(外)淡黄灰色 (内)ややくすんだ淡黄灰色	ヨコナデ やや細かいハケメ	ヨコナデ ナナメ指頭押圧ナデ ケズリ	内面粘土輪積痕
Fig48	280	土師器	小型丸底壷	10.1 7.9 ～ 8.2	良質.微細～石英小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ 粗いハケ目後ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	内外面に淡い黒斑.炭化物様の黒色物
Fig48	281	土師器	小型丸底壷	11.7 10.4	良質.微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	ややくすんだ 淡黄褐色	ヨコナデ 細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面2次被熱によるスス付着底部外面に黒斑
Fig48	282	土師器	小型丸底壷	11.3 8.8	粗い.微細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細を少量含む	良好	(外)淡黄～淡黄橙色 (内)明赤橙色	ヨコナデ 粗いハケ目 押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑
Fig48	283	土師器	小型丸底壷	11.9 9.4	微細～小砂粒と雲母微細を比較的多く含む.赤褐色粒を少量含む	良好	(外)淡明橙色 (内)淡黄褐色	ヨコナデ やや粗いタテハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig48	284	土師器	小型丸底壷	16.7 11.6	良質.細～石英中砂粒雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	明淡黄橙色	ヨコナデ	指頭押圧ナデ	底部外面に黒斑
Fig48	285	土師器	小型丸底壷	16.9 12.	精良.微細～石英小砂粒を比較的多く含む.赤褐色と石英中砂粒を少量含む	良好	淡黄白色	ヨコナデ 粗いハケ目	ハケ目 指頭押圧ナデ	胴部外面スス付着による黒変.内面被熱による赤変
Fig49	286	土師器	小型丸底壷	7.9 6.3	微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡黄灰褐色	ヨコナデ 指頭押圧ナデ ハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig49	287	土師器	小型丸底壷	9.9 7.0	微細～石英小砂粒を多く含む雲母微細含む	良好	暗橙灰色	ヨコナデ ナデ 細かいハケ目	ヨコナデ	底部外面黒斑

Tab.27　出土遺物(土器)一覧表 26

Fig	No.	土器	器 種	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig49	288	土師器	小型丸底壷	8.8 7.4 ～ 7.8	良質.微細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を少量含む	良好	(口縁～頸部)淡黒色 (胴部)淡明黄橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	口縁～頸部に被熱による黒変
Fig49	289	土師器	小型丸底壷	9.9 8.4	微細～小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	(外)淡黄橙色 (内)淡明黄褐色	ヨコナデ	浅いヘコミ 指頭押圧ナデ	外面黒斑
Fig49	290	土師器	小型丸底壷	7.7 6.2	良質.微細～細砂粒を比較的多く含む.雲母微細含む	良好	ややくすんだ淡灰黄色	ヨコナデ ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	内面は粘土継ぎ目の凹凸が顕著
Fig49	291	土師器	小型丸底壷	10.0 8.6	微細～石英小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	淡明橙色	ハケ目後ヨコナデ ナデ	ヘラ状工具によるヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面に被熱による赤変と剥離有
Fig49	292	土師器	小型丸底壷	10.5 9.3	微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を含む	良好	(外)くすんだ淡赤橙色～黄茶色 (内)明赤橙色～淡黄橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	スス様の黒色物付着
Fig49	293	土師器	小型丸底壷	13.0 10.3	良質.石英細～小砂粒を多く含む	良好	淡明赤橙色	ヨコナデ ナデ ヘラケズリ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	口縁部外面赤橙色の化粧土塗布
Fig49	294	土師器	小型丸底壷	9.9 9.3	良質.微細～小砂粒を含む雲母微細を含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色 (底部内面)淡黄褐色 (胴～口縁部)黒斑状の淡灰黒色	ヨコナデ 粗いハケ目後ヨコナデ 丁寧な押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ ヘラ状工具による粗いヨコナデ	底部外面.口縁内面に黒斑
Fig49	295	土師器	小型丸底壷	9.5+ α 8.6	精良.微細砂と雲母微細を含む.赤褐色粒を僅かに含む	良好	明赤橙色 (胴内面)淡明黄橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧痕	
Fig49	296	土師器	小型丸底壷	11.7 10.4	良質.微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ハケ目後ヨコナデ 細かいハケ目	ヘラ状工具によるヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面2次被熱によるスス付着.淡い黒斑
Fig49	297	土師器	小型丸底壷	10.0 8.0	良質.微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	淡黄灰褐色 若干灰乳色を帯びる	ヨコナデ ナデ 粗いハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	頸部に粘土継目痕有
Fig49	298	土師器	小型丸底壷	10.8 7.6	良質.微細砂～石英小砂粒と雲母微細を比較的多く含む.石英中砂粒を僅かに含む	良好	ややくすんだ灰黄褐色	ヨコナデ 細かいハケ目後ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面に大きな黒斑
Fig49	299	土師器	小型丸底壷	10.2 7.6	良質.細～石英中砂粒を比較的多く含む.雲母微細含む	良好	(外)淡明黄橙色 (内)淡明灰黄色	ヨコナデ ナデ ケズリ状の粗いナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig49	300	土師器	小型丸底壷	10.1+ α	良質.微細～石英小砂粒を雲母微細と赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡明黄褐色	ヨコナデ ナデ 細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig49	301	土師器	小型丸底壷	12.1+ α	良質.微細～細砂粒と雲母微細.粒を多く含む	良好	暗黄灰色	ヨコナデ ナデ 細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑.スス付着
Fig49	302	土師器	小型丸底壷	9.4+ α	微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細含む	良好	淡明黄褐色 (黄白色気味)	ヨコナデ ハケ目後ナデ	ヨコナデ 指頭押圧痕	
Fig49	303	土師器	小型丸底壷	8.8 + α 4.8	良質.微細～小砂粒を含む.雲母微細を多く含む	良好	ややくすんだ淡黄灰褐色 (表面)暗赤橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	胴部外面黒斑.内面押圧痕

Tab.28　出土遺物(土器)一覧表 27

Fig	No.	土器	器 種	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig49	304	土師器	小型丸底壷	7.9+ α	微細～細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	黒色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部内外面黒色物
								ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig49	305	土師器	小型丸底壷	6.8+ α	微細粒～細砂粒と石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成前に穿孔有.胴部外面黒斑
								ナデ	指頭押圧ナデ	
									ハケメ	
Fig50	306	土師器	小型丸底壷	7.2	微細～中砂粒を比較的多く含む.雲母微細を僅かに含む	良好	淡黄灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴底部外面黒斑
				6.4				ナデ	指頭押圧ナデ	
				4.6						
Fig50	307	土師器	小型丸底壷	8.5	微細～中砂粒を比較的多く含む.雲母微細含む	良好	くすんだ灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面粘土継ぎ目痕.黒斑
				6.8				押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				3.2 ～ 3.8						
Fig50	308	土師器	手捏小型平底壷	6.8 + α	良質.微細～石英小砂粒と雲母微細を含む	良好	淡灰白褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				6.0				ナデ	ナナメの指頭押圧ナデ	
Fig50	309	土師器	手捏小型平底壷	6.8	良質.微細～小砂粒と雲母微細を含む	良好	淡明黄橙色と黒～灰黒色	粗いハケ目	粗いハケ目	底部外面黒斑
				7.5				押圧ナデ、ハケ目	押圧ナデ、ハケ目	
								指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig50	310	土師器	小型丸底壷	8.1	良質.細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	(外)淡灰黄色～淡灰黒色 (内)淡黒灰色	ハケ目	ヨコナデ後ハケ目	外面にスス様黒色物付着
				8.9				ナデ	指頭押圧ナデ	
				4.9				ナデ		
Fig50	311	土師器	小型丸底壷	6.3	良質.微細砂と雲母砂粒を含む	良好	くすんだ褐色	ヨコナデ	ヘラナデ	内外面淡い黒斑
				8.1				ナデ後ハケ目	指頭押圧ナデ	
								ナデ		
Fig50	312	土師器	小型丸底壷	7.0	小～粗砂粒を少量含む	良好	橙色	ナデ	ナデ	
				6.5				ハケ目	ケズリ	
Fig50	313	土師器	小型丸底壷	6.7	良質.微細～細砂粒を比較的多く含む.雲母微細を僅かに含む	良好	ややくすんだ淡黄橙色	ハケ目後ヨコナデ	粗いハケ目	
				7.8 ～ 8.6				粗いナデ	指頭押圧ナデ	
Fig50	314	土師器	小型丸底壷	7.5	精良.微細～小砂粒を比較的多く含む.雲母微細含む	良好	淡黄灰色			
				9.9				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig50	315	土師器	小型丸底壷	7.8	良質.微細～石英小砂粒を比較的多く含む雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面２次被熱による雲母微細を少量含む
				8.2				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig50	316	土師器	小型丸底壷	6.0	良質.細～小砂粒を僅かに含む	良好	淡橙色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				6.2					ナデ	
Fig50	317	土師器	小型丸底壷	7.8	やや粗い.微細～石英粗砂粒を多く含む.若干量の雲母微細を含む	良好	ややくすんだ暗灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部外面黒斑
				6.0				指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig50	318	土師器	小型丸底壷	6.8	精良.微細～小砂粒を含む	良好		指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				6.6						
Fig50	319	土師器	小型丸底壷	7.9	微細～細砂粒と石英小砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	(外)明赤橙色 (内)淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				7.7 ～ 7.9				ヘラ状工具によるナデ	押圧ナデ	
								ハケ目		

Tab.29　出土遺物(土器)一覧表 28

Fig	No.	土器	器 種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig50	320	土師器	小型丸底壷	9.9 9.3 ～ 10	微細～小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を含む	良好	暗茶灰色	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ ヘラ状工具によるナデ	外面被熱によるスス様黒色物付着胴部内面粘土紐有
Fig50	321	土師器	小型丸底壷	7.5 6.5	良質.小砂粒を少量含む	良好	黄褐色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ナデ	
Fig50	322	土師器	小型丸底壷	7.2 6.8	精良.小～中砂粒赤褐色粒を含む	良好	橙色	ナデ ナデ	ナデ 指頭押圧ナデ	
Fig50	323	土師器	小型丸底壷	10.2 10.2	良質.微細～石英小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	淡赤橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	底部黒斑
Fig50	324	土師器	小型丸底壷	7.9+ α 8.7	微細～石英小砂粒と雲母微細を含む	良好	(外)淡黄橙色 (内)黒色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面に黒斑.内面２次被熱
Fig50	325	土師器	小型丸底壷	11.9 9.5 ～ 9.7	やや粗い.細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)ややくすんだ淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面被熱による赤変
Fig50	326	土師器	小型丸底壷	8.0 8.5 ～ 9.1	微細～細砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ ナデ ナデ後粗いタテハケ目	指頭押圧ナデ	底部内面黒斑
Fig50	327	土師器	小型丸底壷	8.9 10.6	良質.微細～小砂粒を比較的多く含む.雲母微細含む	良好	くすんだ淡黄褐色～淡灰黄褐色	ヨコナデ ハケ目後ナデ 掻き上げナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig50	328	土師器	甕	12.7 15.8	細～石英中砂粒を比較的多く含む.雲母微細.粒を含む	良好	灰茶色	ヨコナデ やや粗いハケ目 ナデ	ヨコナデ 粗いヘラケズリ 指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑.胴内面被熱による黒茶色
Fig50	329	土師器	甕	12.9 12.6	細～石英中砂粒を多く含む	良好	(外)くすんだ灰黄色 (内)淡黄橙色	ヨコナデ ケズリ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	底部内面ヘラ工具の刺突痕
Fig50	330	土師器	小型丸底壷	13.8 15.6	良質.微細～石英中砂粒を比較的多く含む	良好	(外)淡黄橙色 (内)淡黒色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 押圧ナデ 強い指頭押圧痕	
Fig50	331	土師器	甕	14.3 15.4	微細～石英小砂粒雲母微細.粒を多く含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ ヘラ状工具によるケズリ状のナデ	胴部内面粘土紐継目痕
Fig51	332	土師器	小型丸底壷	8.9 7.1	良質.微細砂～石英小砂粒と雲母微細を多く含む.石英粗砂粒を少量含む	良好	黒色	ヨコナデ 指頭後丁寧なナデ	ヨコナデ 丁寧な指頭押圧ナデ	
Fig51	333	土師器	台付壷	9.5 + α 8.9 ～ 9.1	微細～小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ヨコナデ 押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig51	334	土師器	小型丸底壷	9.6 7.4 ～ 7.7	やや粗い.微細～石英中砂粒と雲母微細を多く含む	良好	(外)黄褐色～淡灰黒色 (内)淡黄灰褐色	ヨコナデ ナデ ケズリ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面淡い黒斑
Fig51	335	土師器	小型丸底壷	9.2 6.3 ～ 7.1	微細～細砂粒を比較的多く含む.雲母微細含む.石英小砂粒を僅かに含む	良好	淡黄褐色	ハケ目 ヘラケズリ ナデ	粗いヨコハケ目 指頭押圧ナデ	

Tab.30　出土遺物(土器)一覧表 29

Fig	No.	土器	器種	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig51	336	土師器	小型丸底壷	7.8+ α 11.2	微細～細砂粒と.雲母微細含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面2次被熱によるスス付着
Fig46	337	土師器	小型丸底壷	8.6+ α 7.7	微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	明赤橙色	ヨコナデ ナデ 押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面全体.口縁部内面炭化物様の黒色物付着
Fig51	338	土師器	台付壷	9.5 + α 8.9 ～ 9.1	微細～小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ヨコナデ 押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig51	339	土師器	小型丸底壷	8.4+ α	精良.雲母片含む	堅緻	灰褐色	ハケ目 ナデ	ナデ 師頭押圧ナデ	
Fig51	340	土師器	甕	11.6+ α 15.0	細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細と赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡明赤橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ヘラケズリ	外面黒斑、スス付着
Fig51	341	土師器	小型丸底壷	6.8 + α	精良.微細砂と雲母微細を含む	良好	淡黄～黄灰色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面に黒斑
Fig51	342	土師器	小型丸底壷	7.7+ α	精良.微細～細砂粒と赤褐色粒を僅かに含む	良好	(外)淡黄橙色 (内)淡黄橙色～淡灰黒色	ヨコナデ 粗いハケ目 ハケ目後ケズリ状のナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig51	343	土師器	小型丸底壷	7.4+ α	良質.小～粗砂粒を含む	良好	にぶい橙色	ナデ	ナデ ケズリ	
Fig51	344	土師器	小型丸底壷	6.7 + α	微細～石英中砂粒を比較的多く含む.雲母微細を僅かに含む	良好	淡黄褐色～淡黄灰色	ヨコナデ 押圧ナデ 粗いハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig51	345	土師器	小型丸底壷	7.5+ α	精良.微細砂と雲母微細を少量含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 押圧ナデ ヘラ状工具によるナデアゲ	胴部外面黒斑
Fig51	346	土師器	小型丸底壷	6.5 + α	良質で微細～石英小砂粒と少量含む.雲母微細を比較的多く含む	良好	(外)淡黄橙色 (内)黒色	ヨコナデ ナデ、一部ハケ目 ヘラ状工具による掻き上げ状のナデ上げ	ヨコナデ	
Fig51	347	土師器	小型丸底壷	5.8+ α	良質.小～中砂粒を少量含む	良好	灰褐色			穿孔有
Fig51	348	土師器	小型丸底壷	6.7+ α	良質.微細～細砂粒と雲母微細を含む.赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig51	349	土師器	小型丸底壷	6.2+ α	小～中砂粒を少量含む	良好	橙色	ナデ ハケ目後ナデ	ナデ ナデ	
Fig51	350	土師器	小型丸底壷	8.2+ α	良質.微細～細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	(外)淡明黄褐色 (内)淡灰黄～淡黄褐色	ハケメ	指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑
Fig51	351	土師器	小型丸底壷	8.3 + α 6.8	微細～石英小砂粒を多く含む	良好	(外)淡黄灰色 (内)くすんだ黄灰色	ヨコナデ やや細かいハケ目	押圧ナデ	

Tab.31　出土遺物(土器)一覧表 30

Fig	No.	土器	器 種	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig51	352	土師器	小型丸底壷	8.3+ α	微細～細砂粒を多く含む.石英中～粗砂粒を少量含む.雲母微細含む	良好	(外)淡黄灰色 (内)ややくすんだ黄灰色		指頭押圧ナデ	
				6.0				やや細かいハケ目		
Fig51	353	土師器	小型丸底壷	7.9 + α	精良.微細～粗砂粒を含む.雲母微細を含む	良好	淡明橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
								ナデ	指頭押圧ナデ	
								粗いケズリ		
Fig51	354	土師器	小型丸底壷	7.4+ α	良質.小～中砂粒を少量含む	良好	灰褐色	ナデ	ナデ	
								ハケ目	ケズリ	
								ナデ	ナデ	
Fig51	355	土師器	小型丸底壷	7.2+ α	良質.小～粗砂粒を僅かに含む	良好	灰褐色	ナデ	ナデ	
								ハケメ		
Fig51	356	土師器	小型丸底壷	7.8+ α	精良.微細～細砂粒を少量含む	良好	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
								ハケメ	指頭押圧ナデ	
Fig51	357	土師器	小型丸底壷	6.7+ α	細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細含む	良好	(外)淡黄橙色 (内)淡黄色	ナデ	指全体による押圧ナデ	底部外面黒斑
									ナデ	
				6.0 ～ 6.5						
Fig51	358	土師器	小型丸底壷	10.6+ α	細～石英中砂粒を比較的多く含む.赤褐色粒を少量含む	良好	淡明黄白色	ヨコナデ	ヨコナデ	
								ハケメ	指頭押圧ナデ	
								ヘラケズリ		
Fig51	359	土師器	小型丸底壷	10.3+ α	粗い.石英細～粗砂粒を多く含む.雲母微細を少量.赤褐色粒を僅少含む	良好	(外)淡黄～暗赤橙色 (内)暗黄橙色	ハケ目後ヨコナデ	指頭押圧ナデ	
								ナデ		
								ヘラケズリ状の粗いナデ		
Fig51	360	土師器	小型丸底壷	12.4+ α	良質.微細～小砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	ややくすんだ淡黄灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				8.2 ～ 8.4				やや粗いナナメ～ヨコハケ目	ヨコ方向の押圧ナデ	
Fig51	361	土師器	小型丸底壷	11.8+ α	良質.微細～細砂粒を含む.石英小～中砂粒と雲母微細を少量含む	良好	淡明黄褐色	ナデ	指頭押圧ナデ	底部内外面黒斑
								ハケメ	ハケメ	
Fig52	362	土師器	高坏	3.9	良質.細砂粒を少し含む	良好	黄灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				4.3						
Fig52	363	土師器	高坏	14.5	良質.微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	淡明橙色	ヨコナデ、ヘラ状工具によるナデ	ヨコナデ	
				17.1				ヨコナデ、ナデ	ナデ	
				11.5				ヨコナデ		
Fig52	364	土師器	高坏	12.5	やや粗い.細砂～石英中砂粒を多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				17.6				ナデ、ヨコナデ	ナデ	
				10.2				ヨコナデ	絞り後やや粗いヘラケズリ	
Fig52	365	土師器	高坏	13.0 + α	細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒を含む	良好	明赤橙色	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	
				22.7				ヨコナデ	ナデ	
								ナデ	絞り後押圧ナデ	
Fig52	366	土師器	高坏	11.5	微細～石英中砂粒を多く含む.赤褐色粒を僅かに含む	良好	(外、坏内)淡黄白褐色 (脚内)くすんだ淡赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	黒斑、黒色物付着
				16.4				ナデ	ナデ	
				10.9				ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、ヘラケズリ、ヨコナデ	
Fig52	367	土師器	高坏	12.2 ～ 13	細～石英中砂粒と雲母微細を多く含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	
				17.5				ナデ	指頭押圧ナデ	
				11.9				ヨコナデ、ヘラケズリ	ヘラケズリ	

Tab.32　出土遺物(土器)一覧表 31

Fig	No.	土器	器 種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig52	368	土師器	高坏	7.9+ α 21.4	微細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	淡黄白褐色	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ 押圧ナデ	内面に赤橙色の塗布痕
Fig52	369	土師器	高坏	6.5+ α 16.5	細～石英中砂粒を比較的多く含む	良好	(外)若干くすんだ淡黄白褐色 (内)淡黄橙色	ヨコナデ、ハケ目後ヨコナデ ヘラ状工具によるナデ	押圧後ヨコナデ	
Fig52	370	土師器	高坏	4.7 + α 14.4	良質.微細～石英小砂粒を含む.雲母微細含む	良好	淡明黄白色	ヨコナデ	ヨコナデ、籾圧痕 押圧後ヨコハケ目	口縁部に被熱による黒茶色
Fig52	371	土師器	高坏	5.2 + α 19.3	微細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ ハケ目後ヨコナデ、押圧ナデ	ヨコナデ、押圧後ハケ目	
Fig52	372	土師器	高坏	5.2+ α 18.6	精良.微細砂と雲母微細を少量含む.赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡橙色	ヨコナデ ヘラケズリ、板状工具によるナデ	ヨコナデ ナデ	
Fig52	373	土師器	高坏	4.9+ α 17.0 ～ 17.4	良質.微細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)淡黄橙色	ヨコナデ、ナデ	ヘラ状工具によるヨコナデ、押圧ナデハケメ後ナデ	
Fig52	374	土師器	高坏	6.2+ α 19.0	微細～小砂粒を比較的多く含む.雲母微細含む	良好	(外)淡赤橙～くすんだ黄灰褐色 (内)暗黄茶色	ハケ目後ヨコナデ ハケ目後ナデ	ヨコナデ ナデ	
Fig52	375	土師器	高坏	5.0+ α 19.0	良質で微細～小砂粒と雲母微細を含む	良好	淡黄～淡明橙色	ハケメ後ヨコナデ ヘラ状工具によるナデ後ヨコナデ	ヘラ状工具によるヨコナデ 押圧ナデ	
Fig52	376	土師器	高坏	5.9 + α 17.0	細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細含む	良好	くすんだ淡黄白褐色	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	内面剥落による凹凸著しい
Fig52	377	土師器	高坏	5.6 + α 19.7	良質.微細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	ややくすんだ赤橙色	ヨコナデ ハケ目後ナデ	ヨコナデ ナデ	
Fig52	378	土師器	高坏	8.0+ α 18.4	微細～細砂粒と雲母微細を含む.赤褐色を含む	良好	淡明橙色	斜めのハケ目後ヨコナデ ヨコ方向のナデ	ヨコナデ ナデ	坏内面に炭化物様の黒色物
Fig52	379	土師器	高坏	4.9 + α 16.9	良質.微細～小砂粒を比較的多く含む.雲母微細を含む	良好	淡黄褐色 若干黄茶色ぎみ	ヨコナデ	ヨコナデ、押圧ナデ	
Fig52	380	土師器	高坏	7.0 + α 18.3	細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	赤橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig52	381	土師器	高坏	4.6+ α 16.6	微細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡明黄橙色	ヨコナデ	ヨコハケ目	
Fig52	382	土師器	高坏	4.3+ α 16·1	良質.微細～雲母微細含む	良好	(外)くすんだ淡黄褐色 (内)淡明灰色、やや白色	ナナメハケ目後ヨコナデ 板状工具による放射状のナデ		
Fig52	383	土師器	高坏	4.4+ α 16.3	細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	(外)淡黄赤橙色 (内)淡明橙色	ヨコナデ ナデ		

Tab.33　出土遺物(土器)一覧表 32

Fig	No.	土器	器 種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig52	384	土師器	高坏	4.9+ α 17.9	微細～小砂粒を少量含む.雲母微細と赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡黄橙色	ハケ目 ナデ	ヨコハケ目 ナデ	
Fig53	385	土師器	高坏	7.3 + α 18.1	細～小砂粒を多く含む.雲母微細含む	良好	くすんだ淡黄灰褐色	ナデ ヘラケズリ	ヨコナデ 粗いハケ目	坏底部に被熱によるスス状の黒色物
Fig53	386	土師器	高坏	7.3 18.1	良質.微細～細砂粒と雲母微細赤褐色粒を多く含む	良好	淡明赤橙色	粗いハケ目後ヨコナデ 粗いハケ目後ヨコナデ	粗いハケ目後ヨコナデ ヨコナデ、ナデ	
Fig53	387	土師器	高坏	5.5 + α 15.4 ～ 15.8	細～石英粗砂粒を多く含む.赤褐色粒を少量含む	良好	淡明赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	内外面に被熱による赤変
Fig53	388	土師器	高坏	9.2+ α 32.4 ～ 33.3	微細～石英小砂粒を含む.雲母微細を少量含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ ヘラ状工具による粗い磨き 押圧ナデ	ヨコナデ ヨコハケ目後ヘラ状工具による暗文状の磨き 放射状磨き	
Fig53	389	土師器	高坏	11.7 + α 11.7	やや粗い.細～石英粗砂粒を多く含む.雲母微細を比較的多く含む	良好	ややくすんだ淡黄色	浅い段上を呈す、丁寧なナデ 押圧ナデ、ハケ目後ナデ		焼成前穿孔
Fig53	390	土師器	高坏	8.5 + α 12.0	微細～石英小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	押圧ナデ、ナデ、ヨコナデ	右回転ヘラケズリ、ヨコナデ	黒斑
Fig53	391	土師器	高坏	8.6 + α 13.8	良質.微細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を僅かに含む	良好	赤橙色～赤褐色	摩滅著しく不祥	押圧痕	被熱による赤変有
Fig53	392	土師器	高坏	7.5+ α 12.0	微細～石英中砂粒を比較的多く含む.雲母微細.赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡明黄橙色	ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig53	393	土師器	高坏	7.6 + α 12.6	微細粒～小砂粒を多く含む.雲母微細を少量含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ナデ、ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	淡い黒色付着物？
Fig53	394	土師器	高坏	7.8 + α 12.2	細～小砂粒を比較的多く含む.雲母僅かに含む	良好	淡黄褐色	ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、ヨコナデ	黒斑
Fig53	395	土師器	高坏	8.8 + α 12.5	良質.微細～小砂粒を少量含む.雲母微細を含む	良好	淡黄褐色	下地にハケメ、ヨコナデ	押圧ナデ、右回りヘラケズリ	坏貼付時の粘土紐有
Fig53	396	土師器	高坏	8.5 + α 11.9	微細～石英小砂粒を含む	良好	淡黄褐色	ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、ヘラケズリ、ヨコナデ	被熱による黒色物付着
Fig53	397	土師器	高坏	7.2 + α 13.2	微細～小砂粒と雲母微細含む	良好	暗灰黄色	ハケメ後押圧ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、ヘラケズリ、ヘラ状ヨコナデ	２次被熱による黒変
Fig53	398	土師器	高坏	7.7 + α 11.1	微細～粗砂粒と雲母微細を含む	良好	くすんだ暗黄褐色	ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、右回りヘラケズリ、ヨコナデ	炭化物様の付着物有.坏接合時の貼付粘土有.
Fig53	399	土師器	高坏	9.2 + α 11.9	微細～石英小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	淡黄白褐色、一部淡明橙色	丁寧なヨコナデ	横方向ヘラケズリ、ヨコナデ	

Tab.34　出土遺物(土器)一覧表 33

Fig	No.	土器	器 種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig53	400	土師器	高坏	8.6 + α 11.8	良質.微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	くすんだ暗黄褐色	ヨコナデ	右回りヘラケズリ、ヨコナデ	被熱による黒色物付着.くびれ部外面に凹線状の強いナデ、坏接合部に突起状の線
Fig53	401	土師器	高坏	8.5+ α 11.9	微細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を僅かに含む	良好	明赤橙色	ナデ、ヨコナデ	絞り後押圧ナデ、ヘラケズリ、ヨコナデ	
Fig53	402	土師器	高坏	9.0+ α 11.7	良質.微細～石英小砂粒を比較的少量含む	良好	(外)淡明赤橙色 (内)淡黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、右回りヘラケズリ	
Fig53	403	土師器	高坏	7.3+ α 8.6	微細～砂粒と雲母を比較的多く含む	良好	黒色	粗いハケ目 ヨコナデ	ヘラ状工具による右回りのヘラナデ ヨコナデ	
Fig53	404	土師器	高坏	8.9 + α 17.2	微細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ナデ、粗いハケメ	押圧ナデ、ヘラケズリ、粗いハケメ	被熱による黒色物付着
Fig53	405	土師器	高坏	7.5 + α 11.0 ～ 11.8	石英細～中砂粒を多く含む.雲母微細を少量含む	良好	淡明橙色	ナデ、ヨコナデ	指頭押圧ナデ、ヘラケズリ、ヨコナデ	３孔一対の焼成前穿孔有
Fig53	406	土師器	高坏	8.4+ α 12.8	良質.微細～小砂粒と雲母微細を含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ナデ	押圧ナデ、ヘラケズリ	
Fig53	407	土師器	高坏	8.0+ α 11.4	細～石英中砂粒を比較的多く含む.雲母微細含む	良好	(外)黄灰褐色 (内)黒色、黒斑？	押圧ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、右回りヘラケズリ、ヨコナデ	黒色物付着
Fig53	408	土師器	高坏	7.2 + α 12.1	微細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細含む	良好	淡黄～淡橙色	ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、ヘラケズリ	
Fig53	409	土師器	高坏	7.6+ α 11.4	微細～細砂粒を比較的多く含む.雲母微細含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ナデ ヨコナデ	指全体による長い押圧ナデ後ケズリ	
Fig53	410	土師器	高坏	7.9+ α 11.5	良質.微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む.赤褐色粒含む	良好	(外)淡明橙色 (内)淡黄桃橙色	ナデ、丁寧なヨコナデ？	押圧ナデ、ヘラケズリ、ヨコナデ	
Fig53	411	土師器	高坏	8.2+ α 11.8	細～小砂粒を比較的多く含む.雲母微細と赤褐色を僅かに含む	良好	淡黄褐色	押圧ナデ後ハケメ、ヨコナデ	押圧ナデ、ケズリ	
Fig53	412	土師器	高坏	8.0 + α 14.7	細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒含む	良好	淡明橙色	ヨコナデ？	押圧ナデ？ヘラ？ヨコナデ？	
Fig53	413	土師器	高坏	8.6+ α 12.3	細～石英中砂粒を比較的赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡明橙色	摩滅	押圧ナデ	２次被熱による赤変.黒色物
Fig53	414	土師器	高坏	12.0	微細～小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	(外)淡黄褐色～明橙色 (内)淡黄橙色	押圧後ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ後右回りヘラケズリ	脚裾黒斑
Fig54	415	土師器	高坏	10.3+ α 12.4	細～石英粗砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒含む	良好	淡明黄橙色	ナデ？タテナデ？ヨコナデ？	ナデ？押圧後ヘラケズリ？	

Tab.35　出土遺物（土器）一覧表 34

Fig	No.	土器	器 種	サイズ（器高・口径・底径）	胎土	焼成	色調	調整（外）	調整（内）	その他
Fig54	416	土師器	高坏	10.4+ α	良質．微細砂粒と雲母微細を含む	良好	やや白っぽい淡黄褐色			
				14.2				ヘラ状工具によるナデ、ヨコナデ	絞り、ヘラケズリ、押圧後粗いハケメ	
Fig54	417	土師器	高坏	15.7+ α	精良．微細～細砂流を少量含む雲母微細と赤褐色を僅かに含む	良好	明赤橙色			
								ハケメ後ナデ		
								ナデ？	ヘラ？、ヨコナデ？	
Fig54	418	土師器	高坏	10.0 + α	細～石英中砂粒と雲母微細を多く含む	良好	淡黄褐色			
				10.8				ヨコナデ、ナデ	押圧ナデ、ヘラケズリ、ヨコナデ	
Fig54	419	土師器	高坏	7.6 + α	微細～小砂粒を比較的多く含む．雲母微細を含む	良好	淡黄灰褐色			
				13.0				粗いハケメ、ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、ヘラケズリ、ヨコナデ	
Fig54	420	土師器	高坏	8.8 + α	微細～小砂粒を比較的多く含む．雲母微細を僅かに含む	良好	(外)淡黄桃色 (内)くすんだ淡赤橙色			２次被熱による淡い黒変
				11.4				ヨコナデ、ハケメ後ナデ、縦方向の指頭押圧ナデ	絞り後ヘラケズリ、ヨコナデ	
Fig54	421	土師器	高坏	8.2 + α	細～石英小砂粒を多く含む．雲母微細を僅かに含む	良好	(外)赤褐色 (内)くすんだ淡黄褐色			
				14.3				ヨコナデ、ナデ	押圧ナデ、ヘラケズリ、ヨコナデ	
Fig54	422	土師器	高坏	9.5 + α	良質．微細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	くすんだ淡黄褐色			
				15.4				ナデ、ヨコナデ	絞り状痕、ヘラケズリ、ヨコナデ	
Fig54	423	土師器	高坏脚	9.2+ α	良質．細～小砂粒と雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ナデ		脚部外面に小さな淡黒斑
								ハケ目後ナデ	ヘラ状工具による右回りのナデ	
				12.1				ヨコナデ	ヨコナデ	
Fig54	424	土師器	高坏	7.7 + α	微細砂と雲母微細含む	良好	ややくすんだ黄橙褐色			
				11.0				ヨコナデ、ナデ	押圧ナデ、右回りヘラケズリ、ハケメ	
Fig54	425	土師器	高坏	7.1+ α	微細～小砂粒を含む．雲母微細含む	良好	淡黄灰色			
				11.8				押圧ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、ヘラケズリ、ヨコナデ後ハケメ	
Fig54	426	土師器	高坏	9.3+ α	精良．微細～石英小砂粒を多く含む．	良好	淡黄橙色			
								ナデ	押圧ナデ	
				12.0						
Fig54	427	土師器	高坏	8.1+ α	細～石英中砂粒を多く含む．雲母微細を僅かに含む	良好	ややくすんだ橙褐色			
				12.9				ナデ、ヨコナデ	指頭押圧ナデ、右回りヘラケズリ、ヨコナデ	
Fig54	428	土師器	高坏	7.6 + α	良質．微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	淡明橙色			
				13.0				ナデ、ヨコナデ	1～2段のヘラケズリ、ヨコナデ	
Fig54	429	土師器	高坏	7.4+ α	良質．微細～小砂粒と雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色			２次被熱による赤変と黒色物付着
				12.8				ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、右回りヘラケズリ、ヨコナデ	
Fig54	430	土師器	高坏	6.1+ α	良質．微細～石英小砂粒を含む．雲母砂粒と赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡黄橙色			
				10.6				ヨコナデ	右回りヘラケズリ、ヨコナデ	
Fig54	431	土師器	高坏	8.0+ α	良質．微細～石英中砂粒を含む．雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色、一部赤橙色粒含む			２次被熱による黒変あり
				11.6				ナデ、ヨコナデ、細かいハケメ	指頭押圧ナデ、ケズリ、ヨコナデ	

Tab.36　出土遺物（土器）一覧表 35

Fig	No.	土器	器 種	サイズ（器高・口径・底径）	胎土	焼成	色調	調整（外）	調整（内）	その他
Fig54	432	土師器	高坏	7.4+ α 13.0	微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	淡橙色	丁寧なナデ、ヨコナデ	ヘラケズリ	坏との接合部には突起状の栓が付く．
Fig54	433	土師器	高坏	7.4+ α 11.6	微細～石英中砂粒を多く含む．赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
Fig54	434	土師器	高坏	7.6+ α 12.2 ～ 12.6	微細～石英小砂粒を多く含む．雲母微細を少量含む	良好	濃赤橙色	不明瞭	不明瞭	
Fig54	435	土師器	高坏	7.6+ α 12.0	細～石英中砂粒を多く含む．雲母微細～粒を含む	良好	赤橙色（剥離が見られる）	ヨコナデ	指頭押圧ナデ、細かいヨコハケ目	
Fig54	436	土師器	高坏	7.3 + α 13.7	微細～小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	黒茶色（灰黒色ぎみにくすみ有）	ヨコナデ、丁寧なナデ	押圧痕、右回転ヘラケズリ、ハケメ後ナデ、ヨコナデ	
Fig54	437	土師器	高坏	7.3 + α 10.3	微細～石英小砂粒を多く含む 雲母微細を僅かに含む	良好	(外)ややくすんだ淡黄褐色 (内)くすんだ淡黄褐色	押圧ナデ、ヨコナデ	絞り、押圧後ヘラケズリ、ヨコナデ	
Fig54	438	土師器	高坏	5.7 + α 10.9	微細～石英小砂粒を比較的多く含む．雲母微細含む	良好	淡明黄褐色 やや白色おびる	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ	
Fig54	439	土師器	高坏	7.2 + α 12.7	微細～石英小砂粒を多く含む．雲母微細含む	良好	くすんだ黄褐色	押圧ナデ、タテハケメ後ヨコナデ	押圧ナデ、右回りヘラケズリ、板状工具によるヨコナデ	
Fig55	440	弥生	器台	11.6+ α 13.7	微細～石英小砂粒と雲母微細～粒を多く含む	良好	明橙色～黄灰褐色 (内)くすんだ黄褐色	ヨコナデ、ナデ後細かいハケ目	ヨコナデ	
Fig55	441	弥生	器台	14.4+ α 13.0	微細～石英中砂粒を多く含む．雲母粒比較的多く含む	良好	くすんだ淡明橙色	ヨコナデ ヨコナデ、粗いタテハケメ	ヨコナデ、押圧ナデ	
Fig55	442	弥生	器台	10.3+ α 15.8	微細～小砂粒と雲母粒を比較的多く含む	良好	淡黄褐色	ナデ後粗いハケ目	ナデ後ハケ目、指頭押圧ナデ	２次被熱による黒色物付着
Fig55	443	弥生	器台	15.3 14.0 14.4	細～石英小砂粒を多く含む雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ、細かいタテハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig55	444	弥生	器台	15.6 + α 15.4	粗い．細～石英中砂粒を多く含む．雲母微細粒を比較的多く含む	良好	(外)明橙色 (内)淡黄褐色	ヨコナデ タテ方向の細かいハケ目	ヨコナデ 押圧ナデ後細かいハケ目	被熱による変色有
Fig55	445	弥生	器台	17.9 12.2 16.6	やや粗い．細～石英粗砂粒を多く含む．雲母微細を含む	良好	くすんだ黄橙色	ヘラ先による斜行する刻目 ハケ目	押圧ナデ	
Fig55	446	弥生	器台	15.9+ α 13.2	比較的良質．微細～細砂粒と雲母微細を少量含む．雲母微細を含む	良好	(外)淡明赤橙色 (内)くすんだ淡黄橙色	ヨコナデ タテハケ目	指頭押圧ナデ	外面２次被熱によるスス様黒色物粘土紐状に粘土の重ね塗り
Fig55	447	弥生	器台	10.7+ α 9.9	微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)淡黄橙色	押圧後ヨコナデ ヘラ状工具による浅い凹線 押圧ナデ後細かいハケ目	押圧後ヨコナデ 押圧後ハケ目	

Tab.37　出土遺物(土器)一覧表 36

Fig	No.	土器	器種	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig55	448	弥生	器台	12.5+ α 10	微細～小砂粒と雲母微細.粒を含む	良好	(外)くすんだ淡黄褐色 (内)淡黄橙色	押圧後ヨコナデ やや細かいハケ目	押圧後ヨコナデ 押圧後粗いタテハケ目	
Fig55	449	弥生	器台	20.9 10.4 16.1	良質.微細～小砂粒を比較的多く含む.石英小砂粒と赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ タテハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ 回転状ハケ目	
Fig55	450	土師器	器台	14.8 + α 16.8	微細～小砂粒と雲母粒を比較的多く含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)やや黄褐色	やや細かいハケ目 ヨコナデ	やや細かいハケ目 ヨコナデ	炭化物状の淡い黒色物付着
Fig55	451	土師器	器台	13.9+ α	細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細を含む.赤褐色を含む	良好	赤橙色	粗いハケ目、ヨコナデ	押圧後ハケ目、ヨコナデ	
Fig55	452	土師器	器台	10.2 6.8 ～ 7.4 10.8	やや粗い.細～中砂粒を比較的多く含む.雲母微細.粒を含む	良好	(外)淡黄灰～淡黄橙色 (内)淡黄灰色	ナデ ナデ ヨコナデ	指頭押圧ナデ ナデ後ハケ目	外面巾1cmのタテ帯状の淡い黒斑
Fig55	453	土師器	支脚	7.9 ～ 9.0 5.2 ～ 6.3 10.6	細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡黄褐色	貼付状押圧ナデ 指頭押圧ナデ	押圧ナデ 粗いハケ目	受部中央に穿孔.外面被熱による赤変.内面黒変
Fig55	454	土師器	器台	14.1+ α 16.6 ～ 17.0	細～石英小砂粒を比較的多く含む.雲母粒と赤褐色粒を少量含む	良好	淡黄褐色 (外)赤褐色部分有	ハケ目.1単位に12本位の櫛目	押圧ナデ 押圧ナデ後粗いハケ目	外面淡い黒斑.内面炭化物状の黒色物付着
Fig55	455	土師器	器台	13.1 9 ～ 9.6 12.5	微細～小砂粒と雲母微細を含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)淡灰～淡灰黒色		押圧ナデ 押圧後粗いハケ目	受部穿孔.外面2次被熱によるスス様黒色物
Fig55	456	土師器	支脚	11.3 ～ 13.3+ α 9.5 ～ 10.8 13.6	微細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細含む	良好	(外)淡赤橙色 (内)淡黄褐色	天井部に径3㎜の円孔有、押圧ナデ 押圧ナデ後ハケ目	指頭押圧後裾部ハケ目	被熱による赤変有
Fig55	457	土師器	器台	3.7+ α 12.8	良質.細～小砂粒を少量含む.雲母微細.粒を僅かに含む	良好	ややくすんだ淡黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	脚部粘土紐
Fig56	458	土師器	甕	11.9 13.4 ～ 13.7 8.2	精良.微細砂と雲母微細を含む	良好	淡黄灰褐色	ヨコナデ 斜格子目叩き	ヨコナデ 押圧ナデ 指頭によるヨコナデ	
Fig57	459	土師器	台付甕	8.7+ α	細～石英中砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	(外)淡黄白色 (内)淡黄褐色	押圧後掻き上げ状粗いナデ 指頭押圧.ハケ目	押圧後粗いナナメハケ目 ナデ	
Fig57	460	土師器	台付甕	11.2 ～ 11.4	微細～石英中砂粒を比較的多く含む.雲母微細を僅かに含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ、粗いハケメ	指頭押圧ナデ、ヨコナデ	
Fig57	461	土師器	台付鉢	10.4+ α 16.4	良質.微細～小砂粒を含む.雲母微細を僅かに含む	良好	淡明黄白褐色	細かいハケ目	細かいハケ目 指頭押圧ナデ	
Fig57	462	土師器	台付鉢	8.5 12.2 8.5	やや粗い.細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細を少量含む	良好	(鉢内)淡黒色 (外)淡黄白色	押圧ナデ後ヨコナデ 押圧ナデ	押圧ナデ	
Fig57	463	土師器	高坏	8.4 13.7 9.3	細～石英中砂粒を多く含む.赤褐色粒を少量含む	良好	淡黄橙色	押圧ナデ	押圧ナデ	

Tab.38　出土遺物(土器)一覧表 37

Fig	No.	土器	器 種	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig57	464	土師器	高坏	8 10.4 9	細～石英中砂粒を多く含む.雲母微細を含む	良好	淡黄色～黄茶色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 細かいハケ目 押圧ナデ	
Fig57	465	土師器	台付鉢	6.1+ α 5.8	微細～石英粗砂粒を比較的多く含む.雲母微細～粒を含む	良好	(外)淡橙色 (内)くすんだ淡黄橙色	ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ	黒斑有
Fig57	466	土師器	台付鉢	6.7+ α 13.4	良質.微細～細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ナデ 指頭押圧ナデ後粗いハケ目	ナデ 指頭押圧ナデ後粗いハケ目	
Fig57	467	土師器	浅鉢	4.8 12.2	良質.微細～細砂粒含む.赤褐色粒を比較的多く含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ 粗いハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig57	468	土師器	浅鉢	4.3 13.5	良質.微細～細砂粒を比較的多く含む.雲母微細と赤褐色粒を僅かに含む	良好	(外)淡明橙色 (内)淡黄白灰色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ 指頭押圧ナデ	内外口縁部～胴部黒斑
Fig57	469	土師器	浅鉢	7.4 10.5	良質.微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)黒色	ヨコナデ後タテハケ目 タタキ	ナデ ヘラ状工具によるナデ	内面、底部外面黒斑
Fig57	470	土師器	鉢	6.7 10.0～11.2	良質.微細～石英中砂粒と雲母を比較的多く含む	良好	暗赤橙色	押圧後ヨコナデ ナデ	押圧後ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面楕円形黒斑.外底面木の葉スジ状の線刻
Fig57	471	土師器	鉢	8.5 13.3 4.2	良質.微細砂と雲母微細を比較的多く含む	良好	(外)明赤橙色 (内)くすんだ灰黄褐色	ヨコナデ ナデ 2.4~2.7cmの楕円形のスタンプ状の凹有	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面炭化物付着.底部被熱による赤変
Fig57	472	土師器	鉢	8.0 14.7 6.0～6.4	微細～石英小砂粒を多く含む.雲母微細を僅かに含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ ヘラ状工具によるナデ	ヨコナデ ヘラケズリ 押圧ナデ	内面炭化物様の黒色物.胴部外面にスス状黒色物付着.2次比熱による赤変
Fig57	473	土師器	浅鉢	4.4 12.2	精良.微細～細砂粒と雲母粒を少量含む	良好	淡黄白色	ヨコナデ ケズリ状のヘラナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	底部外面黒斑
Fig57	474	土師器	浅鉢	4.5 13	精良.微細～細砂と雲母微細.赤褐色粒を少量含む	良好	淡明黄橙色	ヨコナデ 粗いタテハケ目 ナデ	ヨコナデ	口縁部内面スス様の黒色物
Fig57	475	土師器	鉢	5 11.4	精良.微細～細砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	淡明赤橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 押圧ナデ	
Fig57	476	土師器	浅鉢	6.6 13.6	良質.細～小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	淡明黄灰色	ヨコナデ ヨコハケ目	指頭押圧ナデ	外面黒斑
Fig57	477	土師器	浅鉢	7.0 12.4	細～石英小砂粒を多く含む.雲母と赤褐色粒を僅かに含む	良好	(外)淡橙～淡黄灰色 (内)淡橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面赤色物（丹塗の可能性有 or 化粧土？）
Fig58	478	土師器	ミニチュア土器	6.0 4.4 1.0	良質.雲母微細を少量含む	良好	茶褐色	指頭押圧ナデ ナデ	指頭押圧ナデ 指頭ナデアゲ	
Fig58	479	土師器	ミニチュア土器	4.5+ α 2.8	良質.小砂粒と雲母微細を含む	良好	茶褐色	ハケ目後ヨコナデ 指頭押圧ナデ	ハケ目、ナデ ナデ	

Tab.39　出土遺物(土器)一覧表 38

Fig	No.	土器	器 種	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig58	480	土師器	ミニチュア土器	3.4 3.8	良質.小～中砂粒と雲母微細を含む	良好	鈍い橙色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	481	土師器	ミニチュア土器	3.8 3.7	良質.小砂粒を少量含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	482	土師器	ミニチュア土器	4.0 4.4	良質.小砂粒を含む	良好	黄灰褐色	ツマミ上げ 指頭押圧ナデ	ツマミ上げ 指頭押圧ナデ	
Fig58	483	土師器	ミニチュア土器	3.9 3.8	良質.雲母微細を含む	良好	黄灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	484	土師器	ミニチュア土器	9.9+ α	やや粗い.細～石英小～粗砂粒を多く含む.雲母微細と赤褐色粒を雲母微細と赤褐色粒を僅かに含む	良好	明赤橙色	タテ方向の丁寧なナデ	ヨコナデ、押圧ヨコナデ 絞り、ナデ	
Fig58	485	土師器	ミニチュア土器	4.1 3.6	良質.小砂粒を僅かに含む	良好	鈍い黄褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	486	土師器	ミニチュア土器	4.7 4.5	良質.雲母微細を含む	良好	にぶい橙褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	487	土師器	ミニチュア土器	4.8 4.6	良質.小～中砂粒と雲母微細を含む	良好	橙色～黒色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	488	土師器	ミニチュア土器	4.3+ α	精良.雲母微細含む	良好	橙色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	489	土師器	ミニチュア土器	4.3+ α 4.0	良質.小砂粒を少量含む	良好	灰白色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	490	土師器	ミニチュア土器	4.6+ α 2.4	良質.小砂粒を少量含む	良好	灰色～暗灰色	ナデ ヘラ状工具によるナデ ナデ	ナデ 指頭押圧ナデ 指頭押圧ナデ	
Fig58	491	土師器	ミニチュア土器	4.8 4.4	良質.微細～小砂粒少量含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	ナデアゲ	
Fig58	492	土師器	ミニチュア土器	4.8+ α 4.0	良質.小砂粒を少量含む	良好	黄灰褐色	ツマミ上げ 指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	493	土師器	ミニチュア土器	4.6 4.6	良質.雲母微細を含む	良好	鈍い橙褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	494	土師器	ミニチュア土器	2.5 3.5	良質.小～中砂粒を含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	495	土師器	ミニチュア土器	4 5	良質.小～中砂粒を含む	良好	橙褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	

Tab.40　出土遺物(土器)一覧表 39

Fig	No.	土器	器 種	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig58	496	土師器	ミニチュア土器	5.7 5.7	良質.小砂粒を含む	良好	黄灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	497	土師器	ミニチュア土器	5.7 5.8	良質.小～中砂粒を含む.雲母微細含む	良好	淡橙褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	498	土師器	ミニチュア土器	5.6 6.6 3.6	良質.小砂粒と雲母微細を含む	良好	黄灰褐色～暗灰色	指頭押圧ナデ 指頭押圧ナデ ナデ	ハケメ.ナデ 指頭押圧ナデ	
Fig58	499	土師器	ミニチュア土器	4.0 4.8	良質.小砂粒を含む	良好	鈍い橙色	ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	500	土師器	ミニチュア土器	2.8 3.8	良質.小砂粒を僅かに含む.雲母微細を少量含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	501	土師器	ミニチュア土器	2.8 4.1	良質.雲母微細を少量含む	良好	にぶい橙色～黒褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	502	土師器	ミニチュア土器	3.6 4.6	良質.小砂粒を少量含む.	良好	灰色～淡黄橙色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	503	土師器	ミニチュア土器	3.8 7.8	良質.小～中砂粒と石英片を含む	良好	橙色	ヨコナデ ナデ 指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	504	土師器	ミニチュア土器	3.5 6.5	良質.小～中砂粒と角閃石を含む	良好	灰黄色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	505	土師器	ミニチュア土器	5.0 6.8	良質.中砂粒.角閃石を含む	良好	橙色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	506	土師器	ミニチュア土器	2.6+ α 2.8	良質.小砂粒を少量含む	良好	橙色	指頭押圧ナデ ナデ	指頭押圧ナデ ナデ	
Fig58	507	土師器	ミニチュア土器	2.8+ α 3.5	良質.小砂粒を僅かに含む	良好	黄灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	508	土師器	ミニチュア土器	4.4 3.6 4.1	良質.小～粗砂粒を少量含む	良好	黄灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	509	土師器	ミニチュア土器	3.6 2.7	良質.小砂粒を含む	良好	灰白色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	510	土師器	ミニチュア土器	5.0 6.0	良質.小砂粒を含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	511	土師器	ミニチュア土器	4.7 4.6 3.9	良質.雲母微細を含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	

Tab.41　出土遺物(土器)一覧表 40

Fig	No.	土器	器 種	サイズ(器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig58	512	土師器	ミニチュア土器	3.4+ α	良質.雲母微細を含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	ナデ	
				3.9						
Fig58	513	土師器	ミニチュア土器	4.7	良質.小砂粒を少量含む.雲母微細を含む	良好	淡黄橙色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				5.1						
				3.6					ナデ	
Fig58	514	土師器	ミニチュア土器	3.8	良質.小砂粒を含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	ナデ、工具痕	
				3.2						
				3.4						
Fig58	515	土師器	ミニチュア土器	2.5+ α	良質.小砂粒を少量含む	良好	黄灰褐色	ナデ	ナデ	
								指頭押圧ナデ		
Fig58	516	土師器	ミニチュア土器	3.0+ α	良質.雲母微細を少量含む	良好	黄灰色			
				4.8				ナデ	ナデ	
Fig58	517	土師器	ミニチュア土器	1.7	やや良質.小砂粒を含む	良好	黄褐色	ナデ	ナデ	
				2.6						
Fig58	518	土師器	ミニチュア土器	2.6	良質.雲母微細を含む	良好	黄灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				2.8						
				3.5						
Fig58	519	土師器	ミニチュア土器	3.1	良質.小砂粒を少量含む	良好	黄灰褐色	ナデ	ナデ	
				3.2						
				3.4						
Fig58	520	土師器	ミニチュア土器		良質.小砂粒を少量含む	良好	鈍い黄橙色	ナデ	ナデ	
				2.8						
				3.6						
Fig58	521	土師器	ミニチュア土器	3.1+ α	良質.小～粗砂粒を少量含む	良好	灰白色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				3.0						
Fig58	522	土師器	ミニチュア土器	4.0+ α	良質.小砂粒を僅かに含む	良好	橙～橙褐色			
								指頭押圧ナデ	ナデ	
								ナデ	ナデ	
Fig58	523	土師器	ミニチュア土器	4+ α	良質.小砂粒を含む	良好	灰白色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	524	土師器	ミニチュア土器	2+ α	良質.小砂粒を少量含む	良好	灰白色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	525	土師器	ミニチュア土器	3.2+ α	良質.雲母微細を少量含む	良好	灰褐色			
								指頭押圧ナデ		
								ナデ	ナデ	

526 から 536 は農具である。535 はカシの板目材、その他はカシの柾目材を用いる。526 から 529 は方形孔の二又鍬で、526 は小型で孔の下方に浅い溝状の凹みがある。片方の歯を欠損する。527 は中型で歯の先端を欠損する。孔の形から、柄との角度は鋭角である。528・529 は大型でいずれも半分しか残存しないが、孔の観察から柄との角度は鋭角である。529 はやや反っている。530 は方形孔の三又鍬で、左右の歯を欠損する。孔の形から、柄との角度は鋭角である。531 はナスビ形平鍬で柄を緊縛した痕跡が残る。かなり磨耗しており。全体の半分ほどを欠損する。532 は一木長柄多又鋤で、歯は 5 ～ 6 本あったと考えられる。全体に丁寧な加工である。533 は方形孔の鍬の頭で、柄との角度は鋭角である。534 は農具の柄のグリップエンド。535 は鍬の柄で、先端部を欠損する。加工は丁寧である。536 は鎌の柄で鉄鎌を差し込むための加工がある。

537・538 は横槌でヤブツバキの芯持材を用いる。537 は搗部に加工痕が残る為、搗部は未使用である。538 は欠損が激しく全体の半分ほどが残る。柄の端部にはグリップエンドがつく。

539 は竪杵の転用品で、広葉樹の芯持材を用いる。竪杵を作業台に転用後、横槌に再加工の途中で廃棄している。横槌に再加工のため切断しようとした部分より上側には、作業台として使用した際についたと思われる金属刃物の背による敲打痕が残り、面全体がへこむ。

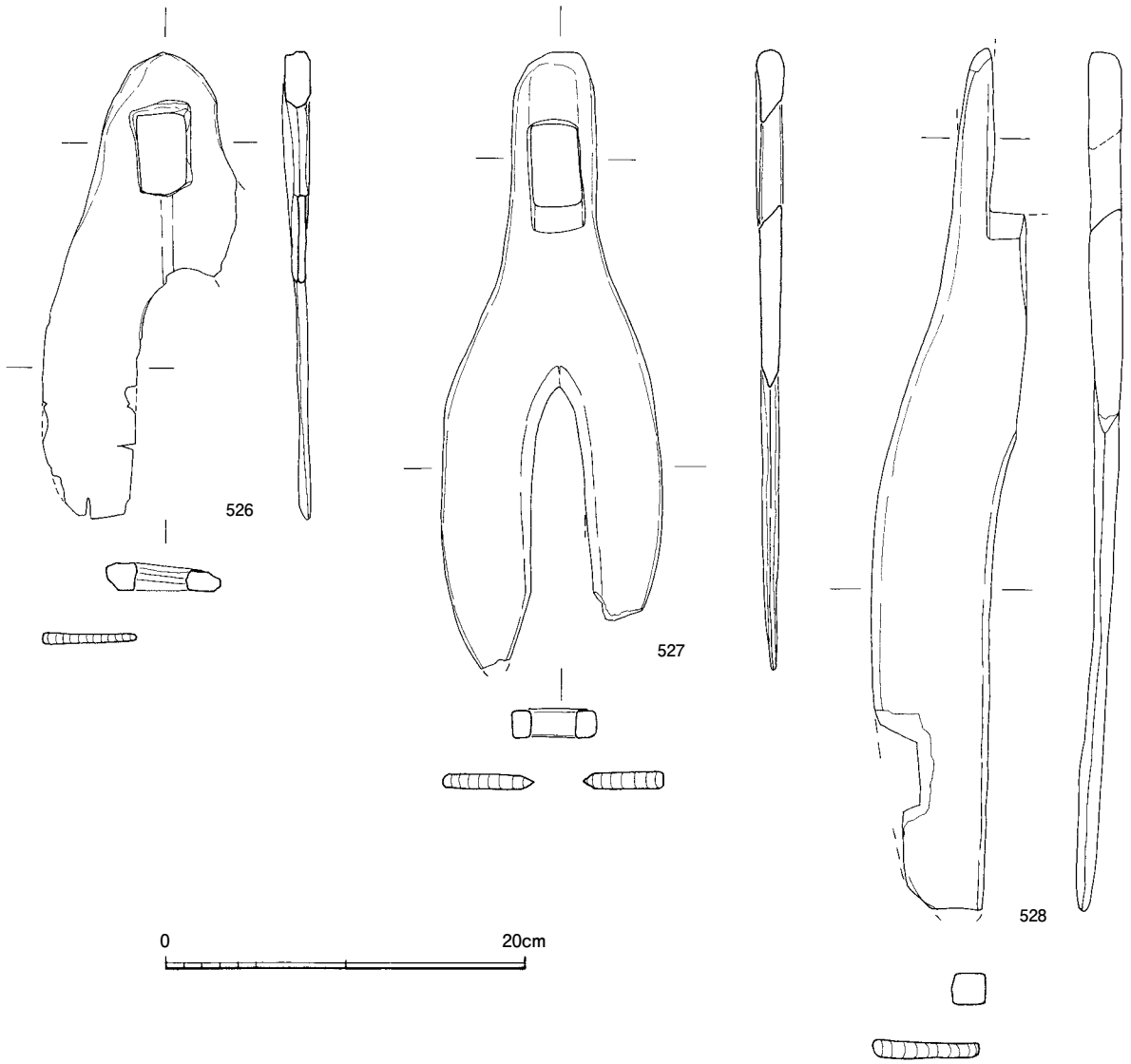


Fig.59　10 号河川出土遺物実測図 20 (1/4)

540 は作業台で、樹皮付きのアワブキ属の芯持材を用いる。建物の横架材を転用したものである。表面には金属刃物による敲打痕が残る。一方の端部に極短い把手が付く。

541・542 は槽である。541 は小口部分のみが残存する。542 は把手付きで、小口側の半分ほどが残る。543 はスギの柾目板を用い、奴凧状に左右対称になるように成形している。上方の端部には 2 カ所穿孔がある。544 は容器の蓋で、スギのナナメ材を用いて半月状に成形している。紐通しの孔が左右4カ所ずつ開けられている。縁はナナメに切り落としている。545は大足の枠で両端を欠損している。546 は加工板材で曲げ物の底板の可能性がある。547・548 は容器などの枠材である。

549 は組物の端材で、組仕口があるが、細い方の端部側に穿孔があり、もう一方の端部は切断されている。木目がややすり減っており、ハケメ調整具などとして再利用されたものか。550 は先端の瘤状に加工された部分に枝が折れた痕跡があり、自在カギとしたが、柵材や建築部材であった可能性もある。551・552 はタクリ（紡輪連作未製品）の台と軸である。台に軸がささった状態で出土した。台には差込む孔とスリット状の溝があり、スリットと軸の孔が組み合うらしい。553 は糸巻きの軸である。554 から 562 は編錘である。いずれも長さ 13.5 ～ 15cm、幅 6 ～ 8cm、厚さ 5 ～ 6cm ほどで、広葉樹の芯持材を用いている。

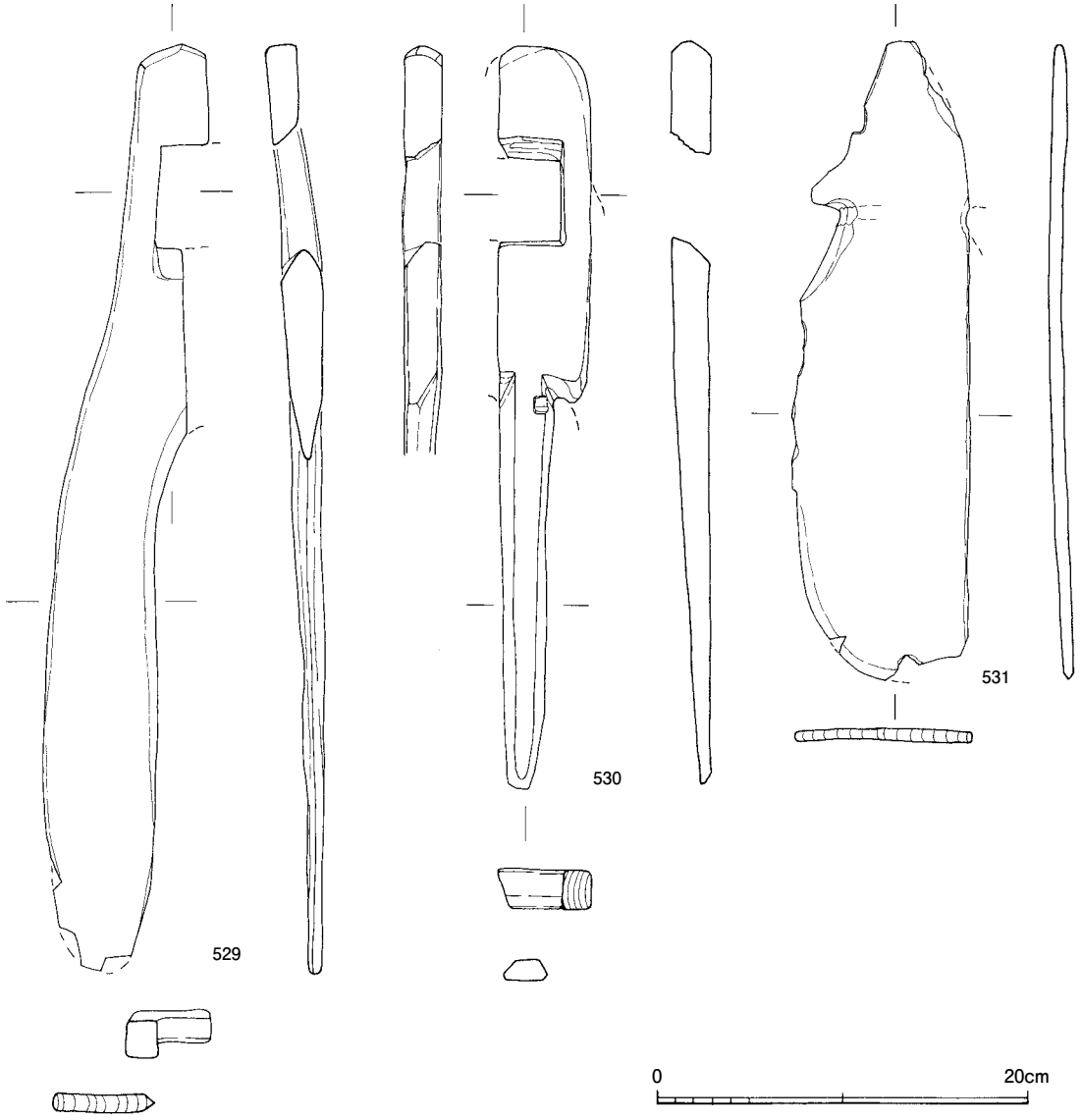


Fig.60　10 号河川出土遺物実測図 21（1/4）

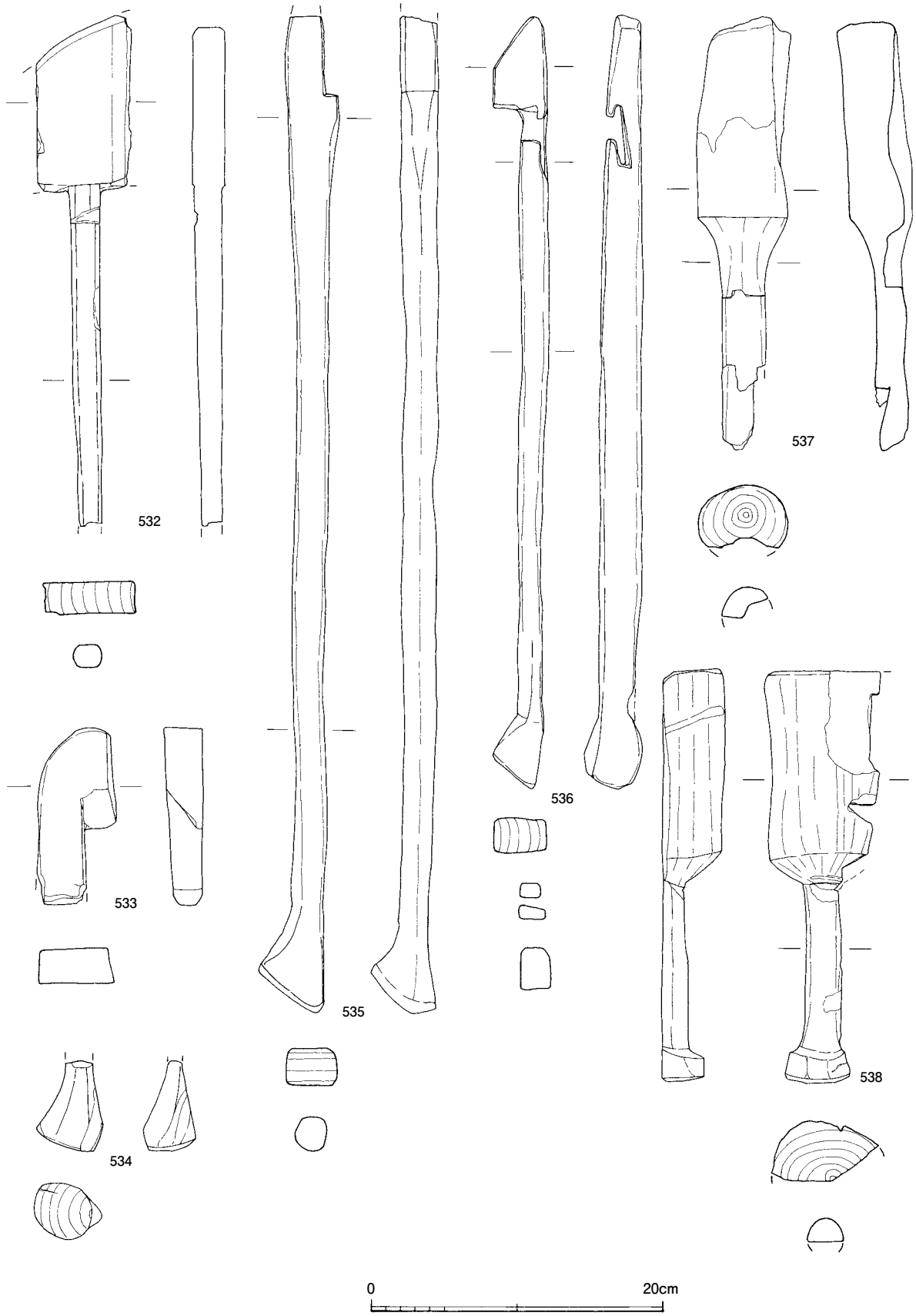


Fig.61　10 号河川出土遺物実測図 22 (1/4)

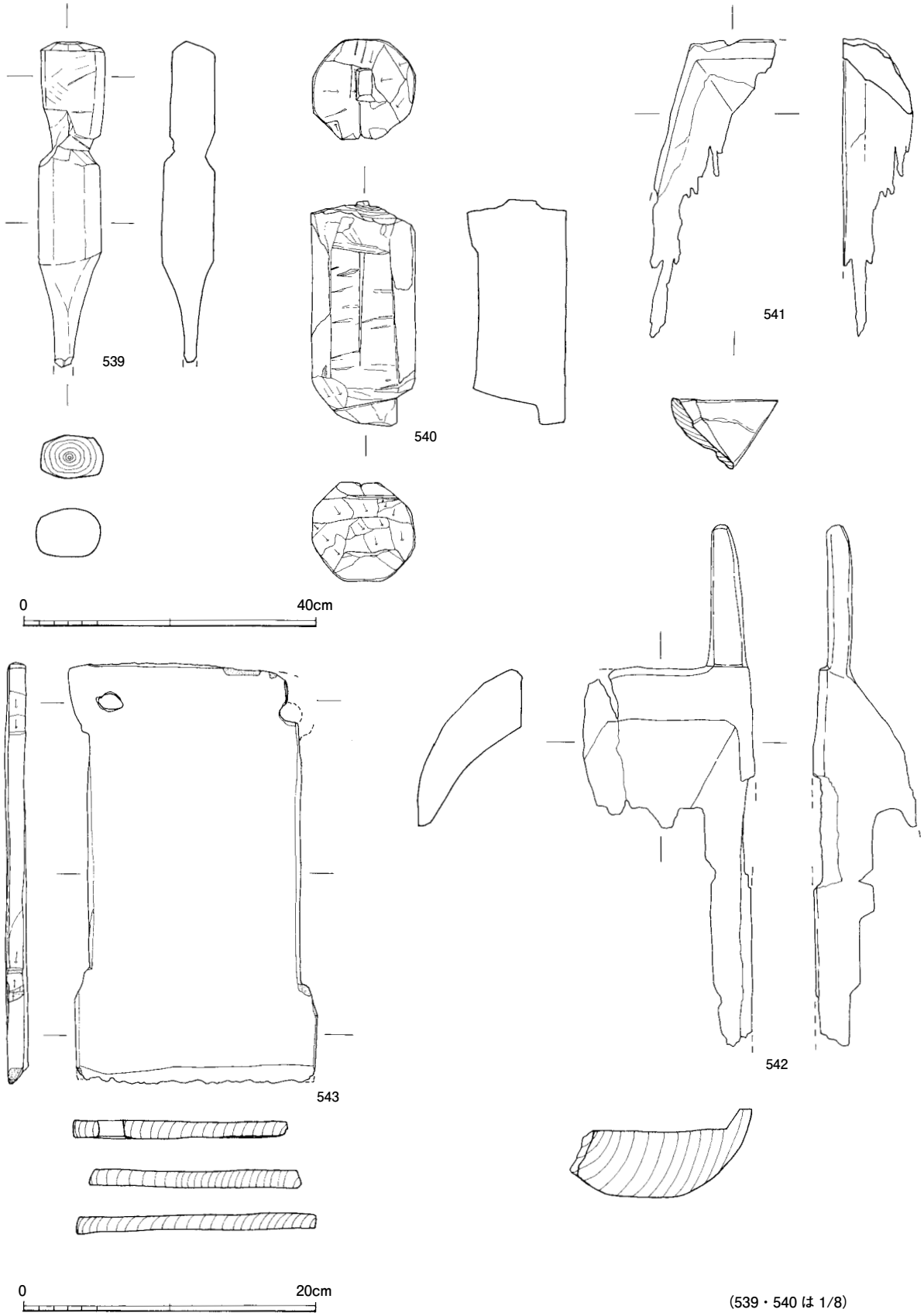


Fig.62　10 号河川出土遺物実測図 23 (1/4・1/8)

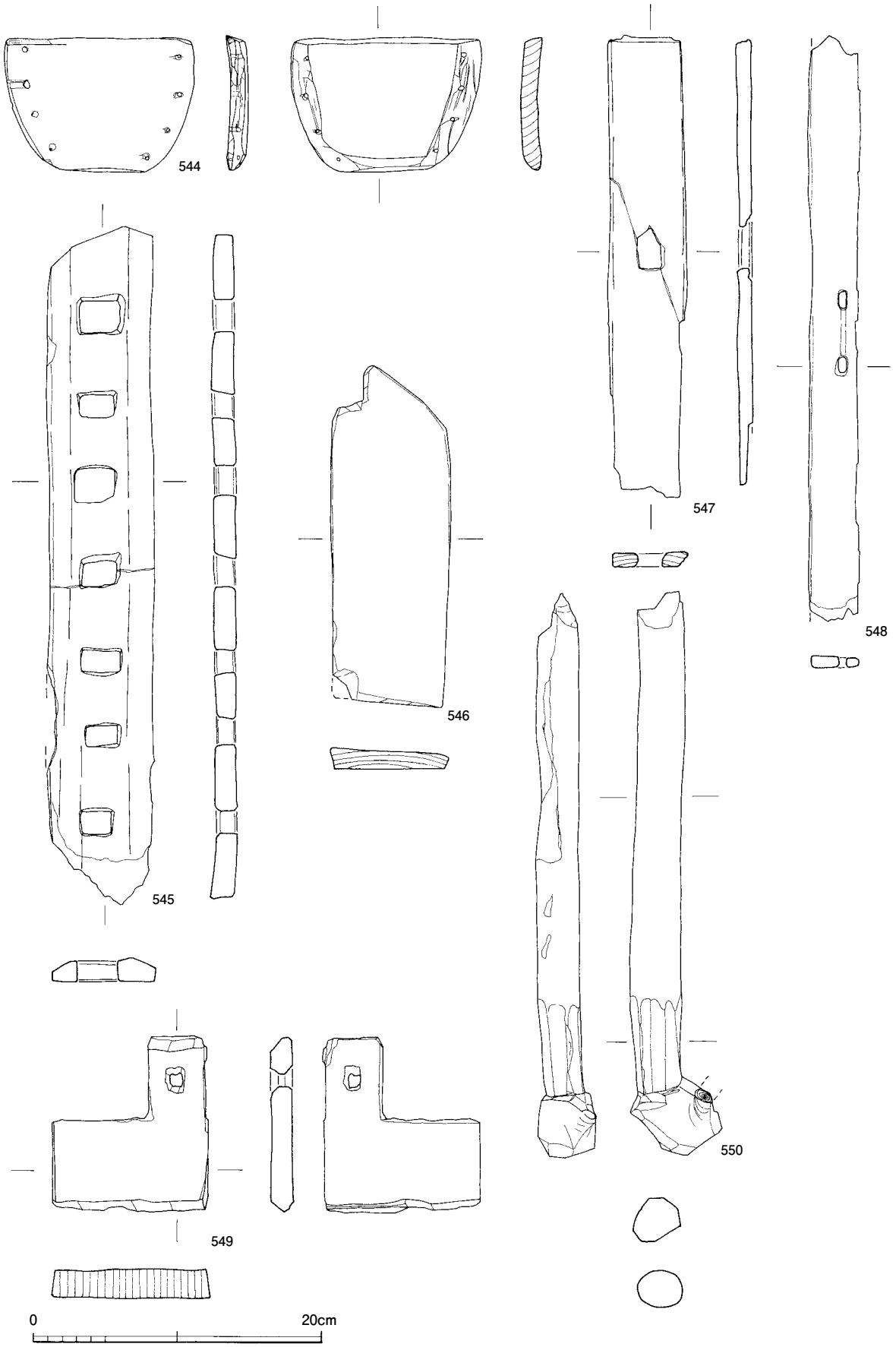


Fig.63　10 号河川出土遺物実測図 24 (1/4)

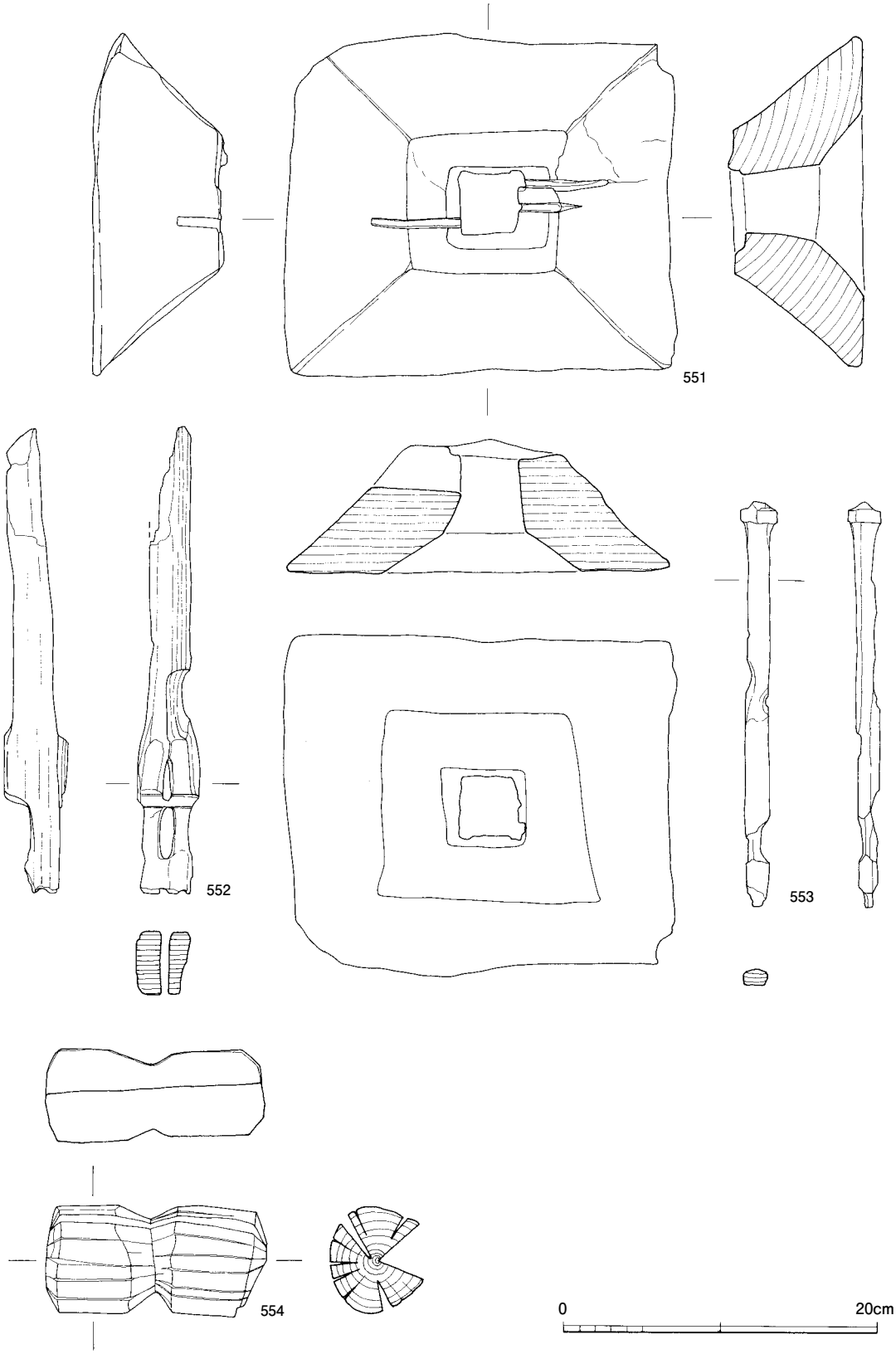


Fig.64　10 号河川出土遺物実測図 25 (1/4)

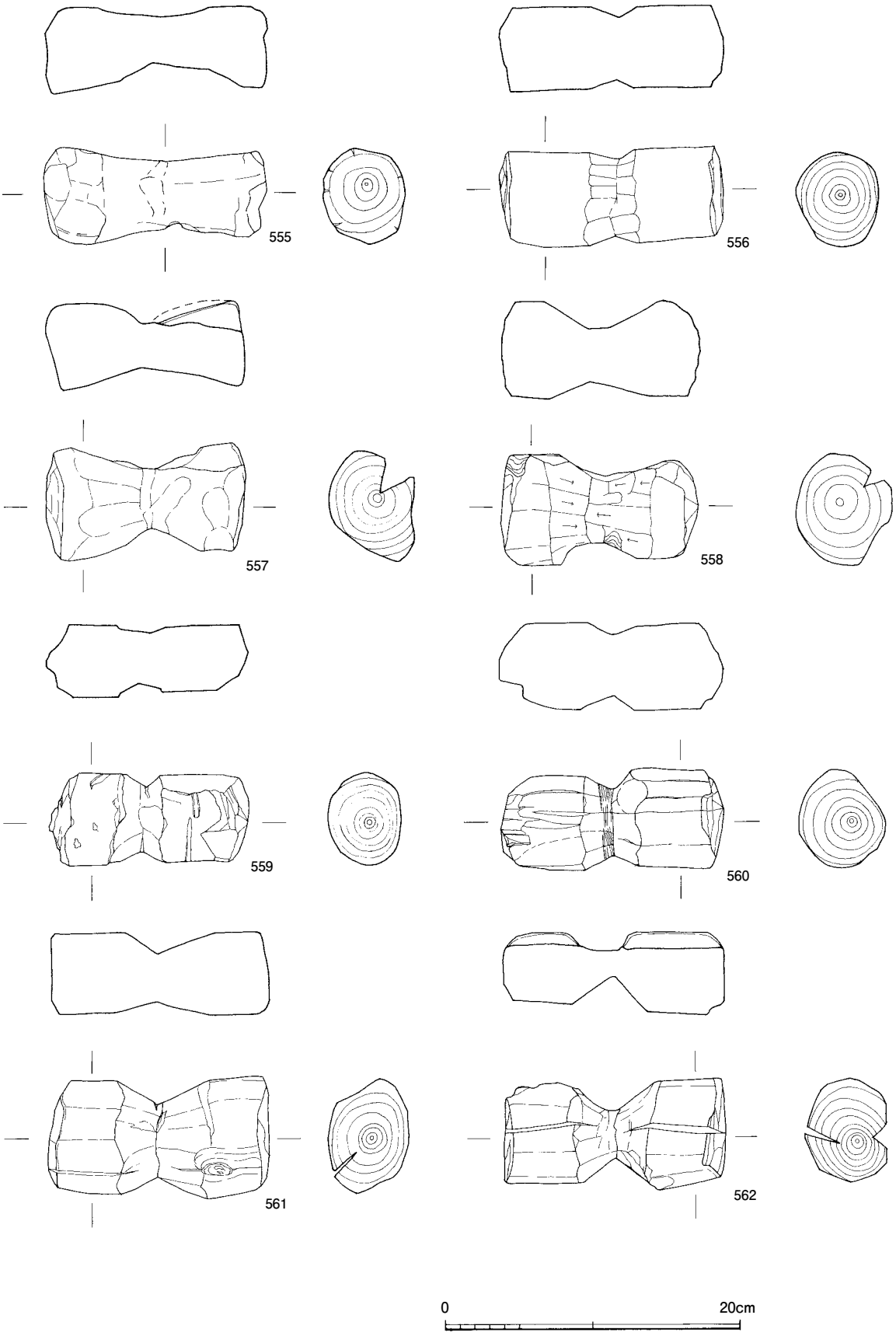


Fig.65　10 号河川出土遺物実測図 26 (1/4)

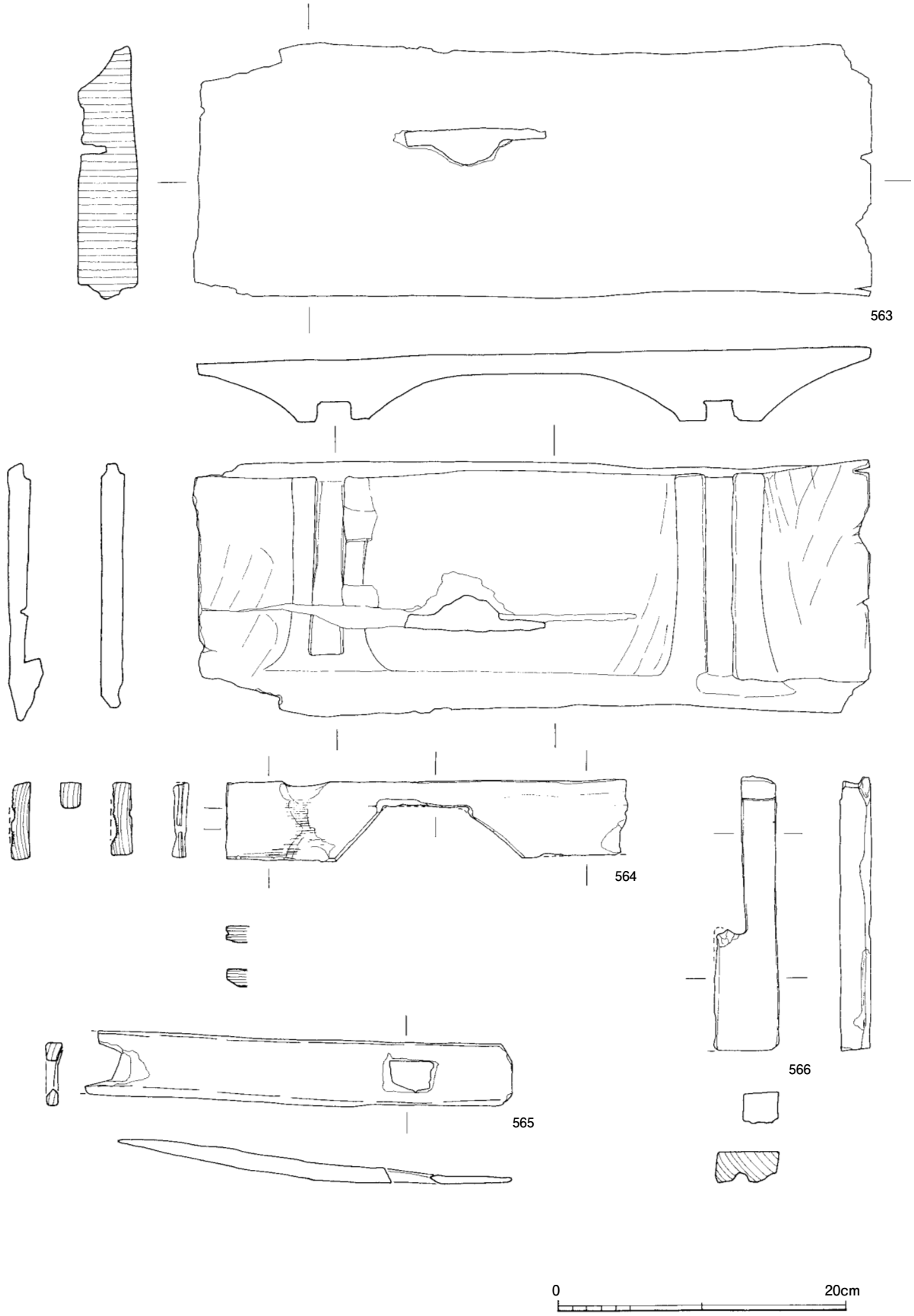


Fig.66　10 号河川出土遺物実測図 27 (1/4)

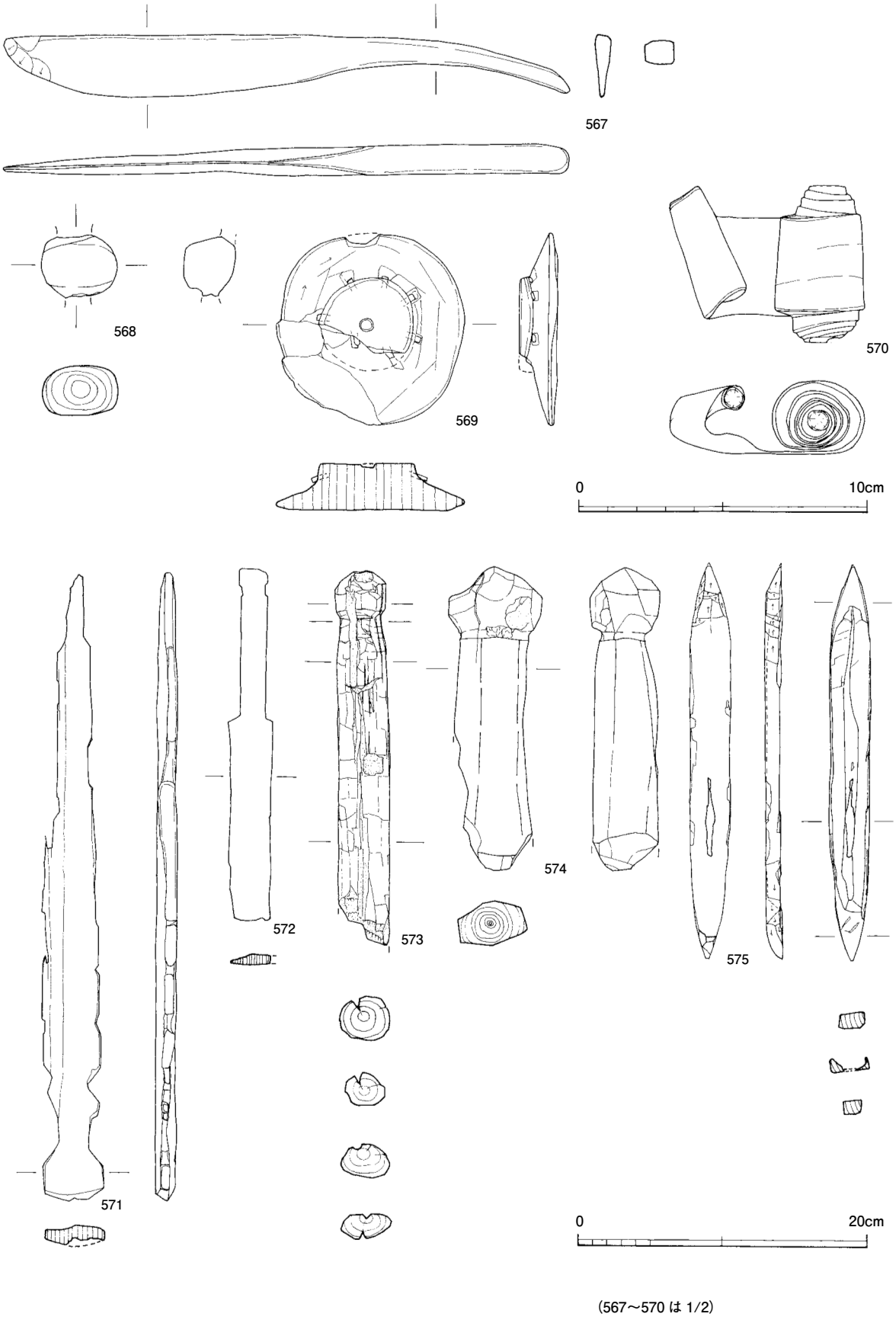


Fig.67　10 号河川出土遺物実測図 28 (1/2・1/4)

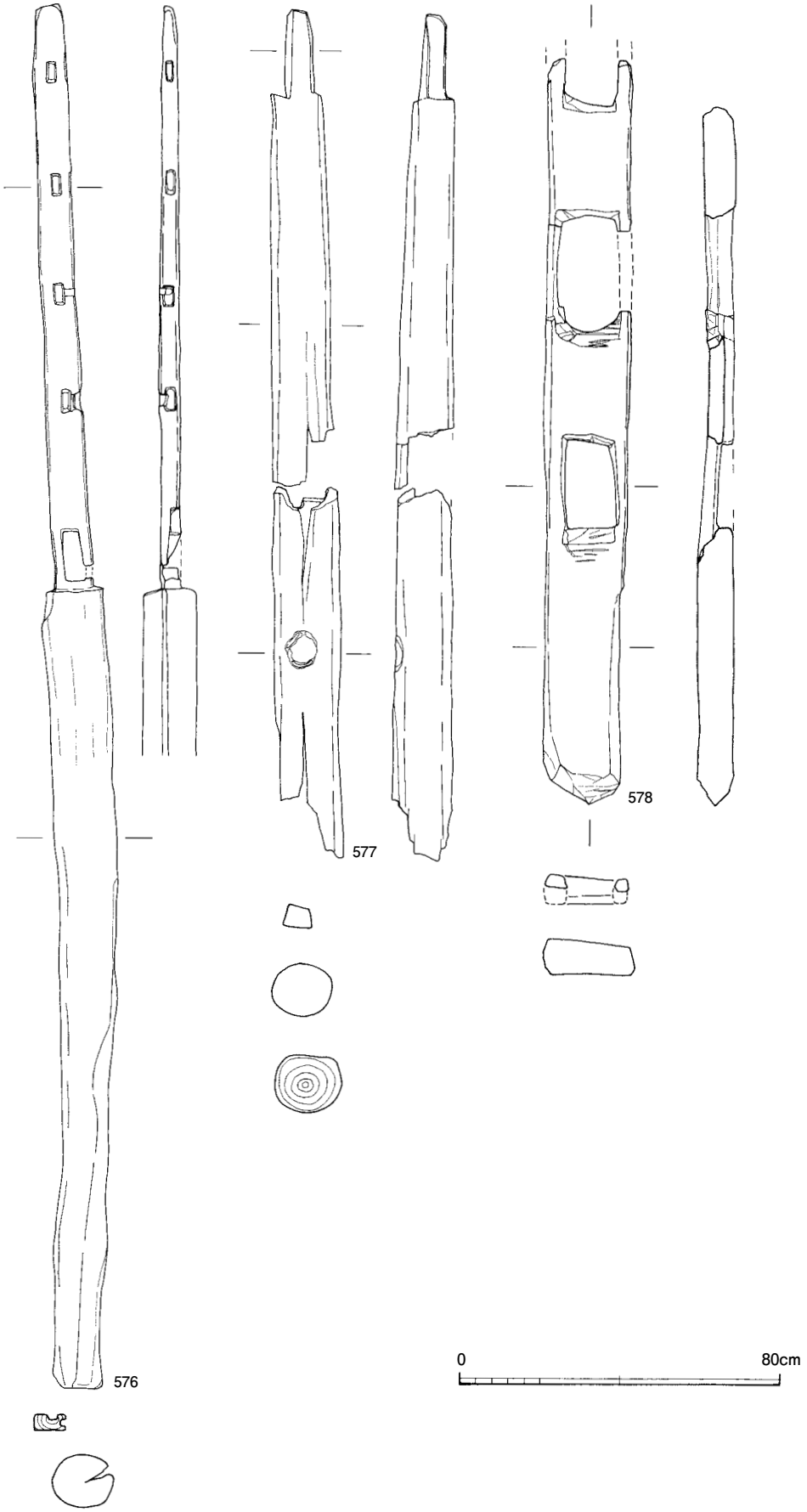


Fig.68　10 号河川出土遺物実測図 29 (1/16)

563はスギの柾目材を用いた机の天板で、裏面に蟻じゃくりの溝がある。表面は磨耗している。564は加工板材で、指物の案の脚の可能性があるが、左端に別材を組み合わせるための溝がある。一部火を受けている。565は加工板材で四角の孔があり、机の部品の可能性がある。566は椅子か机の脚と考えられ、細い方の端部に差し込み用の浅い段が作られている。

567はイスノキ製の刀子形儀器としたが、ペーパーナイフなどとしての実用にも耐える。先端部に加工痕が残る。568は芯持材を用いており、球形で上下端部が折れているが、上端部は少し再加工する。串団子状のものが折れたと考えられる。569は蓋の傘轆轤である。本体はカエデ材、傘骨は散孔材である。7本骨である。570はサクラの樹皮を巻いてストックしたもので、両端部に木製の軸が付く。571はスギの柾目材を用いた斎串か剣形の形代である。572はスギの柾目材で刀形の形代である。573・574は有頭棒である。573は人形とするには長く、柵材や建築部材であった可能性もある。575はスギの柾目材を用いた舟形の形代である。両端部と側面に加工痕が残る。

576から587は建築部材である。576はタブノキの芯持材を用いた長ホゾ付きの柱で、長ホゾ部分

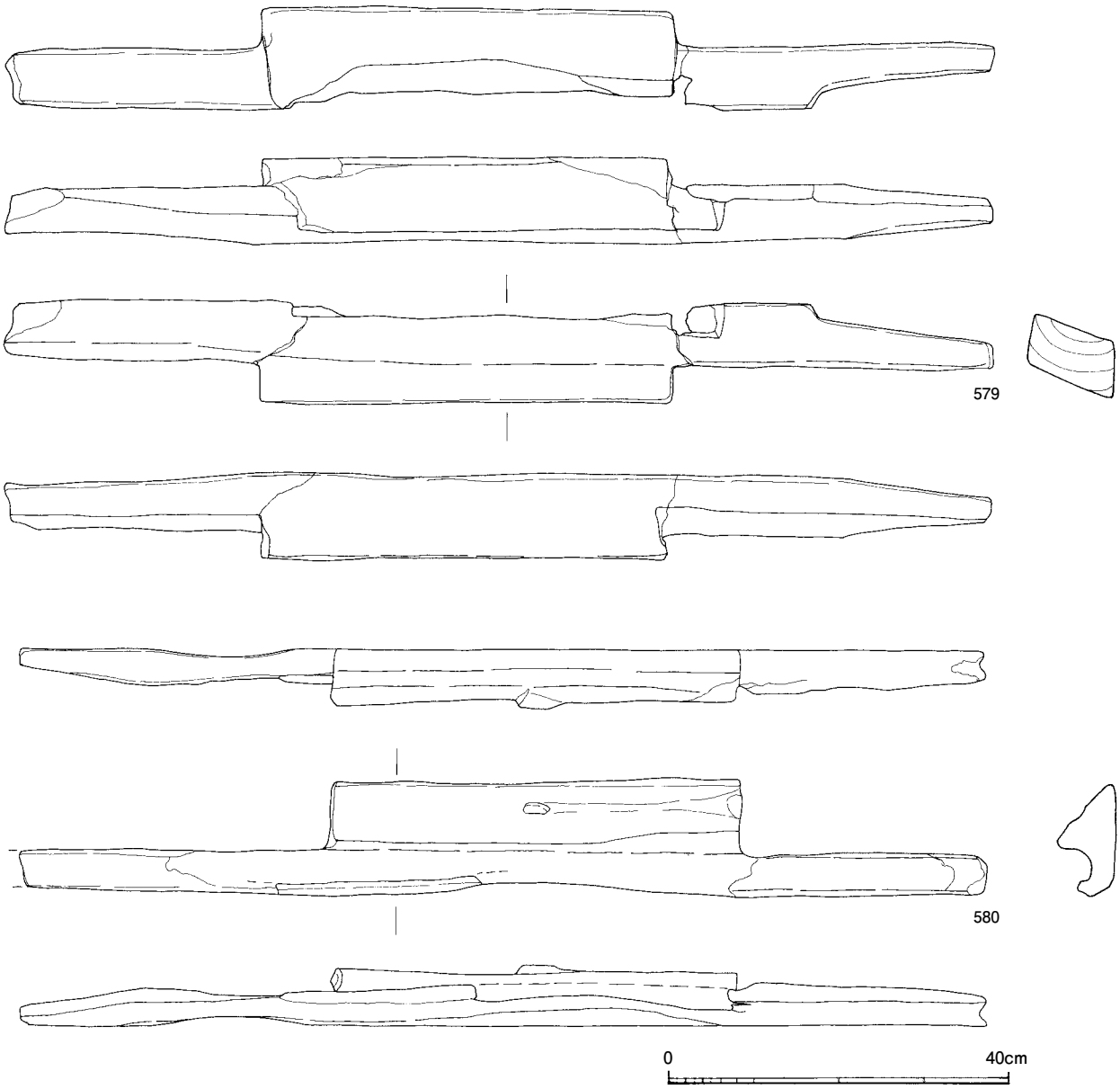


Fig.69　10号河川出土遺物実測図30（1/8）

の長さは約 146cm、柱部との境に約 12cm × 4.8cm の貫孔を設け、長ホゾ部分には直交するホゾ孔を平面側に 4 個、側面側に 5 個設ける。ホゾ孔のサイズは約 4.8 ～ 5.6cm × 2.5cm × 1.5cm である。形状から隅柱と思われる。577 もクスノキの芯持材を用いた長ホゾ付きの柱で、柱の基部側に 9.5cm × 8cm × 1 ～ 3mm の円形の二重丸状の凹みがある。二重丸の凹みは均等ではなく、上下側がよく凹んでいる。他の建築部材と組み合わせる為の合印か。長ホゾ部分は欠損しており残りが悪い。578 はツブラジイの板目材を用いた大引で、一方の端部を三角形に加工している。貫孔の加工痕が明瞭である。

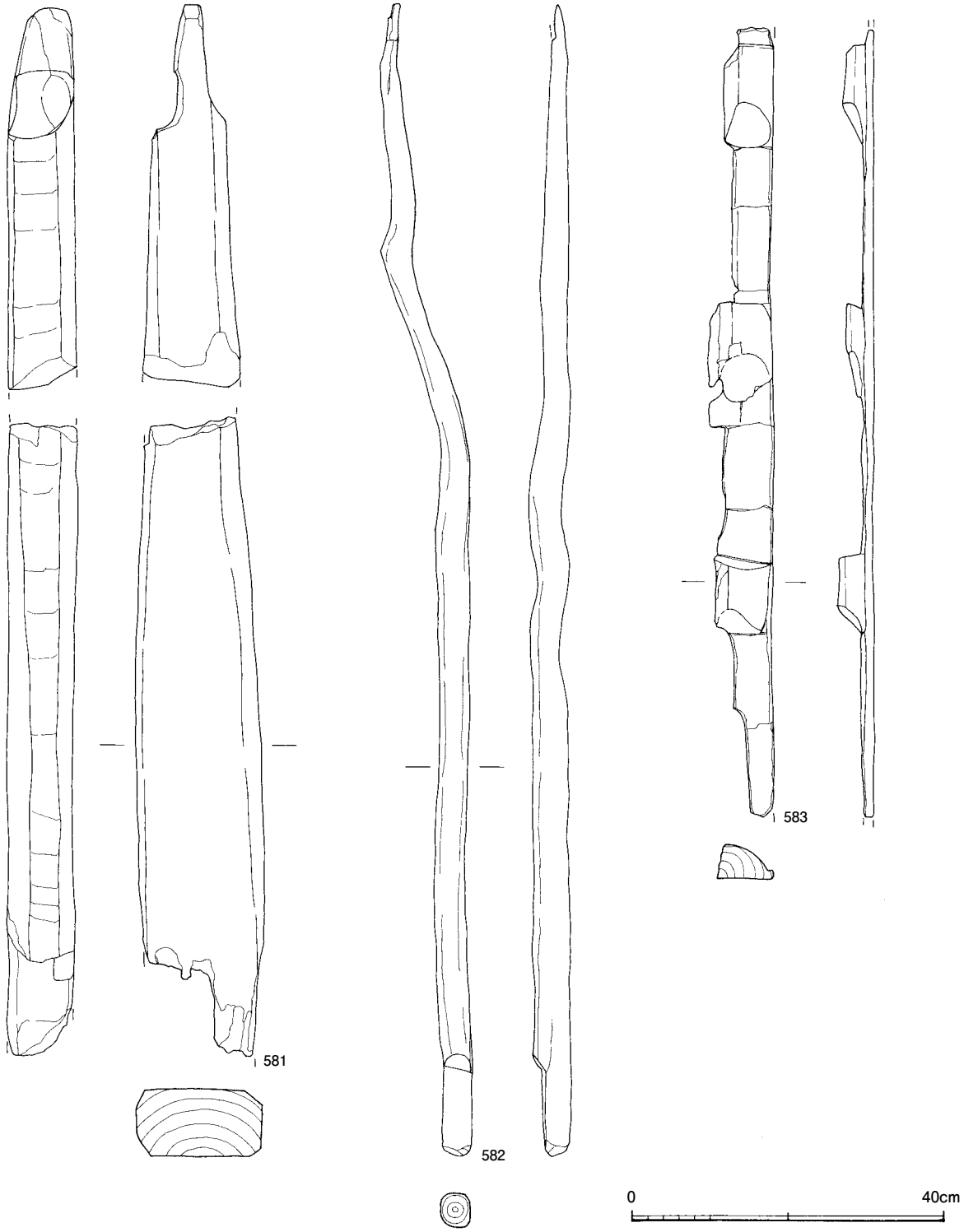


Fig.70　10 号河川出土遺物実測図 31 (1/8)

579 と 580 は出入り口か窓の周辺部材で、579 が楣側、580 が蹴放し側である。開口部の幅は、48cm 前後である。579 には天井側の軸受け部の加工が施される。580 は扉の受け部がつく。581 は五平の横架材で、カシの板目板を用いる。他の建築部材と組み合わせるために先端に加工が施されている。全体の加工は丁寧である。582 はタブノキの芯持材を用いた垂木で、端部に他の建築部材と組み合わせる仕口を設ける。もう一方の端部は欠損している。583 は梯子で広葉樹の半割材を用いる。脚をかける部分の奥行きは3cm前後である。584はスギの柾目板を用いた壁材で、縦長の孔が2ヶ所ある。585 は針葉樹の柾目板を用いた屋根材か壁材である端部付近に方形の穿孔が、大小二つあり、大きい方は一部欠損している。586 は広葉樹の柾目板を用いた屋根材で、端部には粗い切断痕が残る。側面付近に小さな穿孔がある。全体に磨耗している。587 はスギの柾目板を用いた箱物か屋根材である。端部は斜めに加工され、付近に方形の穿孔がある。（谷　直子）

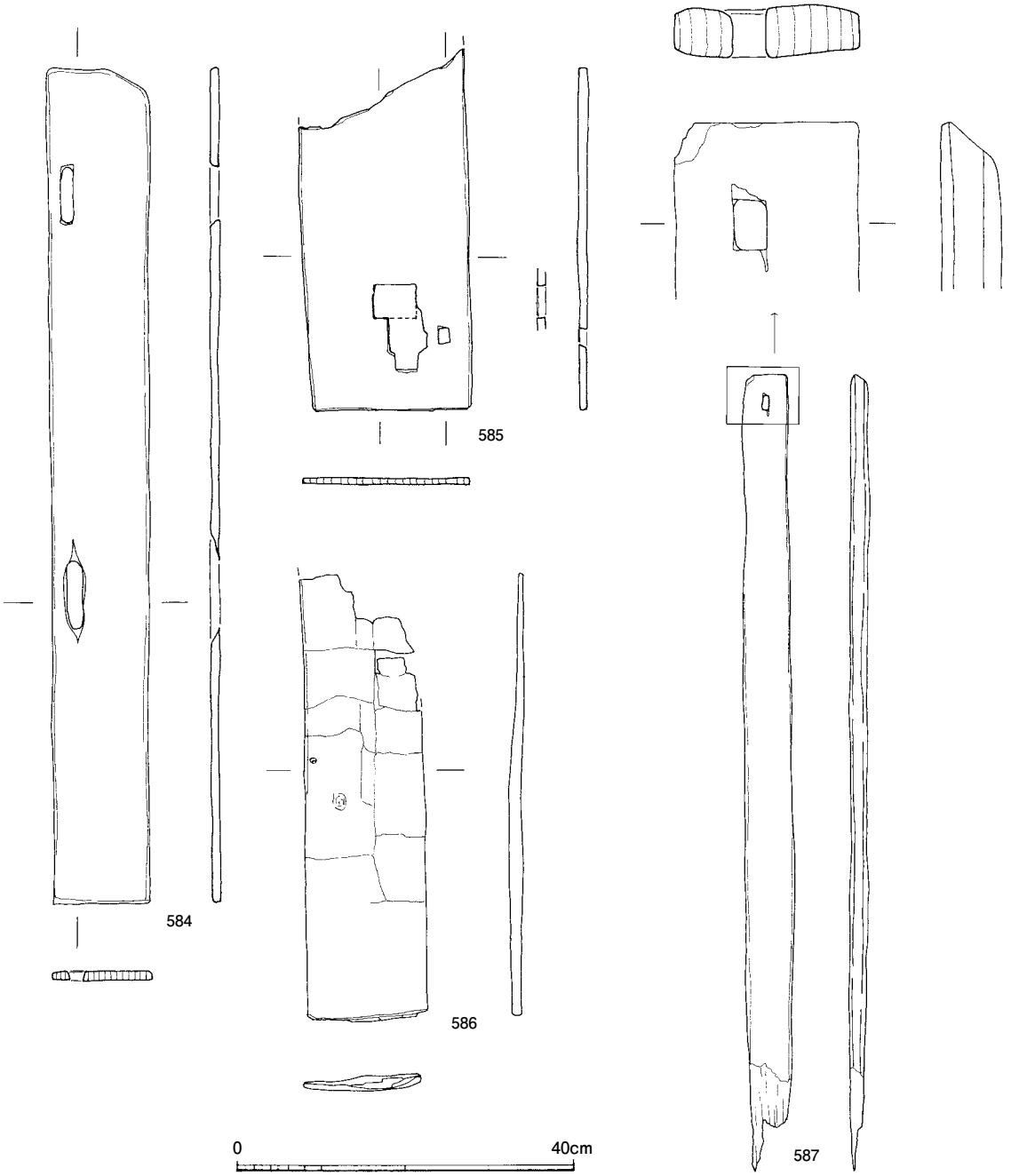


Fig.71　10 号河川出土遺物実測図 32 (1/8)

Tab.42　出土遺物(木製品)一覧表 41

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
Fig－59 526		方形孔の 二又鍬	カシ	柾目	25.8 8.7 1.6	方形孔の下側は ミゾ状に薄くなっている
Fig－59 527		方形孔の 二又鍬	カシ	柾目	34.2 12.3 1.5	柄と刃の角度は急 丁寧な加工
Fig－59 528		方形孔の 二又鍬	カシ	柾目	47.8 12.3 1.5	約 1/2 を欠損するが 側面に方形孔の 痕跡が残る
Fig－60 529		方形孔の 二又鍬	コナラ属 アカガシ 亜属	柾目	50 6+ α 2.2	柄側から刃部にかけて やや反っている 約 1/2 を欠損
Fig－60 530		方形孔の 三又鍬	カシ	柾目	39.4 5 2.1	角度のついた方形孔の 三又鍬である
Fig－60 531		ナスビ形平鍬	コナラ属 アカガシ 亜属	柾目	34.3 9.5 7.5	頂部近くに緊縛痕が残る
Fig－61 532		5～6 本歯の 多又鋤	コナラ属 アカガシ 亜属	柾目	35 6.5 2.3	全体に丁寧な加工
Fig－61 533		方形孔の 鍬の頭	カシ	柾目	12.2 5.3 2.6	柄の頭部分のみ 丁寧な加工
Fig－61 534		鎌か鍬の柄の グリップエン ド	カシ？	柾目	6.1 4.5 3.6	丁寧な加工
Fig－61 535		鍬の柄 泥よけ無	カシ	板目	68.2 3.5 2.5	先端を欠損する 丁寧な加工
Fig－61 536		鎌の柄	カシ	柾目	53 3.6 3	鎌の刃の差込口が つくってある 丁寧な加工
Fig－61 537		横槌	ヤブツバキ	芯持材	29.5 6.2 4	搗部に加工痕が残る為 先端は未使用
Fig－61 538		横槌の半載品	ヤブツバキ	芯持材	28 8 4.2	欠損が激しい 柄の端部にグリップがつく

Tab.43　出土遺物(木製品)一覧表 42

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
Fig－62 539		竪杵を作業台に転用後横槌に再加工の途中廃棄	広葉樹	芯持材	44.5 8.7 6.5	敲打された面には金属刃物の背による敲打痕が残り、面全体がへこむ
Fig－62 540		樹皮付の建物の横架材を作業台に転用	アワブキ属	芯持材	30.5 12 13.5	一方の端部に小さい把手がつく 表面には刃物による敲打痕有
Fig－62 541		槽	スギ	半割材	40.2 11.5 5.5	槽の小口側だけが残る
Fig－62 542		把手付槽	コナラ属 アカガシ 亜属	半割材	71.5 23.5 0.7 ～ 4.5	把手から小口側が残る 欠損が激しい
Fig－62 543		曲物	スギ	柾目	28.8 16.85+ α 1.3	奴凧状に左右対称になるよう 成形している . 中側の幅狭な部分に枠を巻き込んだと考えられる
Fig－63 544		蓋	スギ	ナナメ	9.35 13.25 1.2	伸縮自在の籠及び袋状容器の蓋 容器の組合せのため 縁は内側に向かって斜めに加工
Fig－63 545		盛付容器の枠材か大足	ツブラジイ	板目	47 7.2 1.5	孔の両側は長軸方向に 斜めに面取り加工している 両端は欠損
Fig－63 546		曲物の床板か大足の桟の可能性	広葉樹	板目	23.7 8.3 1.5	端部に仕口の加工痕のようなもの有 一方の端部を斜めに加工している
Fig－63 547		容器の側板？	広葉樹	板目	32 5.3 1	方形の孔を持つ板材である 一方の端部は欠損
Fig－63 548		容器などの枠材	広葉樹	柾目	3.7 40.6 0.8	欠損が激しい
Fig－63 549		組物の端材	広葉樹	柾目	12.2 10.8 2	組仕口有 . 穿孔は両面からで下端は切断痕が有、ハケ目調整具などとして再利用の可能性有
Fig－63 550		自在カギ	サカキ	芯持材	39.3 5.5 4	自然木の枝分かれした部分を 加工してくびれをつくり出している
Fig－64 551		タクリの台	スギ	柾目	24.5 21.7 8	台形に差し孔とスリットが 彫り込まれている 27 と組み合わせて使用

Tab.44　出土遺物(木製品)一覧表 43

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
Fig－64 552		タクリの軸	スギ	板目	29.6 3.8 4	26 にタテ方向に 差込んで使用する
Fig－64 553		糸巻き、 かせの軸？ 儀器としての 武器形？	スギ	板目	25.7 2.3 1.3	先端を面取りして加工 一方の端部は欠損
Fig－64 554		編錘	シキミ	芯持材	14 7 6	ヒビ割れがひどく加工痕は明瞭で ないがくびれ部や上下端部は 丁寧に加工されたらしい
Fig－65 555		編錘	タイミン タチバナ	芯持材	15.1 6.7 5.6	全体に磨滅しており 端部にのみ加工痕が残る
Fig－65 556		編錘	ヤブツバキ	芯持材	15.1 6.3 5.5	樹皮のない自然木をくびれ部と 端部のみ加工している
Fig－65 557		編錘	ヤブツバキ	芯持材	13.5 7.8 5.8	土圧で変形している くびれ部と上下端部は 加工痕がよく残る
Fig－65 558		編錘	広葉樹	芯持材	13.2 7.6 6.5	くびれ部と上下端部は加工痕が よく残る
Fig－65 559		編錘	サカキ	芯持材	13.5 6.3 4.9	樹皮付きの芯持材のくびれ部と 上下端部を粗く加工している
Fig－65 560		編錘	サカキ	芯持材	14.8 6.7 5.8	端部とくびれ部の一部が焼けて黒 変している．くびれ部と上下端部 は加工痕がよく残り側面も面取り
Fig－65 561		編錘	ネジキ	芯持材	15 8 5.5	節と割れが目立つ くびれの加工痕は明瞭 側面を多角形に面取り
Fig－65 562		編錘	サカキ	芯持材	15 7.3 5.6	割れが目立つ 側面を多角形に面取りし 加工痕は明瞭
Fig－66 563		机の天板	スギ	柾目	46.5 17.5 5	枝の裏面に蟻ミゾを入れて脚を互い 違いに差込む 裏面に加工痕が良く残る
Fig－66 564		加工板材	ヒノキ	板目	5.65+ α 27.9+ α 1.45	指物の案の脚の可能性が有

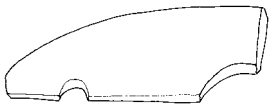
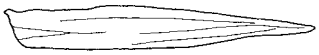
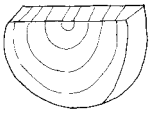
Tab.45　出土遺物(木製品)一覧表 44

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
Fig－66 565		板作りの 枠材か 机部品の 可能性	スギ？	板目	29.5 4.5 1.2	一方の端部が欠損しているが 孔がもうひとつあった可能性が有 変形している
Fig－66 566		椅子の脚 (机の脚？)	スギ	板目	19 4.5+ α 2	細い方の端部に差込用の段が つくってあり孔に差込んで 組み立てる机の脚と考えられる
Fig－67 567		刀子形の 儀器？	イスノキ		19.7 2.1 1	ペーパーナイフ形の刀子で 非常に丁寧なつくり 先端部に加工痕が残る
Fig－67 568		球形の儀器	広葉樹？	芯持材	2.1 1.8 1.8	球状加工されている 串団子状のものが折れたものか？
Fig－67 569		衣笠のろくろ	カエデ属 散孔材	柾目	6.6 6.4 1.6	7 本骨の衣笠のろくろ部 やや楕円形で骨はろくろの軸に むかって差込まれている
Fig－67 570		樹皮の ストック	サクラ	樹皮		曲物を作る為に樹皮を ストックしたもの．巻始めと巻終 りに木製の軸がついている
Fig－67 571		斎串か剣形の 形代	スギ	柾目	43.4 4 1.3	欠損が激しい 細かく刳り込みをいれている
Fig－67 572		刀形の形代	スギ	柾目	24.4 3.1 0.7	くびれ部に加工を施す
Fig－67 573		有頭棒	ツブラジイ	芯持材	25.25 3.6 3.15	人形とするには長いので 杭状を為すと考えられる 下半部は欠損
Fig－67 574		有頭棒	アワブキ	芯持材	20.9 6.5 4.5	先端部と棒の部分の境には段が 施される
Fig－67 575		舟形の形代	スギ	柾目	27.5 1.1 3	両端部に丁寧な加工が有、船形を つくり出す
Fig－68 576		高床倉庫の 長ホゾ柱	タブノキ	芯持材	347 13 ～ 15 16	長ホゾの部分と柱の基部側の間に 貫孔有 ホゾの状態から隅柱と思われる
Fig－68 577		高床倉庫の 長ホゾ柱	クスノキ	芯持材	219 15 ～ 16.5 14	柱の基部側に円形の二重丸状の ヘコミ有

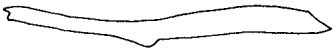
Tab.46　出土遺物(木製品)一覧表 45

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
Fig－68 578		高床倉庫の大引	ツブラジイ	板目	186 18 ～ 20.5 7.5	端部を三角形に加工している 孔をあける時の加工痕が明瞭
Fig－69 579		扉か窓など出入口の上下楣側	広葉樹	ミカン割材	116 10 10	55 と組み合う
Fig－69 580		扉か窓など出入口の上下蹴放し側	広葉樹	ミカン割材	114 13.5 7	54 と組み合う
Fig－70 581		五平の横架材	コナラ属アカガシ亜属	板目	47 12.5 7.5	他の材木と組み合わせる為に先端に加工が施されている
Fig－70 582		垂木転用の杭	タブノキ	芯持材	148 ～ 150 4.5 ～ 5 4	自然木の端部に他の部材と組み合わせる為の仕口
Fig－70 583		梯子	広葉樹	半割材	101 8.2 4.5	中央部にスリットがあったかもしれない
Fig－71 584		壁材	スギ	柾目	98 ～ 99 11.5 ～ 12 1	たて長の孔が 2 ヵ所有
Fig－71 585		壁材か屋根材	針葉樹	柾目	30 4 1	四角に穿孔した所が 2 ヵ所有
Fig－71 586		屋根材	広葉樹	柾目	53 14.5 1.5	切断痕有 . 側面付近に穿孔有
Fig－71 587		箱物か屋根材	スギ	柾目	95.5 5.5 ～ 6 1 ～ 2	穿孔有 端部は斜めに切断されている

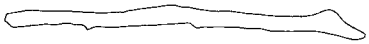
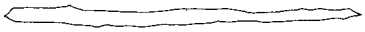
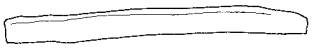
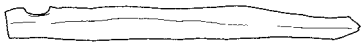
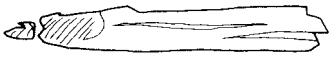
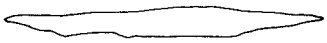
Tab.47　出土遺物(木製品)一覧表 46

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2001		板材	広葉樹？	板目	95 9 3.5	加工痕有
2003		曲物の底？		板目	40 13 2	ホゾ孔.加工痕有
2005		棒状材		板目？	85 3 1	
2006		杭		ミカン割材	66 7 4	一方の先端に杭用の加工有
2007		鍬の柄	カシ	板目	76.3 4 1.8	丁寧な加工のある柄
2009		棒状材		板目	27 4 2	
2014		破材 柱材片？			15 8 4	
2015		緊縛固定の二又鍬（反り柄）	コナラ属アカガシ亜属	柾目		
2015		グリップエンド	カシ？		7 5 2	
2016		横架材の断欠品	芯持材		40 15 8	
2018		杉板片				
2019		槽			5 5	
2020		槽の小口		半割材	7 12 13	加工有
2025 ①		破片 加工材			14 7 0.6	
2025 ②		破片 加工材			12 7 0.5	

Tab.48　出土遺物（木製品）一覧表 47

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2026		柱などの横の受け部の断欠品	サカキ	板付き芯持材	41.7 16 1.6	もとは又柱など
2028		板材 鍬			 8 	幅 8cm 位
2029		鍬の一部か？	カシ	柾目	35 7 0.5	加工有
2030		板材	スギ	柾目	12.5 4 1	切断痕有
2031		破片	スギ	柾目板	13 4 1.5	
2035		板材			26 9 2	
2037		板材片		板目板	40 11 1	焼けている
2040 ①		火災住居の横架材			107 7.5 5.5	焼跡有
2042		組段の有る板目板		板目板	53 15 3	
2043		鎌の柄			 	
2044		柱端材		芯持材	47 12 8	土圧で曲がる
2046		丸木船か槽の断欠品		角材片	13 8 3	
2047		柱端材		半割材	54 10 5	
2048		杭	広葉樹	ミカン割材	108 7 3.5	杭用の加工有
2049		垂木を転用した可能性のある杭		芯持材	119 4.5 ～ 8 4.5 ～ 8	杭の頭側に斜めの加工有

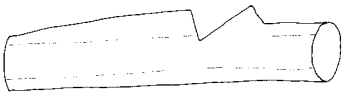
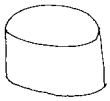
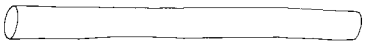
Tab.49　出土遺物（木製品）一覧表 48

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2054		垂木を転用した杭	広葉樹	芯持材	150 5 ～ 7 5 ～ 7	杭の頭側に垂木用の加工痕有
2055		垂木を転用した杭	広葉樹	芯持材	145 5 ～ 6 5 ～ 6	樹皮付き自然木 垂木用の仕口加工有
2058		柄				自然木を利用した柄か
2059		杭		芯持材	229 6 ～ 8.5 6 ～ 8.5	自然木 目立つ加工なし
2060		杭？			50 2 2	
2062		形代				
2067		ホゾ孔付の柱材	アワブキ属	芯持材	154 7.5 ～ 10	3cm × 2cm × 1.5cm 位のホゾ孔が少なくとも2ヵ所以上有
2068		棒状材		ミカン割材	180 + α 4 2	目立つ加工無
2068 ①		棒状材			109.5 4.5 4	
2069		杭		芯持材	87 8 4.5	一方の先端杭用に加工後焼け 意図的？
2070		板材？ 棒状材	広葉樹	半割材	160+ α 8 3.5	目立つ加工痕なし
2072 ①～⑤		柱材		芯持材	177 16 14	目立つ加工なし
2073		杭？		芯持材	200 7 5	又柱の再加工？
2079		板材片		板目	11 3 0.6	小片である
2080		火災住居の柱か 横架材を杭に転用	広葉樹	板目	90.5 7.5 3	火災住居の横架材転用

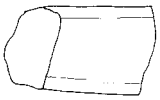
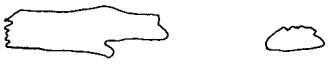
Tab.50　出土遺物(木製品)一覧表 49

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2082		杭	広葉樹	芯持材	320 5 ～ 9.5 5 ～ 9.5	焼けた自然木 目立つ加工なし
2084		杭		ミカン割材	55 5 5	杭加工有
2085		杭	広葉樹	芯持材	100 11 3	目立つ加工なし
2085		板材		半割材	60 8 4	目立つ加工なし
2086		角材片		半割材	6 6 3	
2088		垂木を転用した可能性のある杭		芯持材	192 4.5 ～ 6.5 4.5 ～ 6.5	樹皮付き自然木の先端に杭用の加工有 . 杭加工部の近くに杭加圧によるヘコミ有
2093		杭		芯持材	48 5 5	杭用の加工有 樹皮付き
2094		棒状材	針葉樹		30 3 1.5	加工有
2095		柄のグリップエンド			 3 3	
2096		板材	広葉樹	板目板	33 6 0.8	加工されて丸みを持つ
2099		板材	スギ	柾目	57 12 1.5	加工した孔有
2108		棒状材		ミカン割材	77 5 2.5	
2109		杭		芯持材	56 3 3	
2110		何かを転用して杭に加工		芯持材	79 5.5 ～ 8 5.5 ～ 8	杭用の加工有 杭の頭部分が焼けている
2111 －①		横架材を転用した杭			185 8 4	

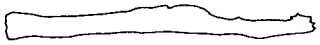
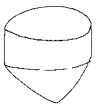
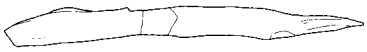
Tab.51　出土遺物(木製品)一覧表 50

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2111 －②		横架材を 転用した杭			67 8 3	
2112		使用された構造部材		追柾目	30 13 3	床板の可能性有
2114		桁か梁				火災住居の桁か梁 組仕口有
2116 ①		製材のみの構造部材		板目	50 3 7	
2116 ②		製材のみの構造部材		板目	53 3 7	
2117		柱状材		芯持材	10 12 12	再加工後切断
2118		建築用板材	シイ？	柾目	20	
2120		横槌片		芯持材	35 10 10	柄部分を少し欠損
2122 －①		端材	針葉樹？	ミカン割材	18 7 2	面取り
2122 －②		床材？			50 20 5	大引の可能性有
2123		板材	広葉樹	板目	105 9 1	ホゾ孔有 屋根材？
2123		板片		板目	5 12 1.2	
2124		杭？		芯持材	122 3 3	自然木
2125		板材	広葉樹		20 8 4	加工不明
2126		柱 垂木等の端部		芯持材	13 7 5	

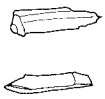
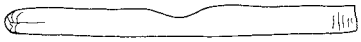
Tab.52　出土遺物(木製品)一覧表 51

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2127		杭材		芯持材	43 5 5	杭加工有
2129		板片		板目	10 5 2	加工不明
2132		構造部材の断欠材		柾目	41 12 5	面加工有
2137		板材	広葉樹	ミカン割材	53 11 + α 5	
2138		板材	広葉樹	板目	137 4.5 0.8	加工不明
2139		棒状材	スギ	柾目	55+ α 6 3	
2140		杭？		芯持材	20 8 7	
2142		板材	広葉樹	ミカン割材	50 4 1.5	
2145		板材片		板目板	45 3 0.5	
2146		板材	広葉樹	板目	54.5 14.5 3.5	手斧痕有
2148		構造部材の端材（横材）	ツブラジイ	芯持材	28 10 6	梁か桁状のもの
2151		柱材の転用？	広葉樹	半割材	62 13 7	磨滅が激しい
2152		杭	芯持材		100+ α 7 7	火災住居の垂木転用
2155		分割製材に出来なかった端材		枝材	38 28 15	
2156		横架材か垂木を杭に転用	広葉樹	芯持材	324 4.5 ～ 6.5 4.5 ～ 6.5	別材をのせた為加圧によるヘコミ有

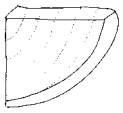
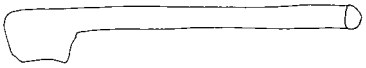
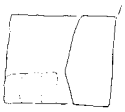
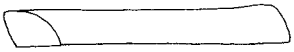
Tab.53　出土遺物（木製品）一覧表 52

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2158		杭？	広葉樹	芯持材	86 6 ～ 7 6 ～ 7	樹皮付きの自然木 磨滅が激しい
2160		横槌破片	広葉樹？	芯持材	17 8 5	加工痕有
2161		板材	スギ	柾目	23 3.5 0.5	加工不明
2162		構造部材の再加工		芯持材	15 12 12	再加工後切断
2167		板材 端材			48 13 12	
2169		カセの横木	スギ	柾目	21 3 1	上下方向である
2176		曲げ物、 側板 板材			 4 	
2180		曲物底板？		板目	 	加工有
2181		杭		芯持材	70+ α 8 5	磨滅していて加工痕不明
2181 ①		不明		芯持材	165 6 ～ 8 6 ～ 8	横架材転用
2182		板材		板目	 	測定不能
2183		杭		芯持材	168 7.5 5.5	一方の先端に杭用の加工有
2185		屋根板か 壁板	広葉樹	板目	173 12 1.5	平な板材 磨滅が激しい
2186		不明		板目	12 1.5 ～ 3.5 0.3	
2187				板目	91 10.5 6	

Tab.54　出土遺物(木製品)一覧表 53

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2188		火災住居の垂木 転用杭		芯持材	64 4 3	焼けている． 垂木の仕口の加工有
2190		板状破材		柾目板	28 5 1	
2192			スギ		15.5 3.5 1.5	
2193		棒状材	針葉樹	柾目	60 4 2	
2194		火災住居柱を転用した板材		半割材	64 11 6	一部が焼けている
2196		高床の桟		芯持材	98.5 5.3 2.3	中央部にへこみがある
2197		長方形の槽の側面	スギ	板目	60 13 2	
2201		鴨居か敷居の横架材	コナラ属 アカガシ 亜属	板目	82 12 ～ 17 7	一方の端部に仕口加工有
2202		杭		芯持材	126 7 ～ 9 	一方の先端に杭用加工有
2203		柱材の転用と思われる杭		芯持材	71 11 ～ 12.5 11 ～ 12.5	一方の先端に杭用加工有
Ⅱ区 北側		構造部材の一部			 	炭化材再利用
Ⅲ区 中層		楕円形の大きな槽の小口部分			 	測定不能
Ⅲ区 中層②		横架材の端部		芯持材	35 18 15	
Ⅲ区 中層③		棒状材		ミカン割材	110+ α 7 8	
Ⅲ区 中層④				芯持材	30 2.5 2.5	

Tab.55　出土遺物（木製品）一覧表 54

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
Ⅲ区 粘土層		槽		半割材	8 4	幅 4cm 長さ 8cm 位の板状 槽の小口部分
Ⅳ区 中層		垂木の一部		芯持材	6	幅 6cm の板状
Ⅳ区 中層		柄のグリップ エンド				
Ⅳ区 中層		一本作りの鋤 の柄				
Ⅳ区 中層		容器の側枝 （組加工）				組仕口の加工有
Ⅳ区 中層		工具柄 袋状鉄斧の柄		枝材	4	
SD－10 2－①		多又鍬の 端部			8 2 2	4 本歯の多又鍬の歯のみ
ラベル なし		板材 臼の欠損		板目	30 38 12	
x 18.19		杭		芯持材	50 11 7	丁寧な杭用の加工有 もとは柱材の一部？
u－16		杭		ミカン 割材	43 5 2	棒材を再加工

588 は、直径が 4.9mm、厚さが 2.8 ～ 2.9mm、孔径が 1.5 ～ 1.7mm の滑石製臼玉である。589 ～ 592 は、2 孔を穿つ滑石製のボタン状有孔円盤である。589 は直径が 1.9 ～ 2.1cm、厚さは 2mm。590 は直径が 2.4 ～ 2.5cm、厚さが 2.9mm。591 は、直径が 3.3cm、厚さは 2 ～ 2.8mm。孔径は 1 ～ 1.5mm である。592 は未製品で、研磨加工後に中途で穿孔を止めている。593 ～ 597 は、石包丁である。593 は、半月形をした立岩産の輝緑凝灰岩で、刃部は丁寧な研ぎを加えている。594 は安山岩。595 は、凝灰岩。596 は、粘板岩製石包丁の剥離片である。597 は、粘板岩製石包丁の未製品で、一部に研磨痕がある。598 は、今山産玄武岩の磨製石斧で、厚さは 4.1cm ある。599 は、頁岩製の扁平片刃石斧である。幅は 3.5cm、厚さは 0.96 ～ 1.22cm。600 は、安山岩製の丸石で、磨石か。601 ～ 603 は砥石である。601 は砂岩の仕上げ砥で、砥面は、上下と表裏面の 4 面にある。602 は、砂岩の仕上げ砥で、長さが 15.9cm、幅が 11.1cm、厚さは 2.9 ～ 4cm。研ぎ方向は、厚い上縁からで中央が凹面になっている。603 は砂岩の中砥で、表裏面は良く研ぎ込まれている。（小林義彦）

Fig.72　10 号河川出土遺物実測図 33 (1/1・1/2・1/3)

4　古代の調査

古代の遺構は、溝３条と井戸３基のほかに道路遺構を検出したが、分布的には西端と東南部および北部の３ヶ所に分かれて散漫に分布している。このうち道路遺構は、いわゆる官道と称されるもので調査区西端の削平された丘陵の真ん中にあり、丘陵を切り通して北西方へ一直線に延びている。この官道は、その機能廃絶後に狭地の水田として昭和10年代まで可耕されていた。そのため可耕地の確保と水路の掘削に因り東側の法面は削って拡げられており、緩やかに蛇行していて原状は留めていない。溝は、調査区東南部の遺構が濃密に重複して残る丘陵の東縁に２条と弥生時代の河川の護岸に沿って蛇行する１条がある。このうち丘陵の南東部にある１号溝はおおむね磁北に沿って延びる深い溝で、北端は137号河川の上面を北流する136号溝に接する感があるが、近世の水田化による開削で段差があり確たることは云い難い。この溝はなかほどに陸橋があり、西側の丘陵内と丘陵裾に沿って北流する136号溝の東側に拡がる沖積地上の水田域とを画するかのような感がある。また、丘陵端を北流する137号河川の西岸に沿って蛇行する溝は、中程で二又に分流している。この溝からは古墳時代の壷や甕、高坏に混じって平瓦や丸瓦、鬼瓦片のほかに須恵器坏、陶磁器など多種多様な遺物が出土している。一方、３基の井戸は、調査区中央部の北壁際に並んで２基、南西隅の丘陵縁に１基の２グループに分かれて分布している。このうち北部にある２基の井戸（SE － 133・134）は、簡便な素掘りの井戸である。これに対して南東部にある井戸（SE － 09）は木枠組の頑丈な井戸で、井戸底には刳り貫きの桶が置かれ、裏込めには平瓦や丸瓦、塼が埋め込まれていた。また、井戸内からは鬼瓦片や平瓦、櫛、曲物、土師器鉢などと皇朝十二銭のひとつである「神功開寶」が出土した。

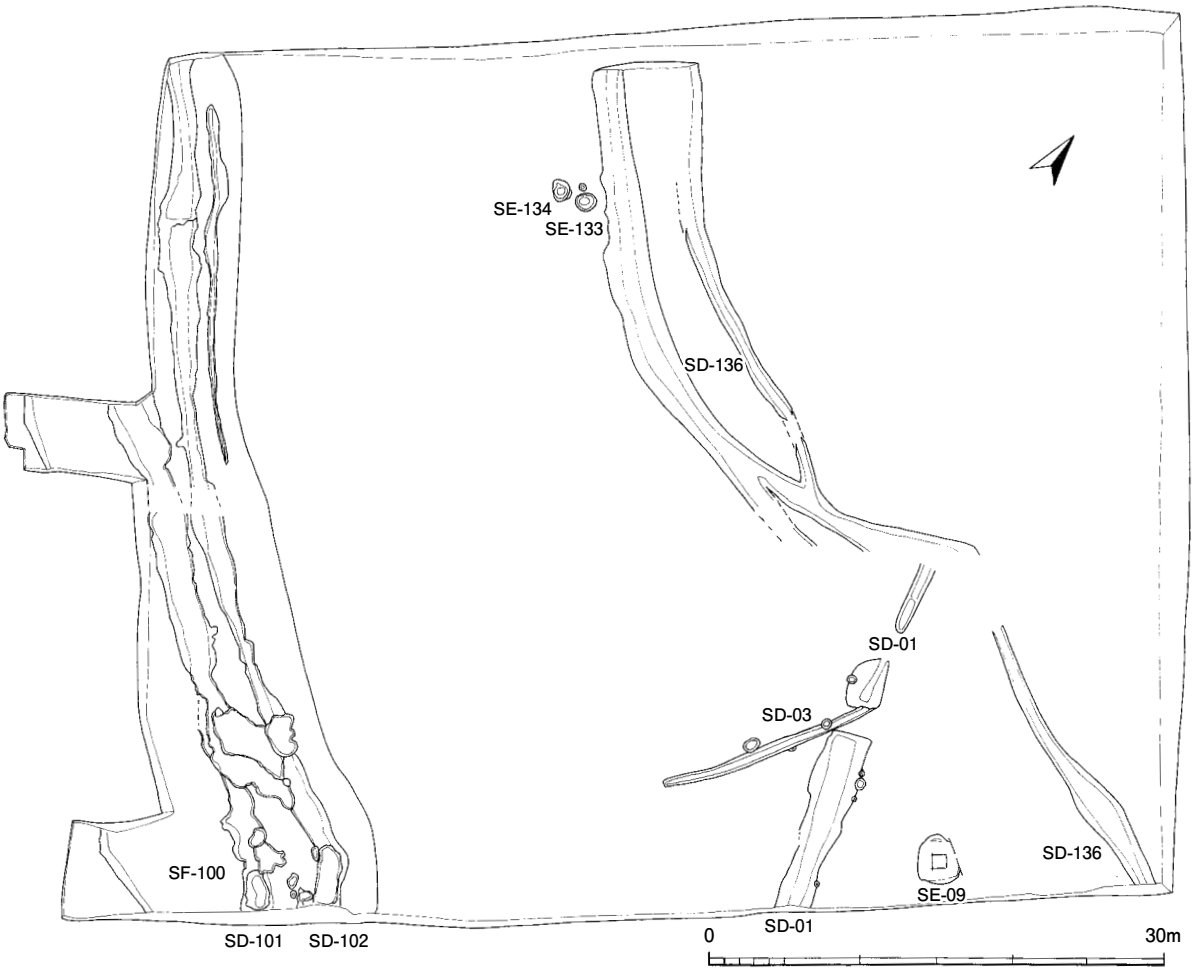


Fig.73　古代の遺構配置図(1/500)

1）井　戸（SE）

井戸は3基を検出した。立地的には調査区北部の136号溝に面した丘陵の裾部に並んだ2基（SE－133・134）と南東部の丘陵縁にある1基（SE－09）に分かれて最小単位で分布しているが、旧河道に近いと云う占地的条件には類似性がある。構造的には北部に位置する2基の井戸が簡便な素掘りの井戸であるのに対して南東部にある井戸は木組の井戸である。この井戸（SE－09）は、厚手の木枠を組み合わせた堅牢な木組の井戸で、井戸底の水溜りには刳り貫きの桶を井筒とし、その周りには瓦塼などが裏込めされていた。また、井側内からは瓦塼や鬼瓦、土師器鉢・坏、櫛、曲物などのほかに皇朝十二銭のひとつである「神功開寶」1枚が出土していることを勘案すると、高畑遺跡内に存在が推定されている寺域跡との関連性が想起される。

9**号井戸　SE－09**（Fig. 74　巻頭 PL. 4・5　PL. 56～58）

9号井戸は、調査区の南東隅にあり、2～3.5m西には86号土壙や8号木棺墓が位置している。平面形は、東西が275cm、南北が310cmの隅丸方形プランを呈する。壁面は検出面から北壁が125cm、南壁が190cmの深さまで垂直に掘り込んで緩やかなステップを作っている。南壁は、ステップから更に90cmほど緩やかに掘り込んで小さな井戸底に至る。この段違いなステップは掘削時の踏台的な機能を有していたと推考される。井戸側の構築は、はじめにこの小さな井戸底に井筒桶を設置することから始まる。井筒は、クスノキの丸太を刳り貫いた桶の転用品で桶底は粗く削って抜き落としている。桶は直径が51.5cm × 57.5cmの楕円形で、上縁には幅が10cm、高さが3cmの把手が付き、その下には4～5cmの方形孔を穿っている。桶高は48cmで、木目に沿ってヒビが入り、それを楔で補修している。楔は消失しているが金属品である。この井筒桶の裏込めには平瓦や丸瓦、塼、転石を詰め込んで桶の安定を図っている。井戸側の木枠は、この井筒桶の上縁から組上げられている。木枠の最下段には、長さが81.4cm、幅が24.5cm、厚さが7.5cmの板材を立て、その上の長さが74.7cm、幅が29.3cm、厚さが6.3cmの板材を積み重ねている。この2枚の板材は、3cm × 5.5cmの方形孔を3cmほど抉り込み、そこに楔板を打ち込んで繋いでいる。この井側枠の内法は、北壁が67cm、西壁が62cm、南壁が65cm、東壁が60cmで南北がやや長い台形状をなしている。次に、両端を側縁から削り込んでT字状に仕上げた長さが112～120cm、幅が21～23cm、厚さが5～6cmほどの板材を4枚積み重ねて井戸枠としている。井戸枠は、このT字状の刳り込みを東西壁と南北壁交互に嵌め込んで組み合わせている。T字状の刳り込みを交互に嵌め込むことに因って井戸枠は堅牢に組み上がっている。しかし、この木枠の上下段の板材は、片面を平坦に仕上げている。最下層の木枠材は桶上の板材に接し、最上面の枠材は井戸枠の始まりで共に木枠材を組み合わせる必要性が無いからである。この木枠の外側には、幅が12～20cm、長さが75～95cm、厚さが1.5cmほどの薄い板材を10～20枚ほど縦に打ち込んで裏込めとしている。木枠の保護や安定と流入する水の濾過を図ったものとも考えられる。一方、井筒桶の南東側には瓦塼などの裏込めがほとんどないために連結した下の枠材は20cmほど桶底側に沈み込んでおり、井戸側壁の南壁は東壁側に歪みながら沈み込んでいる。この現象は、井戸枠の構築時に既に生じていたようで、枠材の裏には角材や板材を幾重にも横架し、さらに裏込めの立板材を増やすことに因って木枠組全体の安定を図っている。現状では、この木枠組の上部施設は検出されていない。木枠の上端から井戸の検出までは約90cmあり、本来は裏込め土の混入を防ぐ何らかの施設があったものと考えられる。井戸側内からは平瓦や丸瓦、塼などの瓦塼のほかに櫛や土師器鉢、土師器坏などの遺物が出土している。底を貫いた井筒桶の下からは鬼瓦や土師器坏、曲物が出土した。このうち鬼瓦は、上面から出土した鬼瓦片と接合した。また、東壁の最上面の井側枠の上には天平神護元（765）年初鋳の「神功開寶」が1枚棚の上に置くようにして置かれていた。（小林義彦）

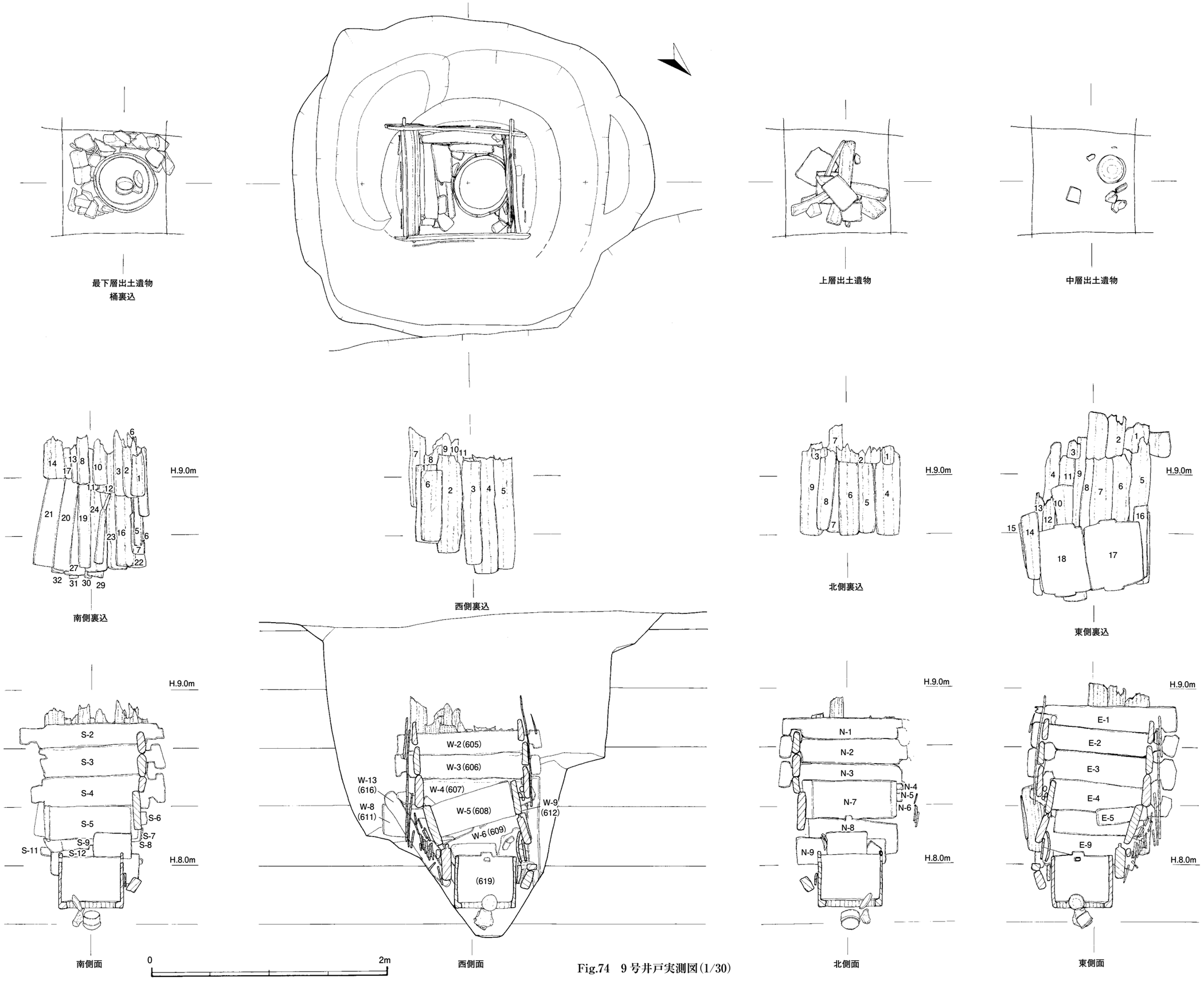


Fig.74　9号井戸実測図(1/30)

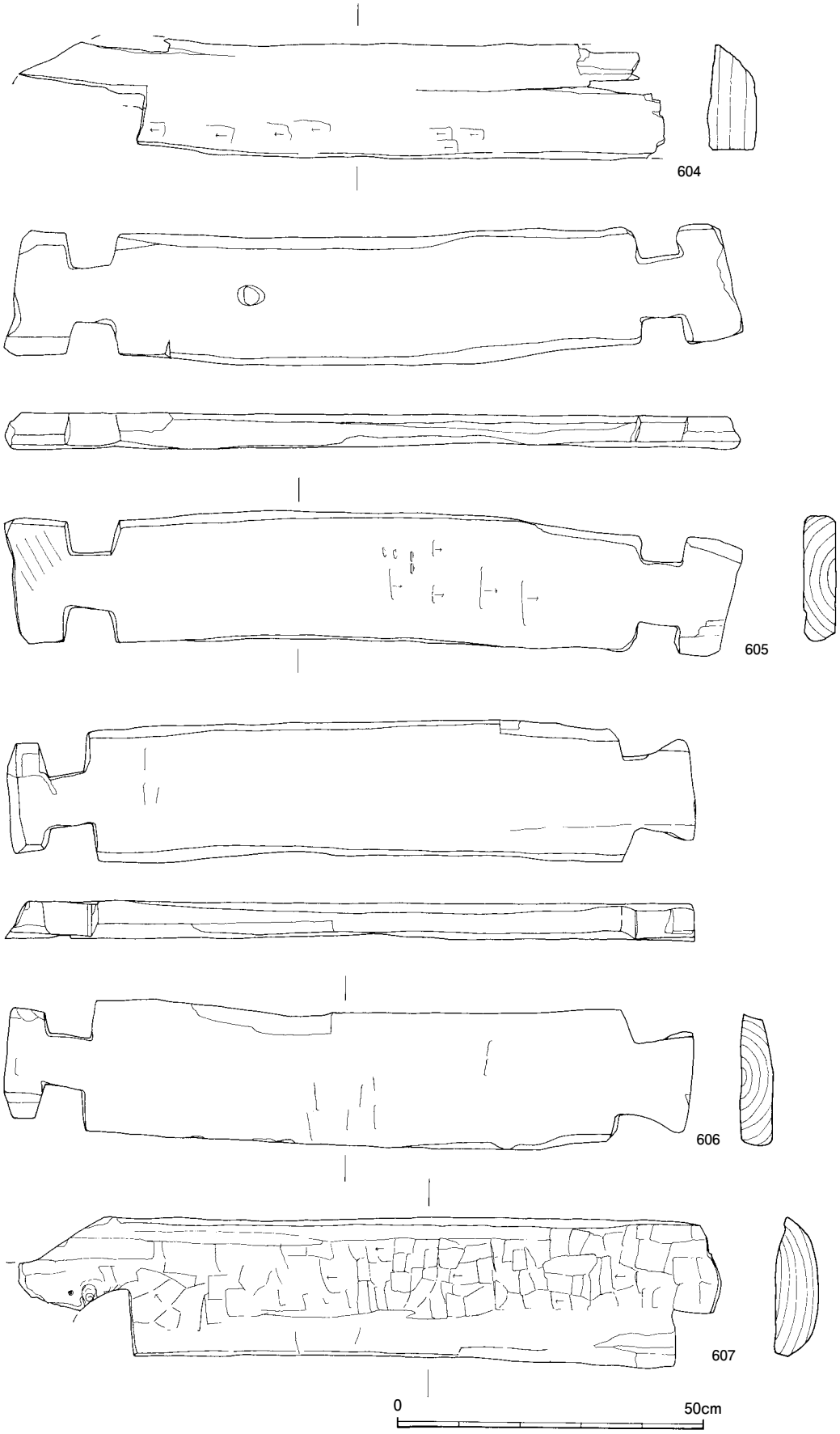


Fig.75　9号井戸出土遺物実測図1（1/10）

出土遺物

（Fig. 75 ～ 106　PL. 56 ～ 58）

井戸は、最下面に底を抜いた桶を設置し、その上に板を組み上げて方形の井戸枠を構築している。井戸枠を固定するために裏込板が差し込まれている。以下に井戸枠に用いられた板材と裏込に使用された板材について説明する。

604 ～ 618 は西側井戸枠である。発掘時に上から順に W － 1 ～ W － 15 と番号をつけて取り上げた。604 は広葉樹の板目板で欠損が激しいが、607 と同様の加工をして南北の枠材と組み合うようにしていたと考えられる。表面には少し加工痕が残る。縦 19cm、横 154cm 以上、厚さ 4.1cm である。605・606 はクヌギの板目板で、両端部を左右から削り取って、T 字形に加工して南北の枠材と組み合うようにしている。T 字部分は左右対称ではなく、一方が大きくもう一方が小さい。側面は全体に丸みをもって面取りしており、なめらかに仕上げている。表面の加工は丁寧であるが、一部にヤリガンナの加工痕が残る。厚みも 5.2 ～ 5.3cm ほどで加工も丁寧なので、床材などの建築部材を転用した可能性がある。605 は T 字部分に鋭利な刃物痕が残る。表面にはヤリガンナ痕の他に幅 1.5cm くらいの工具痕が見られる。縦 20.8cm、横 121cm、厚さ、5.3cm である。606 は一方の T 字形部分の張り出しが弱く、逆三角形を呈する。縦 23.8cm、横 112.6cm、厚さ 5.2cm である。607 は広葉樹の板目板で、端部の一部をナナメに切り落とし

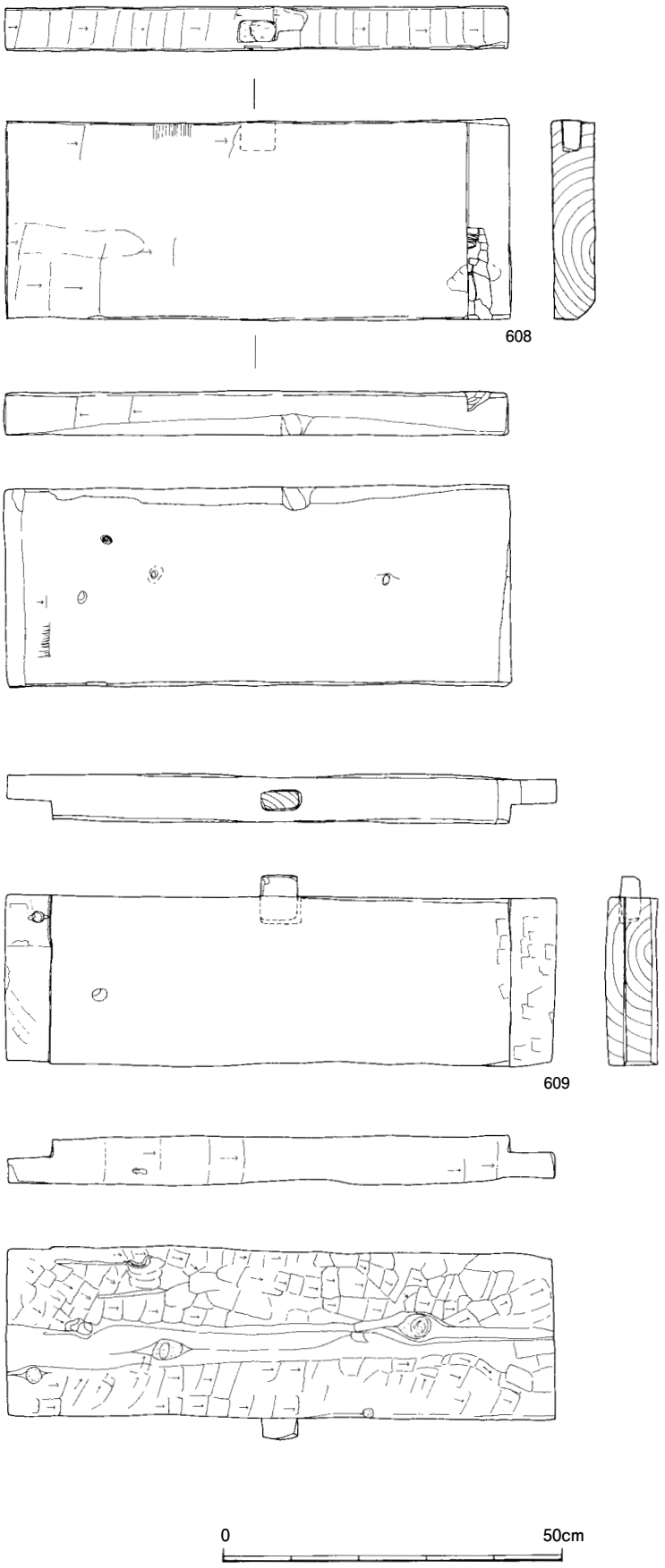


Fig.76　9 号井戸出土遺物実測図 2（1/10）

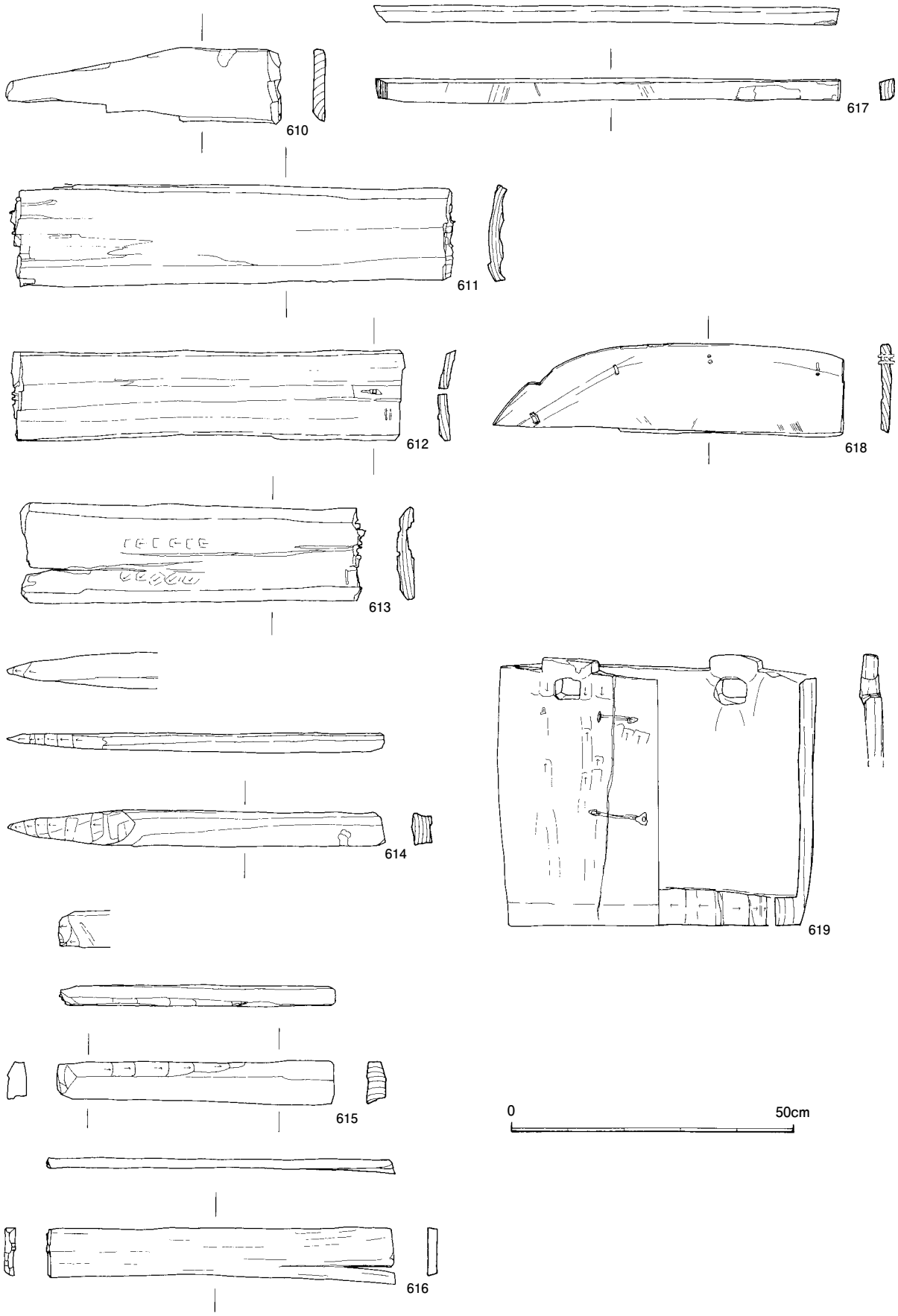


Fig.77　9 号井戸出土遺物実測図 3 (1/10)

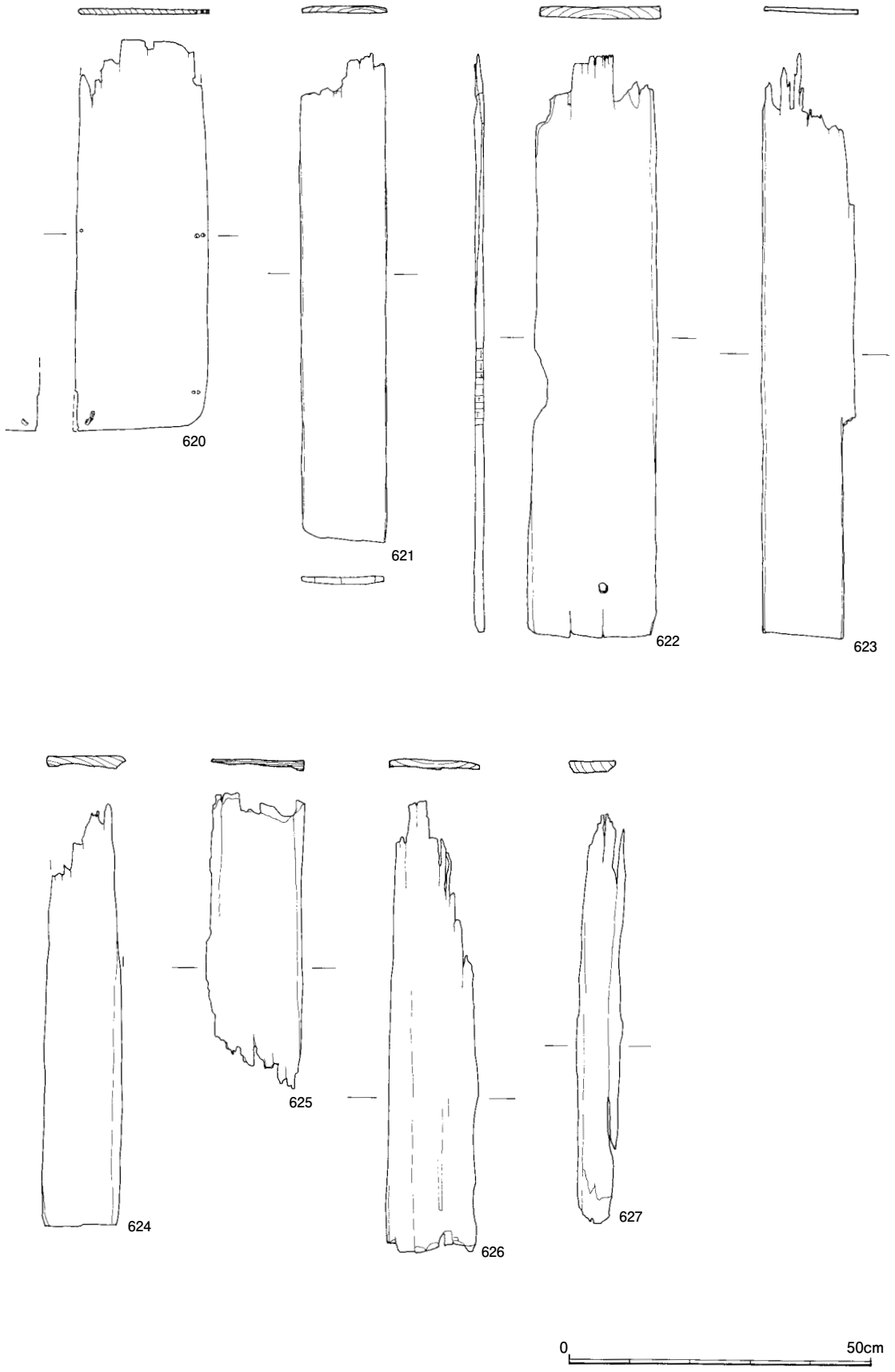


Fig.78　9 号井戸出土遺物実測図 4 (1/10)

先端部はもう少し長くのびる。反対側から抉込みを入れている。抉込みの加工は粗雑である。もう一方の端部は欠損している。南北の枠材と組み合うようにしている。表面に手斧やヤリガンナの加工痕が明瞭に残る。裏面はやや丸く、平坦ではない。縦が 23.8cm、横が 114.5cm 以上、厚さは 7cm である。608・609 はスギの板目板で、608 の側面に凹部、609 の側面に凸部をつくり、組み合うようになっている。608 の端部には、計画線の浅い彫り込みと、途中まで削り取ろうとした痕跡があり、609 のような断面形にしようとしたが、変更されたものと思われる。全体に丁寧に加工してあり、もとは床材などの建築部材を転用したものであろう。側面には加工痕が観察できる。側面の凹部は本体を刳り貫いて作り出している。凹部のサイズは長さ 6.0cm、幅 3.2cm、奥行き 4.6cm である。裏面には他の板材と組み合わせた際に付いたと思われる圧痕が残る。全体のサイズは縦が 29.3cm、横が 74.7cm、厚さは 6.3cm である。609 は 608 より長く、両端部をそれぞれ幅 7 ～ 8cm ほど削り取って段を作り出しており、ここに南北の枠材がはまるものと考えられる。段の低くなった部分は加工痕が残る。表面は比較的丁寧に加工してあり、もとは床材などの建築部材を転用したものであろう。裏面は手斧やヤリガンナの加工痕が明瞭に残る。裏面の中央部は少しくぼんでおり節が見られる。側面の凸部は本体を刳り貫いて、そこに別材を嵌め込んでいる。別材は長さが 5.2cm、幅が 3.0cm、奥行きは 3.4cm 以上で、長さ、幅とも 4 ～ 5mm ほど大きい刳り貫き孔に嵌め込んでいる。全体のサイズは縦 25cm、横 81.4cm、厚さ 7.5cm である。610 は不定形の針葉樹の柾目板で、一方の側面は粗く二次加工されているが、もう一方の側面は欠損している。端部は粗く切断した痕跡が残る。縦が 15cm、横が 48.8cm、厚さは 2.1cm である。611 は広葉樹の板目板と思われ、両端に粗い切断痕が残る。屋根材の転用である。縦が 18cm、横が 79.2cm 以上、厚さは 2.4cm である。612 は針葉樹の板目板で、端部付近に長さ 8mm、幅 8mm ほどの穿孔があり、その近くに金具で留めた圧痕が残る。屋根材を転用しており、両端部を切断して井戸枠にあう長さにしている。縦が 16cm、横が 70cm 以上、厚さは 1.9cm である。613 は針葉樹の板目板で、611 と同様に両端に粗く、折り取ったような切断痕が残る。屋根材の転用である。表面中央部にヤリガンナ痕が残り、板材にするために表面を削り取った痕跡がよく分かる。縦が 17.7cm、横が 61.2cm 以上、厚さは 3cm である。614 は針葉樹の板目材を用いた断面四角形の杭の転用材で、先端部に杭の加工痕がよく残る。縦が 6.4cm、横が 66.8cm、厚さは 3.4cm である。615 は針葉樹の板目材を用いた不定形の棒状材で、ヤリガンナ痕が少し残る。一方の端部には加工痕がよく残る。縦が 7.7cm、横が 49cm、厚さは 3.5cm である。616 は針葉樹の板目材を用いている。屋根材の転用と考えられ、両端部を切断して井戸枠にあう長さにしている。本来は横幅も広かったと思われる。端部の切断痕がよく残る。縦が 10cm、横が 62cm、厚さは 1.7cm である。617 は針葉樹の板目材を用いており、一方の端部をナナメに加工した棒状材で、もとは箱物などの枠材であった可能性がある。縦が 4.3cm、横が 82.7cm、厚さは 2.9cm である。

618 はスギのナナメ材を用いた曲物の底板を利用しており、直径 6mm ほどの 2 つの孔が 4 カ所あ

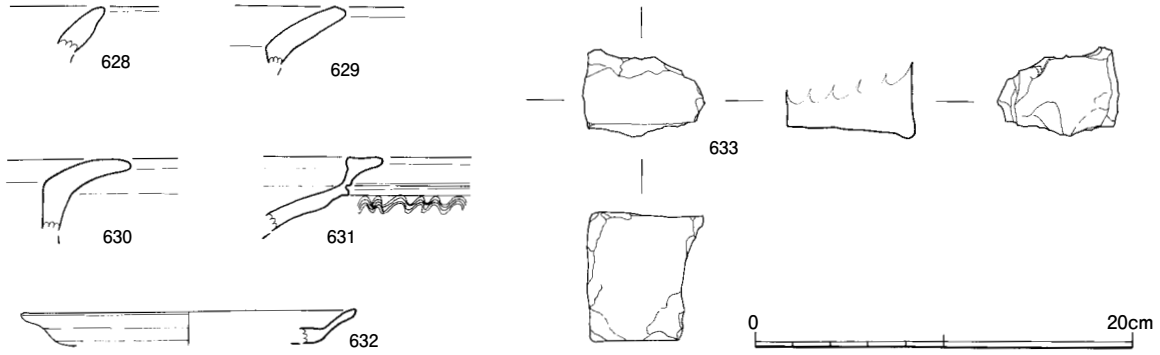


Fig.79　9 号井戸出土遺物実測図 5 (1/4)

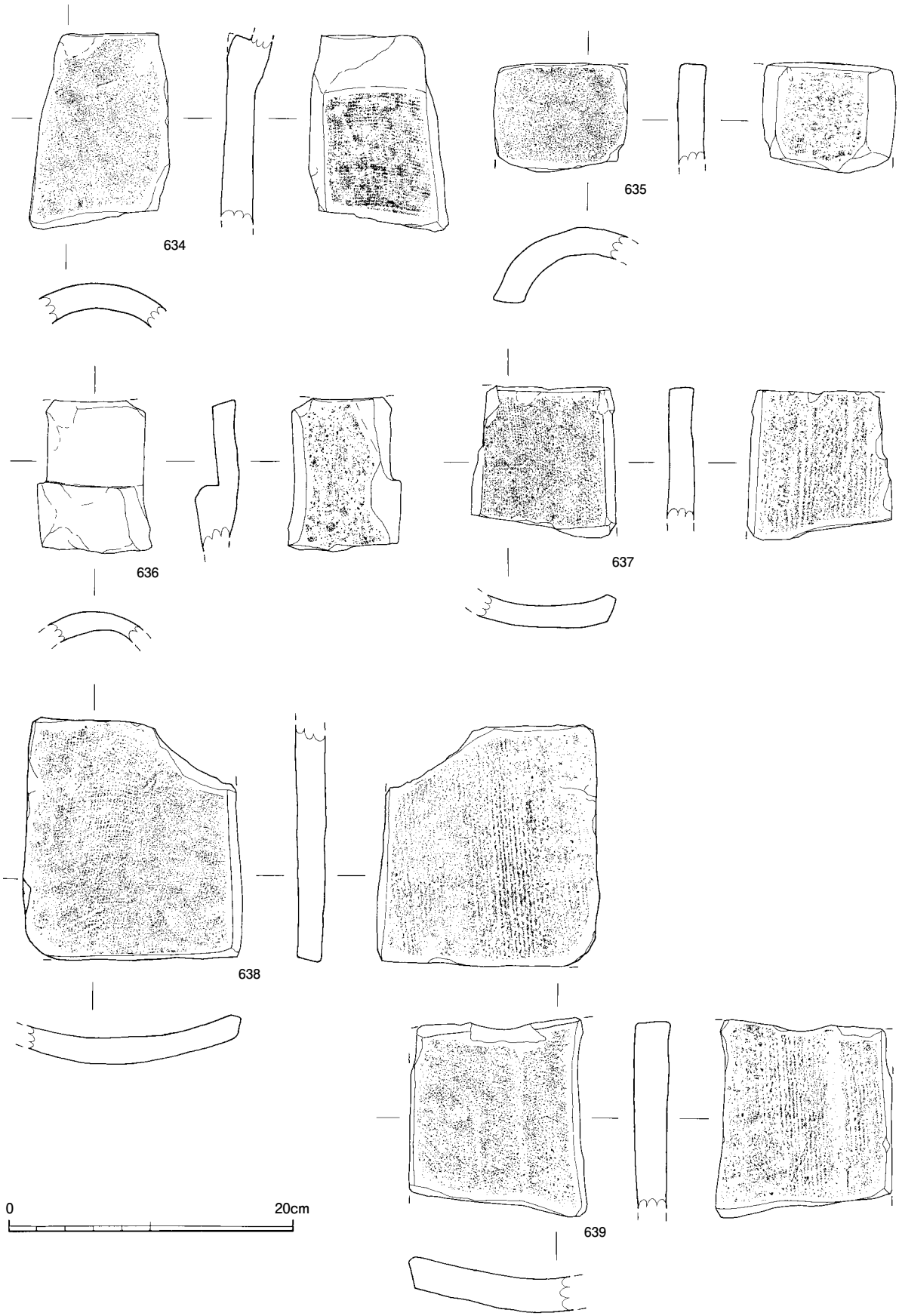


Fig.80　9 号井戸出土遺物実測図 6 (1/4)

り、孔に巻かれた桜の樹皮紐が残る。曲物製作時の計画線と思われる刃キズが見られる。一方の端部は直線的に切断されており、井戸枠にあう長さに再加工している。先端側のカーブした側面に、少し段があり、加工されたものであるが、本来の曲物の底板としての加工か、二次的なものかは不明である。縦が 16cm、横が 62.2cm、厚さは 1.8cm である。

619 は井戸桶である。クスノキの柾目材を使用している。短径が 51.5cm、長径が 57.5cm の楕円形で、最大高は 48.3cm である。厚さは側面で 2.6cm、底部で 6.6cm。口縁部付近に縦・横とも 4 ～ 5cm の隅丸方形の孔があり、その上部に 2 ～ 3cm のミミが付き、把手状となる。縦方向のヒビには 2 カ所の補修痕があり、貫通しない穿孔と横方向の圧痕が残る。金具で留めていた痕跡である。底部は井戸桶として使用する際に刳り貫かれており、その際の加工痕がよく残る。刳り貫きの加工は粗雑である。表面にも加工痕が残る。

620 ～ 627 は西側井戸枠の裏込板である。いずれも長辺が縦方向になるように差し込まれていた。発掘時の状況もあり、いずれも一方の端部の劣化が激しい。620 はスギの柾目材を用いた曲物の底板を利用している。直径 5mm ほどの 2 つの孔が 4 カ所あり、一部に孔に巻かれた桜の樹皮紐が残る。加工は丁寧である。621 は針葉樹の板目板で、端部を切断した痕跡が明瞭に残る。622 は広葉樹の板目板と思われ、端部付近に長さ 1.4cm、幅 1.4cm ほどの穿孔があり、屋根材などを転用したものである。側面に 12cm ほどにわたって刳り込んだ加工痕があるが、屋根材としての利用時のものか、二次的なものか不明である。623・624 は針葉樹の板目板を用いた加工板材である。いずれも端部に丁寧な切断痕がある。625 から 627 は板材であるが摩滅が激しい。625 は針葉樹の板目板と思われる。626・627 は広葉樹の板目板と思われる。

東側井戸枠は発掘時に上から順にＥ－１～Ｅ－９と番号をつけて取り上げた。

Ｅ－１～Ｅ－３は 604 から 606 と同様に、両端部を左右から削り取ってＴ字形に加工し、南北の枠材と組み合うようにしている。側面も面取りしてやや丸く仕上げる。Ｅ－１は広葉樹の板目板で、縦 23.0cm、横 122cm 以上、厚さ 6cm である。一方の端部は欠損している。Ｅ－２は広葉樹の板目板で、縦 22cm、横 115cm、厚さ 4cm である。Ｅ－３はツブラジイの板目板で、縦が 26cm、横が 112cm、厚さは 5cm である。Ｅ－４は 607 と同様の形状で、端部のナナメに切り落とした部分は、加工が粗い。側面は丁寧な加工で面取りしている。全体の半分を欠損していると考えられ、一方の端部も欠損している。ツブラジイのナナメ材を用いており、縦が 13cm、横が 113.5cm 以上、厚さは 4.2cm である。Ｅ－５は針葉樹のナナメ材を用いた転用材で、断面台形になるよう平坦面を作り出した部分の加工は粗く手斧痕やヤリガンナ痕が残る。縦が 14.5cm、横が 37.3cm、厚さは 3.5cm である。Ｅ－６・Ｅ－７は箱物か屋根材の転用と思われる角材で、加工痕が明瞭である。Ｅ－６は針葉樹の板目材を用いており、一方の端部をナナメに切り落とす。縦が 5.5cm、横は 80cm、厚さは 3.5cm である。Ｅ－７は針葉樹の柾目材で、617 と同様に一

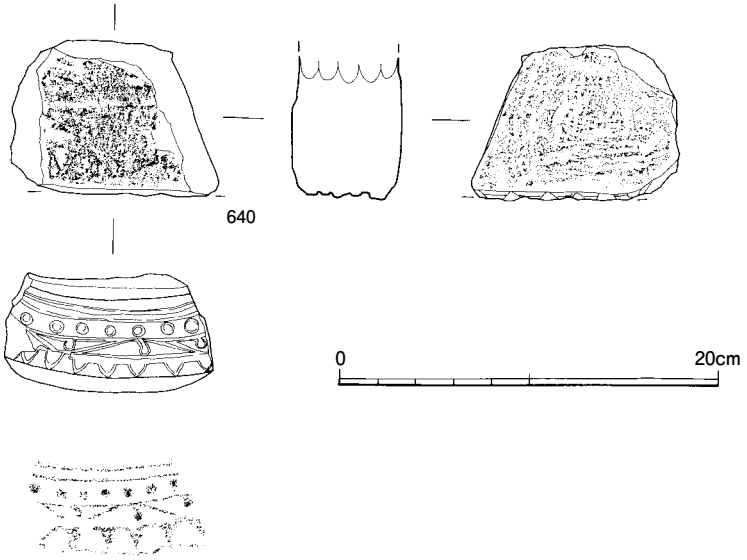


Fig.81　9 号井戸出土遺物実測図 7（1/4）

方の端部をナナメに切り落とし、もう一方の端部に向かって細くなるように側面を削っている。縦が6.5cm、横が82cm、厚さは7.2cmである。E－8・E－9は608・609などと同様の加工をしている。E－8は針葉樹の板目板を用いており、側面の凹部は本体を刳り貫いて作り出している。凹部のサイズは長さが7cm、幅が3.5cm、奥行きは4cmである。裏面の加工痕は明瞭である。全体のサイズは縦が28.7cm、横が74cm、厚さは6.5cmである。E－9は針葉樹の板目板を用いており、両端部をそれぞれ幅6.5cmほど削り取って段を作り出しており、ここに南北の枠材がはまるものと考えられる。表面は比較的丁寧に加工してある。裏面は手斧やヤリガンナの加工痕が残る。裏面の中央部は芯に近いため少しくぼんでいる。側面の凸部は本体を刳り貫いて、そこに別材を嵌め込んでいる。別材は長さ5cm、幅2.3cm、奥行きは3.5cm以上で、長さ、幅ともやや大きい刳り貫き孔に嵌め込んでいる。全体のサイズは縦が25cm、横が81cm、厚さは6.7cmである。

東側井戸枠の裏込板は№1～19までである。ほとんどが針葉樹の板目材で、穿孔があるものや途中から摩耗の度合いが異なっているものがあり、屋根材を転用したものであると考えられる。一部に自然木や角材も利用している。

№1・№2・№4・№5・№8・№9・№12・№14・№15・№19は針葉樹の板目板の加工板材である。残存状況は悪い。№4は端部を折り取っているが、付近にノコ状のものでナナメ方向に付けた計

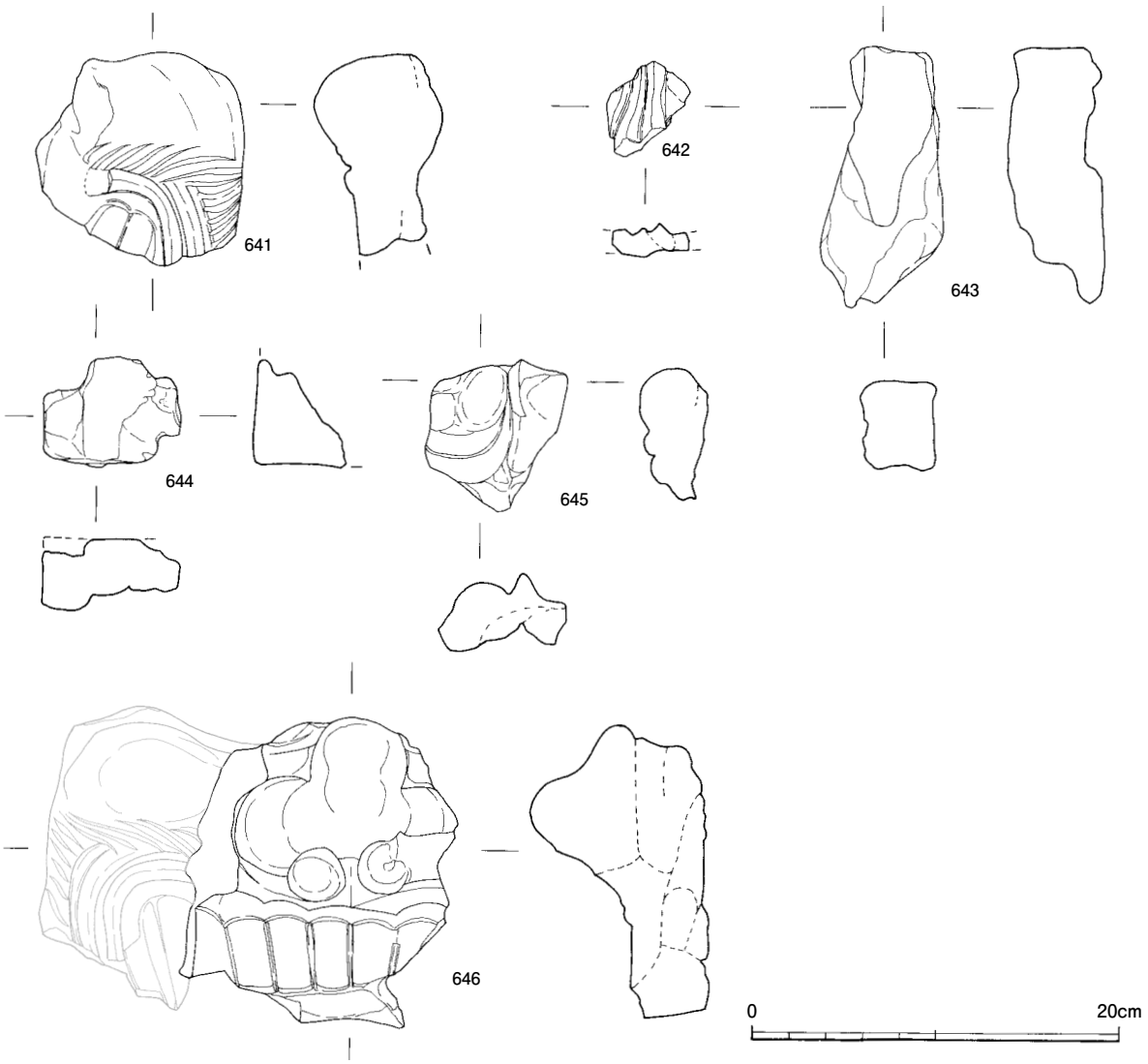


Fig.82　9号井戸出土遺物実測図8（1/4）

画線と思われる痕跡が残る。№5・№14は端部に切断痕が残る。№3は芯持材で欠損が激しい。№6・№7・№11・№13は穿孔のある板材で、屋根材の転用と思われる。№6は針葉樹の板目板で、穿孔部のサイズは長さが9mm、幅が8mmで円形である。№7は針葉樹の柾目板で、穿孔部のサイズは長さ9mm、幅8mmで円形である。№11は針葉樹の板目板を用いており、穿孔部のサイズは長さが9mm、幅が9mmの方形である。端部には切断痕が細かく残る。№13は針葉樹の板目板を用いており、穿孔部のサイズは長さ2.5cm、幅1.5cmと縦長である。№10は針葉樹の柾目板を用いており、表裏とも加工痕が明瞭に残る。両端部は欠損している。№16は針葉樹の板目材を用いた角材か厚い板材の一部である。№17・№18は針葉樹の板目材で奴凧状の形をしており、手斧痕やヤリガンナ痕が明瞭に残る。転用材と考えられるが、そのまま裏込板に利用しており、再加工の痕跡は見られない。

南側井戸枠は発掘時に上から順にS－1～S－12と番号を付けて取り上げた。

S－1は針葉樹のナナメ材を用いたあまり加工痕の見られない不定形の板材で、瘤や節もそのまま残る。縦15cm以上、横53cm以上、厚さは4.3cm以上である。S－2からS－4は広葉樹の板目板で、605・606などと同様に両端部を左右から削り取ってT字形に加工し、東西の枠材と組み合うようにしている。側面も面取りしてやや丸く仕上げる。S－2には一方の端部付近に不自然な加工痕が残る。全体の半分弱を欠損している。縦20cm以上、横122cm、厚さは4cmである。S－3は一方の端部が欠損している。T字部分は左右対称ではない。縦は26.5cm、横は101.5cm以上、厚さは4.5cmである。S－4は縦29.5cm、横111.5cm、厚さ5.7cmである。S－5とS－12はいずれも針葉樹の板目材で、608・609などと同様の加工をしているが、S－12の短くて平坦な板材に凸部を、S－5の長く段差のある方に凹部を作り出しており、西側と組み合わせるため凹凸が逆になっている。S－5は両端部をそれぞれ幅6.5cmほど削り取って段を作り出しており、ここに東西の枠材がはまるものと考えられる。側面の凹部は本体を刳り貫いて作り出している。凹部のサイズは長さが5.5cm、幅が約3cm、奥行きは5cmである。裏面の加工痕は明瞭である。全体のサイズは縦が30cm、横が80cm、厚さは6.5cmである。S－12は針葉樹の板目板を用いており、表面は比較的丁寧に加工してある。裏面は加工痕が少し残る。裏面の中央部は芯に近いため少しくぼんで節がある。側面の凸部は本体を刳り貫いて、そこに別材を嵌め

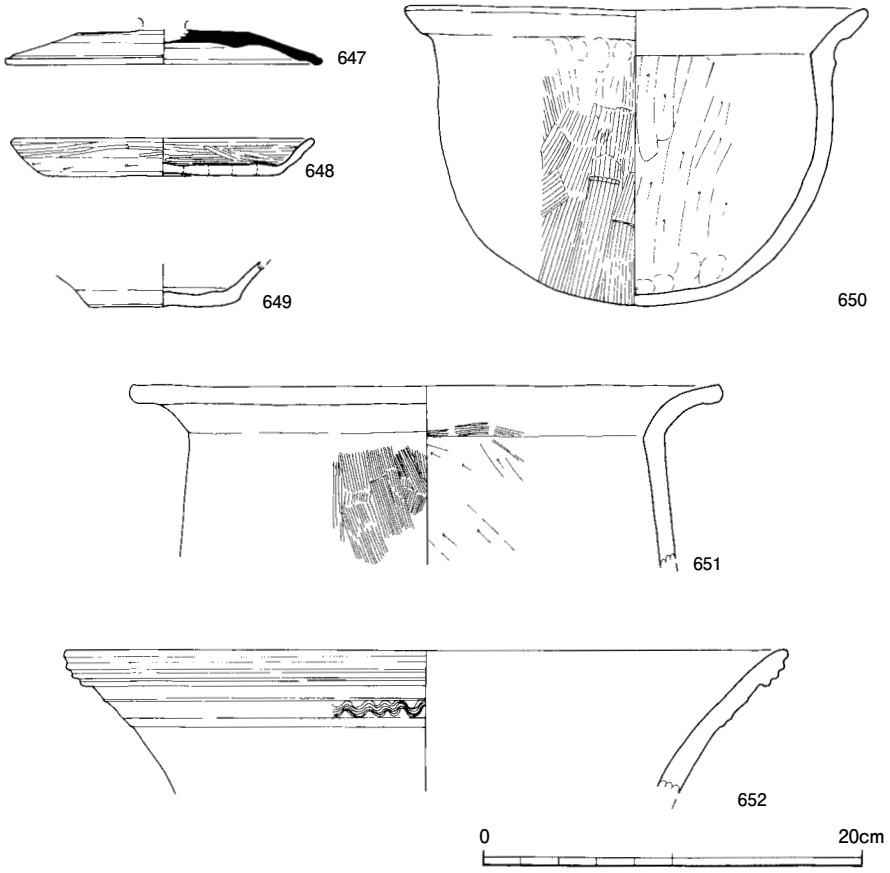


Fig.83　9号井戸出土遺物実測図9（1/4）

込んでいる。別材は長さ 5.5cm、幅 2.2cm、奥行きは 4.5cm 以上で、長さ、幅ともやや大きい刳り貫き孔に嵌め込んでいる。全体のサイズは縦が 24.3cm、横が 74cm、厚さは 6.7cm である。S − 6 から S − 9 は幅 12 ～ 14cm ほどの加工板材で S − 6・S − 7 は摩耗が激しい。S − 6 は針葉樹の板目板で、縦が 12cm 以上、横 80cm 以上、厚さは 3cm である。S − 7 は針葉樹の板目板で、縦 14cm、横 82cm 以上、厚さ 2cm である。S − 8・S − 9 は針葉樹の板目板で、加工痕が明瞭である。S − 8 は端部に粗い切断痕が残る。縦 12cm、横 62cm 以上、厚さは 2.8cm である。S − 9 は端部に粗い切断痕が残る。一方の端部は欠損している。縦 13.8cm、横 50.2cm 以上、厚さ 3cm である。S − 10 は針葉樹の板目板で、縦が 1.1cm、横が 1cm の小さな穿孔のある板材で、611 と同様に屋根材の転用の可能性が高い。一方の端部と側面は欠損する。縦 9.5cm 以上、横 68cm 以上、厚さは 1.8cm である。S − 11 は箱物か屋根材の転用と思われる角材で、617 と同様に針葉樹の板目材を用いている。一方の端部はナナメに削り、もう一方は先端が細くなるように削っている。加工痕が明瞭である。縦 7.5cm、横 87.5cm、厚さは 6cm である。

南側井戸枠の裏込板は№ 1 から 49 まであり、そのなかで一部計測ができなかったものがある。他の面の裏込板と比べて南側だけが枚数が極端に多い。ほとんどが針葉樹の板目板で、穿孔があるものや途中から摩耗の度合いが異なっているものがあり、それらは屋根材を転用したものであると考えられる。それ以外でも加工された板材がほとんどであり、建築部材などの転用材である。

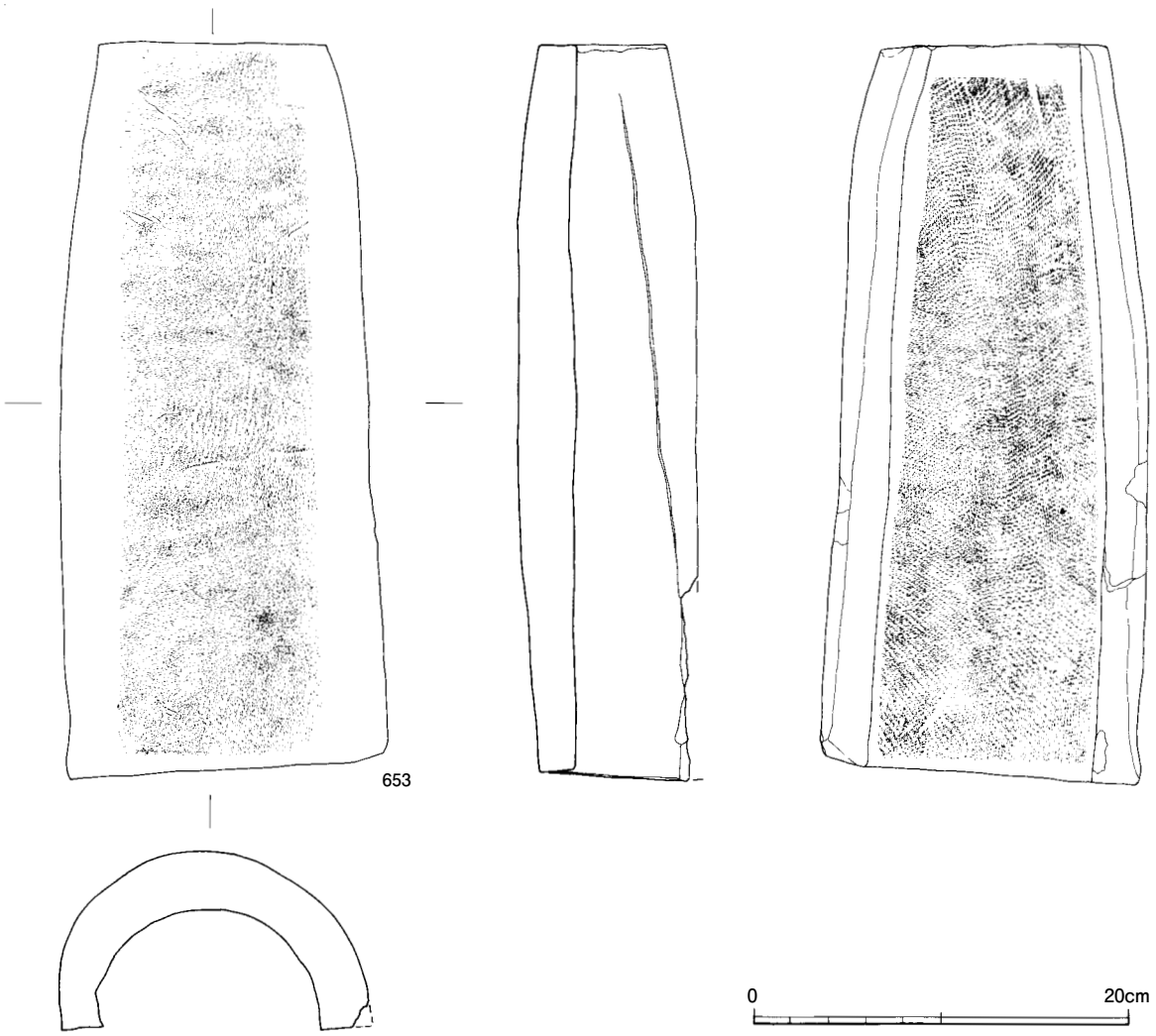


Fig.84　9 号井戸出土遺物実測図 10 (1/4)

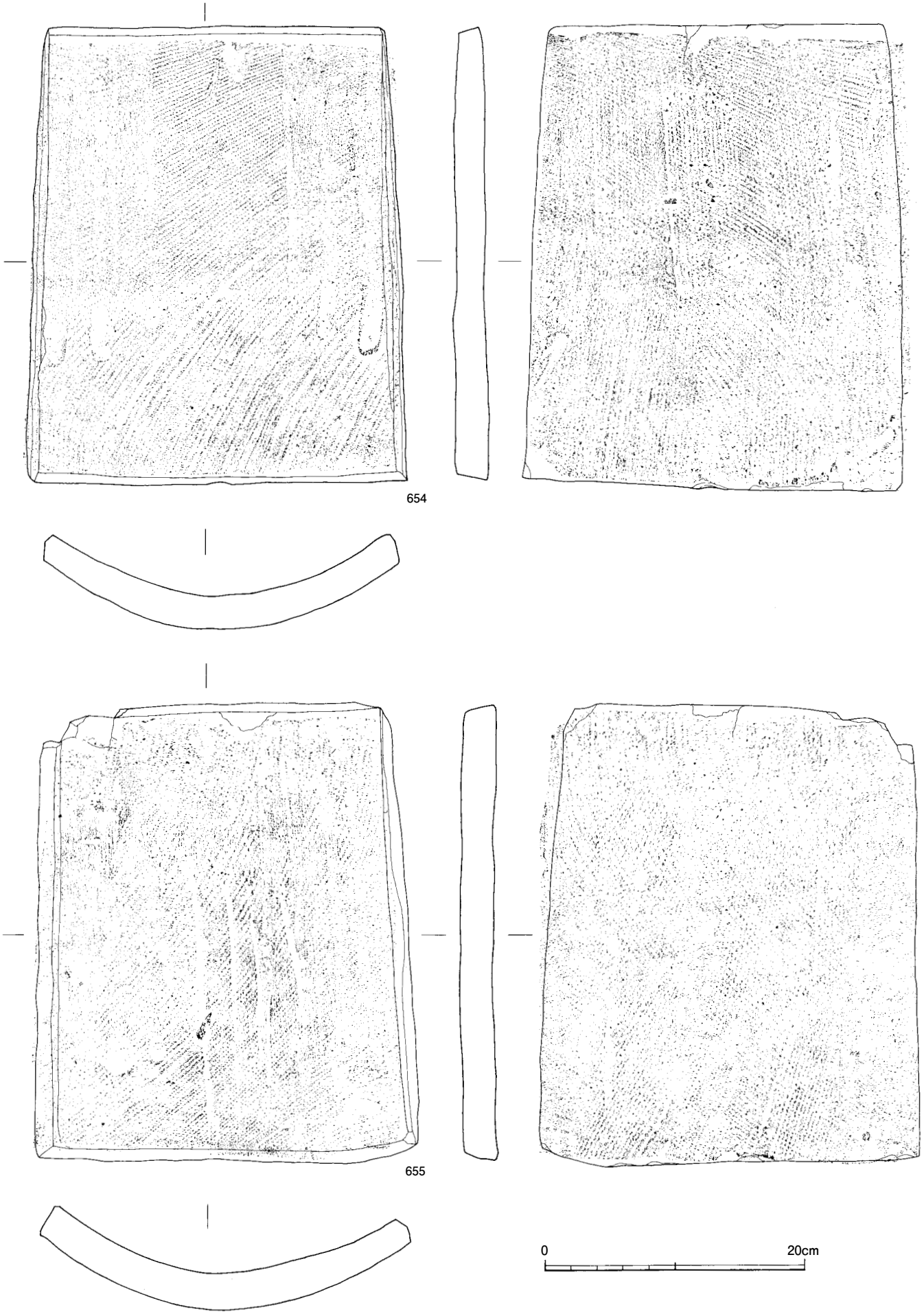


Fig.85　9 号井戸出土遺物実測図 11 (1/4)

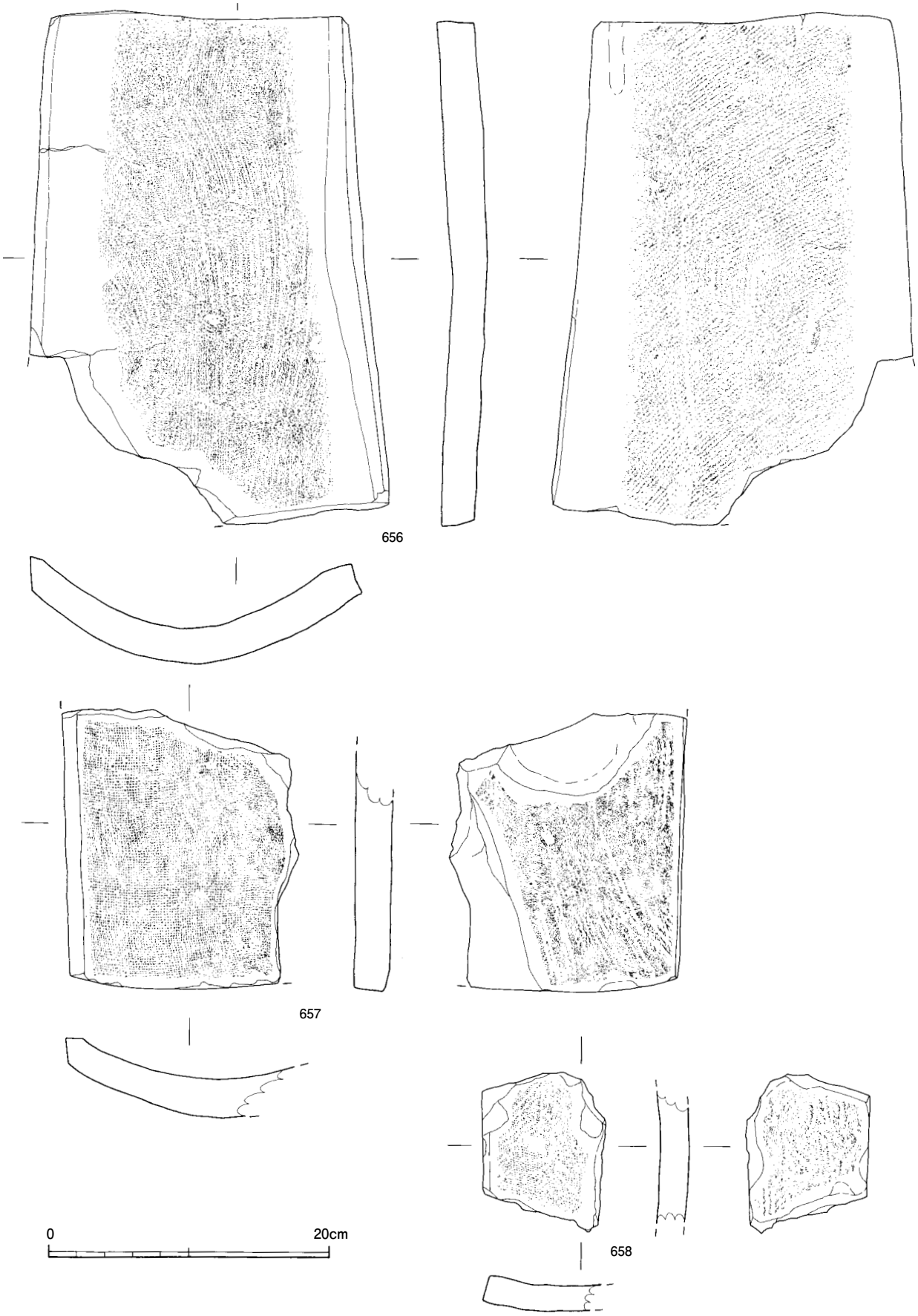


Fig.86　9 号井戸出土遺物実測図 12 (1/4)

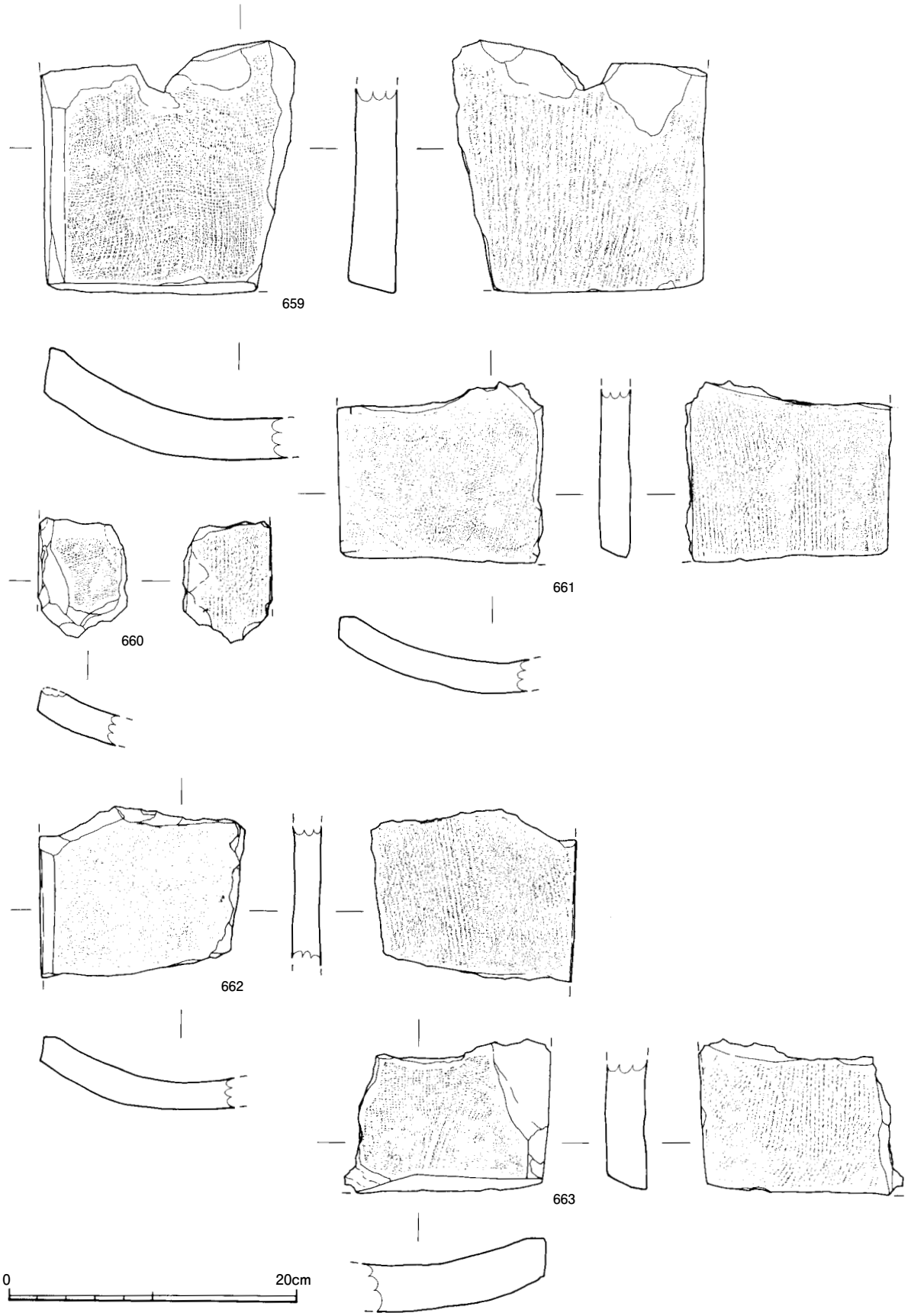


Fig.87　9 号井戸出土遺物実測図 13 (1/4)

No.1・No.2・No.3・No.8・No.20・No.21・No.22・No.24・No.26・No.27・No.29・No.33・No.43・No.46は針葉樹の板目板を用いた加工板材で、端部に切断痕が残る。

No.4・No.5・No.25・No.28・No.45は広葉樹の板目板を用いた加工板材で、端部に切断痕が残る。No.7・No.9・No.14・No.23は針葉樹の板目板を用いた屋根材の転用品で、端部付近に穿孔がある。No.7は穿孔部のサイズが、長さ1.3cm、幅1.8cmである。端部を面取りする。No.9は穿孔部のサイズが、長さ1.5cm、幅8mm以上である。端部は粗い加工である。No.14は穿孔部のサイズが、長さ1cm、幅1cmである。No.23は穿孔部のサイズが、長さ1.3cm、幅1cmである。端部を面取りする。No.10・No.19・No.30・No.31・No.32・No.35・No.40は広葉樹の板目板を用いた加工板材で、残存状況が悪い。No.11・No.12・No.13・No.15・No.17・No.18・No.38・No.41は針葉樹の板目板を用いた加工板材で、残存状況が悪い。No.16・No.・37・No.39・No.48・No.49は針葉樹の柾目板で端部に切断痕が残る。一部表面に加工痕が残る。No.42は針葉樹の柾目板で、端部に丁寧な加工痕が残る。端部付近の側面寄りに直径5mmほどの小孔がある。No.47は針葉樹のナナメ材を用いた加工板材で、端部に切断痕が残る。端部とその付近の側面寄りに直径5mmほどの小孔が2つある。屋根板や壁板の転用と思われる。

北側井戸枠は発掘時に上から順にN－1～N－9と番号をつけて取り上げた。

N－1～N－3は605・606などと同様に両端部を左右から削り取ってT字形に加工し、東西の枠材と組み合うようにしている。側面も面取りしてやや丸く仕上げる。いずれも広葉樹の板目板と思われる。N－1は全体の約半分と先端部分を欠損している。縦が20cm以上、横が102cm以上、厚さは5cm以上である。N－2は一方の先端部を欠損する。縦が24cm、横が106cm以上、厚さは5cmである。N－3は加工痕がよく残る。一方の先端部を欠損する。縦は31cm、横は108cm以上、厚さは6.5cmである。N－4は針葉樹の柾目材を用いた棒状材で刃物痕が残る。縦が7.5cm、横が89cm以上、厚さは4cmである。N－5は板材であるが残存状況が悪い。縦が8.1cm

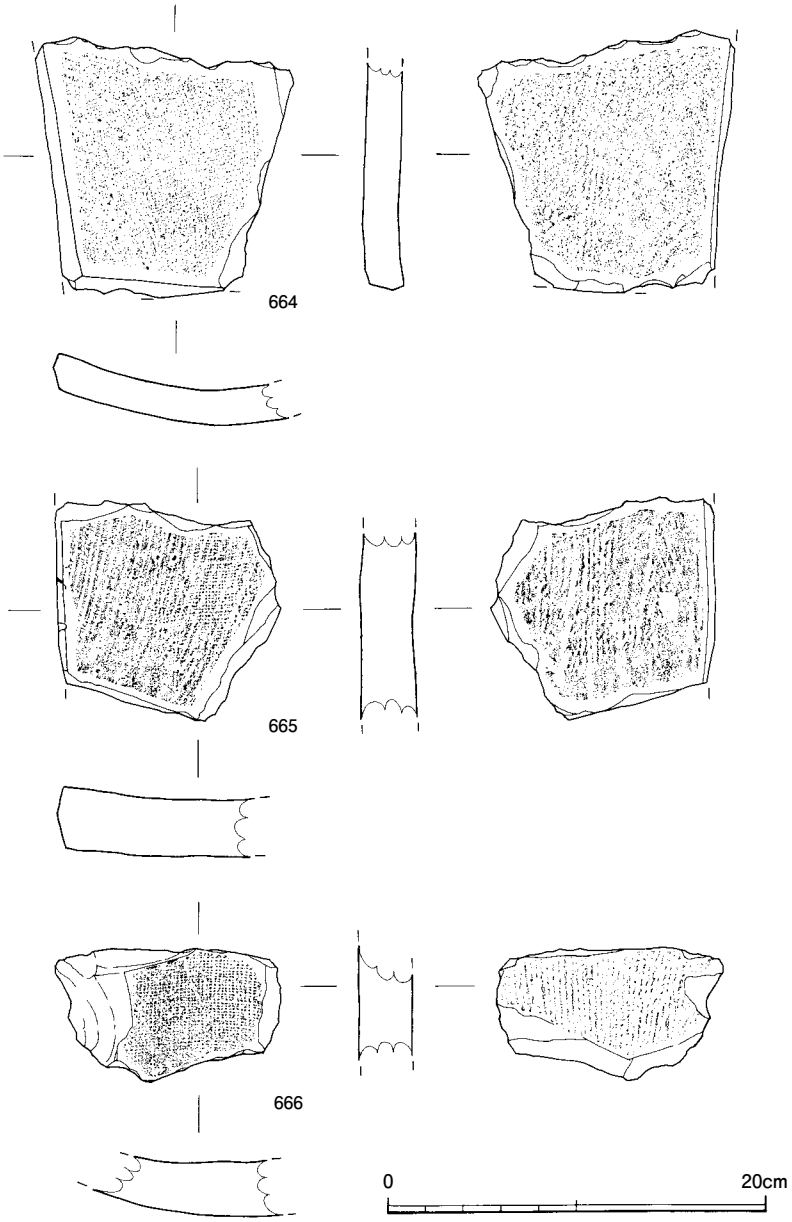


Fig.88　9号井戸出土遺物実測図14（1/4）

以上、横が 82.5cm 以上、厚さは 1.5cm である。N － 6 は針葉樹の柾目材を用いており、一方の端部をナナメに加工した棒状材で、もとは箱物などの枠材を転用したものかもしれない。縦が 3.1cm、横が 82.5cm、厚さは 1.6cm である。N － 7・N － 8 はいずれも針葉樹の板目材で、608・609 などと同様の加工をしているが、N － 8 の短くて平坦な板材に凸部を、N － 7 の長く段差のある方に凹部を作り出しており、西側と組み合わせるため凹凸が逆になっている。N － 7 は両端部をそれぞれ幅 6.5cm ほど削り取って段を作り出しており、ここに東西の枠材が嵌るものと考えられる。側面の凹部は本体を刳り貫いて作り出している。凹部のサイズは長さ 6.5cm、幅 2.5cm、奥行きは 4.2cm である。裏面の加工痕は明瞭である。全体のサイズは縦が 30.1cm、横が 81cm、厚さは 5.5cm である。N － 8 は針葉樹の板目板を用いており、表面は比較的丁寧に加工してある。裏面は加工痕が少し残る。裏面の中央部は芯に近いため少しくぼんでいる。側面の凸部は本体を刳り貫いて、そこに別材を嵌め込んでいる。別材は長さ 5.2cm、幅 1.8cm、奥行き 4cm 以上で、長さ、幅ともやや大きい刳り貫き孔に嵌め込んでいる。全体のサイズは縦が 24.7cm、横が 74cm、厚さは 7cm である。N － 9 は針葉樹の板目板で、611 などと同様で屋根材の転用の可能性がある。縦 21.2cm、横 71.5cm、厚さは 2.5cm である。

北側井戸枠の裏込板は№1 ～ 9 まである。ほとんどが針葉樹の板目板で、穿孔があるものが多く、それらは屋根材を転用したものであると考えられる。

№1・№2 は針葉樹の柾目板を用いており、残存状況が悪い。№3 から№5 は針葉樹の板目板を用いている。穿孔があり屋根材を転用したと考えられる。№3 は端部の加工は丁寧である。穿孔部のサイズは長さ 1.1cm、幅 1cm である。№4 は端部の加工が少し粗い。穿孔部のサイズは長さ 1cm、幅 1cm である。№5 は全体に加工は丁寧で、穿孔部は直径 1.2cm ほどの円形である。№7・№8 は針葉樹の板目板を用いた加工板材で、端部は粗く切断されている。穿孔はないが、屋根材の転用の可能性がある。№9 は針葉樹の柾目材で、穿孔があり屋根材の転用と考えられるが、端部の半分が丸く加工

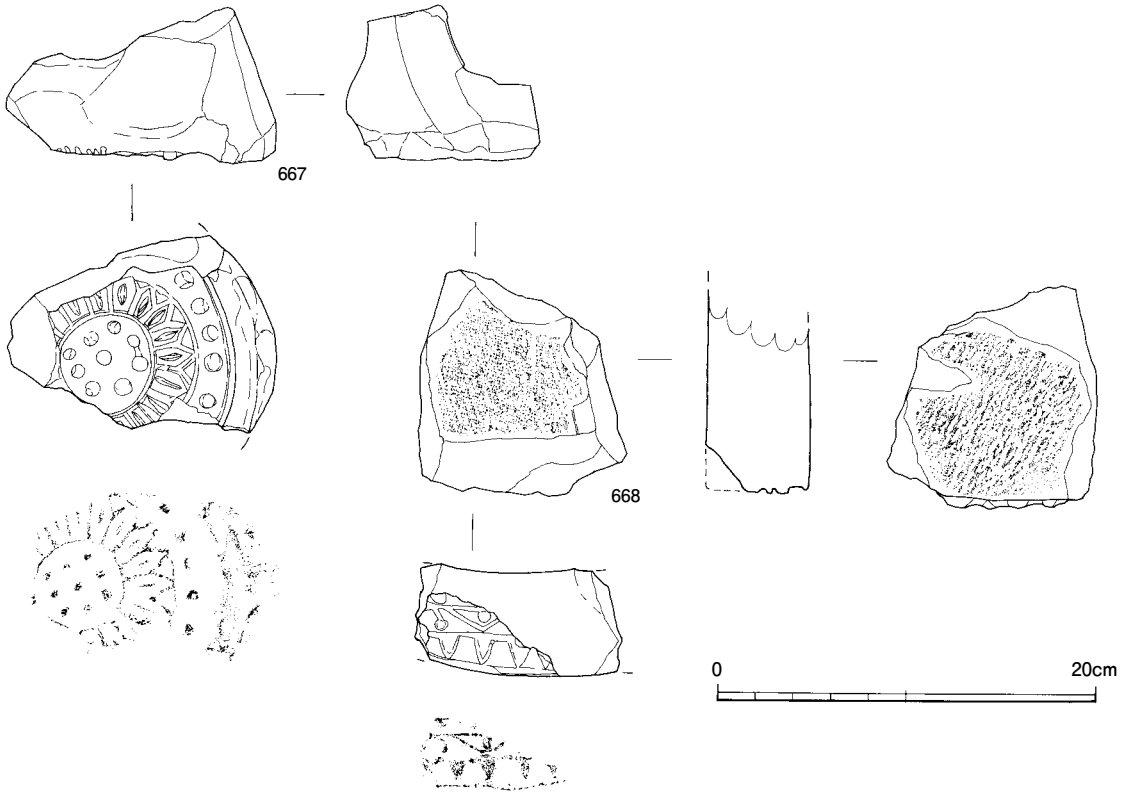


Fig.89　9 号井戸出土遺物実測図 15 (1/4)

されている。残りは円形部分より 1cm ほど縦にのび、直線に切断されている。切断痕は明瞭である。井戸の裏込には必要ない加工であるが、用途は分からない。穿孔部は長さ 8mm、幅 7mm である。

628 ～ 646 は上層出土遺物である。

628 ～ 630 は土師器の甕口縁である。いずれも残りが悪く、口径復原はできなかった。628・629 は内外面ともナデ調整。630 は外面がナデ、内面はケズリのちナデ調整である。631 は須恵器の甕口縁である。口縁部外面に波状文を施す。口径復原はできなかった。632 は土師皿である。内外面ともナデ調整である。633 は無文塼である。板状工具によるナデ、ヘラで面取りする。634 から 636 は丸瓦である。いずれも表面（凸面）はナデ調整、裏面（凹面）は布目が残る。側面はヘラで削り取って面取りする。636 はハケ目・ナデ調整である。637 から 639 は平瓦である。いずれも表面（凹面）に布目圧痕がのこり、裏面（凸面）は縄目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。638 は表面に糸切り痕が残る。640 は軒平瓦で、表面（凹面）に布目圧痕がのこり、裏面（凸面）は縄目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。瓦当は、細い周縁を持ち、外区は上帯に連珠文、下帯は面違い鋸歯文が変化したと思われる文様で、内区は扁行唐草文が直線的に変化した文様である。641 ～ 646 は鬼瓦である。大宰府式の鬼面文鬼瓦と思われる。641・642・645・646 は接合しなかったが、同一個体の可能性が高い。641 は鬼瓦の左頬から歯の部分で、表面は型押し、裏面は本体から剥落しており、調整は不明である。642 は髭部分で、表面は型押し、裏面は鬼瓦本体から剥落したと思われる。643 は右上隅部分と思われ、全体に磨滅している。644 は下隅部分で、表面と側面はナデ調整。裏面は粘土継目から剥落している。645 は眉間部分で、表面は型押し、裏面はナデ調整。646 は鼻から口の部分で、井側内出土の 669 と接合する。表面は型押しで、裏面は欠損している。下部の半円形の刳り込み部分はヘラケズリである。断面観察から粘土継目が見られる。

647 ～ 675 は井側内出土遺物である。

647 ～ 651 は土師器である。647 の坏蓋は浅く、端部を丸く仕上げる。つまみが取れている。外面はケズリ・ナデ、内面はナデ調整である。648 の皿は内外面ともミガキ調整である。ミガキはヨコ方向であるが、やや粗い。650 の鉢は口縁内面がやや屈曲してのび、端部を丸く仕上げる。頸部付近の外面を強くナデ仕上げ。胴部は半円形で、底部は丸底である。外面を縦方向のハケ目、内面を縦方向のケズリで仕上げる。651 の甕は口縁内面がやや屈曲して外反しながらのび、端部を丸く玉縁状に仕上げる。胴部は直線的である。外面を縦方向のハケ目、内面を縦方向のケズリで仕上げる。652 は須恵器の大甕の口縁部である。口縁部外面に波状文を施す。内・外面ともナデ調整。653 はほぼ完形の丸瓦で、表面（凸面）はナデ調整、裏面（凹面）は糸切り痕と布目が残る。長さ 39.2cm、幅 16.5 cm、厚さは最大で 3.2cm である。654 から 666 は平瓦で、いずれも表面（凹面）に布目が残り、裏面（凸面）は縄目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。654・655・664 は表・裏面とも糸切り痕が残る。656・661・662・665 は表面にのみ糸切り痕が残る。667 は軒丸瓦で、

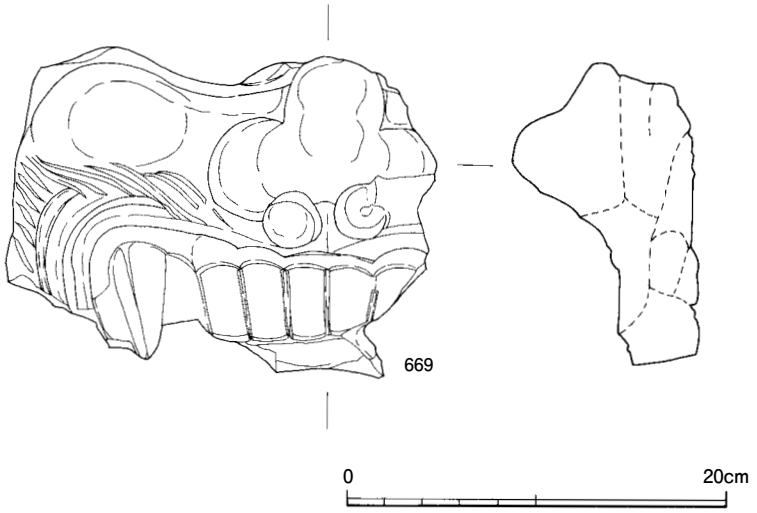


Fig.90　9 号井戸出土遺物実測図 16（1/4）

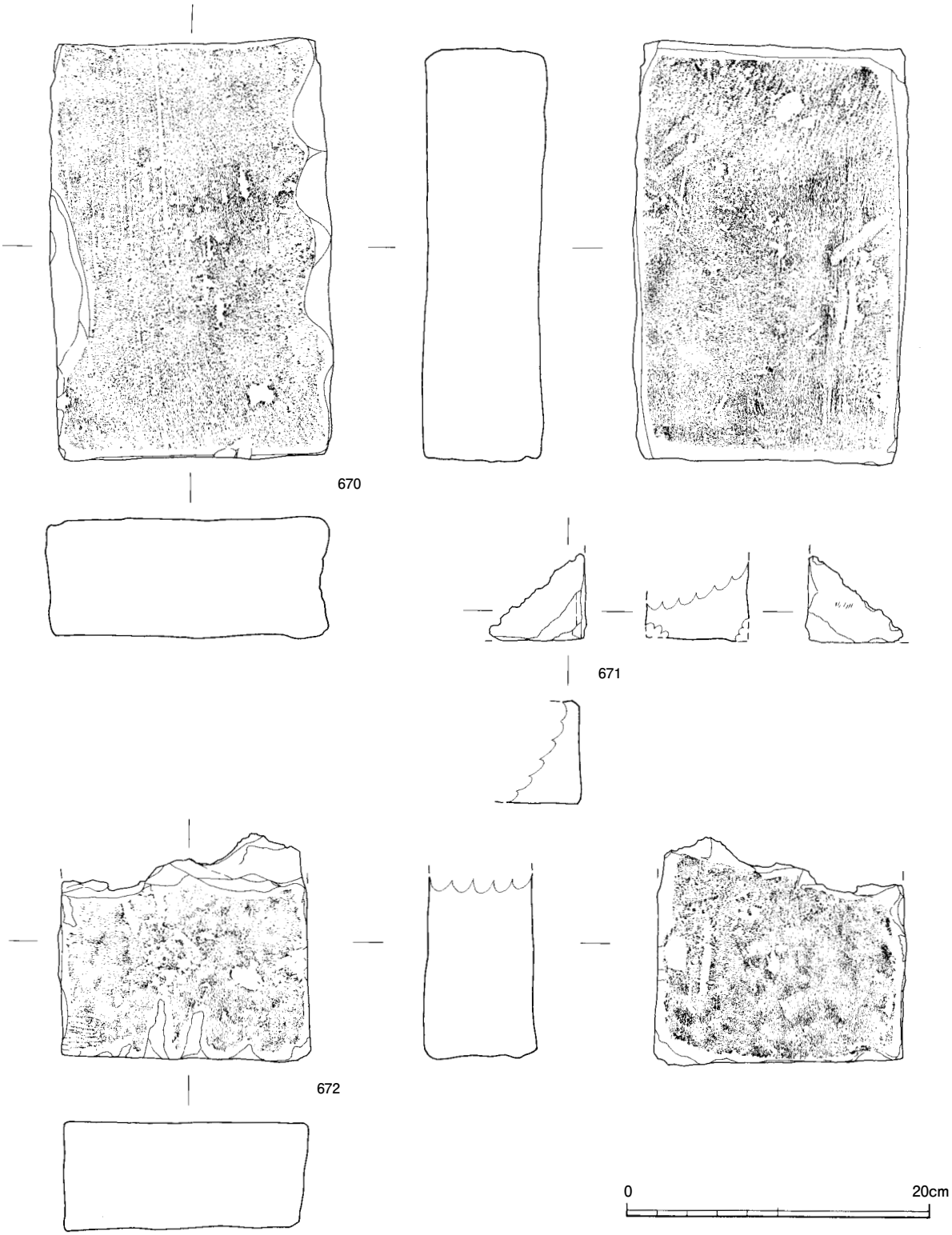


Fig.91　9 号井戸出土遺物実測図 17 (1/4)

周縁はやや広い直立縁で素文、外区に連珠文があり、花弁は複弁蓮華文が直線的な表現に変化しており、弁端は尖形である。中房は平形で圏線が付く。蓮子は小さい半球形で9個である。668は軒平瓦で、640と同様に表面（凹面）に布目圧痕がのこり、裏面（凸面）は縄目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。瓦当は、外区下帯は面違い鋸歯文が変化したと思われる文様で、内区は扁行唐草文が直線的に変化した文様である。669は鬼瓦の鼻から口の部分で646と接合する。670から675は無文塼である。いずれも板状工具によるナデ、ヘラで面取りする。サイズはおおよそ、完形のものは長さが27．8、幅が16～18cmほど、厚みが7～8cmほどである。表面のみが摩滅しており、塼として

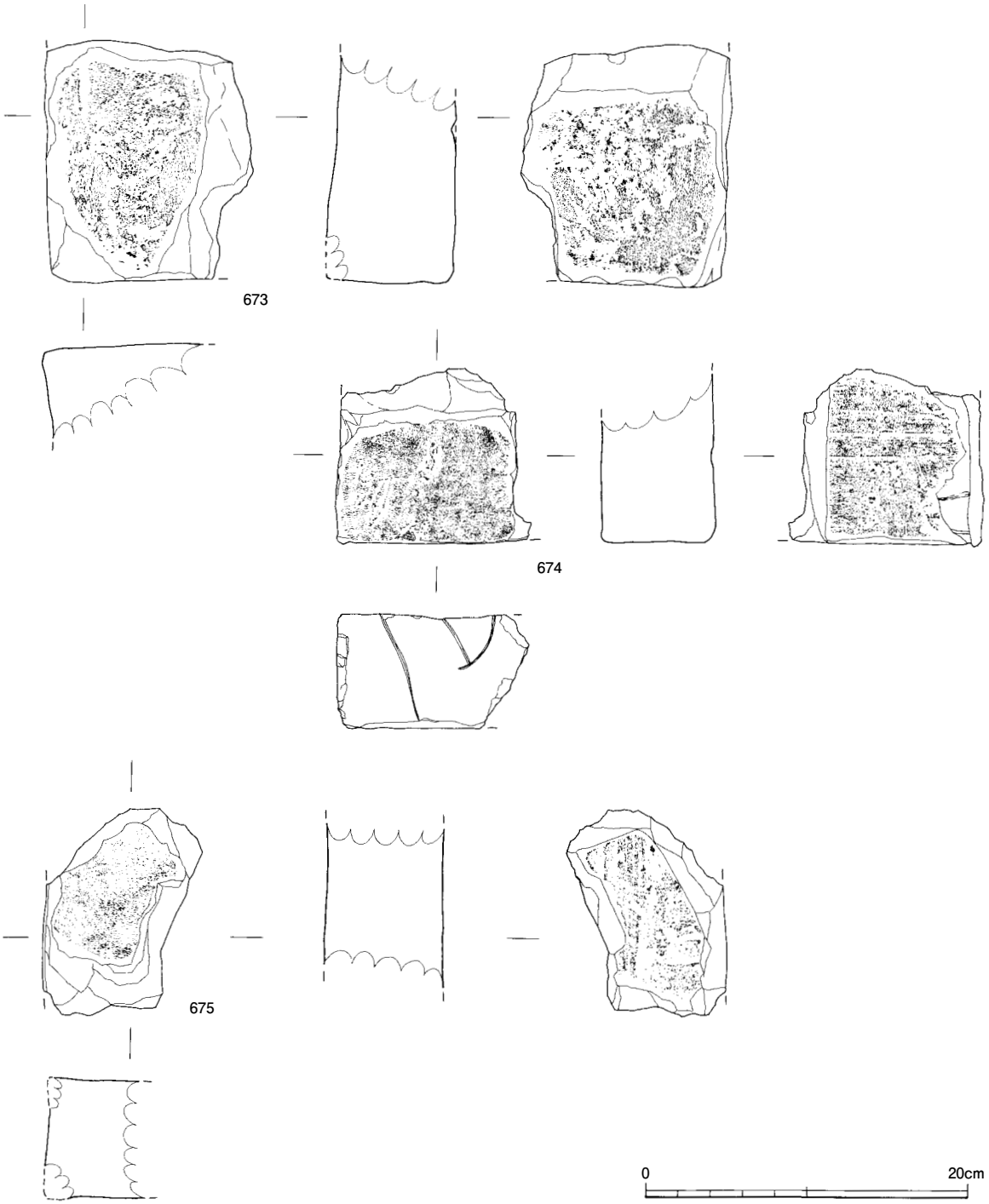


Fig.92　9号井戸出土遺物実測図18（1/4）

実際に使用された際のすり減りと考えられる。

676 ～ 677 は桶下層出土遺物で井側の中でも下層の桶部分から出土したものである。

676 は丸瓦で、表面（凸面）は縄目タタキ・ナデ調整、裏面（凹面）は布目が残る。側面はヘラで削り取って面取りする。677 は平瓦で表面（凹面）に布目が残り、裏面（凸面）は縄目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。

678 ～ 686 は東側裏込出土遺物である。井戸枠の東側裏込に使用されていた。

678・679 は丸瓦で、表面（凸面）はナデ調整、裏面（凹面）は布目が残る。側面はヘラで削り取って面取りする。680 から 684 は平瓦で、表面（凹面）に布目がのこり、裏面（凸面）は縄目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。683 は表面に糸切り痕が残る。厚みはいずれも 2 ～ 2.5cm である。685・686 は無文塼である。いずれもヘラ状の工具で面取りして仕上げているが、板状の工具ナデかもしれない。表面の欠損が激しい。

687 ～ 710 は桶裏込出土遺物である。井戸桶の裏込に使用されていた。そのため完形や大きな破片が多い。

687 ～ 695 は平瓦で、いずれも表面（凹面）に布目が残り、裏面（凸面）は縄目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。687・688・690・691・695 は表面に糸切り痕が残る。693・694 は表・裏面とも糸切り痕が残る。厚みは他の瓦が 2.2 ～ 2.9cm であるのに対し 688 は 4.5cm と厚い。696 から 710 は無文塼である。いずれも板状工具によるナデ、ヘラで面取りする。

完形の塼が 3 点出土しており、また幅や厚さが分かるものも多いが、いずれも長さが 26 ～ 30cm ほど、幅が 15 ～ 18cm ほど、厚みが 6.5 ～ 8cm ほどである。表面のみが摩滅しており、塼として実際に使用された際のすり減りと考えられる。

711 は上層出土の輝緑凝灰岩製石包丁である。約半分を欠損している。半月形外湾刃で両刃である。孔は双孔で、両側から穿孔している。孔径は 4mm ほどである。

712 は井側内出土の滑石製臼玉である。直径 3.7mm で、厚さ 1.4mm である。孔径は 1.2mm ほどである。丁寧に加工されている。

713 は神功開寶である。東側井戸枠 E-1 の南側隅に、枠板に載せたかたちで出土した。鋳出しが悪く、「開」の文字はつぶれている。神功開寶の初鋳は天平神護元（765）年である。

714 ～ 719 は井側内から出土したイスノキ製の挽歯式横櫛である。これらは破片も多く、同一個体か分からないものもあるが、形態から 3 個体はあったと考えられる。いずれも長方形を呈する。歯の数はいずれも 3cm あたり 36 本ほどである。歯との境目に計画線的に引いた溝がある。

720 は西側裏込部分から出土したスギの柾目板を用いた下駄である。鼻緒孔はやや偏っている。鼻

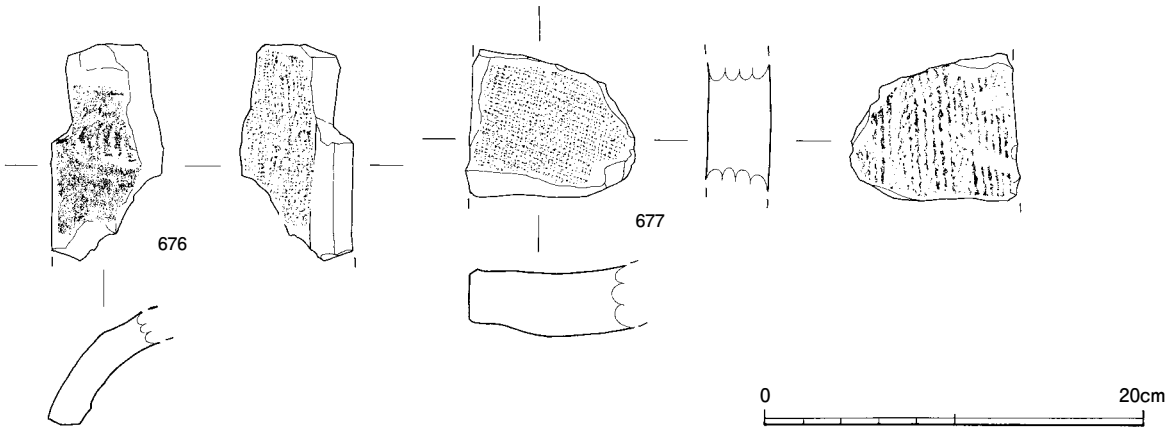


Fig.93　9 号井戸出土遺物実測図 19（1/4）

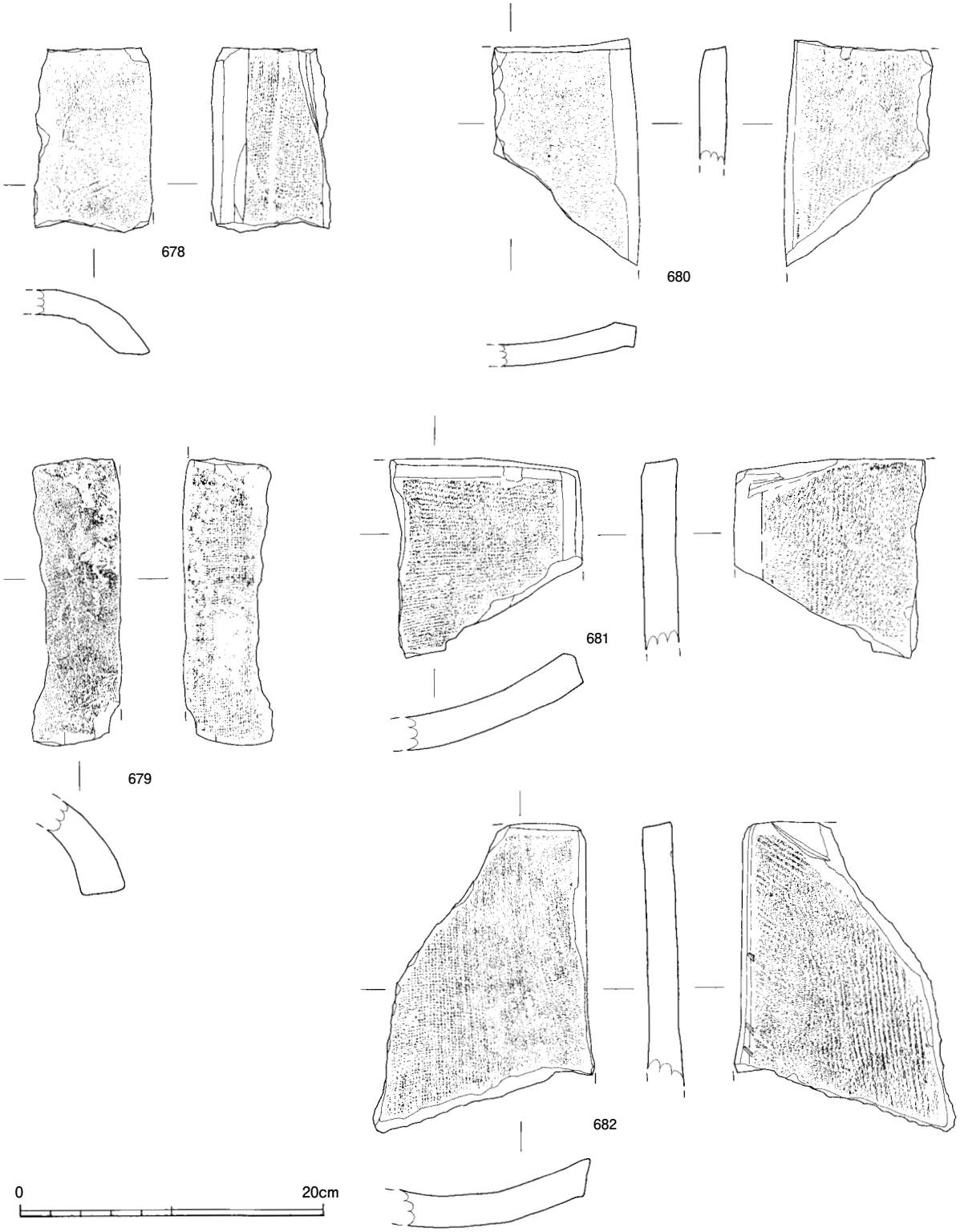


Fig.94　9 号井戸出土遺物実測図 20 (1/4)

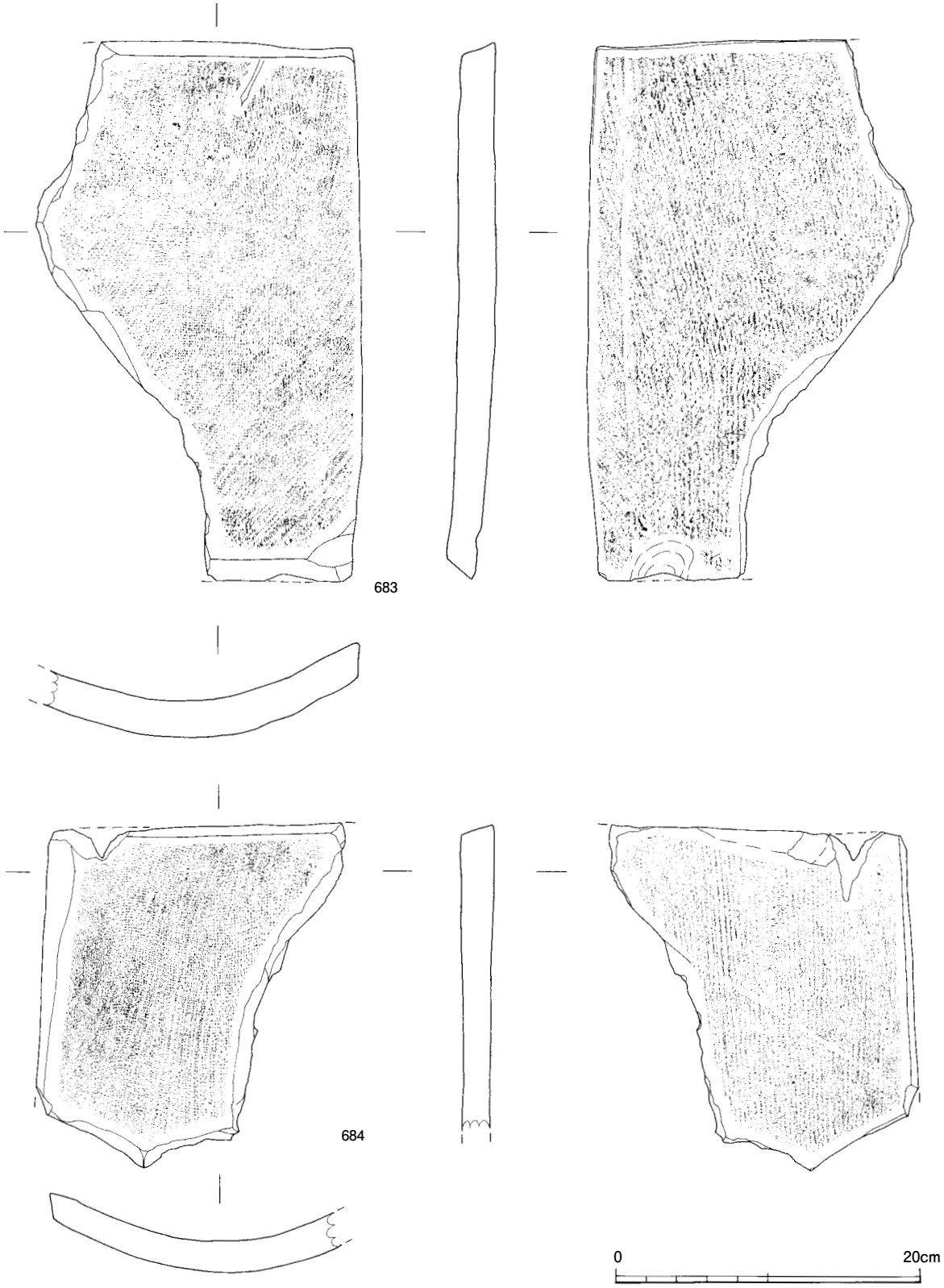


Fig.95　9 号井戸出土遺物実測図 21 (1/4)

緒孔と後緒孔の間に2カ所、左右から抉ったようなキズがあり、歯の痕跡であるかもしれない。

721は掘方部分から出土した机の脚である。蟻じゃくりの溝にさしこむタイプと考えられる。接地面側がかなり厚い。

722は井側内から出土した曲物の桶である。針葉樹を用いており、タガ付きの釘結合曲物で、樹皮紐で綴じており、綴じ方は1列内5段綴じである。底板に4カ所目釘を打ち込んでいる。

723は西側裏込部分から出土した曲物の桶の底板である。針葉樹の柾目板を用いた円形の曲物の底板で、桜の樹皮紐で綴じていた。（谷　直子）

133号井戸　SE－133（Fig. 107　PL. 30）

133号井戸は、調査区北東部の段丘端に位置する素掘りの井戸で、すぐ西には134号井戸が並置している。また、井戸の東には、旧河川（SD－137）の護岸に沿った埋土上を136号溝が北流している。平面形は、短辺が120cm、長辺が147cmの楕円形プランを呈する。壁面は、一旦緩やかな傾斜をもって掘り込み、その後に検出面より-25～30cmのところで大きく屈曲して井戸底へむかって直線的に窄まる。井戸底は、浅い凹レンズ状をなし、標高は8.13mである。検出面よりの深さは137cmであるが、検出面が水田の開削によって1m余り削平されていることを勘案すると少なくとも250cmは掘り込まれていたものと考えられる。湧水点は、屈曲部より15cmほど下の標高9m付近に鳥栖ローム層と八女粘土層の境があり、ここから水が湧き出していた。遺物は少ないが、井戸底より30cmほど上層から土師器坏や甕、曲物の側板が出土した。

出土遺物（Fig. 107）

724～726は、土師器坏である。724は、口径が13cm、底径が7.5cm、器高は3.4cm。体部は、ストレートに外反し、丸く納めた端部は小さく外方に摘み出す。体部はヨコナデ、内底面は指頭押圧ナデ、外底面はヘラ切り。胎土は良質で、少量の小砂粒と多量の雲母を含む。色調はにぶい橙褐色。725・726の体部が内彎ぎみに立ち上がり、口縁端部を小さく摘み出す坏である。725は口径が12.4cm、底径が6.2cm、器高は3cmである。胎土は少量の微細～小砂粒のほかシャモット様の赤褐色粒を含む。調整は、体部がヨコナデ、内底はナデ、外底はヘラ切り～ナデ。726は口径が12.8cm、底径が7.5cm、器高は3cm。体部はヨコナデ、内底はナデ、外底はヘラ切り後

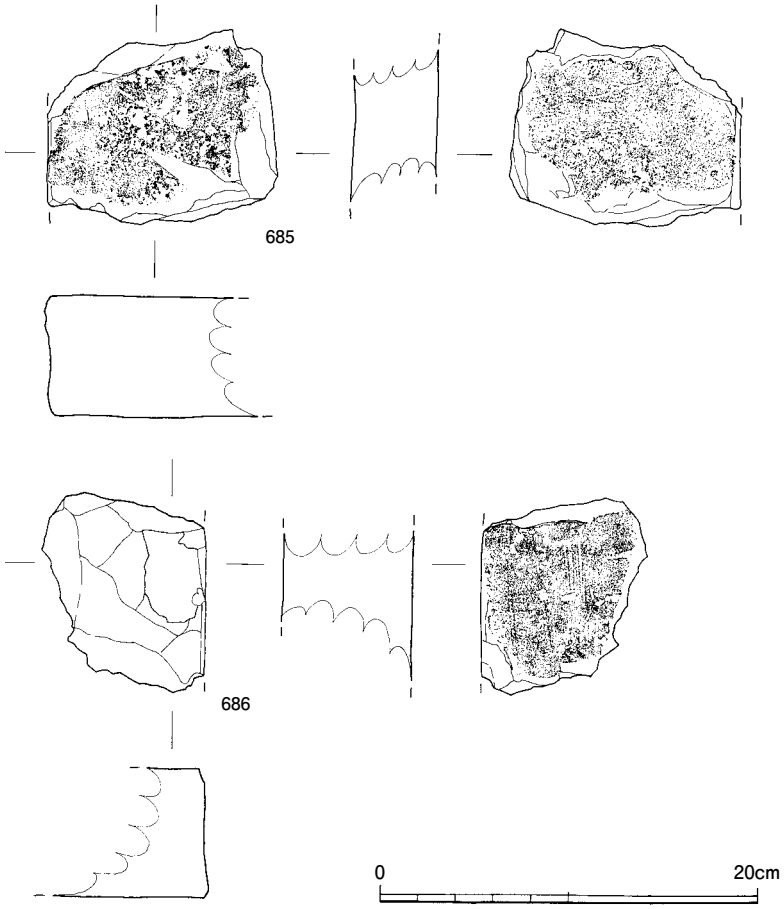


Fig.96　9号井戸出土遺物実測図22（1/4）

にナデ調整。胎土には細～小砂粒と雲母微細のほかシャモット様の赤褐色粒を含む。色調は橙色。

727 は、口径が 27cm の土師器甕である。口縁部は大きく「く」字状に外反する。調整は、口縁部がヨコナデで内面には細かいハケ目状のナデ痕が残る。胎土はやや粗く小～粗砂粒と雲母を含む。色調は橙褐色。

134 号井戸　SE－134（Fig. 107　PL. 30）

134 号井戸は、調査区北東部の水田化によって開削された段丘端に 133 号井戸と並んで位置する素掘りの井戸である。平面形は、130 ～ 140cm の不整な楕円形プランを呈し、井戸底までの深さは 140cm である。壁面は、緩やかに傾斜して掘り込んだ後に緩やかに屈曲して井戸底にむかって直線的に窄まっている。井戸底の標高は 8.16m で、東に並んで掘り込まれている 133 号井戸と差がなく、湧水点も同じである。遺物は土師器小片がわずかに出土した。

出土遺物

（Fig. 107）

728 は、器高 15.4cm の支脚である。器底面は、11.4cm 角の安定した方形で、器受は大きく角状に外反し、器受け面には 2 次被熱による赤変がある。胎土は良質で、少量の小砂粒を含み、焼成は良好。調整押圧ナデ。色調は橙色。729 は、移動式竈の庇～焚き口部の鍔である。鍔は、3.5cm ほどが前面に張り出している。調整は手捏状の横圧ナデ。胎土には良質で、少量の小砂粒と赤褐色粒を含む。色調は橙色。

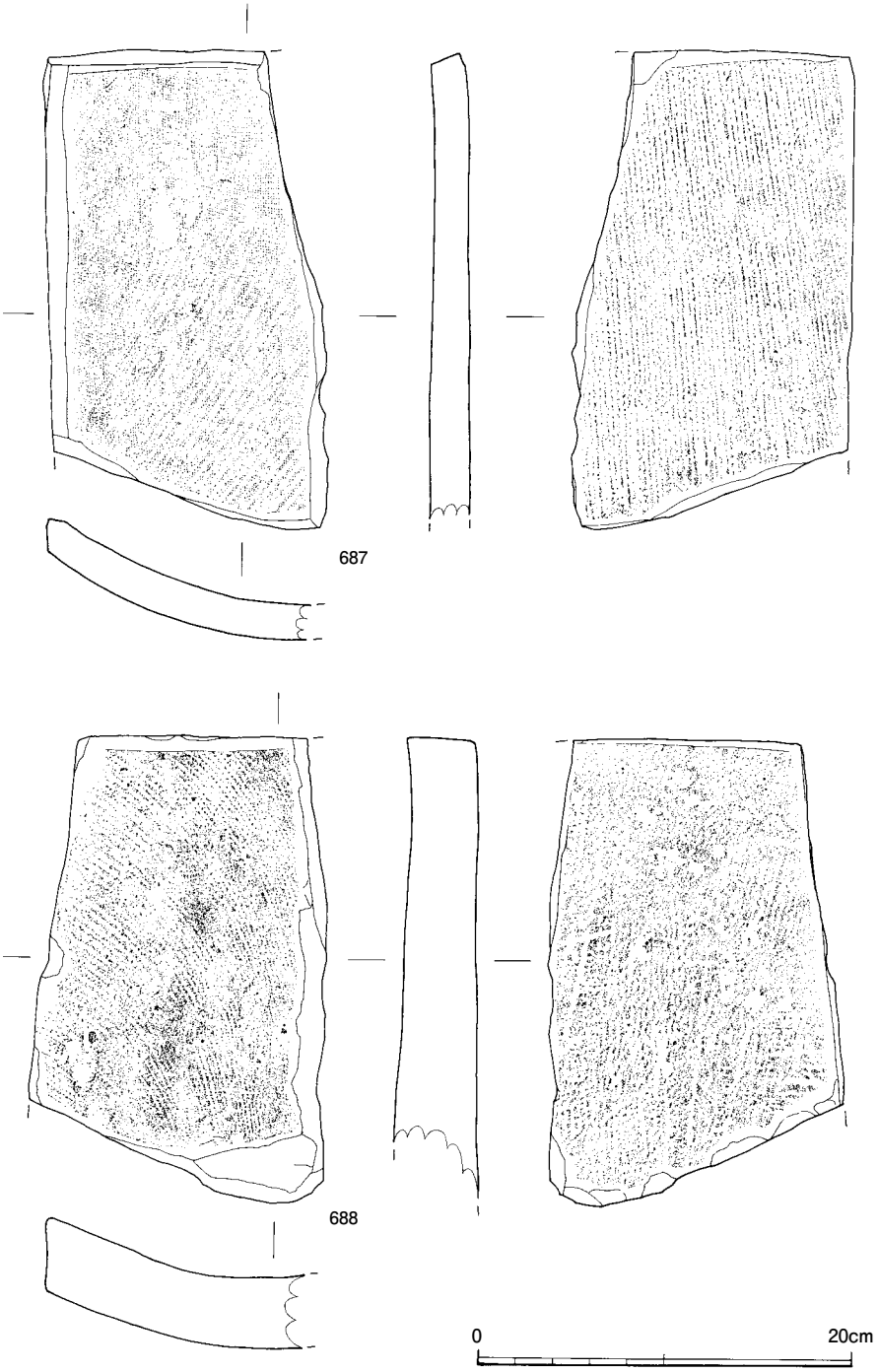


Fig.97　9 号井戸出土遺物実測図 23（1/4）

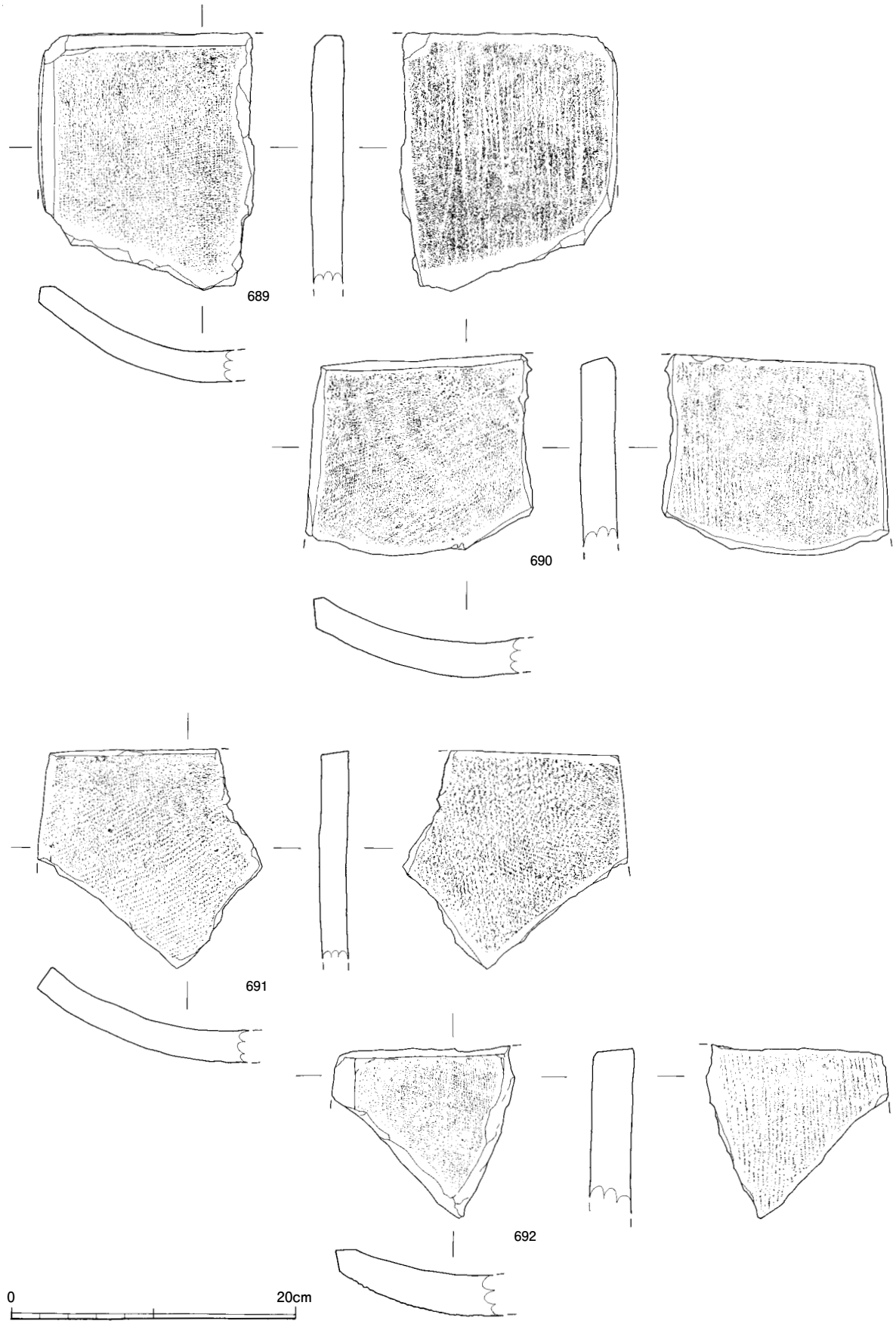


Fig.98.　9 号井戸出土遺物実測図 24 (1/4)

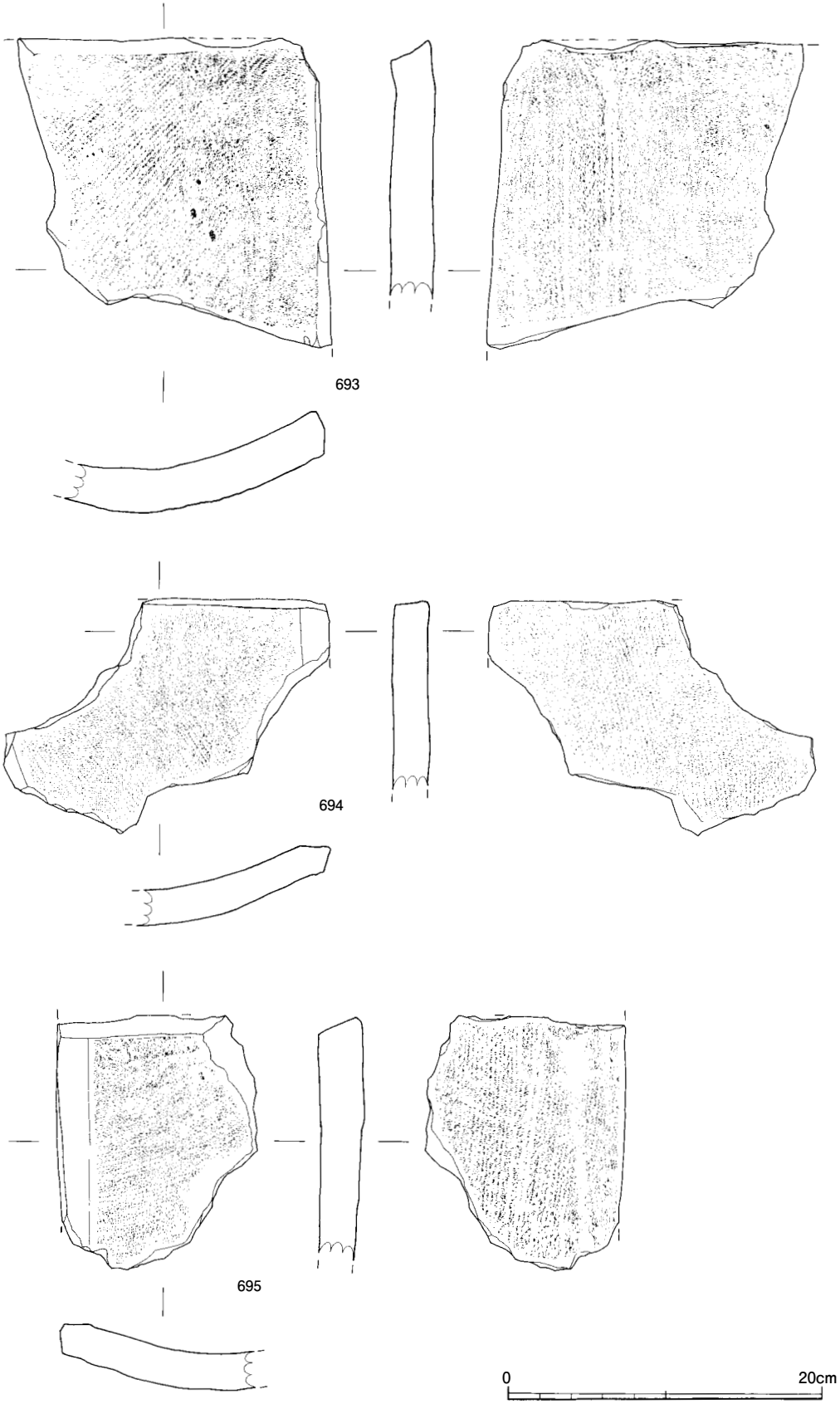


Fig.99　9 号井戸出土遺物実測図 25 (1/4)

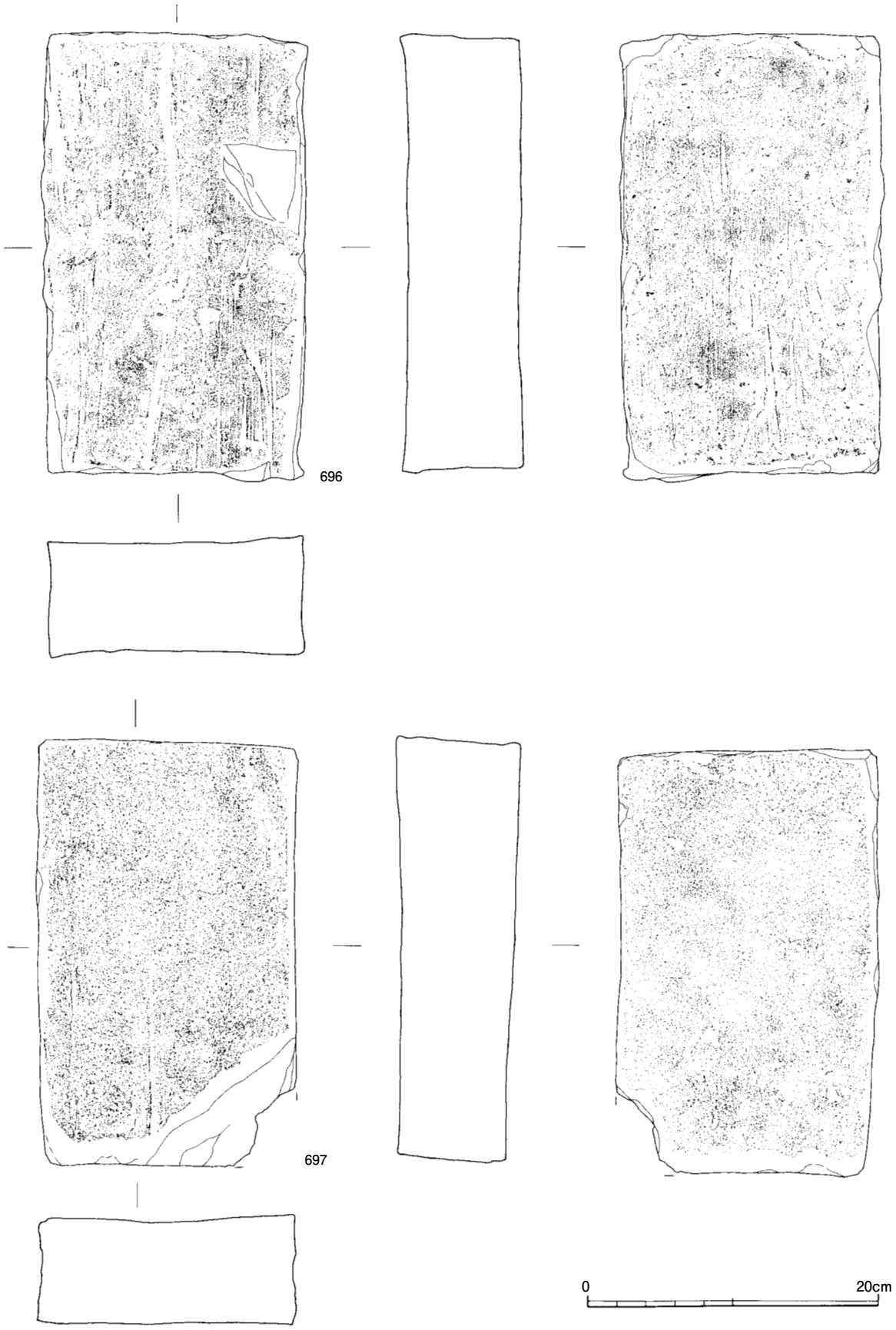


Fig.100　9 号井戸出土遺物実測図 26 (1/4)

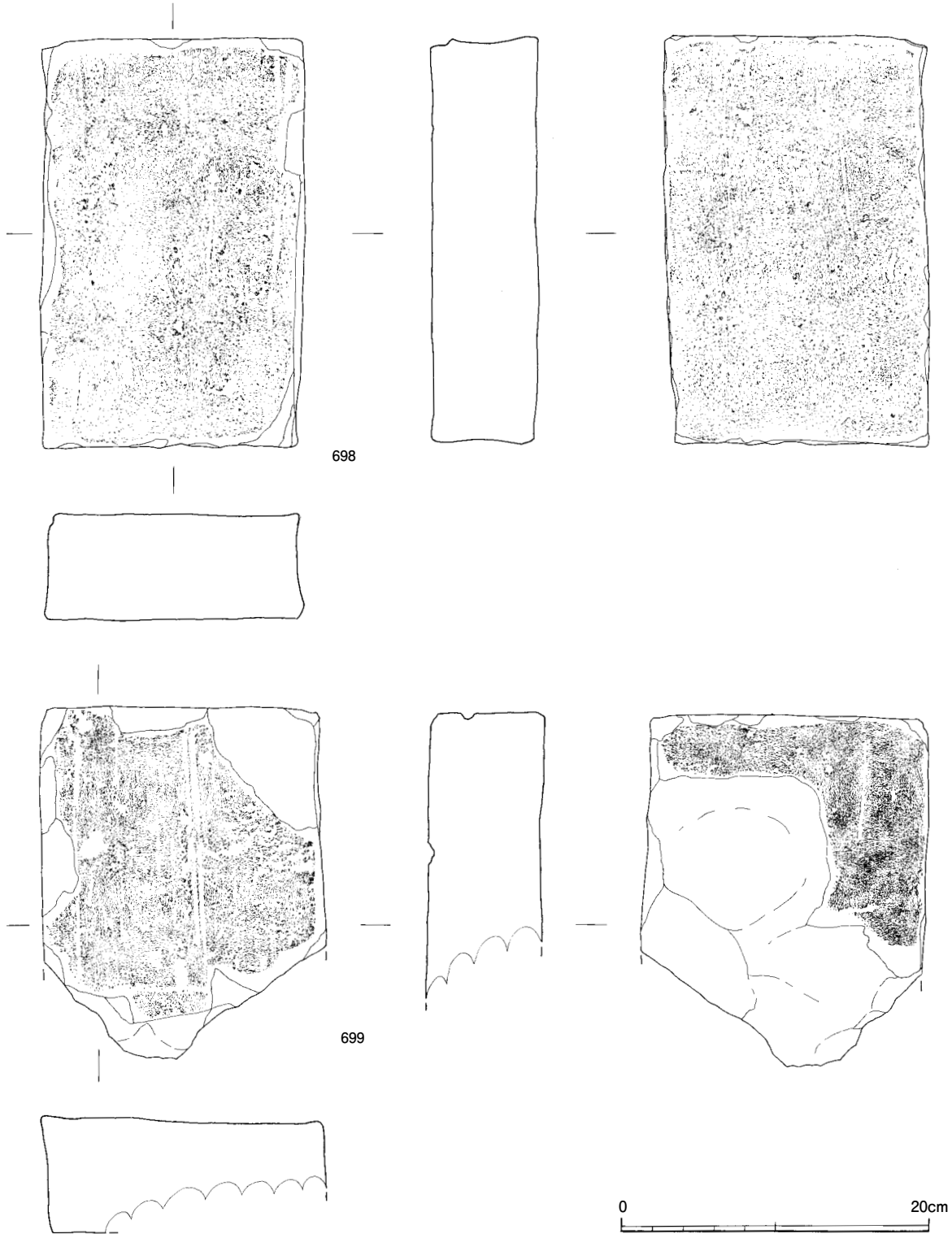


Fig.101　9 号井戸出土遺物実測図 27 (1/4)

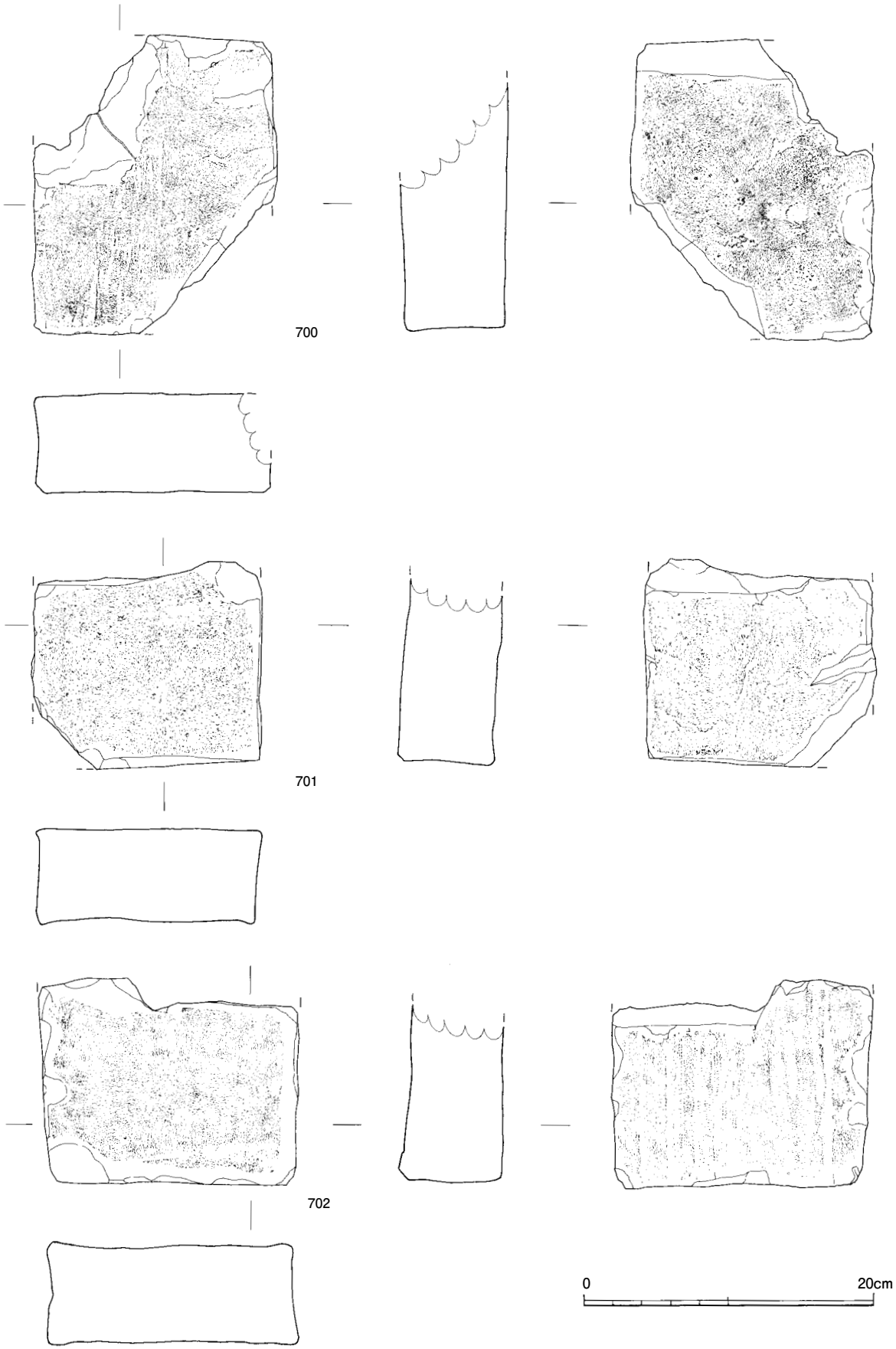


Fig.102　9 号井戸出土遺物実測図 28 (1/4)

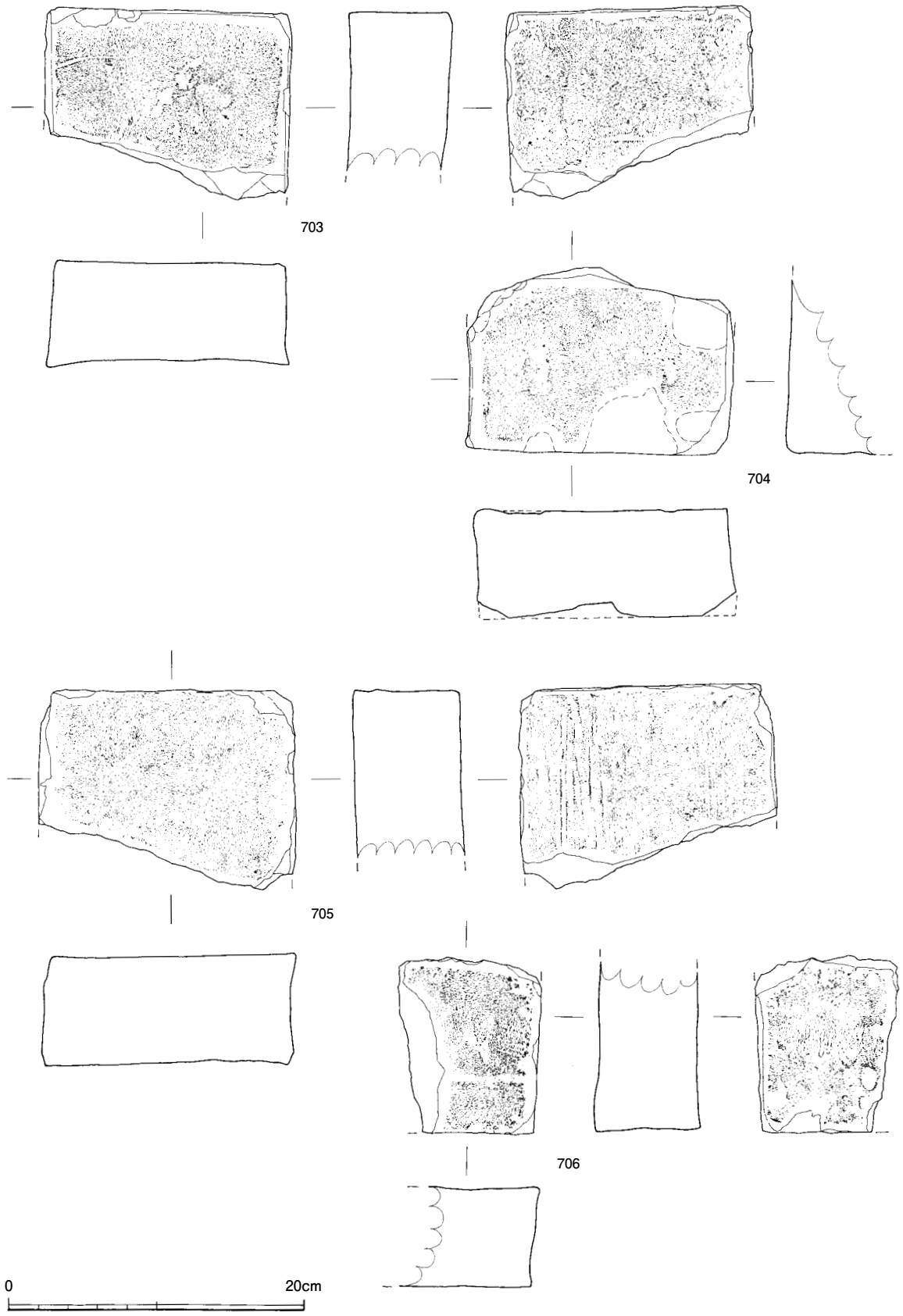


Fig.103　9 号井戸出土遺物実測図 29 (1/4)

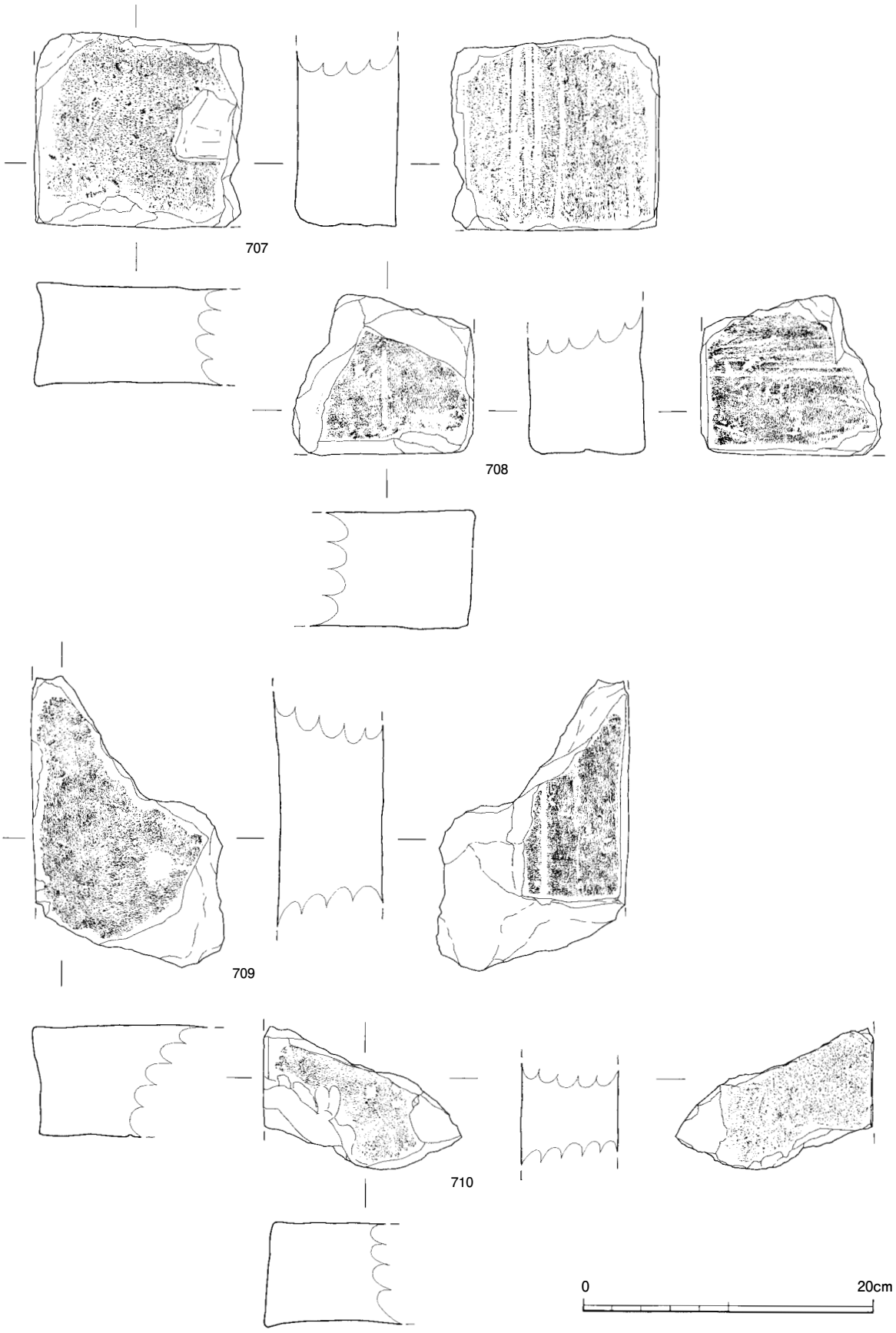


Fig.104　9 号井戸出土遺物実測図 30 (1/4)

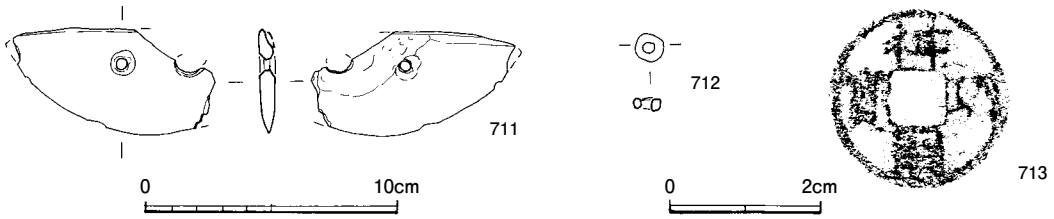


Fig.105　9 号井戸出土遺物実測図 31 (1/1・1/3)

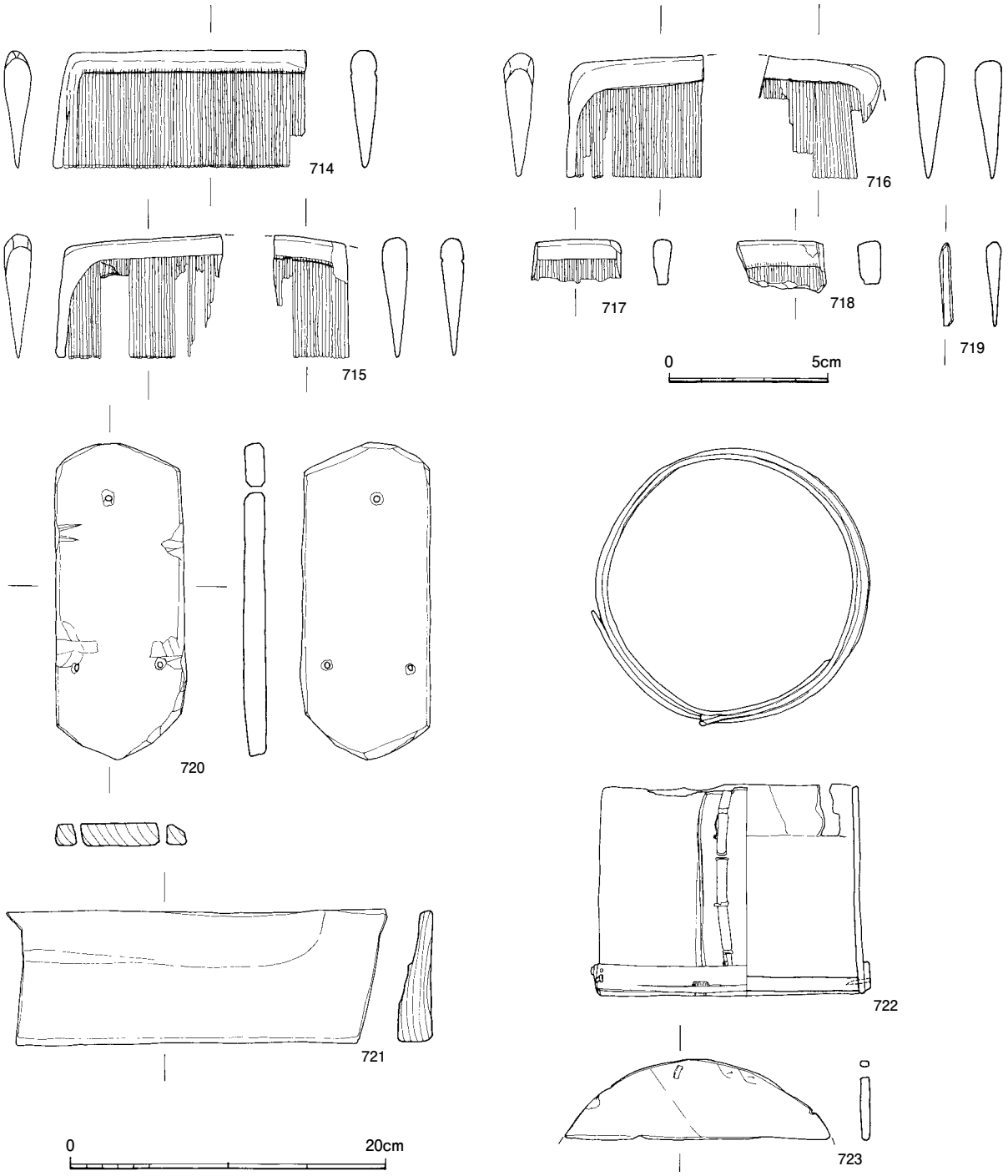
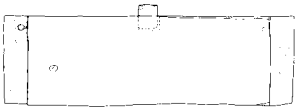
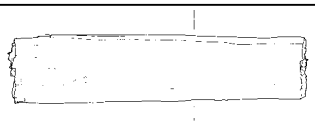
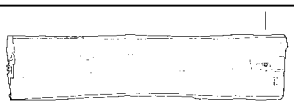
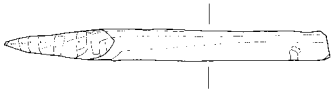
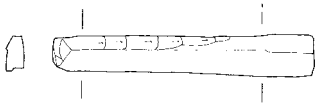
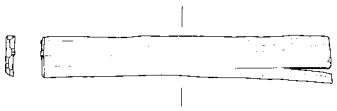
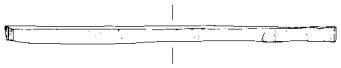


Fig.106　9 号井戸出土遺物実測図 32 (1/2・1/4)

Tab.56　出土遺物（木製品）一覧表 55

西側井戸枠

No	形状	材　質	木取り	法量（cm）	備　　考
W－1 604		広葉樹	板目	19 154+ α 4.1	板材を利用 欠損や磨滅が激しい
W－2 605		クヌギ	板目	20.8 121 5.3	厚みから建築材（床材） 転用の可能性有 井戸枠用組合せ加工有 工具痕有
W－3 606		クヌギ	板目	23.8 112.6 5.2	直径 30 ～ 40cm 位の木を割り板に加工 井戸枠用組合せ加工有 工具痕有
W－4 607		広葉樹	板目	23.8 114.5+ α 7	井戸枠用組合せ加工有 加工痕が明瞭に残る
W－5 608		スギ	板目	29.3 74.7 6.3	床材の良い物を再利用 井戸枠用組合せ加工有 w-6 と組み合う
W－6 609		スギ	板目	25 81.4 7.5	丁寧に加工 w-5 と組み合う、突部は別材 井戸枠用組合せ加工有 片面のみ加工痕が明瞭
W－7 610		針葉樹	柾目	15 48.8 2.1	全体に加工が粗い 板材を切断している
W－8 611		広葉樹？	板目	18 79.2+ α 2.4	屋根材の転用？ 両端を切断している
W－9 612		針葉樹	板目	16 70.0+ α 1.9	屋根材の転用 穿孔部に金具の圧痕有
W－10 613		針葉樹	板目	17.7 61.2+ α 3	屋根材の転用？ 両端を切断している
W－11 614		針葉樹	板目	6.4 66.8 3.4	杭状の加工有 転用材
W－12 615		針葉樹	板目	7.7 49 3.5	一方の端部を粗く加工する 不定形の棒状材
W－13 616		針葉樹	板目	10 62 1.7	屋根材の転用？ 両端を切断している
W－14 617		針葉樹	板目	4.3 82.7 2.9	一方の端部を斜めに切断している 転用材

Tab.57　出土遺物（木製品）一覧表 56

西側井戸枠

No	形状	材　質	木取り	法量(cm)	備　　考
W－15 618		スギ	ナナメ	16 62.2 1.8	曲物の底板を再加工している 樹皮紐が残る

東側井戸枠

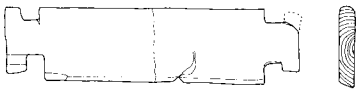
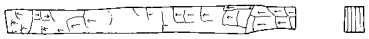
No	形状	材　質	木取り	法量(cm)	備　　考
E－ 1		広葉樹	板目	23.0 ＋ α 122.0 ＋ α 6.0	井戸枠用組合せ加工有 磨滅の為加工痕不明瞭
E－2		広葉樹	板目	22.0 115.0 4.0	井戸枠用組合せ加工有 表面は丁寧な加工
E－3		ツブラジイ	板目	26.0 112.0 5.0	井戸枠用組合せ加工有 磨滅の為加工痕不明瞭
E－4		ツブラジイ	ナナメ	13.0 ＋ α 113.5 ＋ α 4.2	井戸枠用組合せ加工有 端部の斜めの所は粗い加工
E－5		針葉樹	ナナメ	14.5 37.3 3.5	転用材 加工痕やヤリガンナの痕跡が明瞭
E－6		針葉樹	板目	5.5 80.0 3.5	（箱物か）屋根材の転用 ヤリガンナの痕跡が明瞭
E－7		針葉樹	柾目	6.5 82.0 7.2	（箱物か）屋根材の転用 ヤリガンナの痕跡が明瞭
E－8		針葉樹	板目	28.7 74.0 6.5	E － 9 と組み合う 井戸枠用組合せ加工有 片面のみ加工痕明瞭
E－9		針葉樹	板目	25.0+4.0 81.0 6.7	E － 8 と組み合う 井戸枠用組合せ加工有 片面のみ加工痕明瞭 . 突部は別材

南側井戸枠

No	形状	材　質	木取り	法量(cm)	備　　考
S－ 1		針葉樹	ナナメ	15.0+ α 53.0+ α 4.3+ α	ほとんど加工してない 片側面のみ加工有

Tab.58　出土遺物（木製品）一覧表 57

南側井戸枠

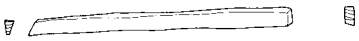
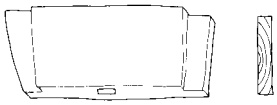
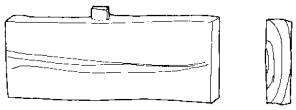
No	形状	材　質	木取り	法量(cm)	備　　考
S－2		広葉樹？	板目	20.0+ α 122.0 4.0	井戸枠用組合せ加工有 端部に加工痕がみられる
S－3		広葉樹？	柾目	26.5 101.5+ α 4.5	井戸枠用組合せ加工有 丁寧な加工
S－4		広葉樹	板目	29.5 111.5 5.7	井戸枠用組合せ加工有 丁寧な加工
S－5		針葉樹	板目	30.0 80.0 6.5	井戸枠用組合せ加工有 S － 12 と組み合うように加工された 片面のみ加工痕が明瞭
S－6		針葉樹	板目	12.0+ α 80.0+ α 3.0	加工痕は不明瞭
S－7		針葉樹	板目	14.0 82.0+ α 2.0	屋根板転用？磨耗が激しい
S－8		針葉樹	柾目	12.0 62.0 + α 2.8	端部に面取り時の加工痕が残る
S－9		針葉樹	板目	13.8 50.2+ α 3.0	端部ナタ状の工具による加工痕が残る
S－10		針葉樹	板目	9.5+ α 68.0+ α 1.8	屋根板転用？ ホゾ孔有 孔のサイズ（1.0 × 1.3cm）
S－11		針葉樹	板目	7.5 87.5 6.0	加工痕がよく残る角材
S－12		針葉樹	板目	24.3+4.5 74.0 6.7	井戸枠用組合せ加工あり S － 5 と組み合う . 突部は別材

北側井戸枠

No	形状	材　質	木取り	法量(cm)	備　　考
N－1		広葉樹？	板目	20.0+ α 102+ α 5.0+ α	井戸枠用組合せ加工有 丁寧な加工
N－2		広葉樹？	板目	24.0 106+ α 5.0	井戸枠用組合せ加工有 丁寧な加工

Tab.59　出土遺物（木製品）一覧表 58

北側井戸枠

No	形状	材　質	木取り	法量（cm）	備　　考
N－3		広葉樹？	板目？	31.0 108+ α 6.5	井戸枠用組合せ加工有 加工痕明瞭
N－4		針葉樹	柾目	7.5 89+ α 4.0	加工痕のある角材
N－5		針葉樹	板目	8.1+ α 82.5+ α 1.5	加工痕のある板材
N－6		針葉樹	柾目	3.1 82.5 1.6	屋根材の転用か？ 加工痕のある角材
N－7		針葉樹	板目	30.1 81 5.5	N － 8 と組み合う 井戸枠用組合せ加工有
N－8		針葉樹	板目	24.7+4 74 7.0	N － 7 と組み合う 井戸枠用組合せ加工有 突部は別材
N－9		針葉樹	板目	21.2 71.5 2.5	加工痕のある板材

Tab.60　出土遺物（木製品）一覧表 59

西側裏込め板

No	木取り	法量			材　質	備　　考
		ヨコ（cm）	タテ（cm）	厚さ（cm）		
620	柾目	22	54+ α	1.2	針葉樹	曲物を利用
621	板目	14.0	79.5+ α	1.2	針葉樹	端部を加工
622	板目	21.0	97+ α	2.0	広葉樹？	屋根材転用 . 穿孔刳り込み有
623	板目	16.0	97+ α	0.7	針葉樹？	加工した板材
624	板目	12.8	69.8+ α	1.7	針葉樹	丁寧な加工のある板材
625	板目	15.0+ α	48+ α	2.0	針葉樹？	磨滅が激しい
626	板目	15.0	74.5+ α	1.3	広葉樹？	磨滅が激しい
627	板目	7.8+ α	68+ α	2.0+ α	広葉樹？	磨滅が激しい

東側裏込め板

No	木取り	法量			材　質	備　　考
		ヨコ（cm）	タテ（cm）	厚さ（cm）		
No.　1	板目？	20.5+ α	44+ α	0.8	針葉樹	磨滅が激しい
No.　2	板目	29.5	44+ α	3.0	針葉樹	磨滅が激しい
No.　3	芯持材	7.0+ α	43+ α	6.0	針葉樹	自然木
No.　4	板目	12.5	82.2+ α	1.6	針葉樹？	屋根材の転用か
No.　5	板目	13.8	96+ α	1.8	針葉樹	屋根材の転用か
No.　6	板目	13.5	75+ α	0.5 ～ 0.7	針葉樹？	屋根材の転用 . 穿孔有
No.　7	柾目	16.8	81+ α	0.8	スギ	屋根材の転用 . 穿孔有
No.　8	板目	8.8	86+ α	1.3	針葉樹	屋根材の転用か
No.　9	板目	8.5+ α	87+ α	1.0	スギ	磨滅が激しい . 加工のある板材
No.　10	柾目	18.2	97.5+ α	4.0	針葉樹	加工痕明瞭
No.　11	板目	17.2	56.7+ α	0.7	針葉樹？	屋根材の転用 . 穿孔有
No.　12	板目	9.8	55.3+ α	1.1	針葉樹	屋根材の転用か
No.　13	板目	8.5+ α	71+ α	2.5+ α	針葉樹	屋根材の転用 . 穿孔有
No.　14	板目	18+ α	55+ α	2.3	広葉樹？	加工のある板材
No.　15	板目	13.0+ α	49+ α	4.0	広葉樹？	磨滅が激しい
No.　16	板目	3.0+ α	16.5+ α	2.0+ α	針葉樹	角材片
No.　17	板目	44.0	57.0	2.7	スギ	転用材 . 加工痕の明瞭な板材
No.　18	板目	43.0	58.0	3.0	針葉樹	転用材 . 加工痕の明瞭な板材
No.　19	板目	15.0	57+ α	2.0	針葉樹？	加工痕のある板材

南側裏込め板

No	木取り	法量			材　質	備　　考
		ヨコ（cm）	タテ（cm）	厚さ（cm）		
No.　1	板目	10	44+ α	1	針葉樹	加工痕のある板材 . 屋根材の転用か
No.　2	板目	10+ α	56+ α	1	針葉樹	加工痕のある板材 . 屋根材の転用か
No.　2	柾目	3+ α	47+ α	1	針葉樹	加工痕のある板材 . 屋根材の転用か
No.　3	板目	6+ α	57.5+ α	2	針葉樹	加工のある板材
No.　4	板目	7.0+ α	60+ α	1	広葉樹	加工のある板材
No.　5	板目（ナナメ）	7.5	78.7+ α	2	広葉樹	加工のある板材
No.　7	板目	12.8	104.8+ α	1.5	針葉樹	屋根材の転用か . 穿孔有
No.　8	板目	10.5	35.5+ α	0.8	針葉樹	屋根材の転用か
No.　9	板目（ナナメ）	8.7+ α	43.3+ α	1.2	針葉樹	屋根材の転用 . 穿孔有
No.　10	板目	13.0+ α	42.0+ α	1.5	広葉樹	加工のある板材
No.　11	板目	5.0+ α	26.0+ α	1.5+ α	針葉樹	加工のある板材
No.　12	板目	6.0+ α	36.0+ α	0.5	針葉樹	加工のある板材
No.　13	板目	6.7+ α	31.0+ α	0.7	針葉樹	加工のある板材
No.　14	板目	18.5	38.0+ α	2	針葉樹	屋根材の転用か . 穿孔有
No.　15	板目	4.5+ α	31.0+ α	1.0+ α	針葉樹	磨滅が激しい
No.　16	柾目	16.6	106.6+ α	1.7	針葉樹	加工のある板材
No.　17	板目	5.5+ α	17.0+ α	0.7+ α	針葉樹	磨滅が激しい
No.　18	板目	6.0+ α	22.0+ α	0.7+ α	針葉樹	磨滅が激しい
No.　19	板目	11.7	99.5+ α	3.6	広葉樹	加工のある板材

Tab.61　出土遺物（木製品）一覧表 60

No	木取り	法量			材　質	備　　考
		ヨコ（cm）	タテ（cm）	厚さ（cm）		
No.　20	板目	7.3	70.5+ α	2.2	針葉樹	加工のある板材
No.　21	板目	19.9	101.4+ α	1.5	針葉樹	加工のある屋根材？
No.　22	板目	17.8	80.4+ α	1.5	針葉樹	加工のある屋根材？
No.　23	板目	16.0+ α	93.0+ α	1.5	針葉樹	屋根材の転用 . 穿孔有
No.　24	板目	15	96.8+ α		針葉樹	屋根材？
No.　25	板目	13.5	94.5+ α	2.5	広葉樹	屋根材？
No.　26	板目	14	97+ α	0.8	針葉樹	屋根材？
No.　27	板目	18	102+ α	2.2	針葉樹	屋根材？
No.　28	板目	23.2	93.5+ α	2.2	広葉樹	屋根材？
No.　29	板目	13.2	48.8+ α	3.1	針葉樹	加工のある板材
No.　30	板目	9.0+ α	49.0+ α		広葉樹	加工のある板材
No.　31	板目	7.8+ α	49.0+ α	1.8 ～ 2.0	広葉樹	加工のある板材
No.　32	板目	15	48.5+ α	1.5	広葉樹	加工のある板材
No.　33	板目	13.4	56.8+ α	2.7	針葉樹	丁寧な加工のある板材
No.　35	板目	6.5+ α	34.5+ α	1.8	広葉樹	磨滅している
No.　37	柾目	14.5	47+ α	1.7	針葉樹	加工のある板材
No.　38	板目	12.0+ α	62+ α	2.2	針葉樹？	磨滅している
No.　39	柾目	14.6	55.3+ α	2.1	針葉樹	加工のある板材
No.　40	板目	13.6	47.5+ α	1.6	広葉樹	加工のある板材
No.　41	板目	7.0+ α	35+ α	1.3	針葉樹	加工のある板材
No.　42	柾目	15	50+ α	1.7	針葉樹	加工のある板材
No.　43	板目	18.7	44+ α	1.6	針葉樹？	加工のある板材
No.　45	板目	11.5	74.8	3.2	広葉樹	加工のある板材
No.　46	板目	19	58.3+ α	2.3	針葉樹？	加工のある板材
No.　47	板目（ナナメ）	12	53.2+ α	1.7	針葉樹	屋根材の転用 . 穿孔有
No.　48	柾目	35	35	2.3	針葉樹	加工のある板材
No.　49	柾目	16	63.5+ α	1.5	針葉樹	加工のある板材

北側裏込め板

No	木取り	法量			材　質	備　　考
		ヨコ（cm）	タテ（cm）	厚さ（cm）		
No.　1	柾目	14.0+ α	13.0+ α	1.8	針葉樹	磨滅が激しい
No.　2	柾目	13.0+ α	34.0+ α	2.8+ α	針葉樹	磨滅が激しい
No.　3	板目	5.7	29.5+ α	1.3	針葉樹？	屋根材の転用 . 穿孔有
No.　4	板目	18.7	68.8+ α		針葉樹	屋根材の転用 . 穿孔有
No.　5	板目	18	72.0+ α	1.5	針葉樹	屋根材の転用 . 穿孔有
No.　7	板目	14.5	77.4+ α	1.2	針葉樹？	加工のある板材
No.　8	板目	12.8	76+ α	1.7	針葉樹？	加工のある板材
No.　9	柾目	16.6	82.6+ α	1.3	針葉樹	屋根材の転用 . 穿孔有

Tab.62　出土遺物一覧表 61

Fig	番号	出土位置	器種		長・器高 幅・口径 厚・底径	胎土	焼成	色調	調整（表・外面）	調整（裏・内面）	調整側面
Fig－79	628	SE－09 上層	土師器	甕	2.3+ α	やや緻密・小～粗の砂粒を含む	良好	淡橙	ナデ	ナデ	
Fig－79	629	SE－09 上層	土師器	甕	3.1+ α	緻密・小砂粒を含む。赤褐色粒を含む	良好	橙	ナデ	ナデ	
Fig－79	630	SE－09 上層	土師器	甕	3.8+ α	緻密・中砂粒を含む。雲母片を含む	良好	橙	ナデ	ケズリ・ナデ	
Fig－79	631	SE－09 上層	須恵器	甕	4.8+ α	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	灰	ナデ・波状文あり	ナデ	
Fig－79	632	SE－09 上層	土師器	皿	1.8+ α 17.8	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	橙	ナデ	ナデ	
Fig－79	633	SE－09 上層	塼	無文	4.6+ α 6.4+ α 6.8	緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰	板ナデ	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－80	634	SE－09 上層	丸瓦		13.8+ α 9.8+ α 3.0	緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰～黒灰	ナデ	布目	
Fig－80	635	SE－09 上層	丸瓦		8.6+ α 9.2+ α 1.8	緻密・小砂粒を含む	良好	橙	ナデ	布目	ヘラ工具で面取り
Fig－80	636	SE－09 上層	丸瓦		10.8+ α 8.8 + α 3.0	緻密・小～中砂粒を含む	良好	橙	ナデ	ハケメ・ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－80	637	SE－09 上層	平瓦		10.4+ α 10.1+ α 1.8	緻密・中砂粒をわずかに含む	良好	灰	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－80	638	SE－09 上層	平瓦		15.5+ α 18.0+ α 1.9	緻密・小～中砂粒を含む。赤褐色粒を含む	良好	淡橙	糸切り痕・布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－80	639	SE－09 上層	平瓦		14+ α 12.4+ α 2.3	やや緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－81	640	SE－09 上層	軒平瓦		8.2+ α 11+ α 6.3	緻密・小～粗砂粒を含む	良好	淡黄橙	布目	縄目タタキ	
Fig－82	641	SE－09 上層	鬼瓦	頬～歯	11.6+ α 11.4+ α 7.1+ α	緻密・中砂粒をわずかに含む	良好	淡黄橙	型押し		
Fig－82	642	SE－09 上層	鬼瓦	髭	5.2+ α 4.5+ α 1.5+ α	緻密・小～中砂粒を含む	良好	淡黄橙	型押し		
Fig－82	643	SE－09 上層	鬼瓦	右上隅	14.2+ α 6.8+ α 5.1+ α	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	黄灰白	磨滅	磨滅	
Fig－82	644	SE－09 上層	鬼瓦	下隅	5.9+ α 7.4+ α 5.1+ α	緻密・小砂粒を含む	良好	灰白	ナデ		ナデ
Fig－82	645	SE－09 上層	鬼瓦	眉間	8.2+ α 7.7+ α 3.7	緻密・中砂粒を含む	やや良好	淡橙	型押し	ナデ	
Fig－82	646	SE－09 上層	鬼瓦	鼻～口		緻密・小～中砂粒を含む	良好	淡黄橙	型押し	欠損	ヘラケズリ
Fig－83	647	SE－09 井側内	土師器	坏蓋	1.8+ α 16.8	緻密・小砂粒をわずかに含む。雲母片を含む	良好	淡橙	ケズリ・ナデ	ナデ	
Fig－83	648	SE－09 井側内	土師器	皿	2 15.6 12	緻密・小砂粒を含む。赤褐色粒を含む	良好	淡黄褐	ミガキ・ケズリ・ヘラ切り	ナデ・ミガキ	
Fig－83	649	SE－09 井側内	土師器	坏	2.3+ α 8	やや緻密・小～中砂粒を含む。赤褐色粒を含む	良好	淡橙	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
Fig－83	650	SE－09 井側内	土師器	鉢	15.8 26.6	緻密・小～中砂粒を含む。赤褐色粒を含む	良好	淡灰褐	タテハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	
Fig－83	651	SE－09 井側内	土師器	甕	9.6+ α 31.4	緻密・小砂粒を含む	良好	暗赤褐色	タテハケ・ナデ	ヨコハケ・ケズリ・ナデ	

Tab.63　出土遺物一覧表 62

Fig	番号	出土位置	器種		長・器高 幅・口径 厚・底径	胎土	焼成	色調	調整（表・外面）	調整（裏・内面）	調整側面
Fig－83	652	SE－09井側内	須恵器	大甕	7.8+ α 36.2 	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	暗灰～黄灰	ナデ・波状文あり	ナデ	
Fig－84	653	SE－09井側内	丸瓦		39.2 16.5 3.2	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	暗灰	縄目タタキ・ナデ	糸切り痕・布目	ヘラ工具で面取り
Fig－85	654	SE－09井側内	平瓦		34.9 29.2 2.5	緻密・小～粗砂粒を含む	良好	淡黄橙	糸切り痕・布目	糸切り痕・縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－85	655	SE－09井側内	平瓦		35.1 29.3 2.5	やや緻密・小～粗砂粒を含む	やや良好	淡黄橙	糸切り痕・布目	糸切り痕・縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－86	656	SE－09井側内	平瓦		35.8 23.5 2.5	やや緻密・小～粗砂粒を含む	良好	灰	糸切り痕・布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－86	657	SE－09井側内	平瓦		19.8+ α 17.5+ α 2.8	緻密・小～中砂粒を含む。雲母片を含む	良好	灰	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－86	658	SE－09井側内	平瓦		11.3+ α 8.7+ α 2	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	灰褐	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－87	659	SE－09井側内	平瓦		17.5+ α 17.5+ α 3.3	緻密・小～粗砂粒をわずかに含む	良好	灰白	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－87	660	SE－09井側内	平瓦		8.2+ α 6.2+ α 2.2	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	灰白	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－87	661	SE－09井側内	平瓦		11.7+ α 13.2+ α 2.1	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	灰褐	糸切り痕・布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－87	662	SE－09井側内	平瓦		11.8+ α 13.5+ α 2	緻密・小～中砂粒を含む。赤褐色粒を含む	良好	灰白	糸切り痕・布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－87	663	SE－09井側内	平瓦		10.5+ α 14.1+ α 3.3	緻密・中砂粒を含む	良好	灰	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－88	664	SE－09井側内	平瓦		14.0+ α 17.3+ α 2	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	灰	糸切り痕・布目	糸切り痕・縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－88	665	SE－09井側内	平瓦		11.5+ α 11.8+ α 3	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	灰白	糸切り痕・布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－88	666	SE－09井側内	平瓦		7.0+ α 11.9+ α 3	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	灰白	布目	縄目タタキ	
Fig－89	667	SE－09井側内	軒丸瓦		8.2+ α 14.8+ α 	緻密・小～中砂粒を含む	良好	暗灰	ナデ	ナデ	
Fig－89	668	SE－09井側内	軒平瓦		10.8+ α 10.8+ α 5.5	やや緻密・小～粗砂粒を含む	良好	暗灰～灰白	糸切り痕・布目	縄目タタキ	
Fig－90	669	SE－09井側内	鬼瓦	鼻～口		緻密・小～中砂粒を含む	良好	淡黄橙	型押し	欠損	ヘラケズリ
Fig－91	670	SE－09井側内	塼	無文	27.8 18.6 8.1	緻密・小～中砂粒を少し含む。赤褐色粒・雲母片を含む	良好	灰褐～黒	ヘラケズリ・板ナデ	ヘラケズリ・板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－91	671	SE－09井側内	塼	無文	5.7+ α 6.4+ α 6.8	緻密・小～中砂粒を多く含む	良好	暗灰	板ナデ	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－91	672	SE－09井側内	塼	無文	12.1+ α 16.4 8.3	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	灰	工具痕あり・磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－92	673	SE－09井側内	塼	無文	14.8+ α 12.4+ α 7.9	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	灰	磨滅	磨滅	磨滅
Fig－92	674	SE－09井側内	塼	無文	10.8+ α 12.1+ α 7.1	緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰	板ナデ・やや磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－92	675	SE－09井側内	塼	無文	12.8+ α 9.9+ α 7.3	緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰	板ナデ	板ナデ	

Tab.64　出土遺物一覧表 63

Fig	番号	出土位置	器種		長・器高 幅・口径 厚・底径	胎土	焼成	色調	調整（表・外面）	調整（裏・内面）	調整側面
Fig－93	676	SE－09 桶下層	丸瓦		11.4+ α 5.8+ α 1.8	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	灰白	縄目タタキ・ナデ	布目	ヘラ工具で面取り
Fig－93	677	SE－09 桶下層	平瓦		7.8+ α 8.7+ α 3.3	緻密・小～中砂粒を多く含む	良好	灰白	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－94	678	SE－09 東側裏込	丸瓦		12.1+ α 7.6+ α 1.5	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	暗灰	ナデ	布目	ヘラ工具で面取り
Fig－94	679	SE－09 東側裏込	丸瓦		15+ α 9.6 1.8	緻密・小～粗砂粒が外面に付着	良好	灰白	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－94	680	SE－09 東側裏込	平瓦		19+ α 5.1+ α 2.8	緻密・小～粗砂粒を少し含む	良好	暗灰	ナデ	布目	ヘラ工具で面取り
Fig－94	681	SE－09 東側裏込	平瓦		12.5+ α 11.8+ α 2.4	緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－94	682	SE－09 東側裏込	平瓦		17.4+ α 12.5+ α 2.2	やや緻密・小～粗砂粒を含む	良好	灰	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－95	683	SE－09 東側裏込	平瓦		35.5 20.7+ α 2.5	やや緻密・粗砂粒が内外面に付着	良好	灰黄	糸切り痕・布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－95	684	SE－09 東側裏込	平瓦		20+ α 20.4+ α 2.2	やや緻密・小～粗砂粒を含む	良好	灰	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－96	685	SE－09 東側裏込	塼	無文	10.5+ α 12.0+ α 6.5	やや緻密・中～粗砂粒を少し含む	良好	灰	ヘラ工具で面取り	ヘラ工具で面取り	ヘラ工具で面取り
Fig－96	686	SE－09 東側裏込	塼	無文	10.5+ α 8.2+ α 6.9	緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰	ヘラ工具で面取り	ヘラ工具で面取り	ヘラ工具で面取り
Fig－97	687	SE－09 桶裏込	平瓦		26.1+ α 14.8+ α 2.2	緻密・小砂粒を含む。小～粗砂粒が外面に付着	良好	灰白	糸切り痕・布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－97	688	SE－09 桶裏込	平瓦		25.3+ α 15.6+ α 4.5	緻密・中砂粒を含む	良好	灰	糸切り痕・布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－98	689	SE－09 桶裏込	平瓦		17.2+ α 14.1+ α 2.2	緻密・小～中砂粒を含む。	良好	灰	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－98	690	SE－09 桶裏込	平瓦		14.1+ α 14.7+ α 2.4	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	灰	糸切り痕・布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－98	691	SE－09 桶裏込	平瓦		15.4+ α 15.8+ α 2.3	緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰	糸切り痕・布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－98	692	SE－09 桶裏込	平瓦		12.2+ α 11.8+ α 2.9	やや緻密・赤褐色粒が裏面に付着	良好	灰	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－99	693	SE－09 桶裏込	平瓦		19.6+ α 14.8+ α 2.8	緻密・小砂粒を含む。小～粗砂粒が外面に付着	良好	灰白	糸切り痕・布目	糸切り痕・縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－99	694	SE－09 桶裏込	平瓦		14.8+ α 10.8+ α 2.3	やや緻密・中～粗砂粒を多く含む	良好	灰	糸切り痕・布目	糸切り痕・縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－99	695	SE－09 桶裏込	平瓦		15.6+ α 12.6+ α 2.8	やや粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	灰	糸切り痕・布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig－100	696	SE－09 桶裏込	塼	無文	30.2 17.5 8.3	やや緻密・小～粗砂粒を含む	良好	灰白	板ナデ・やや磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－100	697	SE－09 桶裏込	塼	無文	29.1 17.8 8.3	緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰	板ナデ・やや磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－101	698	SE－09 桶裏込	塼	無文	26.4 17.1 6.9	緻密・小砂粒を含む	良好	暗灰	板ナデ・やや磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－101	699	SE－09 桶裏込	塼	無文	22.8+ α 18.3 7.5	緻密・小～中砂粒を含む。	良好	灰	板ナデ・やや磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り

Tab.65　出土遺物一覧表 64

Fig	番号	出土位置	器種		長・器高 幅・口径 厚・底径	胎土	焼成	色調	調整（表・外面）	調整（裏・内面）	調整側面
Fig－102	700	SE－09 桶裏込	塼	無文	20.7+ α 16.3 7.1	緻密・小砂粒を少し含む。	良好	灰白～橙	板ナデ	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－102	701	SE－09 桶裏込	塼	無文	13.8+ α 15.2 6.5	緻密・小～粗砂粒を含む。	良好	灰	板ナデ・磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－102	702	SE－09 桶裏込	塼	無文	12.3+ α 17.2 7	緻密・小砂粒を少し含む	良好	灰	板ナデ・やや磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－103	703	SE－09 桶裏込	塼	無文	12.7+ α 17.2 7.2	緻密・小～中砂粒を少し含む。	良好	灰	板ナデ・やや磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－103	704	SE－09 桶裏込	塼	無文	12.7+ α 17.5 7.2	緻密・小～中砂粒を含む。	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－103	705	SE－09 桶裏込	塼	無文	13.5+ α 17.1 7.5	緻密・小～粗砂粒を含む	良好	灰～灰白	板ナデ・やや磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－103	706	SE－09 桶裏込	塼	無文	11.5+ α 9.7+ α 6.7	緻密・小～中砂粒を少し含む。	良好	灰白	板ナデ・やや磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－104	707	SE－09 桶裏込	塼	無文	14.3+ α 13.5+ α 7.1	緻密・小砂粒を少し含む。	良好	灰～灰白	板ナデ・やや磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－104	708	SE－09 桶裏込	塼	無文	10.9+ α 12.5+ α 8.1	緻密・小砂粒を少し含む。	良好	黄橙	板ナデ・やや磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－104	709	SE－09 桶裏込	塼	無文	20.1+ α 12.1+ α 7.7	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	灰	板ナデ・やや磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－104	710	SE－09 桶裏込	塼	無文	9.8+ α 13.6+ α 7.2	緻密・小～中砂粒を少し含む。	良好	灰	ナデ	板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig－105	711	SE－09 上層	輝緑凝灰岩製石庖丁		4.2 8.0+ α 0.6						
Fig－105	712	SE－09 井側内	滑石製臼玉		0.37 0.37 0.14						
Fig－105	713	SE－09	神功開寶								
Fig－106	714	SE－09 井側内	イスノキ製櫛		3.7 8+ α 0.8						
Fig－106	715	SE－09 井側内	イスノキ製櫛		3.8 5.3 0.8						
Fig－106	716	SE－09 井側内	イスノキ製櫛		3.8 4.3+ α 0.8						
Fig－106	717	SE－09 井側内	イスノキ製櫛		1.3 2.9+ α 0.5						
Fig－106	718	SE－09 井側内	イスノキ製櫛		1.6 2.9+ α 0.8						
Fig－106	719	SE－09 井側内	イスノキ製櫛		2.7 0.4 0.5						
Fig－106	720	SE－09 西側裏面	下駄		20.1 8.3 1.4						スギ柾目
Fig－106	721	SE09－掘方	机		8.4 24.2 2.2						
Fig－106	722	SE－09 井側内	桶		13.4 16.5 16.8						樹皮紐付き
Fig－106	723	SE－09 西側裏面	桶底板		5.2 16.8 0.7						樹皮紐付き

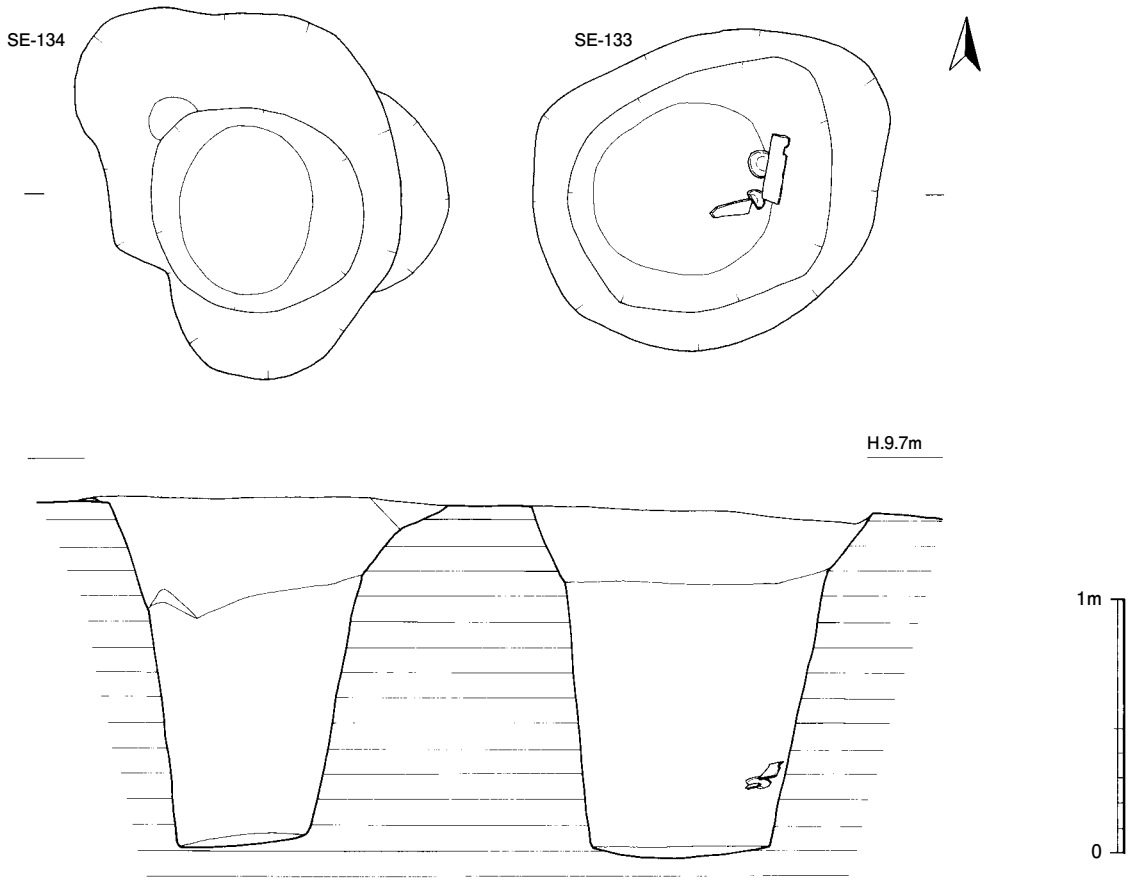


Fig.107　133・134 号井戸実測図(1/30)

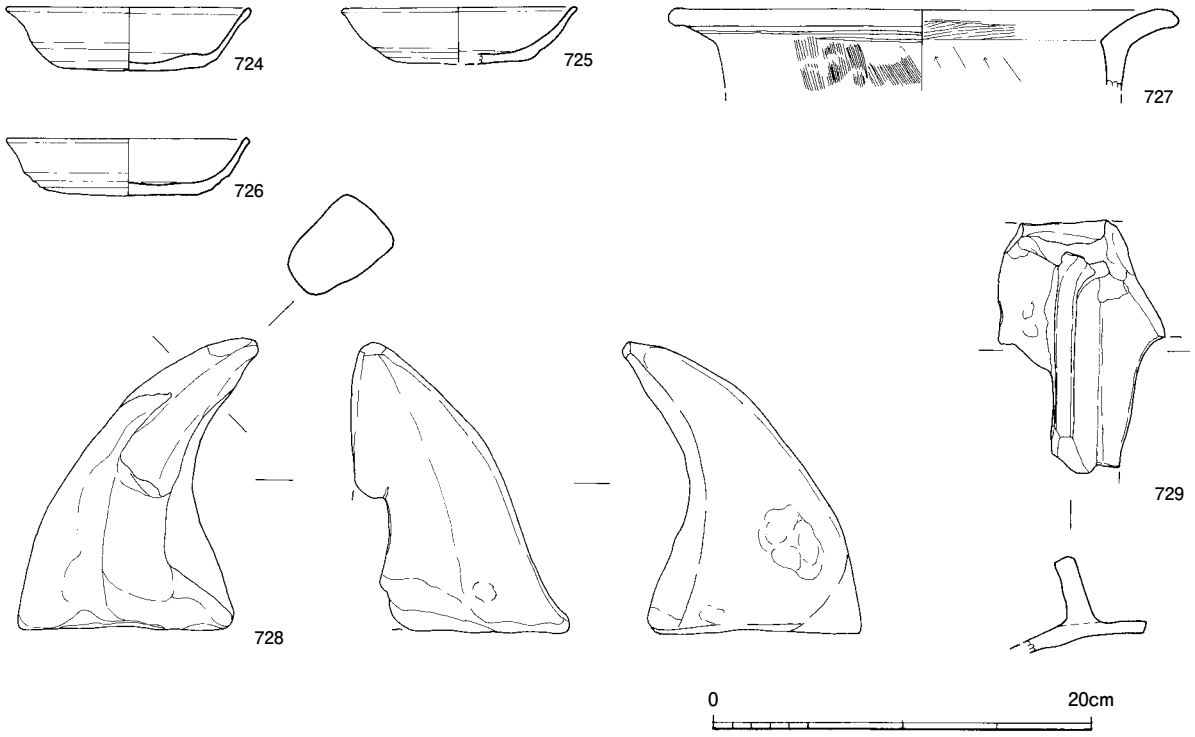


Fig.108　133・134 号井戸出土遺物実測図(1/4)

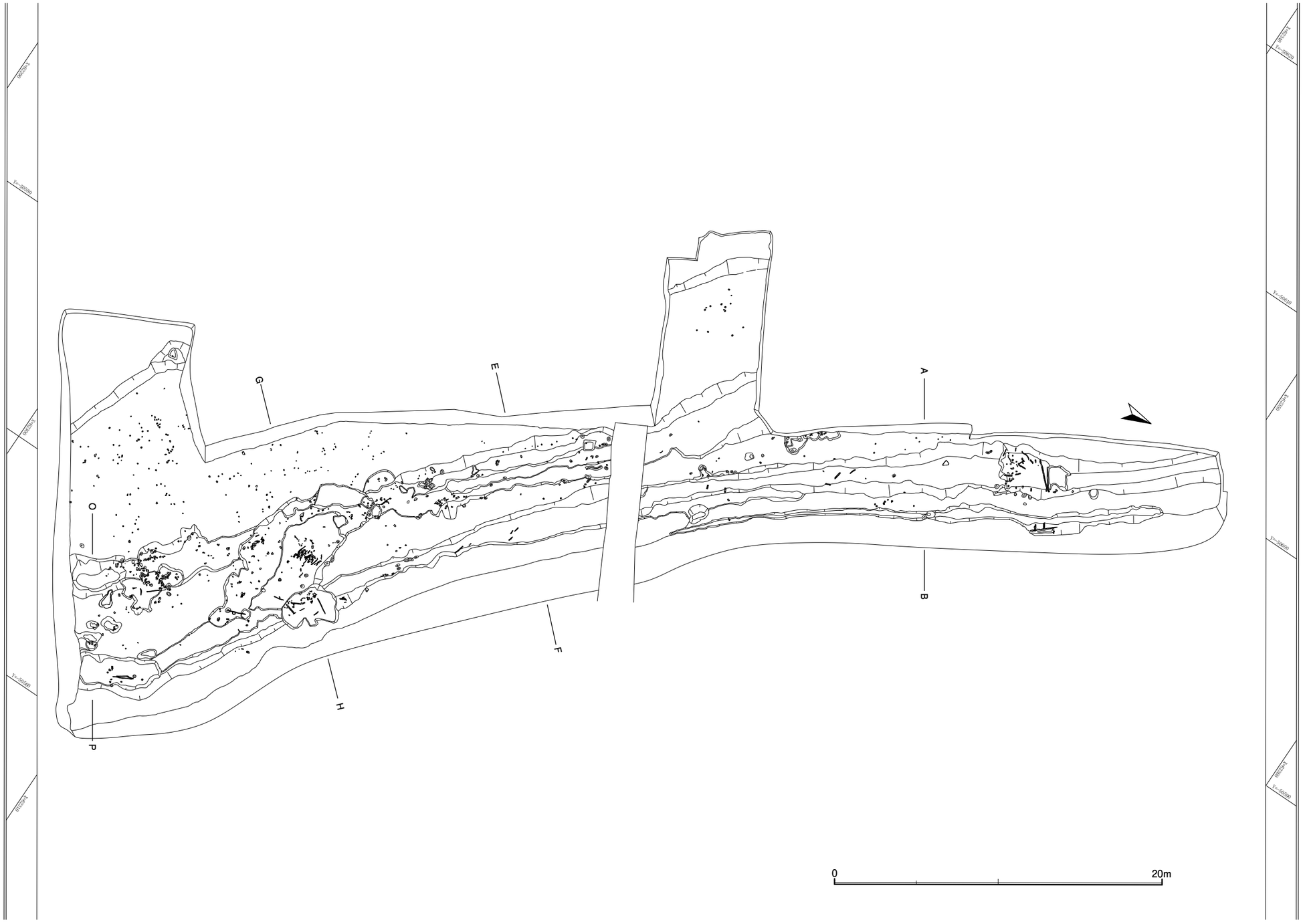
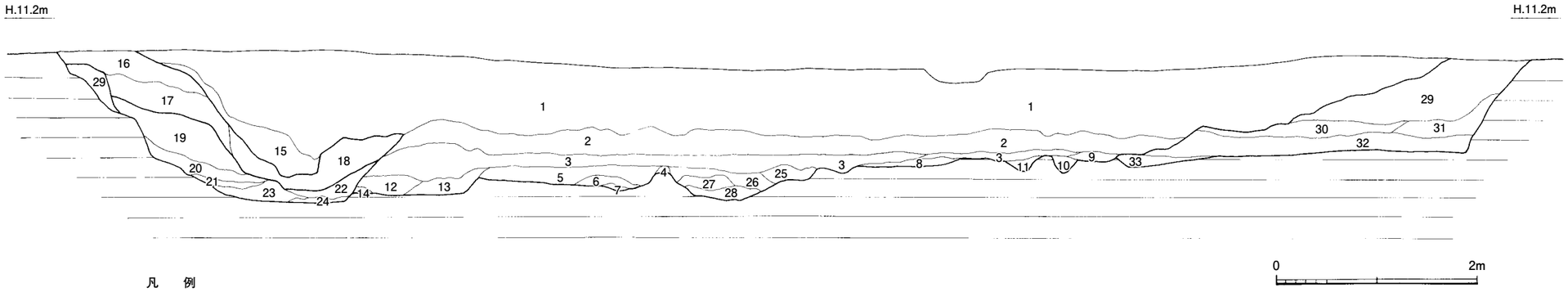


Fig.109　100 号道路遺構実測図(1/200)



凡　例

1. 黄橙色粘土ブロック：客土層
2. 褐灰色粘土層：旧耕作土
3. 灰黄褐色土：鳥栖・八女粘土ブロック含む
4. 明灰白色粘土ブロック：八女粘土ブロック
5. 灰黄褐色粘質土
6. 明黄褐色粘土ブロック＋祖砂
7. 褐灰色粘土ブロック
8. 褐灰色粘質土：強粘質
9. にぶい黄褐色土
10. 灰黄褐色粘質土：強粘質
11. 灰黄褐色粘質土
12. 褐色土：暗褐色土粒多く混入
13. 灰褐色粘砂土：粗砂粒多く混入
14. 褐灰色粘質土：強粘質
15. にぶい褐色粘土ブロック＋褐灰色土
16. 灰褐色土
17. 濃灰褐色土
18. 褐灰色粘質土：強粘質
19. 褐色土：灰白色粘土小ブロック少量含
20. 褐灰色粘質土：にぶい褐色土混入
21. 褐灰色粘砂土：細砂粒多く混入
22. 黒褐色粘質土：細砂粒混入
23. 褐灰色粘砂土：細～粗砂粒混入
24. 褐灰色土＋明褐灰色粘土ブロック
25. 灰褐色粘質土＋にぶい橙色土
26. 褐灰色粘土ブロック：強粘質で砂粒混入
27. にぶい褐色粘砂土
28. にぶい褐灰色粘砂土
29. 灰黄褐色土
30. にぶい黄橙色土
31. にぶい黄橙色土
32. 褐色土
33. にぶい黄褐色粘質土

Fig.110　100 号道路遺構土層断面実測図(1/50)

2）道路遺構（SF）

道路遺構は、調査区の西端部で南東方から北西方へ延びる道路遺構を検出した。この道路遺構は、古代の駅路いわゆる官道で、高畑丘陵の頂を切通して南東縁にある第18次調査区Ⅰ区で検出された道路遺構SF－002に繋がり、丘陵上を縦断している。本調査区と第18次調査区の道路はひとつに南は水城の東門を経て大宰府政庁へ、北は板付を経て博多へと一直線に繋がっている。道路遺構は、初め緩傾斜する東側の法面と道路面を検出したが、西側の法面を検出すべく調査区を西へ拡張して西側の法面を確認した。また、中央部では渡廊下の建設に先立って東西の法面を確認した。

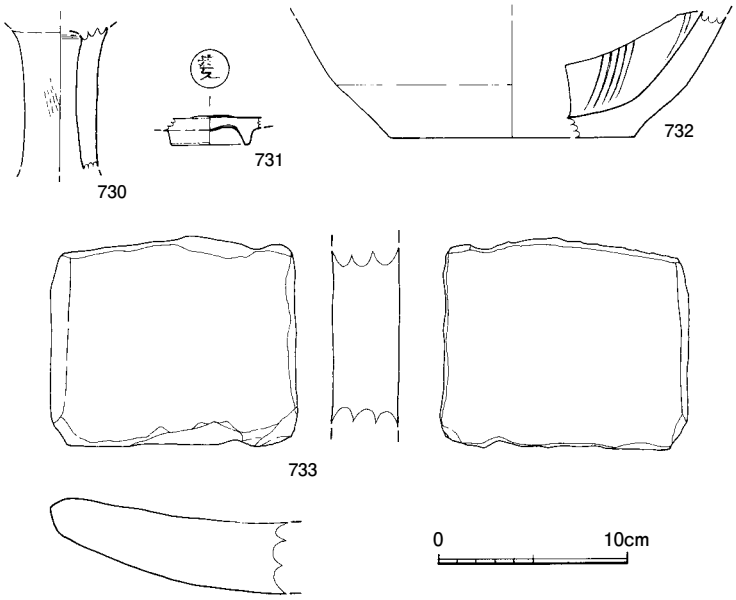


Fig.111　100号道路遺構出土遺物実測図(1/4)

100号道路遺構　SF－100（Fig. 109・110　巻頭PL. 6　PL. 31・32）

100号道路遺構は、調査区の西部にあり、南東方から北西方へむかって直線的に延びている。昭和10年代に開削されて今は消失しているが、原状はここに標高が15mほどの丘陵が南北に延びており、道路遺構はこの丘陵の東寄りの斜面を大きく切通して開削している。切通しの法面は、東側では中世以降の水田化で切り開かれ、法下には水路が開かれて原状は余り留めていない。また、西側の法面は比較的良く原状を留めていた。一方、道路面は現地山面より－1mで確認された。西側法面の現状と昭和初期の地形図から復原すると、切通しの比高は3～4m、幅員は9mほどに復原される。道路面の標高は9.7～9.8mで、路面上には直径が10cmほどの牛の足跡が検出されたが、第18次調査区の調査で指摘された波板状遺構は検出されなかった。遺物は、路面上から瓦や塼のほかに弥生土器片や土師器片、青磁片などが出土したが、量的には少なく、該期に伴う遺構はなんら検出されなかった。今、道路面の中央部の西寄りと緩斜面下に2条の溝が流れているが、中央よりの101号溝は官道廃絶後の水田化に伴う水路である。また、緩斜面下の102号溝は水田の拡幅に伴って開削された溝である。

出土遺物（Fig. 111　PL. 37）

730は、高坏の脚部である。731は、龍泉窯の青磁碗で、内底面に「菱」の文字を描いている。高台径は4.2cm、高さは7.1cm。732は、底径が13cmの摺鉢で、内面に5本1単位の摺目が刻まれている。胎土は小～中砂粒を含み、色調は淡褐色。733は平瓦片である。

3）溝遺構（SD）

古代の溝は、3条を検出した。このうち2条（SD－01・03）は調査区南東部の丘陵の縁辺部に位置する直線的な溝である。これに対して丘陵の東縁部を流れる1条の溝は（SD－136）は、弥生時代の旧河川（SD－137）の西岸に沿って蛇行しながら北流している。

1号溝　SD－01（Fig. 112　PL. 33）

1号溝は、調査区南東部の丘陵縁にある直線的な溝で、西壁は2号住居や127号建物を切っている。また、東へ7mの距離には9号井戸がある。溝幅は300～320cm、溝底幅は150cm。深さは75～80cmで、

断面形は逆台形をなし、壁面は緩やかに立ち上がる。溝は南の調査区外に延びているが、調査区南端から 12m 地点で一旦収束し、2m の間をおいて再び 10m ほど直線的に延びて弥生期の河川へと流入する。この直線的な溝は、東側の沖積地と西側の丘陵部とを画するように延びており、溝の途切れた陸橋部は出入口の感がある。遺物は、弥生土器片や土製品、石鏃と塼、鉄釘が出土した。

出土遺物（Fig. 113　PL. 60）

734 は、口径が 8.6cm、底径が 5.2cm、器高が 13cm の小型壷である。口縁部は、内傾する頸部から如意状に小さく外反して立ち上がる。胴部は肩の張った偏球形をなす。胎土は精良で小砂粒と雲母を含み、焼成は良好。赤橙色。735 は、底径が 5.2cm の壷の底部である。736・737 は、甕の底部である。底径は、736 が 6.8cm、737 は 9.8cm。738 は、口径が 21.2cm の甕である。口縁部直下に小さな刻み目突帯を巡らし、胴部はストレートに窄まる。調整は、内外面ともにナデ。胎土には微細～中砂粒と雲母を含み、色調は淡黄橙色。739 は、長さが 24.7cm、幅が 8.8 ～ 10.5cm、厚さが 7 ～ 7.3cm

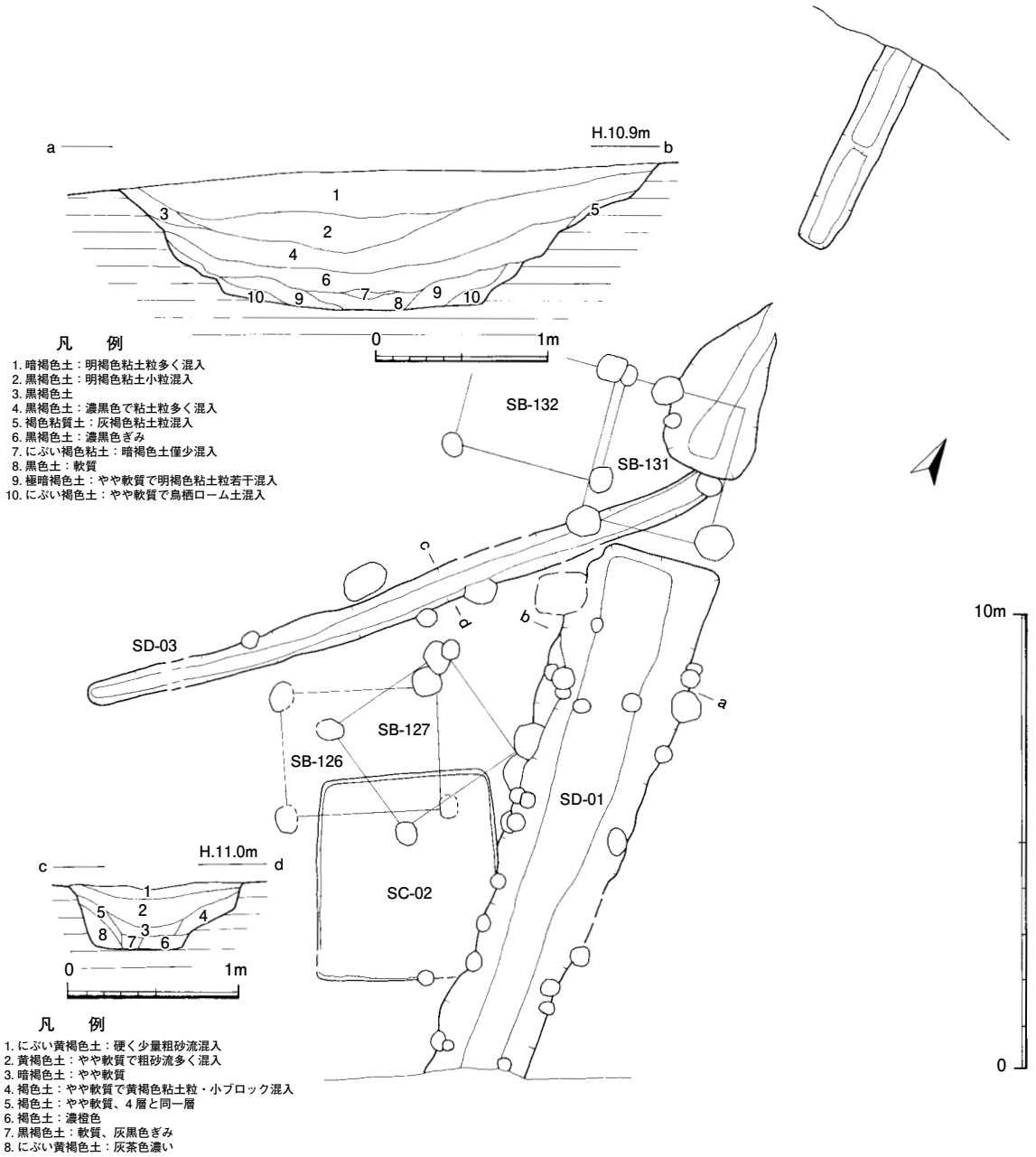


Fig.112　1・3 号溝実測図(1/40・1/150)

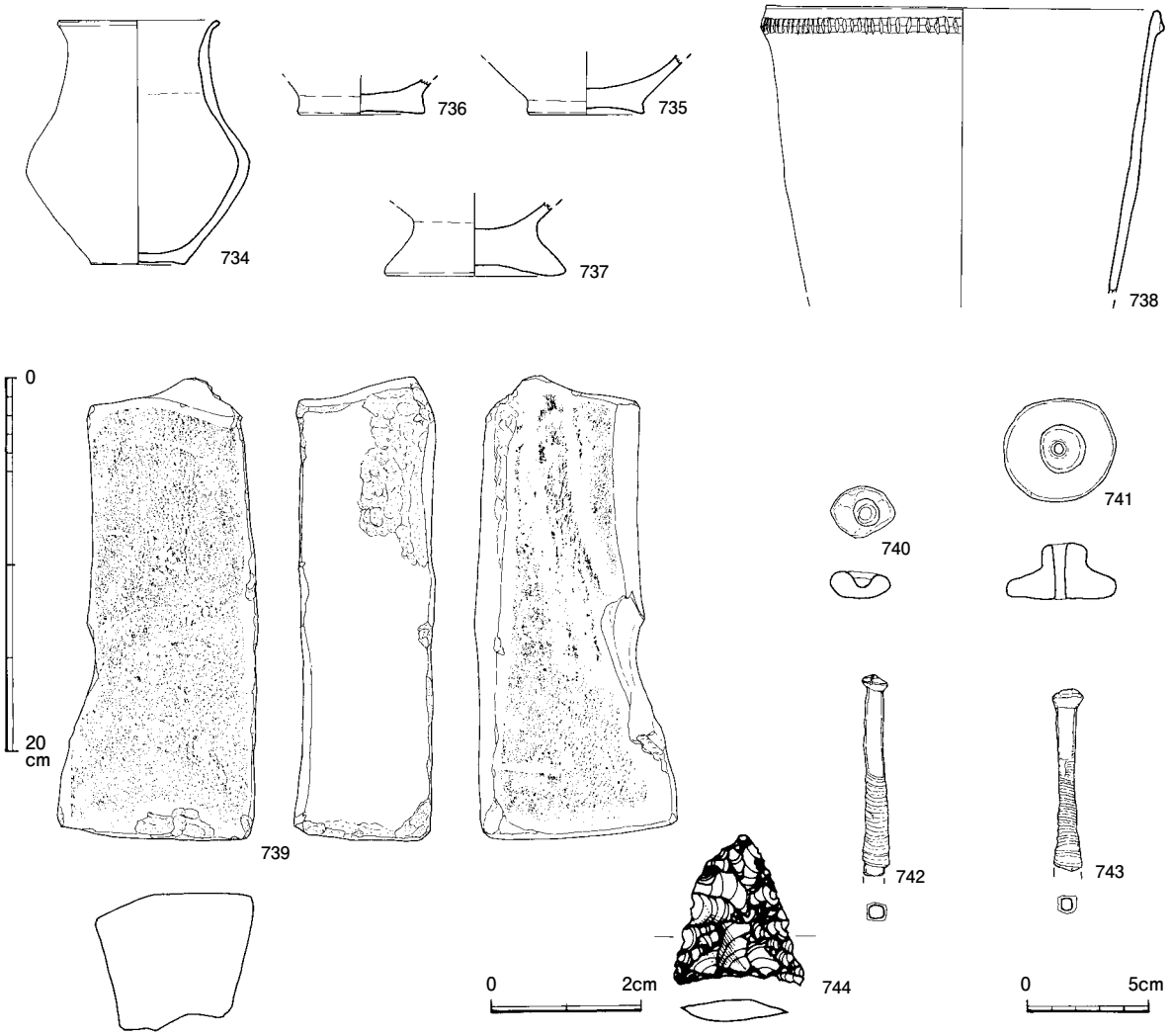


Fig.113　1 号溝出土遺物実測図(1/1・1/3・1/4)

の塼である。焼成は堅緻で煉瓦状を呈し、一部に叩き痕と布目痕が残る。側縁には壁土状の粘土塊が付着し、飴状の焼痕がある。740 は、2.1 ～ 2.5cm 径、厚さが 1.03 ～ 1.13cm の不整円形の手捏土製品である。中央部には棒状工具による刺突で、凹みを付けている。胎土は精良。741 は、摘み状の突起をもつ紡錘車である。直径は 4.1cm で、摘み部径は 1.8 ～ 2cm、高さは 0.9 ～ 1cm。円孔は下から上へ穿孔している。胎土には、微細～石英小砂粒を多く含む。742・743 は、先端の欠けた鉄釘である。身幅は 0.7 ～ 0.8cm で、木質が銹着している。744 は、長さが 2cm、基部幅が 1.7cm、最大厚が 0.3cm の黒曜石製打製石鏃である。表裏面共に丁寧な押圧剥離加工を施している。断面形は菱形。

3 号溝　SD － 03（Fig. 112）

3 号溝は、調査区南東部を東西方に延びる細長い溝で、東端部は 1 号溝に切られている。溝幅は 100cm、溝底幅は 50 ～ 55cm で、断面形は逆台形をなす。深さは 35cm で壁面は緩やかに立ち上がる。

136 号溝　SD － 136（Fig. 114　PL. 33）

136 号溝は、調査区の東縁を北流する弥生期の河川（SD － 137）の西岸に沿って蛇行しながら北流する溝である。溝は、南東隅では 137 号河川の河段上を流れているが、15m ほど北で 137 号河川の砂層上を左へ緩やかな弧を描くように西へ流れていく。次に溝は、調査区の中央で西流してきた 10 号河川の埋土である黒色粘質土層に合流し、緩やかに北西方へと流れを変える。溝は、この合流点で

Tab.66　出土遺物（土器）一覧表 65

Fig	番号	出土位置	器種		長・器高 幅・口径 厚・底径	胎土	焼成	色調	調整（表・外面）	調整（裏・内面）	調整側面	備考
Fig－108	724	SE－133	土師器	坏	3.4 13 7.5	緻密・小砂粒を少し含む。雲母片を多く含む	良好	淡橙褐	ナデ・ヘラ切り	ナデ		
Fig－108	725	SE－133	土師器	坏	3 12.4 6.2	緻密・小砂粒を少し含む。赤褐色粒を含む	良好	橙	ナデ・ヘラ切り	ナデ		
Fig－108	726	SE－133	土師器	坏	3 12.8 7.5	緻密・小～中砂粒を含む。赤褐色粒を含む。雲母片を含む	良好	橙	ナデ・ヘラ切り	ナデ		
Fig－108	727	SE－133	土師器	甕	4.3+ α 27 	やや粗い・小～粗砂粒を含む	良好	橙褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ケズリ・ナデ		
Fig－108	728	SE－134	土師器	支脚	15.4 11.4 11.4	緻密・小砂粒を少し含む	良好	橙	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		
Fig－108	729	SE－134	土師器	移動式カマド	13.4+ α 8.9+ α 	緻密・小砂粒をわずかに含む。赤褐色粒を含む	良好	橙	ナデ	ヘラケズリ		
Fig－111	730	SF－100	弥生土器	高坏	7.1 	緻密・小砂粒を含む	良好	橙	タテハケ・ナデ	ナデ		側面にヘラ書き？
Fig－111	731	SF－100	龍泉窯青磁	碗	7.1 4.2	緻密	良好	淡青	ナデ	ナデ		見込みに「菱」の字
Fig－111	732	SF－100	中世土器	擂鉢	6.4+ α 13	緻密・小～中砂粒を含む。赤褐色粒を含む	良好	淡褐	ケズリ・ナデ	ナデ・粗い卸目		
Fig－111	733	SF－100	平瓦		11.2+ α 12.5+ α 3.5	やや緻密・小～粗砂粒を含む	良好	灰	磨滅	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り	
Fig－113	734	SD－01	弥生土器	壷	13 8.6 5.2	緻密・小砂粒を含む。雲母片を含む	良好	赤橙	ナデ	ナデ		籾圧痕あり
Fig－113	735	SD－01	弥生土器	壷	3.2+ α 5.2	緻密・小砂粒を含む。雲母片を含む	良好	暗茶褐	ナデ	ナデ		
Fig－113	736	SD－01	弥生土器	甕	1.8+ α 6.8	緻密・小～中砂粒を含む。赤褐色粒を含む	良好	淡橙	ナデ	ナデ		
Fig－113	737	SD－01	弥生土器	甕	4+ α 9.8	緻密・小砂粒を含む。雲母片を含む	良好	淡黄橙	ナデ	ナデ		
Fig－113	738	SD－01	弥生土器	甕	15.2+ α 21.2 	やや緻密・微細～中砂粒を含む。雲母片を含む	良好	淡黄橙	ナデ	ナデ		黒斑あり
Fig－113	739	SD－01	塼	無文	24.7 10.5 7.3	やや緻密・小～粗砂粒を含む	良好	赤褐	板ナデ	板ナデ	タタキ	アメ状の焼け
Fig－113	740	SD－01	土製品		2.5 2.1 1.13	緻密	良好	淡黄白				
Fig－113	741	SD－01	土製紡錘車		4.1 4.1 2.2	緻密・微細～石英小砂粒を含む。雲母片を含む	良好	赤橙				
Fig－113	742	SD－01	鉄釘		8.0+ α 0.8+ α 0.8+ α							木質が残る
Fig－113	743	SD－01	鉄釘		7.3+ α 0.7+ α 0.7+ α							木質が残る
Fig－113	744	SD－01	黒曜石製石鏃		2 1.7 0.3							

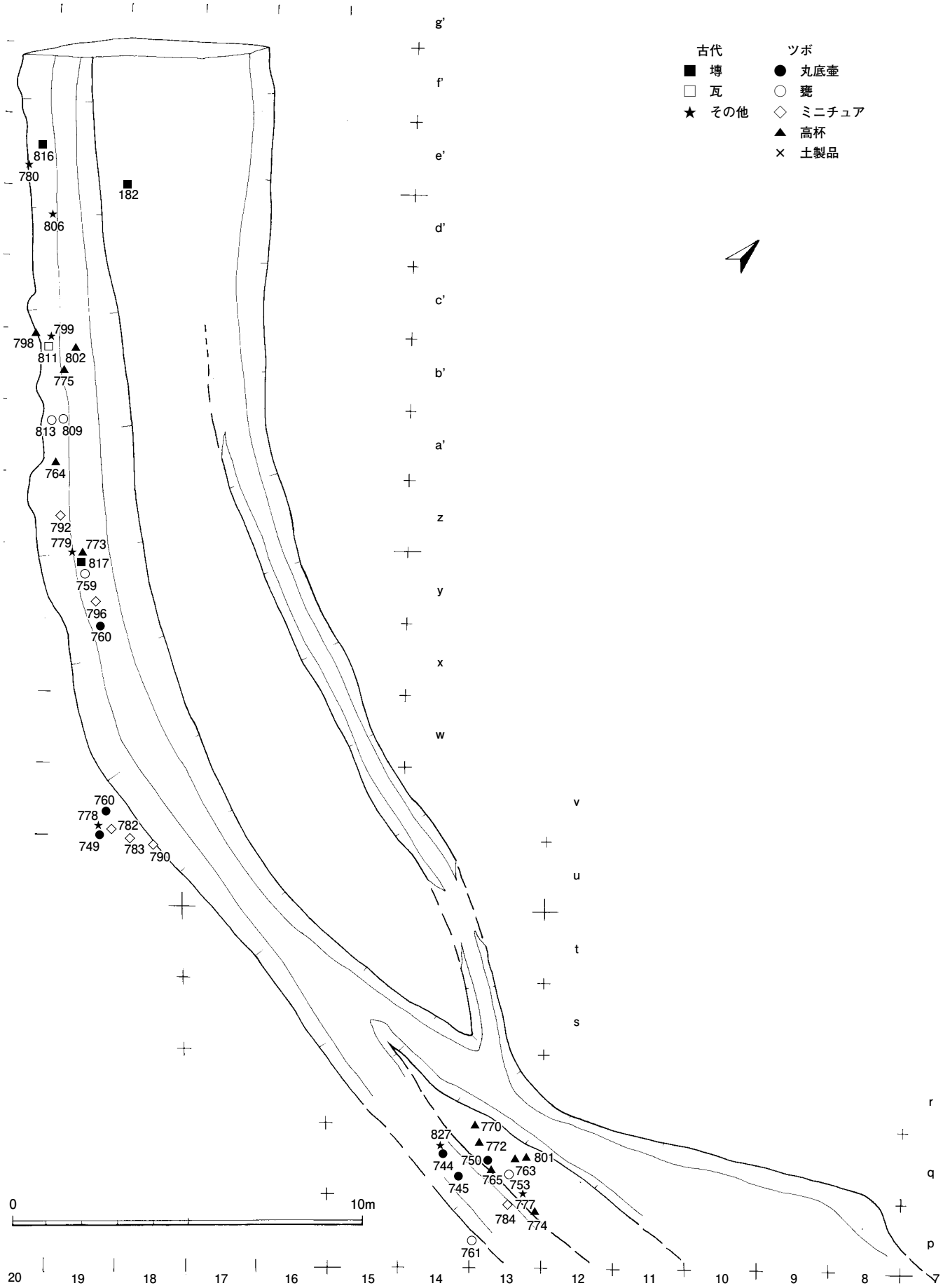


Fig.114　136 号溝遺物出土状況実測図(1/150)

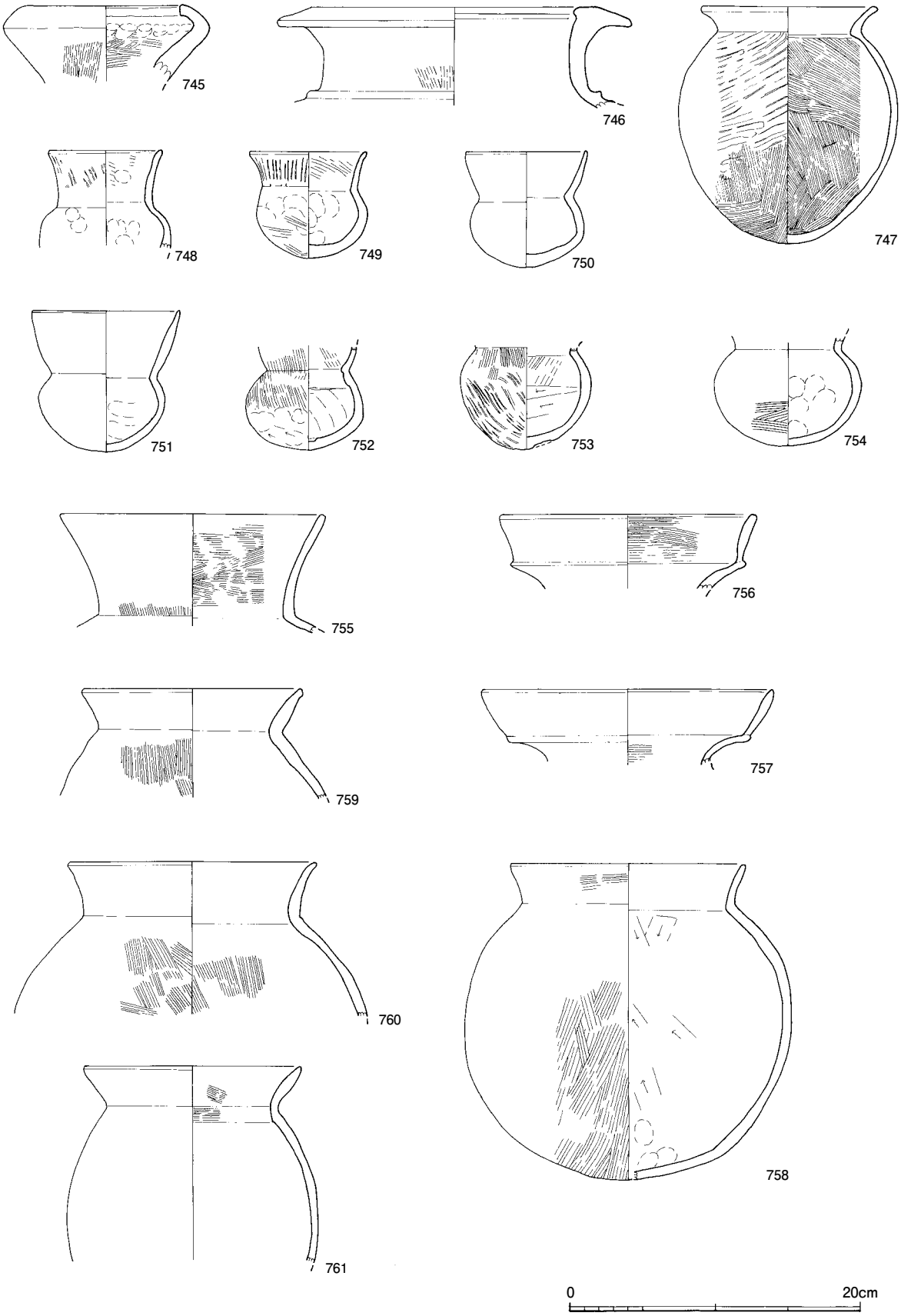


Fig.115　136 号溝出土遺物実測図 1 (1/4)

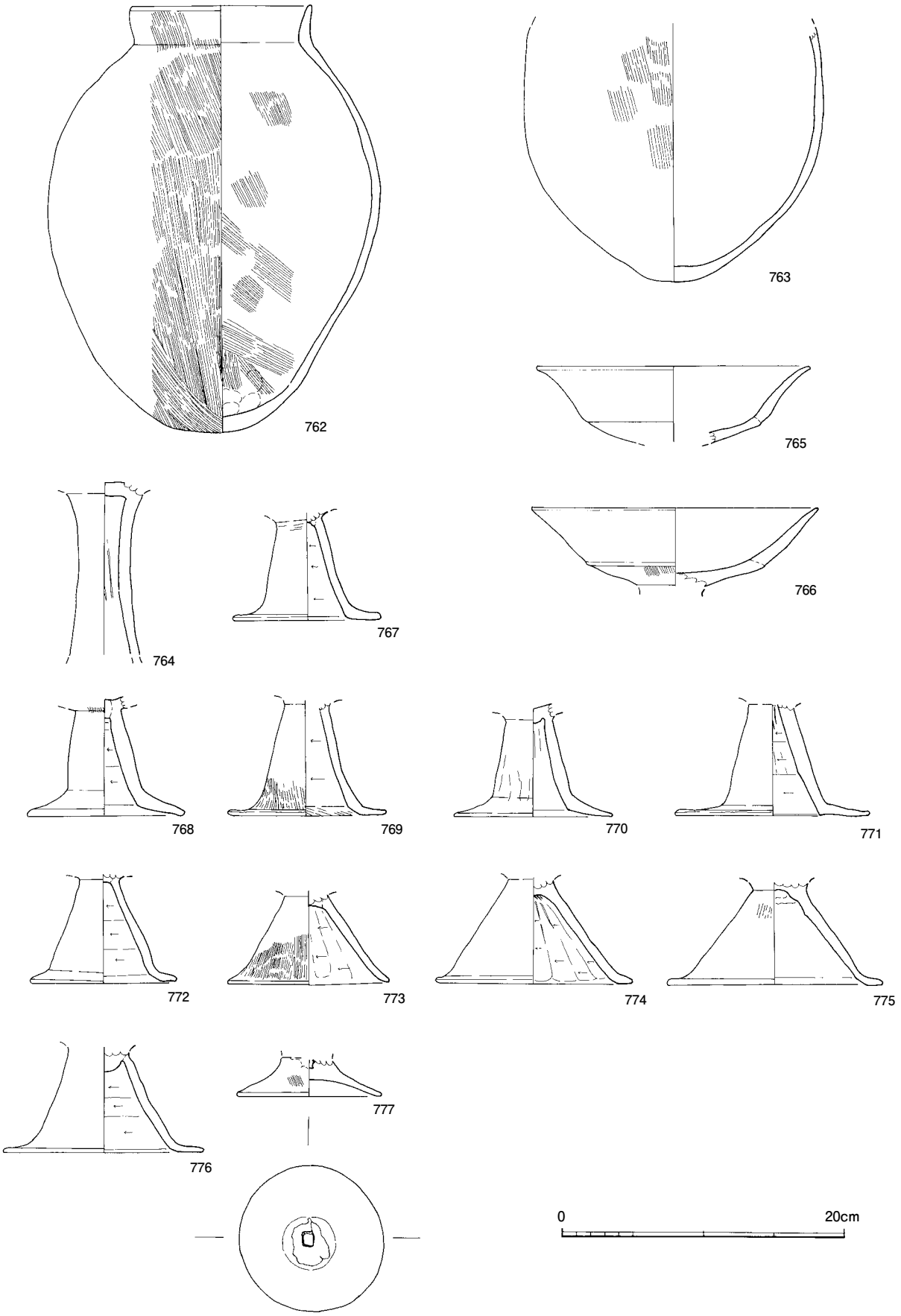


Fig.116　136 号溝出土遺物実測図 2 (1/4)

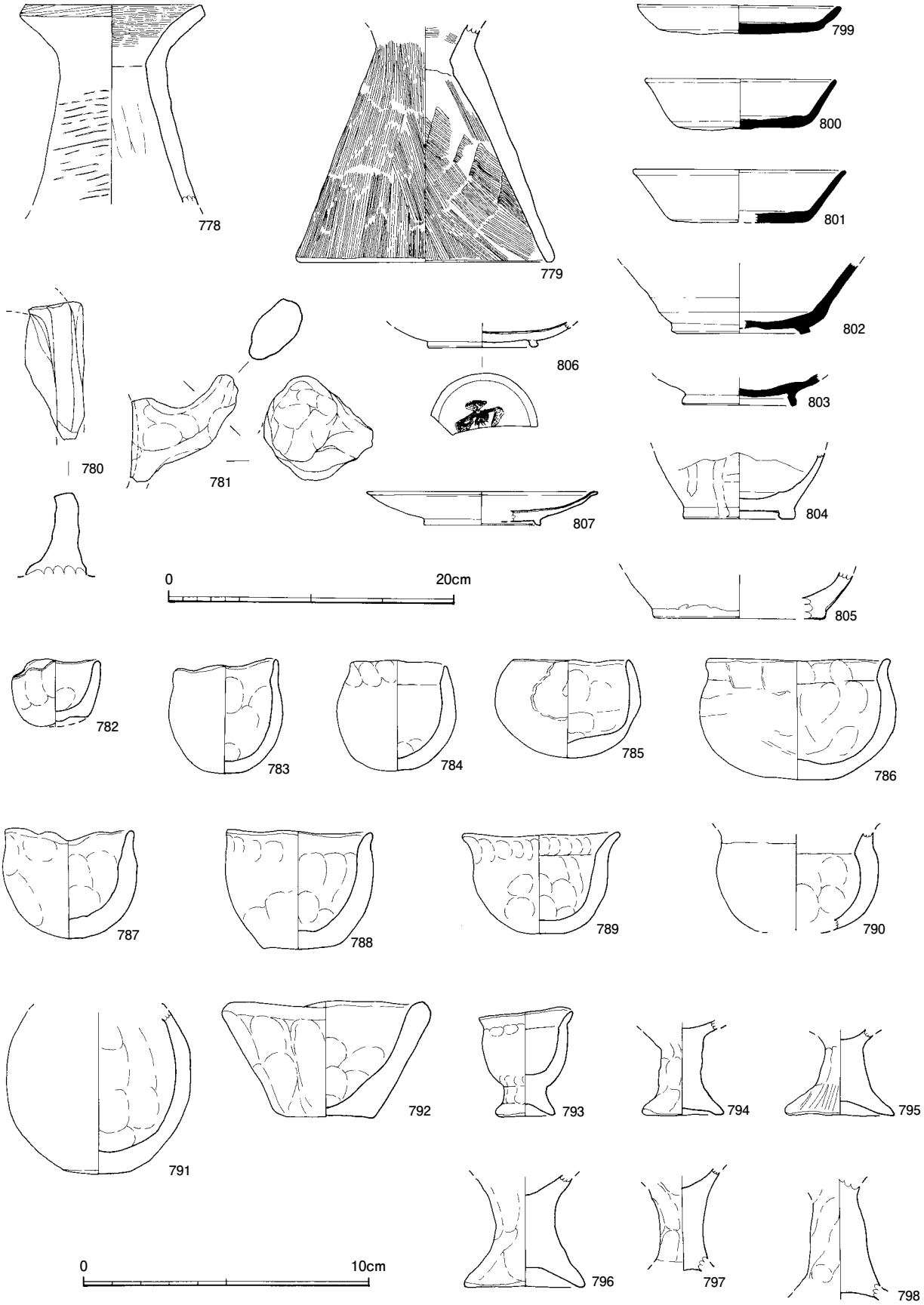


Fig.117　136 号溝出土遺物実測図 3 (1/2・1/4)

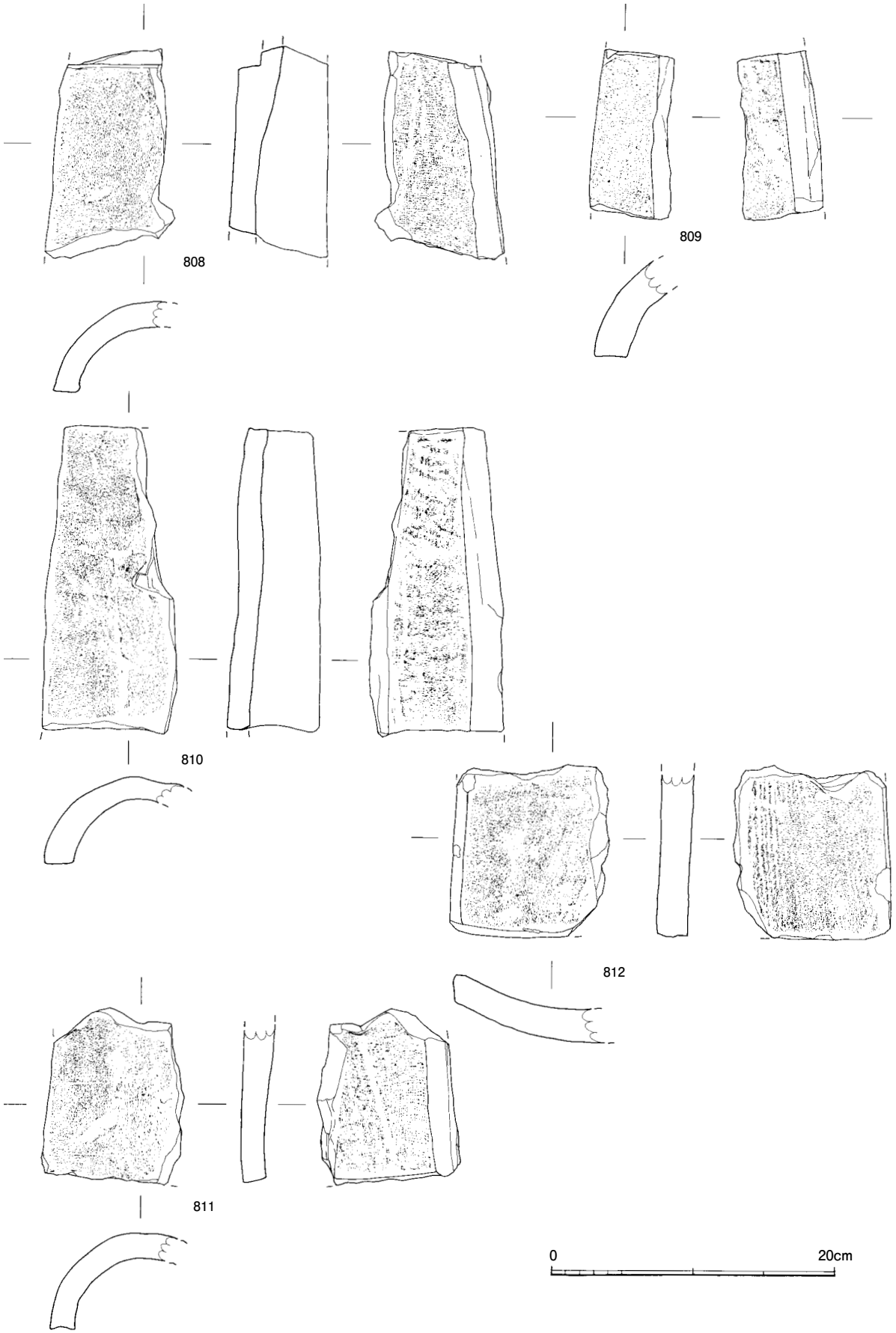


Fig.118　136 号溝出土遺物実測図 4 (1/4)

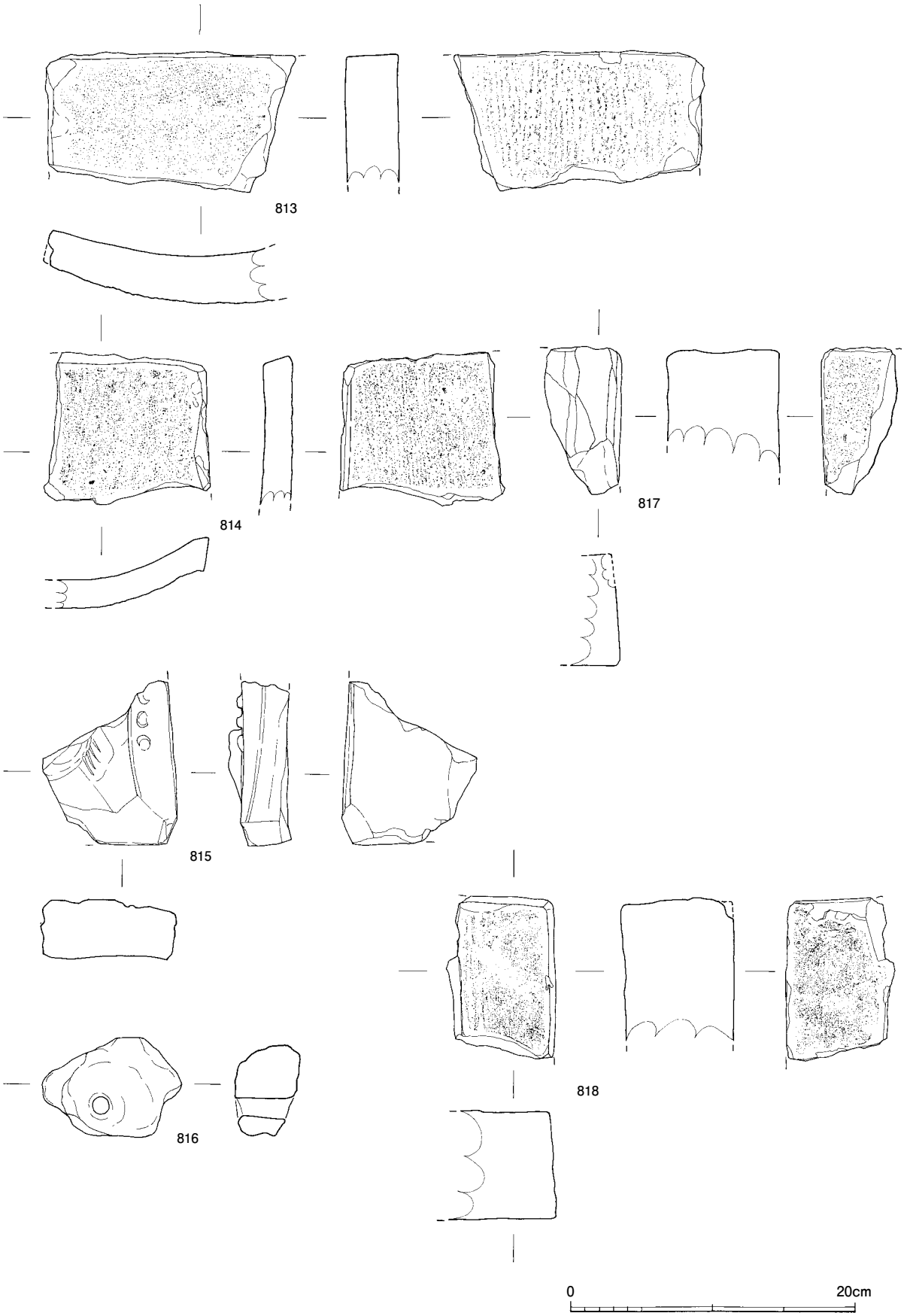


Fig.119　136 号溝出土遺物実測図 5 (1/4)

2 筋に分流する。分流した東西の溝は、2.5m の間を置いて 10 号河川の東西両岸に沿って流れる。溝幅は西側の溝が 100 ～ 250cm、深さは 70 ～ 80cm、東側の溝は 90 ～ 125cm、深さは 45cm とやや浅い。いずれも壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は溝底が凹レンズ状に浅く窪む逆台形状をなす。河岸を共にする 137・10 号河川の西岸に沿って北流する西側の溝には土師器の壷や甕、高坏、ミニチュア土器のほかに須恵器、瓦塼、灰釉陶器などが出土した。（小林義彦）

出土遺物（Fig. 115 ～ 120　PL. 59・60）

745 は袋状口縁壷の口縁部である。内外面ともハケ目のちナデ調整である。口縁の屈曲部内面には指圧痕が連続して見られる。口縁端部はやや四角に仕上げる。746 は鋤先口縁の広口壷の口縁から頸部である。鋤先口縁は外側にのび、やや垂れ下がる。内面には小さく張り出す。頸部には断面三角形の突帯が一条めぐる。外面はハケ目のちナデ調整、内面はナデ調整である。外面に赤色顔料が付着している。748 ～ 754 は小型丸底壷である。748・749 は口径より胴部径の方が大きく、内外面ともハケ目後にナデ調整で、一部に工具痕が残る。750・751 は口径より胴部径が小さく、内外面ともナデ調整である。752 から 754 は胴部から底部のみ残存しており、内外面ともハケ目のちナデ調整で、一部に工具痕が残る。755・758 は素口縁壷である。755 はやや外反する長い口縁を持つ。頸部の屈曲は強い。内外面ともハケ目後にナデ調整である。758 は短い口縁部に球形の胴部が付く頸部の屈曲は弱い。外面はハケ目のちナデ調整、内面は縦方向のケズリのちナデ調整である。756・757 は二重口縁壷の口縁部である。いずれも外面はナデ調整で、内面に横方向のハケ目が見られる。口縁部は直線的に立ち上がる。

747・759 ～ 763 は甕である。747 は「く」字に屈曲してやや外反ぎみにのびる口縁に、球形の胴部が付き、丸底の底部である。外面上半にタタキを施し、外面底部と内面はハケ目調整である。759 ～ 763 はいずれも、ゆるい「く」字口縁の長胴の甕である。

764 は弥生土器の高坏脚部である。内面に絞り痕が残る。765・766 は土師器の高坏坏部である。765 は坏部がやや屈曲し、口縁にむけて外反する。766 は屈曲がゆるく、口縁部にむけてそれほど外反しない。767 ～ 777 は高杯脚部である。767 ～ 776 はいずれも内面を削りで仕上げている。外面はハケ目のちナデ調整とナデ調整とがある。767 ～ 772 は脚の軸がしまり、裾が屈曲するものである。773 ～ 776 は脚がラッパ状に広がる。777 は組み合わせ式の木製高坏のように、脚の軸と裾を別に作り、組み合わせた高坏の裾部である。中央部に四角いホゾ穴があるが、貫通していない。裾部の底は上げ底状である。

778・779 は器台である。778 は裾部外面にタタキがみられる。受け部には横方向のハケ目が見られる。779 は内外面ともハケ目調整である。

780 は移動式カマドの庇の側面部分である。781 は把手である。指頭押圧痕が明瞭に残る。

782 ～ 798 は手捏のミニチュア土器である。いずれも指頭押圧とナデで整形されている。782 ～ 792 は鉢形で、胴部が丸みを帯びるものや直線的なものなどバリエーションがある。793 は台付き鉢形で、口縁はやや外反し、胴部はやや丸みを持つ。底部は上げ底である。794 から 798 は脚部である。いずれも脚底部は上げ底である。

799 は須恵器の皿である。800・801 は須恵器の坏である。802・803 は須恵器の高台付き坏である。804・805 は灰釉陶器の壷底部である。806 は灰釉皿の皿底部である。底部外面に墨書があり、ウカンムリか雨カンムリのようである。807 は磁器の皿である。色調はオリーブ色を呈す。

808 ～ 811 は丸瓦である。いずれも表面（凸面）はナデ調整、裏面（凹面）は布目が残る。側面はヘラで削り取って面取りする。811 は表面に横方向の沈線が見られる。812 ～ 814 は平瓦である。い

ずれも表面（凹面）に布目が残り、裏面（凸面）は縄目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。814 の表面には布目のほかに糸切り痕が残る。815・816 は鬼瓦である。815 は右下隅の部分で、周縁に珠文が 3 個観察でき、髭の表現も見られる。表面は型押し、裏面は縄目タタキが見られる。SE-09 出土の鬼瓦の隅部分が厚さ 5cm 以上と考えられるのに対し、この鬼瓦は厚さ 4.2cm と薄く小型である。816 は鬼瓦の釘留め部分である。全体に摩滅している。817・818 は無文塼である。いずれも残りはよくないが、表裏面は板ナデ、側面を面取りして仕上げたと思われる。厚さは 7.8cm と、SE-09 出土の塼と同様の計測値を示す。（谷　直子）

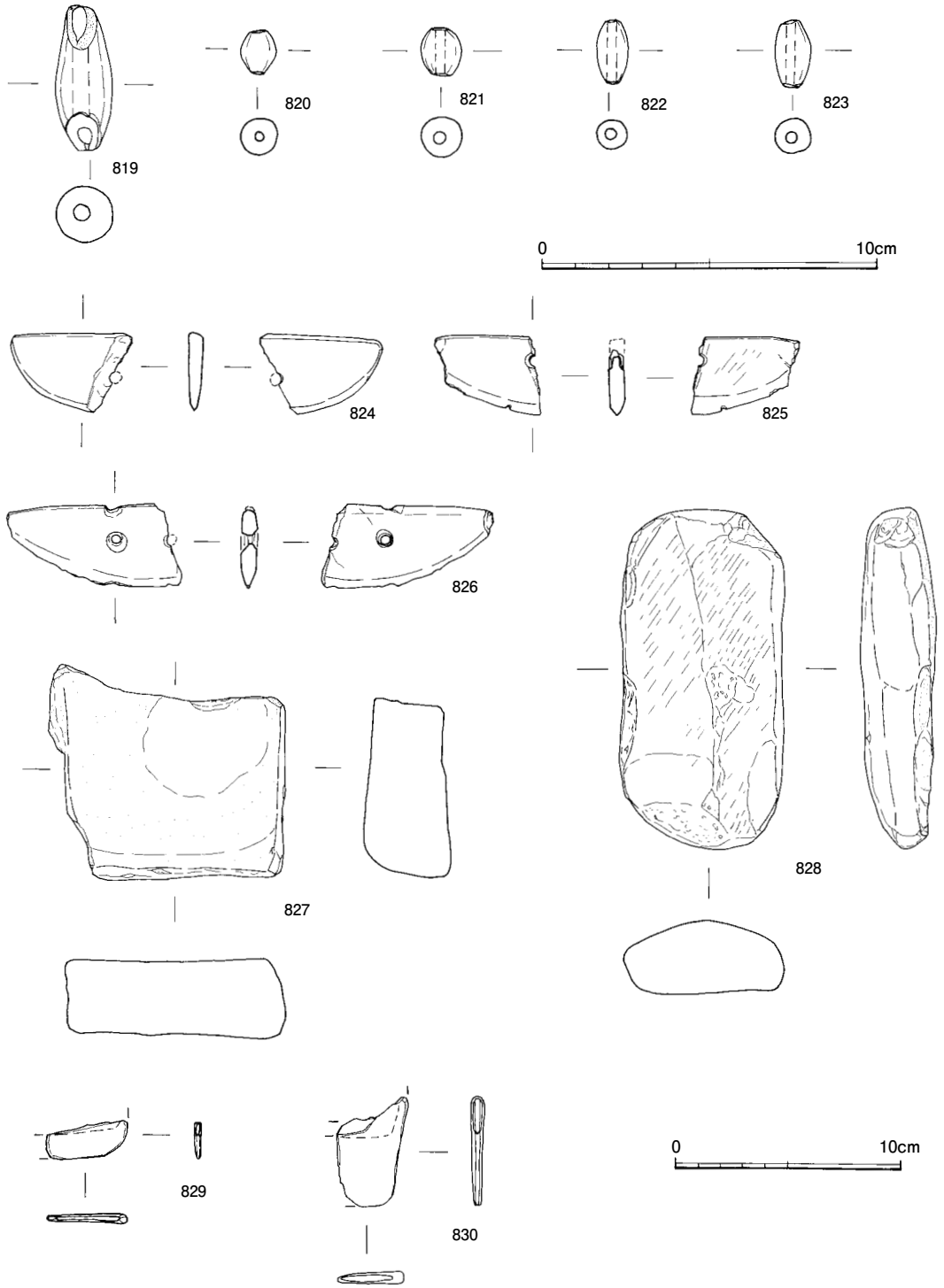


Fig.120　136 号溝出土遺物実測図 6（1/2・1/3）

Tab.67　出土遺物（土器）一覧表 66

Fig	番号	器種		長・器高 幅・口径 厚・底径	胎土	焼成	色調	調整（表・外面）	調整（裏・内面）	調整側面	備考
Fig－115	745	弥生土器	袋状口縁壷	5.2+ α 10.4	緻密・小砂粒を含む。角閃石を含む	良好	淡橙	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		
Fig－115	746	弥生土器	鋤先口縁壷	6.8+ α 24.2	緻密・小～中砂粒を含む。雲母片を含む	良好	灰褐	ハケメ・ナデ	ナデ		外面に赤色顔料付着
Fig－115	747	土師器	甕	16.3 12.2	やや粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	橙	ハケメ・タタキ・ナデ	ハケメ・ナデ		
Fig－115	748	土師器	小型丸底壷	6.7+ α 7.8	緻密・小砂粒を少し含む。	良好	灰褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		
Fig－115	749	土師器	小型丸底壷	7.3 8	緻密・小～中砂粒を含む。雲母･角閃石を含む。	良好	灰	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		
Fig－115	750	土師器	小型丸底壷	8 8.4	緻密・小砂粒を含む	良好	橙	ナデ・磨滅	ナデ・工具痕あり		
Fig－115	751	土師器	小型丸底壷	9.7 10.2	粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	赤橙	ナデ・磨滅	ナデ・指頭押圧		
Fig－115	752	土師器	小型丸底壷	9.2+ α	緻密・小～粗砂粒を少し含む	良好	灰白	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		
Fig－115	753	土師器	小型丸底壷	7.1+ α	緻密・小砂粒を含む	良好	灰褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ケズリ・ナデ		
Fig－115	754	土師器	小型丸底壷	7.5+ α	緻密・中砂粒を含む。雲母片を含む	良好	橙褐	ハケメ・ナデ	ナデ・指頭押圧		
Fig－115	755	土師器	壷	8.1+ α 18.4	やや緻密・小砂粒を多く含む	良好	灰白	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		
Fig－115	756	土師器	二重口縁壷	7.1+ α 17.7	粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	灰褐	ナデ	ハケメ・ナデ		
Fig－115	757	土師器	二重口縁壷	5.2+ α 20.2	やや緻密・小～粗砂粒を含む	良好	灰褐	ナデ	ハケメ・ナデ		
Fig－115	758	土師器	壷	21.8 16.2	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	灰褐	ハケメ・ナデ	ケズリ・ナデ		
Fig－115	759	土師器	甕	7.6+ α 15.2	やや粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	灰褐	ハケメ・ナデ	ケズリ・ナデ		スス付着
Fig－115	760	土師器	甕	10.5+ α 17	やや粗い・小～中砂粒を多く含む	良好	橙	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		
Fig－115	761	土師器	甕	13.4+ α 15	粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	灰黄	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		
Fig－116	762	土師器	甕	30.2 12.8	緻密・小～中砂粒を含む。角閃石を含む	良好	黄褐	タテハケ	ハケメ・ナデ・磨滅		黒斑あり
Fig－116	763	土師器	甕	18.4+ α	やや粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	橙	ハケメ・ナデ	ナデ・磨滅		スス付着
Fig－116	764	弥生土器	高坏	11.3+ α	緻密・小砂粒を含む。赤褐色粒を含む。雲母片を含む	良好	橙	ナデ	ナデ・絞り痕		
Fig－116	765	土師器	高坏	5.5+ α 19.4	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	橙	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅		二次被熱
Fig－116	766	土師器	高坏	5.7+ α 20.4	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	橙	ハケメ・ナデ・磨滅	ナデ・磨滅		

Tab.68　出土遺物（土器）一覧表 67

Fig	番号	器種		長・器高 幅・口径 厚・底径	胎土	焼成	色調	調整（表・外面）	調整（裏・内面）	調整側面	備考
Fig－116	767	土師器	高坏	8.2+ α 10.6	やや緻密・小～中砂粒を多く含む	良好	橙	ナデ・磨滅	ケズリ・ナデ		
Fig－116	768	土師器	高坏	8.5+ α 11.2	緻密・小砂粒を含む。赤褐色粒を含む。雲母片を含む	良好	淡橙	ハケメ・ナデ	ケズリ・ナデ		
Fig－116	769	土師器	高坏	8.2+ α 11.2	やや緻密・小～粗砂粒を少し含む	良好	灰	ハケメ・ナデ	ハケメ・ケズリ・ナデ		
Fig－116	770	土師器	高坏	8.1+ α 11.2	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	淡橙	ナデ	ケズリ・ナデ		
Fig－116	771	土師器	高坏	8.7+ α 13.8	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	淡黄橙	ナデ	ケズリ・ナデ・絞り痕あり		669 と接合
Fig－116	772	土師器	高坏	7.9+ α 10.5	緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰黄	ナデ	ケズリ・ナデ		646 と接合
Fig－116	773	土師器	高坏	6.7+ α 11.4	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	橙	ハケメ・ナデ	ケズリ・ナデ		
Fig－116	774	土師器	高坏	7.5+ α 14	緻密・小～中砂粒を含む	良好	橙	ナデ	ケズリ・ナデ		
Fig－116	775	土師器	高坏	7.3+ α 15.2	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	橙	ハケメ・ナデ・磨滅	ケズリ・ナデ・磨滅		
Fig－116	776	土師器	高坏	7.6+ α 14.2	粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	橙	ナデ・磨滅	ケズリ・ナデ		
Fig－116	777	土師器	高坏	2.8+ α 10.2	緻密・小～粗砂粒を少し含む	良好	淡橙	ハケメ・ナデ	ナデ		組み合わせの高坏脚部
Fig－117	778	土師器	器台	14.1+ α 12.4 	やや粗い・小～中砂粒を多く含む	良好	橙	ハケメ・タタキ・ナデ	ハケメ・ナデ		
Fig－117	779	土師器	器台	16.7+ α 18	緻密・小～粗砂粒をわずかに含む	良好	淡黄褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		
Fig－117	780	土師器	移動式カマド	9.7+ α 4.1+ α 	緻密・小砂粒を少し含む。	良好	淡黄橙	ナデ	ナデ		
Fig－117	781	土師器	把手	 	緻密・小～中砂粒を含む	良好	黄橙	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		
Fig－117	782	ミニチュア土器	鉢形	2.2 3.2 	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	橙	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		
Fig－117	783	ミニチュア土器	鉢形	4 5.4 	緻密・小砂粒を含む	良好	灰白	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		
Fig－117	784	ミニチュア土器	鉢形	3.9 3.4 	緻密・小砂粒を少し含む	良好	橙	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		
Fig－117	785	ミニチュア土器	鉢形	3.4 4.1 	緻密・小砂粒を少し含む	良好	橙	ナデ	ナデ・指頭押圧		
Fig－117	786	ミニチュア土器	鉢形	4.1 6.4 	緻密・雲母片を少し含む	良好	黒褐	ナデ・指頭押圧・ミガキ	ナデ・指頭押圧		
Fig－117	787	ミニチュア土器	鉢形	3.8 4.4 	緻密・小～中砂粒を含む	良好	茶褐	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		
Fig－117	788	ミニチュア土器	鉢形	4.2 5.2 2.7	緻密・小～中砂粒を含む。雲母片を含む	良好	淡橙褐	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		

Tab.69　出土遺物（土器）一覧表 68

Fig	番号	器種		長・器高 幅・口径 厚・底径	胎土	焼成	色調	調整（表・外面）	調整（裏・内面）	調整側面	備考
Fig－117	789	ミニチュア土器	鉢形	3.5 6.5	緻密・雲母片を少し含む	良好	灰褐	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		
Fig－117	790	ミニチュア土器	鉢形	3.5+ α	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	灰褐	ナデ	ナデ・指頭押圧		
Fig－117	791	ミニチュア土器	鉢形	5.7+ α	緻密・小～中砂粒を含む	良好	黄橙	ナデ・磨滅	ナデ・指頭押圧		スス付着
Fig－117	792	ミニチュア土器	鉢形	4 7 3.6	緻密・小～中砂粒を含む。角閃石を含む	良好	明灰褐	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		
Fig－117	793	ミニチュア土器	台付き鉢	3.7 3.2 1.1	緻密・小砂粒を含む	良好	橙	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		
Fig－117	794	ミニチュア土器	脚部	3.2+ α 2.9	緻密・小～粗砂粒をわずかに含む	良好	淡橙	ナデ・指頭押圧	ナデ		
Fig－117	795	ミニチュア土器	脚部	3.1+ α 3.8	緻密・雲母片を少し含む	良好	灰褐	ナデ・指頭押圧・ハケメ	ナデ		
Fig－117	796	ミニチュア土器	脚部	3.9+ α 4.2	やや緻密・小～粗砂粒を含む	良好	黄灰褐	ナデ・指頭押圧	ナデ		
Fig－117	797	ミニチュア土器	脚部	3.6+ α	緻密・小砂粒を含む	良好	橙	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		
Fig－117	798	ミニチュア土器	脚部	4.2+ α	緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰	ナデ・指頭押圧	ナデ		
Fig－117	799	須恵器	皿	2.1 14.2 11.2	緻密・小砂粒を含む	良好	灰	ナデ・ヘラケズリ	ナデ		
Fig－117	800	須恵器	坏	3.5 13.4 8.9	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	淡黄橙	ナデ・ヘラケズリ	ナデ		
Fig－117	801	須恵器	坏	5 15 10	緻密・小砂粒を含む	良好	灰	ナデ・ヘラケズリ	ナデ		
Fig－117	802	須恵器	高台付き坏	5.0+ α 9.7	やや粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	灰	ナデ	ナデ		
Fig－117	803	須恵器	高台付き坏	2.2+ α 8	緻密・小～中砂粒を含む。赤褐色粒を含む	良好	橙	ナデ	ナデ		赤焼
Fig－117	804	灰釉陶器	壷	4.7+ α 7.7	緻密	良好	淡緑	ナデ	ナデ		
Fig－117	805	灰釉陶器	壷	3.3+ α 12	緻密	良好	淡緑	ナデ	ナデ		
Fig－117	806	灰釉	皿	1.8+ α 7.5	緻密	良好	灰白	ナデ	ナデ		墨書あり
Fig－117	807	磁器	皿	2.3 16.2 8	緻密	良好	オリーブ	ナデ・ケズリ	ナデ		
Fig－118	808	丸瓦		14.9+ α 9.2+ α 2.9	やや緻密・中砂粒を含む	良好	灰白	ナデ	布目	ヘラ工具で面取り	
Fig－118	809	丸瓦		12.1+ α 5.7+ α 2.2	緻密・小～粗砂粒を含む	良好	灰黄	ナデ	布目	ヘラ工具で面取り	
Fig－118	810	丸瓦		21.5+ α 9.8+ α 1.8	緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰白	ナデ	布目	ヘラ工具で面取り	

Tab.70　出土遺物（土器）一覧表 69

Fig	番号	器種		長・器高 幅・口径 厚・底径	胎土	焼成	色調	調整（表・外面）	調整（裏・内面）	調整側面	備考
Fig－118	811	丸瓦		12.6+ α 9.7+ α 2.1	粗い・粗砂粒を少し含む	良好	灰黄	ナデ・横位の沈線	布目	ヘラ工具で面取り	
Fig－118	812	平瓦		12.2+ α 11.1+ α 2.3	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	灰白	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り	
Fig－119	813	平瓦		9.7+ α 17.6+ α 3.7	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	灰白	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り	
Fig－119	814	平瓦		10.8+ α 11.6+ α 2.1	緻密・小～粗砂粒を含む	良好	灰	糸切り痕・布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り	
Fig－119	815	鬼瓦	右下隅	11.6+ α 9.6+ α 4.2	緻密・小～粗砂粒をわずかに含む	良好	灰白	型押し	縄目タタキ	ナデ	
Fig－119	816	鬼瓦	釘留め部分	7.1+ α 9.6+ α 4.5+ α	やや緻密・小砂粒を多く含む	良好	黄白	磨滅	磨滅		
Fig－119	817	塼	無文	10.3+ α 5.4+ α 7.8	緻密・小～中砂粒を含む	良好	淡橙褐	磨滅	磨滅	磨滅	
Fig－119	818	塼	無文	11.3+ α 7.7+ α 7.8	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	灰黄	板ナデ・やや磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り	
Fig－120	819	土錘		4.4 1.7 1.7	緻密	良好	淡灰黄				
Fig－120	820	土製玉		1.35 1.07 1.07	緻密・赤褐色粒を含む	良好	淡明橙				
Fig－120	821	土製玉		1.46 1.26 1.26	緻密・赤褐色粒を含む	良好	淡明橙				下方から上方へ穿孔
Fig－120	822	土錘		1.9 0.9 0.9	緻密・赤褐色粒を含む	良好	淡明橙				棒状工具による押圧
Fig－120	823	土錘		2 1.1 1.1	緻密・赤褐色粒を含む	良好	淡明橙				
Fig－120	824	粘板岩製石庖丁		3.5+ α 5.4+ α 0.7							
Fig－120	825	片岩製石庖丁		3.5+ α 4.8+ α 0.6							
Fig－120	826	輝緑凝灰岩製石庖丁		3.8 7.7+ α 0.7							
Fig－120	827	砂岩製砥石		9.8+ α 10.6+ α 3.6				砥面	砥面	敲打痕あり	
Fig－120	828	敲石？		15.2 7.3 3.3							
Fig－120	829	銅製鋤先		1.7+ α 3.7+ α 0.3							
Fig－120	830	銅製鋤先		4.9+ α 3.2+ α 0.6							

819 は、両端部を欠いた土錘である。現長は 4.4cm、最大径は 1.7cm で円孔は 0.4cm。820・821 は、数珠玉状の土製玉である。長さは、1.35 ～ 1.46cm、最大径は 1.07 ～ 1.26cm で 0.3cm の円孔を穿っている。胎土は良質で、シャモット様の赤褐色粒を含んでいる。822・823 は小型の土錘である。長さは 1.9 ～ 2cm、最大径は 0.9 ～ 1.1cm。棒状工具で刺突した円孔径は 0.3cm である。胎土は精良で微細砂のほかシャモット様の赤褐色粒を含む。

824 ～ 826 は、石包丁である。824 は、半月形の粘板岩質の石包丁で紐孔は中央に穿つ。825 は、片岩製で紐孔は背近にあり、刃部は丁寧に研いでいる。826 は、立岩産の輝緑凝灰岩製で刃部の研ぎ出しはやや弱い。827 は、砂岩質の砥石である。中砥石で、砥面は 4 面ある。828 は、堆積岩質の未製品である。先端部に敲打痕が残るが、使途は不明である。

829・830 は、青銅製鋤先の刃部片である。

4）土　壙（SK）

古代の土壙は、5 基検出したが、水田の水路（SD － 101・102）の周辺には瓦塼片の混入した不整形の浅い窪みがいくつか検出された。これらが明らかに土壙としては特定し難かったのでその範疇には加えなかった。いずれもこれらの土壙は、官道 100 号道路遺構の南隅部に比較的まとまって拡がっている。分布的には、道路面と中世の水路とに挟まれた狭地に比較的まとまってあるが、詳細な時期や機能などは判然としない。

103 号土壙　SK － 103（Fig. 121　PL. 36）

103 号土壙は、調査区の西端にある官道 100 号道路遺構の南端に 102 号溝と 113 号土壙の間に位置する南北軸の小土壙である。平面形は、長軸が 102cm、短軸が 45 ～ 50cm の不整な楕円形プランを呈する。深さが 25cm の壁面は、緩やかに立ち上がる。壙底は浅い凹レンズ状をなす。

104 号土壙　SK － 104（Fig. 121）

104 号土壙は、官道 100 号道路遺構の東端を北流する 102 号溝の西に接して位置する小土壙で北隅壁は 102 号溝に切られている。平面形は、長軸が 98cm、短軸が 42cm の長楕円形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は 20cm。

112 号土壙　SK － 112（Fig. 121）

112 号土壙は、調査区南東隅の官道 100 号道路遺構の路面上にあり、101 号溝の 2m ほど西に位置する。平面形は、長軸が 150cm、短軸が 60 ～ 76cm の小土壙で、側壁が瓢状に括れる不整な長楕円形プランをなしている。壁高は 15cm で壁面は緩やかに立ち上がる。

113 号土壙　SK － 113（Fig. 121）

113 号土壙は、官道 100 号道路遺構の南東隅にある小土壙で、103 号土壙のすぐ西に位置している。平面形は、長軸が 55cm、短軸が 36cm の長方形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は 18cm と浅く断面形は逆台形をなす。

114 号土壙　SK － 114（Fig. 121）

114 号土壙は、調査区南隅の 101 号溝と 102 号溝に挟まれた 100 号道路遺構の路面上にある南北軸の小土壙である。平面形は、長軸が 96cm、短軸が 65cm の不整な長方形プランを呈する。壁高は 14cm と浅く、壁面は緩やかに立ち上がる。

出土遺物（Fig. 122）

831・832・834 は平瓦、833 は塼である。831 は 105 号土壙、832 は 112 号土壙、833 は 114 号土壙から出土した。

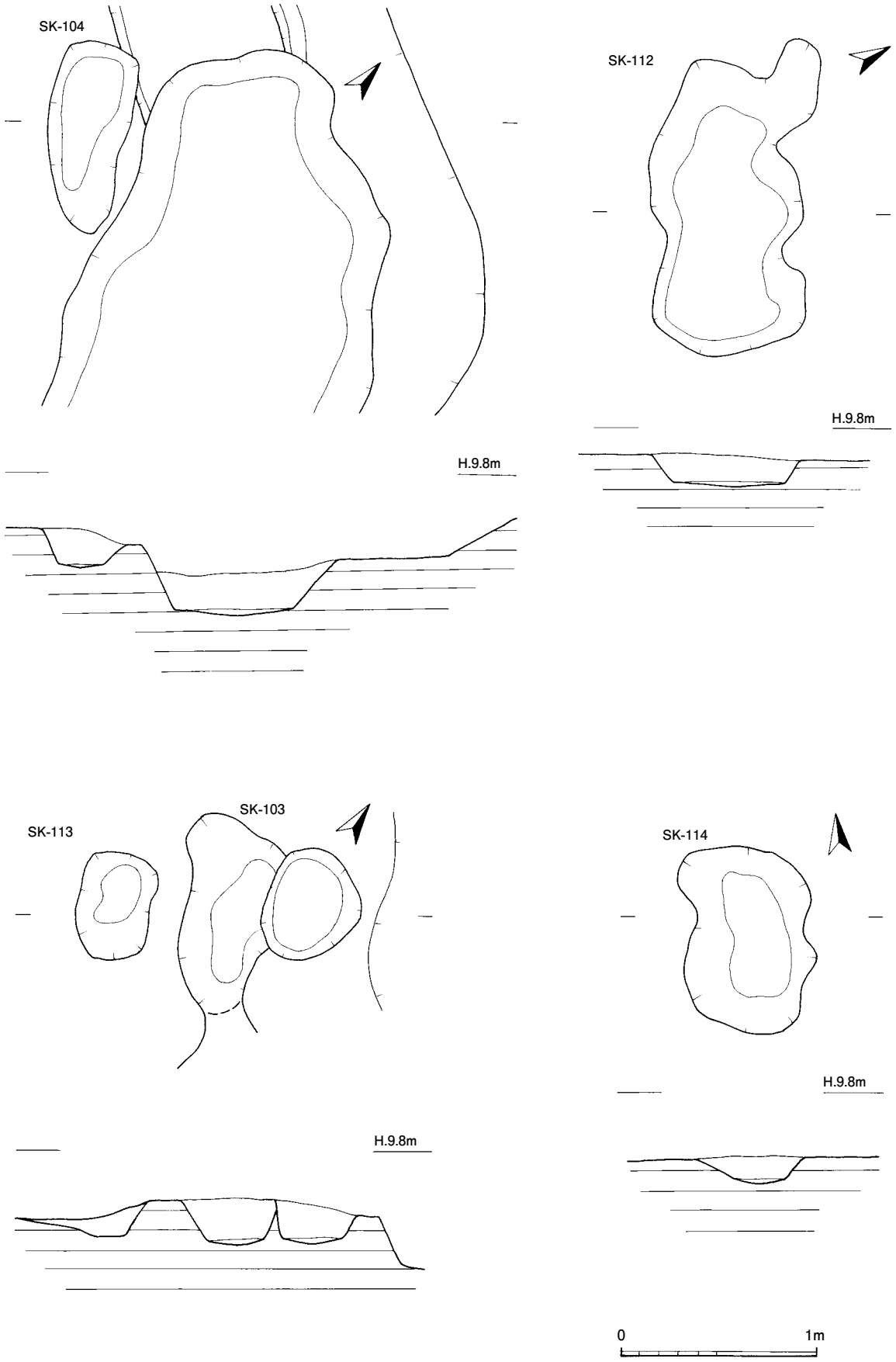


Fig.121　103・104・112～114 号土壙実測図(1/30)

5　中近世の調査

中世～近世の遺構としては、100 号道路遺構上の東に寄って 2 条の溝を検出した。これに加えて路面上には官道の廃絶後に可耕地化した水田の耕作土層が薄く堆積しており、該期の遺構と考えることが出来るが、田面の規模を示す畦畔などは検出できなかった。昭和初期の地形図に因れば、この水路は近世を経て昭和 10 年代まで機能しており、可耕地として営々と耕作されていた。また、調査区の南東隅～北半部の丘陵東北縁も近世期に開削されて水田化しているが、昭和 10 年代の丘陵全体の削平によって官道上をはじめ一帯はすべて水田として可耕地化した。

1）溝遺構（SD）

溝は、調査区の西部にある道路遺構（官道）の路面上で 2 条を検出した。いずれも官道廃絶後の 12 世紀後半以降の官道が水田化するのに伴って開削されたもので、幾度かの掘り直しを繰り返しながら中近世を経て昭和 10 年代まで機能していた。溝は、官道の東側に寄って 2 条が蛇行しながら北流しており、はじめに西側の溝（SD － 101）が開削される。この溝は、官道東側の法面下にあり法面を拡げることなく開削したもので、道路幅に沿ってほぼ直線的に流れている。次に東側の溝（SD － 102）が開削される。この溝は、耕地の拡幅を図ったもので法面を切り拡げながら開削している。そのため溝は東に膨らみながら蛇行し流れ、官道本来の法面は失われている。

101 号溝　SD － 101（Fig. 123　PL. 36）

101 号溝は、調査区の西端にある 100 号道路遺構の路面上に掘られた水田に伴う溝で、官道の中央よりやや東に偏している。溝は、官道が廃絶した後に道路上を水田として可耕地化した時に開削されたものである。溝は、当時の官道の法下直下に法面に沿って開削されており、ほぼ直線的に延びている。溝幅は狭いところで 90cm、広いところで 200 ～ 220cm である。深さは 30 ～ 40cm で、断面形は逆台形状をなしている。溝内からは、弥生土器のほか瓦塼、龍泉窯や同安窯の青磁碗、肥前磁器瓶などが出土した。

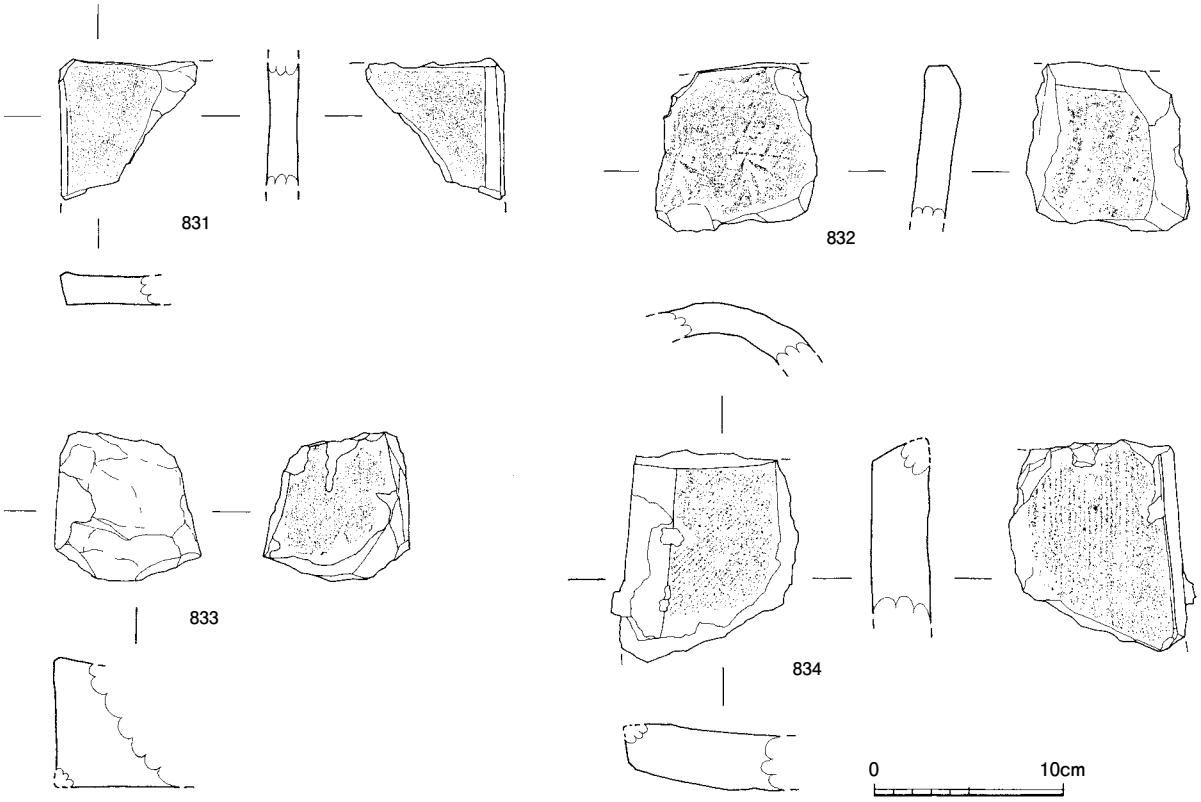


Fig.122　105・112・114 号土壙・116 号ピット出土遺物実測図(1/4)

出土遺物（Fig. 124）

835は、袋状口縁をもつ弥生壷である。口径は8.4cm。836は、口径が9.6cm、底径が9.8cm、器高が3.2cmの土師器坏である。体部はヨコナデ、内底面はナデ、外底面は回転糸切り。837は、同安窯系青磁碗で、外面と見込みに櫛描きの施文がある。高台径は4.6cm、高台の高さは0.6cm。838は、龍泉窯青磁碗で、内底面にはヘラで劃花文を描いている。839は、口径が16.8cmの同安窯系青磁皿で、見込みには櫛描きで施文している。840は、中国陶器の四耳壷である。841･842は、Ⅳ類の白磁碗である。841は、口径が16.8cmの玉縁口縁の白磁碗である。842は青磁碗で、見込みに卍の施文がある。高台径は、4.6cm。843は、肥前磁器の染付瓶である。体部には草花文を描き、畳付は釉剥ぎ。高台径は9.5cmで、18世紀前半の産。844は、軒丸瓦で667と同様に、周縁はやや広い直立縁で素文、外区に連珠文があり、花弁は複弁蓮華文が直線的な表現に変化しており、弁端は尖形である。845は、平瓦で、表面（凹面）に布目と糸切り痕が残り、裏面（凸面）は縄目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。846は、無文塼である。表面は残りが悪いが板ナデ、裏面も板ナデ、側面を面取りして仕上げたと思われる。幅は16.5cm、厚さは7cmほどで、SE-09出土の塼と同様の計測値を示す。847は、凝灰岩質石包丁の半欠品で、刃部は丁寧に研ぎ出している。848は、長さが5.75cm、最大径が1.8cm、口径が0.35～0.4cmの土錘である。849は、煙管の雁首である。

102号溝　SD－102（Fig. 123　PL. 36）

102号溝は、調査区の西端にある100号道路遺構の路面上に掘られた2条の溝のひとつで、東側の法下に掘り込まれており、101号溝とは1.3～2mの間を置いて北流している。この溝は、可耕地の拡幅に際して掘り直されたもので官道の法面は削られて原状は留めていない。東へ緩やかに弧を描きながら北流する溝は、調査区南端より9mの地点に水口が設けている。水口には溝に沿って杭が打ち込まれていた。溝幅は狭いところで50～60cm、広いところで180～240cmで深さは40～60cm。廃棄までに3回掘り直され

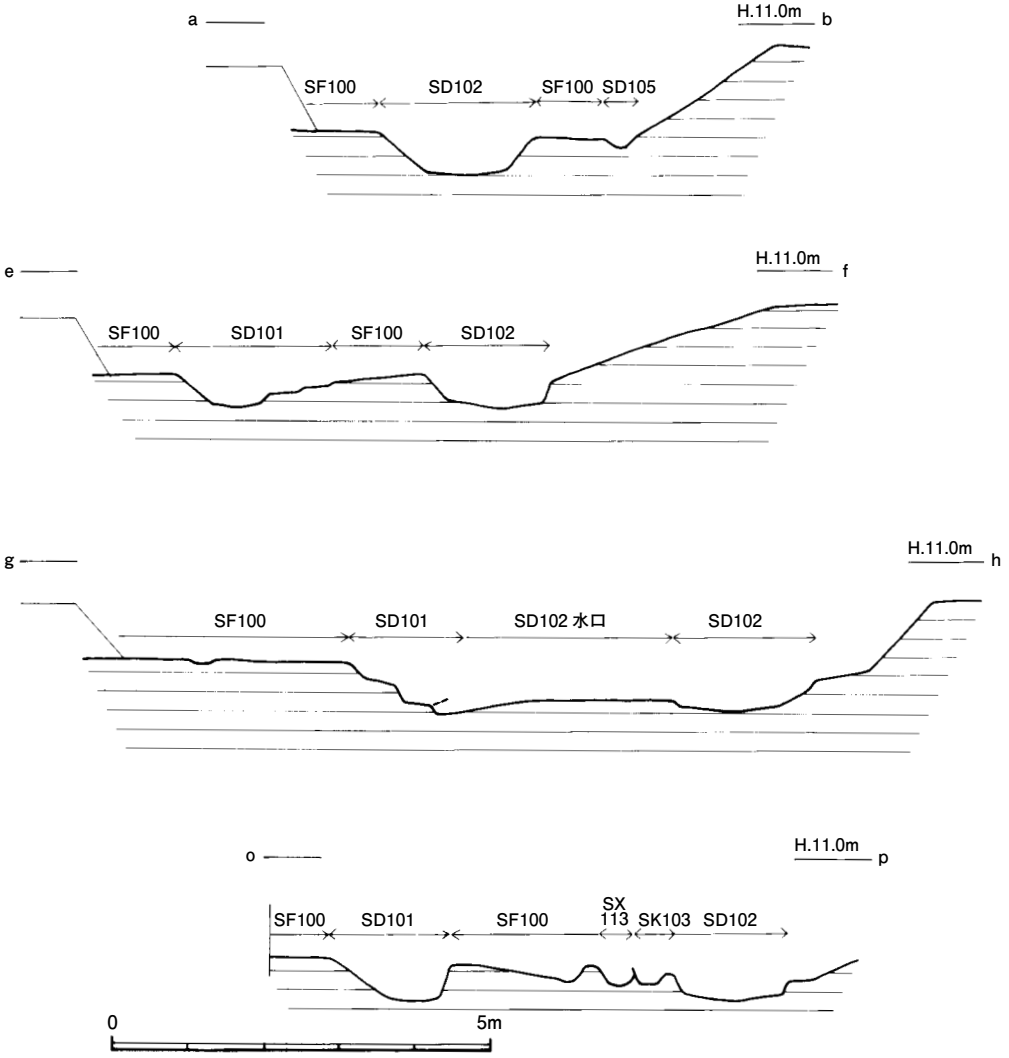


Fig.123　101・102号溝断面図（1/100）

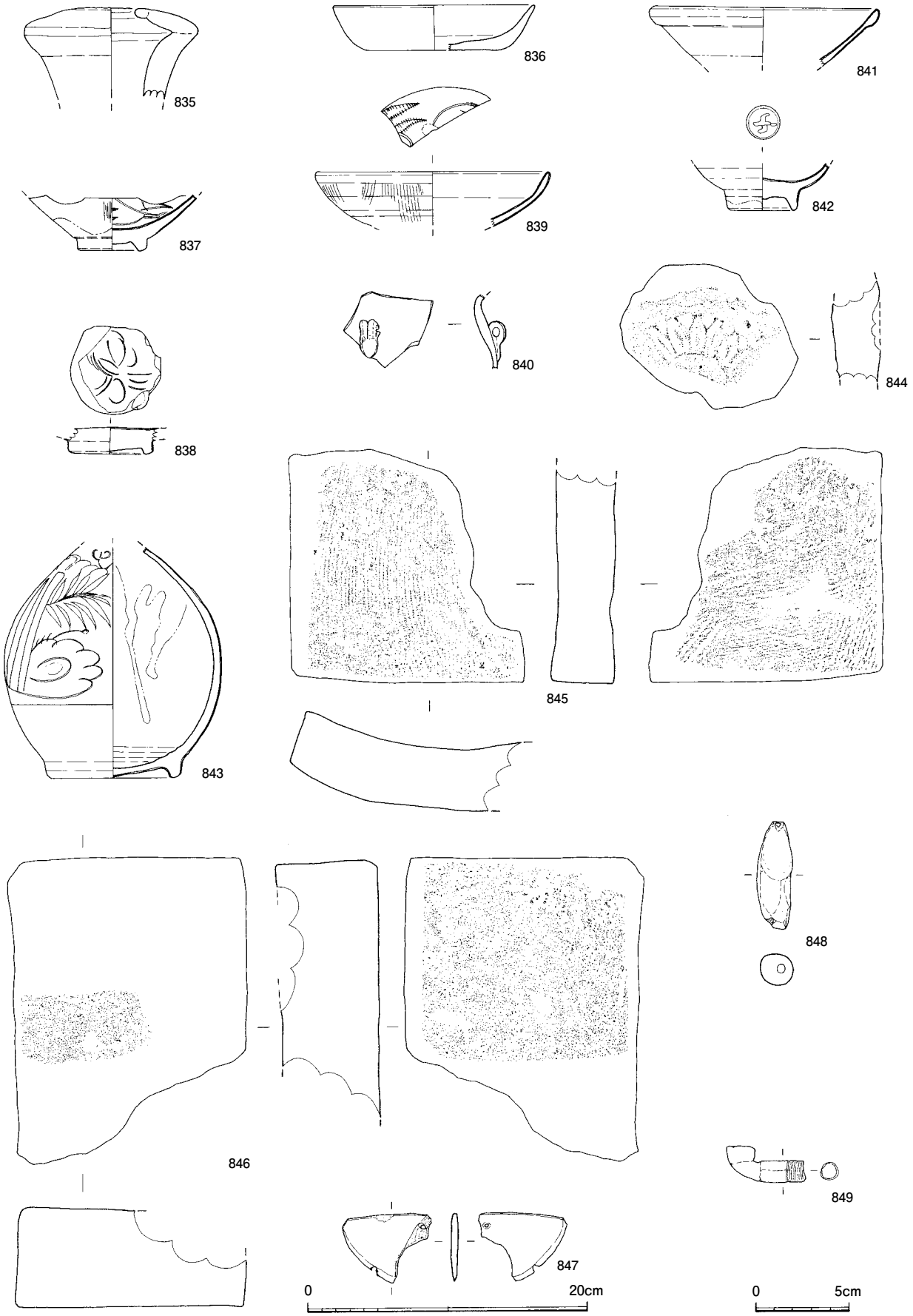


Fig.124　101 号溝出土遺物実測図(1/3・1/4)

ている。遺物は須恵器の大甕のほかに同安窯青磁碗や高麗青磁碗、肥前染付盃などが出土している。

出土遺物（Fig. 125　PL. 60）

850 は、口径が 30cm の須恵器大甕である。口縁部は、「く」字状に大きく外反し、下端は小さく摘み上げている。851 は、同安窯系青磁碗で、見込みに櫛描きの施文がある。高台径は 5.2cm、高台高は 0.9cm。852･853 は、青磁碗である。852 は、口径が 13.4cm。灰ベージュの緻密な胎土に暗いベージュの釉薬を掛けている。853 は、高台径が 5.4cm で胎土には淡明褐色粒を含む。854 は、胎土に明褐色粒を含み、高台径は 4.8cm。855 は、口径が 54cm の陶器平鉢である。857 は、高台径が 3cm の磁器碗で、体部には青花文を描いている。畳付は釉剥ぎで、目砂が付着している。858 は、口径が 6.8cm、高台径が 3cm、器高が 4.3cm の染付磁器坏で、体部には窓絵に松竹梅を描いている。19 世紀の産。

859･860 は泥岩質の砥石である。砥面が 4 面の仕上砥である。860 は、長さが 17.3cm、幅が 4.8cm、厚さが 4.9cm で小口面は未加工である。861 は、片岩質の凹石で表裏、両面に 2.4 ～ 2.9cm 径の敲打痕がある。長さが 11.9cm、最大幅が 11.5cm、厚さが 5.6cm。862・863 は石包丁である。862 は、粘板岩製の未製品である。863 は、立岩産の輝緑凝灰岩製石包丁である。刃部は丁寧に研ぎ上げている。

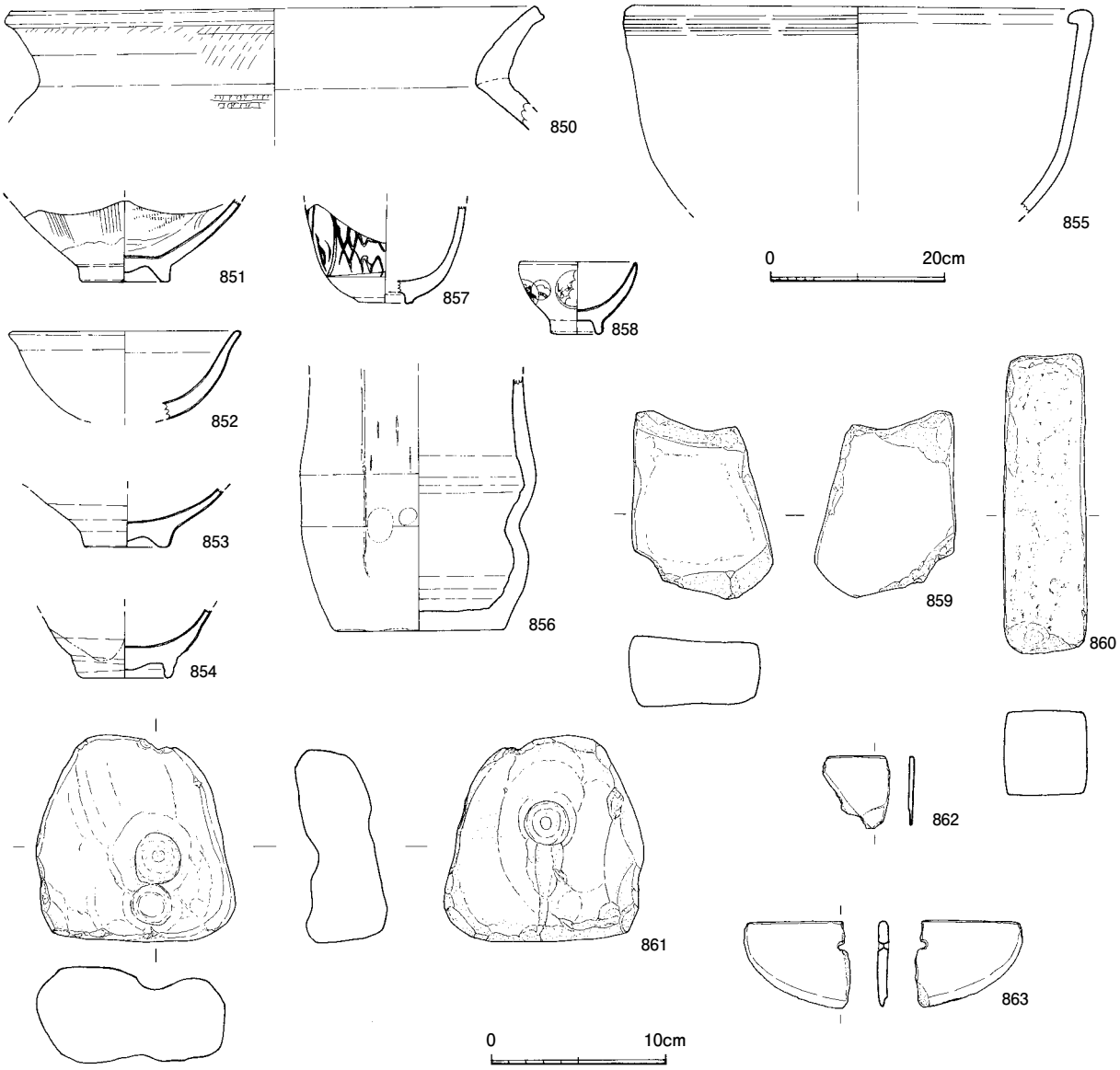


Fig.125　102 号溝出土遺物実測図（1/4・1/8）

Ⅲ．おわりに

高畑遺跡は、御笠川中流域左岸の洪積台地上とその裾野に拡がる弥生時代から古墳時代を経て古代、中世へと続く遺跡である。遺跡内ではこれまでに 19 地点で発掘調査が実施され、貴重な成果が報告されている。その最たるものが「高畑廃寺」と云われる寺院跡と「官道」であろう。高畑廃寺の由来は、台地の周縁部で瓦塼が出土することに加えて「寺」と記された墨書土器が出土していることによるが、一方で、徴税や郡名、郷名に関する木簡などの文字資料から「那珂郡衙」とする説もあり、未だ確たる結論は得ていない。いずれにしても瓦を葺き、塼を敷き詰めた重厚な建築物と官道とは密接な関わりを有しており、総合的な議論の展開が求められよう。

第 20 次調査での成果は、大きく以下の 5 点に要約される。

① 弥生時代中期後半～後期の集落域を検出した。

② 古墳時代中期の河川（大溝）から多量の土器や木製品が出土した。

③ 切通して開削された官道を検出した。

④ 井桁で堅牢に組上げられた古代の井戸と溝を検出した。

⑤ 井戸などから瓦塼と共に鬼瓦が出土した。

このうち、③～⑤は時期的な要素も含めて密接に関わるもので、個々には議し難い。ここでは一部重複するが、これまでの調査で得た問題点に第 20 次調査の成果を重ねて今後の備えとしたい。また、特記すべき点には項を改めて記述する。

はじめに、弥生時代の遺構としては竪穴住居と掘立柱建物、井戸、木棺墓がある。高畑遺跡ではこれまでに丘陵東部の第 11 次調査区で前期の貯蔵穴と後期の竪穴住居や井戸跡が検出されている。また、南縁の第 18 次調査区では中～後期の竪穴住居と井戸が検出されている。本調査区では貯蔵穴（前期？）と中期の竪穴住居と掘立柱建物および後期初めの井戸が検出されている。丘陵のすべてを消失している今は往時を偲ぶことはできないが、比較的平坦な丘陵の裾野一帯には集落域が展開し、眼下の沖積地には水田域が拡がっていたことが想起される。一方で、墓域の報告例はなく、木棺墓の検出は注目に値する。8 号木棺墓は木蓋を粘土で目貼りしたもので、1 点ではあるが碧玉製管玉が出土している。丘陵縁や河川からは大型甕片が出土しており、搬入がない限り集落構成員の墓域をその周辺に想定することが自然であろう。想像を逞しくすれば、削平された丘陵上あるいはその緩斜面上に展開していた可能性を指摘しておきたい。さらに調査区の東部で砂層に覆われた河川敷が検出された。いわゆる氾濫原で、これまでに第 1・15・17 次調査区で報告されている。本調査区での検出でこの氾濫原は、さらに抉り込むようにして西へ湾入していたことが明らかになった。旧地形図を元に復原すると弥生期の河川は、丘陵東縁の 12m の等高線に沿って第 17 次調査区から第 10・15・12 次調査区を経て本調査区に湾入した後に東に流れを変えて第 1 次調査区に至り、その東側の広大な範囲が氾濫原と考えられる。それは本調査区の河川が、西岸から 25m を超えても厚い粗砂層の堆積であることからも窺がえる。昭和 40 年に改修されて流れが安定するまでの那珂古川の古き姿であろう。ここに井堰を築いて流れを規制し、生産活動への寄与を図ったのであろう。本来の井堰とは云えないまでも、137 号河川に架設された 138 号井堰状杭列はそのひとつと考えて差支えあるまい。

いわゆる古墳時代の大溝について

高畑丘陵の東縁には、4 世紀後半から 5 世紀代の溝が北流しており、これまでに大溝として報告されてきた。本調査区で検出した流路もこれにあたり、これまでの予見を確証付けるものであった。こ

の流路は、第 10 次調査区に発し、第 15・16・12 次調査区を経て本調査区へ繋がり、第 4・7 次調査区へと延びている。流れとしては、第 10 次調査区から北西へ緩やかな左カーブを描きながら第 12 次調査区を経て本調査区へ繋がり、そこで弥生時代の河川の西岸に突き当たった後に、その西岸に沿って流れを北へ変えて第 4 次調査区へと続く。そしてさらに第 7 次調査区で L 字状に大きく屈曲して東方へ流れていく。先述したように、この流路はこれまで大溝として報告されてきたが、溝とはある意図をもった人工的な開削を意味するもの考える。その意味では前時代の河川の氾濫原たる砂層上に開削する人工物の意図に疑義が生じる。このことは第 12 次調査区でも砂層上にこの流路があると報告されている。この事実を踏まえて、ここでは敢えて氾濫原上に自然発生的に生じた流路として考えた。

さて、この河川（SD － 10）からは多種多様な遺物が出土しているが、大きくは土師器と木製品に大別される。まず土師器には、壷や小型丸底壷、甕、鉢、高坏、ミニチュア土器などが出土している。型式的な時期区分は細分が可能であるが、層位的には黒色～暗灰黒色の粘質土層から出土しており、明確な層位的区分はできなかった。しかし、器種的には、圧倒的に小型丸底壷が多い。しかも完形のものが多い。その反面、高坏は完形品が少なく、脚あるいは坏に分離破損したものばかりが目立つ。この傾向は、この河川のもつひとつの特徴とも云えようか。また、ミニチュア土器が比較的多く

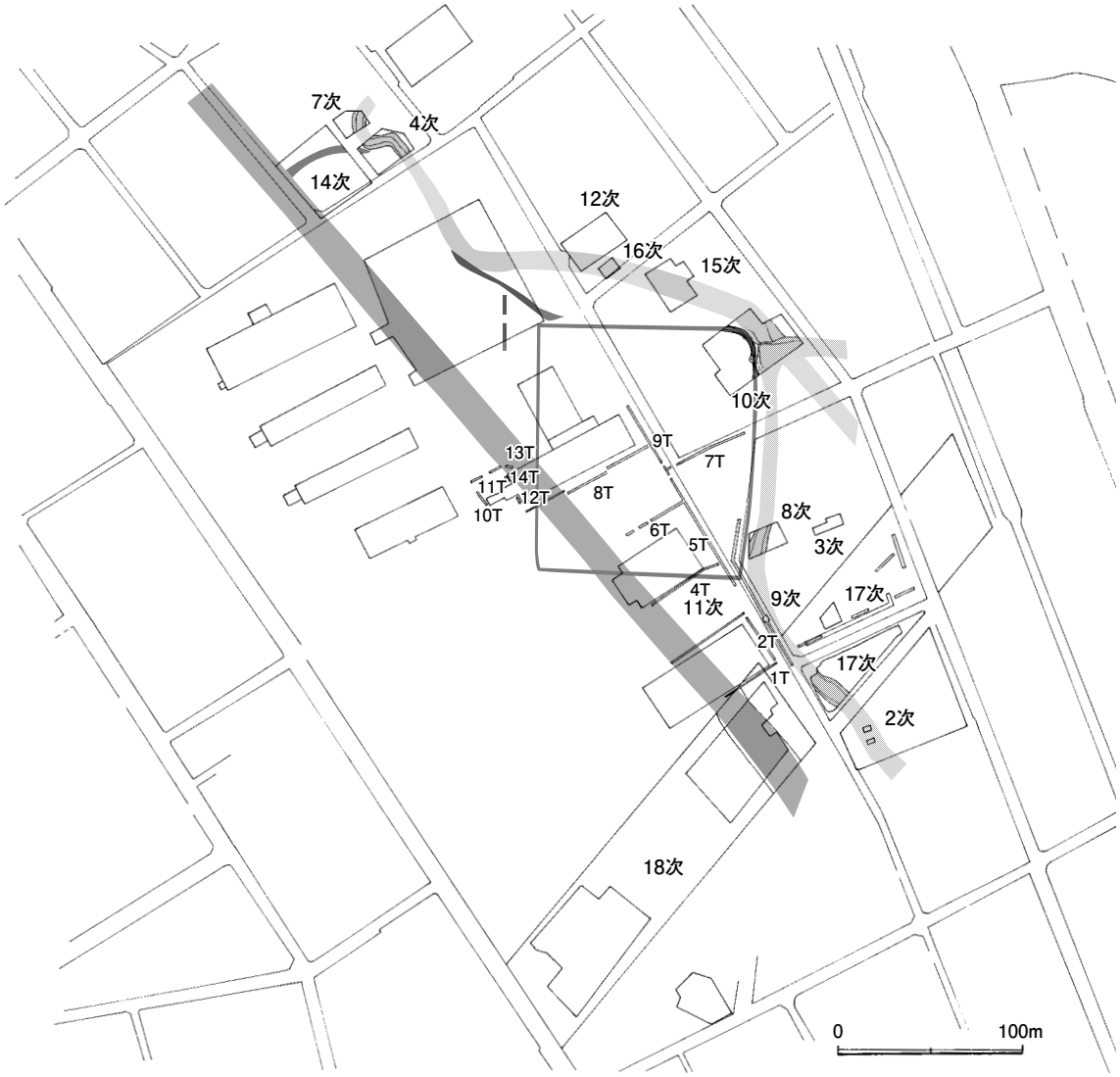


Fig.126　高畑遺跡主要遺構推定図(1/4,000)

出土していることは、木製品の中に舟形模造品があることを勘案すると周辺流域において何らかの祭祀的儀礼が行なわれたと考えることもできよう。丘陵の南縁に位置する第18次調査区Ⅱ・Ⅲ区では、5世紀代の竪穴住居群が拡がっており、その中には滑石製臼玉の製作工房跡の存在が報告されている。古墳時代中期のこの時期に、集落域の展開はひとつのピークを迎える。この住居群と河川は、時期的にはおおむね合致し、遺物の出土状況はこの間の消長を物語っているとも云えようか。土器の編年的分析は、諸般の事情で今回は見送った。今後改めて検討して報告することにする。また、ここから出土した遺物の中に特徴的なものがふたつある。ひとつは韓半島系の陶質土器がある。ふたつには瓌形壷である。この壷は、一瞬須恵器かと見紛うような土師器で、高畑遺跡第12次調査区2号溝、比恵遺跡第6次調査区1号墳周溝、那珂川町松木遺跡祭祀遺構など未だに出土例が少ないが、畿内地方では須恵器を模倣した土師器があることが知られている。また、須恵器生産の初期段階においては土師器を模倣したと思われる須恵器もあり、須恵器と土師器の交錯が指摘されている。いずれにしても、この両者は韓半島や畿内地方との交流が盛んに行なわれていたことの証であり、人的、物的な交流とその出現の背景を検討する必要がある。

一方、木製品も農具、工具、容器、紡織具、儀器、建築材など多種にわたって出土している。目を転じると、第4・7次調査区では、農具、工具、紡織具、儀器、什器、建築材が出土している。第12次調査区からも農具、工具、紡織具、儀器、武器、什器と建築材が出土しているが、農工具が圧倒的に多い。第10次調査区では農具、工具、紡織具、柄が出土しているが、圧倒的に農具が多い。これに対して本調査区では、大型建物の構造部材が比較的まとまって出土している。このように各地点において、その出土する器種構成に若干の相違があることが判る。これが何に起因するかは明らかでないが、流路のうねりがひとつの要因として考えられようか。第12次調査区から延びた流れは、緩やかな左カーブを描きながら137号河川に突き当たり、大きくL字状に反転して直線的に北流している。本調査区では、このうねりの中に大型建物の構造部材の堆積例が多く見られる。大きい構造部材は流れに押されてうねりの中に留まり、農具や紡織具などの小型品は押し流されて下流へといくようである。流水量に大きく左右はされるが。小型丸底壷をはじめとする土器も同じで、堆積物の多いところにまとまって留まり、流れの速いところほど疎らな在り様を示している。大型の構造部材については項を改めて記述したい。

構造部材について

第20次調査では、鍬鋤類（柄も含む）タモ枠、編み錘、紡輪連作未成品、槽、杓子、掛矢、腰掛け、傘轆轤、形代、曲げ物容器、横櫛など多様な遺物があり、これまでにもすでに類例が幾つも報告されている。なかでも、紡輪の連作未成品は西北九州に発見例が多く、それが何に因るかの究明が今後の重要な検討課題と云える。

出土遺物の中で、特に注目されるのが古墳時代の高床建物の構造部材と考えられる一群である。これらの部材は、同一建築物の廃材とは考えられない規格のばらつきがあり、また、出土状態からも現地性は低く、複数の建物の部材が流されたり河川内で護岸や堰などの用材として再使用されたりしたものと考えられる。また、製材板の端材もあり、建築材として長さをそろえた時の残りが同じ流れの中に埋積していたことになる。質量の異なる材が同じ流路の中にあることなどから、それが本来機能していたところにそのままの残されたものではなく、それほど遠くないところで構築されたものが再利用され、移動したものと想定される。

576（SD－10）は、1つの抜き孔と90度の位置の2面に対になった4か所のホゾ穴持つ長出ホゾ

付きの柱材である。広葉樹の芯持ち材で、約 200cm の柱の下位 90cm くらいの部分は、柱として埋められた時に劣化したと考えられる荒れが認められる。上位に 135cm ほどの長ホゾが作り出されている。長ホゾの最下位に、幅 4cm、高さ 12cm の抜き孔があり、ここに大引きを通し、床を渡したと考えられる。その上位に約 22 ～ 23cm の間隔で、直交方向に桟を伸ばしたと考えられる 4 対のホゾ穴が開けられている。このことからこの柱は、①隅柱であること、②高床の高さは 100cm ほどであること、③大引きの端部は建物の外に突出していた可能性があること、④外壁の高さは少なくとも 140cm ほどであること、⑤壁面の桟が柱の軸上に開けられたホゾに納まることから、壁板は縦に連接された可能性が高いことなどが明らかになった。

それからすると、578 は抜き孔に端部を差し込んで横架させ、床を貼る桟を通す貫孔群を持つ大引き材の欠損品と考えられる。576 の貫孔と 578 の大引き材端部の大きさは、ほぼ対応するが、同一の建物とは断定しかねる。ただし、貫孔形状と大引き材の断面形状は類似しており、北部九州の高床建物のなかで、それほど大規模でない倉庫建物の軸組が、角材というよりも厚板で組まれ、垂直方向からの加重に対しての応力を考えたためか幅広の部位を上下にして柱に組み込んでいたことが窺がえる。大引きの貫孔は大きく収納物が重量のあるものを想定した高床建物であると考えられる。

年輪界に沿った割板の湾曲面の、木表側の中軸線付近を削り、木裏側の両側縁近くを削って平坦面を作った板や、放射線面で割り取った板の外側部分の厚味を除去して平坦面を作った板があり、厚いものは床板、薄いものは壁板と考えられた。中には片剝や綴じ孔を開けたものがあり、板の連接作業の工夫が認められるものもある。

583 は半割り材を加工した梯子で、高床建物の出入り口にかけられたものと考えられる。

585・586 は、面加工の少ない割り板で、幅を一定に整えた部材である。割り面を手斧整形せずに木理にそって割ったままにしてあり、585 のように端部付近に方形の孔が付けられているところから、静岡県瀬名遺跡で想定された屋根板と考えられるものである。586 は、留め孔はないが、類似加工で厚みの異なる部分があり、板重ねのような作業を考えたものとして、屋根板の可能性があると考えた。

有頭棒 550・573 は棟木の可能性もある横架材である。横架時に端部の瘤状に作り出して柱の受け部にかける棟木は広葉樹の芯持ち材を結び留めする際によく用いられる手法で、縄文時代、弥生時代を問わずに多用されていた。この材を高床倉庫の屋根に想定するのにはやや抵抗があるが、しかし、広葉樹建築であること、独立した棟持ち柱で支える建築物が弥生時代にはみられることなどから、古墳時代であっても北部九州の用材法であれば別の建物の棟木として考えることは可能であろう。殊に 550 の端部加工が、瘤を一方向に偏らせているところは、柱上部の輪なぎこみ部への落とし込みや、又による受けのどちらの場合でも固定時の安定性を保つ工夫と考えられる。ただし径がないので、この構造部材が建物の部材かは断定できない。柵材などの可能性も考えておく必要があろう。

屋根組みに関連する部材として、582（自在鈎の可能性あり）がある。端部のえぐり加工は、垂木の可能性もあるが、発掘時の不手際から反対側の部位が屈曲している。

576 のホゾに納まる桟材の可能性がある割り角材が 10 点程度確認された。桟材はしっかりとした面調整をせずに、端部に組みこむ際の簡単な面取り加工が見られるくらいのものなので、単独で検出される今回のようなケースでは、部位同定は非常に困難である。ただし、楔割り製材で作ったと考えられる小角材は、むしろ厚板と云えるような断面系が 1：2 以上の差のあるものが多かった。この傾向は 576 のホゾの形状とは相関するものである。

古代の井戸材や構造部材にはスギ材が多く使用されていた。しかし、古墳時代の構造部材は、タブノキ・ツブラジイ・クスノキ・アワブキ属などであり 576 はタブノキである。北部九州のこうした用

材傾向は、スギ・モミなどの針葉樹材が全くない訳ではないが、特徴的なものと云える。こうした広葉樹材は、当時の楔割り製材での加工で、長軸材を得ようとすると木理による捻じれ割れを起こし易い。骨格材は、芯持ち材のまま使用することが一般的であり、家屋の規模にも影響をあたえる。

第20次調査では、大枠ながら高床建物の各部位を推定でき、その用材傾向と木取り方、規模を知ることができ、今後の発見例の増加を待ってさらに検討を加えることが重要である。(小林義彦)

138号井堰出土の木製品について

138号井堰状杭列は、137号河川のなかに構築されており、その時期は、137号河川及び138号井堰状杭列に伴う土器などから、おおむね弥生時代後期であると判断される。

今回出土した木製品のうち、138号井堰状杭列の出土品のほとんどは、井堰状杭列を構築するために用いられたものであり一括性が高い。特に杭列1～44としてTab. 9～12に計測値を載せたものは、出土位置も明確である。また報告を載せたFig-28の88、Fig-29の91・93、Fig-30の98、Fig-31の99、Fig-32 の100から105、Tab. 12～15の杭列102・104・106・109・110・112・114、201から204、501から529、901から909としたものも、138号井堰状杭列出土である。

これらの木製品はほとんどが杭として加工された物であるが、はじめから杭のために加工されたもの以外に、転用品や再加工品も多く見られることから、ここで若干の検討を加えることとする。

138号井堰状杭列の出土品の最終的に計測や観察ができたものの総数は103個体である。そのうち、農具などの製品が5個体(5%)、建築材が9個体(9%)、板材が9個体(9%)、加工棒材が4個体(3%)、杭としたものが67個体(65%)、不明が9個体(9%)である。ここで杭としたものは、先端に杭用の加工が施されたものと、杭用の加工は見られないが、検出時に縦方向に打ち込まれていたものを含む。

製品には、方形孔の三又鍬、鋳造鉄斧の柄、横槌、団扇、タモ枠があり、これらはいずれも138号井堰状杭列に引っかかるかたちで出土している。個別の観察は本文中で述べたので、ここでは省略するが、農具･工具･儀器･漁具など、生活全般に関わるものである。137号河川を流されて、ひっかかったものであろう。

杭としたものうち先端に杭用の加工が見られるものは62個体で、杭全体の93%である。杭のうち転用品は24個体で36%である。多くは杭用の加工のみであり、加工痕が明瞭なものも多いため、井堰を構築する際に粗い加工を施して使用したことが分かる。しかし、転用品の割合も36%と決して低いわけではない。

転用品の内訳は横架材が9個体、柱材が2個体、垂木が8個体、サスが3個体、加工棒材が1個体、不明建築材が1個体である。ほとんどが建築材の転用であり、横架材や柱材は端部を半分切り取った仕口の加工やホゾ孔のあるものもあり、両端が細くなるような加工も見られる。垂木やサスにも、組み合わせるための仕口や加圧によるへこみ、紐かけの痕跡が見られるものが多い。高床式建物や竪穴住居の建築材を転用した物と考えられる。

また杭ではないとしたものも、それらの形状や加工痕を観察すると、建築材・板材・加工棒材であり、本来別の用途で使用されていた木材を再利用して、杭に対して横位にわたして井堰の横木としたり、深く打ち込んで杭列の基礎としたりしたものが大半と考えられる。これらの建築材の中にも長ホゾ柱や端部の半分を切り取ったような仕口のある柱や横架材が含まれる。板材には、5mmほどの小孔をもつ曲物の底板や、建物の壁板に用いられたと思われるものもあり、これらは転用材と考えられる。そのほかは加工板材で、細かい用途は不明である。加工棒材も四角に面取りしただけでなく、先

端部をやや細く面取りしているものもあり、それは井堰構築用の木材加工というより、本来別の用途であったものの転用材であろう。

また、103 個体中 7 個体が火を受けており、杭、横架材、柱、加工棒材が含まれる。これらは火災住居の転用材の可能性が高い。杭用の加工しかみられないものも、長い垂木などの燃えた部分を切断して、再利用した可能性もある。

このように 138 号井堰状杭列には建築材の転用材が一定量見られ、その中には火災住居の焼け残った木材のうち利用できる部分を再利用した様相も看取される。こうした状況は弥生時代後期における木材の再利用の一端を示している。

次に木取りについて検討する。

全体では、芯持材が 72 個体（70%）、半割が 13 個体（12.5%）、板目が 8 個体（8%）、柾目が 5 個体（5%）、ミカン割が 2 個体（1.5%）、不明が 3 個体（3%）である。

多くが芯持材であり、次いで半割材が多い。板目材や柾目材も若干見られる。

杭加工ありとしたもののうち芯持材が 47 個体、柾目が 2 個体、ミカン割が 2 個体、半割が 9 個体、不明が 2 個体である。

このうち、転用材ではなく杭加工しか見られないものは 38 個体あり、芯持材が 32 個体、半割が 6 個体である。ほとんどが芯持材の自然木の先端のみを杭に加工したもので、樹皮が付いたままのものも多くある。杭は井堰を構築する際に多量に必要であり、川の中の構築物で表面の加工も必要ないため、最小限の加工のみ施されている。

建築材には、杭に転用したもの、していないものを含めて、横架材 11 個体、柱材 9 個体、垂木 8 個体、サス 3 個体、壁板 1 個体がある。それぞれの建築材について木取りを見ていく。

横架材のうち、芯持材が 4 個体、半割が 2 個体、板目が 2 個体、ミカン割が 2 個体、柾目が 1 個体である。芯持材が多いが、さまざまな木取りがあり、特定の木取りというわけではない。

柱材は芯持材が 8 個体であり、柾目が 1 個体ある。木取りが芯持材に偏っており、ほとんど丸太材で、仕口やホゾ孔以外は表面を面取り加工するものもほとんどない。樹皮の残るものもある。

垂木は芯持材が 7 個体であり、半割材が 1 個体である。芯持材に偏っており、仕口以外は表面を面取り加工するものはほとんどない。樹皮つきのものも多い。

サスは 3 個体すべて芯持材である。仕口以外は表面を面取り加工するものはほとんどない。樹皮つきのものも多い。

壁板は板目板である。残存状況があまりよくない。

このように、建築材の大半が芯持材であり、横架材や柱材などにおいてもほとんど自然木に仕口やホゾ孔の加工を施したものである。

弥生時代における建築材の特徴として、縄文時代の木の股や切込み、抉りを利用し、縄や紐で固定する方法とは異なり、貫孔や組孔、端部を半分切り取った組仕口が現れることと、丸木材が多く、面取りした柱材がほとんど見られないことが指摘されており（山田昌久 1986）、138 号井堰状杭列に見られる建築材の特徴も、こうした指摘と一致する。

樹種については、杭列 35 とした横架材の転用と思われる杭が、古環境研究所による樹種同定の結果、ツブラジイと同定されている以外は、筆者の肉眼観察では判定が困難であった。

最後に 138 号井堰状杭列に使用された木製品の特徴について以下にまとめる。

①大半は杭用に加工されたものである。

②転用材も一定量あり、建築材の転用が中心である。

③転用材には火災住居のものもある。
④芯持材が主であり、建築材であっても、ほとんど自然木に加工を施したものである。
⑤弥生時代後期における木材の再利用の特徴の一端を示す。（谷　直子）

井戸について

井戸は、地下水を汲み上げる目的で掘った施設の総称で、構造的には、①汲み出す人の安全と汚水の流入を防ぐ地上施設の「井桁」と②地中の井戸壁の崩壊を防ぎ、壁面を保護する「井戸側・井筒」、③湧き水を溜める底部分「水溜り」からなる。一方で、形態的には、①素掘り、②木組、③石組、④土製品組に4区分される。このうち素掘りを除く井戸は、用材の形状によって、②木組井戸は丸太刳り貫きと板組・曲物積上げ・桶積上げに、④土製品組は瓦・土器・土管・塼・漆喰などに細分される。

井戸の初現は、稲の栽培が定着した弥生時代に始まり、水稲耕作の先進地域である福岡平野では、中期後半に比恵那珂などの台地上に出現する。弥生時代に始まった素掘りの井戸は、壁面の崩落防止を目的として木組の井戸側が内部主体に導入される。時期的には、弥生～古墳時代は素掘りの井戸、古代には木組井戸、中世は石組井戸が主体となり、近世になって土製品組井戸が出現する。本調査区で検出した9号井戸は、将に木組の井戸が盛行する古代である。井戸側の形態としては、厚い加工材を積上げた木組で、井戸底には刳り貫き桶の底を打貫いて筒状にして埋置して水溜りとしている。この上面に厚い加工材を井桁状に組んで積上げている。ここで注目すべきことは、①桶の裏込めに完形の平瓦や丸瓦・塼を詰めていること。このうち塼には、擦痕と2次被熱による煤が付着していた。②水溜りの桶底に鬼瓦片と曲物が投棄されていたこと。また、この鬼瓦片と井戸検出面から出土した鬼瓦片が接合したこと。③裏込めのない南東部では加工材を組み上げた時点で木組み枠の沈下が始まり、慌てて板材を横架して沈下を阻止していること。④木組みの加工材は厚い床板材の転用品であること。⑤木組みの最上段に「神功開寶」が置かれていたことの5点が挙げられる。一説に、井戸の型式や規模は、設置する施設の性格や機能・格式に反映される場合もあると云われている。例えば、平城宮では、幅が30cm、厚さが10cmの板材を2m以上の内法で井桁に組上げている。しかも板材には、組む場所と順番をしていた例が報告されている。また、井戸内からは、専用に作った釣瓶や釣瓶の代用品と考えられる瓢箪や土器のほか鏡、石製品、櫛、斎串、銭貨が出土しており、井戸の開削、使用、廃棄に際して執り行った水神や井神への祭祀を容易に想起させる。この事例は、「高畑廃寺」とされる施設を考える上できわめて重要なキーワードとなる。

古代官道について

本調査区の道路遺構は、標高14m余の丘陵を開削して切通した道路跡で、水城東門跡から博多遺跡群にむかって一直線に延びる、いわゆる「水城東門ルート」と呼称されている官道の一部である。この官道は、第18次調査区で報告されている官道の延長線上にあり、旧地形図から存在が予測されたものであった。路面は、長年に亘って耕作地として加耕されていた所以か軟弱で、幾つもの牛足痕は残っているが、第18次調査区で報告されている波板状遺構や道路幅を規制する側溝は検出されていない。側溝の不備は、道路幅員の減少を来たす側溝の開削を避け、雨水の排水は切通しの最高所から南北の低所へ自然排水したとも考えられる。この切通し道路は、南は第18次調査区を経て井相田C遺跡第1次調査区、第10次調査区、井相田E遺跡第・次調査区と続いて水城東門跡へと繋がる。この東門から更に南は、太宰府市国分尼寺第12次調査区から関屋を経て大宰府政庁へと繋がる。一方、北へは板付第56次調査区から第38次調査区、第41次調査区、第6次調査区を経て那珂君休遺

跡第3次調査区へと1,300mほど直線的に延びている。この先は博多遺跡群に辿り着き、真北に主軸をとる8世紀後半頃の方形区画溝があり、その周辺からは老司式瓦や鴻臚館式瓦のほかに石帯や「長官」と墨書された土器が出土しており、「筑紫館」と云われる官衙の存在が示唆される。この道路遺構の路面上や加耕地化後の水路や土壙からは弥生時代から近世までの遺物が出土しており、直ちに切通し道路の開削期や廃絶期を明確に示すことはできないが、近接する第18次調査区の道路遺構から推察すると8世紀前半に開削されて9世紀初めまで機能していたが、それから11世紀中頃まで間は道路としての機能が一旦放棄されている。その後11世紀後半に再び道路としての機能を回復するが、12世紀前半代に放棄されて顧みられることなく加耕地化する。

いわゆる高畑廃寺について

高畑遺跡周辺では、古代の溝などから瓦塼や「寺」と墨書された土器、木簡などの出土品のほか礎石らしき大石群があったとする古談から丘陵上に方1町余の寺域をもつ「高畑廃寺」の所在が推定されていた。これに対して、寺院遺跡では余り出土しない舟形、鳥形、斎串、陽物形木製品などの木製祭祀遺物や人面土器のほか「□石」や「□升」など穀物の数量を示す木簡や徴税、郡名、郷名に関する墨書土器があり、8世紀中葉から10世紀にかけての「那珂郡衙」の移転推定地とする見解が示されているが、未だ結論を見るには至っていない。

本調査区に南接して推定復原されている「高畑廃寺」には二つの見解が示されている。しかし、いずれが正かは俄かには断じ難いが、出土品の中には幾つかのキーポイントがある。まず、高畑遺跡からは多くの瓦塼が出土している。本調査区では、9号井戸や136号溝から平瓦、丸瓦、大宰府式鬼面文鬼瓦が出土している。このうち厚い平瓦は技法的に8世紀前半代まで遡るが、外区に連珠文と面違いの鋸歯文、内区に直線的な偏行唐草文を配した瓦当は9世紀前半まで下ると思われ、時間差が大きい。これを創建と廃絶の時差と考えることもできよう。8世紀中葉頃と思われる大宰府式鬼面文鬼瓦は、大小の2タイプがあり、大棟鬼瓦と隅鬼瓦の可能性がある。一方、素文塼は、表面に擦過痕が観られ2次被熱による煤が付着している。これは被災したことを意味し、井戸の開削時に裏込めとして転用されたものである。同じ那珂郡内にある井尻廃寺では塼は出土していない。また、井戸枠に使用された木枠材は、加工痕や木取りから厚い床板材の転用品と考えられる。井戸の型式や規模は、設置する施設の性格や機能・格式を反映する場合があり、併設する施設の機能や性格を考える一助となろう。

古代に瓦を葺く建物は、公共性がきわめて高い国府や国分寺、国分尼寺などの寺院に限られ、郡衙では今のところその事例を見ていない。ただし、郡庁と郡寺、祭祀的施設とが一体となった郡衙では、郡寺に瓦を葺く事例がある。「高畑廃寺」は、地勢的に那珂郡と御笠郡の郡境に位置している。6世紀後半代に比恵丘陵の北端に在った「那津官家」の後身的な官衙「那珂郡衙」が6世紀末～8世紀前半まで那珂丘陵上にあり、8世紀中葉以降に郡境の高畑丘陵に移ったとする説にはやや説得力を欠く。郡衙の大棟に鬼瓦を置き、塼を敷き詰めた瓦葺礎石建物を要す必然的条件を明らかにすることが求められる。一方、丘陵を縦断する官道も大きな意味をもつ。いわゆる官道は、古代の特定の官衙間を結ぶ幹線道路で「延喜厩牧令」に駅路を往来する駅使らに駅馬、食料、宿泊所などの便宜を与えるために30里（16km）ごとに駅家を設置するとあり、その施設としては、門・倉・屋・築垣・楼・駅館などがある。山陽道安芸駅家とされる広島県下岡田遺跡では、瓦葺礎石建物と掘立柱建物が、布勢駅家とされる兵庫県小犬丸遺跡は、80m四方の規模で瓦葺礎石建物に井戸などの付属施設があり、山陽道には「蕃客に備えて瓦葺き粉壁を備えていた」駅館が多い。これに倣えば、「高畑廃寺」は官道を上っ

て来た「蕃客」に対して荘厳さで威容を誇示する寺院跡もしくはそれに順ずる公的施設か、あるいは山陽道的な駅家的施設と考えるのが妥当なようである。

次に、旧地形図を参考にしてその所在地を復原すると、まず官道の西側に屹立する標高 14m の丘陵頂部がある。官道を上って来た「蕃客」にはもっとも威圧的に映ろう。しかしながら東西が 30m 余、南北が 100m と面的空間の確保にはやや不向きな感がある。次に、丘陵の南部には標高 12m のラインに区画された東西幅 120m、南北幅 200m の広い空間があるが、中央部を横断した第 18 次調査区ではそれらしき遺構は検出されていない。一方、本調査区の南には官道から磁北方向に延びる切通しがあり、その南には東西幅が 80m、南北が 70 ～ 140m ほどの空間が拡がっている。分布地図では、この空間に方 1 町余の寺域が復原されている。しかしながらこれでは、寺域が官道上を覆い、不都合が生じる。寺域規模を 70 ～ 80m 四方に縮小すれば十分に可能であり、切通しの北にある本調査区の 9 号井戸と陸橋部をもった 1 号溝も付属施設のひとつとして捉えることができ、これを含めれば寺域はさらに拡がりをもつ。これはひとつの案として示したもので、今後予定されている警察学校講堂および事務棟の建替え計画の進捗によって明らかにされよう。（小林義彦）

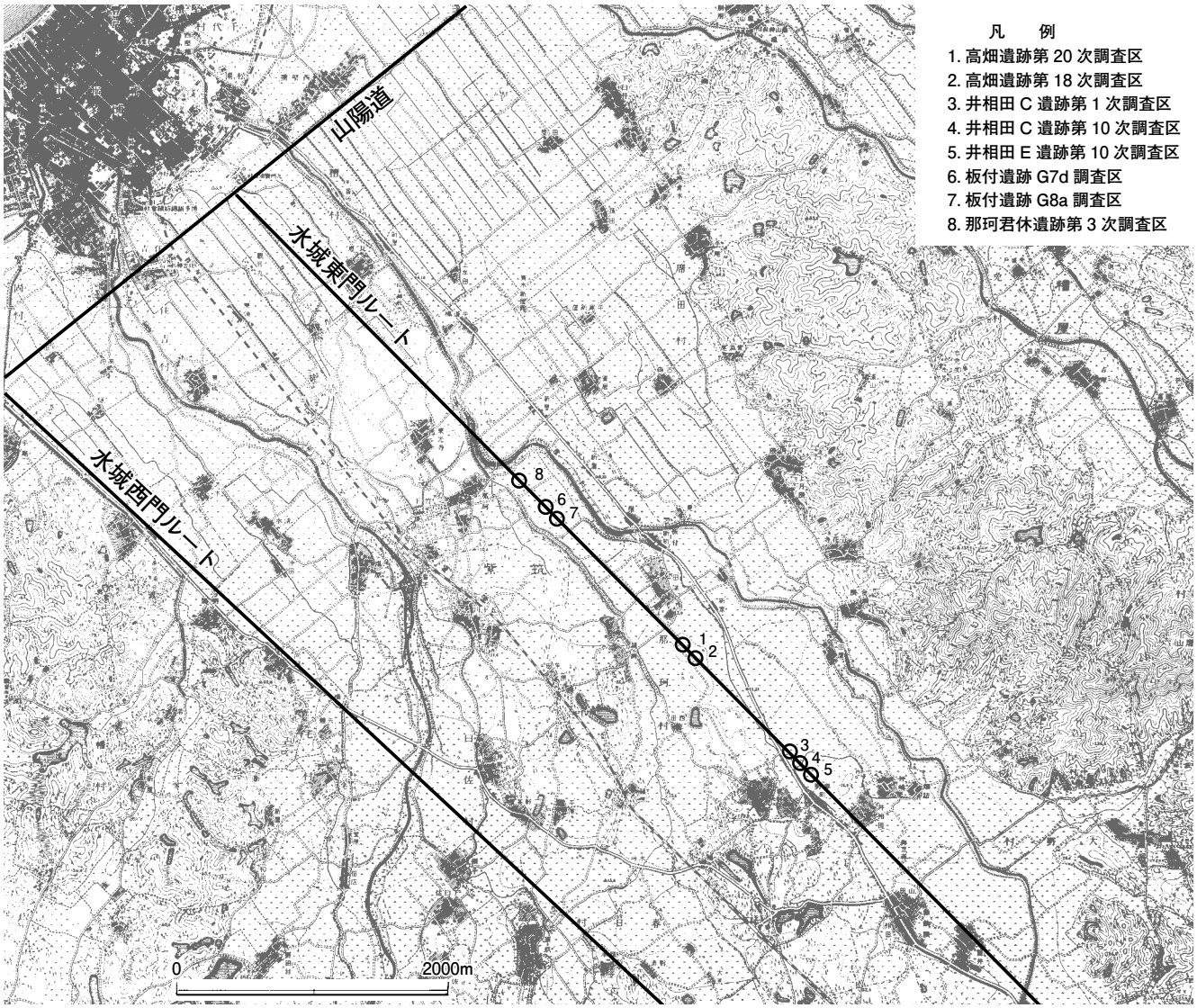


Fig.127　水城東門・西門ルート復原推定図（1/50,000）

Tab.71　古代官道（道路状遺構）一覧表 70

遺跡名	所在地	遺構名	長さ（m）	幅（m）	路面の状態	硬化	側溝	波板	カット	切通	盛土	時期	備考	文献
高畑遺跡20次	博多区板付6丁目1－5	SF-100	55	9						○		8ｃ～12ｃ	水城東門ルート	
高畑遺跡18次	博多区板付6丁目地内	SF-002						○		○		8ｃ～12ｃ	水城東門ルート	本報告
井相田Ｃ遺跡1次	博多区井相田2丁目12－6	溝状遺構ＳＤ292と293の間	52	8〈11〉			○					9ｃ後～10ｃ初	水城東門ルート	市報152集
井相田Ｃ遺跡10次	博多区井相田2丁目	SD01		8			○						水城東門ルート	市報179集 山村1993
井相田E遺跡1次	博多区井相田3丁目8－1	SD001･SD007の間	16	7			○					8ｃ～12ｃ	水城東門ルート	
板付遺跡群Ｇ7d地区	博多区板付5丁目1－14	道路状遺構ＳＦ01	16	3～5			○？					8ｃ	水城東門ルート	市報115集 山村1993
板付遺跡群Ｇ8a地区	博多区板付5丁目1－20	道路状遺構ＳＦ01	3.4	1.5～2.7	砂質土		○？				○	8ｃ	水城東門ルート	市報83集　大庭2001
那珂久平遺跡3次	博多区那珂4丁目	第1号溝	39				○					8ｃ～12ｃ	水城東門ルート	市報133集 山村1993
有田遺跡群3次	早良区有田1丁目23－1	1号溝	63.6	9～			○					平安	肥前北部ルート	市報155集 山村1993
有田遺跡群49次	早良区小田部2丁目20－21	2･3号溝	5.3･7.8				○						肥前北部ルート	市報110集 山村1993
有田遺跡群124次	早良区有田1丁目24－4						○					平安	肥前北部ルート	年報2　山村1993
有田遺跡群164次	早良区小田部2丁目106	溝状遺構ＳＤ01	28	4.5～			○					奈良 （8～9ｃ初）	肥前北部ルート	市報308集 山村1993
有田遺跡群169次	早良区有田1丁目25－1他	溝ＳＤ105	18				○					平安初	肥前北部ルート	市報339集
有田遺跡群174次	早良区小田部2丁目194他						○？						肥前北部ルート？	年報8
鴻臚館遺跡17次	中央区平和台球場跡地	犬走り通路ＳＦ1055										奈良～平安		市報695集
		通路ＳＦ1060										奈良～平安		
原遺跡10次	早良区原5丁目1225－7他	大溝ＳＤ06	49～ 57.6	5.3～5.8			○					～12ｃ以前	肥前北部ルート	市報215集 山村1993
原遺跡14次	早良区原6丁目21－35	溝ＳＤ07	18	5.2			○					8･9～12ｃ	肥前北部ルート	市報295集 山村1993
塚田南遺跡	糸島市二丈大字深江2055－1他		120	〈6〉		○		○				7ｃ末～8ｃ初	古代道路跡	県年報平成8年度 日野1999
石崎･曲り田遺跡3次	糸島市二丈大字石崎字曲り田			6		○	○		○				西海道跡	県年報平成11年度 日野1999
春日公園内遺跡	春日市春日公園内		200～	9		○	○					～9ｃ中	水城西門ルート	山村1993　春日市史
九大筑紫地区遺跡群	春日市春日公園6－1	溝ＳＤ101	99				○					平安	道路側溝 水城西門ルート	九大第二冊 山村1993
九大筑紫地区遺跡群	春日市春日公園6－1	版築状遺構ＳＸ301		～30							○	～12ｃ	水城西門ルート	
先の原遺跡1次	春日市航空自衛隊春日基地内			10			○						道路側溝 水城西門ルート	山村1993　春日市史
先の原遺跡2次	春日市航空自衛隊春日基地内						○						道路側溝 水城西門ルート	山村1993
池田遺跡	大野城市大字上大利398－8他	盛土状遺構	12～15	～34							○	8ｃ前	水城西門ルート	市報51集
谷川遺跡	大野城市下大利4丁目742－1	溝ＳＤ01･03	5.8～13	9〈10.5〉			○					7ｃ後～12ｃ初	水城西門ルート	市報51集
国分千足町遺跡5次	太宰府市国分3丁目337－1	溝（落ちの可能性あり）					○？					奈良～平安	水城東門ルート？	県年報平成7年度
筑前国分尼寺跡12次	太宰府市国分428－2他	溝12ＳＤ005	4.2				○					～8ｃ代	水城東門ルート	市報16集　山村1993
水城跡20次	太宰府市国分195	Ｂトレンチ											水城東門跡からの道路の一部	九歴1994
前田遺跡1･3･4･5次	太宰府市向佐野444－1他		157	9〈11〉			○					奈良	水城西門ルート	山村1993 太宰府市史
前田遺跡10次	太宰府市向佐野字前田703	溝10ＳＤ001と100の間	8.2～ 10.2				○					～9ｃ	水城西門ルート	市報44集
水城跡26次	太宰府市吉松字星ヶ浦447－1他	溝ＳＤ101と102の間	9.2～47	12			○					8ｃ	水城西門ルート	県年報平成7年度 九歴1996
原口遺跡2次	太宰府市向佐野字原口	溝2ＳＤ045と050の間	89	7			○					7ｃ後～8ｃ前	水城造営に関わる道路	狭川1993　山村1993
御笠川南条坊遺跡3次	太宰府市太宰府字泉水2743－1	溝ＳＤ306･307･308					○？					11ｃ後～12ｃ前	条坊関連道路	福岡南バイパス3 太宰府市史
御笠川南条坊遺跡4次	太宰府市太宰府字泉水2791－7	溝ＳＤ402･403･404					○？					11ｃ後～12ｃ前	条坊関連道路	福岡南バイパス3 太宰府市史
御笠川南条坊遺跡5次	太宰府市太宰府字平野他	溝ＳＤ503･504･505					○？					11ｃ後～12ｃ前	条坊関連道路	福岡南バイパス2 太宰府市史
御笠川南条坊遺跡6次	太宰府市太宰府字泉水2695	溝ＳＤ606･609					○？					11ｃ後～12ｃ前	条坊関連道路	福岡南バイパス6 太宰府市史
大宰府条坊跡16次	太宰府市通古賀1018－1他	溝16ＳＤ087と088の間	10	3			○					～11ｃ後	条坊関連道路	市報7集 太宰府市史
大宰府条坊跡16次	太宰府市通古賀1018－1他	溝16ＳＤ092	4.6				○					～11ｃ後	条坊関連道路	
大宰府条坊跡34次	太宰府市通古賀1088－1	溝34ＳＤ080と090の間	36	3			○					～奈良	条坊関連道路	太宰府市史

Tab.72　古代官道（道路状遺構）一覧表 71

遺跡名	所在地	遺構名	長さ（m）	幅（m）	路面の状態	硬化	側溝	波板	カット	切通	盛土	時期	備考	文献
大宰府条坊跡34次	太宰府市通古賀1088－1	34ＳＤ225と232の間	36	3？			○					11ｃ	条坊関連道路	
大宰府条坊跡44次	太宰府市通古賀1087	溝44ＳＤ005と025の間	6	4			○					～11ｃ後	条坊関連道路	市報28集 太宰府市史
大宰府条坊跡53次	太宰府市通古賀1071	溝53ＳＤ045	4				○					～11ｃ後	条坊関連道路	太宰府市史
大宰府条坊跡58次	太宰府市通古賀42－1他						○					11ｃ後～12ｃ前	条坊関連道路	太宰府市史
大宰府条坊跡64次	太宰府市南287他	溝64ＳＤ140	23.3	【36.6】			○					8ｃ前～後	朱雀大路東側溝	市報37集 山村1993
大宰府条坊跡64次	太宰府市南287他	64ＳＤ110	19.5				○					9ｃ中～後	朱雀大路東側溝	山村1993
大宰府条坊跡71次	太宰府市観世音寺123	71ＳＸ600Ａ	23	2.5～ 【10.4】			○					11ｃ後～12ｃ前	条坊関連道路	太宰府市史
大宰府条坊跡75次	太宰府市通古賀42－1他	溝75ＳＤ003と050の間					○					11ｃ後～12ｃ前	条坊関連道路	太宰府市史
大宰府条坊跡81次	太宰府市通古賀1088－3	溝81ＳＤ245	5				○					～11ｃ後	条坊関連道路	太宰府市史
大宰府条坊跡87次	太宰府市通古賀2丁目249－3他	道路87ＳＦ100	22	2.5～3			○					10ｃ後～11ｃ前	条坊関連道路	市報30集 太宰府市史
大宰府条坊跡87次	太宰府市通古賀2丁目249－3他	道路87ＳＦ150	2	2.7			○					10ｃ後～11ｃ前	条坊関連道路	
大宰府条坊跡90次	太宰府市太宰府2686－1	溝90ＳＤ045	8				○					9ｃ代	条坊関連道路	太宰府市史
大宰府条坊跡90次	太宰府市太宰府2686－1	溝90ＳＤ045	8				○					9ｃ代	条坊関連道路	太宰府市史
大宰府条坊跡90次	太宰府市太宰府2686－1	90ＳＤ024と030の間	15	2			○					～11ｃ後	条坊関連道路	
大宰府条坊跡91次	太宰府市太宰府2590－7	溝SD001	3.95				○					11ｃ後	朱雀大路東側溝	市報37集　山村1993
大宰府条坊跡92次	太宰府市太宰府2630－14	溝92SD002と004の間	24	1前後			○					10ｃ代	条坊関連道路	太宰府市史
大宰府条坊跡92次	太宰府市太宰府2630－14	92SD006と009の間	24	9			○					11ｃ代	条坊関連道路	
大宰府条坊跡93次	太宰府市太宰府2567－2他	溝93SD314と324の間	4.2	2.5〈3.6〉			○					8ｃ代	条坊関連道路	太宰府市史
大宰府条坊跡93次	太宰府市太宰府2567－2他	93SD270と265･275の間	9.6	2.2〈3.6〉			○					～9ｃ後	条坊関連道路	
大宰府条坊跡95次	太宰府市通古賀804－1･7	溝95SD040	5.2				○					8ｃ前～中	条坊関連道路	太宰府市史
大宰府条坊跡95次	太宰府市通古賀804－1･7	95SD050	12				○					10ｃ後～11ｃ前	条坊関連道路	
大宰府条坊跡95次	太宰府市通古賀804－1･7	95SD077（065と対になる？）	4	3			○					9ｃ末～10ｃ前	条坊関連道路	
大宰府条坊跡106次	太宰府市通古賀2丁目250－1他	道路106SF100	21	1.4～2.1			○					8ｃ前～後	条坊関連道路	市報30集 太宰府市史
大宰府条坊跡118次	太宰府市通古賀2丁目248－1他	道路118SF100	13	3			○						条坊関連道路 87次延長部分	市報30集
太宰府条坊跡120次	太宰府市都府楼南4丁目566－383	溝120SD027と059･091の間	24.5？	1.5～ 3？			○						条坊関連道路 条路痕跡	市報48集
太宰府条坊跡120次	太宰府市都府楼南4丁目566－383	溝120SD020･025･030	22				○						条坊関連道路 坊路痕跡	
大宰府条坊跡133次	太宰府市南字芝原323－1	溝133SD010･015･ＳＸ020					○						朱雀大路西側側溝 29	
大宰府条坊跡141次	太宰府市通古賀3丁目236他	溝141SD010と100の間	29	2～3〈3〉			○					10ｃ中～11ｃ前	条坊関連道路	市報30集
大宰府条坊跡168次	太宰府市朱雀3丁目305－2他						○					奈良･平安	朱雀大路東側溝など？	県年報平成7年度
大宰府条坊跡178次	太宰府市都府楼南5丁目923－1						○					8ｃ後	条坊関連道路 条路の側溝	県年報平成8年度
大宰府条坊跡181次	太宰府市朱雀4丁目270他						○					奈良	朱雀大路東側溝	県年報平成8年度
大宰府条坊跡191次	太宰府市朱雀5丁目73						○					8ｃ～11ｃ後	条坊関連道路	県年報平成9年度
大宰府条坊跡194次	太宰府市都府楼南4丁目789－1	溝194SD001					○						条坊関連道路 条坊痕跡	市報48集
大宰府条坊跡199次	太宰府市朱雀4丁目270－1	199SD070･075･080					○					奈良･平安	条坊関連道路	県年報平成10年度
大宰府条坊跡201次	太宰府市通古賀5丁目1221－1他						○						条坊関連道路	県年報平成10年度
大宰府条坊跡99次	筑紫野市杉塚166	道路状遺構99SF002	31.8	9〈11〉			○					～8ｃ後	水城西門ルート	市報52集
越路二月田遺跡	築上郡椎田町越路481他			6			○						古代官道の一部	県年報平成10年度
岡田地区遺跡群	筑紫野市岡田425－2他	Ⅰ区　道路SF（溝01と04の間）	360	〈9～9.4〉		○	○	○	○			8ｃ中～12ｃ初	西海道豊後ルート	市報56集
大宰府条坊跡107次	筑紫野市立明寺	溝107SD001	25	【35】			○					～8ｃ後	朱雀大路西側溝	太宰府市史
大宰府条坊跡200次	筑紫野市二日市700－1		56				○	○				奈良	朱雀大路西側溝	筑紫野市史
車地遺跡3次	久留米市藤光町字車地	西海道側溝SD01と02ａ溝の間	50	～9〈10〉			○		○？			奈良～平安	西海道	市報145集

Tab.73　古代官道（道路状遺構）一覧表 72

遺跡名	所在地	遺構名	長さ（m）	幅（m）	路面の状態	硬化	側溝	波板	カット	切通	盛土	時期	備考	文献
古賀前遺跡4次	久留米市上津町字古賀前	道路状遺構SF30	7～23	9〈10.5〉			○					奈良～平安	西海道	市報111集
古賀前遺跡10次	久留米市上津町字古賀前	西海道	7～20.5	9			○					～中世	西海道	市報130集
古賀前遺跡13次	久留米市上津町字古賀前	道路遺構	55？	～9			○					～中世	西海道	市報145集
西海道跡1次	久留米市諏訪野町字上牟田1762－2他	道路状遺構SF1	68	9〈13〉前後	バラス		○					8 c 前～13 c	西海道	市報76集
西海道跡2次	久留米市荒木町荒木字東3801－1	道路跡SF1	2.7	〈9～12.5〉			○		○			～14 c 代	西海道	市報140集
筑後国府跡32次	久留米市合川町字柿内271－1	溝SD1355	2	5.5			○		○				西海道	市報23集
筑後国府跡45次	久留米市合川町字柿内369他	溝SD1355	9.5	5			○		○				西海道	市報26集
筑後国府跡50次	久留米市合川町字柿ノ内375－1他	道路遺構SF2388	45？	5.5～6	バラス・砂質土	○	○		○			9 c 後～11 c 初	西海道	市報33・41集
筑後国府跡51次	久留米市東合川町字上142－4	溝SD2553	2.7	2			○		○				西海道	市報41集
筑後国府跡55次		SF2709　上層	16	～5.5【8～】	砂質土	○						10 c 中～11 c 後	西海道	
筑後国府跡55次		下層	16	～5.5【8～】	小礫	○			○	○		8 c 初～10 c 前	西海道	
筑後国府跡57次	久留米市東合川町字朝妻193他	道路SF2761		14	礫								西海道 ヘボノ木62次で再調査	市報41集
筑後国府跡78次	久留米市御井町朝妻1411他	道路遺構SF2709 a 下層路面	34.5	5.5【10～】	円礫	○	○		○			～10 c 中	西海道	市報54集
筑後国府跡78次	久留米市御井町朝妻1411他	SF2709 b 上層路面	34.5	5.5【10～】		○						10 c 中～11 c 後	西海道	
筑後国府跡96次	久留米市合川町字広野171－1	道路状遺構SF3980	1	8		○	○					9 c 後～11 c 初	西海道 50次SF2438に続く	市報67集
筑後国府跡110次	久留米市東合川町字井田190－1	道路遺構SF2709			円礫	○						～9 c 後	西海道	市報70集
筑後国府跡131次	久留米市朝妻町1415－5	道路状遺構SF2709 a 下層道路		【10前後】	円礫				○				西海道	市報113集
筑後国府跡131次	久留米市朝妻町1415－5	SF2709 b 上層道路		【10前後】								10 c 中～	西海道	
筑後国府跡169次	久留米市東合川町字上362－1他	道路遺構SF1上層道路	20	4～	粘土	○			○			10 c 中～13 c	西海道	市報170集
筑後国府跡169次	久留米市東合川町字上362－1他	下層道路	20	4～	バラス・土器	○	○？					7 c 末～10 c 中	西海道	
ヘボノ木遺跡17次	久留米市東合川町字朝妻196他	道路状遺構SF1570		3前後	砂礫	○						～12 c 代	西海道	市報45集
ヘボノ木遺跡62次	久留米市東合川町3丁目20－1他	道路跡SF400	37	7.5～	バラス	○						10 c ～12 c 代	西海道	市報121集
池ノ口遺跡	築城郡新吉冨村垂水字三ッ溝他	道路状遺構	60	6	礫石	○	○				○？	8 c 前～12 c 前	官道	豊前バイパス3

・長さおよび幅は道路の値である。また、【　】内は推定　〈　〉内は溝と溝の芯心間の値である。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 699 集　高畑遺跡－第 18 次調査－に記載された「福岡県内の道路状遺構」を制作者の福岡県教育委員会文化財保護課坂本真一氏の了解を得て加筆修正をした。

－土器観察表凡例－

（1）サイズ

上段が器高、中段が口径、下段が底径を示す。（単位は cm）

完結しない数値は、現存長の後に＋αで表記した。

（2）胎土

砂粒の大小については、微細＜細＜小：1mm ＜中：1 ～ 2mm ＜粗：3mm ～の順で示し、砂粒の前に冠した。

（3）焼成

焼成については、不良＜良好＜堅緻に区分した。

（4）調整：手法の特徴

調整の用語は、カタカナで内外面に区分して略式的に記載した。

（5）その他には、器形の形態や丹彩、穿孔、被熱などの特徴を記載した。

高畑遺跡第 20 次調査における自然科学分析

株式会社古環境研究所

Ⅰ．自然科学分析の概要

高畑遺跡第 20 次調査では、弥生時代の井戸、古墳時代の河川跡さらに古代の井戸が検出された。ここでは、これら遺構の性格および当時の周囲の植生や環境を検討する目的で、植物珪酸体（プラント・オパール）分析、花粉分析・寄生虫卵分析、珪藻分析の微化石分析と種実同定を、また、周辺植生と木材の利用状況を把握する目的で、出土木製品等の樹種同定を行った。分析対象は、微化石分析と種実同定は弥生時代の素掘りの井戸（SE-04）と古代の井戸（SE-09）から採取された堆積物２試料、樹種同定は弥生時代の河川跡（SD-137）より出土した木器ほか（エブリ、杓子、作業台？）、弥生時代の 138 号井堰状杭列に伴う木器ほか（砧？、タモ網枠、円盤状木製品、鉄斧柄など）、古墳時代の河川跡（SD-10）に伴う木器ほか（タクリ台、タクリ軸、田下駄、建築材、鍬、編錘、杓子未製品、柄、砧、剣形木製品、柱材、板材、鋤、把手付槽、容器未製品、蓋、男根状木製品、槽、鉄斧柄、ナイフ状木製品、舟形模造品、把手付作業台、蓋状木製品など）、古代の井戸（SE-09）の構築材（板材３点と枠材２点）とそれに伴う木器類（櫛、桶底板？、桶、曲げ物）の 68 点である。

Ⅱ．植物珪酸体（プラント・オパール）分析

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

１．分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）
２）試料約１g に対し直径約 40μm のガラスビーズを約 0.02g 添加（0.1mg の精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散
５）沈底法による 20μm 以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率およびメダケ率（メダケ属とササ属の比率）を求めた。

２．分析結果

（１）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

（２）植物珪酸体の検出状況

弥生時代の井戸（SE-04）と古代の井戸（SE-09）から採取された２試料では、ネザサ節型が多量に検出され、イネ、イネの籾殻（穎の表皮細胞由来）、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Ａ、メダケ節型、ミヤコザサ節型なども認められた。イネの密度は4,400個/gおよび3,900個/gであり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。また、イネの籾殻（穎の表皮細胞由来）の密度は600個/gと低い値である。おもな分類群の推定生産量によると、ネザサ節型が優勢であり、次いでイネが多くなっている。

３．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

当時の遺構周辺は、メダケ属（おもにネザサ節）を主体としてススキ属やチガヤ属なども見られる日当たりの良い比較的乾燥した環境であり、ヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたと考えられる。また、遺跡周辺では稲作が行われており、そこから何らかの形で井戸内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。イネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体も認められることから、遺構周辺で脱穀や籾摺り作業が行われていた可能性も示唆される。

Ⅲ．花粉・寄生虫卵分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生･環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。同時に寄生虫卵分析を行うことにより、生活域の確認や人糞施肥の有無、あるいはトイレ遺構を確認することも可能である。しかし、花粉や寄生虫卵などの有機物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

１．方法

花粉・寄生虫卵の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）試料から１㎤を採量

２）0.5％リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎
３）篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す
４）25％フッ化水素酸を加え 30 分静置（２・３度混和）
５）水洗後サンプルを２分
６）２分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す
７）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製
８）検鏡は、プレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行う

基本的にアセトリシス処理を施したプレパラートで花粉分析、アセトリシス処理を施していないプレパラートで寄生虫卵分析を行う。以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様･大きさ･孔･表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

２．花粉分析結果

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉 14、樹木花粉と草本花粉を含むもの６、草本花粉 15、シダ植物胞子２形態の計 37 である。これらの学名と和名および粒数を表２に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図２に示す。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、シイ属－マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、センダン属、トネリコ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、マメ科、トウダイグサ科、ゴマノハグサ科

〔草本花粉〕

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、アカバナ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（２）花粉群集の特徴

１）弥生時代の井戸（SE-04）

樹木花粉より草本花粉の占める割合がやや高く、約 45％を占める。樹木花粉と草本花粉を含むクワ科－イラクサ科が約 10％を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）を主に、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科などが出現する。樹木花粉ではスギが優占し、シイ属－マテバシイ属、

コナラ属アカガシ亜属、エノキ属－ムクノキなどが出現する。

２）古代の井戸（SE-09）

草本花粉の占める割合が約 80％と優占し、特にイネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、オモダカ属などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、シイ属－マテバシイ属、スギなどが低率に出現する。

３．寄生虫卵分析結果

（１）分類群

出現した寄生虫卵は、１分類群である。これらの学名と和名および粒数を表２に示す。出現した分類群については顕微鏡写真を示した。以下に特徴を示す。

鞭虫　*Trichuris*（*trichiura*）

鞭虫は世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。卵の大きさは 50 × 30μｍで、レモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、中間宿主を必要とせず３～６週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。

（２）寄生虫卵群集の特徴

１）弥生時代の井戸（SE-04）

寄生虫卵および明らかな消化残査は検出されない。

２）古代の井戸（SE-09）

寄生虫卵密度は低く、鞭虫卵が１㎤中 15 個検出された。明らかな消化残査は検出されない。

４．花粉・寄生虫分析から推定される環境

１）弥生時代の井戸（SE-04）

４号井戸周囲には、イネ科や乾燥を好むヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科などの人里植物であり耕地雑草でもある草本が生育していたと考えられる。イネ科にはイネ属型が伴われ水田の分布も示唆される。樹木花粉と草本花粉を含むクワ科－イラクサ科は、ここでは生態上荒れ地などに生育するカナムグラやカラムシなどの草本が考えられ、井戸の周囲に生育していたと思われる。周辺にはスギ林が主要に分布し、シイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属などの照葉樹と、エノキ属－ムクノキなども生育していた。

２）古代の井戸（SE-09）

イネ科にはイネ属型が伴われ、水田雑草であるミズアオイ属、オモダカ属などと共に出現することから、９号井戸の周辺には水田が分布していたと考えられる。井戸や水田の周囲には、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、カヤツリグサ科などの草本が生育していた。またわずかに検出された鞭虫卵は、生活汚染程度の密度であり、９号井戸に比較的近接して生活域が分布していた可能性が考えられる。近隣には、コナラ属アカガシ亜属、シイ属－マテバシイ属などの照葉樹が生育し、やや遠方にはスギなどが生育していた。

Ⅳ．珪藻分析

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、

岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

１．方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

１）試料から１㎤を採量
２）10％過酸化水素水を加え、加温反応させながら１晩放置
３）上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（５～６回）
４）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥
５）マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
６）検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 600 ～ 1500 倍で行った。計数は珪藻被殻が 200 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

２．結果

（１）分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）43 分類群である。表３に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図３に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は Lowe（1974）や渡辺（2005）等の記載により、陸生珪藻は小杉（1986）により、環境指標種群の淡水生種は安藤（1990）による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下にダイアグラムで表記した分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Achnanthes lanceolata、*Achnanthes rupestoides*、*Amphora fontinalis*、*Amphora montana*、*Caloneis hyalina*、*Cymbella silesiaca*、*Eunotia bilunaris*、*Eunotia minor*、*Fragilaria construens*、*Frustulia vulgaris*、*Gomphonema gracile*、*Gomphonema parvulum*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta*、*Navicula cryptocephala*、*Navicula cryptotenella*、*Navicula elginensis*、*Navicula ignota*、*Navicula mutica*、*Navicula mutica v. ventricosa*、*Navicula spp.*、*Navicula veneta*、*Neidium spp.*、*Nitzschia amphibia*、*Nitzschia brevissima*、*Nitzschia clausii*、*Nitzschia debilis*、*Nitzschia frustulum*、*Nitzschia nana*、*Nitzschia palea*、*Nitzschia sinuata v. delognei*、*Nitzschia spp.*、*Nitzschia umbonata*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia mesolepta*、*Pinnularia microstauron*、*Pinnularia spp.*、*Pinnularia subcapitata*、*Stauroneis lauenburgiana*、*Stauroneis sp.1*、*Surirella angusta*、*Surirella ovata*、*Tabellaria fenestrata-flocculosa*

（２）珪藻群集の特徴

１）弥生時代の井戸（SE-04）

珪藻密度が低く、検出される珪藻はすべて貧塩性種（淡水生種）である。特に陸生珪藻が優占し、約 80％を占める。残りを好止水性種、流水不定性種などが占める。陸生珪藻では Hantzschia amphioxys が高率に出現し、Navicula mutica、Pinnularia subcapitata、Amphora montana、

Pinnularia borealis などが伴われる。好止水性種では Pinnularia microstauron がやや多く出現する。流水不定性種では Nitzschia palea、Nitzschia spp. などが低率に出現する。

２）古代の井戸（SE-09）

検出される珪藻はすべて貧塩性種（淡水生種）である。陸生珪藻の占める割合が一番高く、流水不定性種、真・好止水性種、真・好流水性種はほぼ同じ割合を占める。陸生珪藻では Nitzschia amphibia、Amphora montana がやや多く出現し、Navicula mutica、Nitzschia nana、Navicula contenta、Nitzschia debilis などが出現する。流水不定性種では Achnanthes rupestoides を主に、Stauroneis lauenburgiana、Navicula veneta、Nitzschia spp.、Nitzschia palea、Stauroneis sp.1、Nitzschia clausii、Navicula spp. などが出現する。真・好止水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の Eunotia minor、好止水性種の Nitzschia sinuata v. delognei、Eunotia bilunaris などが出現する。真・好流水性種では中～下流性河川環境指標種群の Achnanthes lanceolata がやや多く出現し、真流水性種の Surirella angusta、好流水性種の Gomphonema parvulum などが伴われる。

３．珪藻分析から推定される堆積環境

１）弥生時代の井戸（SE-04）

Hantzschia amphioxys を主とする陸生珪藻が優占しており、これらは井戸上部壁面あるいは周囲の湿ったところに生育していたと考えられる。井戸自体は、止水性種である Pinnularia microstauron の出現から止水の状況であったことが示唆される。珪藻密度が低いことから、比較的堆積速度が速かったと推定される。

２）古代の井戸（SE-09）

珪藻密度が比較的高く、井戸内は日当たりが良かったとみなされる。陸生珪藻、流水不定性種、真・好止水性種、真・好流水性種などが多様に出現することから、湿った環境で、止水や流水の混在する環境が推定される。真・好流水性種で中～下流性河川環境指標種群の Achnanthes lanceolata がやや多いため、湧水による流水があったことが示唆される。

Ⅴ．種実同定

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

１．方法

試料に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。

１）試料 200㎤に水を加え放置し、泥化を行う。

２）攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mm の篩で水洗選別を行う。

３）残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

２．結果

（１）分類群

樹木４、草本 13 の計 17 分類群が同定された。学名、和名および粒数を表４に示し、主要な分類群を写真に示す。200㎤中の種実数をダイアグラムに示す（図４）。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

ヤマグワ　Morus australis Poir. 種子　クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

キイチゴ属　Rubus　核　バラ科

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。

バラ科？　Rosaceae ？　核

黄褐色で腎臓形を呈す。表面はやや粗い。形態が変形しているため？とする。

センダン　Melia azedarach　var. subtripinnata Miq.　核　センダン科

黒褐色で楕円形を呈し、一端は円孔となる。縦に５本の発達した稜が走る。

〔草本〕

イネ　Oryza sativa L.　穎（破片）　イネ科

穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものは無かった。

ホタルイ属　Scirpus　果実　カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に４～８本の針状の付属物を持つ。

スゲ属　Carex　果実　カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

カヤツリグサ科　Cyperaseae　果実

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

コナギ　Monochoria vaginalis Presl var. plantaginea Solms Laub.　種子　ミズアオイ科

淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に７～９本程度の隆起があり、その間を横方向の密な隆線が走る。

イグサ科　Juncaceae　種子

半透明の黄褐色ないし茶褐色、ゆがんだ卵形を呈す。両端は尖り、黒褐色。表面には網目模様がある。

タデ属　Polygonum　果実　タデ科

茶褐色で頂端の尖る卵形を呈す。断面は両凸レンズ状で、表面はやや粗い。

アカザ属　Chenopodium　種子　アカザ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

ヒユ属　Amaranthus　種子　ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込みヘソがある。断面は両凸レンズ形である。

ザクロソウ　Mollugo pentaphylla L.　種子　ザクロソウ科

黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込み白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある。

ナデシコ科　Caryophyllaceae　種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

ヘビイチゴ属 - オランダイチゴ属 - キジムシロ属　Duchesnea-Fragaria-Potentill　種子　バラ科

黄褐色で腎臓形を呈す。表面はやや粗い。
カタバミ属　Oxalis 種子　カタバミ科
茶褐色で楕円形を呈し、上端が尖る。両面には横方向に６～８本の隆起が走る。

（２）種実群集の特徴
１）弥生時代の井戸（SE-04）
ナデシコ科が優占し､続いてヘビイチゴ属 - オランダイチゴ属 - キジムシロ属､わずかにザクロソウ、ヤマグワ、キイチゴ属、イネ、アカザ属、カタバミ属が検出された。
２）古代の井戸（SE-09）
イネ、ナデシコ科、アカザ属が多く、センダン、カタバミ属、ホタルイ属、コナギ、ヒユ属、ザクロソウ、バラ科？、スゲ属、カヤツリグサ科、イグサ科、タデ属が伴われる。

３．種実同定から推定される植生と農耕
１）弥生時代の井戸（SE-04）
４号井戸周囲には、日当たりがよく乾燥を好むナデシコ科、アカザ属、ザクロソウ、ヘビイチゴ属 - オランダイチゴ属 - キジムシロ属、カタバミ属などの人里植物ないし耕地雑草の性格を持つ草本が生育していた。イネ穎が伴われることから水田の分布も示唆される。ヤマグワ、キイチゴ属は食用になり、食用となった残滓が堆積したと思われる。
２）古代の井戸（SE-09）
イネ穎が多く、水田雑草であるホタルイ属、スゲ属、コナギなどと共に出現することから、９号井戸の周辺には水田が分布していたと考えられる。井戸や水田の周囲には、ナデシコ科、アカザ属、ヒユ属、ザクロソウ、カヤツリグサ科、イグサ科、タデ属、カタバミ属などの草本が生育しており、センダン、バラ科？は井戸の周囲に生育していたと思われる。

Ⅵ．樹種同定
木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

１．方法
カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40 ～ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

２．結果
表５に結果を示し、主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

マキ属　*Podocarpus*　マキ科　写真１

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。
横断面：早材から晩材への移行はゆるやかである。樹脂細胞が散在する。
放射断面:放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で１分野に１～２個存在する。樹脂細胞が散在する。
接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～20 細胞高である。樹脂細胞が多く見られる。
以上の形質よりマキ属に同定される。マキ属には、イヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ 20 m、径 50 ～ 80cm である。材は、耐朽性が強く、耐水性も高い。建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

ツブラジイ　Castanopsis cuspidata Schottky　ブナ科　写真２
横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。
放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。
接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。
以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ 20 m、径 1.5 mに達する。材は耐朽性、保存性ともに低く、建築材などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　写真３
横断面：中型から大型の道管が、１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。
放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。
接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。
以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ 30 m、径 1.5 m以上に達する。材は堅硬かつ強靭であり、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

スギ　Cryptomeria japonica D.Don　スギ科　写真４
仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。
横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。
放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。
接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型で、10 細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。
以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ 40 m、径２mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

ヒノキ　Chamaecyparis obtusa Endl.　ヒノキ科　写真５
仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。
横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。
放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～15 細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ 40 m、径 1.5 mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭せある。耐朽性、耐湿性ともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。

シキミ　Illicium religiosum Sieb. et Zucc.　モクレン科　写真６

横断面：小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。早材部の年輪界付近に於いて、道管が少し並ぶ傾向を示す。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く 50 を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、１～３細胞幅で、単列部が太い。

以上の形質よりシキミに同定される。シキミは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、高さ 10 m、径 30cm に達する。材は強さ中庸で、旋作、器具、薪などに用いられる。

クスノキ　Cinnamomum camphora Presl　クスノキ科　写真７

横断面：中型から大型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面:放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、通常高さ 25 m、径 80cm ぐらいであるが、高さ 50 m、径５mに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く、保存性も高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

タブノキ　Machilus thunbergii Sieb.et Zucc.　クスノキ科　写真８

横断面：やや小型から中型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔または少数ではあるが、数の少ない階段穿孔が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面:放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりタブノキに同定される。タブノキは、本州（暖地）、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ 15 m、径１mに達する。材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、家具、土木、器具、楽器、船、彫刻、薪炭などに用いられる。

イスノキ　Distylium racemosum Sieb. et Zucc.　マンサク科　写真９

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく 15 前後のものが多い。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、ほとんどが１～２細胞幅であるが、まれに３細胞幅のものも存在する。

以上の形質よりイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ 20 m、径１ｍに達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

カエデ属　Acer　カエデ科　写真 10

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは２～４個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で１～６細胞幅である。道管の内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。

以上の形質よりカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の形質からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ 20m、径１ｍに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

アワブキ属　Meliosma　アワブキ科　写真 11

横断面:小型の道管が、単独ないし２～４個放射方向にむかって複合して散在する散孔材であるが、その複合部に１～２個の柔細胞をはさんでいるものが見られる。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく 10 本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～４細胞幅である。

以上の形質よりアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する。アワブキ、ヤマビワ、ミヤマホウソなどがあり、落葉または常緑の低木から高木である。

ヤブツバキ　Camellia japonica Linn.　ツバキ科　写真 12

横断面：小型でやや角張った道管が、単独ないし２～３個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は８～ 30 本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には、大きく膨れているものが存在する。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、１～３細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ５～ 10 m、径 20 ～ 30cm である。材は強靭で、耐朽性強く、建築、器具、楽器、船、彫刻

などに用いられる。

サカキ　Cleyera japonica Thunb.　ツバキ科　写真 13

横断面：小型の道管が、単独ないし２個複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く 60 を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ８～ 10 m、径 20 ～ 30cm である。材は強靭かつ堅硬で、建築、器具などに用いられる。

ネジキ　Lyonia ovalijolia Drude var. elliptica　ツツジ科　写真 14

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は 10 ～ 20 数本である。放射組織は異性である。道管と放射組織との壁孔は階段状である。

接線断面:放射組織は異性放射組織型で、数個の直立細胞からなる単列のものと、２～４細胞幅で、１～ 10 細胞高の単列部をもつ多列のものとからなる。

以上の形質よりネジキに同定される。ネジキは、本州、四国、九州に分布する。落葉の低木で通常高さ６ m、径 30cm ぐらいである。材は旋作、器具（ことに櫛）、木炭などに用いられる。

タイミンタチバナ　Myrsine seguinii Lev.　ヤブコウジ科　写真 15

横断面：小型で角張った道管が、単独あるいは２～３個放射方向および不規則方向に複合して散在し、全体に放射方向に配列する傾向を示す散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で極めて高く、鞘細胞を有し、３～６細胞幅である。

以上の形質よりにタイミンタチバナ同定される。タイミンタチバナは、近畿以西の本州（千葉県以西）、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の大低木または高木である。

ガマズミ属　Viburnum　スイカズラ科

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独で均一に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は数十本である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、１～ 10 個の直立細胞からなる単列のものと、１～４細胞幅で、細長い紡錘形の多列のものとからなる。

以上の形質よりガマズミ属に同定される。ガマズミ属には、ガマズミ、ゴマキ、サンゴジュなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑の小高木で通常高さ 10 m、径 30cm ぐらいである。樹木は庭園、生垣、防火樹などに、材は旋作、小細工物などに用いられる。

散孔材　diffuse-porous wood

横断面：小型の道管が散在する。

放射断面：切片は採取出来なかった。

接線断面：切片は採取出来なかった。

以上の形質より散孔材に同定される。なお、本試料は木製品であり、形状を損ねる畏れがため広範囲の切片採取及び観察が困難であったことから、散孔材の同定にとどめる。

３．考察

高畑遺跡第 20 次調査で出土した木器ほか木材について樹種同定を行った。その結果、弥生時代の河川跡（SD-137）より出土した木器ほか３点は、コナラ属アカガシ亜属１点、クスノキ１点、アワブキ属１点、弥生時代の 138 号井堰状杭列に伴う木器ほか５点は、マキ属１点、ツブラジイ１点、ヤブツバキ１点、サカキ１点、ガマズミ属１点であった。古墳時代の河川跡（SD-10）に伴う木器ほか 47 点の内訳は、スギ 10 点、ヒノキ１点、ツブラジイ６点、コナラ属アカガシ亜属８点、シキミ１点、クスノキ１点、タブノキ３点、イスノキ１点、カエデ属１点、アワブキ属２点、ヤブツバキ４点、サカキ６点、ネジキ１点、タイミンタチバナ１点、散孔材１点であった。古代の井戸（SE-09）の構築材のうち、板材３点はスギ、枠材２点はツブラジイ、それに伴う木器類７点は、スギ２点、ヒノキ１点、クスノキ１点、イスノキ３点であった。

マキ属はタモ網枠に使用されている。材は耐朽性、保存性が高く水湿に強く、やや重厚で強靱である。スギは井戸（SE-09）の板材のほか、建築材、剣型木製品、蓋、槽、舟形模造品、曲げ物などに使用されている。材は加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材であり、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。ヒノキは不明木製品などに使用されている。木理通直で大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高い。ツブラジイは井戸（SE-09）の枠材のほか、建築材、田下駄、容器未成品などに使用されている。耐朽性、保存性は低い材である。コナラ属アカガシ亜属は鍬、鋤、エブリ、把手付槽、把手付作業台などに使用されている。硬堅な材であり広く用いられるが、西南日本では弥生時代以降、特に農耕具を中心に用いられる傾向にある。シキミは板材に使用されており、やや硬い材である。クスノキは柱材、杓子、桶に使用されており、堅硬で耐朽性が高い材である。タブノキは建築材、垂木？、鍬に使用されており、強さ耐朽性ともに中庸の材である。イスノキは櫛、ナイフ状木製品に使用されている。重硬で耐朽性にすぐれ、細かい細工にも良好で、器具類にも適する材である。カエデ属は蓋状木製品に使用されており、やや堅硬な材と言える。アワブキ属は柱材、男根状木製品、作業台？に使用されており、概して強さ中庸の材と言える。ヤブツバキは編錘、砧などに、サカキは編錘、鉄斧柄、杓子未成品、柄に使用されており、どちらの材も強靱、堅硬な良材である。ネジキ、タイミンタチバナは、編錘に使用されており、ネジキは堅硬、イミンタチバナは重硬で耐朽性、保存性は高い材であるが、どちらの材も反り、捩れなどの狂いが生じやすい。ガマズミ属は、円盤状木製品に使用されており、概してやや硬い材と言える。

マキ属は、温帯下部の暖温帯から亜熱帯に分布し、極めて温暖な気候下の針葉樹である。スギ、ヒノキは温帯に広く分布する針葉樹であり、スギは特に積雪地帯や多雨地帯で純林を形成し、ヒノキは温帯中部に多い。広葉樹では、ツブラジイ、コナラ属アカガシ亜属、クスノキ、タブノキ、イスノキは、西南日本に分布する照葉樹林の主要高木である。シキミ、ヤブツバキ、サカキも照葉樹林の構成要素である。カエデ属、ネジキ、アワブキ属、ガマズミ属は、温帯から温帯下部の暖温帯に広く分布し、タイミンタチバナは温帯下部の暖温帯から熱帯に分布する。

以上のことから、高畑遺跡第 20 次調査の木材は、当時遺跡周辺に生育していたか、もしくは地域的な流通の範囲でもたらされたと推定される。また、照葉樹林の構成要素である樹種が多く、当時遺跡周辺に照葉樹林が分布していた可能性が示唆される。

参考文献

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69-84.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純(1974)イネ科花粉について､とくにイネ(Oryza sativa)を中心として . 第四紀研究 ,13,p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第 10 号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from　Latrine Soils.Jounal of Archaeological Science，19, p.231-245.

金子清俊･谷口博一（1987）線形動物･扁形動物．医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-55.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，p.14-15.

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学，考古学と自然科学，２，同成社，p.151-8.

金原正明・福富恵津子・金原正子（2005）糞石の基礎的研究 , 日本文化財科学会 , 第 22 回 ,p118-119

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-110.

Hustedt,F.（1937-1938）Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol,Suppl.15,p.131-506.

Lowe,R.L.（1974）Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

K. Krammer・H.Lange-Bertalot（1986-1991）Bacillariophyceae・1-4.

Asai,K.&,Watanabe,T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10,p.35-47.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理, 42, p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，６,p.23-45.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第１号，植生史研究会，p.29-44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.
渡辺仁治（2005）淡水珪藻生態図鑑　群集解析に基づく汚濁指数 DAIpo, pH 耐性能．内田老鶴圃，pp.666.
笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.
笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣　出版，p.131-139.
金原正明（1996）古代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナル No.409, ニューサイエンス社, p.15-19.
南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p.165-174.
南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実．月刊考古学ジャーナル No.355，ニューサイエンス社，p.18-22.
南木睦彦（1993）葉･果実･種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.
吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル No.355，ニューサイエンス社，p.2-14.
渡辺誠（1975）縄文時代の植物食．雄山閣，187p.
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242

表 1　高畑遺跡第 20 次調査における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：× 100 個 /g）

分類群	学名	地点・試料　4 号井戸 1	9 号井戸 2
イネ科	Gramineae		
イネ	Oryza sativa	44	39
イネ籾殻（穎の表皮細胞）	Oryza sativa（husk Phytolith）	6	6
キビ族型	Paniceae type	6	13
ヨシ属	Phragmites	6	13
ススキ属型	Miscanthus type	25	39
ウシクサ族 A	Andropogoneae A type	19	32
タケ亜科	Bambusoideae		
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	19	19
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	253	169
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.		6
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	6	45
未分類等	Others	38	32
その他のイネ科	Others		
表皮毛起源	Husk hair origin	19	6
棒状珪酸体	Rod-shaped	158	104
未分類等	Others	133	136
植物珪酸体総数	Total	733	661

おもな分類群の推定生産量（単位：kg /㎡ ·㎝）：試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出

イネ	Oryza sativa	1.30	1.14
ヨシ属	Phragmites	0.40	0.82
ススキ属型	Miscanthus type	0.31	0.48
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	0.22	0.23
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	1.21	0.81
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.		0.05
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	0.02	0.14

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	15	19
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	84	66
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.		4
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	1	11
メダケ率	Medake ratio	99	85

表2　高畑遺跡第20次調査における寄生虫卵・花粉分析結果

分類群		4号井戸	9号井戸
学名	和名		
Helminth eggs	寄生虫卵		
Trichuris (*trichiura*)	鞭虫卵		1
Total	計	0	1
Helminth eggs frequencies of 1㎤	試料1㎤中の寄生虫卵密度	0.0	1.5 × 10
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)	(−)
Arboreal pollen	樹木花粉		
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	1	2
Cryptomeria japonica	スギ	97	4
Platycarya strobilacea	ノグルミ	1	
Alnus	ハンノキ属		1
Betula	カバノキ属		1
Corylus	ハシバミ属		1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属−アサダ	1	
Castanopsis-Pasania	シイ属−マテバシイ属	18	14
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	2	
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	17	25
Ulmus − Zelkova serrata	ニレ属−ケヤキ		1
Celtis − Aphananthe aspera	エノキ属−ムクノキ	10	
Melia	センダン属		1
Fraxinus	トネリコ属	1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科−イラクサ科	36	17
Saxifragaceae	ユキノシタ科		1
Rosaceae	バラ科		2
Leguminosae	マメ科	2	
Euphorbiaceae	トウダイグサ科		1
Scrophulariaceae	ゴマノハグサ科		1
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Sagittaria	オモダカ属		3
Gramineae	イネ科	75	231
Oryza type	イネ属型	9	30
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3	5
Monochoria	ミズアオイ属		1
Polygonum	タデ属	1	
Rumex	ギシギシ属		1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科−ヒユ科	14	14
Caryophyllaceae	ナデシコ科	3	2
Ranunculus	キンポウゲ属		3
Cruciferae	アブラナ科	13	5
Onagraceae	アカバナ科		1
Lactucoideae	タンポポ亜科	2	1
Asteroideae	キク亜科	1	
Artemisia	ヨモギ属	39	16
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子		1
Trilate type spore	三条溝胞子	2	1
Arboreal pollen	樹木花粉	148	50
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	38	22
Nonarboreal pollen	草本花粉	160	313
Total pollen	花粉総数	346	385
Pollen frequencies of 1㎤	試料1㎤中の花粉密度	8.1 × 10 3	2.1 × 10^4
Unknown pollen	未同定花粉	0	12
Fern spore	シダ植物胞子	2	2
Charcoal fragments	微細炭化物		(+)

表３　高畑遺跡第 20 次調査における珪藻分析結果

分類群	４号井戸	９号井戸
貧塩性種（淡水生種）		
Achnanthes lanceolata		50
Achnanthes rupestoides		51
Amphora fontinalis		4
Amphora montana	9	50
Caloneis hyalina		1
Cymbella silesiaca		2
Eunotia bilunaris		27
Eunotia minor		29
Fragilaria construens	1	
Frustulia vulgaris		1
Gomphonema gracile		1
Gomphonema parvulum		5
Hantzschia amphioxys	81	5
Navicula contenta	3	10
Navicula cryptocephala		2
Navicula cryptotenella		3
Navicula elginensis	1	
Navicula ignota	1	
Navicula mutica	20	16
Navicula mutica v. ventricosa		1
Navicula spp.		7
Navicula veneta		11
Neidium spp.	1	
Nitzschia amphibia		53
Nitzschia brevissima	1	
Nitzschia clausii		6
Nitzschia debilis	1	7
Nitzschia frustulum	1	4
Nitzschia nana		16
Nitzschia palea	3	9
Nitzschia sinuata v. delognei		29
Nitzschia spp.	2	11
Nitzschia umbonata	1	3
Pinnularia borealis	8	
Pinnularia mesolepta		1
Pinnularia microstauron	18	1
Pinnularia spp.	1	
Pinnularia subcapitata	13	
Stauroneis lauenburgiana		18
Stauroneis sp.1		7
Surirella angusta		12
Surirella ovata		1
Tabellaria fenestrata-flocculosa		1
合　計	166	455
未同定	2	21
破片	64	43
試料１㎤中の殻数密度	5.4×10^{4}	6.7×10^{6}
完形殻保存率（％）	72.4	91.7

表 4　高畑遺跡第 20 次調査における種実同定結果

分類群		部位	井戸内	
学名	和名		4 号	9 号
Arbor	樹木			
Morus australis Poir.	ヤマグワ	種子	1	
		（破片）	1	
Rubus	キイチゴ属	核	1	
Rosaceae ?	バラ科？	核		1
Melia azedarach L. var. Subtripinnata Miq.	センダン	核		4
Herb	草本			
Oryza sativa L.	イネ	穎（破片）	1	20
Scirpus	ホタルイ属	果実		2
Carex	スゲ属	果実		1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実		1
Monochoria vaginalis Presl var. plantaginea Solms-Laub.	コナギ	種子		2
Juncaceae	イグサ科	種子		1
Polygonum	タデ属	果実		1
Chenopodium	アカザ属	種子	1	9
Amaranthus	ヒユ属	種子		2
Mollugo pentaphylla L.	ザクロソウ	種子	2	2
		（破片）	1	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	183	15
Duchesnea-Fragaria	ﾍﾋﾞｲﾁｺﾞ属－ｵﾗﾝﾀﾞｲﾁｺﾞ属		9	
-Potentilla	－ｷｼﾞﾑｼﾛ属	種子		
Oxalis	カタバミ属	種子	1	3
		（破片）		2
Total	合計		201	66

（200㎤中 0.25㎜篩）

表５　高畑遺跡第 20 次調査における樹種同定結果

同定№	遺物№	器　種	グリッド	備　考	結果（学名／和名）	
46	90	エブリ	粗砂層	杭列内出土	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
47	杭列№ 35		粗砂層	杭列内出土	Castanopsis cuspidata Schottky	ツブラジイ
48	93	砧？			Camellia japonica Linn.	ヤブツバキ
49	99	タモ網枠		№104 と同一個体	Podocarpus	マキ属
51	98	円盤状木製品		蓋：漆塗？	Viburnum	ガマズミ属
53	91	鉄斧柄			Cleyera japonica Thunb.	サカキ
54	95	杓子		杭列内出土	Cinnamomum camphora Presl	クスノキ
60	540	作業台？	u-15		Meliosma	アワブキ属
1	555	編錘			Myrsine seguinii Lev.	タイミンタチバナ
2	551	タクリ台	t-11	台座	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
3	552	タクリ軸	t-11	挿入棒	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
4	545	大足	p-2	ホゾ穴	Castanopsis cuspidata Schottky	ツブラジイ
5	584	建築材	q-4	ホゾ穴	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
6	2015	鍬		二又鍬	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
7	557	編錘	t-8		Camellia japonica Linn.	ヤブツバキ
8	576	建築材	r・s-6・7	柱・ホゾ穴	Machilus thunbergii Sieb.et Zucc.	タブノキ
9	2026	杓子未製品			Cleyera japonica Thunb.	サカキ
10	2027	柄	p-2・3		Cleyera japonica Thunb.	サカキ
11	538	砧	s-7	完	Camellia japonica Linn.	ヤブツバキ
12	578	建築材	t・u-8	ホゾ穴	Castanopsis cuspidata Schottky	ツブラジイ
13	571	剣形木製品	u・v-9	抉入	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
14	531	鍬	v-9	ナスビ形、半欠	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
15	577	柱材	t-7・8	ホゾ穴	Cinnamomum camphora Presl	クスノキ
16	556	編錘	u-9	完	Camellia japonica Linn.	ヤブツバキ
17	2067	柱材	u-9		Meliosma	アワブキ属
18	582	垂木？	u-9	切込み有	Machilus thunbergii Sieb.et Zucc.	タブノキ
19	2072	鍬	t・u-9・10		Machilus thunbergii Sieb.et Zucc.	タブノキ
20	529	鍬	u-9	半欠	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
21	561	編錘	u-11	完	Lyonia neziki Nakai et Hara	ネジキ
22	562	編錘	t-16	完	Cleyera japonica Thunb.	サカキ
23	560	編錘	u-12	完	Cleyera japonica Thunb.	サカキ
27	554	編錘	u-13	板切	Illicium religiosum Sieb. et Zucc.	シキミ
28	532	鋤	u-13	三叉・四叉	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
29	2115	田下駄	s-14		Castanopsis cuspidata Schottky	ツブラジイ
30	2119	柄	u-13	半欠	Castanopsis cuspidata Schottky	ツブラジイ
31	537	砧？	t-13	半欠	Camellia japonica Linn.	ヤブツバキ
32	559	編錘	t-14		Cleyera japonica Thunb.	サカキ
33	543	不明板材	t-14	孔有、小口板	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
34	542	把手付槽	u-16		Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
35	587	建築材	u-16	孔有	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
36	2148	容器未成品	u-16		Castanopsis cuspidata Schottky	ツブラジイ
37	2159	不明製品	v-17	抉入	Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
38	544	蓋	y-18	丸板、円孔有	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
39	574	男根状木製品	y-18		Meliosma	アワブキ属
40	SD-10　中層				Castanopsis cuspidata Schottky	ツブラジイ
41	2197	槽	f'-18・19	側板	Cryptomeria japonica D.Don	スギ
42	581				Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
43	86	鍬		二又鍬	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
44	92	鉄斧柄			Cleyera japonica Thunb.	サカキ
55	567	ナイフ状木製品	Ⅲ区上層		Distylium racemosum Sieb. et Zucc.	イスノキ
56	575	船形模造品	Ⅲ区中層		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
57	94	把手付作業台	Ⅲ区下層		Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
58 － a	569	蓋状木製品	p-3	鏡板：傘骨付	Acer	カエデ属
58 － b	569	蓋状木製品：軸	p-3	鏡板傘骨	diffuse － porous wood	散孔材
59	541	槽	e'-18・19		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
24	714	櫛	SE-09		Distylium racemosum Sieb. et Zucc.	イスノキ
25	716	櫛	SE-09		Distylium racemosum Sieb. et Zucc.	イスノキ
26	715	櫛	SE-09		Distylium racemosum Sieb. et Zucc.	イスノキ
45	723	桶　底板？	W-15		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
61	722	曲げ物	SE-09		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
62		桶	井戸側		Cinnamomum camphora Presl	クスノキ
63		不明木製品	SE-09	曲げ物内出土	Chamaecyparis obtusa Endl.	ヒノキ
64		裏板材Ｅ－７	SE-09		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
65		裏板材Ｅ－９	SE-09		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
66		裏板材Ｅ－17	SE-09		Cryptomeria japonica D.Don	スギ
67		側枠材Ｅ－３	SE-09		Castanopsis cuspidata Schottky	ツブラジイ
68		側枠材Ｅ－４	SE-09		Castanopsis cuspidata Schottky	ツブラジイ

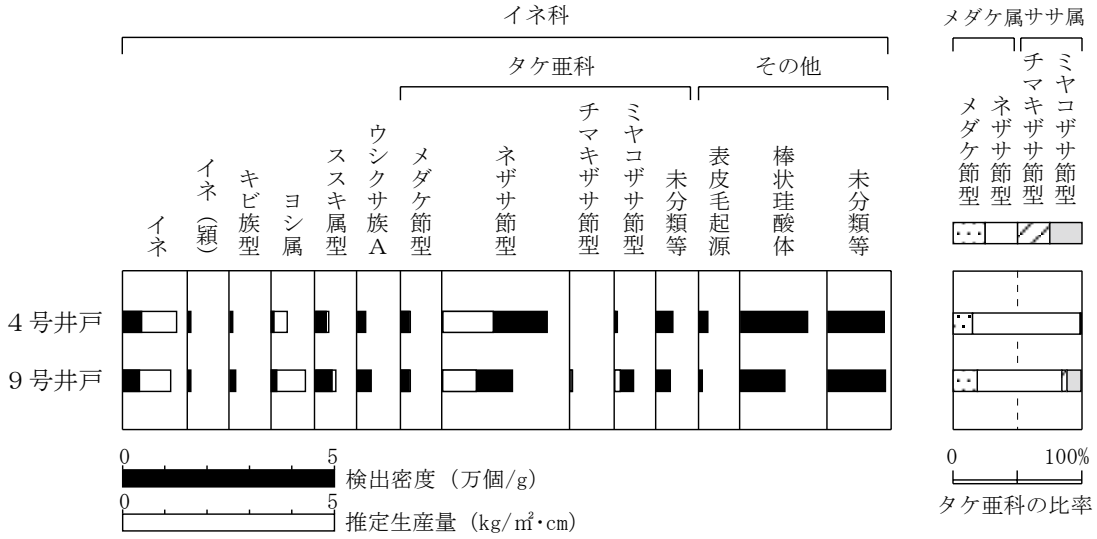


図１　高畑遺跡第20次調査における植物珪酸体分析結果

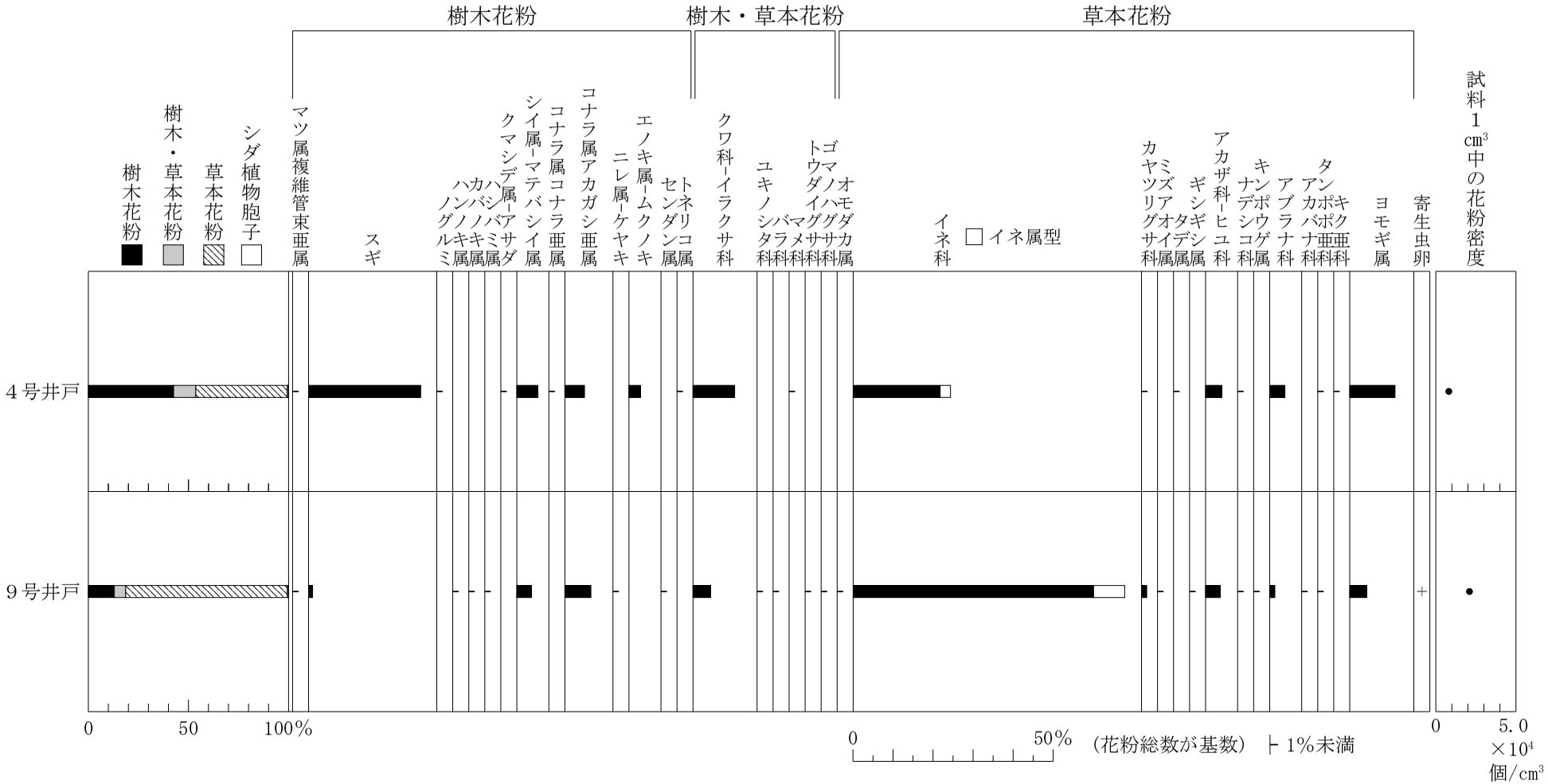


図２　高畑遺跡第20次調査における花粉ダイアグラム

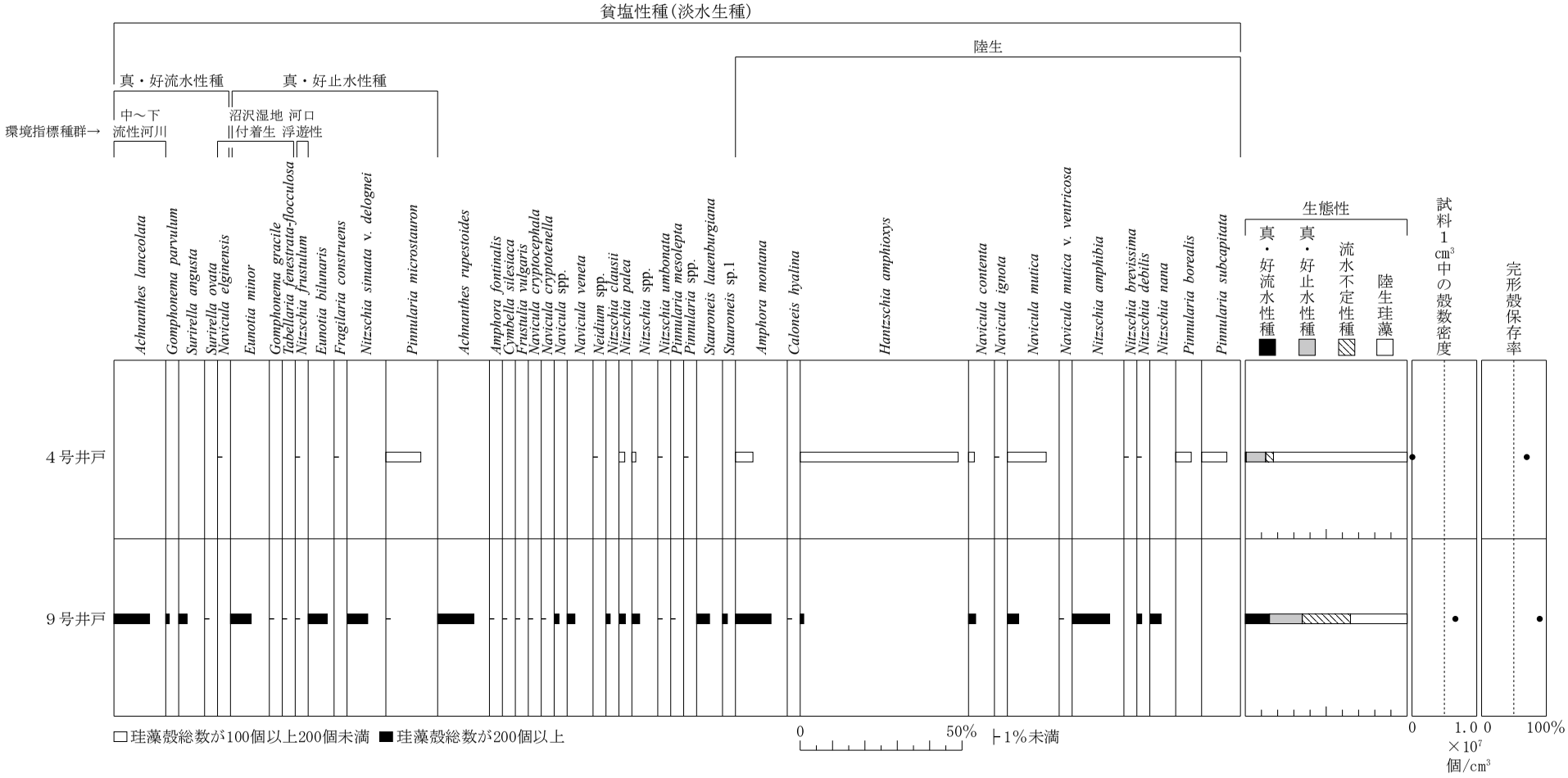


図３　高畑遺跡第20次調査における珪藻ダイアグラム

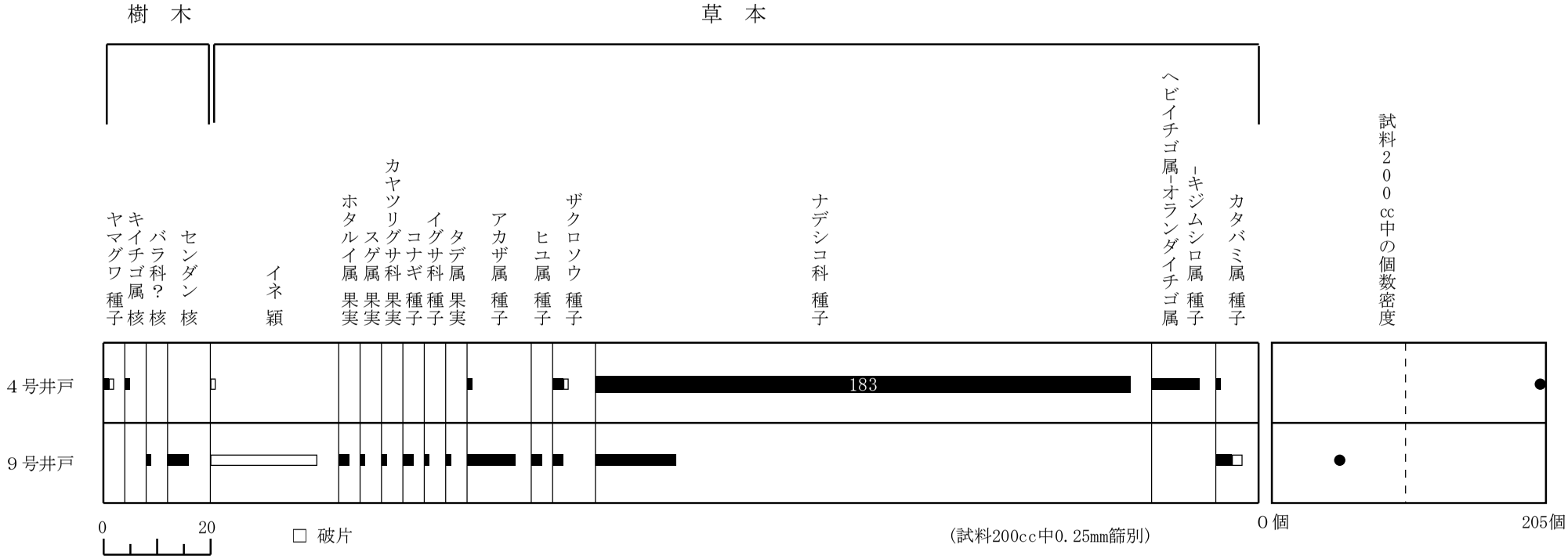
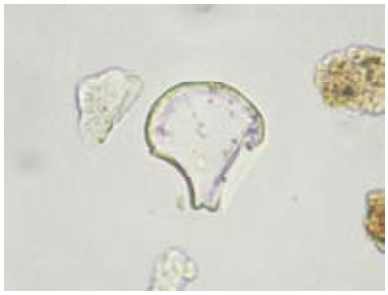
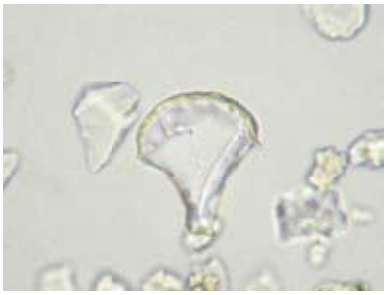


図４　高畑遺跡第20次調査における種実ダイアグラム

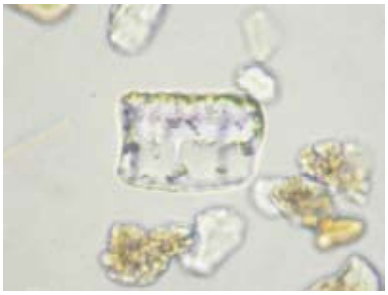
高畑遺跡第20次調査の植物珪酸体（プラント・オパール）



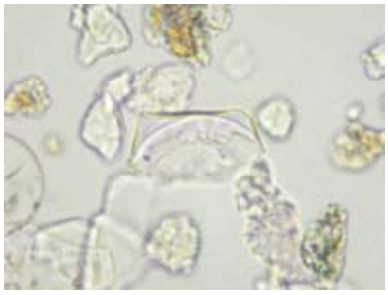
イネ
９号井戸



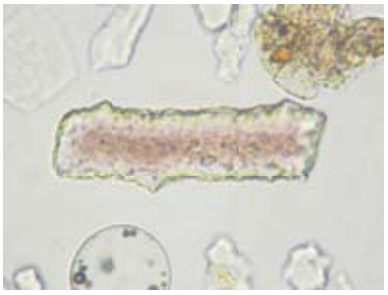
イネ
４号井戸



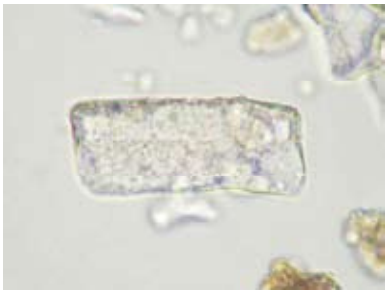
イネ（側面）
９号井戸



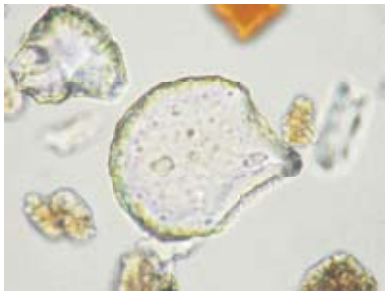
イネの籾殻（穎の表皮細胞）
４号井戸



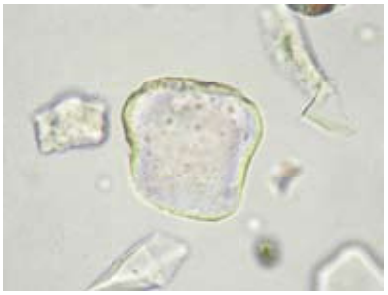
キビ族型
９号井戸



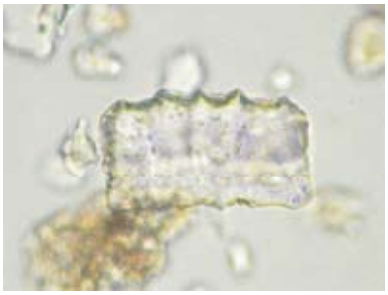
キビ族型
４号井戸



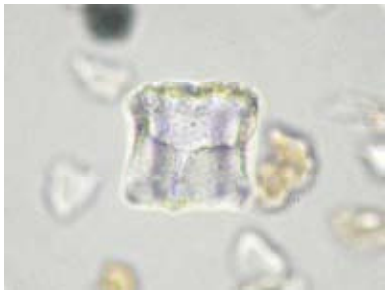
ヨシ属
４号井戸



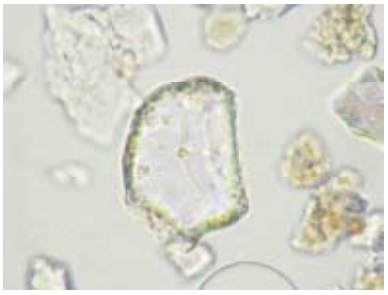
ススキ属型
４号井戸



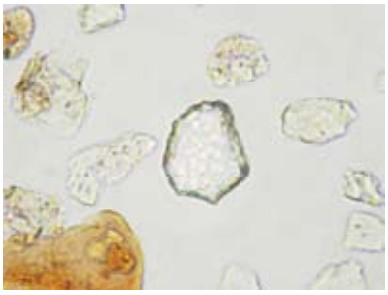
ネザサ節型
９号井戸



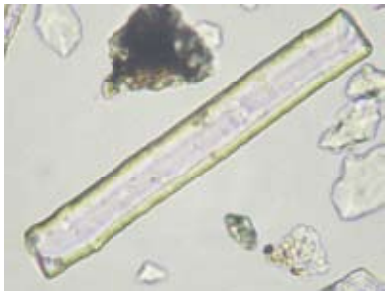
ネザサ節型
４号井戸



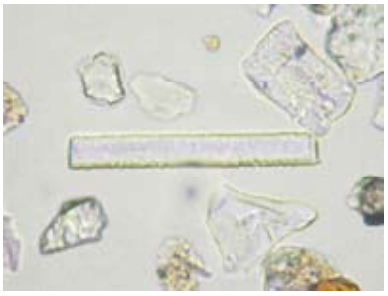
チマキザサ節型
９号井戸



ミヤコザサ節型
９号井戸



棒状珪酸体
４号井戸



棒状珪酸体
９号井戸

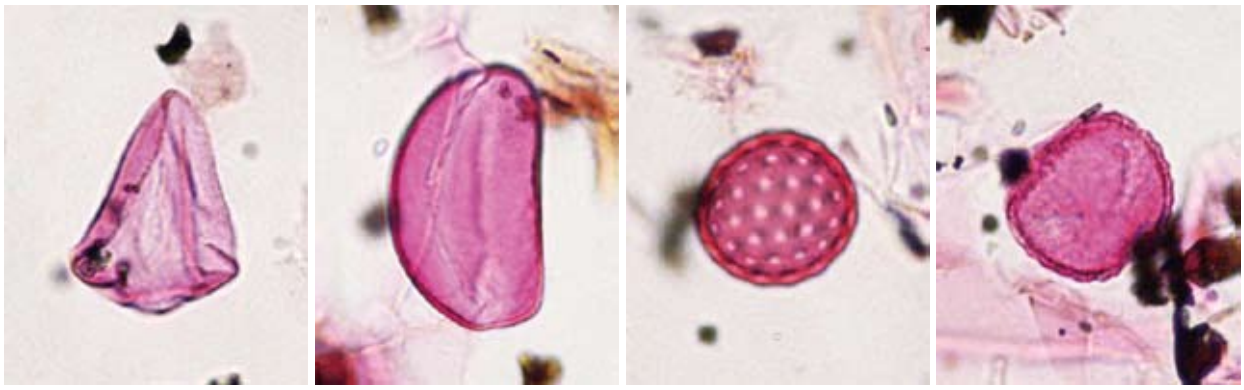
表皮毛起源
４号井戸

50μm

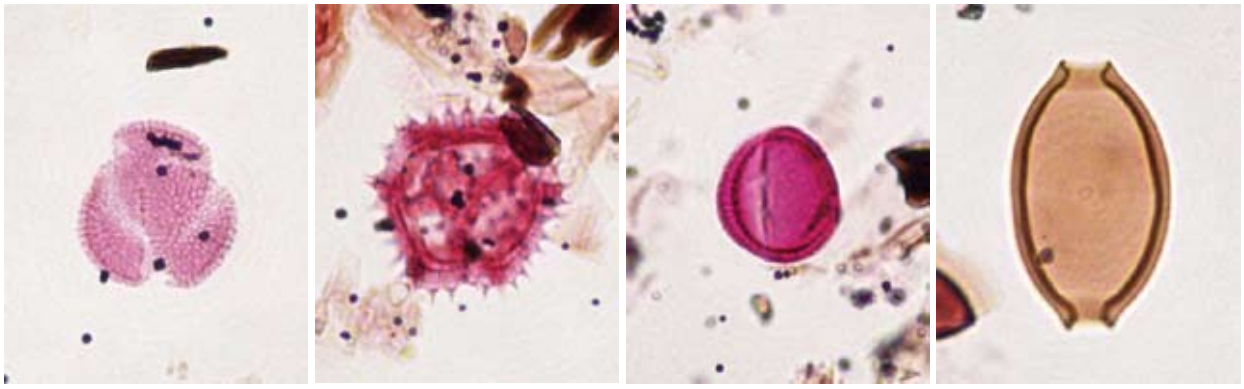
高畑遺跡第20次調査の花粉・寄生虫卵

1　スギ　2　シイ属-マテバシイ属　3　コナラ属コナラ亜属　4　コナラ属アカガシ亜属

5　エノキ属-ムクノキ　6　クワ科-イラクサ科　7　イネ科　8　イネ属型



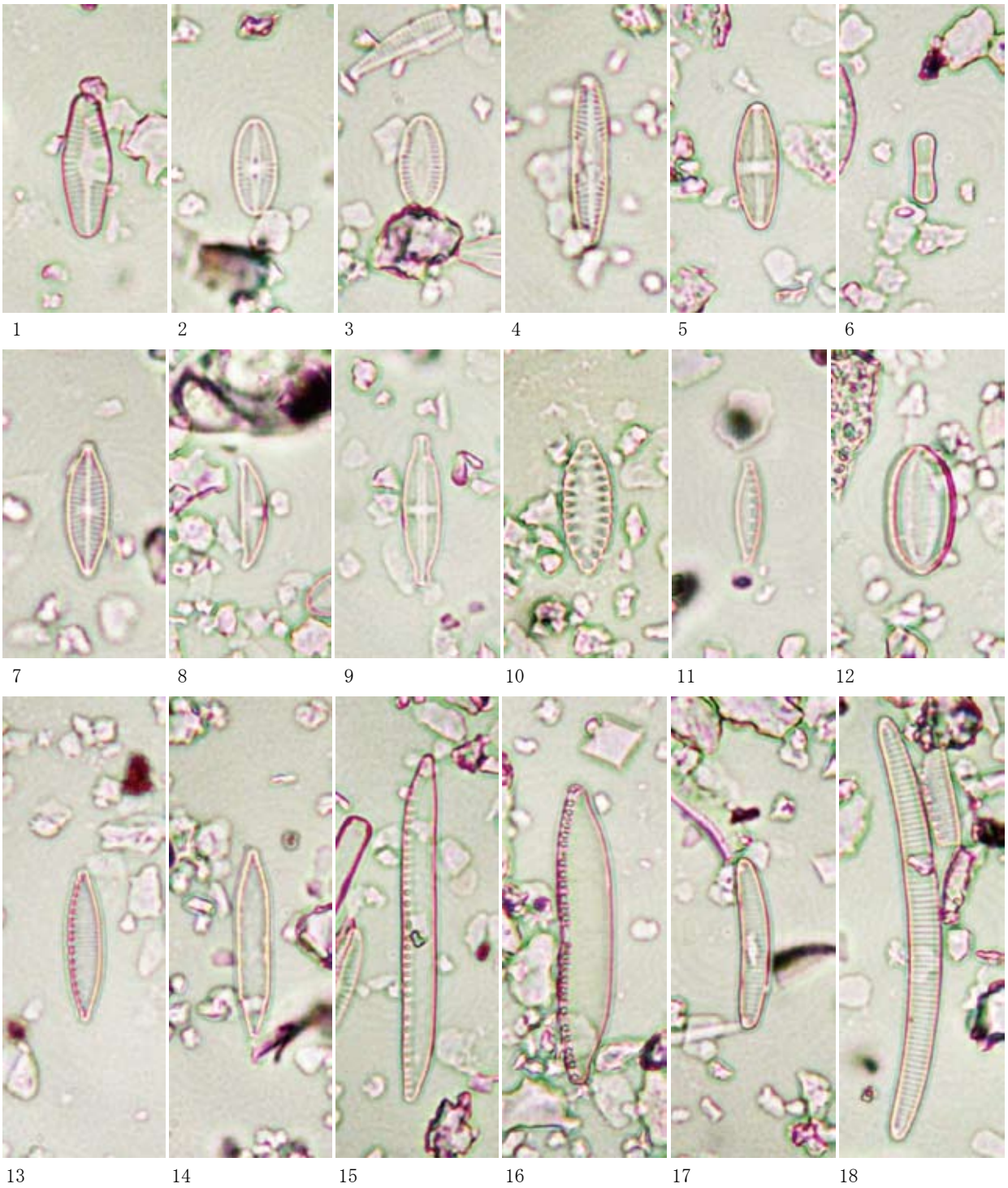
9　カヤツリグサ科　10　ミズアオイ属　11　アカザ科-ヒユ科　12　キンポウゲ属



13　アブラナ科　14　タンポポ亜科　15　ヨモギ属　16　鞭虫卵

10μm

高畑遺跡第20次調査の珪藻



1. *Achnanthes lanceolata* 2. *Achnanthes rupestoides* 3. *Achnanthes rupestoides* 4. *Pinnularia microstauron*
5. *Navicula mutica* 6. *Navicula contenta* 7. *Navicula veneta* 8. *Amphora montana* 9. *Stauroneis lauenburgiana*
10. *Surirella angusta* 11. *Nitzschia sinuata* v. *delognei* 12. *Nitzschia debilis* 13. *Nitzschia amphibia* 14. *Nitzschia palea*
15. *Nitzschia nana* 16. *Hantzschia amphioxys* 17. *Eunotia minor* 18. *Eunotia bilunaris*

高畑遺跡第20次調査の種実

1　ヤマグワ種子　0.5mm

2　キイチゴ属核　0.5mm

3　センダン核　1.0mm

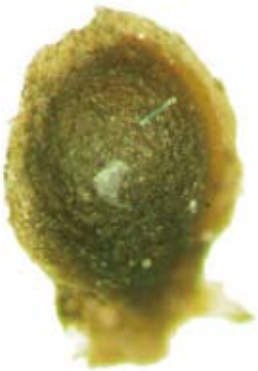
4　イネ穎　1.0mm

5　イネ穎　1.0mm

6　ホタルイ属果実　0.5mm

7　スゲ属果実　1.0mm

8　コナギ種子　0.1mm



9　イグサ科種子　0.1mm

10　タデ属果実　0.5mm

11　アカザ属種子　0.1mm

12　ヒユ属種子　0.1mm

13　ザクロソウ種子　0.1mm

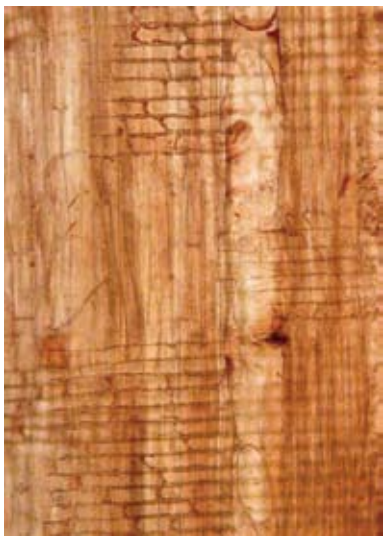
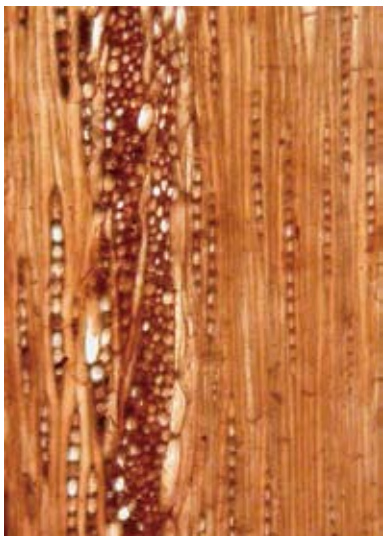
14　ナデシコ科種子　0.1mm

15　ヘビイチゴ属
-オランダイチゴ属-キジムシロ属種子　0.1mm

16　カタバミ属種子　0.5mm

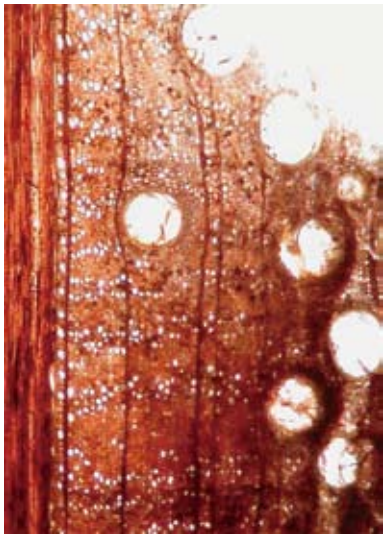
横断面 ━━━━━━ ： 0.5mm　放射断面━━━━━━ ： 0.1mm　接線断面━━━━━━ ： 0.2mm

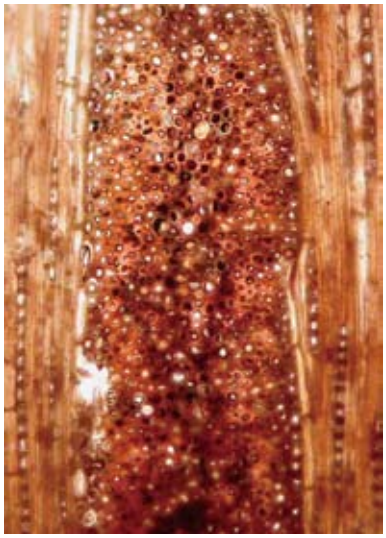
１．杭列№103　タモ網枠　マキ属

横断面 ━━━━━━ ： 0.5mm　放射断面━━━━━━ ： 0.2mm　接線断面━━━━━━ ： 0.2mm

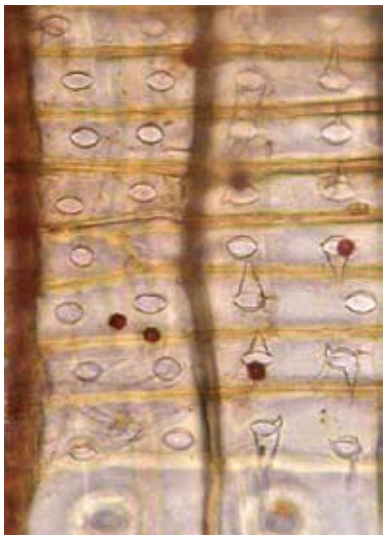
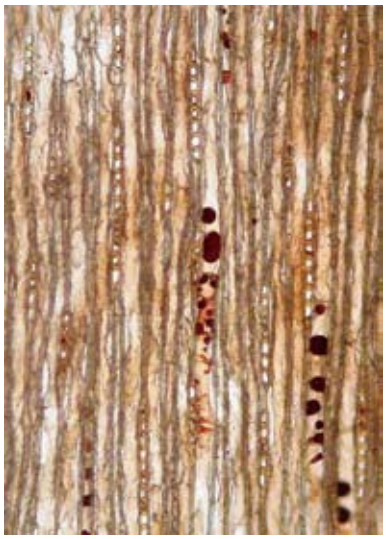
２．2010　田下駄　ツブラジイ





横断面 ━━━━━━ ： 0.5mm　放射断面━━━━━━ ： 0.2mm　接線断面━━━━━━ ： 0.2mm

３．2015　鍬　コナラ属アカガシ亜属

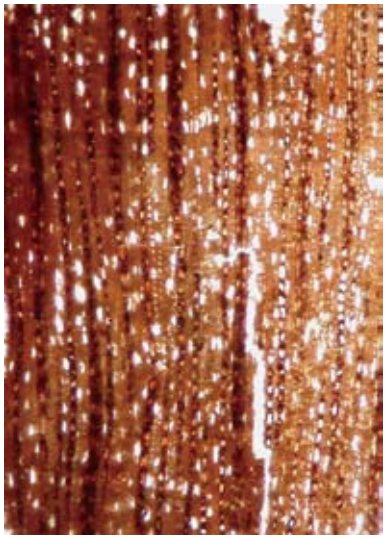



横断面 ━━━━━━━━ ： 0.5mm　放射断面━━━━━━━━ ： 0.05mm　接線断面━━━━━━━━ ： 0.2mm

４．2004-a　タクリ台　スギ

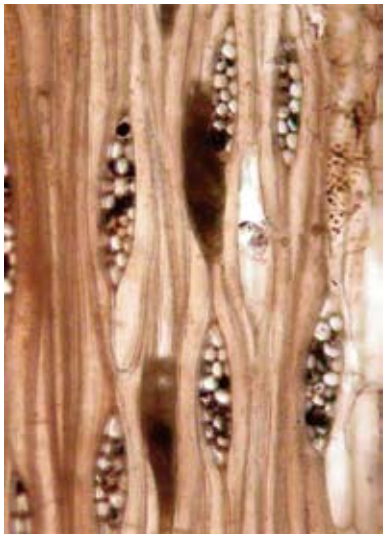
横断面 ━━━━━━━━ ： 0.2mm　放射断面━━━━━━━━ ： 0.05mm　接線断面━━━━━━━━ ： 0.2mm

５．不明木製品　曲げ物内出土　ヒノキ



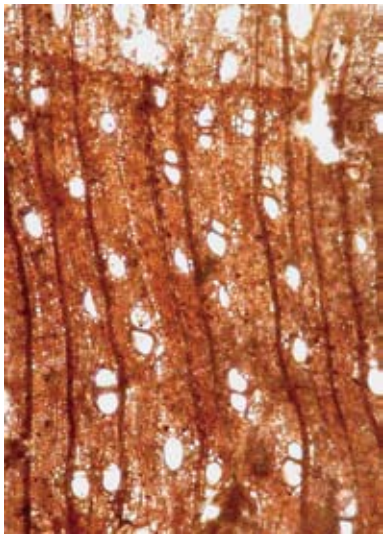
横断面 ━━━━━━━━ ： 0.5mm　放射断面━━━━━━━━ ： 0.2mm　接線断面━━━━━━━━ ： 0.2mm

６．554　編錘　シキミ



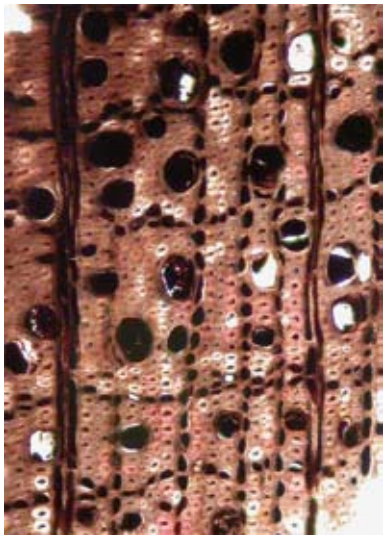
横断面 ━━━━━━ ： 0.5mm　放射断面━━━━━━ ： 0.2mm　接線断面━━━━━━ ： 0.2mm

７．桶　井戸側　クスノキ



横断面 ━━━━━━ ： 0.5mm　放射断面━━━━━━ ： 0.2mm　接線断面━━━━━━ ： 0.2mm

８．2024　建築材　タブノキ



横断面 ━━━━━━ ： 0.2mm　放射断面━━━━━━ ： 0.1mm　接線断面━━━━━━ ： 0.2mm

９．井側内SE-09№22　櫛　イスノキ

横断面 ━━━━━━ ： 0.5㎜　放射断面━━━━━━ ： 0.2㎜　接線断面━━━━━━ ： 0.2㎜

10．蓋状木製品　鏡板：傘骨付　カエデ属

横断面 ━━━━━━ ： 0.5㎜　放射断面━━━━━━ ： 0.2㎜　接線断面━━━━━━ ： 0.2㎜

11．作業台？　アワブキ属

横断面 ━━━━━━ ： 0.5㎜　放射断面━━━━━━ ： 0.1㎜　接線断面━━━━━━ ： 0.1㎜

12．538　砧　ヤブツバキ

横断面 ━━━━━━ ： 0.5㎜　放射断面━━━━━━ ： 0.1㎜　接線断面━━━━━━ ： 0.2㎜

13．2128　編錘　サカキ

横断面 ━━━━━━ ： 0.5㎜　放射断面━━━━━━ ： 0.2㎜　接線断面━━━━━━ ： 0.2㎜

14．2097　編錘　ネジキ

横断面 ━━━━━━ ： 0.5㎜　放射断面━━━━━━ ： 0.2㎜　接線断面━━━━━━ ： 0.5㎜

15．555　編錘　タイミンタチバナ

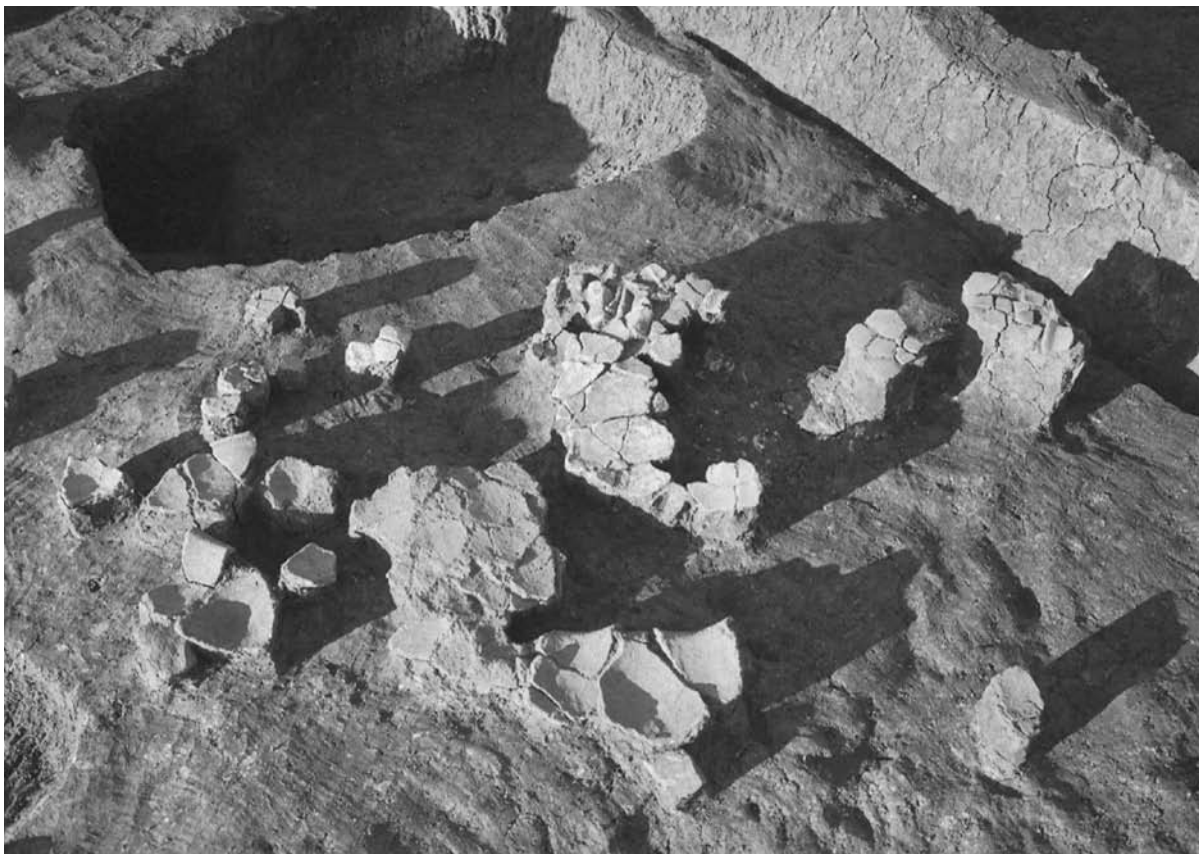
P L A T E S

調査区全景（西から）

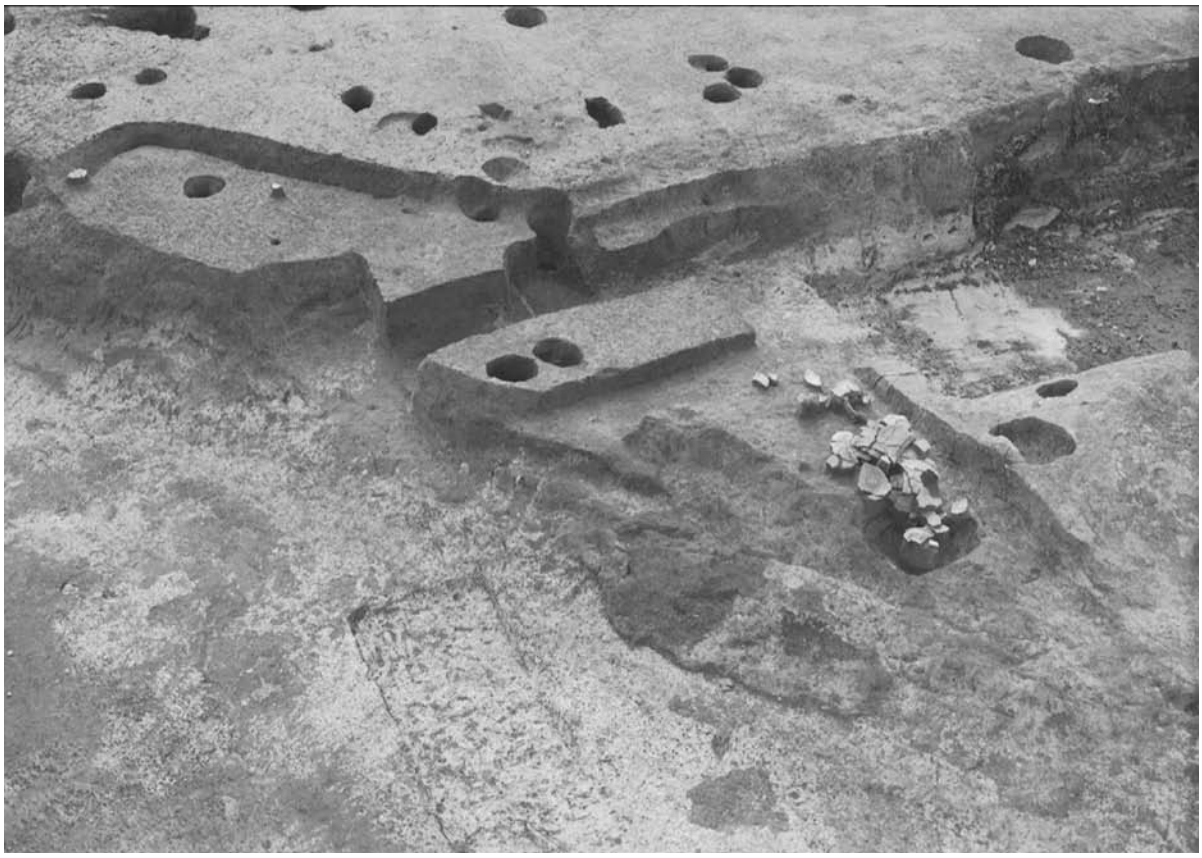
（1）調査区東南部全景（西から）

（2）2号住居全景（西から）

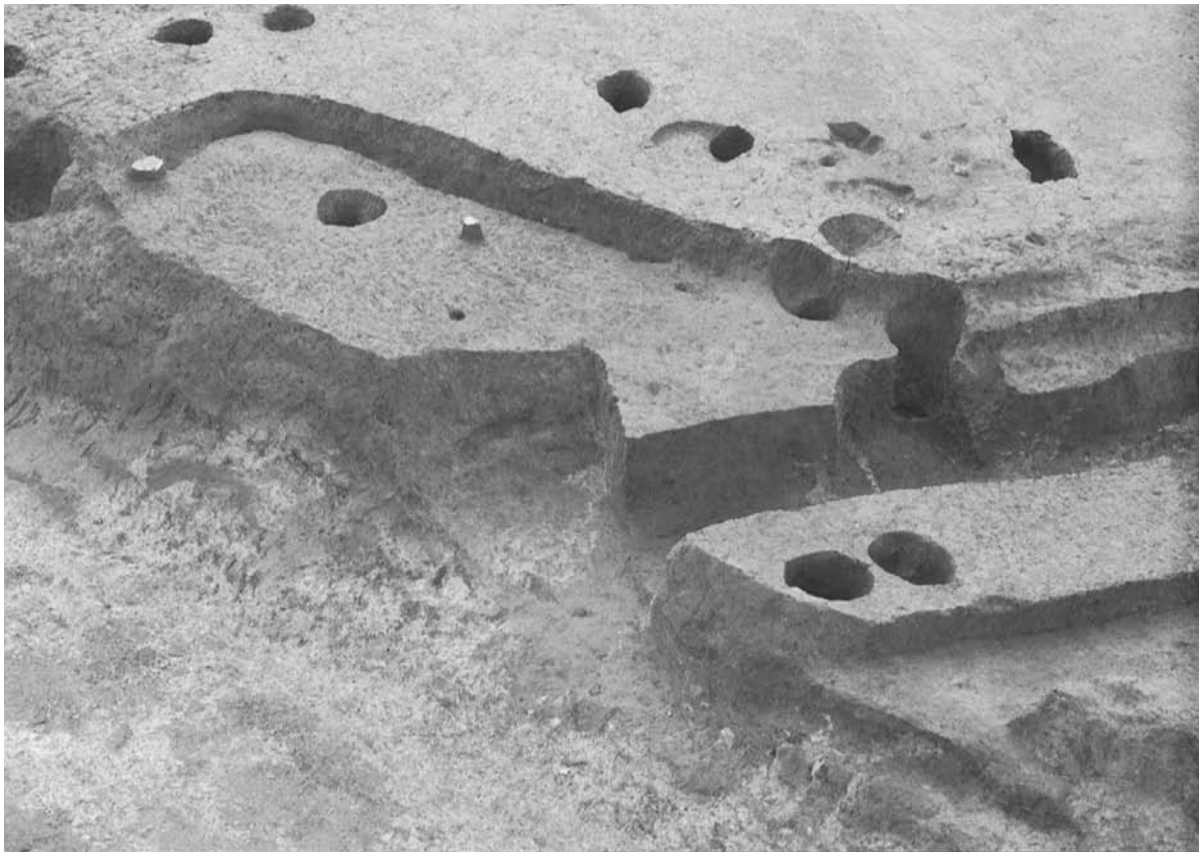
(1) 2 号住居全景(東から)



(2) 2 号住居遺物出土状況(南から)



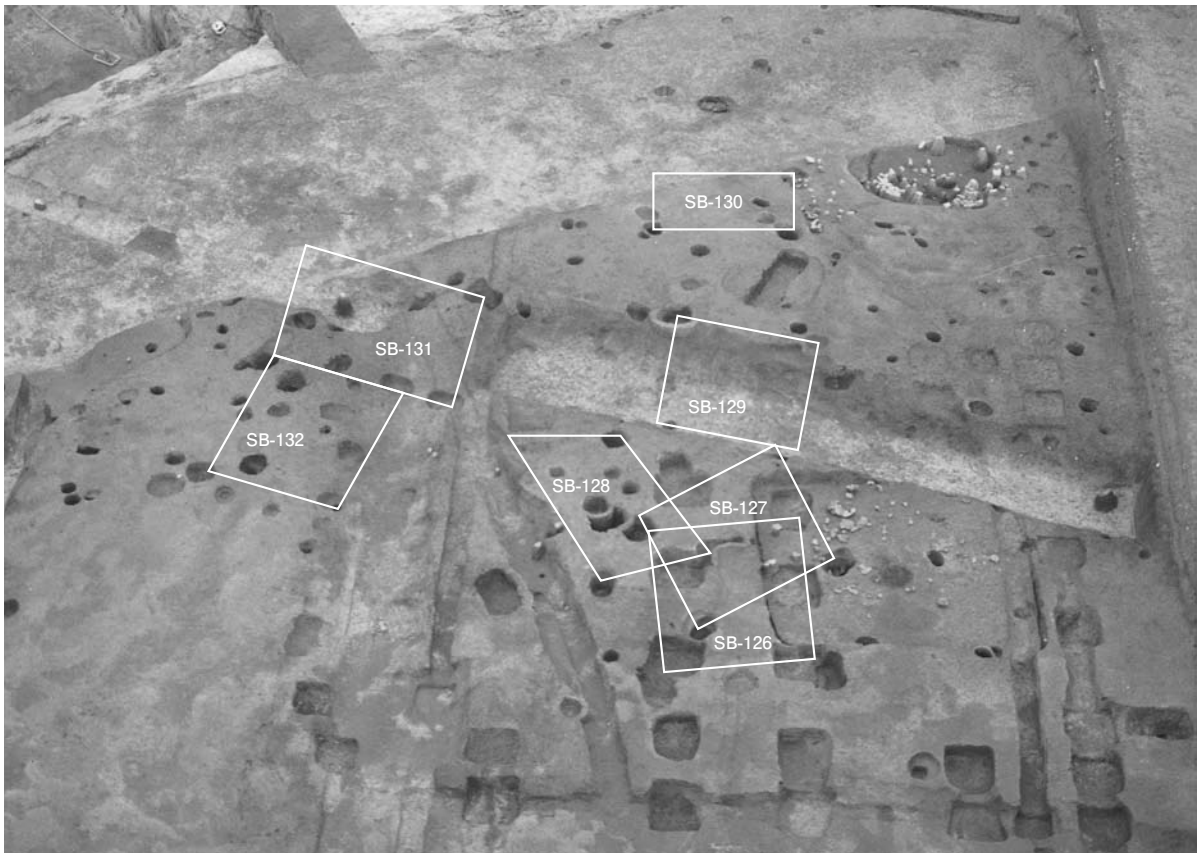
(1) 5・6 号住居全景(北東から)



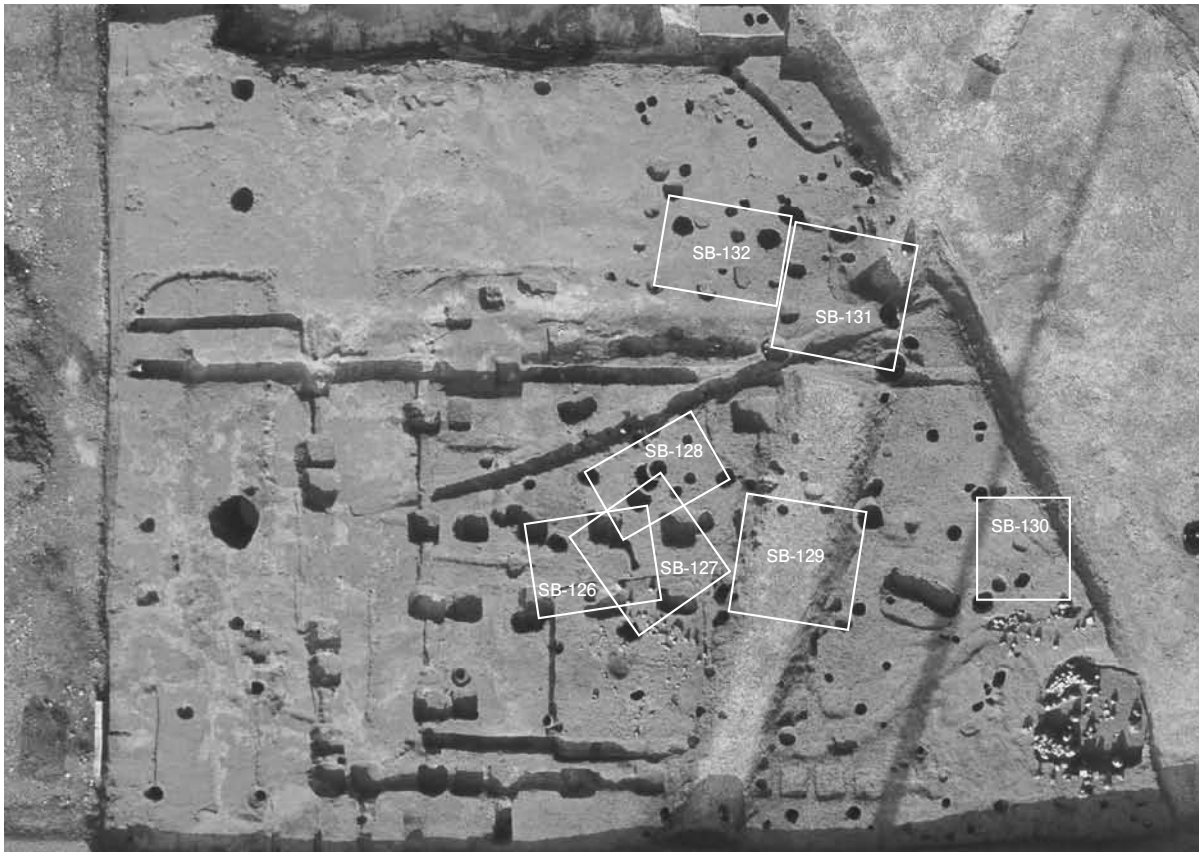
(2) 5 号住居全景(北東から)

(1) 6 号住居全景(北から)

(2) 6 号住居遺物出土状況(東から)



（1）126 ～ 132 号掘立柱建物（西から）



（2）126 ～ 132 号掘立柱建物（南から）

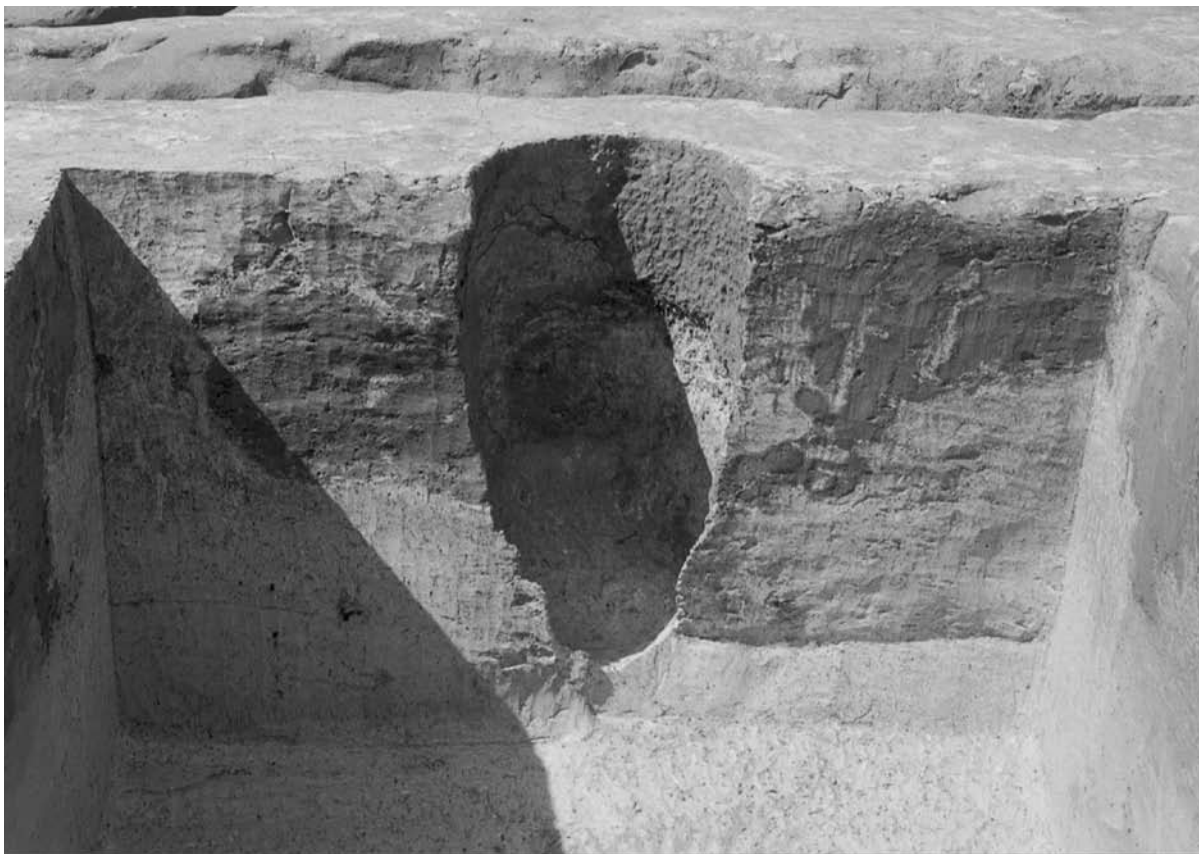
(1) 4号井戸全景(西から)

(2) 4号井戸上層遺物出土状況(西から)

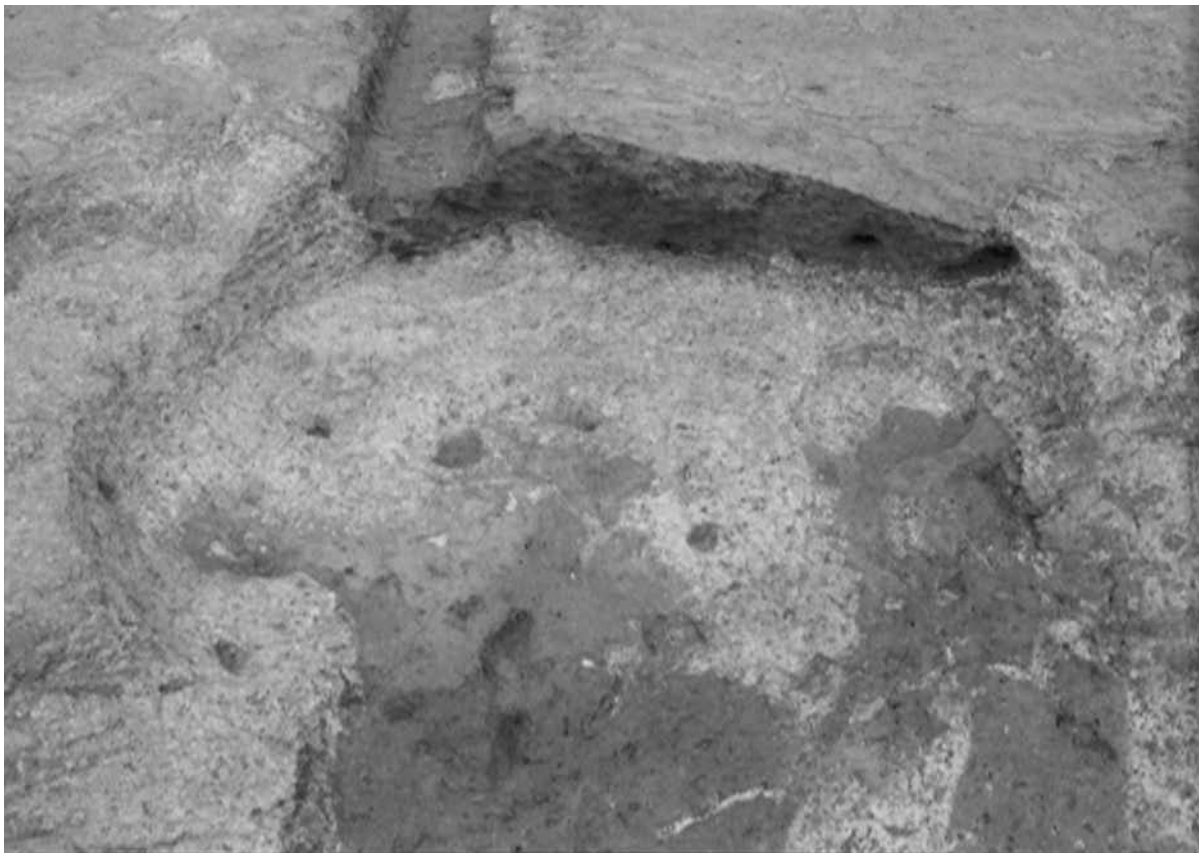
(1) 4 号井戸下層遺物出土状況(東から)

(2) 4 号井戸全景(西から)

(1) 99 号井戸全景(南から)

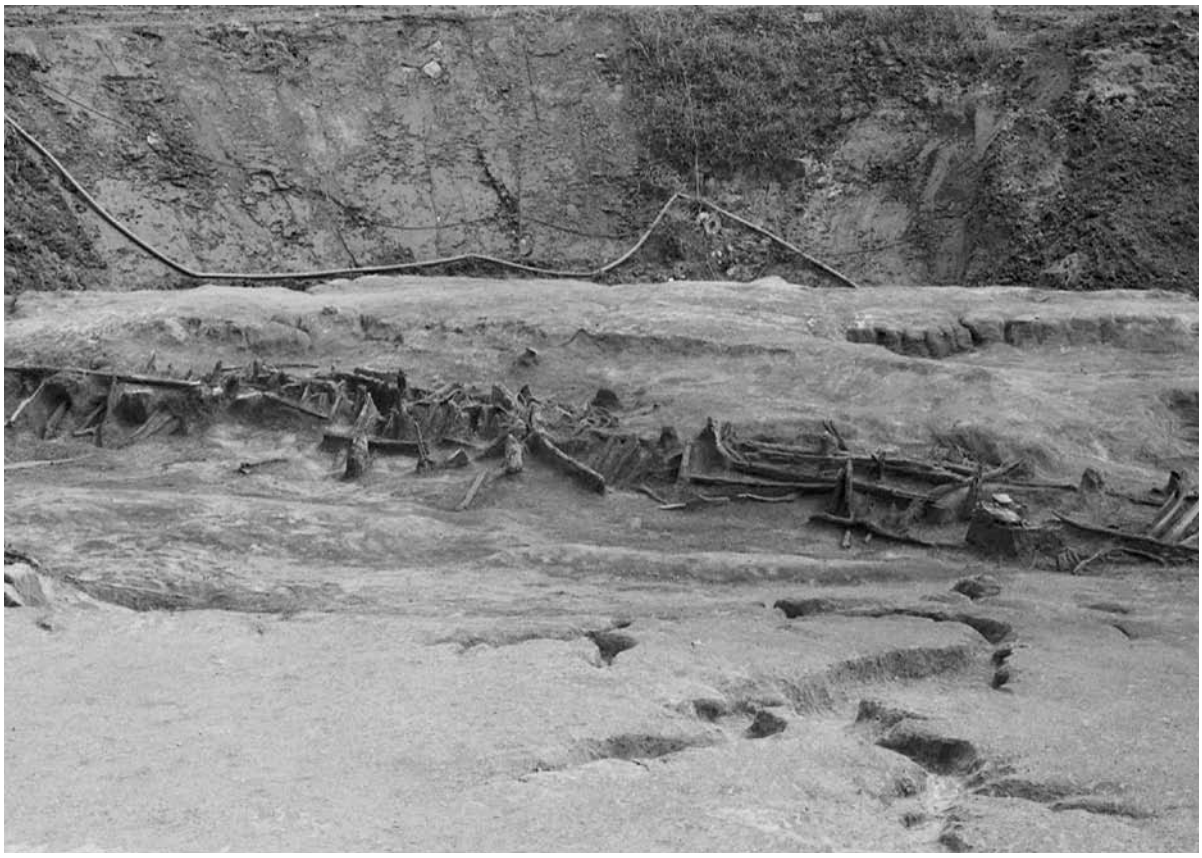


(2) 99 号井戸断面(南から)



（1）135 号貯蔵穴全景（東から）

（2）8 号木棺墓全景（南から）



（1）138 号井堰状杭列全景（北から）

（2）138 号井堰状杭列（東から）

（1）138 号井堰状杭列東側（北から）

（2）138 号井堰状杭列断面（東から）

（1）138 号井堰状杭列タモ網出土状況（西から）

（2）138 号井堰状杭列鉄斧柄出土状況（北から）

(1) 138 号井堰状杭列エブリ出土状況(北から)

(2) 137 号河川Ⅲ・Ⅳ区全景(南から)

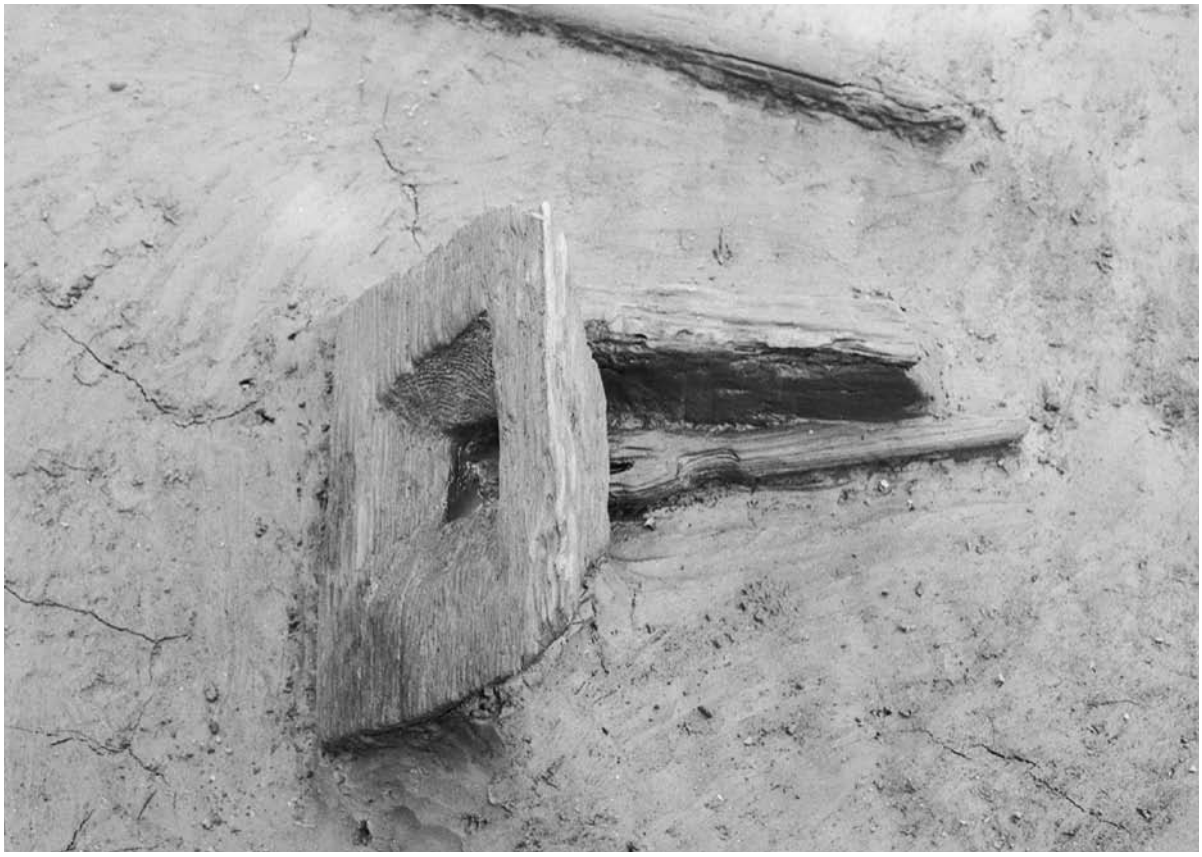
(1) 12 号土壙全景(東から)

(2) 10 号河川全景(南から)

(1) 10 号河川Ⅰ区全景(東から)

(2) 10 号河川Ⅱ区全景(西から)

（1）10 号河川舟形模造品出土状況（西から）



（2）10 号河川紡織具出土状況（南西から）

（1）10 号河川 I 区遺物出土状況（南から）

（2）10 号河川 I 区遺物出土状況（東から）

（1）10 号河川 I 区遺物出土状況（東から）

（2）10 号河川建築材出土状況（東から）

（1）10 号河川鍬・横槌出土状況（西から）

（2）10 号河川 I 区大足出土状況（北から）

（1）10 号河川自在カギ出土状況（南から）

（2）10 号河川Ⅱ区編錘出土状況（北から）

（1）10 号河川容器出土状況（西から）

（2）10 号河川Ⅱ区鍬出土状況（東から）

(1) 9 号井戸上層遺物出土状況(南から)

(2) 9 号井戸上層鬼瓦出土状況(西から)

（1）9 号井戸全景（東から）

（2）9 号井戸枠検出状況（西から）

(1) 9 号井戸神功開寶出土状況(南から)

(2) 9 号井戸東側井戸枠裏込板検出状況(東から)

(1) 9 号井戸東側井戸枠裏込板(東から)

(2) 9 号井戸井戸枠検出状況(東から)

（1）9 号井戸底桶検出状況（南から）

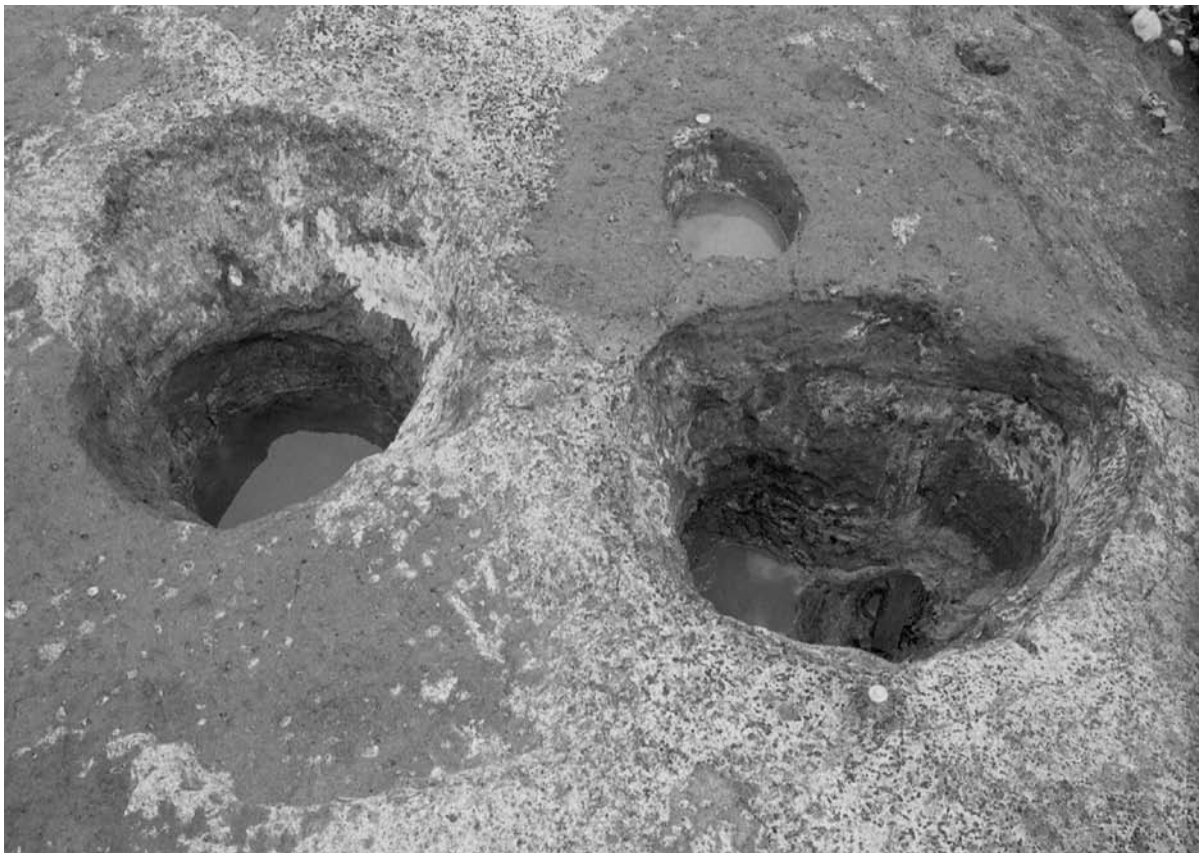
（2）9 号井戸枠断面（東から）

（1）9 号井戸底桶検出状況（東から）

（2）9 号井戸底桶（東から）

（1）9 号井戸遺物出土状況（東から）

（2）9 号井戸底桶内遺物出土状況（北から）



(1) 133・134 号井戸(南から)

(2) 133 号井戸遺物出土状況(南から)

（1）100 号道路遺構南半部（南から）

（2）100 号道路遺構南端部（南から）

（1）100 号道路遺構北半部（南から）

（2）100 号道路遺構北端部（北から）

(1) 1号溝(西から)

(2) 1号溝南半部(南から)

（1）136 号溝南半部（南から）

（2）136 号溝中央部遺物出土状況（南から）

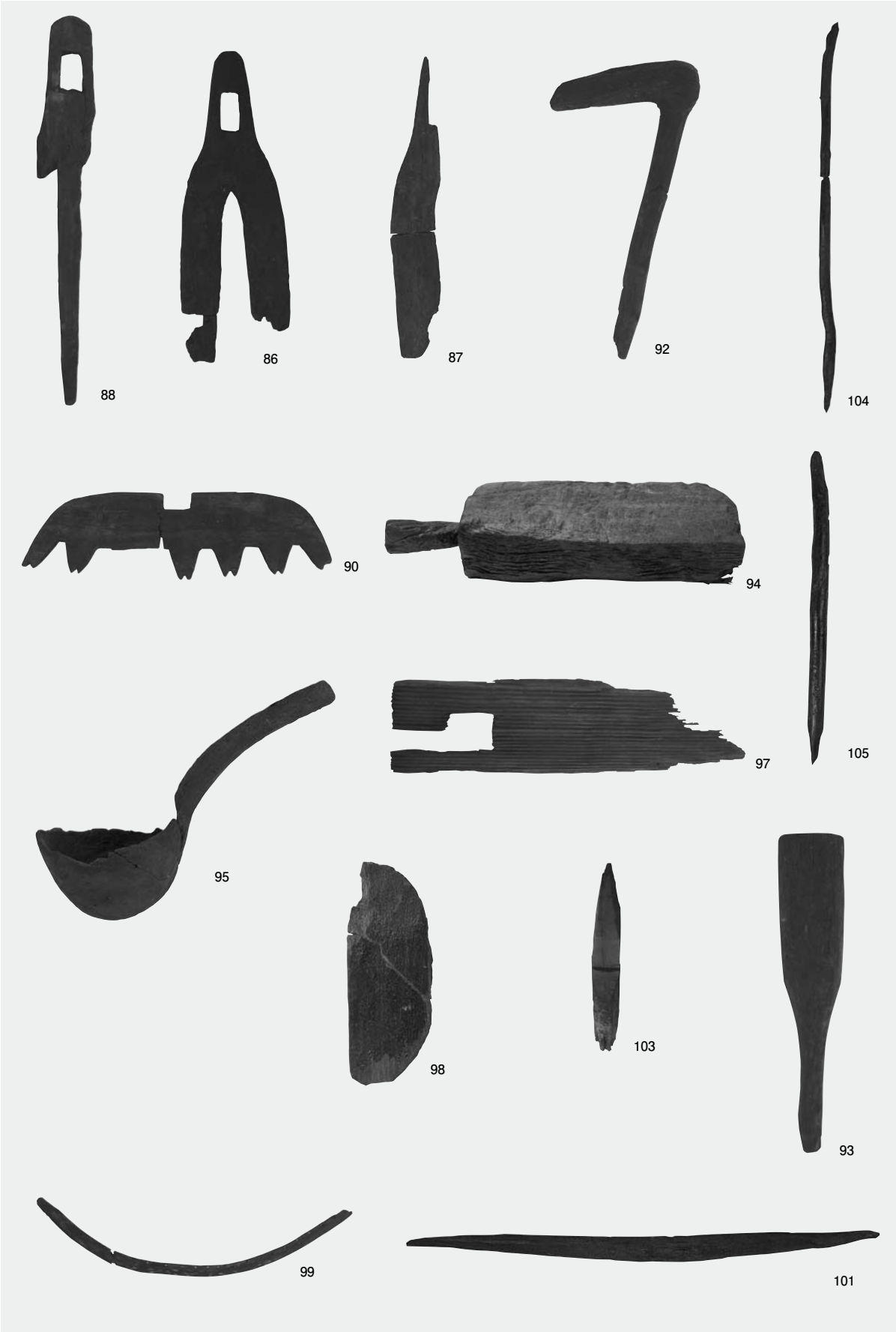
（1）136 号溝北半部遺物出土状況（南から）

（2）136 号溝鬼瓦出土状況（西から）

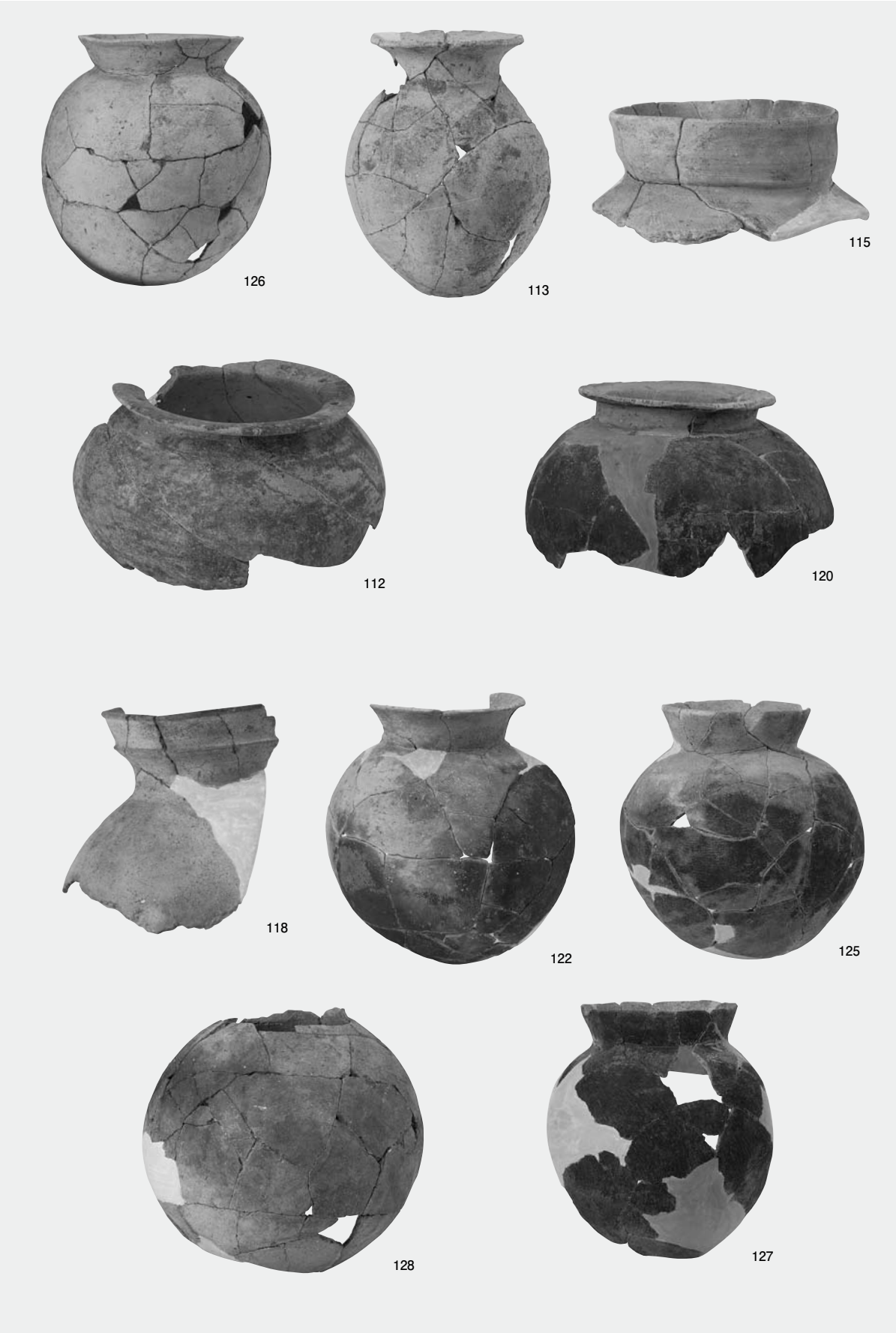
（1）101・102 号溝（南から）

（2）101 号溝遺物出土状況（南から）

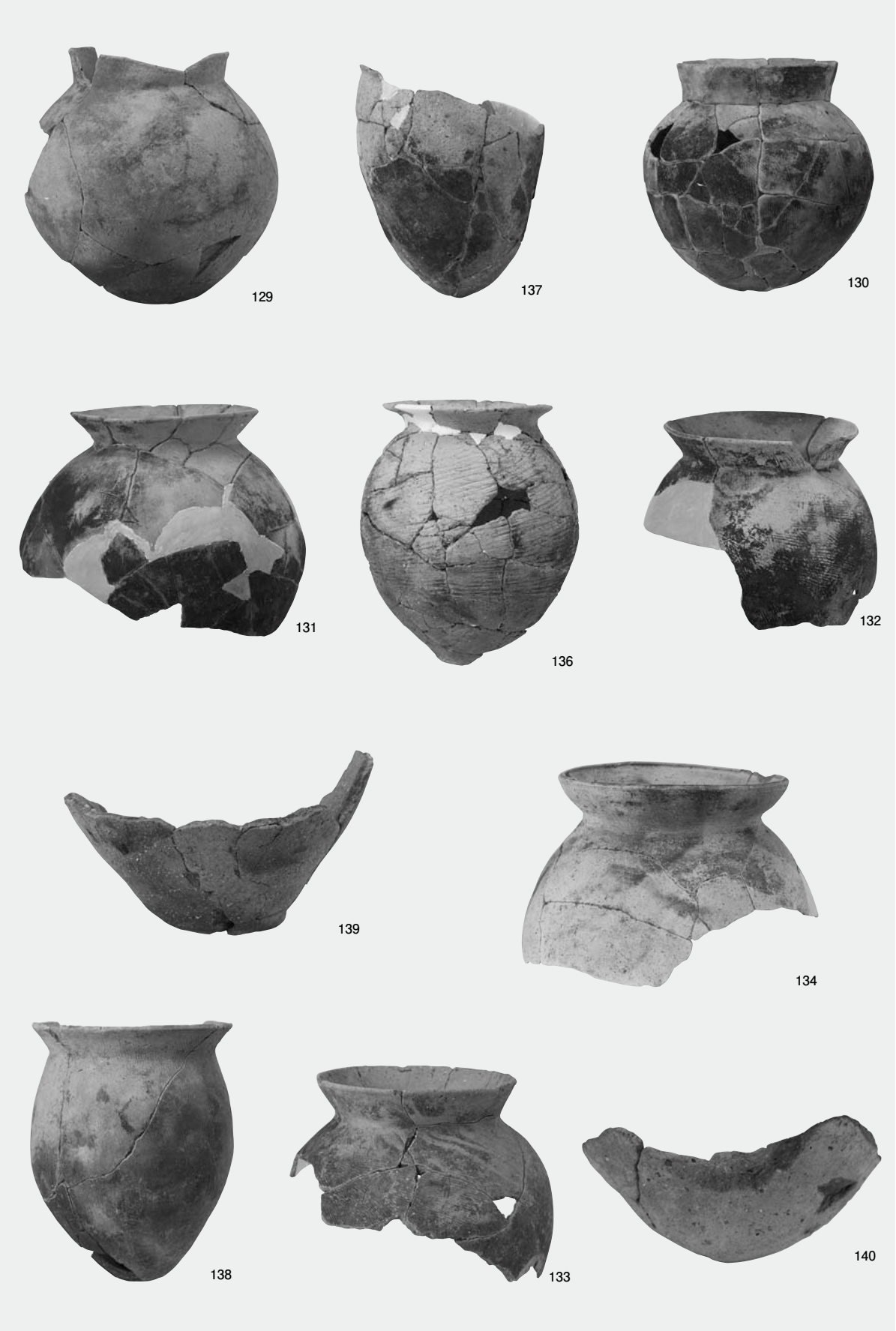
出土遺物 1（縮尺不同）



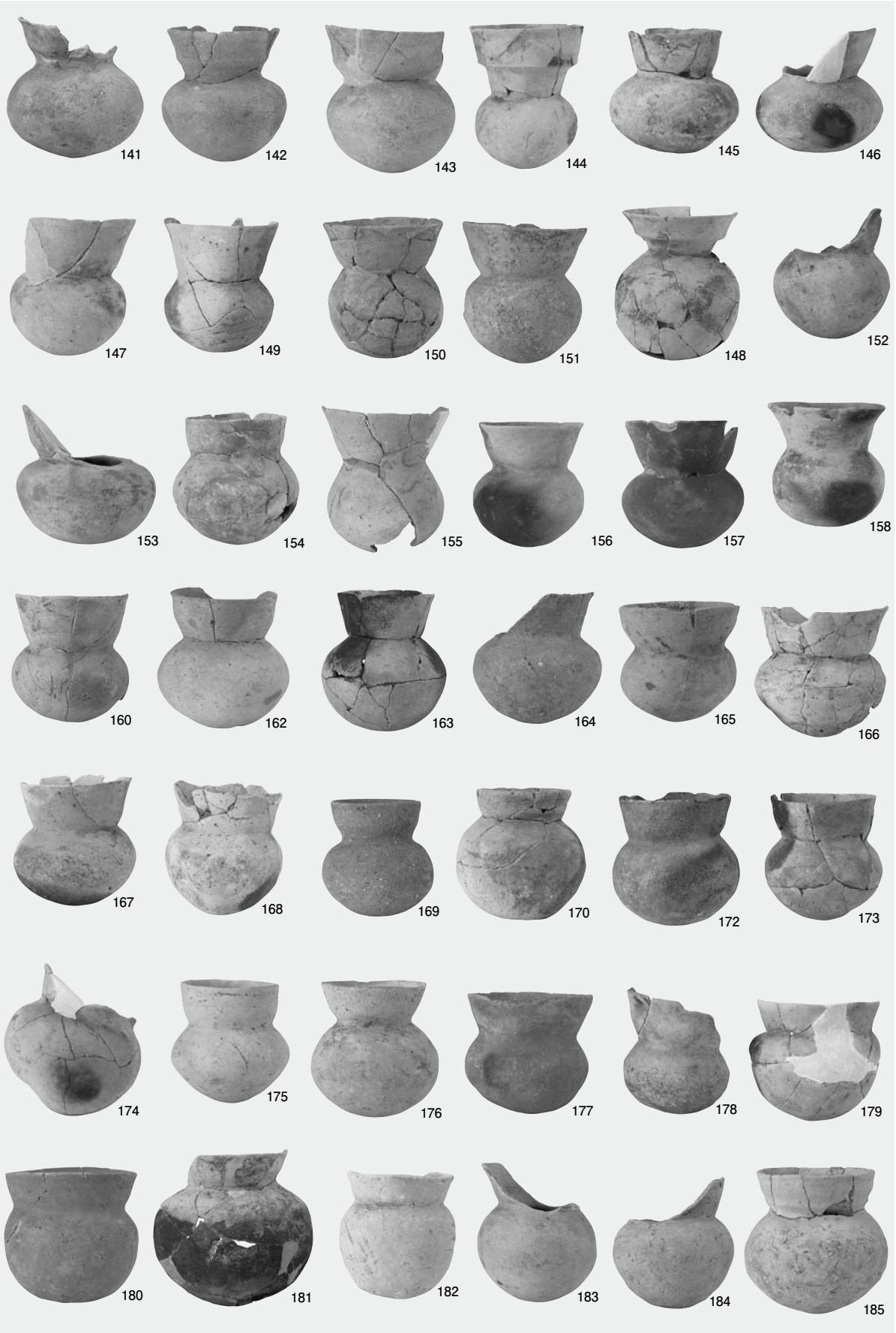
出土遺物 2（縮尺不同）



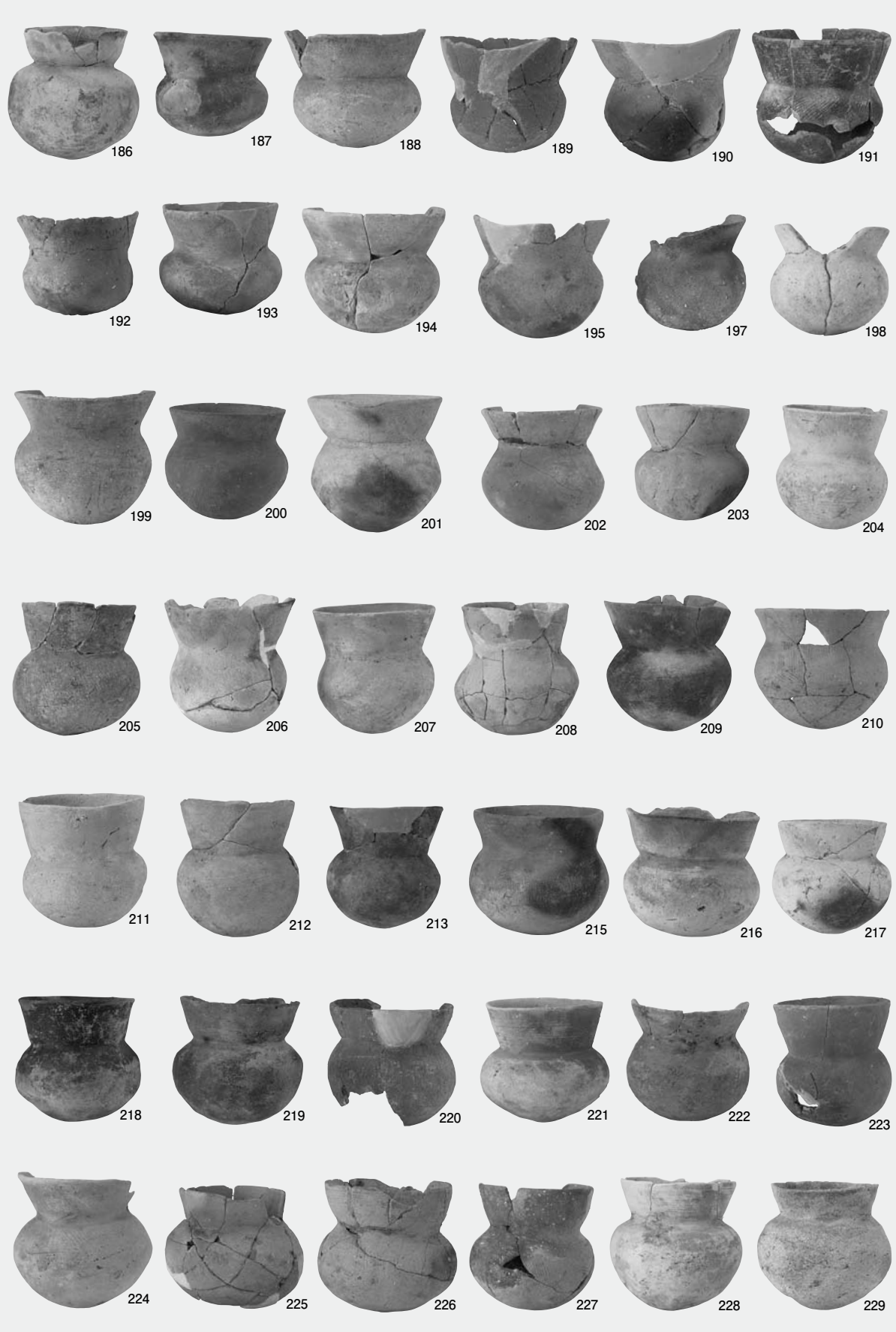
出土遺物 3（縮尺不同）



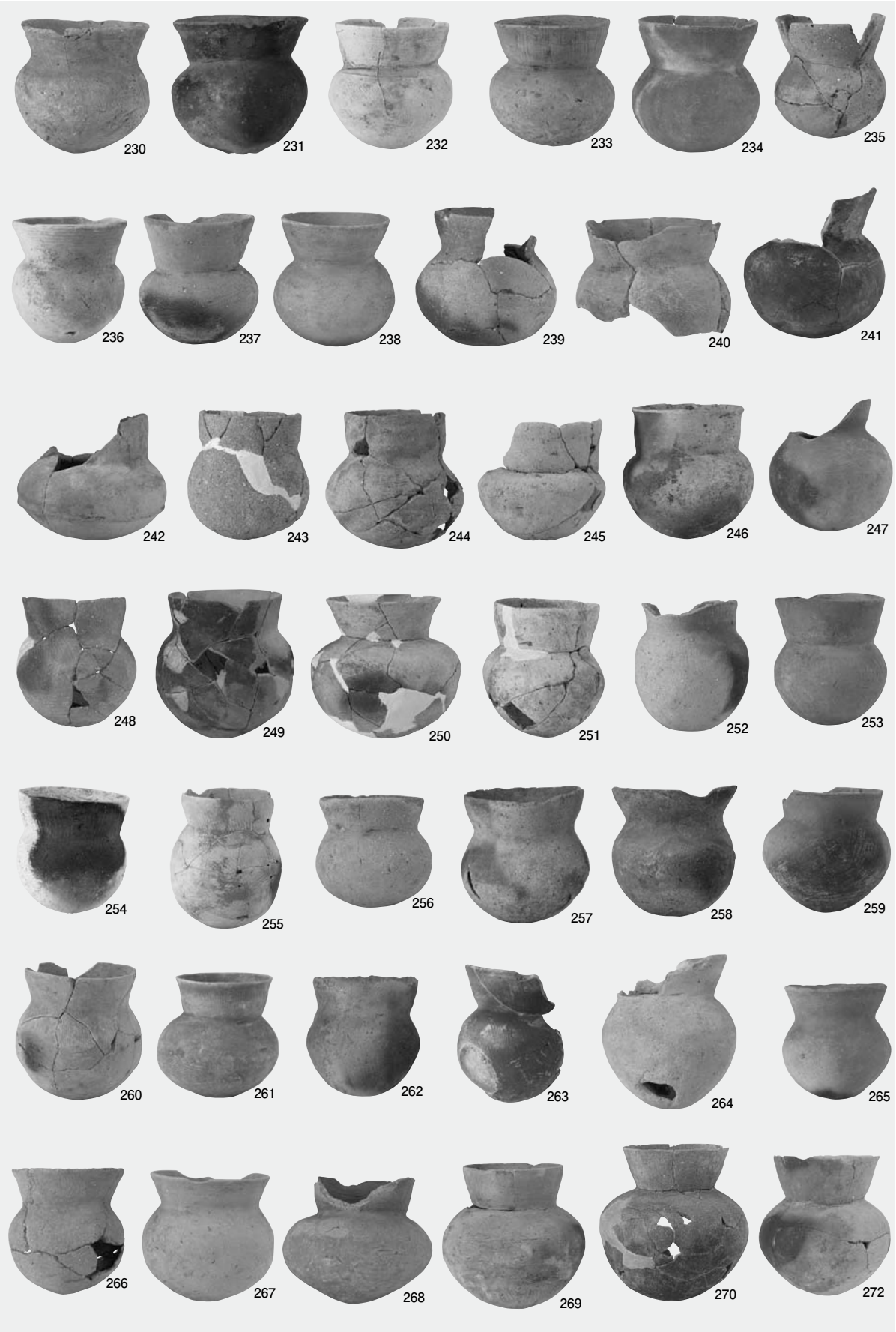
出土遺物 4（縮尺不同）


141
142
143
144
145
146
147
149
150
151
148
152
153
154
155
156
157
158
160
162
163
164
165
166
167
168
169
170
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185

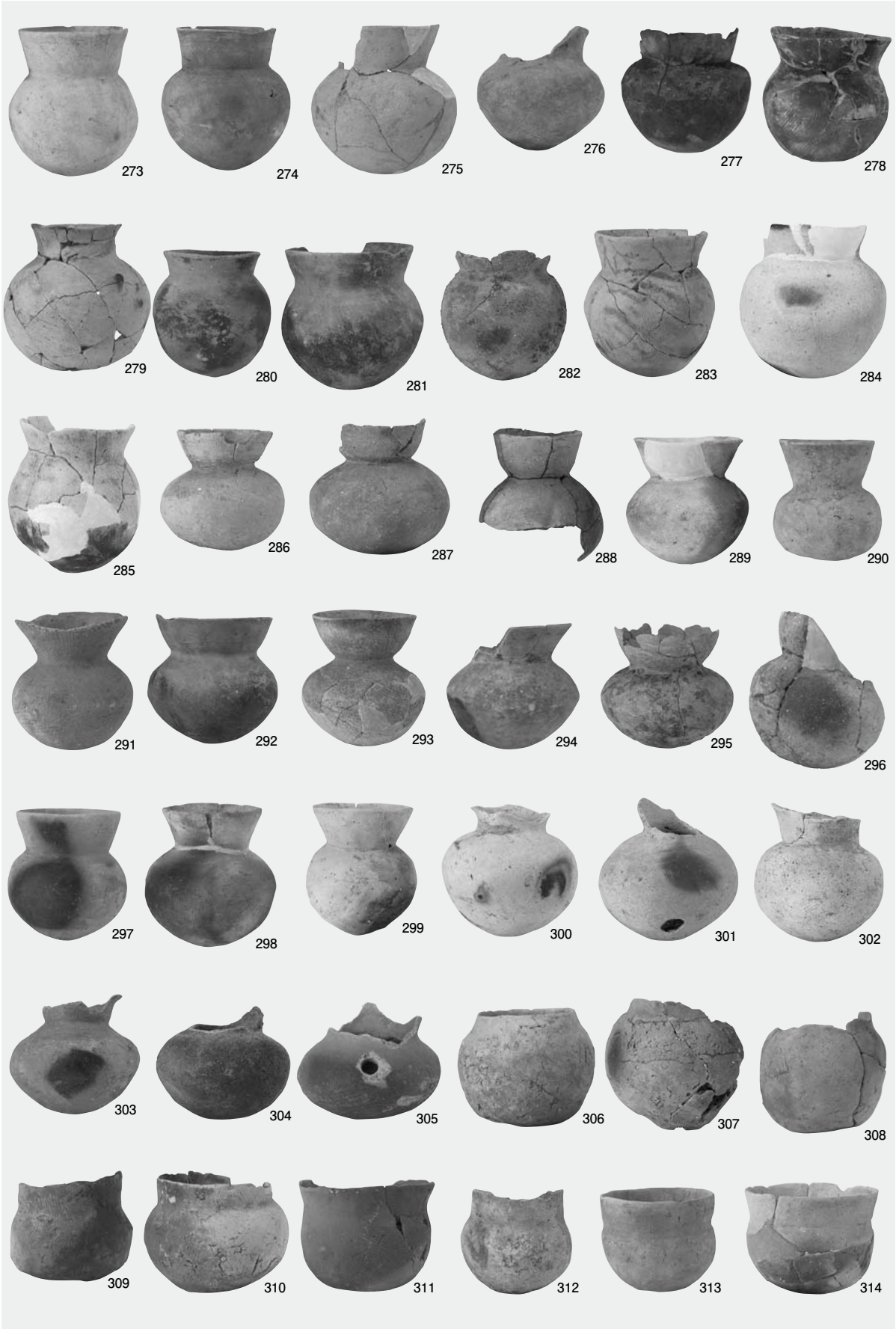
出土遺物 5（縮尺不同）


186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229

出土遺物 6（縮尺不同）


230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
272

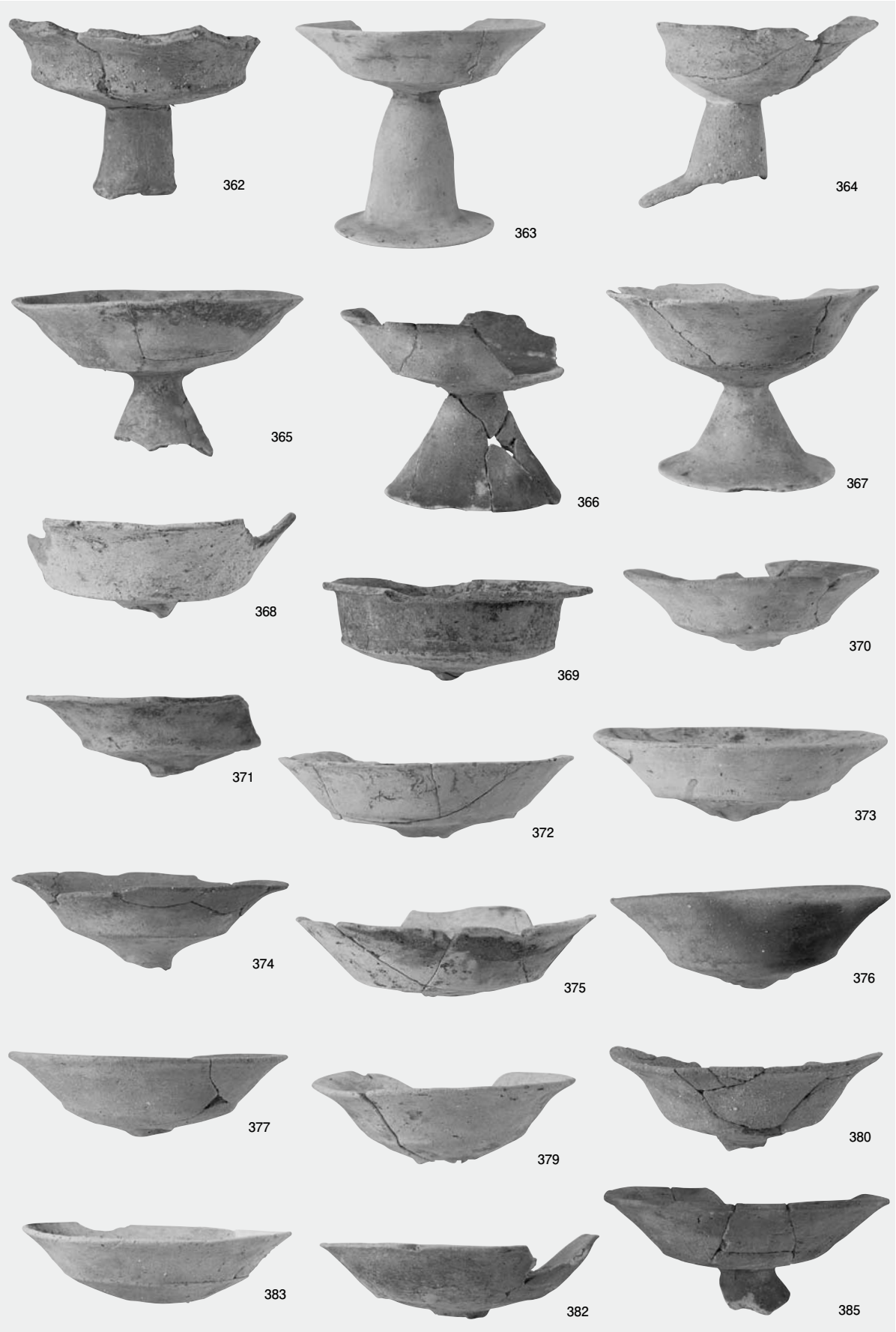
出土遺物 7（縮尺不同）


273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314

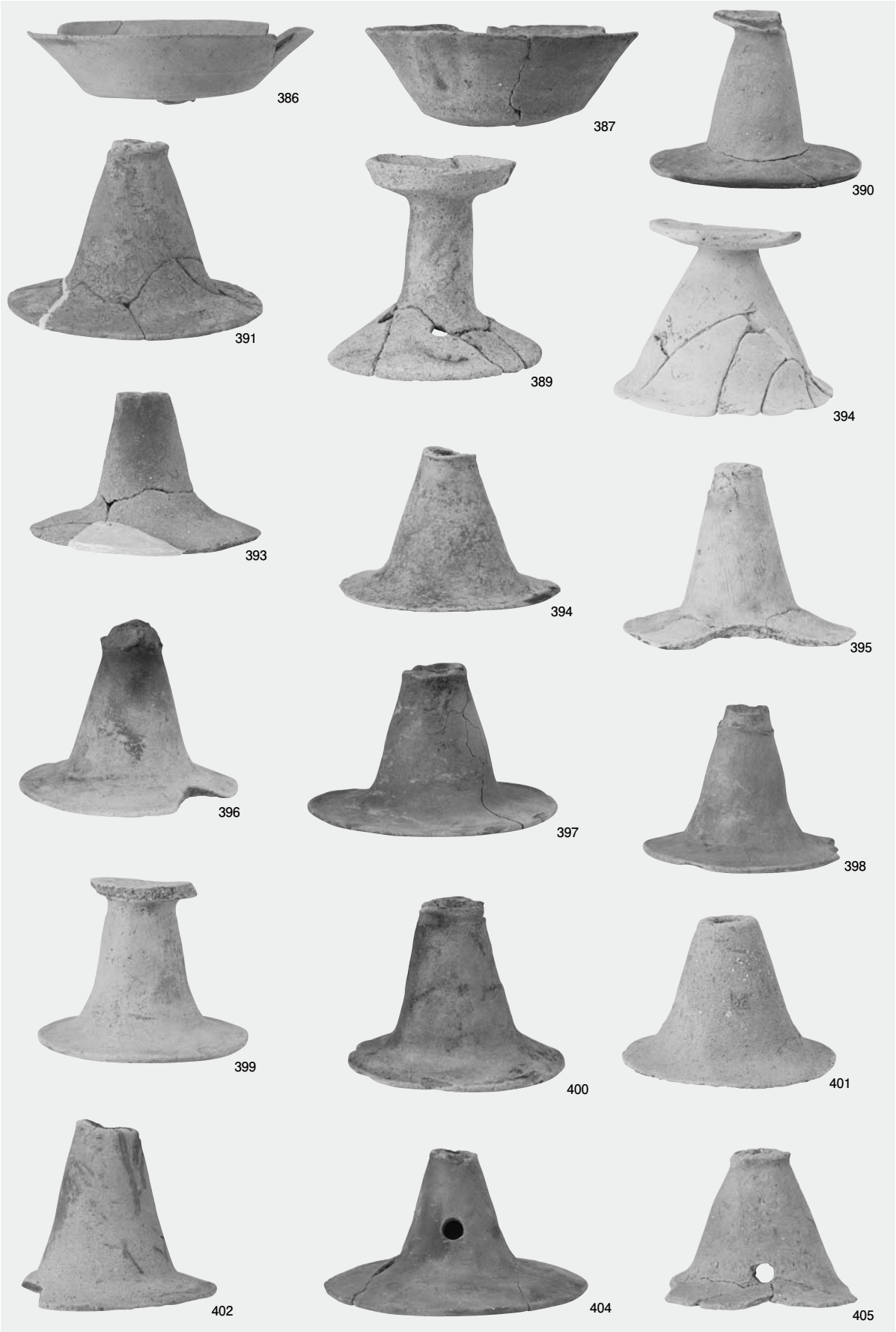
出土遺物 8（縮尺不同）

315
316
317
318
319
320
321
322
323
325
326
327
328
329
330
331
324
334
335
332
333
337
338
339
341
342
344
346
347
349
350
351
352
353
354
355
358
359
360
458

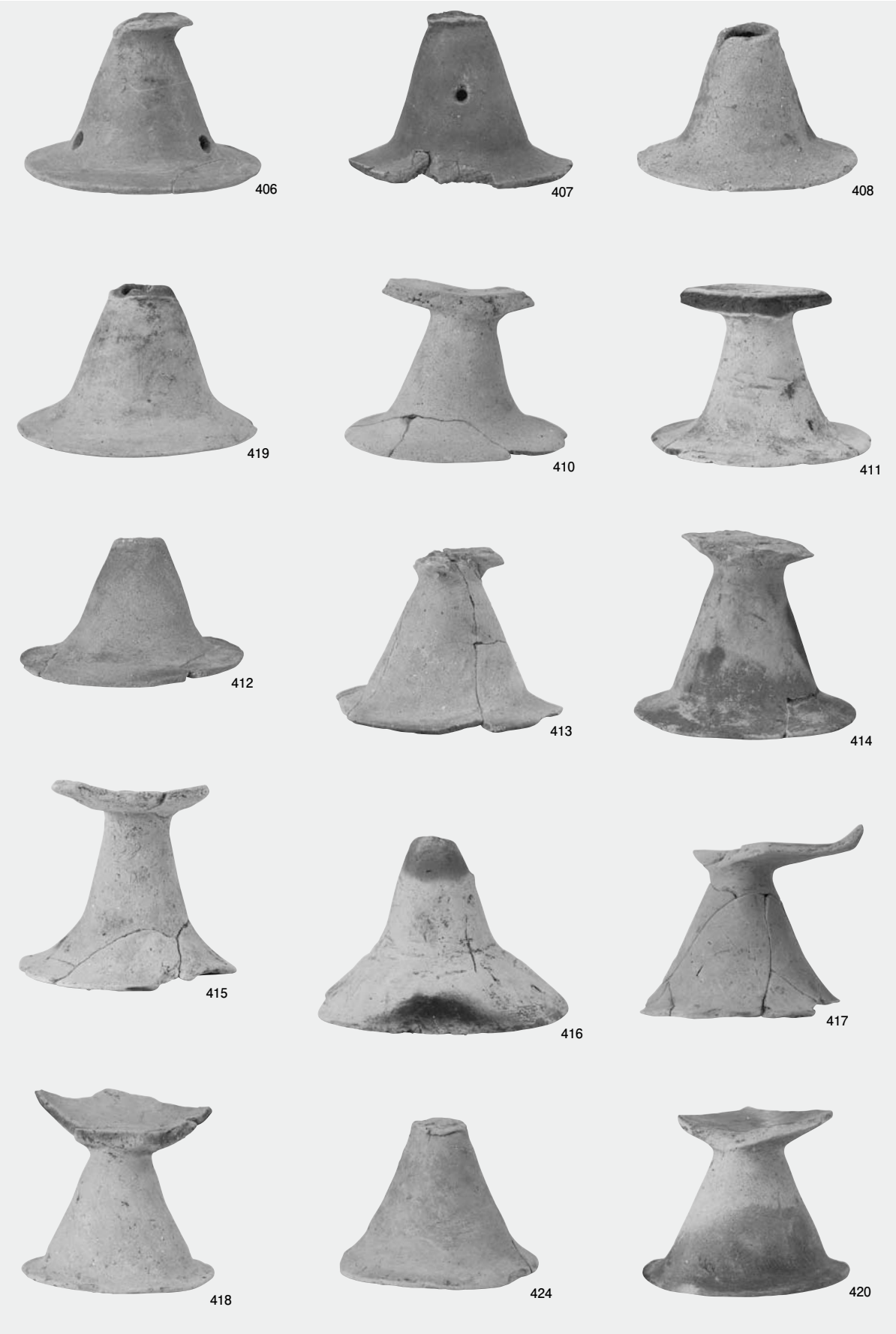
出土遺物 9（縮尺不同）


362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
379
380
383
382
385

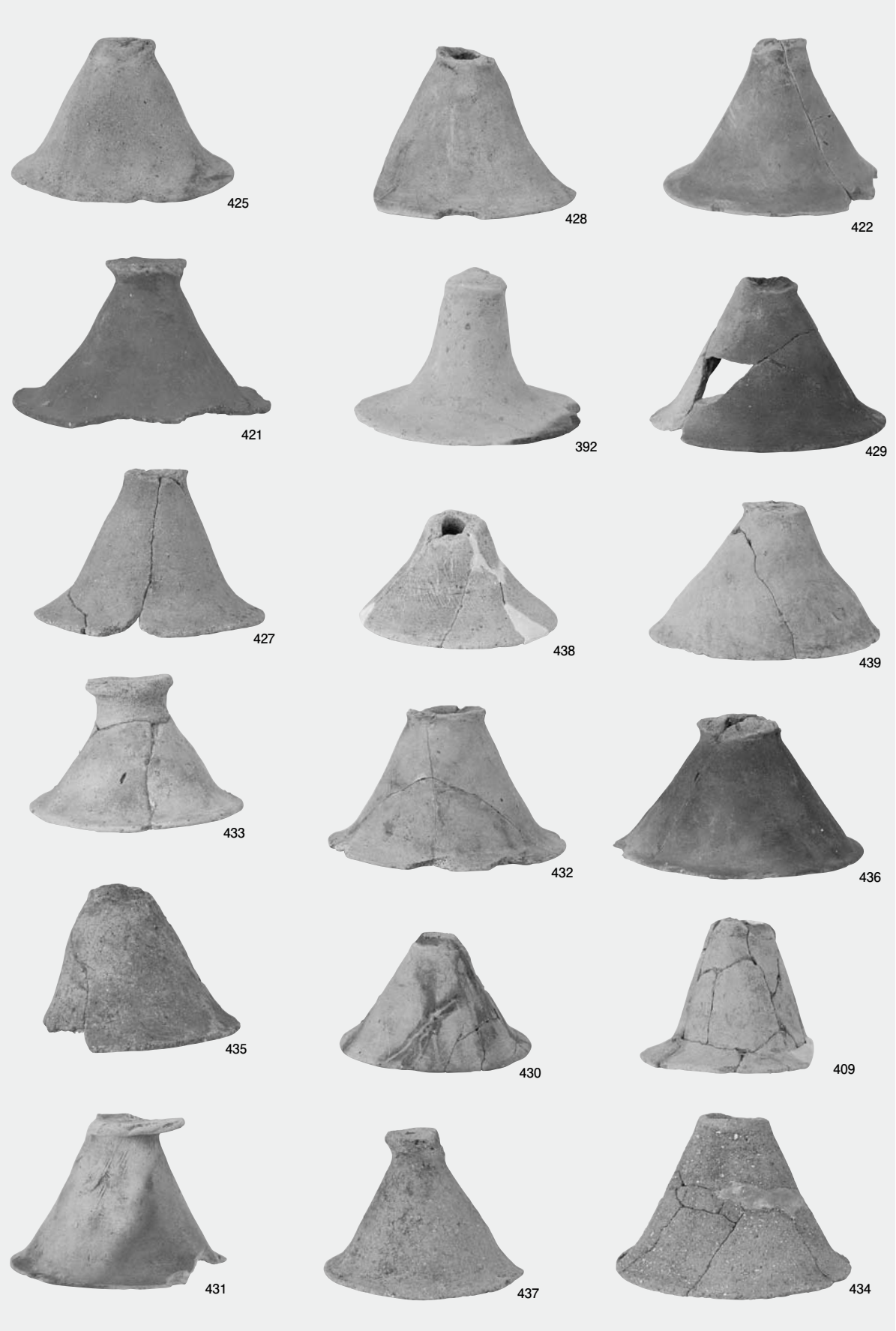
出土遺物 10（縮尺不同）


386
387
390
391
389
394
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
404
405

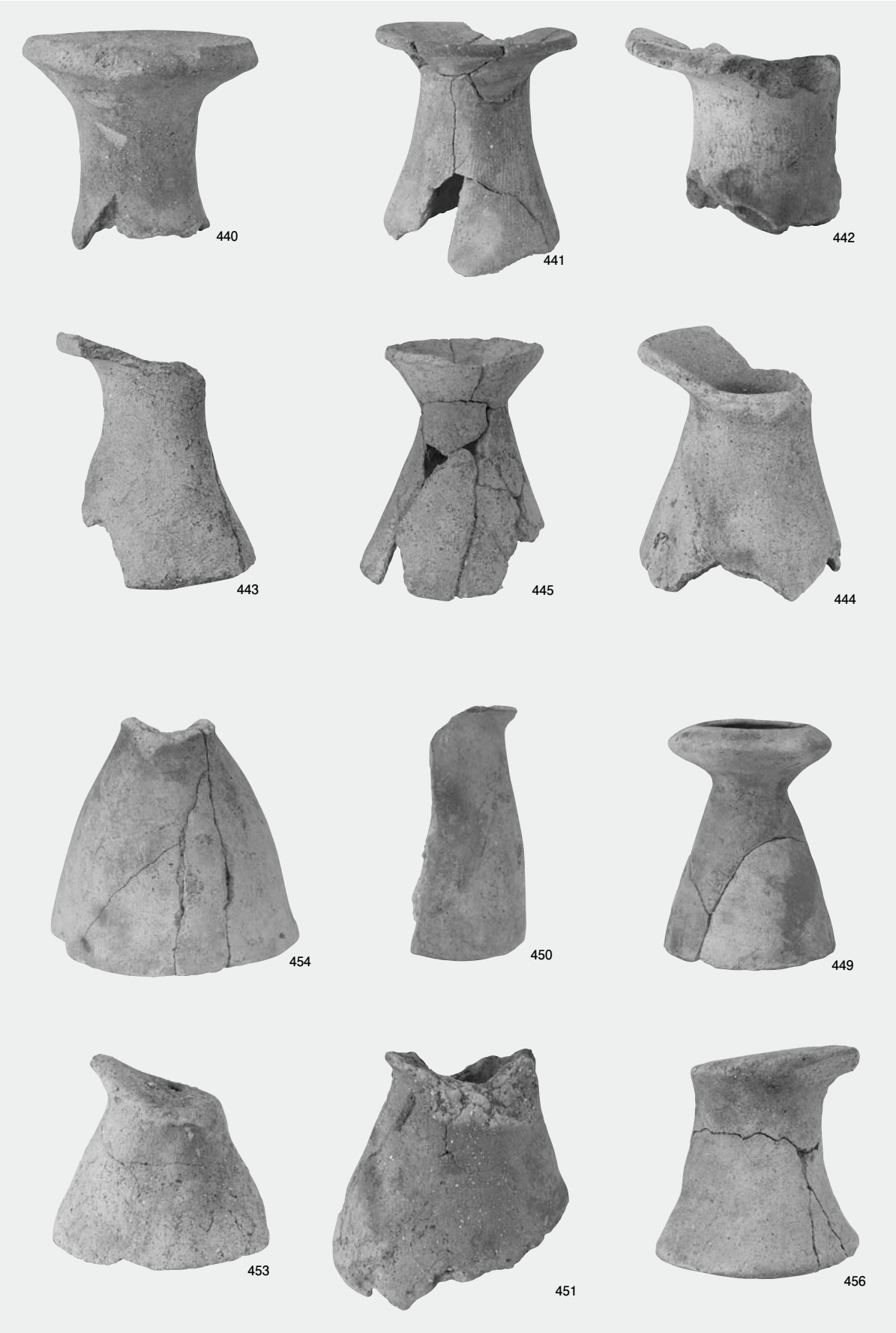
出土遺物 11（縮尺不同）



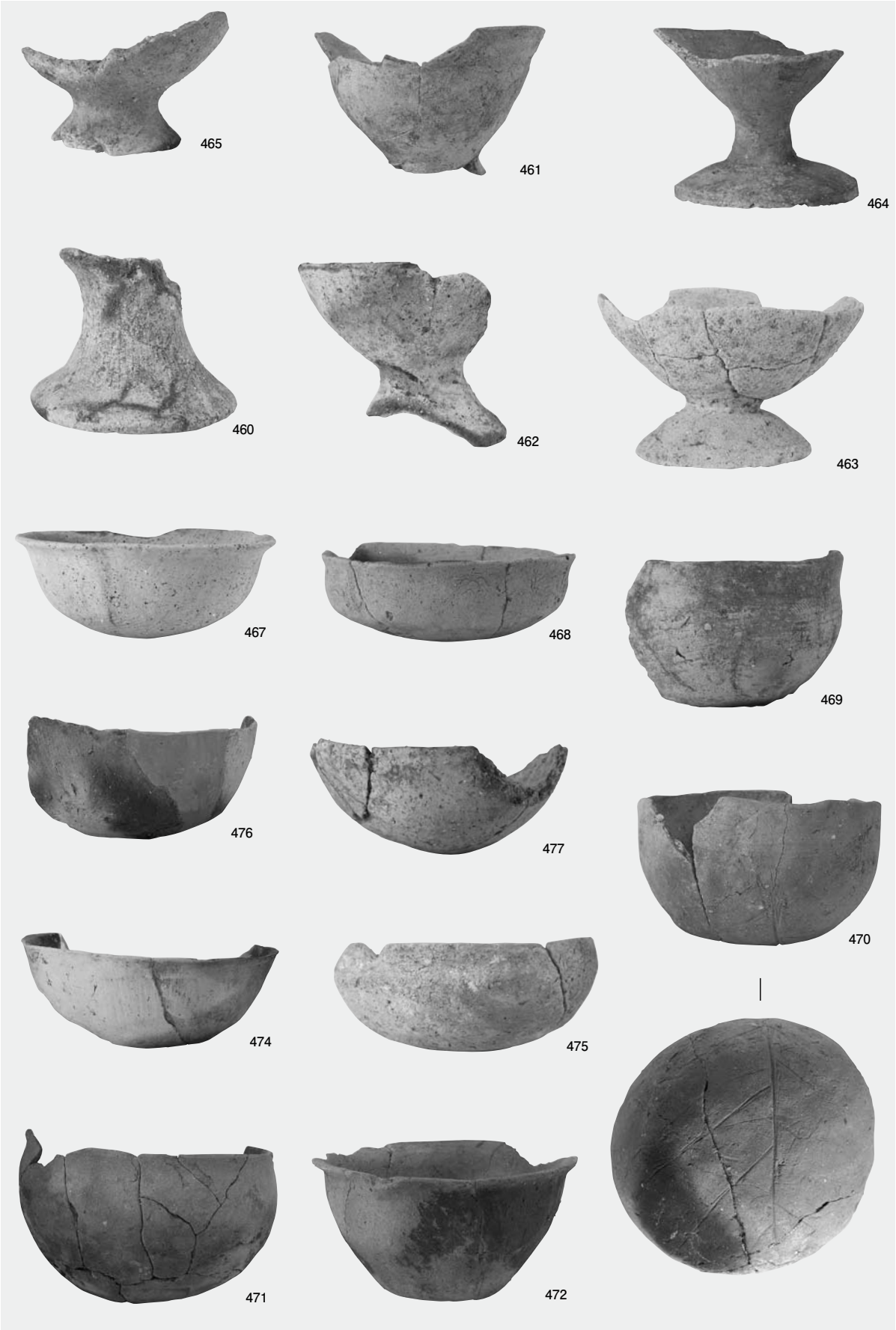
出土遺物 12（縮尺不同）


425
428
422
421
392
429
427
438
439
433
432
436
435
430
409
431
437
434

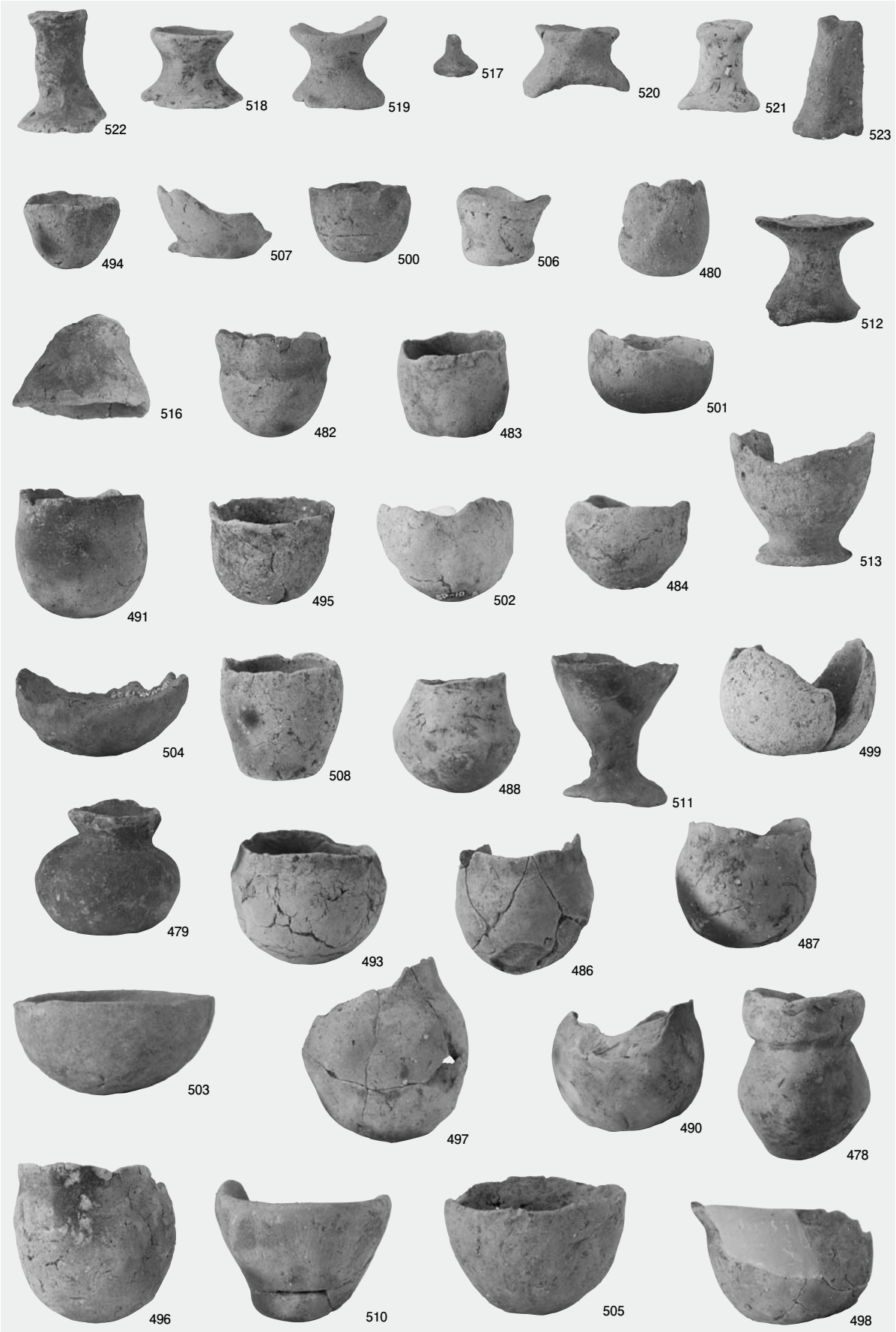
出土遺物 13（縮尺不同）



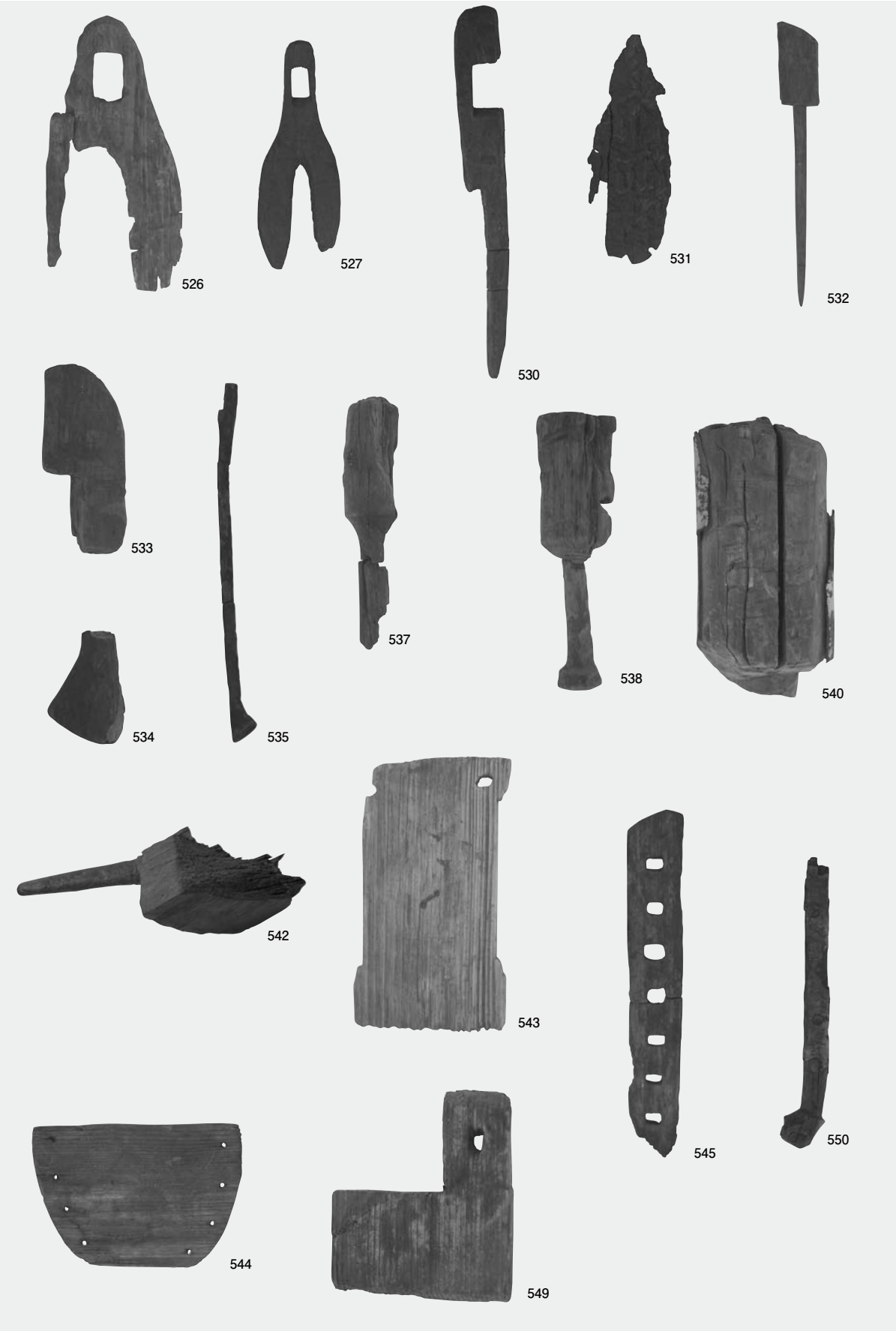
出土遺物 14（縮尺不同）



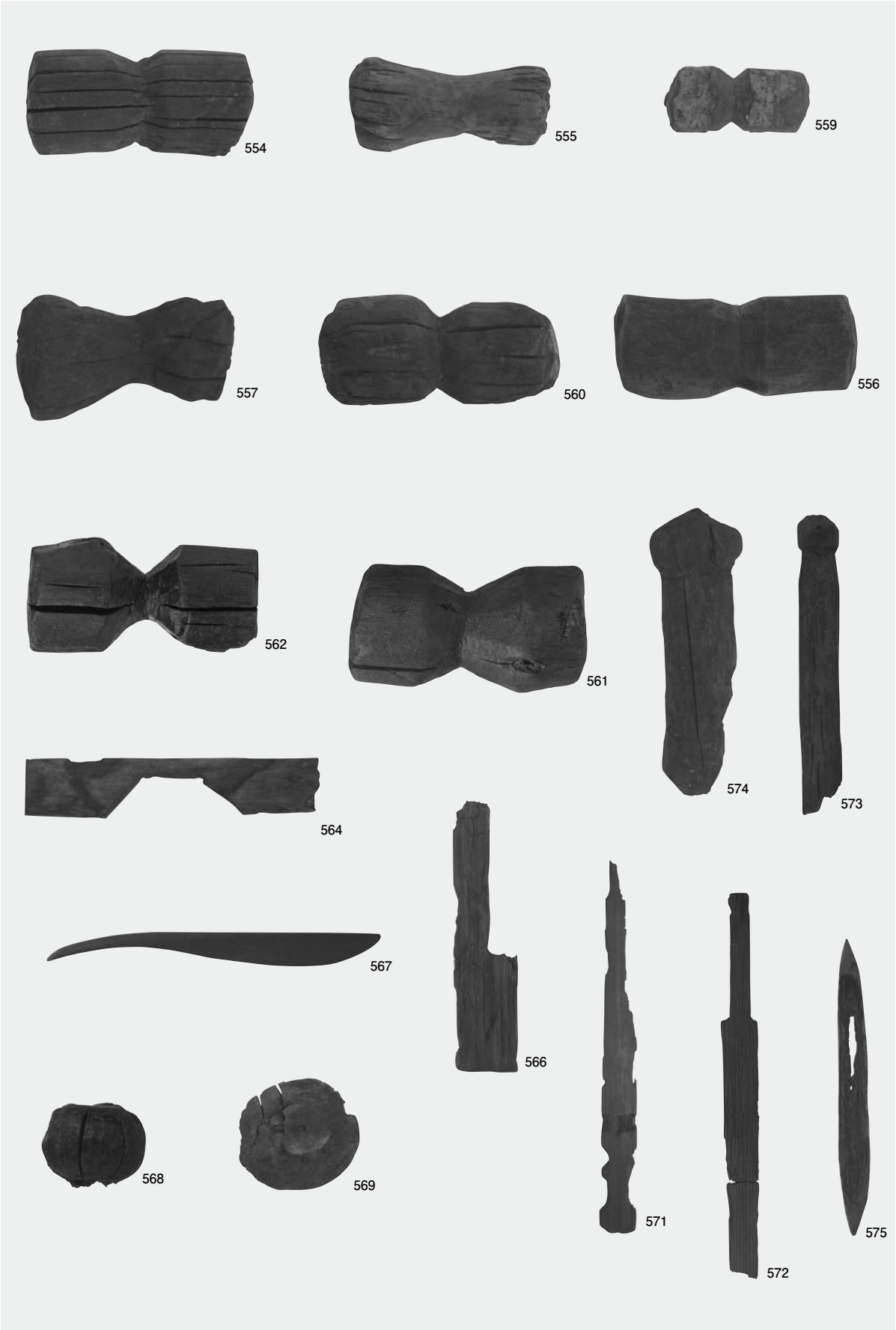
出土遺物 15（縮尺不同）


522
518
519
517
520
521
523
494
507
500
506
480
512
516
482
483
501
513
491
495
502
484
504
508
488
511
499
479
493
486
487
503
497
490
478
496
510
505
498

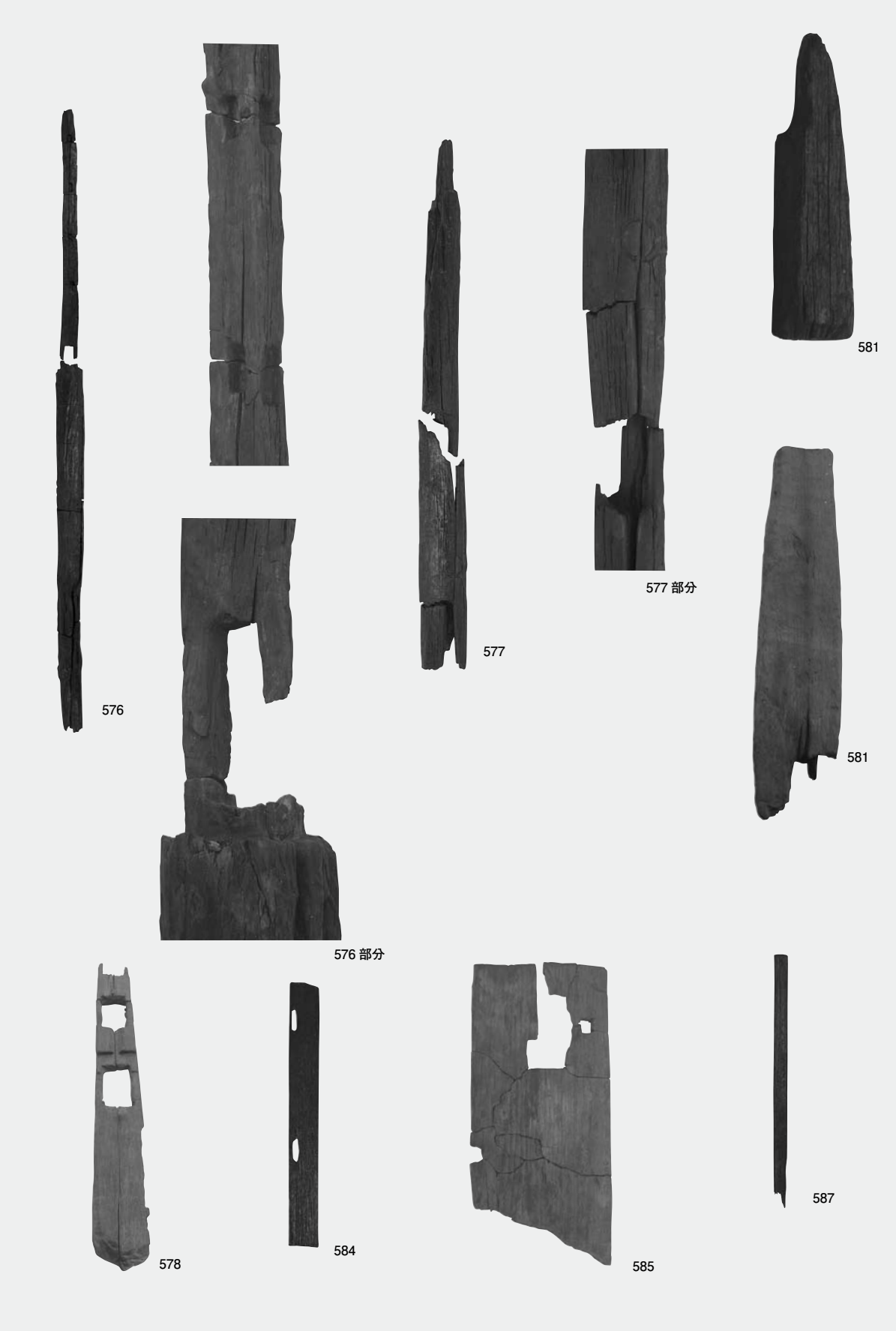
出土遺物 16（縮尺不同）


526
527
530
531
532
533
534
535
537
538
540
542
543
544
545
549
550

出土遺物 17（縮尺不同）

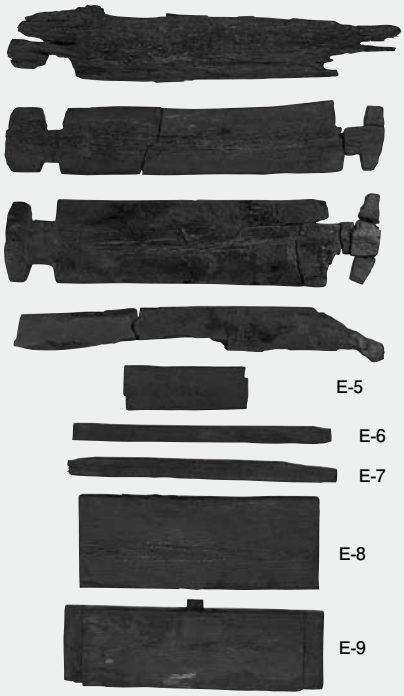

554
555
559
557
560
556
562
561
574
573
564
567
566
568
569
571
572
575

出土遺物 18（縮尺不同）

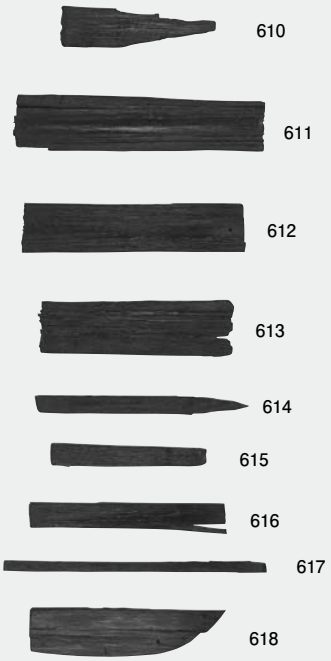


出土遺物 19（縮尺不同）

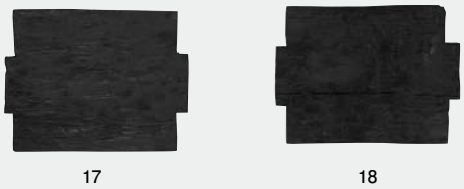
西側井戸枠①



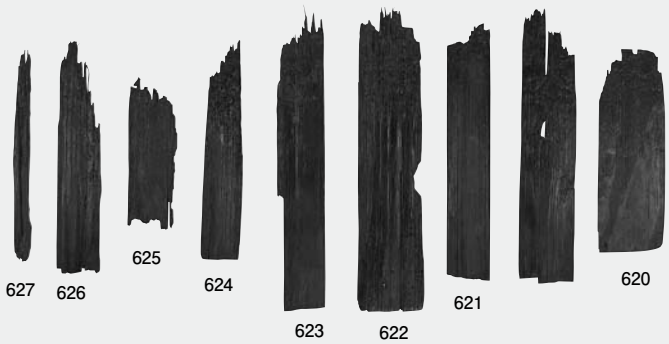
東側井戸枠



西側井戸枠②

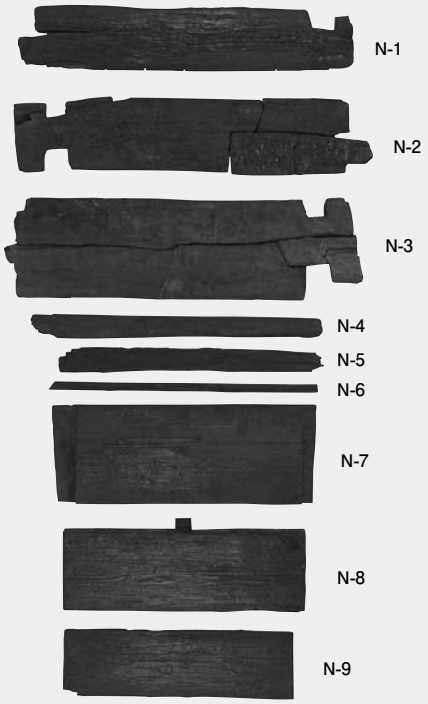


東側裏込板

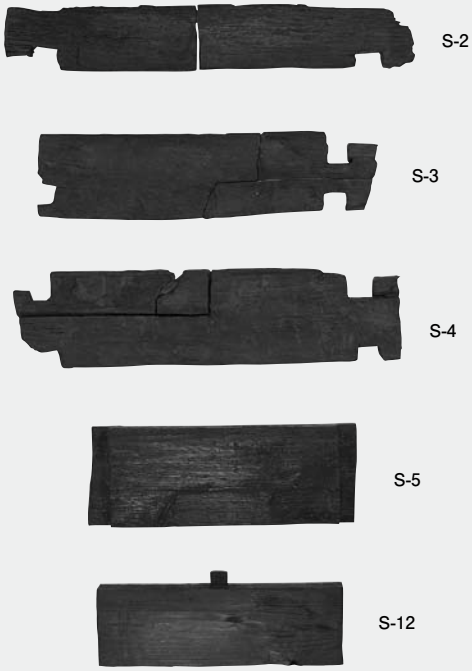


西側裏込板

9 号井戸井戸枠 1（縮尺不同）



北側井戸枠



南側井戸枠

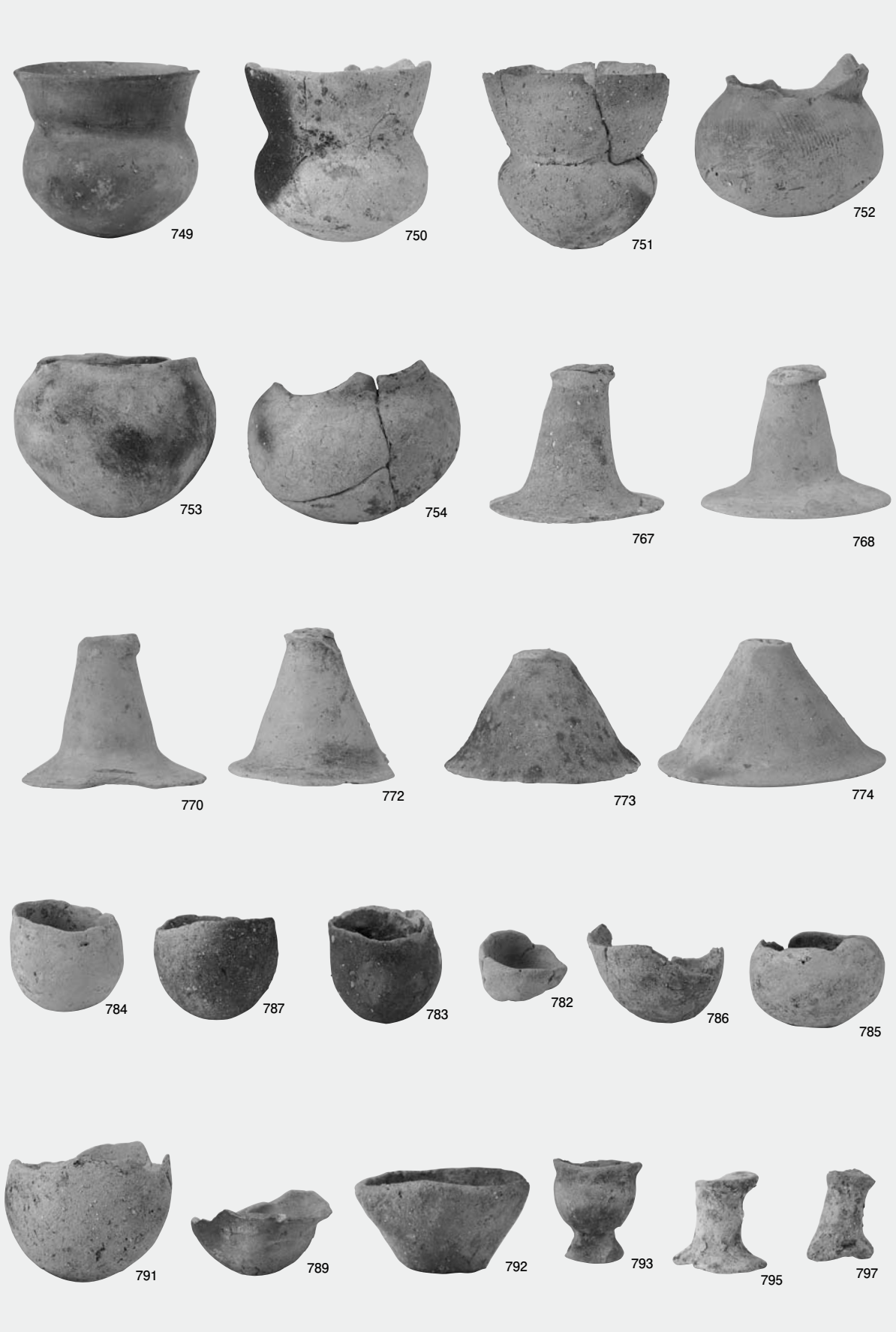
上から

横から

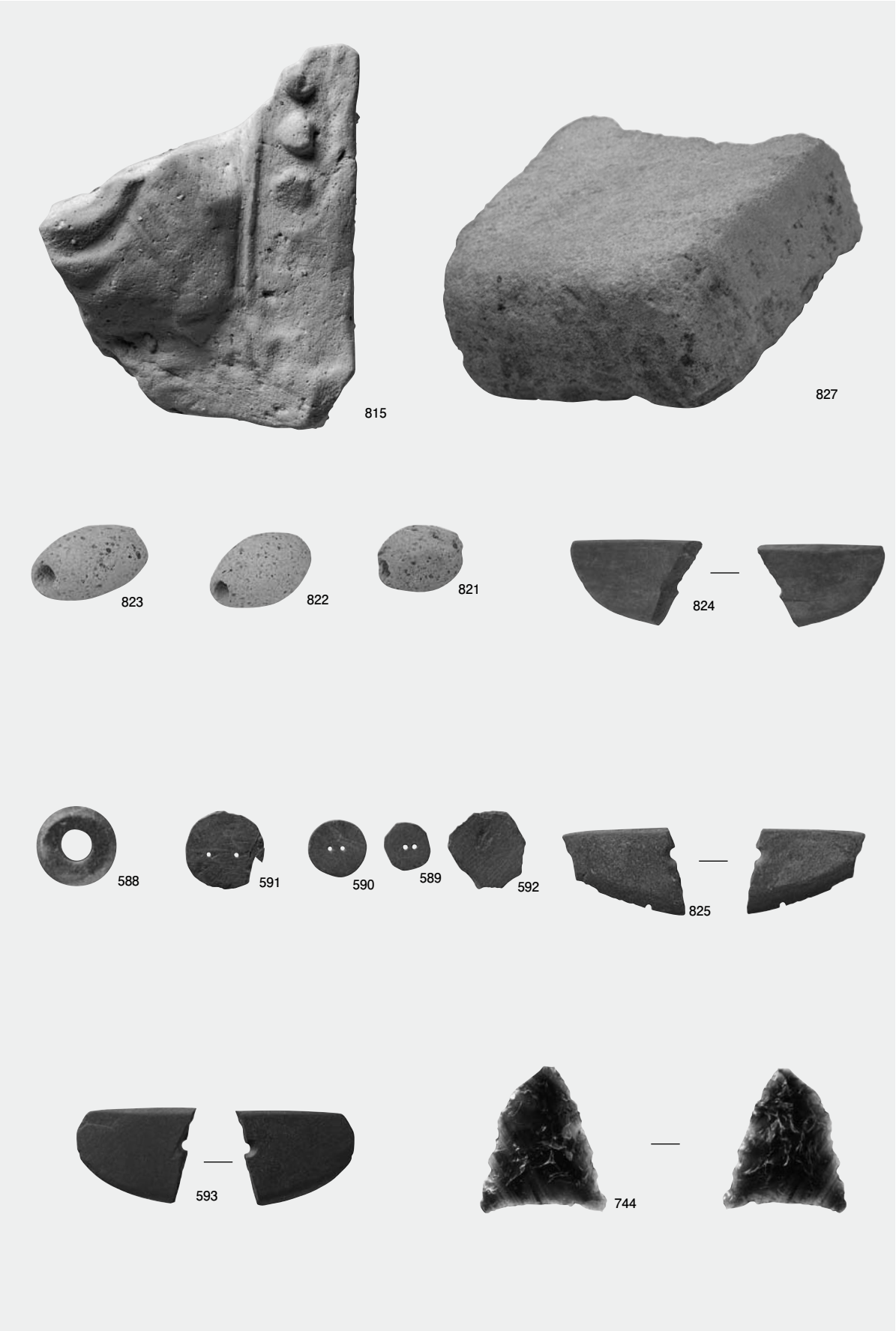
井戸桶

9 号井戸井戸枠 2（縮尺不同）

9 号井戸出土遺物（縮尺不同）



136 号溝出土遺物（縮尺不同）



1・10・136 号溝出土遺物(縮尺不同)

（1）9 号井戸井戸枠回桶（縮尺不同）

（2）鬼瓦（縮尺不同）

報　告　書　抄　録

ふりがな	たかばたけいせき２
書名	高畑遺跡２
副書名	－高畑遺跡第 20 次調査報告－
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	小林義彦、谷直子
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒 810-8621　福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2012 年 3 月 16 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
高畑遺跡	ふくおかしはかたくいたづけ 福岡市博多区板付６丁目１番１号	40130	95	33° 33′ 1836″	130° 27′ 18″	2008.08.18 ～ 2009.08.02	5,067	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高畑遺跡第 20 次	集落・墓地	弥生時代～古代	竪穴住居・井戸・木棺墓・土壙・溝・旧河川・官道	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、石製品、木製品、土製品、銅銭、管玉	高畑遺跡は、御笠川中流域の左岸に拡がる河岸段丘上に立地する。古代の井戸は、木組みで井戸底には底を刳り貫いた桶が据えられていた。井側内からは、鬼瓦や平・丸瓦と塼が出土しており、古代寺院の存在を裏付けている。水城東門から博多方面へ延びる官道も検出された。また、5 世紀代の旧河川からは、農耕具や建築部材と土師器高坏や小型丸底壷が多量に出土した。

高畑遺跡　２

－高畑遺跡第２０次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告第１１０１集

2012 年（平成 24 年）3 月 16 日

発行　　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１－８－１

印刷　　久野印刷